佐賀県文化財調査報告書第 227 集

吉野ヶ里遺跡

―弥生時代総括編 1 ―

令和2（2020）年 3 月
佐賀県

佐賀県文化財調査報告書第 227 集

吉野ヶ里遺跡

―弥生時代総括編 1 ―

令和 2（2020）年 3 月

佐賀県

序

吉野ヶ里遺跡の発掘調査は、工業団地計画に伴い昭和61（1986）年５月から開始しましたが、国内最大規模の弥生時代環壕集落跡や墳丘墓の発掘などにより、平成元（1989）年２月以来大いに注目されてきました。その後、吉野ヶ里遺跡を取り巻く状況は、平成元（1989）年３月の工業団地計画中止と遺跡保存の決定、翌２（1990）年・３（1991）年の史跡・特別史跡としての指定、平成４（1992）年の国営公園化の閣議決定、平成７（1995）年11月からの歴史公園整備工事着手、平成13（2001）年４月23日の第１期開園と急速な展開を遂げました。歴史公園整備は平成25（2013）年３月20日に「古代の森ゾーン」が概成し、国営公園部分についてはほぼ完成しており、現在は多くの来園者で賑わっています。

このような状況の中で、当県では平成元（1989）年度から文化庁の補助事業、平成９（1997）年度から国土交通省九州地方整備局の受託事業、県土づくり本部の再配当事業により、遺跡の範囲確認や内容解明のための確認調査を継続して実施しており、ますます遺跡の重要性が認識されています。

本書は、文化庁の補助を受け、吉野ヶ里遺跡の弥生時代に関するこれまでの調査成果を総括したものです。本書を学術資料としてお役立ていただき、吉野ヶ里遺跡の今後の調査研究や保存活用に関して、適切な御指導、御助言をいただきますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、これまでの発掘調査にあたり適切な御指導をいただいた文化庁はじめ諸先生方、調査や遺跡の保存などに多大な御協力をいただいた地元市町村教育委員会や国土交通省九州地方整備局国営海の中道海浜公園事務所歴史公園課をはじめ関係機関、発掘や整理作業に従事いただいた作業員の方々には、衷心より厚くお礼申し上げます。

令和２（2020）年３月

佐賀県地域交流部　文化・スポーツ交流局
局長　田中　裕之

例　言

１　本書は、佐賀県教育委員会が実施した佐賀県神埼市大字志波屋・鶴・田道ヶ里、吉野ヶ里町大字田手・大曲に所在する吉野ヶ里遺跡の発掘調査報告書で、これまでの調査成果のうち、弥生時代についてまとめた総括編である。

２　本書の作成は国庫補助事業として実施したが、報告の対象は昭和 61 ～ 63 年度に実施した神埼工業団地計画に伴う発掘調査、平成元～ 23 年度に実施した国庫補助事業による発掘調査、平成９～ 24 年度に実施した国営吉野ヶ里歴史公園整備に伴う発掘調査とする。

３　発掘調査は佐賀県教育委員会が主体となり、神埼町（現：神埼市）教育委員会、三田川町（現：吉野ヶ里町）教育委員会の協力を得た。

４　吉野ヶ里遺跡の範囲については、現行の『佐賀県遺跡地図』に従った。

５　平成 14 年４月に改正測量法が施行されたが、調査時の記録はすべて日本測地系による旧国土座標であることから、混乱を回避するため、吉野ヶ里遺跡の発掘調査では今のところ世界測地系による座標を使用していない。

６　報告書作成に係る整理作業は吉野ヶ里遺跡発掘調査事務所で実施したが、一部を業者に委託した。

７　本書の執筆・編集は、歴代の調査担当者の協力を得て、渡部芳久が行った。また、長崎大学分部哲秋先生、佐伯和信先生、東京大学米田穣先生、佐賀県立佐賀城本丸歴史館七田忠昭館長からはそれぞれ玉稿を賜った。執筆分担は下記のとおりである。
第２章第４節：七田忠昭　第３章第１節：分部哲秋　第２節：佐伯和信　第３節：米田穣　その他：渡部

８　吉野ヶ里遺跡の出土遺物・記録類は、吉野ヶ里遺跡発掘調査事務所で保管・管理しているが、一部の写真類や出土品は佐賀県文化財調査研究資料室、佐賀県立博物館で保管している。

９　吉野ヶ里遺跡の発掘調査は、文化庁、佐賀県文化財保護審議会委員、吉野ヶ里遺跡調査指導委員会の先生方をはじめ多くの研究者の御指導・御助言、発掘・整理作業員をはじめ地元の方々や関係機関の御協力によって成り立っている。紙数の都合などで全員の御芳名を記すことができないが、心から感謝申し上げる。

本書の記載方法

１　吉野ヶ里遺跡の調査では、神埼工業団地計画に伴う発掘調査開始時において、当時の遺跡地図に基づく遺跡名を使用しており、遺跡の略号についてもそれぞれに与えていた。その後、それらの遺跡を統合し吉野ヶ里遺跡として登録しているが、当初の遺跡名を地区名として使用しており、混乱を防ぐため、略号の変更を行わず、当時と同じ英大文字３字の略号を使用して、実測図・写真等の記録類や出土遺物の注記に利用している。吉野ヶ里遺跡の各地区・遺跡の略号は、次のとおりである。

SRO：志波屋六の坪（乙）遺跡　SRT：志波屋六の坪（甲）遺跡　SGT：志波屋五の坪遺跡
SST：志波屋三の坪（甲）遺跡　SSO：志波屋三の坪（乙）地区　HSE：長谷遺跡　OIT：大曲一の坪地区
EDM：枝町遺跡　SGR：杉籠地区　YGK：吉野ヶ里丘陵地区　YNG：吉野ヶ里地区
TDN：田手二本黒木地区　TDI：田手一本黒木地区　DEI：田一本松地区

２　個々の遺構名は、遺構記号と４桁の算用数字の組み合わせで示す。番号は、地区ごとに通し番号で数字を付している。今回用いた遺構記号は、次の通りである。このほか、小穴については調査区ごとの通し番号を基本とし、頭にＰを付して表現する。

SB：掘立柱建物跡　SD：環壕・溝跡　SH：竪穴建物跡
SK：貯蔵穴跡・土坑　SJ：甕棺墓　SX：その他・不明遺構
SC：石棺墓　SP：木棺墓・土坑墓　ST：墳丘墓・古墳・周溝墓

３　出土遺物の○○形土器は、○○とのみ表現する。例）甕形土器→甕
４　実測した遺物には８桁の佐賀県遺物登録番号を１点ずつ付し、挿図では本書内の小節ごとに通し番号を付した。
５　本書で示す方位は、国土地理院の旧国土座標第Ⅱ系の座標北である。
６　表で示した各項目の計測値は、復元値に *、残存値に + を付けて表現する。
７　遺構一覧表の「新旧関係」は、当該遺構より古い遺構を「旧」に、新しい遺構を「新」に記載した。また、煩雑さを避けるため、多数の遺構が重複している場合は、主な遺構の新旧関係のみ記載した。

８　弥生時代の時期区分については、土器様式編年を指標として次のように表現し、更に細分が可能な場合は「中期前半古相」等の要領で記す。
　前期初頭（板付Ⅰ式並行）、前期前半（板付Ⅱａ式並行）、前期後半（板付Ⅱｂ式古段階並行）、前期末（板付Ⅱｂ式新段階並行）、中期初頭（城ノ越式並行）、中期前半（須玖Ⅰ式並行）、中期後半（須玖Ⅱ式古段階並行）、中期末（須玖Ⅱ式新段階並行）、後期前半（高三潴式並行）、後期後半（下大隈式並行）、終末（西新式並行）
　なお、甕棺の時期については、おおよそ金海・城ノ越式を中期初頭、汲田式を中期前半、須玖式を中期後半、立岩式を中期末、桜馬場式を後期初頭、三津式を後期前半とする。

９　神埼工業団地計画に伴う調査以降、佐賀県教育委員会が主体となって発掘調査を実施した吉野ヶ里遺跡関係の調査報告書は以下の通りである。この一連の報告書は、本書全体で頻繁に引用・参照されるため、本文中などで引用･参照する場合は、佐賀県文化財調査報告書の番号を用いて、『100 集』『113 集』と表記し、各章などの文献一覧では省略している。

佐賀県教育委員会（1990）『吉野ヶ里遺跡－佐賀県神埼郡三田川町・神埼町に所在する吉野ヶ里遺跡の確認調査報告書－』佐賀県文化財調査報告書第 100 集

佐賀県教育委員会（1992）『吉野ヶ里－神埼工業団地計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』佐賀県文化財調査報告書第 113 集

佐賀県教育委員会（1997）『吉野ヶ里遺跡－平成２年度～７年度の発掘調査の概要－』佐賀県文化財調査報告書第 132 集

佐賀県教育委員会（2001）『杉籠遺跡－国営吉野ヶ里歴史公園整備に伴う埋蔵文化財調査報告書１－』佐賀県文化財調査報告書第 146 集

佐賀県教育委員会（2002）『吉野ヶ里銅鐸－吉野ヶ里遺跡大曲一の坪地区発掘調査概要報告書－』佐賀県文化財調査報告書第 152 集

佐賀県教育委員会（2003）『吉野ヶ里遺跡－平成８年度～ 10 年度の発掘調査の概要－』佐賀県文化財調査報告書第 156 集

佐賀県教育委員会（2004）『吉野ヶ里遺跡－平成 11 年度～ 12 年度の発掘調査の概要－』佐賀県文化財調査報告書第 160 集

佐賀県教育委員会（2005）『吉野ヶ里遺跡－田手二本黒木地区弥生時代前期環壕出土の土器と石器－』佐賀県文化財調査報告書第 163 集

佐賀県教育委員会（2007）『吉野ヶ里遺跡大曲一の坪地区・枝町遺跡－県立吉野ヶ里歴史公園整備に伴う埋蔵文化財調査報告書－』佐賀県文化財調査報告書第 172 集

佐賀県教育委員会（2007）『吉野ヶ里遺跡－国営吉野ヶ里歴史公園整備に伴う埋蔵文化財調査報告書２－』佐賀県文化財調査報告書第 173 集

佐賀県教育委員会（2008）『吉野ヶ里遺跡－田手二本黒木地区の弥生時代中期の石器－』佐賀県文化財調査報告書第 177 集

佐賀県教育委員会（2015）『吉野ヶ里遺跡―弥生時代の集落跡―』佐賀県文化財調査報告書第 207 集

佐賀県教育委員会（2016）『吉野ヶ里遺跡―国営吉野ヶ里歴史公園整備に伴う埋蔵文化財調査報告書３―』佐賀県文化財調査報告書第 211 集

佐賀県教育委員会（2016）『吉野ヶ里遺跡―弥生時代の墓地―』佐賀県文化財調査報告書第 214 集

佐賀県教育委員会（2018）『吉野ヶ里遺跡―弥生時代の墳丘墓―』佐賀県文化財調査報告書第 219 集

佐賀県教育委員会(2019)『吉野ヶ里遺跡―平成 13 ～ 23 年度の発掘調査―、―弥生時代墓地総括･補遺編―』佐賀県文化財調査報告書第 222 集

目次

序章 …… 2

1．はじめに …… 2
2．近年の経過（平成 30 年度～平成 31 ／令和元年度） …… 2
3．調査組織 …… 2
4．調査指導委員会 …… 2
5．遺跡の保存・整備、活用事業等に関する経過概要（2014 年以降～） … 3

第１節　吉野ヶ里遺跡の調査研究史 発掘以前―大正末期～昭和 61（1986）年まで― … 5

第２節　吉野ヶ里遺跡の調査研究史　発掘開始後―昭和 61（1986）年以降― …… 6

第２章　弥生時代の調査成果（総括）…… 15

第１節　弥生時代の集落と墓地の特徴と変遷 …… 15

1．弥生時代前期の遺構と遺物 …… 18
（1）前期初頭～前期前半 …… 18
（2）前期後半～前期末 …… 21
（3）弥生時代前期の調査成果と課題 …… 40

2．弥生時代中期の遺構と遺物 …… 42
（1）中期初頭～中期前半 …… 42
（2）中期後半 …… 87
（3）中期末 …… 109
（4）弥生時代中期の調査成果と課題 …… 140

3．弥生時代後期から終末期の遺構と遺物 …… 152
（1）後期前半 …… 152
（2）後期後半 …… 178
（3）終末期 …… 190
（4）弥生時代後期の調査成果と課題 …… 212

4．古墳時代前期の集落と墳墓 …… 220

第２節　弥生時代の集落・墓地出土遺物の総括 …… 237

1．土器 …… 237
（1）祭祀遺構出土土器の時期的変遷 …… 237
（2）特徴的な土器（前期～中期） …… 239
（3）特徴的な土器（後期） …… 245

2．金属器 …… 249
（1）青銅器 …… 249
（2）鉄器、鉄製品 …… 249

３．木製品 …… 259
（１）器種別の特徴について …… 259
（２）考察 …… 282

４　石器・石製品 …… 292
（１）弥生時代前期の石器・石製品 …… 292
（２）弥生時代中期の石器・石製品 …… 296
（３）弥生時代後期の石器・石製品 …… 309
（４）特徴的な石器・石製品 …… 313
（５）まとめと課題 …… 317

第３節　神埼地域における弥生時代遺跡の動態 …… 319

１．縄文時代晩期から弥生時代前期の集落と墳墓 …… 319
（１）縄文時代晩期後葉～弥生時代前期前半 …… 319
（２）弥生時代前期後半～前期末 …… 322

２．弥生時代中期の集落と墳墓 …… 325
（１）弥生時代中期初頭～中期前半 …… 325
（２）弥生時代中期後半～中期末 …… 333

３．弥生時代後期から終末期の集落と墳墓 …… 339
（１）弥生時代後期初頭～後期前半 …… 339
（２）弥生時代後期後半～終末期 …… 343

４．古墳時代前期の集落と墳墓 …… 349

第４節　付論　集落構造からみた吉野ヶ里集落の対外交流（七田忠昭） …… 356

第３章　弥生人骨

第１節　吉野ヶ里遺跡出土の弥生時代人骨（分部哲秋） …… 369

第２節　吉野ヶ里遺跡出土弥生人骨の歯冠形態（佐伯和信） …… 381

第３節　吉野ヶ里遺跡出土人骨の炭素・窒素同位体比分析（米田穣） …… 393

挿図目次

図 1　吉野ヶ里遺跡全体略図（1/12,000）…… 12
図 2　吉野ヶ里遺跡の主な調査区の位置（1/7,500）…… 13
図 3　弥生時代前期初頭～前期前半の集落の位置（1/7,500）…… 16
図 4　遺跡南端部　遺構の分布状況（1/1,000）…… 17
図 5　前期初頭～前期前半の溝土層断面（1/40）…… 18
図 6　前期初頭～前期前半の溝跡出土土器 1（1/4）…… 19
図 7　前期初頭～前期前半の溝跡出土土器 2（1/4）…… 20
図 8　遺跡南部　前期初頭～前期前半の石器（1/2,1/3）…… 21
図 9　吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区・吉野ヶ里地区Ⅴ区東部　遺構の分布状況（1/1,250）…… 22
図 10　志波屋四の坪地区Ⅰ区北部・Ⅱ区　弥生時代集落遺構の分布略図（1/1,500）…… 23
図 11　志波屋四の坪地区　弥生時代前期初頭～前期前半の遺構（1/80,1/60,1/40）…… 24
図 12　志波屋四の坪地区　前期初頭～前期前半の土器と石器（1/4,1/6）…… 25
図 13　前期後半～前期末の集落と墓地（1/7,500）（※墓地は前期末～中期初頭も含む）…… 26
図 14　遺跡南部　遺構の分布状況（1/3,000,1/1,500）…… 27
図 15　田手二本黒木地区Ⅱ区　前期後半～前期末の遺構の分布・前期後半代の竪穴建物跡（1/120）… 28
図 16　遺跡南部　前期後半代の環壕土層断面（1/60）…… 29
図 17　田手二本黒木地区Ⅲ区・吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区　前期の遺構分布状況・竪穴建物跡 …… 30
図 18　吉野ヶ里地区Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区　遺構の分布状況（1/1,000）・前期後半代の竪穴建物跡 …… 32
図 19　遺跡北部　志波屋三の坪（乙）地区・志波屋四の坪地区　遺構の分布略図（1/2,000）…… 33
図 20　志波屋三の坪（乙）地区　前期後半～前期末の集落（1/600）…… 34
図 21　志波屋三の坪（乙）地区　前期後半代の竪穴建物跡（1/120）…… 35
図 23　志波屋四の坪地区Ⅰ区北部・Ⅱ区　前期後半代の集落遺構の分布略図（1/1,000）…… 36
図 24　志波屋四の坪地区　前期の竪穴建物跡（1/120）…… 37
図 25　志波屋四の坪地区Ⅰ区　前期後半の壺棺墓（遺構 1/30、棺体 1/20）…… 37
図 26　志波屋四の坪地区Ⅱ区 382 調査区　遺構の分布（1/250）・前期末～中期初頭の甕棺（1/20）　38
図 27　志波屋三の坪（乙）地区の甕棺墓地（1/200）・前期末～中期初頭の甕棺（1/20）…… 39
図 28　弥生時代前期　主な遺構と遺物の出土位置（1/7,000）…… 41
図 29　弥生時代墳墓遺構の分布と前期末～中期初頭の墓地の位置（1/9,000）…… 43
図 30　弥生時代中期初頭～中期前半の集落と墓地の分布（1/7,500）…… 44
図 31　遺跡南部　弥生時代の集落と墓地の分布略図（1/4,000）…… 45
図 32　遺跡南端部　田手一本黒木地区Ⅰ区 326 調査区の遺構の分布・326 調査区出土甕棺…… 46
図 33　田手一本黒木地区Ⅰ区 324 調査区　SJ0100 甕棺墓（1/60）・棺体（1/20）・銅剣（1/4）…… 47
図 34　田手二本黒木地区東部　遺構の分布詳細（1/500）・出土甕棺部分実測（1/6）…… 48
図 35　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区 191 調査区　遺構の分布（1/150）・出土甕棺部分実測（1/6）…… 49
図 36　田手二本黒木地区Ⅱ区　前期末 / 中期初頭～中期前半の遺構の分布（1/1,500）…… 50
図 37　田手二本黒木地区Ⅲ区一帯の遺構の分布状況・前期末～中期初頭の竪穴建物跡 …… 51
図 38　田手二本黒木地区Ⅲ区一帯の遺構の分布状況（1/1,500）・中期前半の竪穴建物跡（1/120）… 52
図 39　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区 SD1801 壕跡　平面図・土層断面図・SD1801 下層出土土器（1/6）…… 53

図 40　杉籠地区Ⅲ区 399 調査区全体図（1/600）・遺構の分布詳細（1/150）…… 54
図 41　杉籠地区Ⅲ区 399 調査区　SD501 環壕出土土器（1/4）・出土甕棺（1/20,1/12）…… 55
図 42　吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区南部・Ⅶ区北部　前期末 / 中期初頭～中期前半の遺構の分布（1/500）… 57
図 43　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区 169 調査区　遺構の分布詳細（1/200）・出土甕棺部分実測（1/6）…… 58
図 44　吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区南部　遺構の分布詳細（1/200）・出土甕棺…… 59
図 45　吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区・吉野ヶ里地区Ⅴ区東部　前期末～中期前半の集落と墳墓の分布 …… 60
図 46　吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区・吉野ヶ里地区Ⅴ区東部　前期末～中期前半の竪穴建物跡 …… 61
図 47　遺跡中央部の集落と墓地の分布略図（1/2,500）…… 62
図 48　吉野ヶ里地区Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区　前期末 / 中期初頭～中期前半の遺構の分布（1/1,000）…… 63
図 49　吉野ヶ里地区Ⅰ・Ⅱ区　遺構の分布詳細（1/600）…… 64
図 50　吉野ヶ里地区Ⅱ区　SP1411 土坑墓・SK1412 土坑（1/40）・出土石器（1/2,1/3）　…… 65
図 51　吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ・Ⅵ区　前期末 / 中期初頭～前半の遺構分布略図・竪穴建物跡 …… 66
図 52　吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区　前期末 / 中期初頭～中期前半の遺構の分布（1/1,200）…… 67
図 53　吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区中央～南部　前期末 / 中期初頭～中期前半の遺構の分布（1/800）…… 68
図 54　吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区中央～北部　前期末 / 中期初頭～中期前半の遺構の分布（1/600）…… 69
図 55　吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区　前期末 / 中期初頭～中期前半の竪穴建物跡（1/120）…… 70
図 56　遺跡中央部　吉野ヶ里丘陵地区Ⅰ・Ⅳ・Ⅸ区　中期前半の遺構の分布（1/800）…… 71
図 57　吉野ヶ里丘陵地区Ⅰ・Ⅸ区中期前半の竪穴建物跡（1/120）・Ⅳ区 SK0541 土坑出土鋳型（2/3）72
図 58　吉野ヶ里遺跡北端部の遺跡（調査区）の位置（1/7,500）…… 74
図 59　志波屋六の坪（乙）遺跡Ⅰ区　遺構の分布・SH0089 竪穴建物跡・出土石剣（1/3）…… 75
図 60　志波屋三の坪（甲）遺跡　遺構の分布（1/1,200）…… 76
図 61　志波屋四の坪地区Ⅰ区北部・Ⅱ区　前期末 / 中期初頭～中期前半の遺構の分布（1/1,500）…… 77
図 62　志波屋四の坪地区Ⅰ区北部・Ⅱ区　中期前半の遺構の分布（1/1,000）…… 78
図 63　志波屋四の坪地区Ⅰ区南部　中期前半の遺構の分布（1/1,000）…… 79
図 64　志波屋四の坪地区Ⅰ区　前期末 / 中期初頭～中期前半の竪穴建物跡・SH1002 出土遺物 …… 80
図 65　志波屋四の坪地区Ⅰ区　中期前半の墳墓と副葬品（遺構 1/30, 甕棺 1/20, 貝輪 1/4）…… 81
図 66　遺跡南部　遺構の分布略図（1/2,000）・154 調査区拡大（1/250）・SK0404 土坑（1/150）… 84
図 67　青銅器鋳造関連遺物（1/4）…… 85
図 68　鋳造鉄斧片（再加工品含む）と初期の鉄器・青銅器（1/3,1/2）…… 86
図 69　遺跡南部　松菊里型住居跡と無文土器の出土地点（1/1,500）…… 87
図 70　朝鮮系無文土器　甕（1/4）…… 88
図 71　朝鮮系無文土器　壺（1/4,1/6）…… 89
図 72　遺跡南部　中期後半の遺構分布略図（1/4,000）…… 90
図 73　田手二本黒木地区Ⅱ区　中期前半～中期後半の遺構の分布・中期後半の竪穴建物跡 …… 91
図 74　遺跡南部　中期前半～中期後半の遺構の分布（1/1,500）…… 92
図 75　遺跡南端部（上）SX0222 一帯のトレンチ位置・（下）SX0222　267 調査区とトレンチ位置 … 94
図 76　（上）149 調査区土層断面・（下）150 調査区土層断面（1/60）…… 95
図 77　SX0222 盛土遺構　出土土器（1/6）…… 96
図 78　吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区・吉野ヶ里地区Ⅴ区東部　中期前半～中期後半の遺構の分布 …… 97
図 79　吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区南部・Ⅶ区北部　中期前半～中期後半の遺構の分布（1/500）…… 98

図 80　吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区　中期前半～中期後半の墳墓と副葬品 …… 99
図 81　吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区　SJ0937 甕棺墓と鋳型（遺構 1/40, 鋳型 1/3）…… 99
図 82　遺跡南西部　調査区の位置と中期の溝跡の範囲（1/2,000）…… 100
図 83　遺跡南西部　田手二本黒木地区Ⅰ区　遺構の分布（1/600）・出土遺物（1/6,1/4）…… 101
図 84　遺跡南西部　田一本松地区の遺構の分布・溝土層断面・出土遺物（1/2,1/4,1/8）…… 102
図 85　田手二本黒木地区Ⅱ区 222・223 区の遺構の分布（1/500）・柱穴出土土器（1/4）…… 103
図 86　吉野ヶ里地区Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区　中期前半～後半の遺構の分布・中期後半の墳墓と副葬品 …… 106
図 87　吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ・Ⅵ区　中期前半～後半の遺構の分布・中期後半の墳墓と副葬品 …… 107
図 88　吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区南部　中期前半～中期後半の墳墓の分布（1/300）…… 108
図 89　吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区中央～南部　中期前半～中期後半の遺構の分布（1/800）…… 110
図 90　吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区中央～北部　中期前半～中期後半の遺構の分布（1/600）…… 111
図 91　吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区 182・184 調査区　中期前半～中期後半の墳墓と副葬品 …… 112
図 92　ST1001 北墳丘墓と出土甕棺・青銅器（1/500,1/40,1/10）…… 113
図 93　吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区 SK1699 大型祭祀土坑・土層断面・出土土器（1/4,1/8）…… 114
図 94　遺跡中央部　吉野ヶ里丘陵地区Ⅰ・Ⅳ・Ⅸ区　中期前半～中期後半の遺構の分布（1/800）…… 115
図 95　遺跡北部　志波屋四の坪地区Ⅰ・Ⅱ区　中期前半～中期後半の遺構の分布（1/1,500）…… 116
図 96　志波屋四の坪地区Ⅰ区北部・Ⅱ区　中期前半～中期後半の遺構の分布（1/1,000）…… 117
図 97　志波屋四の坪地区Ⅰ区南部　中期前半～中期後半の遺構の分布（1/1,000）…… 118
図 98　志波屋四の坪地区Ⅰ区南部墓地中央　遺構の分布詳細（1/300）…… 119
図 99　志波屋四の坪地区Ⅰ区南部墓地北側　遺構の分布詳細（1/300）…… 120
図 100　志波屋四の坪地区　中期後半の墳墓と副葬品（1/40,1/20,1/4）…… 121
図 101　中期後半の墳墓と受傷人骨（1/40,1/20）…… 122
図 102　遺跡北端部　志波屋三の坪（甲）遺跡　遺構の分布（1/2,000,1/250）…… 123
図 109　吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ・Ⅵ区　中期後半～後期初頭の遺構分布略図・中期末の竪穴建物跡 …… 125
図 103　遺跡南部　中期末～後期初頭の遺構の分布（1/3,000）…… 126
図 104　吉野ヶ里地区Ⅴ区西部・Ⅵ区　中期後半～中期末 / 後期初頭の遺構の分布（1/1,000）…… 127
図 105　吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区・吉野ヶ里地区Ⅴ区東部　中期後半～後期初頭の遺構の分布 …… 128
図 106　吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区　SK0609 土坑出土遺物（1/3,1/4）…… 129
図 107　吉野ヶ里地区Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区　中期後半～中期末 / 後期初頭の遺構の分布（1/1,000）…… 129
図 108　吉野ヶ里地区Ⅱ区　中期後半～中期末 / 後期初頭の遺構の分布（1/250）…… 130
図 110　吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ・Ⅵ区　中期後半～中期末 / 後期初頭の遺構の分布（1/500）…… 131
図 111　吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区　遺構の分布詳細（1/300）…… 132
図 112　吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区　中期末～後期初頭の墳墓と副葬品（1/40,1/20,1/6,1/3）…… 133
図 113　吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区中央～北部　中期後半～中期末 / 後期初頭の遺構の分布（1/600）…… 134
図 114　吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区中央～南部　中期後半～中期末 / 後期初頭の遺構の分布（1/800）…… 135
図 115　吉野ヶ里丘陵地区Ⅰ・Ⅳ・Ⅸ区　遺構の分布略図（1/800）…… 136
図 116　吉野ヶ里丘陵地区Ⅸ区　遺構の分布詳細（1/300）…… 137
図 117　吉野ヶ里丘陵地区Ⅸ区　中期末～後期初頭の墳墓と副葬品（1/20,1/6,1/2）…… 138
図 118　遺跡中央部　中期末～後期初頭の副葬品を持つ墳墓の分布（1/2,000）…… 139
図 119　志波屋四の坪地区Ⅰ区北部・Ⅱ区　中期後半～中期末 / 後期初頭の遺構の分布（1/1,000）… 141

図 120　志波屋四の坪地区Ⅰ区南部墓地　中期後半～中期末 / 後期初頭の遺構の分布（1/1,000）…… 142
図 121　志波屋四の坪地区Ⅰ区南部墓地北側　遺構の分布詳細（1/300）…… 143
図 122　志波屋四の坪地区Ⅰ区南部墓地中央部　遺構の分布詳細（1/300）…… 144
図 123　志波屋四の坪地区Ⅰ区南部墓地南側　遺構の分布詳細（1/400）…… 145
図 124　志波屋四の坪地区Ⅰ区　中期末～後期初頭の墳墓と副葬品（1/40,1/20,1/3,1/2）…… 146
図 125　弥生時代中期　主な遺構と遺物の出土位置（1/9,000）…… 151
図 126　遺跡南部　後期前半の遺構の分布（1/3,000）…… 153
図 127　遺跡南西部　調査区と後期の環壕・溝の位置（1/2,000）…… 154
図 128　遺跡南西部　224 調査区 SD0265 溝土層断面（1/60）…… 155
図 129　田手一本黒木地区Ⅱ区 222・223 調査区　遺構の分布（1/300）…… 156
図 130　田手二本黒木地区Ⅰ区南部の遺構の分布・SD0319 溝土層・出土遺物（1/2,1/10）…… 157
図 131　田手二本黒木地区Ⅰ区　SD0312 溝跡とその周辺（1/500）・SD0312 溝土層（1/80）…… 158
図 132　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区 321・322 区遺構の分布・SD2176 溝土層・出土土器（1/4）…… 159
図 133　吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区・吉野ヶ里地区Ⅴ区東部　中期末～後期前半の遺構の分布 …… 160
図 134　吉野ヶ里地区Ⅴ区西部・Ⅵ区　中期末～後期前半の遺構の分布（1/1,000）…… 161
図 135　遺跡中央部　後期前半の遺構分布略図（1/2,000）…… 162
図 136　吉野ヶ里地区Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区　後期前半の遺構の分布・SD0002 外環壕土層（1/80）…… 163
図 137　吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ・Ⅵ区　中期末～後期前半の遺構の分布・後期前半の竪穴建物跡 …… 164
図 138　吉野ヶ里丘陵地区Ⅵ区　SJ1204 甕棺墓（1/40）・鉄剣（1/3）・棺体（1/20）…… 165
図 139　吉野ヶ里丘陵地区Ⅵ区東部　中期末～後期前半の遺構の分布詳細・石製品（1/4）…… 166
図 140　吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区　中期末～後期の遺構の分布・SD1013 外環壕土層（1/80）…… 167
図 141　志波屋四の坪地区Ⅰ区北部・Ⅱ区　中期末～後期前半の遺構の分布（1/1,000）…… 169
図 142　志波屋四の坪地区Ⅰ区南部　中期末～後期前半の遺構の分布（1/1,000）…… 170
図 143　志波屋四の坪地区Ⅰ区　後期前半の甕棺（1/20,1/12）…… 171
図 144　弥生時代後期の環壕・溝（1/5,000）…… 172
図 145　吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区・Ⅵ区西部　中期末～後期前半の遺構の分布・SD0054 外環壕土層…… 174
図 146　吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区　SD0054 外環壕と墓地（1/250）…… 175
図 147　吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区　SD0054 外環壕と重複・近接する甕棺（1/20,1/6）…… 176
図 148　外環壕の出入口（田手二本黒木地区Ⅱ区 221 調査区）（1/400）・SD0265 出土銅鏃（1/2）… 177
図 149　外環壕出入口（吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区 305 調査区）（1/300）…… 177
図 150　外環壕出入口（吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区 211 調査区）（1/200）…… 178
図 151　外環壕出入口（吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区 SD1013 北側陸橋部）（1/400）…… 179
図 152　遺跡南部　後期後半の遺構の分布略図（1/3,000）…… 180
図 153　吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区・吉野ヶ里地区Ⅴ区東部　後期後半の南内郭　環壕、溝土層 …… 181
図 154　吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区・吉野ヶ里地区Ⅴ区東部　後期後半の竪穴建物跡・掘立柱建物跡 …… 182
図 155　後期後半の南内郭とその周辺出土の外来系土器（1/6,1/8）…… 183
図 156　吉野ヶ里地区Ⅴ区西部・Ⅵ区　後期前半～後期後半の遺構の分布（1/1,000）…… 184
図 157　吉野ヶ里地区Ⅴ区西部南側　遺構の分布詳細（1/500）…… 185
図 158　吉野ヶ里地区Ⅴ区西部北側　遺構の分布詳細（1/600）…… 186
図 159　吉野ヶ里地区Ⅵ区　調査区土層断面（1/120）…… 187

図 160　遺跡中央部　後期後半の遺構の分布（1/2,000）……188
図 161　吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ・Ⅵ区　後期前半～後期後半の遺構の分布・後期後半の竪穴建物跡　……189
図 162　吉野ヶ里丘陵地区Ⅵ区　後期前半～後期後半の遺構の分布・SD1122 溝土層・埋納銅戈……191
図 163　志波屋四の坪地区Ⅰ区北部・Ⅱ区　後期前半～後期後半の遺構の分布（1/1,000）……192
図 164　遺跡南部　弥生時代終末期の遺構分布略図（1/3,000）……193
図 165　遺跡南部　弥生時代終末期の遺構の分布（1/1,500）……194
図 166　遺跡南部　SX0222 盛土遺構周囲の弥生時代終末期の溝土層（1/40）……195
図 167　遺跡南部出土の外来系土器（1/4）……195
図 168　南内郭・構えの壕　後期後半～終末期の遺構の分布（1/1,200）・環壕、溝土層（1/80）　……197
図 169　吉野ヶ里地区Ⅴ区　SD0925 外環壕とその周辺（1/800）・土層断面（1/60）……198
図 170　吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区南部・Ⅶ区北部　後期後半～終末期の遺構の分布詳細（1/500）……199
図 171　弥生時代終末期の「構えの壕」土層（1/40）……200
図 172　終末期の「構えの壕」出土遺物（銅鏡 1/4, 土器 1/6,1/12）……200
図 173　吉野ヶ里地区Ⅴ区西部　遺構の分布略図（1/800）……201
図 174　吉野ヶ里地区Ⅴ区西部南側　遺構の分布詳細（1/500）……202
図 175　吉野ヶ里地区Ⅴ区西部北側　遺構の分布詳細（1/600）……203
図 176　遺跡中央部　弥生時代終末期の遺構分布略図（1/2,000）……205
図 177　吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ・Ⅵ区　後期後半～終末期の遺構の分布・終末期の竪穴建物跡　……206
図 178　弥生時代終末期の吉野ヶ里丘陵地区Ⅵ区（北内郭）遺構の分布・溝土層（1/50）……207
図 179　吉野ヶ里丘陵地区Ⅵ区　SB1194 大型掘立柱建物跡・柱穴土層・柱穴出土土器（1/4）　……208
図 180　遺跡北部～北端部　調査区・遺構の分布略図（1/5,000）……209
図 181　志波屋四の坪地区Ⅰ区北部・Ⅱ区　後期後半～終末期の遺構の分布（1/1,000）……210
図 182　志波屋四の坪地区Ⅰ・Ⅱ区　弥生時代終末期の竪穴建物跡（1/120）・出土遺物（1/4）……211
図 183　志波屋四の坪地区　終末期の主な遺物（1/2,1/4）……211
図 184　大曲一の坪地区　遺構の分布（1/1,000）・銅鐸埋納坑（1/10）・出土遺物（1/6）……213
図 185　遺跡北端部　志波屋六の坪（乙）遺跡Ⅰ区　後期～終末期の遺構の分布　……214
図 186　志波屋六の坪（乙）遺跡　SH0038 竪穴建物跡出土土器（1/4）……215
図 187　吉野ヶ里地区Ⅴ区　SD0925 外環壕とその周辺（1/800）・環壕出土遺物（1/4）……217
図 188　SD0925　7 アゼ中上層出土土器抜粋（1/6）……218
図 189　SD0925 外環壕出土の外来系土器（1/6）……218
図 190　弥生時代後期　主な遺構と遺物の出土位置（1/9,000）……219
図 191　古墳時代前期の主な遺構の分布（1/9,000　前方後方墳・方形周溝墓は 1/1,000）……221
図 192　南内郭・構えの壕　弥生時代終末期～古墳時代前期の遺構分布略図（1/2,000）……222
図 193「構えの壕」弥生時代終末期～古墳時代前期初頭の遺構の分布（1/500）……223
図 194　前方後方墳と出土土器 1（1/500,1/8）……224
図 195　吉野ヶ里地区Ⅴ区西部　古墳時代前期の竪穴建物跡（1/120）・出土土器（1/4）……225
図 196　遺跡南部　弥生時代終末期～古墳時代前期の遺構の分布（1/1,500）……226
図 197　ST0568 前方後方墳と出土土器（1/500,1/8）……227
図 198　遺跡南部　古墳時代前期の竪穴建物跡（1/120）・出土土器（1/6）……228
図 199　遺跡南部　古墳時代前期の土坑（1/30,1/10）・出土土器（1/6）……229

図 200　遺跡中央部　弥生時代終末期～古墳時代前期の遺構分布略図（1/2,000）……230
図 201　北内郭　弥生時代終末期～古墳時代前期の遺構の分布・古墳時代前期の竪穴建物跡　……231
図 202　吉野ヶ里地区Ⅰ区　SD0002 外環壕と SC0121 石棺墓（1/500,1/60）……232
図 203　吉野ヶ里丘陵地区Ⅸ区　ST2550 方形周溝墓・周溝土層・周溝出土土器（1/8）　……233
図 204　遺跡北部　古墳時代前期の遺構分布略図（1/5,000）……234
図 205　志波屋四の坪地区Ⅰ区北部・Ⅱ区　弥生時代終末期～古墳時代前期の遺構の分布　……235
図 206　古墳時代前期の吉野ヶ里遺跡と馬郡遺跡群（1/10,000）……236
図 207　祭祀遺構出土土器の変遷（1/12, ●は 1/20）　網かけは丹塗り……238
図 208　線刻のある弥生土器（1/3,1/6　拓本 1/3）　……240
図 209　樽形甕（1/6）……242
図 210　柱状土製支脚（方柱形）（1/4）……243
図 211　柱状土製支脚（円柱形）（1/4）……244
図 212　肥前型器台（1/4,1/6）　……245
図 213　台付甕・台付鉢（1/6）　……246
図 214　外反口縁鉢（1/6）　　図 215　直口縁広口壺（1/8）……247
図 216　吉野ヶ里遺跡出土青銅器（銅剣 1/8,1/2, 銅鏡 1/3, 環状・貨泉・銅鏃 1/2, 銅鐸 1/8）……251
図 217　弥生時代中期　青銅器・墳墓出土鉄器の出土位置（1/9,000）　……252
図 218　弥生時代後期　青銅器・墳墓出土鉄器の出土位置（1/9,000）　……253
図 219　遺跡南部　遺構の分布（1/3,000）・主な出土鉄器（1/4）……254
図 220　南内郭・構えの壕　弥生時代後期後半～終末期の遺構の分布・主な出土鉄器（1/4）　……255
図 221　吉野ヶ里地区Ⅴ区 SD0925 とその周辺（1/800）・SD0925 出土の主な鉄器（1/4）……256
図 222　遺跡中央部　弥生時代遺構の分布略図（1/2,500）・主な出土鉄器（1/4,1/6）　……257
図 223　吉野ヶ里丘陵地区Ⅵ区（北内郭）　弥生時代後期後半～終末期の遺構の分布・主な出土鉄器 …258
図 224　工具（斧柄）（1/6）……260
図 225　工具（その他）（1/6）……261
図 226　農具（鍬）（1/6）……262
図 227　農具（鍬柄）（1/6）……263
図 228　農具（鋤・鋤柄）（1/8）……265
図 229　農具（杁・杷）（1/6）……267
図 230　農具（鉄鎌柄）（1/6）……267
図 231　農具（竪臼・竪杵）（1/12）　……268
図 232　農具（横杵）（1/8）……269
図 233　甕棺の棒状タタキ痕（甕棺 1/20）　……271
図 234　運搬具（天秤棒・背負子・田舟）（1/12）　……273
図 235　漁労具（網枠）（1/8）……274
図 236　武器形木製品（剣形・戈形 1/6, 木鏃 1/3）……275
図 237　服飾具（履物）（1/4）……276
図 238　調理加工具（杓子）（1/8）……277
図 239　加工痕のある杓子（図 238-91）　……278
図 240　容器（1/8,1/12）……279

図 241　調度（腰掛）（1/4）　図 242　発火具（火鑽臼）（1/4）……280
図 243　建築部材（1/12）　図 244　用途不明木製品（1/4）……281
図 245　柄尻の分類（1/4）　向き改変……283
図 246　田手一本黒木地区Ⅱ区 222・223 調査区　遺構の分布（1/400）……284
図 247　222 調査区 5 グリッド　木製品出土状況拡大（1/120）……285
図 248　出土木製品　器種別比率（全体）……291
図 249　出土木製品　器種別比率（田手一本黒木地区Ⅱ区）……291
図 251　出土木製品　器種別比率（田手二本黒木地区Ⅰ区）……292
図 250　出土木製品　器種別比率（田一本松地区）……292
図 252　前期初頭～前期前半の石器（1/4）……293
図 253　前期初頭～前期前半の打製石器ほか（1/3）……294
図 254　前期後半代の磨製石器（SD0001・0336 環壕跡出土）（1/4）……296
図 255　磨製石器未成品（前期後半～中期初頭）（1/4）……297
図 256　上：前期後半～中期初頭の打製石器　下：前期末～中期初頭の打製石器等……298
図 257　立岩石庖丁（1/4）……300
図 258　菫青石 Hf 石庖丁（1/4）……301
図 259　菫青石 Hf 石庖丁未成品（1/4）……302
図 260　その他石材の石庖丁と未成品（1/4）……303
図 261　磨製石錐（穿孔具）（1/3）……304
図 262　太形蛤刃石斧（1/4）……305
図 263　片刃石斧（1/4）……306
図 264　片刃石斧未成品・再加工品（1/4）……307
図 265　石鎌（1/4）……308
図 266　紡錘車（1/4）……309
図 267　特徴的な打製石鏃（1/2）・黒曜石原石（1/4）……310
図 268　玄武岩質安山岩石庖丁（1/4）……311
図 269　玄武岩質安山岩石庖丁未成品（1/4）……312
図 270　砥石（弥生時代後期）（1/4）……314
図 271　特徴的な石器・石製品（1/3,1/2）……316
図 272　上：佐賀平野の地形区分（1/400,000）　下：神埼地域の地形区分（1/100,000）……320
図 273　縄文時代晩期後半～弥生時代前期前半の遺跡分布（1/100,000）……321
図 274　弥生時代前期後半～前期末の遺跡分布（1/100,000）……323
図 275　弥生時代中期初頭～中期前半の遺跡分布（1/100,000）……326
図 276　吉野ヶ里遺跡周辺における弥生時代中期の甕棺墓地の分布（1/60,000）……327
図 277　佐賀平野における青銅器出土墳墓の分布（弥生時代中期初頭～中期前半）（1/300,000）……332
図 278　弥生時代中期後半～中期末の遺跡分布（1/100,000）……334
図 279　弥生時代中期後半代の特徴的な墳墓・埋納事例等の分布（1/100,000）……335
図 280　弥生時代後期初頭～後期前半の遺跡分布（1/100,000）……340
図 281　弥生時代 後期前半代の特徴的な墳墓（1/80,000）……341
図 282　弥生時代後期後半～終末期の遺跡分布（1/100,000）……344

図 283　上：佐賀平野における弥生時代後期の青銅鏡出土遺跡分布　下：吉野ヶ里遺跡周辺 …… 347
図 284　古墳時代前期初頭の遺跡分布（1/100,000）…… 350
図 285　環壕突出部をもつ環壕集落跡の分布 …… 357
図 286　南内郭と北内郭（1/4,000）　図 287　吉野ヶ里遺跡の特異な形の門跡 …… 358
図 288　突出部をもつ環壕集落跡 …… 358
図 289　右：吉野ヶ里遺跡の弥生時代終末期の概略　左：外環壕跡の特殊な形態の門の平面図 …… 359
図 290　中国漢魏時代城壁の防御施設（○部分は馬面、角楼、甕城・護城墻）…… 360
図 291　中国漢魏時代城壁の防御施設（推定図）（来村多加史他 1994 より） …… 360
図 292　漢代の双闕（左：四川省成都市鳳闕画像磚　右：双闕迎謁画像磚）…… 360
図 293　前漢～三国時代の都城の施設配置の変化（妹尾 2009 より）…… 361
図 294　朝鮮半島周辺の環壕集落と城郭 …… 361
図 295　吉野ヶ里遺跡周辺での漢鏡・鉄刀等の副葬 …… 363

表目次

表 1　吉野ヶ里遺跡　各地区・遺跡の集落と墓地の消長 …… 14
表 2　吉野ヶ里遺跡出土木製品　樹種別器種一覧表 …… 289
表 3　吉野ヶ里遺跡出土木製品　器種別樹種一覧表 …… 290
表 4　環壕突出部をもつ環壕集落跡一覧表 …… 357
表 5　吉野ヶ里遺跡の各環壕の掘削時期と埋没時期 …… 359
表 6　九州北部各地の威信財を副葬した墳墓 …… 363
表 7　吉野ヶ里遺跡周辺の威信財をもつ弥生時代墳墓 …… 364
表 8　弥生時代日中外交と貢納・下賜品 …… 366

挿図目次（第 3 章）

図 1　吉野ヶ里遺跡　調査区の位置 …… 370
図 2　現代人を基準とする偏差折線（男性） …… 382
図 3　現代人を基準とする偏差折線（女性） …… 383
図 4　歯冠計測値 28 項目に基づく主成分分析（男性） …… 384
図 5　吉野ヶ里弥生人からの Pebrose 形態距離 …… 384
図 6　吉野ヶ里遺跡から出土した弥生時代人骨のコラーゲンにおける炭素・窒素同位体比 …… 399
図 7　西日本の弥生時代集団の骨コラーゲンにおける炭素・窒素同位体比 …… 400
図 8　東名遺跡から出土した縄文時代早期の人骨コラーゲンにおける炭素・窒素同位体比 …… 401

表目次（第 3 章）

表 1　吉野ヶ里遺跡人骨出土墳墓・遺構一覧 …… 372
表 2　吉野ヶ里遺跡地区別・遺構別・時期別人骨出土数 …… 380
表 3　吉野ヶ里遺跡甕棺出土時期別人骨数 …… 380
表 4　吉野ヶ里遺跡弥生人骨歯冠形態調査資料 …… 381
表 5　歯冠計測値の比較（男性 , 右側 ,㎜）…… 382
表 6　歯冠計測値の比較（女性 , 右側 ,㎜）…… 383
表 7　分析に供した人骨資料と回収されたゼラチンの量 …… 397
表 8　吉野ヶ里遺跡出土人骨のゼラチンにおける炭素・窒素同位体比 …… 398

序章

序章

１．はじめに

本書は、これまで実施した発掘調査成果のうち、弥生時代の集落と墓地全体に関する調査成果をまとめた総括報告書である。これまでの発掘調査や整備の経過、位置と環境等の詳細については、『207 集』（佐賀県教委 2015）を参照されたい。

２．近年の経過（平成 30 年度～平成 31 ／令和元年度）

文化庁の補助事業により、平成 30（2018）年度は、弥生時代墓地の発掘調査成果に関する補遺・総括に関する資料整理や、未報告となっていた平成 13 ～ 23 年度に実施した補助事業による発掘調査成果に関する資料整理を行い、報告書を作成、刊行した（『222 集』）。

平成 31・令和元（2019）年度は、本書の作成に係る整理作業を行ったほか、翌年度刊行予定の総括報告書『吉野ヶ里遺跡―古代編 1（辛上廃寺跡）』の作成に係る整理作業を行った。また、佐賀県庁の組織改編に伴い、平成 31（2019）年 4 月 1 日より、文化財保護事務を所管する部署が県教育庁文化財課から県地域交流部　文化・スポーツ交流局　文化課　文化財保護室へと移管されている。

３．調査組織

【事務局】佐賀県教育委員会　文化財課（平成 30 年度）

課長　江島　秀臣　　参事　徳富　則久　　副課長　山田　隆宏　　副課長　白木原　宜

主幹　今泉　和孝　　係長　宮崎　博司　　主査　松井　美穂

主事　松尾さつき　　主査　古野健太郎　　主査　渡部　芳久

【事務局】佐賀県地域交流部　文化・スポーツ交流局　文化課　文化財保護室（平成 31 ／令和元年度）

室長　川内野　修　　参事　白木原　宜　　副室長　山川　史　　副室長　古川　直樹

主幹　今泉　和孝　　係長　渋谷　格　　主査　松井　美穂　　主事　松尾さつき

主査　吉本　健一　　主査　渡部　芳久

４．調査指導委員会

（１）弥生時代調査指導委員会

平成 28（2016）年度に吉野ヶ里遺跡弥生時代調査指導委員会を設置し、事業内容及び今後の事業計画に係る審議を行った。第 2 回は平成 29（2017）年 9 月 29 日、第 3 回は平成 30（2018）年 10 月 26 日に開催した。なお、令和元（2019）年度は開催していない。

指導委員　七田　忠昭　（佐賀県立佐賀城本丸歴史館　館長）……委員長

武末　純一　（福岡大学人文学部　教授）……副委員長

寺澤　薫　　（桜井市纒向学調査研究センター　所長）

石川　日出志（明治大学文学部　教授）

木下　尚子　（熊本大学文学部　教授）

重藤　輝行　（佐賀大学芸術地域デザイン学部　教授）

石田　智子　（鹿児島大学法文学部　准教授）
調査指導　文化庁文化財部記念物課
地元市町　神埼市教育委員会・吉野ヶ里町教育委員会
関係機関　国営海の中道海浜公園事務所歴史公園課　（財）吉野ヶ里公園管理センター
佐賀県立博物館・美術館

（２）古代調査指導委員会

平成 29（2017）年度に吉野ヶ里遺跡古代調査指導委員会を設置し、事業内容及び今後の事業計画に係る審議を行った。第 3 回は令和 2（2020）年 2 月 6 日に開催した。

指導委員　七田　忠昭　（佐賀県立佐賀城本丸歴史館　館長）……委員長
亀田　修一　（岡山理科大学　教授）……副委員長
重藤　輝行　（佐賀大学芸術地域デザイン学部　教授）
柴田　博子　（宮崎産業経営大学　教授）
河上麻由子　（奈良女子大学文学部　准教授）
調査指導　文化庁文化財部記念物課
地元市町　神埼市教育委員会・吉野ヶ里町教育委員会
関係機関　国営海の中道海浜公園事務所歴史公園課　（財）吉野ヶ里公園管理センター
佐賀県立博物館・美術館

５．遺跡の保存・整備、活用事業等に関する経過概要（2014 年以降～）

ここでは、主に平成 26（2014）年度以降の吉野ヶ里遺跡の保存、整備、活用事業等に関する事項を簡単にまとめる。なお、平成 25（2013）年度以前の経過等については『207 集』に年表を掲載しているため、ここでは省略する。

平成 26（2014）年は、遺跡南部東側の杉籠地区（東墳丘墓）の整備が完了し、2014 年 4 月 1 日から供用開始となった。平成 27（2015）年は、4 月 1 日から吉野ヶ里遺跡展示室の所管が佐賀県教育委員会から佐賀県立博物館・美術館へと移管され、県が実施する吉野ヶ里遺跡に関する普及活用事業を担当することとなった。平成 28（2016）年は、県立公園区域との境界部分の整備が続いていた遺跡北部の「古代の森ゾーン」の整備が終了した箇所が、2016 年 4 月 1 日から一部供用追加となった。また、同年 7 月 23 日には県立公園区域の北口エリアが部分開園した。平成 29（2017）年は、吉野ヶ里歴史公園の入場者数が累計 1,000 万人に達し（6 月 10 日）、平成 13（2001）年の第 1 期開園以来、16 年目での達成となった。平成 30（2018）年は、九州北部三県姉妹遺跡締結 20 周年・魏志倭人伝のクニグニネットワーク結成 10 周年記念事業として、8 月 26 日に九州国立博物館にてシンポジウムを開催した。平成 31 ／令和元（2019）年は、平成元（1989）年の吉野ヶ里遺跡保存決定から 30 周年という節目の年にあたることから、佐賀県立博物館・美術館の主催により、吉野ヶ里遺跡報道 30 周年記念シンポジウム「吉野ヶ里遺跡報道を語る～なぜ､吉野ヶ里遺跡は残ったか？～」を開催した（8 月 24 日）。令和 2（2020）年 1 月～ 2 月には、佐賀県立博物館・美術館の主催事業として吉野ヶ里遺跡史跡指定 30 周年記念特別企画展「吉野ヶ里遺跡―軌跡と未来―」が開催された（1 月 1 日～ 2 月 16 日）。

第 1 章　調査研究史

第１節　吉野ヶ里遺跡の調査研究史
発掘以前―大正末期～昭和 61（1986）年まで―

（１）吉野ヶ里遺跡に関する内容を含む調査研究

藤谷庸夫・古賀孝・松尾禎作 1925『古代東肥前の研究』

三友国五郎 1934「佐賀県における合甕遺跡地」『考古学雑誌』24-5

七田忠志 1934a「佐賀県戦場ヶ谷出土弥生式有紋土器に就いて」『史前学雑誌』6-2

七田忠志 1934b「其の後の佐賀県戦場ヶ谷遺跡と吉野ヶ里遺跡に就いて」『史前学雑誌』6-2

松尾禎作 1935『東肥前の先史遺跡』

七田忠志 1936「甕棺葬の一異例に就いて」『考古学雑誌』26-8

松尾禎作 1960『佐賀県考古大観』祐徳博物館

橋口達也 1971「佐賀県脊振南麓における弥生社会の発展」『九州考古学』41 ～ 44　九州考古学会

（２）神埼地域の弥生時代遺跡に関する調査研究

松尾禎作 1932a「東脊振村出土クリス型銅剣鎔范について」『肥前史談』5-12　肥前史談会

松尾禎作 1932b「詫田貝塚の研究」『佐賀県史跡名勝天然記念物調査報告』3　佐賀県教育委員会

七田忠志 1935「東肥前出土の赤き人骨について」『肥前史談』7-4

松尾禎作 1936a「高木瀬村上高木の銅鉾出土地に就て」『佐賀県史跡名勝天然記念物調査報告』5

松尾禎作 1936b「春日村尼寺のクリス型銅剣出土地に就て」『佐賀県史跡名勝天然記念物調査報告』5

七田忠志 1937「新発見の特異なる墳墓に就いて（下）」『肥前史談』10-3　肥前史談会

三木文雄 1943「甕棺出土の一銅剣」『考古学雑誌』33-6

松尾禎作 1950「目達原古墳群調査報告」『佐賀県史跡名勝天然記念物調査報告』9

松尾禎作 1951「中原村上地かめ棺遺跡」『佐賀県史跡名勝天然記念物調査報告』10

七田忠志 1953「東脊振村三津の石蓋甕棺と内行花紋明光鏡」『佐賀県文化財発掘調査報告書』第２集

坪井清足・金関恕 1954「肥前永田遺跡弥生式甕棺伴出の鏡と刀」『史林』37-2

文化財保護委員会 1959「クリス形銅戈鎔范」『埋蔵文化財要覧 2』文化財保護委員会

木下之治 1960「佐賀県における埋蔵文化財の発掘発見の覚書」『郷土研究』10　佐賀県郷土研究会

金関丈夫・坪井清足・金関恕 1961「佐賀県三津永田遺跡」『日本農耕文化の生成』東京堂出版

金関丈夫・坪井清足・原口正三 1961「佐賀県切通遺跡」『日本農耕文化の生成』東京堂出版

佐賀県教育庁社会教育課 1964『佐賀県の遺跡』佐賀県文化財調査報告書第 13 集　佐賀県教育委員会

木下之治 1967「佐賀県文化界の回顧と展望　考古学」『新郷土』214　新郷土刊行協会

森貞次郎 1968「弥生時代における細形銅剣の流入について」『日本民族と南方文化』

木下之治 1969「佐賀県文化界の回顧と展望　考古学界・上（昭和 44 年度）」『新郷土』249

内藤芳篤 1971「西北九州出土の弥生時代人骨」『人類誌』79（3）

高倉洋彰 1972「弥生時代小形仿製鏡について」『考古学雑誌』58-3　日本考古学会

橋口達也 1974「佐賀県三津永田遺跡の鉄器　追補」『九州考古学』49・50

佐賀県教育委員会 1976「付　県下の新考古資料」『寺浦廃寺跡』佐賀県文化財調査報告書第 34 集

七田忠昭 1976「文様ある銅矛について―佐賀県目達原遺跡出土銅矛の紹介を兼ねて―」『九州考古学』52

志佐惲彦 1977「佐賀県下出土の古鏡―弥生・古墳時代―」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』3

橋口達也 1979「甕棺の編年的研究」『九州縦貫道自動車道関係埋蔵文化財調査報告』ＸＸＸＩ　中巻　福岡県教育委員会

七田忠志 1980「原始・古代」『三田川町史』

高島忠平 1980「佐賀県川寄吉原遺跡出土の鐸形土製品の人物絵画」『考古学雑誌』66-1

佐賀県立博物館編 1981『本分貝塚』佐賀県立博物館調査研究書第７集

高島忠平 1982「北九州の「クニグニ」」『鳥栖銅鐸と 2000 年前の西日本』鳥栖市教育委員会

堤安信 1984「佐賀県千代田町姉貝塚出土の銅剣・銅矛の鋳型」『考古学雑誌』70-2　日本考古学会

七田忠昭 1984「装飾文様を施す銅矛について―佐賀県検見谷出土銅矛を中心として―」『考古学雑誌』70-4

藤口健二 1986「詫田西分貝塚出土の銅鏃」『佐賀県立博物館・美術館報』74

第２節　吉野ヶ里遺跡の調査研究史　発掘開始後―昭和 61（1986）年以降―

（１）墓制・祭祀

小田富士雄 1991「弥生時代墳丘墓の出現―佐賀県・吉野ヶ里墳丘墓をめぐって」『児島隆人先生喜寿記念論集』
田中良之 1991「弥生時代の親族構造」『新版古代の日本』3　角川書店
蒲原宏行 1993「弥生王墓の系譜」『弥生のロマン』平成 4 年度佐賀県立博物館企画展図録
田中良之 1999「墓地からみた親族・家族」『古代史の論点』2　小学館
金関恕 1999「渡来人のもたらした宗教」『渡来人登場―弥生文化を開いた人々―』平成 11 年春季特別展　大阪府立弥生文化博物館図録 18
北條芳隆 1999「墳丘とその巨大性」『季刊考古学 67　墳墓と弥生社会』雄山閣
溝口孝司 1999「北部九州の墓制」『季刊考古学 67　墳墓と弥生社会』雄山閣
溝口孝司 2001「弥生時代の社会」『現代の考古学 6　村落と社会の考古学』朝倉書店
蒲原宏行 2003「弥生終末期の墓制と古墳の出現」『季刊考古学 84　古墳出現前夜の西日本』雄山閣
田中良之 2008『骨が語る古代の家族―親族と社会―』歴史文化ライブラリー 252　吉川弘文館
溝口孝司 2008「弥生社会の組織とカテゴリー」『集落からよむ弥生社会』弥生時代の考古学 8　同成社
重藤輝行 2011「佐賀平野の古墳時代社会と首長制」『佐賀学』佐賀大学・佐賀学創生プロジェクト
北條芳隆 2017「風水と火山信仰」『古墳の方位と太陽』ものが語る歴史 36　同成社
寺澤薫 2018『弥生時代国家形成史論』吉川弘文館
設楽博己 2019「弥生時代の世界観」北條芳隆編『考古学講義』　ちくま新書

（２）弥生集落論

高島忠平 1990「吉野ヶ里遺跡の変遷」『季刊考古学 31　環濠集落とクニのおこり』雄山閣
武末純一 1991「倉庫の管理主体―北部九州の弥生拠点集落例から―」『児島隆人先生喜寿記念論集』
高島忠平 1993「吉野ヶ里」『岩波講座　日本通史』2　岩波書店
高島忠平 1994「吉野ヶ里遺跡環濠集落の成立・発展・解体」『平成 4 年度・5 年度吉野ヶ里遺跡発掘調査の概要―墳丘墓と北内郭跡を中心として―』佐賀県教育委員会
小田富士雄 1994「吉野ヶ里の源流と弥生社会」『吉野ヶ里遺跡―「魏志倭人伝」の世界―』日本の古代遺跡を掘る 2　読売新聞社
蒲原宏行 1994「古墳時代初頭前後の佐賀平野―集落の変貌とその画期―」『日本と世界の考古学』岩崎卓也先生退官記念論文集編集委員会
徳富則久 1994「平坦低地における弥生～古墳時代集落の立地と動向（佐賀平野の集落Ⅰ）」『佐賀考古』1
蒲原宏行 1995「九州 2（佐賀県）」『ムラと地域社会の変貌―弥生から古墳へ―』第 37 回埋蔵文化財研究集会
河野竜介 1995「松原遺跡」（蒲原 1995「九州 2（佐賀県）」）所収
七田忠昭 1995a「佐賀県吉野ヶ里遺跡」『季刊考古学 51　倭人伝を掘る』雄山閣
七田忠昭 1995b「吉野ヶ里遺跡の環濠区画」『ムラと地域社会の変貌―弥生から古墳へ―』第 37 回埋蔵文化財研究集会　埋蔵文化財研究会
森田孝志 1995「吉野ヶ里と弥生のクニグニ」『風土記の考古学 5　肥前風土記の巻』同成社
徳富則久 1995a「脊振山系南麓洪積台地及びその周辺における弥生～古墳時代集落の立地と動向（1）（佐賀平野の集落Ⅱ）」『佐賀考古』2
徳富則久 1995b「目達原段丘群及びその周辺における弥生～古墳時代集落の立地と動向（弥生時代の集落Ⅲ）『佐賀考古』3
徳富則久 1997「志波屋段丘（吉野ヶ里丘陵）及びその周辺における弥生～古墳時代集落の立地と動向（佐賀平野の集落Ⅳ）」『佐賀考古』4
七田忠昭 1996「日本の弥生時代集落構造にみる大陸的要素―環濠集落と中国古代城郭との関連について―」『東アジアの鉄器文化』韓国国立文化財研究所
千田嘉博 1996「弥生の戦いと中世の戦い」『倭国乱る』国立歴史民俗博物館
高島忠平 1997「Ⅴ．おわりに」『吉野ヶ里遺跡―平成 2 年度～ 7 年度の発掘調査の概要』佐賀県文化財調査報告書第 132 集　佐賀県教育委員会
七田忠昭 1997a「有明海沿岸地方の弥生時代環濠集落にみる大陸的要素（予察）」『佐賀考古』4　佐賀考古談話会
七田忠昭 1997b「有明の弥生文化」『青銅の弥生都市―吉野ヶ里をめぐる弥生のクニグニ―』平成 9 年春季特別展　大阪府立弥生文化博物館図録 14
武末純一 1998「弥生環溝集落と都市」田中琢・金関恕編『都市と工業と流通』古代史の論点 3　小学館
武末純一 1998「北部九州の弥生都市論」『日本古代史　都市と神殿の誕生』新人物往来社
細川金也・渋谷格 1999「弥生時代の集落―佐賀平野の中・後期　田手・城原川流域を中心として―」『弥生時代の集落』第 45 回埋蔵文化財研究集会
小松譲 2000「弥生時代の掘立柱建物を主とする集落について」『堂の前・井ゲタ遺跡』佐賀県文化財調査報告書第 144 集　佐賀県教育委員会
武末純一 2001「北部九州の弥生集落」『弥生時代の集落』大阪府立弥生文化博物館編
金関恕 2001「弥生時代集落分析の視点」『弥生時代の集落』大阪府立弥生文化博物館編
徳富則久 2001「城原川西岸地域の弥生～古墳時代集落の立地と動向（佐賀平野の集落Ⅴ）」『佐賀考古』5
蒲原宏行 2002「三世紀の北部九州―佐賀平野・志波屋遺跡群を中心に―」『三世紀のクニグニ・古代の生産と工房』シンポジウム記録 3　考古学研究会
武末純一 2002『弥生の村』日本史リブレット 3　山川出版社

藤尾慎一郎 2006「GIS にもとづく佐賀平野における縄文～弥生時代の遺跡分布」『実践考古学 GIS―先端技術で歴史空間を読む』NTT 出版
秋山浩三 2007「弥生大型集落の構造分析と都市論」『弥生大型農耕集落の研究』青木書店
小澤佳憲 2009「北部九州の弥生時代集落と社会」『国立歴史民俗博物館研究報告』149
七田忠昭 2009「吉野ヶ里遺跡の集落構成―有明海北岸・筑後川流域の弥生時代後期集落の構造変化―」『弥生時代後期の社会変化』第 58 回埋蔵文化財研究集会　埋蔵文化財研究会
七田忠昭 2009「弥生集落の展開」『史跡で読む日本の歴史 1　列島文化のはじまり』吉川弘文館
西谷正 2009「吉野ヶ里、三雲・井原遺跡と交河流域」『脊振山の南と北で』平成 21 年度伊都国歴史博物館秋季特別展図録
西谷正 2009『魏志倭人伝の考古学―邪馬台国への道―』学生社
細川金也・土屋了介 2009「佐賀県における弥生時代後期の社会変化」『弥生時代後期の社会変化』第 58 回埋蔵文化財研究集会
西谷正 2010「首長墓の出現と王墓の形成過程」『九州歴史資料館研究論集』35　九州歴史資料館
七田忠昭 2010「拠点集落の首長とその墳墓」『日韓集落研究の新たな視角を求めてⅡ』日韓集落研究会第 6 回共同研究会
片岡宏二 2011『邪馬台国論争の新視点―遺跡が示す九州説』雄山閣
七田忠昭 2011「佐賀平野における弥生文化の生成・発展と東アジア―弥生時代における佐賀の特質―」『佐賀学』佐賀大学・佐賀学創生プロジェクト
七田忠昭 2012a「弥生時代拠点集落の構造変化と首長の墳墓」『日韓集落の研究―弥生・古墳時代および無文土器～三国時代―』日韓集落研究会
七田忠昭 2012b「邪馬台国―九州説の一例　佐賀県吉野ヶ里遺跡の発掘成果から」西谷正編『邪馬台国をめぐる国々』季刊考古学・別冊 18　雄山閣
重藤輝行 2013「弥生時代の倉庫群の展開に関する一考察―有明海沿岸地域を中心に―」『弥生研究の群像』みずほ別冊　大和弥生文化の会
山崎頼人 2015「九州の環濠と弥生社会」石黒立人編『論集　環濠集落の諸問題 2015』
七田忠昭 2018「佐賀の弥生文化にみる中国の文化要素」『東シナ海と弥生文化』環太平洋文明叢書⑥　雄山閣
渡部芳久 2018「佐賀平野における古墳時代初頭前後の集落と墳墓」『集落と古墳の動態Ⅰ』九州前方後円墳研究会鹿児島大会

（3）青銅器・鉄器

久保伸洋 1986「松ノ内 A 遺跡」『弥生時代の青銅器とその共伴関係　第 1 分冊―九州篇―』埋蔵文化財研究会第 20 回研究集会
村上恭通 1992「吉野ヶ里遺跡における弥生時代の鉄製品」『吉野ヶ里』佐賀県文化財調査報告書第 113 集
片岡宏二 1993「筑紫平野における初期鋳型の諸問題」『考古学ジャーナル』359　ニュー・サイエンス社
家田淳一・蒲原宏行・渋谷格・久山高史 1994「佐賀県」『倭人と鏡―日本出土中国鏡の諸問題―』第 35 回埋蔵文化財研究集会
細川金也 1997「松ノ内 A 遺跡出土弥生時代小形仿製鏡の保存処理―東脊振村周辺の青銅鏡―」『平成 6・7 年度東脊振村内文化財調査報告書（付　下三津西古墳・三津永田東遺跡）』東脊振村文化財調査報告書第 21 集　東脊振村教育委員会
小田富士雄 1997「「一鋳式銅剣」覚書」『研究紀要』1　下関市立考古博物館
下條信行 1997「玄界灘 VS 有明海」『青銅の弥生都市―吉野ヶ里をめぐる弥生のクニグニ―』平成 9 年春季特別展　大阪府立弥生文化博物館図録 14
片岡宏二 1999「渡来人と青銅器生産」『弥生時代渡来人と土器・青銅器』雄山閣
岡村秀典 1999『三角縁神獣鏡の時代』吉川弘文館
北島大輔 2002「吉野ヶ里銅鐸を巡る諸問題」『吉野ヶ里遺跡』佐賀県文化財調査報告書第 152 集
田尻義了 2008「九州大学筑紫地区出土巴形銅器鋳型の位置付け―巴形銅器の分類と製作技法の検討―」『九州と東アジアの考古学』九州大学考古学研究室 50 周年記念論集
細川金也 2009「有明海北岸出土の弥生時代青銅器の研究」『財団法人鍋島報效会研究助成研究報告書』4
境靖紀 2009「神庭荒神谷遺跡出土の銅矛」『古代文化研究』17　島根県古代文化センター
柳田康雄 2011「北部九州製青銅製把頭飾の蝋型鋳造」『アジア鋳造史学会研究発表概要集』5　アジア鋳造史学会
柳田康雄 2010「日本出土青銅製把頭飾と銅剣」『坪井清足先生卒寿記念論集』
武末純一 2011「九州北部地域」『講座日本の考古学 5　弥生時代（上）』青木書店
田尻義了 2012『弥生時代の青銅器生産体制』九州大学出版会
村田裕一 2012「刃部研ぎ分け紋様を有する武器型青銅器の研究―検見谷銅矛・目達原銅矛による文様の類型化を中心として―」『山口大学考古学論集』中村友博先生退任記念論文集
柳田康雄 2013「弥生時代王権論」『弥生時代政治社会構造論』柳田康雄古稀記念論文集　雄山閣
吉田大輔 2013「佐賀平野における弥生時代後期を中心とした青銅鏡の動向」『弥生時代後期青銅鏡を巡る諸問題』平成 25 年度九州考古学会大会発表資料集
岡村秀典 2017『鏡が語る古代史』岩波新書
柳田康雄 2018「弥生時代初期の時期区分と初期青銅器」『纒向学研究』6　桜井市纒向学研究センター
村松洋介 2018「佐賀県域における青銅器の受容と変容」『財団法人鍋島報效会研究助成研究報告書』8

（4）土器

蒲原宏行 1989「東脊振村夕ヶ里遺跡出土の古式土師器（1）」『佐賀県立博物館・美術館報』83
蒲原宏行 1991「古墳時代初頭前後の土器編年―佐賀平野の場合―」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』16

中野充 1997「佐賀平野における弥生文化成立期の土器編年」『立命館大学考古学論集Ⅰ』
片岡宏二 1999「朝鮮系無文土器の弥生土器化」『弥生時代渡来人と土器・青銅器』雄山閣
蒲原宏行 2003「佐賀平野における弥生時代後期の土器編年」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』27
中野充 2004「佐賀平野の弥生早・前期土器編年」『板付Ⅰ式期の再検討』埋蔵文化財研究会
中野充 2005「田手二本黒木地区Ⅱ区 SD0001 環壕出土の土器」『吉野ヶ里遺跡』佐賀県文化財調査報告書第 163 集
壇佳克 2005「九州出土の棒状浮文を有する土師器に関する一考察」『九州考古学』80
鐘ヶ江賢二 2007『胎土分析からみた九州弥生土器文化の研究』九州大学出版会
石田智子 2008「佐賀平野東部地域における弥生時代中期の土器様相」『吉野ヶ里遺跡』佐賀県文化財調査報告書第 177 集
蒲原宏行 2009「桜馬場「宝器内蔵甕棺」の相対年代」『地域の考古学―佐田茂先生佐賀大学退任記念論文集』
山崎頼人 2010「筑後・肥前地域における朝鮮半島系土器の様相―有明海沿岸地域―」『日本出土の朝鮮半島系土器の再検討―弥生時代を中心に―』第 59 回埋蔵文化財研究集会発表資料集　埋蔵文化財研究会
石田智子 2011「寒水川・切通川流域における弥生時代中期の土器様相」『西寒水四本柳遺跡 2-5 区・6 区』みやき町文化財調査報告書第 5・6 集
川上洋一 2012「九州出土の水石里式土器とその製作技術者集団に関する検討」『研究紀要』17　財団法人由良大和古代文化研究協会
石橋新次 2014「佐賀県の肥前型器台」『肥前型器台について』肥後考古学会・長崎県考古学会・合同大会資料集
石橋新次 2015「佐賀県における台付甕と透かしを持つ装飾器台」『有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流』長崎県考古学会九州考古学会合同研究大会
渋谷格 2016「桜馬場式のゆくえ」『考古学は科学か　田中良之先生追悼論文集　上』
蒲原宏行 2017「佐賀・唐津平野」『九州島における古式土師器』第 19 回九州前方後円墳研究会長崎大会　発表要旨集・基本資料集
山崎頼人 2019「環有明海地域における弥生時代の日韓交流―交流拠点としての環有明海地域の評価―」『公益財団法人鍋島報效会研究助成研究報告書』9

（5）石器・石製品

徳永貞紹 1994「弥生時代の石製剣把頭飾」『先史学・考古学論究』熊本大学文学部考古学研究室創設 20 周年記念論文集　龍田考古会
兒玉洋志 2005「稲作導入期における打製石器の石材の選択」『弥生石器研究会佐賀大会発表資料集』
能登原孝道 2005「田手二本黒木地区Ⅱ区 SD0001 環壕出土石器の概要」『吉野ヶ里遺跡』佐賀県文化財調査報告書第 163 集
能登原孝道・中野伸彦・小山内康人 2007「いわゆる「頁岩質砂岩」の原産地について」『九州考古学』82　九州考古学会
城門義廣 2008「吉野ヶ里遺跡出土の武器形石製品」『吉野ヶ里遺跡』佐賀県文化財調査報告書第 177 集
兒玉洋志 2008「有明海北岸地域における弥生時代開始期の磨製石器の展開」『地域・文化の考古学―下條信行先生退官記念論文集―』
森貴教 2011「北部九州における弥生時代の石器流通」『石材の流通とその背景―弥生・古墳時代を中心に―』第 60 回埋蔵文化財研究集会
渡部芳久、能登原孝道、米村和紘、足立達朗、小山内康人 2011「北部九州における弥生時代後期の石庖丁生産と流通―玄武岩質安山岩製石庖丁を中心に―」『平成 23 年度九州史学会考古学部会発表資料集』
武末純一 2012「弥生時代の権―青谷上寺地遺跡出土例を対象として―」『福岡大学考古学論集 2』福岡大学考古学研究室
森貴教 2013「弥生時代北部九州における片刃石斧の生産・流通とその背景 -「層灰岩」製片刃石斧を中心に -」『古文化談叢』69　九州古文化研究会
山崎頼人 2013「弥生時代北部九州の剥片石器石材の流通」『考古学ジャーナル』638
森貴教 2014「弥生時代における砥石使用形態の変化―石器から鉄器へ―」『季刊考古学』127
能登原孝道 2014「北部九州における石庖丁の生産と流通」『東アジア古文化論攷』高倉洋彰先生退職記念論集
輪内遼 2016「弥生時代の権衡―九州の新出資料を中心に―」『古文化談叢』76　九州古文化研究会
渡部芳久 2016「吉野ヶ里遺跡出土の弥生時代石器について」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』40
森貴教 2017「弥生時代北部九州における石庖丁の消費形態―立岩系石庖丁を中心として―」『古文化談叢』79　九州古文化研究会
渡部芳久 2017「玄武岩質安山岩製石庖丁の製作技術」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』41
森貴教 2018『石器の生産・消費からみた弥生社会』九州大学人文学叢書 13　九州大学出版会
渡部芳久 2018「弥生時代擦切石器の展開―資料紹介を兼ねて―」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』42
渡部芳久 2019「擦切加工と石硯・研石―佐賀県内出土例を対象として―」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』43
宮崎貴夫 2019「長崎県本土地域の磨製石庖丁―片刃石庖丁を中心にして―」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』9

（6）土製品

天本洋一 1994「北部九州の鐸形土製品について」『佐賀考古』1　佐賀考古談話会

（7）木製品

能城 修一・鈴木 三男・辻 誠一郎 1999「佐賀県吉野ヶ里遺跡から出土した木製品の樹種」『植生史研究』6（2）日本植生史学会
天本洋一 2009「佐賀県における弥生・古墳時代木製品の動向」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』33

（8）繊維製品・染色

布目順郎 1989「弥生時代の絹織物と吉野ヶ里」『東アジアの古代文化』61　大和書房
布目順郎 1992「吉野ヶ里遺跡出土の絹と麻」『吉野ヶ里』佐賀県文化財調査報告書第 113 集　佐賀県教育委員会

前田雨城・下山進・野田裕子 1992「吉野ヶ里遺跡出土染織遺物の染色鑑定科学調査について」『吉野ヶ里』佐賀県文化財調査報告書第 113 集
布目順郎 1995『倭人の絹―弥生時代の織物文化―』小学館
布目順郎 1999「弥生人衣服の復元」『富山市日本海文化研究所報』23　富山市日本海文化研究所
七田忠昭 2005「佐賀県吉野ヶ里遺跡の出土繊維」『季刊考古学』91　雄山閣

（9）その他

単行本

佐賀県教育委員会編 1994『吉野ケ里遺跡と古代国家』吉川弘文館
七田忠昭・小田富士雄 1994『吉野ヶ里遺跡―魏志倭人伝の世界―』日本の古代遺跡を掘る 2　読売新聞社
金関恕・佐原真 1997『邪馬台国と吉野ヶ里』学生社
大阪府立弥生文化博物館編 1997『青銅の弥生都市―吉野ヶ里をめぐる有明のクニグニ―』
佐賀新聞社・長崎新聞社 1998『倭人伝を掘る―吉野ヶ里・原の辻の世界―』
高島忠平・岡田康博 2000『縄文の宇宙、弥生の世界―三内丸山と吉野ヶ里の原風景―』角川書店
木下巧 2005『古代東肥前文化資料集成』肥前文化史研究会
七田忠昭 2005『日本の遺跡 2 吉野ヶ里遺跡』同成社
吉野ヶ里公園管理センター編 2005『七田忠志　研究論文集』
佐賀県教育委員会 2008『吉野ヶ里遺跡と古代韓半島』日韓特別企画展図録　佐賀県教育委員会文化課
七田忠昭 2017『邪馬台国時代のクニの都　吉野ヶ里遺跡』シリーズ「遺跡を学ぶ」115　新泉社

復元建築、史跡整備、史跡の保存と活用

宮本長二郎 1989「吉野ヶ里遺跡の復原」『建築雑誌・建築年報』27
七田忠昭 1995「吉野ヶ里遺跡の保存と活用」『展望考古学』考古学研究会
納富敏雄 1997『吉野ヶ里遺跡―保存と活用への道―』歴史文化ライブラリー 28　吉川弘文館
澤村明 2002「遺跡保存の経済効果―吉野ヶ里・三内丸山を事例に―」『文化経済学』3（1）文化経済学会
牧野厚史 2002「遺跡保存における土地利用秩序の共同性と公共性―佐賀県吉野ヶ里遺跡保存における公共性構築―」『環境社会学研究』8（0）環境社会学会
七田忠昭 2008「吉野ヶ里遺跡とふるさと」『吉野ヶ里町誌』吉野ヶ里町誌編纂委員会
七田忠昭 2008「佐賀県吉野ヶ里遺跡の整備・活用」『國學院大學考古学資料館紀要』24
服部英雄 2010「遺構と矛盾する吉野ヶ里遺跡の復原」『史跡で読む日本の歴史 8』吉川弘文館
澤村明 2011『遺跡と観光』市民の考古学⑧　同成社
七田忠昭 2011「史跡・景観の保存と活用 史跡の実物大復元・整備―吉野ヶ里遺跡整備の現状と課題」『日本歴史』754　吉川弘文館
小田富士雄 2012「考古学と観光の接点―西日本・韓国の事例に触れて―」『観光考古学』考古調査ハンドブック 7　ニュー・サイエンス社
七田忠昭 2016「佐賀県吉野ヶ里遺跡・歴史公園の活用と地域経済」『潭陽台木里遺跡をめぐって』国際シンポジウム　大韓文化財研究院

旧地形関係

南出眞助 1989「佐賀県田手川の河道変遷に関する一考察」『追手門学院大学東洋文化学科学報』4
南出真助 1990「佐賀県吉野ヶ里周辺の条里」『条里制研究』6　条里制研究会
下山正一 1994「北部九州における縄文海進以降の海岸線と地盤変動傾向」『第四紀研究』33（5）
下山正一・松本直久・湯村弘志・竹村恵二・岩尾雄四郎・三浦哲彦・陶野郁雄 1994「有明海北岸低地の第四系」『九州大学理学部研究報告（地球惑星）』18-2

地下探査・土木工学関係

半田駿・宮島敬一 1990「地球電磁気学的探査法の遺跡調査への応用―吉野ヶ里遺跡―」『佐賀大学教養部研究紀要』22
半田駿・迫田浩一・新井康平・寺本顕武 1992「地中レーダー法による吉野ヶ里北墳丘墓の探査」『佐賀大学教養部研究紀要』24
西村康 2000『地中レーダー探査の手法を用いた広域遺跡調査法の開発研究』平成 9 年度 ~ 平成 11 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）研究成果報告書
桑原久男 2001「佐賀県神埼町・三田川町吉野ヶ里遺跡」天理大学遺跡探査チーム編『墳丘のない墓の探査研究』平成 9 ～ 12 年度科学研究費所補助金（基盤研究 B（2））実績報告書（補訂）
鬼塚克忠・原裕 1996「吉野ヶ里遺跡・北墳丘墓の土質工学的特性」『土と基礎』Vol.44,No.7
鬼塚克忠・佐藤磨美 2003「吉野ヶ里遺跡・北墳丘墓など盛土遺跡の地盤工学的特性と構築技術」『土木学会論文集』736 号Ⅲ -63
鬼塚克忠・原裕 2012「吉野ヶ里墳丘墓の構築技術のルーツと伝播」『土木学会論文集 C（地圏工学）』Vol.68,No.4

古人骨

太田博樹・斎藤成也・松下孝行・植田信太郎 1995「A genetic study of 2,000-year-old human remains from Japan using mitochondrial DNA sequences」『American Journal of Physical Anthropology』Volume98,Issue2

斎藤成也 1996「遺伝子からみた東ユーラシア人」『遺伝』50 巻 1 号

分部哲秋・佐伯和信・岡本圭史・長島聖司 1997「長崎大学出展人骨資料」『人類学雑誌』105（5）

分部哲秋・佐伯和信・長島聖司 2000「佐賀県千代田町高志神社遺跡出土の弥生時代人骨」『高志神社遺跡』千代田町文化財調査報告書第 27 集

自然科学分析

平尾良光・鈴木浩子 2003「佐賀県から出土した弥生時代青銅器遺物についての自然科学的研究」『柚比遺跡群 4 分析編』佐賀県文化財調査報告書第 158 集

第２章　弥生時代の調査成果

第１節　弥生時代の集落と墓地の変遷と特徴
第２節　弥生時代の集落・墓地出土遺物の総括
第３節　神埼地域における弥生時代遺跡の動態
第４節　付論

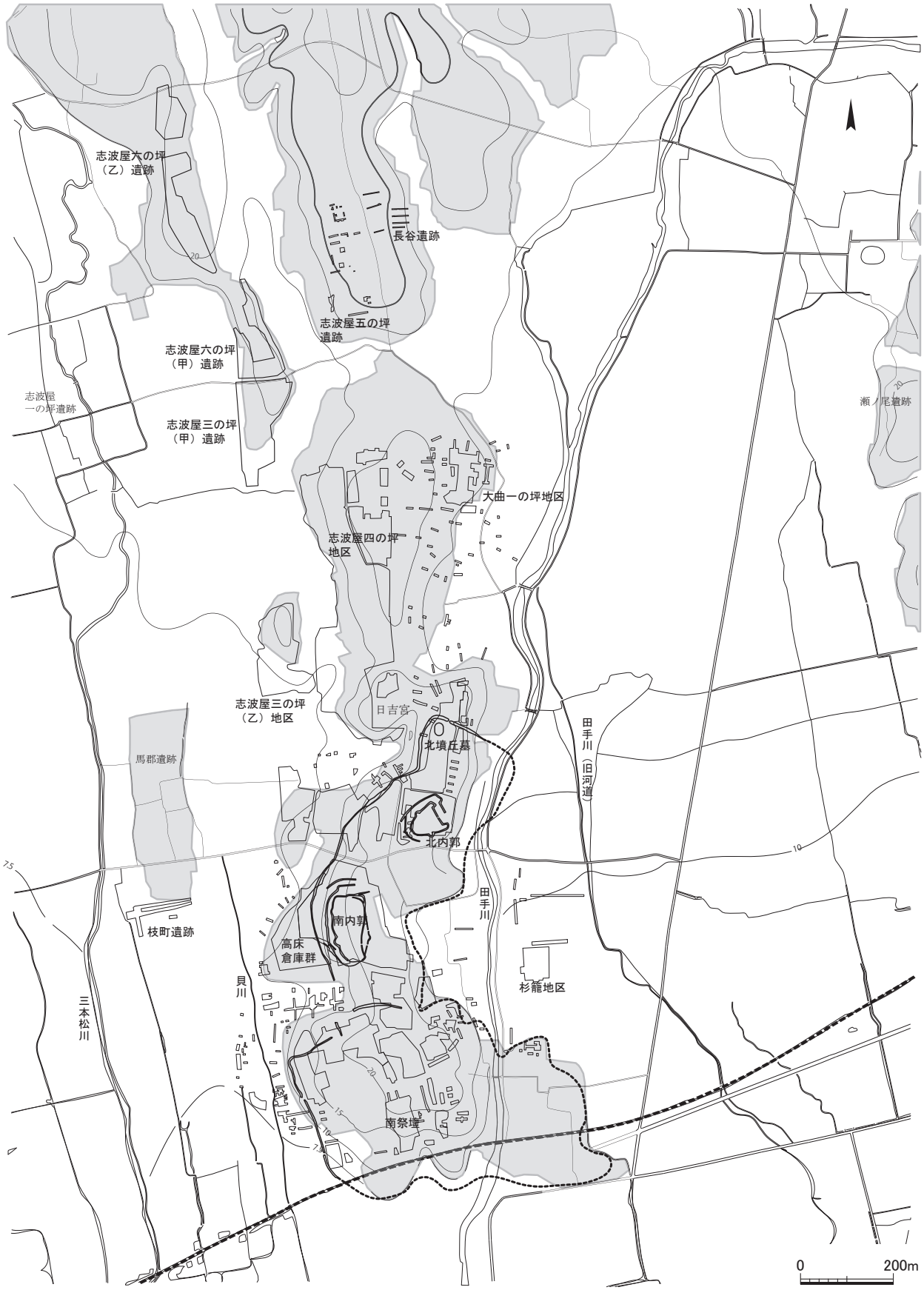


図１　吉野ヶ里遺跡全体略図（1/12,000）

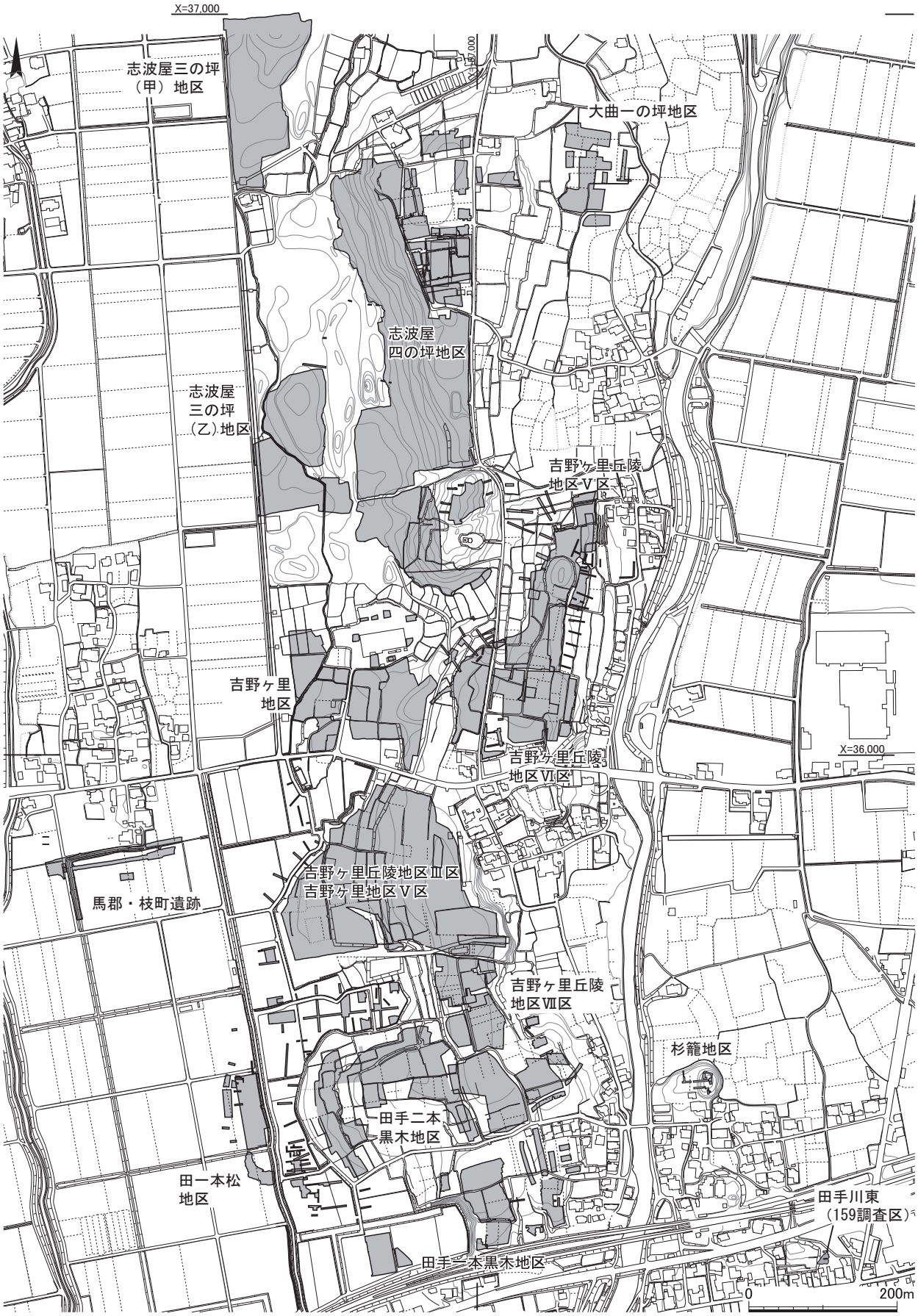


図２　吉野ヶ里遺跡の主な調査区の位置（1/7,500）

表１　吉野ヶ里遺跡　各地区・遺跡の集落と墓地の消長

	地区名称	地区記号	位置	前期初頭	前期前半	前期後半	前期末	中期初頭	中期前半	中期後半	中期末	後期初頭	後期前半	後期後半	後期終末	古墳前期	特記事項
1	志波屋六の坪（乙）遺跡	SR0	遺跡北部														
2	志波屋五の坪遺跡Ⅱ区	SGT-Ⅱ	遺跡北部														
3	志波屋三の坪（甲）遺跡	SST	遺跡北部														
4	志波屋三の坪（乙）地区	SS0	遺跡北部														
5	大曲一の坪地区	OIT	遺跡北部														銅鐸埋納
6	志波屋四の坪地区Ⅰ区	SYT-Ⅰ	遺跡北部														列埋葬
7	志波屋四の坪地区Ⅱ区	SYT-Ⅱ	遺跡北部														列埋葬
8	吉野ヶ里丘陵地区Ⅰ区	YGK-Ⅰ	遺跡中央部														
9	吉野ヶ里丘陵地区Ⅳ区	YGK-Ⅳ	遺跡中央部														
10	吉野ヶ里丘陵地区Ⅸ区	YGK-Ⅸ	遺跡中央部														SJ2775（前漢鏡）
11	吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区	YGK-Ⅴ	遺跡中央部														北墳丘墓
12	吉野ヶ里丘陵地区Ⅵ区	YGK-Ⅵ	遺跡中央部														SJ1201（鉄剣） 北内郭
13	吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区	YGK-Ⅱ	遺跡中央部														
14	吉野ヶ里地区Ⅰ区	YNG-Ⅰ	遺跡中央部														
15	吉野ヶ里地区Ⅱ区	YNG-Ⅱ	遺跡中央部														列埋葬
16	吉野ヶ里地区Ⅲ区	YNG-Ⅲ	遺跡中央部														列埋葬
17	吉野ヶ里地区Ⅳ区	YNG-Ⅳ	遺跡中央部														
18	吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区	YGK-Ⅲ	遺跡南部														南内郭 構えの壕
19	吉野ヶ里地区Ⅴ区	YNG-Ⅴ	遺跡南部														南内郭 高床倉庫群
20	吉野ヶ里地区Ⅵ区	YNG-Ⅵ	遺跡南部														
21	馬郡・枝町遺跡	—	遺跡南部														
22	吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区	YGK-Ⅶ	遺跡南部														
23	田手二本黒木地区Ⅰ区	TDN-Ⅰ	遺跡南部														木製品多数
24	田手二本黒木地区Ⅱ区	TDN-Ⅱ	遺跡南部														
25	田手二本黒木地区Ⅲ区	TDN-Ⅲ	遺跡南部														青銅器鋳造関連遺構
26	杉籠地区Ⅲ区	SGR-Ⅲ	遺跡南部														
27	田手一本黒木地区Ⅰ区	TDI-Ⅰ	遺跡南部														SJ0100（細形銅剣） 南祭壇
28	田手一本黒木地区Ⅱ区	TDI-Ⅱ	遺跡南部														木製品多数
29	田一本松地区Ⅰ区	DEI-Ⅰ	遺跡南部														木製品多数
30	田一本松地区Ⅱ区	DEI-Ⅱ	遺跡南部														木製品多数
31	田手川東（二本松地区）	—	遺跡南部														

第２章　弥生時代の調査成果（総括）

第１節　弥生時代の集落と墓地の特徴と変遷

本節では、弥生時代の吉野ヶ里遺跡全体の集落と墓地の変遷過程について、総括的なまとめを行う。これまで、集落全般に関しては『207 集』（2015 年）、一般墓地に関しては『214 集』（2016 年）、北墳丘墓・南祭壇（墳丘墓？）に関しては『219 集』（2018 年）、墓地総括（・補遺）に関しては『222 集』（2019 年）でそれぞれ事実報告とまとめを行っている。本節は、基本的にこれらの報告内容に基づいて総括を行っているため、そちらも併せて参照されたい。以下では、弥生時代の集落と墓地との関係性を考慮し、時期的な変遷過程を総括するとともに、今後の課題についても触れる。

地区区分

吉野ヶ里遺跡の地区区分については、遺構の分布状況等をふまえ、便宜的に以下のとおりとする。

【遺跡北部】

志波屋四の坪地区Ⅰ・Ⅱ区（SYT- Ⅰ・Ⅱ）、志波屋三の坪（乙）地区（SSO）、大曲一の坪地区（OIT）、志波屋三の坪（甲）遺跡（SST）、志波屋五の坪遺跡（SGT）、志波屋六の坪（甲）遺跡（SRT）、志波屋六の坪（乙）遺跡（SRO）

【遺跡中央部】

吉野ヶ里地区Ⅰ～Ⅳ区（YNG- Ⅰ～Ⅳ）

吉野ヶ里丘陵地区Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅸ（YGK- Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ、Ⅸ）

【遺跡南部】

田手一本黒木地区Ⅰ・Ⅱ区（TDI- Ⅰ・Ⅱ）、田手二本黒木地区Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区（TDN- Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）、田一本松地区（DEI）、吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ・Ⅶ・Ⅷ区（YGK- Ⅲ・Ⅶ・Ⅷ）、吉野ヶ里地区Ⅴ・Ⅵ区（YNG- Ⅴ・Ⅵ）、馬郡・枝町遺跡、杉籠地区Ⅲ区（SGR- Ⅲ）、田手川東地区（159 調査区）

時期区分

弥生時代の時期区分については、土器様式編年を指標として下記のように表現する。

【日常土器】（『207 集』）

前期初頭（板付Ⅰ式併行）、前期前半（板付Ⅱａ式併行）、前期後半（板付Ⅱｂ式古段階併行）、前期末（板付Ⅱｂ式新段階併行）、中期初頭（城ノ越式併行）、中期前半（須玖Ⅰ式併行）、中期後半（須玖Ⅱ式古段階併行）、中期末（須玖Ⅱ式新段階併行）、後期前半（高三潴式併行）、後期後半（下大隈式併行）、終末（西新式併行）

【甕棺】（『222 集』）

前期後半（伯玄式）、前期末～中期初頭（金海式・城ノ越式）、中期前半（汲田式）、中期後半（須玖式）、中期末（立岩式）、後期初頭～前半（桜馬場式・三津式）

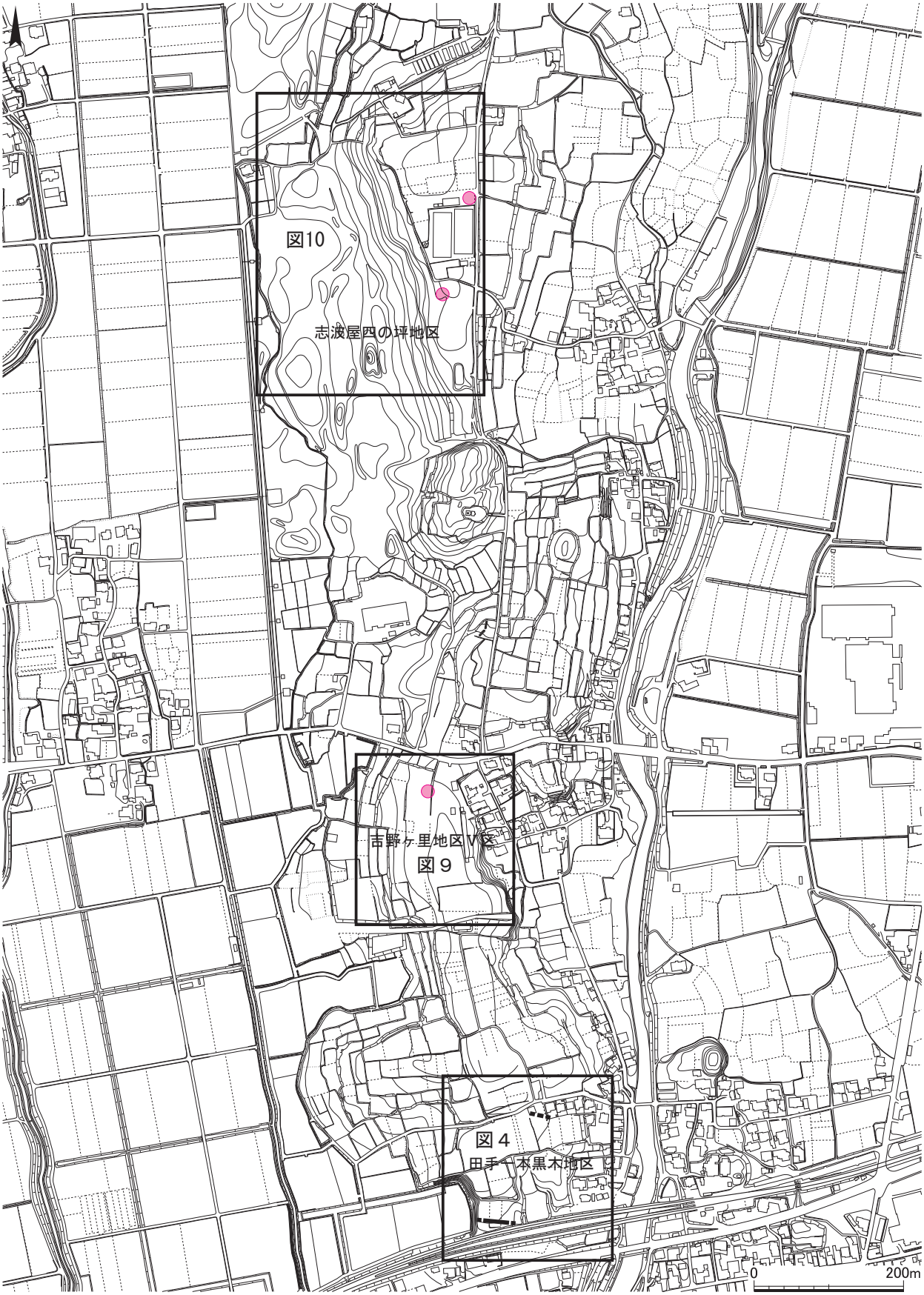


図３　弥生時代前期初頭～前期前半の集落の位置（1/7,500）

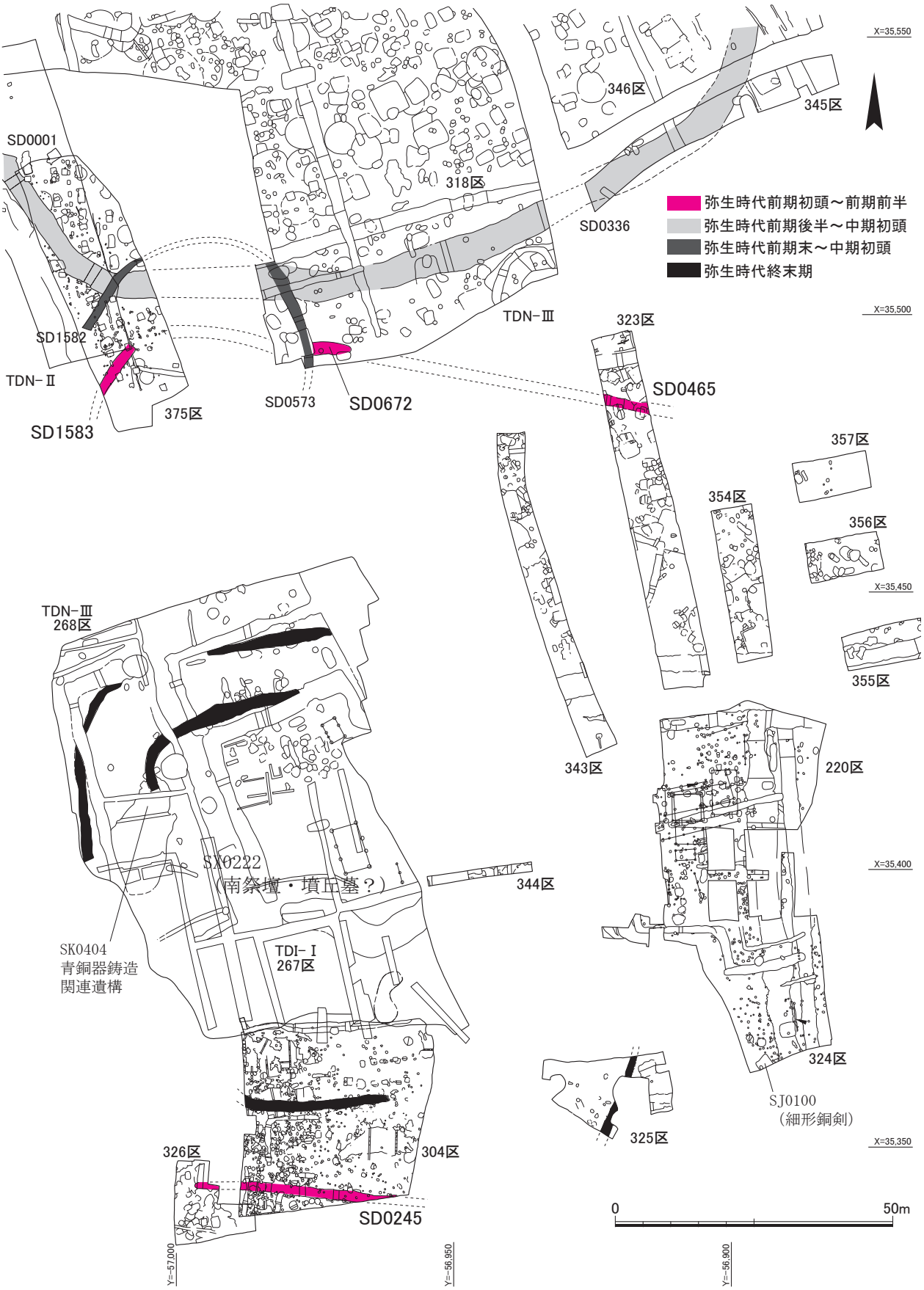


図４　遺跡南端部　遺構の分布状況（1/1,000）

１．弥生時代前期の遺構と遺物

（１）前期初頭～前期前半

吉野ヶ里遺跡では、後期旧石器時代後半～終末期の石器や、縄文時代早期、後～晩期の土器、石器が少量出土しているが（『113 集』,『211 集』)、集落の形成が本格的に始まるのは弥生時代前期初頭である。最も早く集落域が形成されたと考えられる地点は、志波屋・吉野ヶ里段丘の南端部にあたる田手一本黒木地区Ⅰ区である。304・326 調査区で検出された SD0245 溝は、残存する幅 1.86m、深さ 0.9m で、出土土器から弥生時代前期初頭に掘削され、前期前半まで機能していたと考えられる（『173 集』,『211 集』)。SD0245 溝の周囲では、田手二本黒木地区Ⅲ区 323 調査区の SD0465 溝、同地区 318 調査区の SD0672 溝、田手二本黒木地区Ⅱ区 375 調査区の SD1583 溝など、小規模な溝が複数箇所で展開している。未掘の SD0672 溝を除き、これらの溝はいずれも幅や深さが同程度で、断面逆台形または U 字形を呈しており（図 5)、埋土から前期初頭～前期前半の土器が出土している（図 6,7)。このことから、これらの断片的で小規模な溝は、接続して一連の環壕となる可能性がある。もし環壕であると仮定すれば、規模は南北約 150m、東西約 100m 以上と復元される。ただし、この溝跡の周辺からはこれまで前期初頭～前期前半に属する遺構が確認されておらず、出土遺物も乏しいことから、集落の実態はほとんど明らかになっていない。

前期初頭～前期前半の溝跡から出土した遺物としては、土器の他に少量の石器がある（図 8)。SD0245 溝跡からは打製石鏃や三角形石庖丁（1,2）が出土しているほか、SD1583 溝跡からは小型の両刃石斧や石鎌片（3,4）が出土している。このほか、包含層出土ではあるが、田手一本黒木地区Ⅱ区 79 調査区（『100 集』：222 調査区北端部と重複）で擦切孔石庖丁（5）が出土しており（『222 集』)、前期初頭～前期前半に属する可能性がある。器種構成としては断片的であるが、集落開始期の段階から大陸系磨製石器群が出現している。

前期前半の集落としては、上述した前期初頭の溝（環壕？）が継続していたと考えられるが、溝跡の周辺には同時期の遺構が確認されておらず、出土遺物も乏しいことから、当該期の集落の詳しい様相は

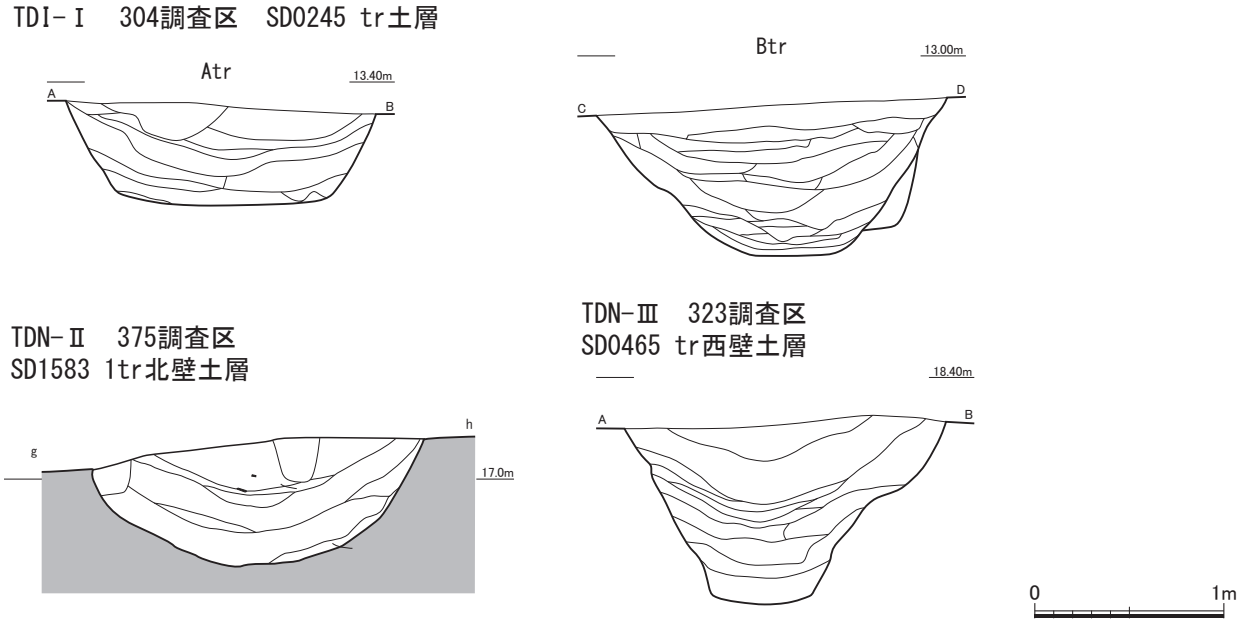


図 5　前期初頭～前期前半の溝土層断面（1/40）

304区　SD0245

375区　SD1583

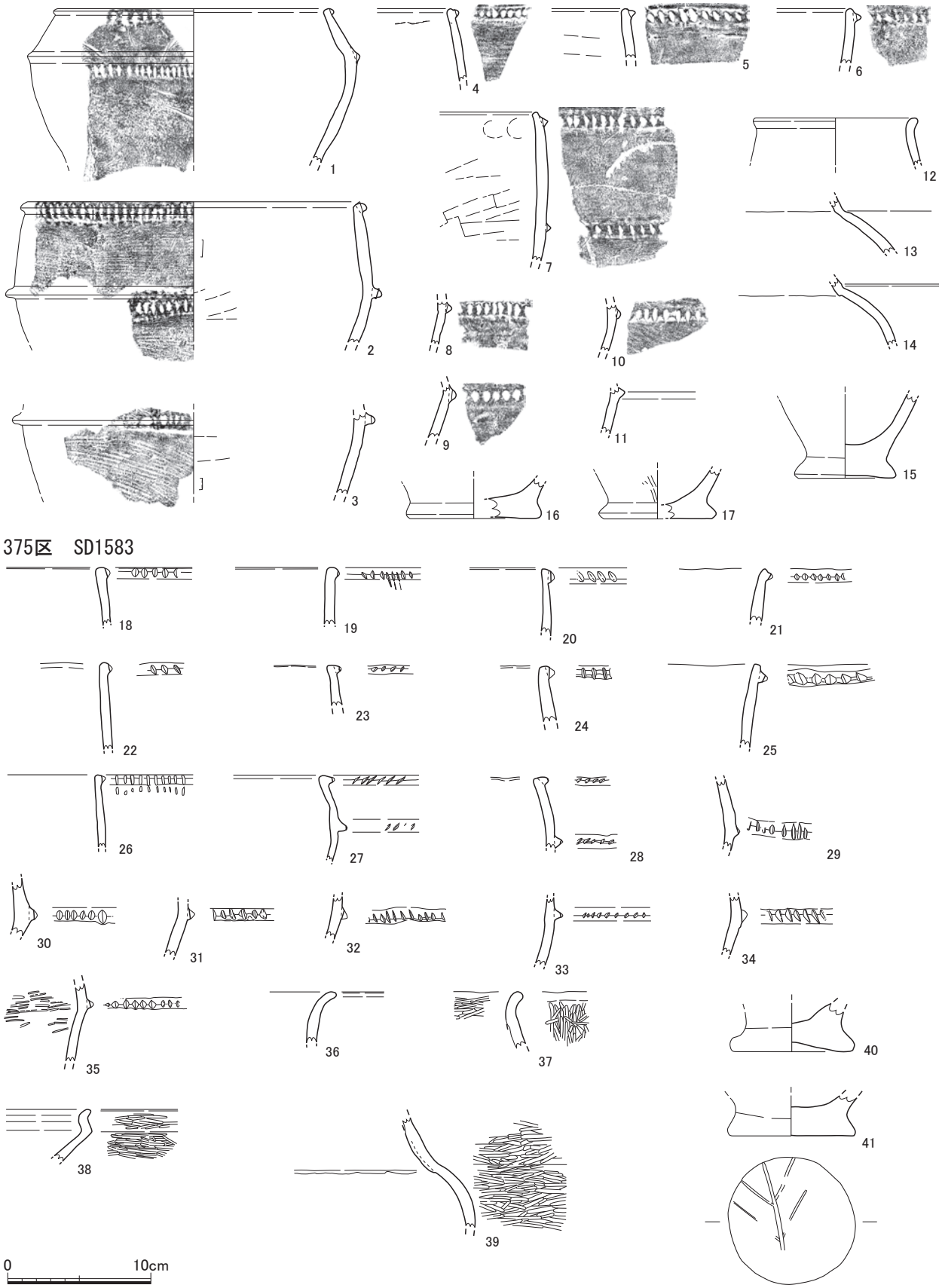
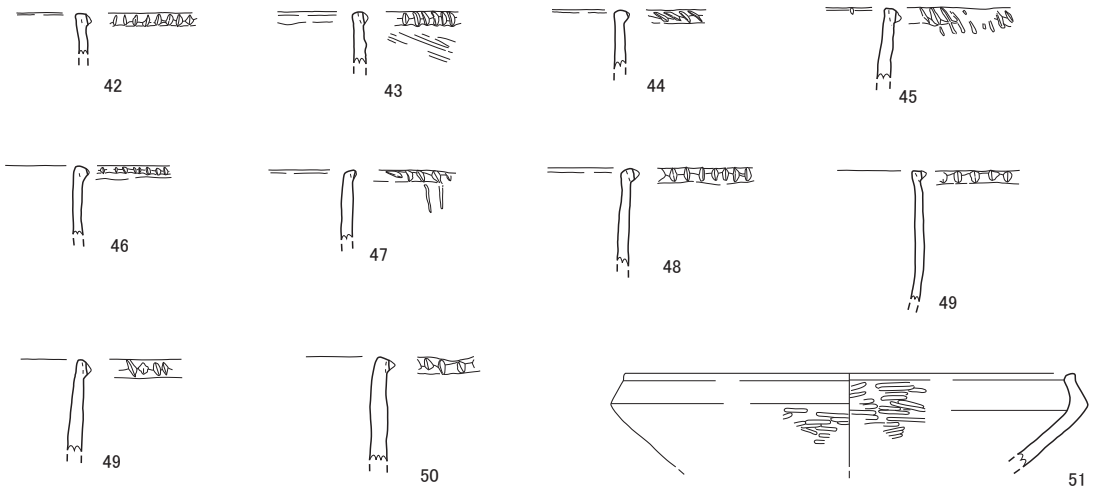


図６　前期初頭～前期前半の溝跡出土土器１（1/4）

318区　SD0672



323区　SD0465

図７　前期初頭～前期前半の溝跡出土土器２（1/4）

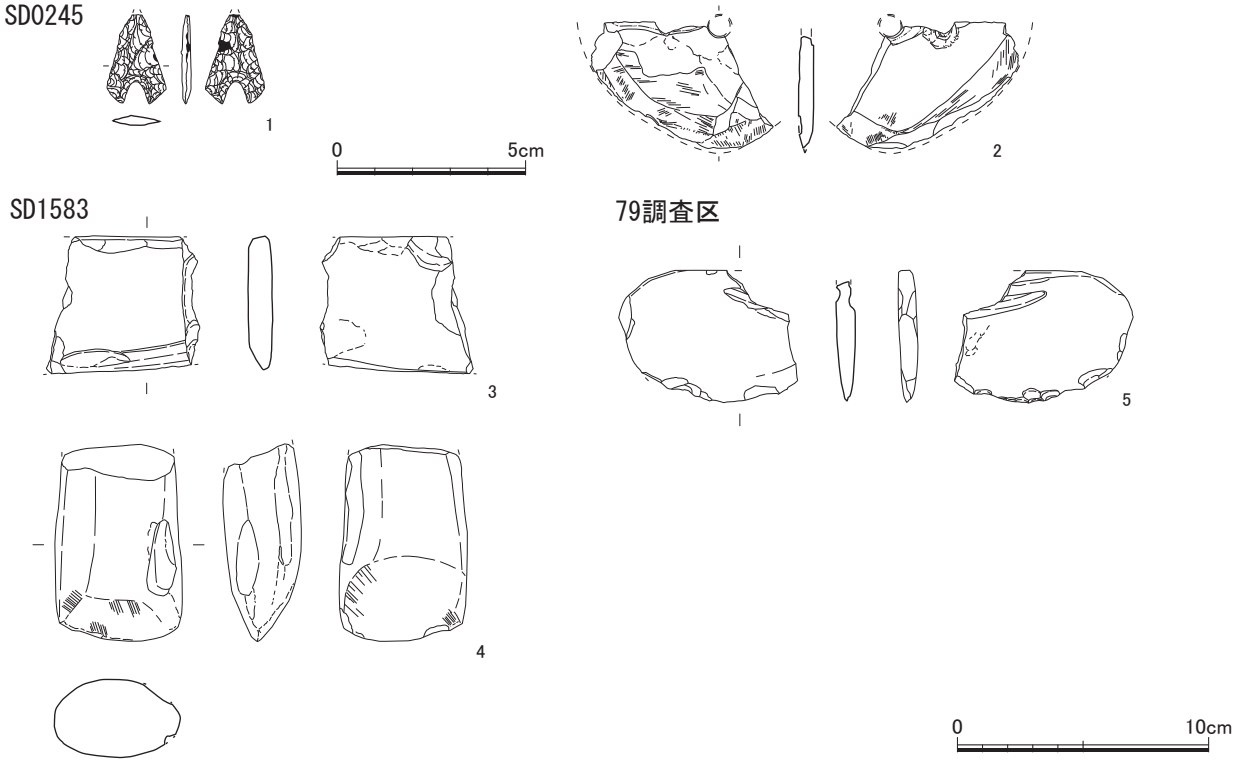


図８　遺跡南部　前期初頭～前期前半の石器（1/2,1/3）

明らかでない。この他の前期前半の集落遺構としては、吉野ヶ里地区Ⅴ区や遺跡北部の志波屋四の坪地区で竪穴建物跡や貯蔵穴が検出されているが、数は少なく、小規模な集落であったと考えられる。なお、前期初頭～前期前半の明確な墳墓は確認されておらず、当該期の墓地の実態は明らかでない。

遺跡南部北側に位置する吉野ヶ里地区Ⅴ区 SH0808 竪穴建物跡は、径 4.27m の平面円形で、内部構造は中央土坑とその両脇に一対の柱穴がある、いわゆる「松菊里型住居」に近い形態である。さらに、竪穴壁に沿って柱穴とみられる複数の土坑が巡っている（図 9）。

遺跡北部では、志波屋四の坪地区Ⅰ・Ⅱ区で集落遺構が少数展開している。Ⅱ区 395 調査区の SH2203 竪穴建物跡は径 5.6m の平面円形で、内部からは少量の土器片や石器とともに炭化した木材や焼土が大量に検出されたことから、いわゆる焼失住居跡と考えられる（図 11）（『211 集』）。石器は安山岩製の打製石鏃やスクレイパー、石核、剥片とともに、ほぼ完形の太形蛤刃石斧が床面直上から出土している（図 12-5）。Ⅰ区では、出土土器から前期前半代に属するとみられる円形竪穴建物と貯蔵穴が 1 基ずつ展開している。SH0509 建物跡は径約 4m の平面円形で、中央土坑を有する。SK0555 土坑は径約 1.85m の平面不整円形で、深さ 1.1m、断面形は一部袋状を呈する（図 11）。なお、周辺には同時期の遺構が分布していないことから、集落の詳細は明らかでない。このほか、遺跡北端部の志波屋六の坪（甲）遺跡で、前期前半とみられる竪穴建物跡が 1 棟（SH0045）確認されている（『207 集』）。

（２）前期後半～前期末

前期後半になると、遺跡全体として集落の範囲や規模が拡大している。主に集落が展開しているのは、遺跡南部の田手二本黒木地区Ⅱ・Ⅲ区、遺跡中央部の吉野ヶ里地区Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区、遺跡北部の志波屋三の坪（乙）地区、志波屋四の坪地区Ⅰ・Ⅱ区で、前期末には墓地が本格的に出現、展開するようになる。

前期後半～前期末の遺跡南部

前期後半代の遺構が最も多く確認されている遺跡南部では、田手二本黒木地区Ⅱ区で SD0001 環壕が前期前半新相（板付Ⅱａ式期）に掘削され、東側に隣接する田手二本黒木地区Ⅲ区 SD0336 と連続して大規模な環壕となる（図 14）。SD0001・SD0336 環壕の範囲について、これまで東・西・南は判明しているが、北は壕自体が確認されていないことから、現時点では中期の壕である SD1801 壕跡に重複して

図９　吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区・吉野ヶ里地区Ⅴ区東部　遺構の分布状況（1/1,250）

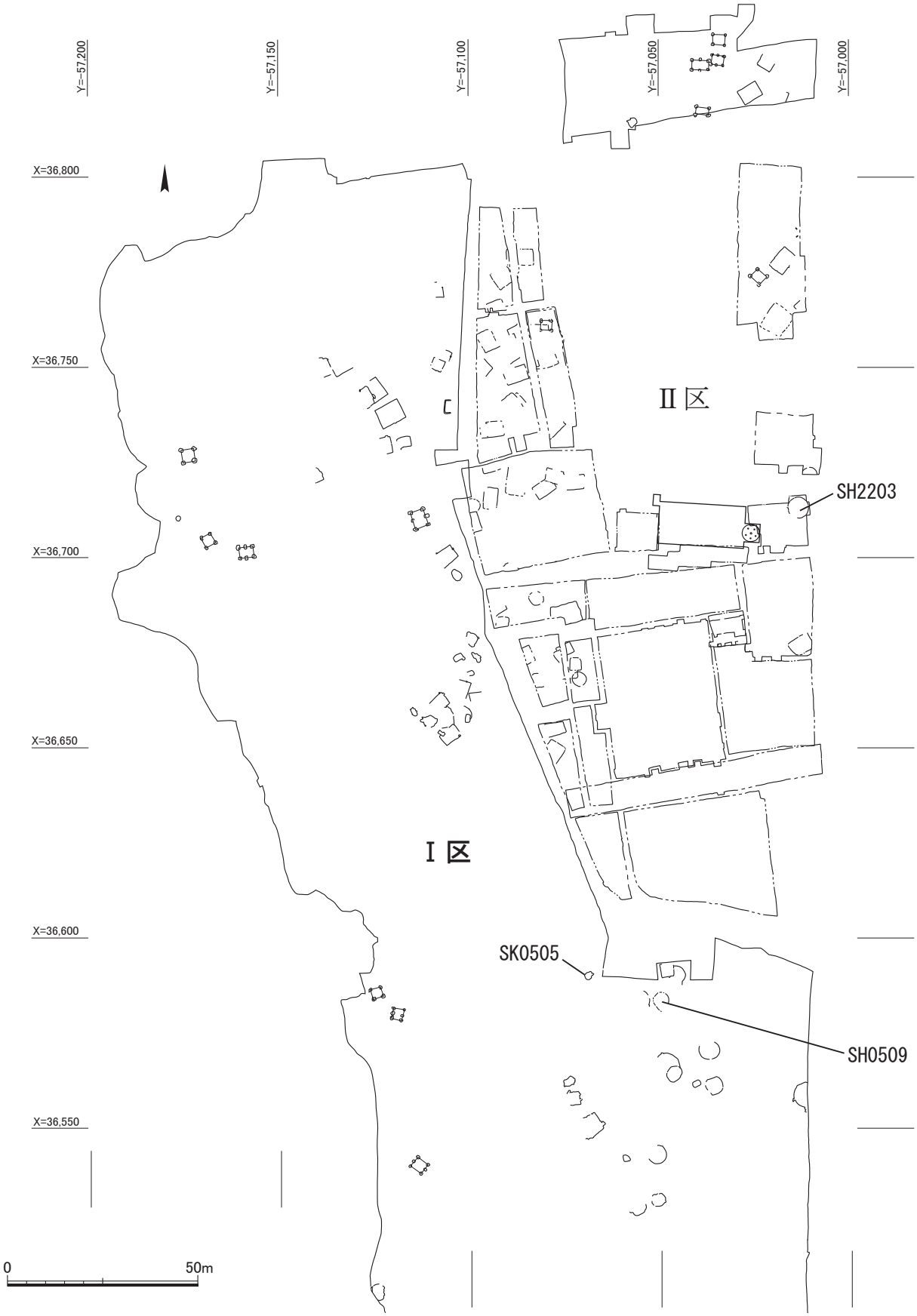


図 10　志波屋四の坪地区Ⅰ区北部・Ⅱ区　弥生時代集落遺構の分布略図（前期初頭～前期前半）（1/1,500）

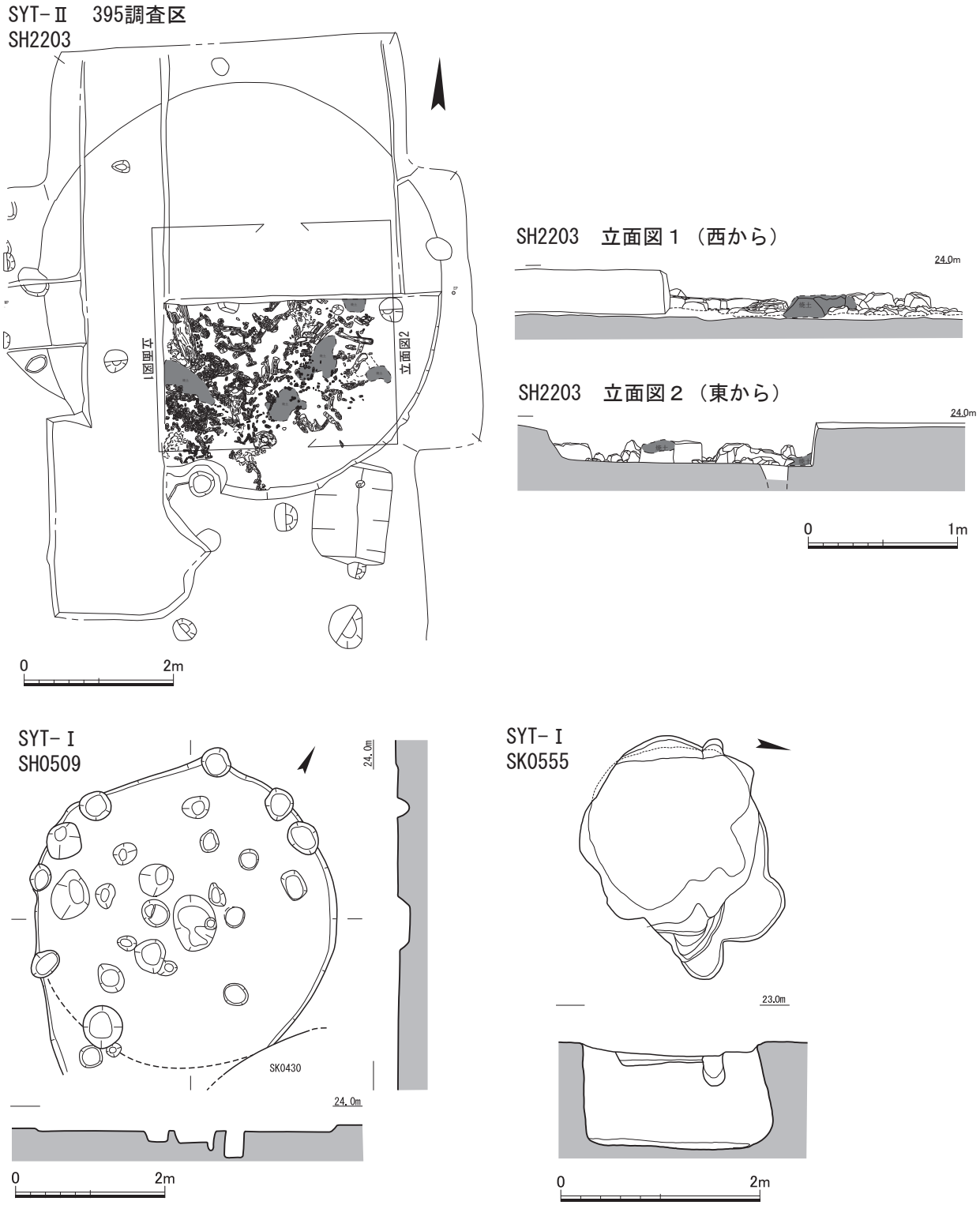


図 11　志波屋四の坪地区　弥生時代前期初頭～前期前半の遺構（1/80,1/60,1/40）

いた可能性がある（『207 集』）。そのように仮定すると、SD0001・SD0336 環壕の規模は南北約 180m、東西約 150m で、取り囲まれる面積は約 2ha 以上と推定される。出土土器や遺構の切り合い関係から、SD0001・SD0336 環壕は中期初頭には埋没したと考えられる。なお、SD0001 環壕出土土器の層位的な位置づけについては過去の報告（中野 2005：『163 集』）に拠る。

このほか、上述した SD0001・SD0336 環壕の周囲に、径 20 ～ 30m 程度の小規模な環壕が 3 箇所で

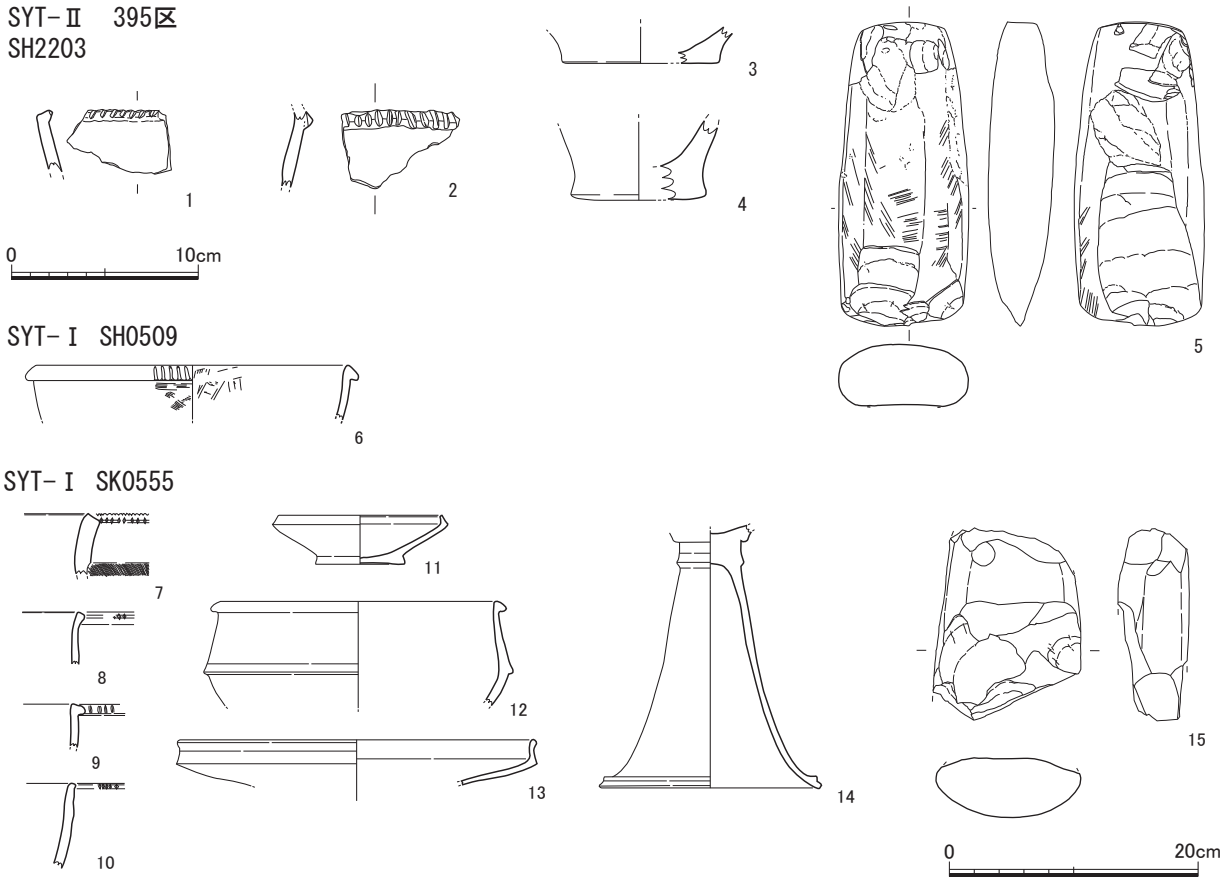


図 12　志波屋四の坪地区　前期初頭～前期前半の土器と石器（1/4,1/6）

確認されている（図 14）。中期の壕跡である SD1801 の北部に位置する吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区 SD2393 環壕は、推定径約 20m の平面円形で、北側に掘り残しによる幅約 2m の陸橋部を有する。削平のため残存状況は良くないが、残存する幅 0.6 ～ 1.0m、深さ 0.86m で、断面形は急角度の V 字形を呈する。ただし、埋土からは前期の土器片が少量出土しているのみで、詳しい時期は不明である。また、SD2393 環壕跡の内側や近辺からは同時期の遺構は確認されていない。

SD0001・SD0336 環壕が展開する田手二本黒木地区と田手川を挟んだ東側に位置する杉籠地区Ⅲ区では、SD501 環壕跡が確認されている。SD501 は標高約 18m の低丘陵上に位置しており、平面円形で径約 25m と推定され、断面形は底面が平坦な V 字形を呈する。SD501 環壕は中期初頭には埋没したとみられ、その後は壕跡の内外に中期前半～中期後半を主体とする甕棺墓 30 基程度が展開するようになるが、環壕内側から貯蔵穴とみられる土坑も検出されている（『211 集』）。これらのことから、上記の 2 つの小規模環壕は、貯蔵穴を取り囲むための専用の環壕として前期後半代に機能していたとみられる。さらに、SD0001・SD0336 環壕の南西部分で重複する田手二本黒木地区Ⅱ区 375 調査区 SD1582 とⅢ区 318 調査区 SD0573 は、接続して一連の環壕となる可能性がある。遺構の切り合い関係や出土土器からみて、SD1582・SD0573 溝は SD0001 環壕を切って前期末頃に掘削され、中期初頭に埋没した短期間の溝（環壕）と考えられる（『222 集』）。

以上のことから、前期後半代の遺跡南部では、大規模な環壕 1 条（SD0001・SD0336）と、その周辺に小規模な環壕 3 条が同時期に存在している状況がうかがえる。これらは、居住域と貯蔵域とを区別するといった集落内部での機能差が生じていた可能性を示すと考えられるが、遺構の正確な範囲や内部

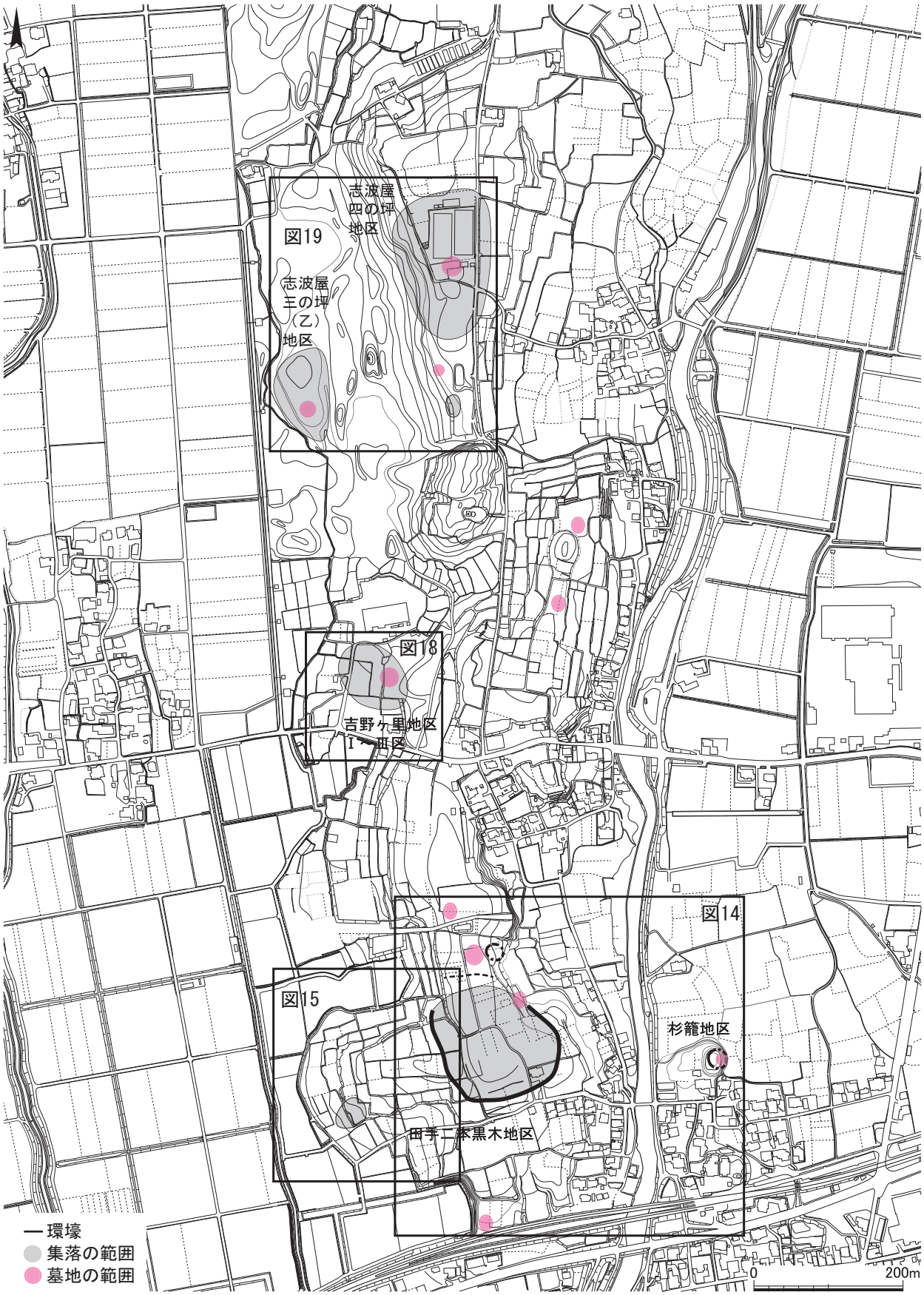


図 13　前期後半～前期末の集落と墓地（1/7,500）（※墓地は前期末～中期初頭も含む）

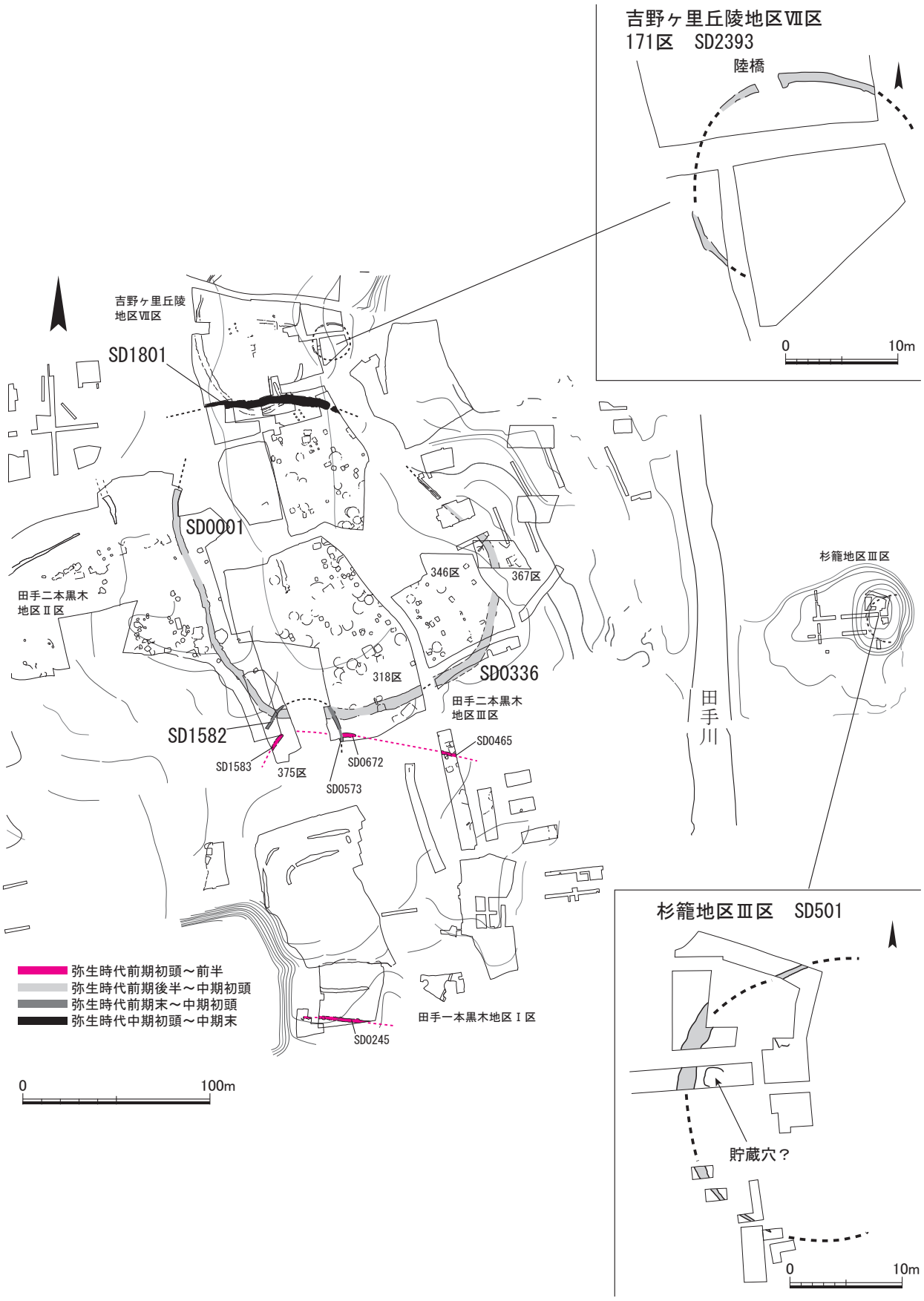
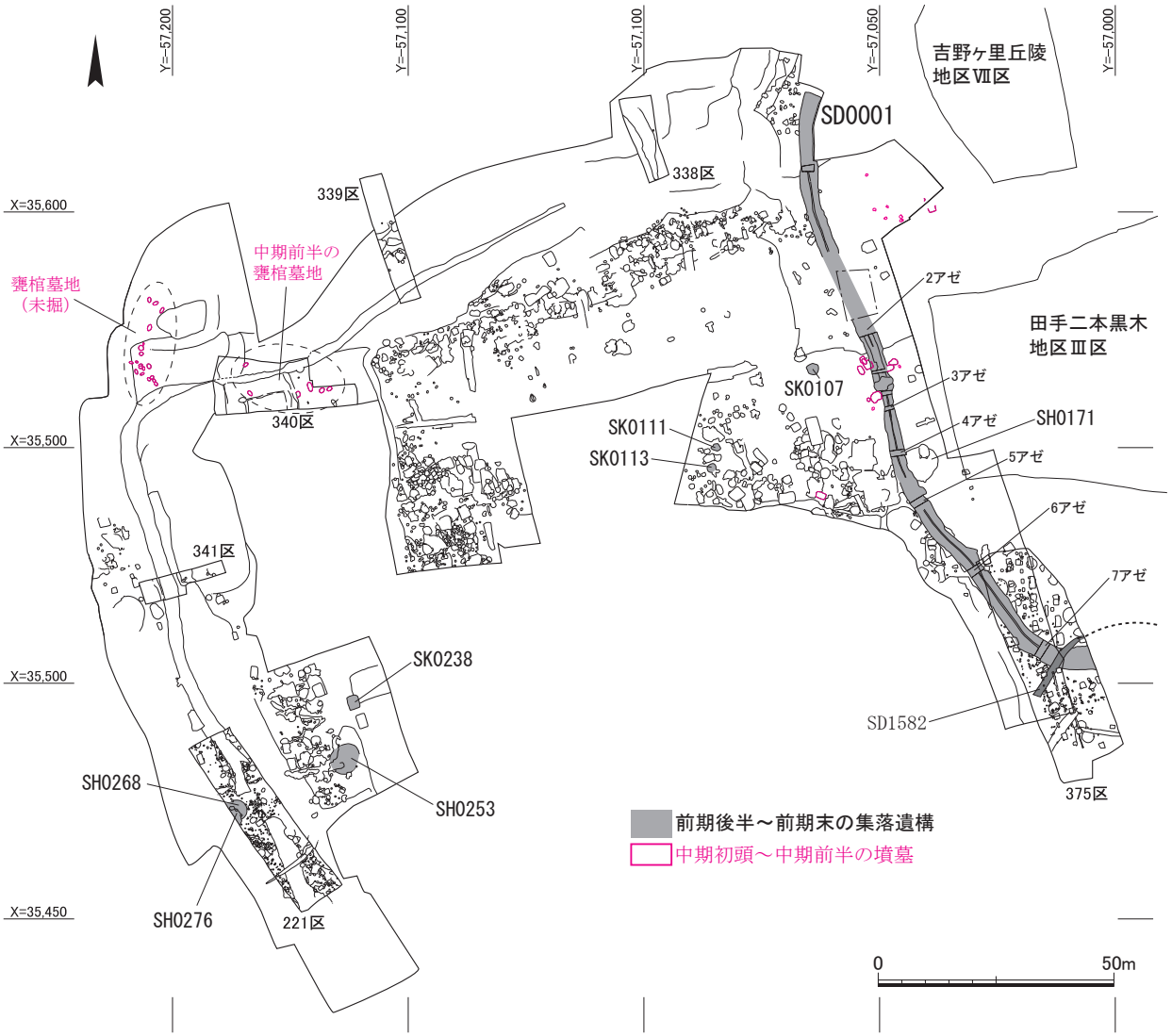
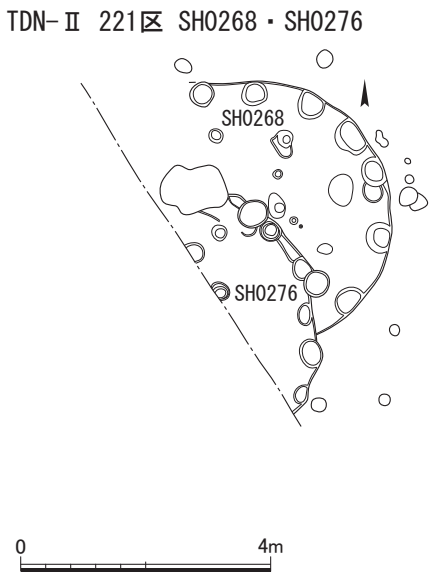


図 14　遺跡南部　遺構の分布状況（1/3,000,1/1,500）





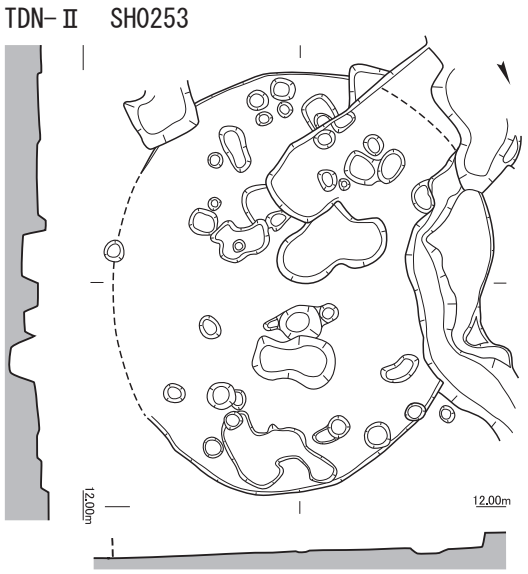


図 15　田手二本黒木地区Ⅱ区　前期後半～前期末の遺構の分布（1/1,500）・前期後半代の竪穴建物跡（1/120）

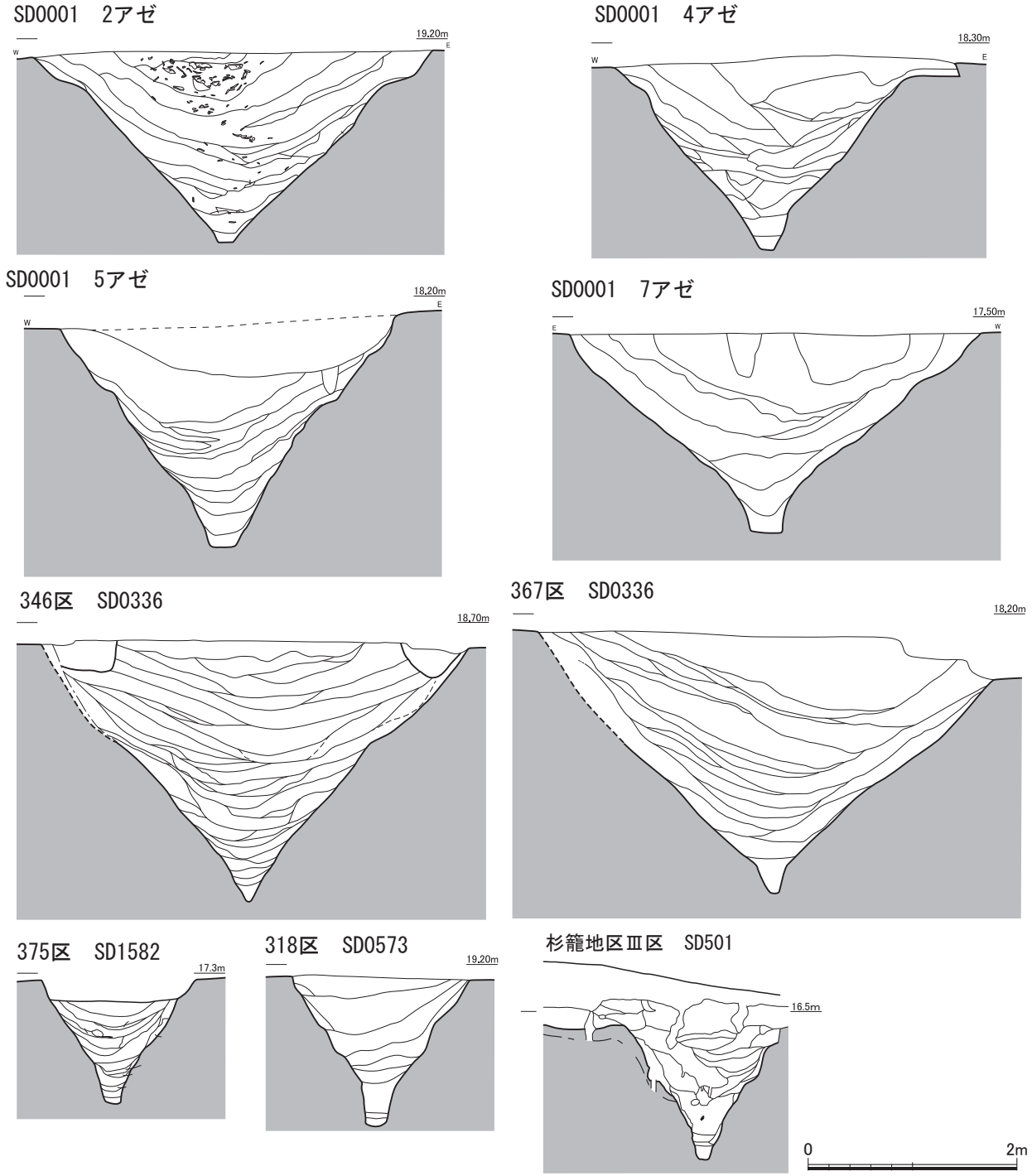


図 16　遺跡南部　前期後半代の環壕土層断面（1/60）

構造等については不明な点も多く、今後さらに詳しい調査が必要である。

SD0001・SD0336 環壕跡の内外には前期後半代の円形竪穴建物や貯蔵穴が分布しており、遺跡南部における中心的な集落域を形成している。円形竪穴建物跡の構造は、中央土坑とその両脇に一対の主柱穴を持つ、いわゆる松菊里型住居と呼ばれるものが見られる（図 17）。

環壕と集落との関係をみると、環壕の内側では、円形竪穴建物 4 棟（316 調査区 SH2407・SH2414、318 調査区 SH0361・SH0368）が環壕の中心付近に分布しており、その周囲に平面長方形の貯蔵穴とみられる土坑が複数展開している。環壕の外側では、SD0001 西側の段丘上面にあたる田手二本黒木地

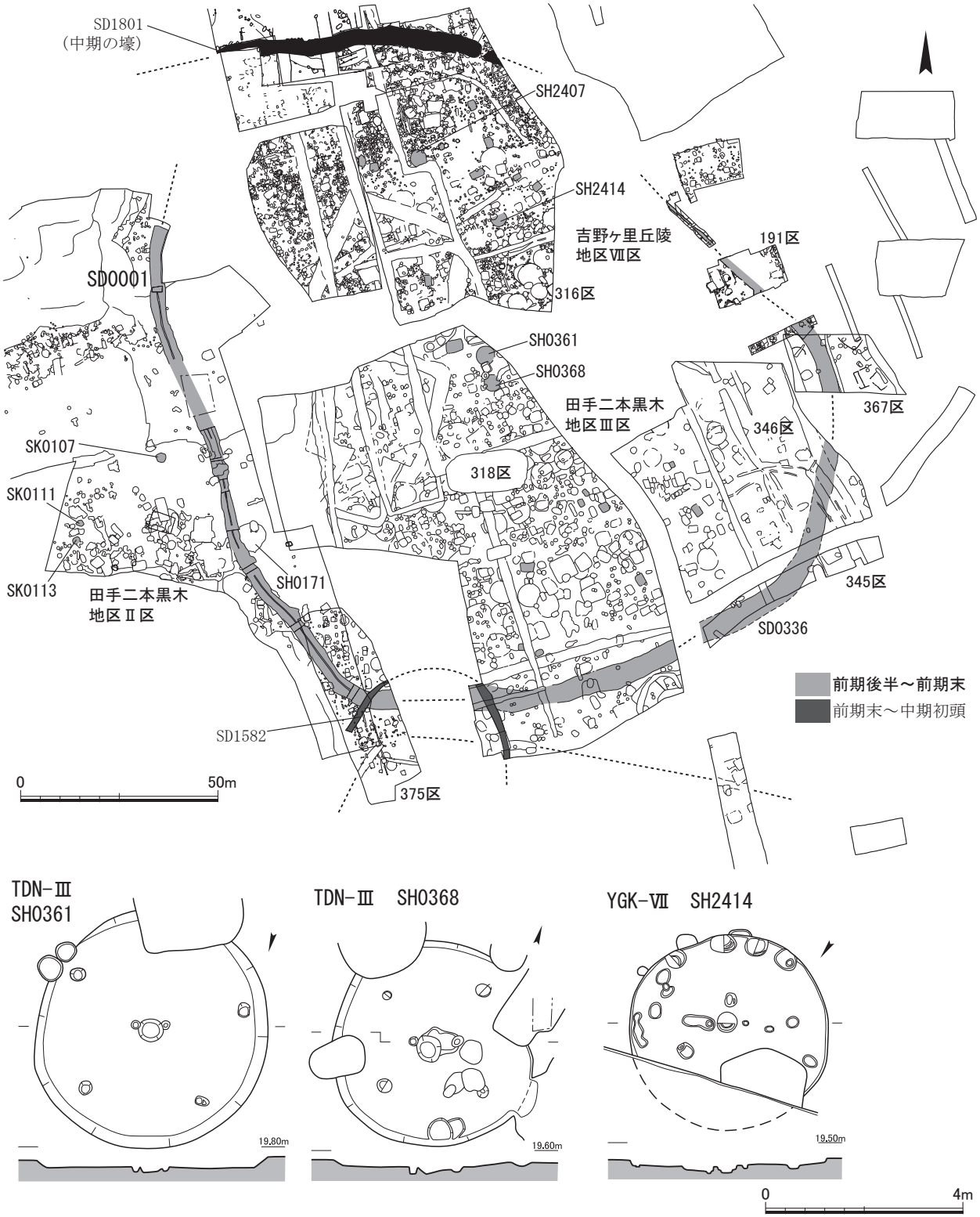


図 17　田手二本黒木地区Ⅲ区・吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区　前期の遺構分布状況（1/1,500）・前期後半代の竪穴建物跡（1/120）

区Ⅱ区南西の 221 調査区とその周辺に、前期後半代の竪穴建物（SH0253）や貯蔵穴とみられる土坑が展開している。遺構の削平や重複等により遺物が混在していることから、前期後半代と判断できる遺構の数は多くない。なお、SH0253 建物跡は径 6.6m の平面楕円形で、同時期の他の竪穴建物に比べてやや規模が大きい。また、田手二本黒木地区Ⅱ区東部の SH0171 円形竪穴建物跡は、SD0001 環壕跡との

切合関係が不明だが、前期に属する可能性がある。このほかにも、Ⅱ区を中心に前期後半代の土坑が複数展開しており、貯蔵穴の数はさらに多かった可能性がある。

このほか、吉野ヶ里遺跡発掘以前に実施された圃場整備に伴う調査で、Ⅱ区西方の丘陵裾部に位置する土坑（田手二本黒木遺跡Ⅳ区 SK402）から、前期末の土器と共伴して線刻文様を有する小型の土製支脚が出土しており注目される（三田川町 1990）。

前期後半代の出土遺物で特筆されるのは、SD0001・SD0336 環壕跡の埋土から出土した鞴の羽口、坩堝（取瓶）とみられる土製品や、鉱滓の可能性がある遺物（『222 集』）など、青銅器鋳造に関連すると考えられる遺物である。詳しくは次の中期の項で後述する。また、SD0001 環壕跡の埋土からは、シカ中手骨製の骨鏃１点（３アゼ２層上部出土）や、イノシシ・シカ・キジ・イヌ等の動物骨、スミノエガキを主体とする貝殻などの自然遺物が多く確認されている。獣骨や貝殻は特に SD0001 環壕跡の２アゼ～３アゼ間から集中的に出土している。このほか、SD0001・SD0336 環壕跡を中心に多量の石器が出土している。大陸系磨製石器は前期後半に各器種が出揃っており、なかには今山石斧や立岩石庖丁といった広域流通品も認められる。打製石器の器種は石鏃、石錐、スクレイパーで、石核や剥片・砕片も大量に出土していることから、集落内で石器製作が行われていたと考えられる。打製石器の石材は、黒曜石（伊万里市腰岳産）と安山岩（多久市鬼の鼻山産）の２種類にほぼ限られるが、この傾向は中期以降にも継続している。

前期後半～前期末の遺跡中央部・遺跡北部

遺跡中央部では、志波屋・吉野ヶ里段丘上の吉野ヶ里地区Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区で前期後半代の円形竪穴建物４棟が近い位置に展開している（図 18）。このうち、SH0420・SH0513 の２棟は出土土器の時期が前期後半～前期末であるが、SH0605・SH0606 の２棟は出土土器の時期が前期後半～中期前半とやや幅がある。前期末～中期初頭には、さらに３棟の円形竪穴建物（SH0003・SH0469・SH0692）が展開するようになる。なお、明確な貯蔵穴は確認されていないが、時期不明の土坑のなかに当該期の貯蔵穴が含まれている可能性がある。吉野ヶ里地区Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区の前期後半代の集落は、円形竪穴建物と貯蔵穴からなる小規模な集落であったとみられる。

集落に対応する墓地の様相は、遺跡中央部では明らかになっていない。前期後半に属する明確な墳墓は確認されていないが、時期不明の土坑墓・木棺墓のなかには当該期に属するものが含まれている可能性がある。前期末～中期初頭になると、竪穴建物に加えて甕棺墓地が出現する。詳細は次の中期の項で述べるが、吉野ヶ里地区Ⅰ区では甕棺墓と土坑墓からなる集塊状の墓地が展開するようになる。

遺跡北部では、志波屋三の坪（乙）地区と志波屋四の坪地区で前期後半代の集落が展開している（図 19）。志波屋三の坪（乙）地区北部では、円形竪穴建物 12 棟と貯蔵穴とみられる土坑 20 基がまとまって分布しており、他の地区に比べて当該期の集落の様相が把握しやすい（図 20）（『207 集』）。竪穴建物は平面円形で、規模は径 3.0 ～ 4.6m と比較的小型である。構造は、中央土坑とその両脇に一対の主柱穴を持つものや、四本柱のものが多い（図 21）。出土遺物が乏しいため詳細は明らかでないが、竪穴建物の時期は前期後半～前期末、貯蔵穴の時期は前期前半～前期末とやや時期幅があり、一部重複していることなどから、同時に存在した建物は数棟とみられる。貯蔵穴は、竪穴建物の近くに営まれているものと、竪穴建物からやや離れて営まれているものがある。形態は平面長方形で断面方形のものが多い。

図 18　吉野ヶ里地区Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区　遺構の分布状況（1/1,000）・前期後半代の竪穴建物跡（1/120）

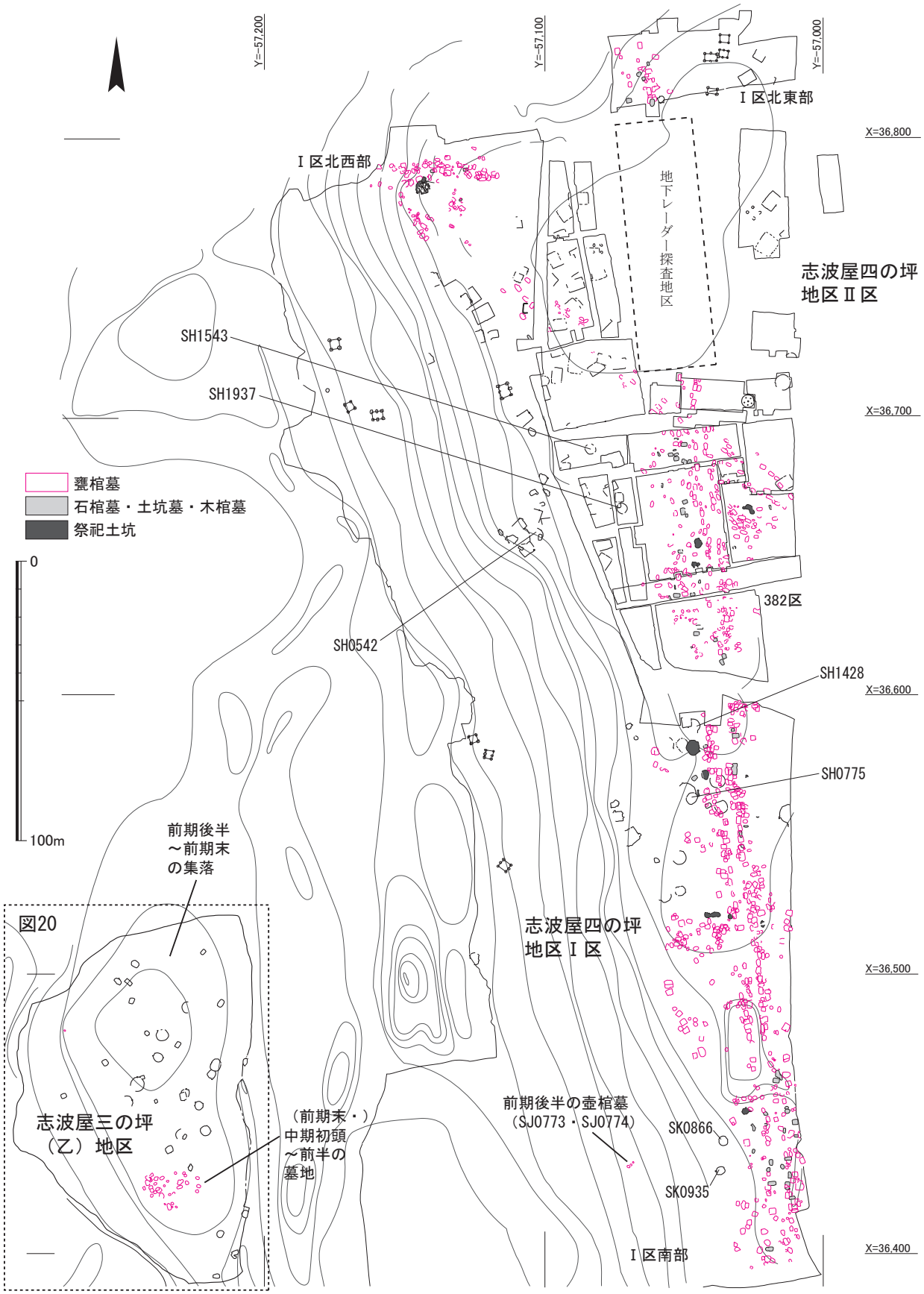


図 19　遺跡北部　志波屋三の坪（乙）地区・志波屋四の坪地区　遺構の分布略図（1/2,000）

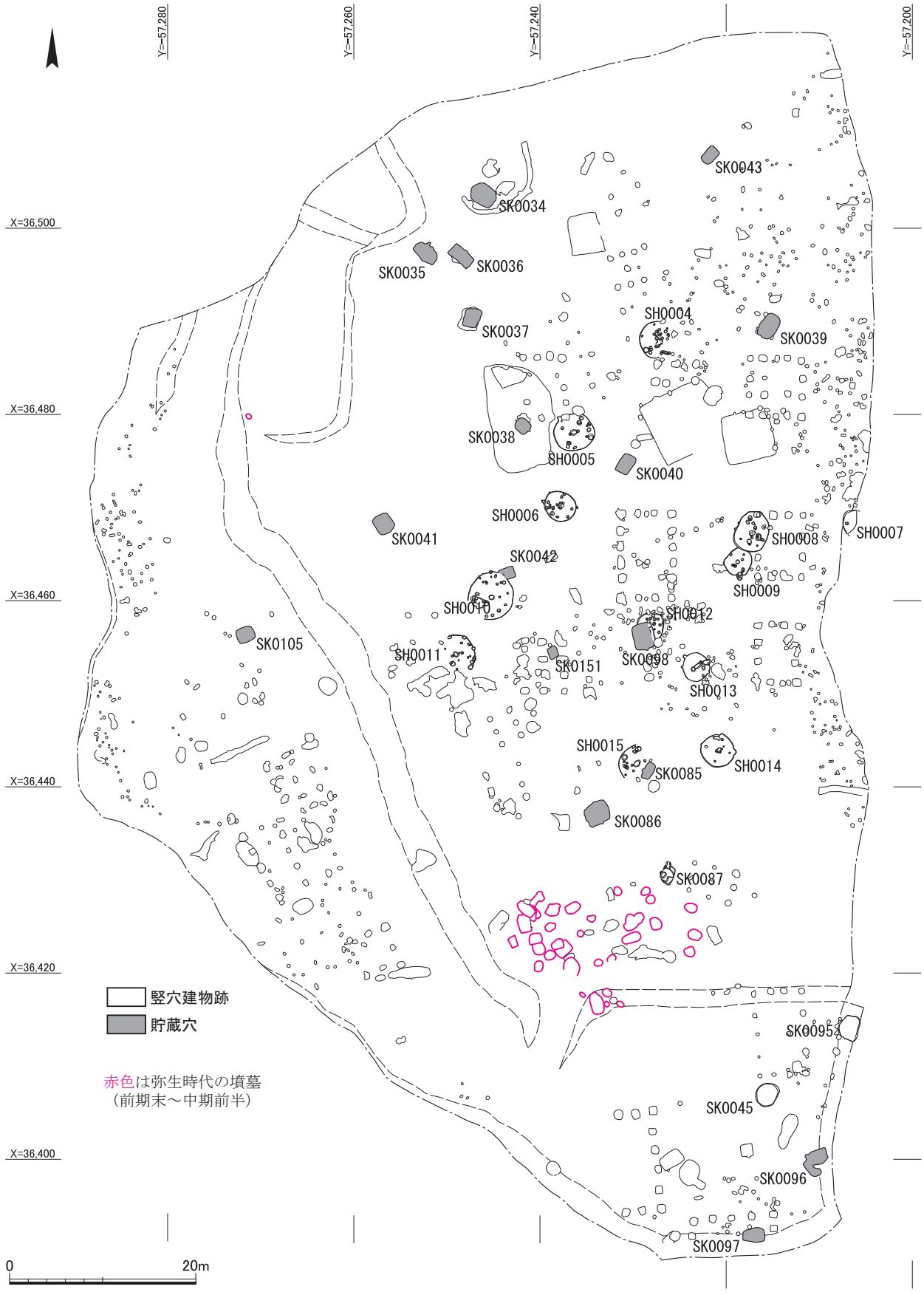


図 20　志波屋三の坪（乙）地区　前期後半～前期末の集落（1/600）

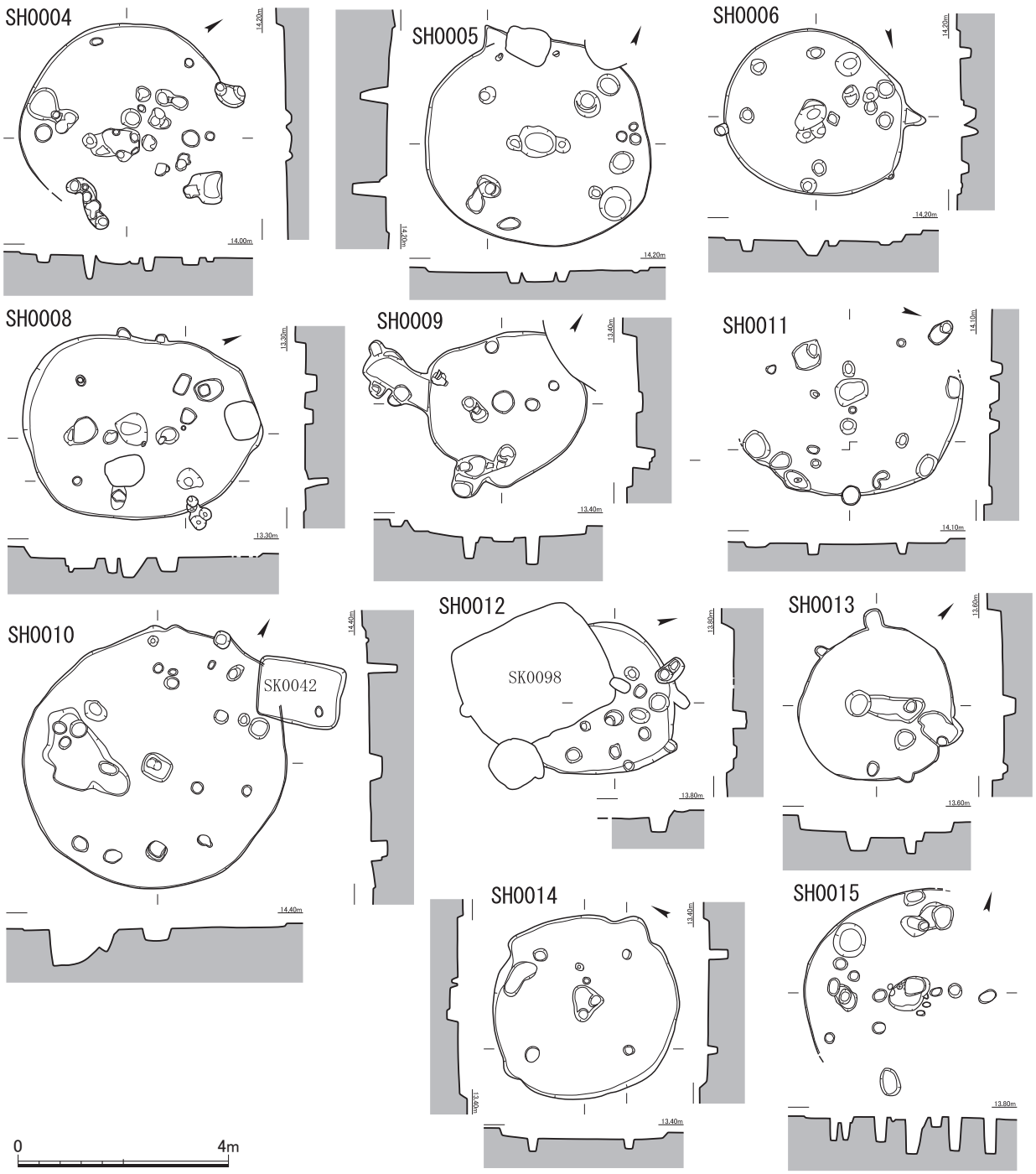


図 21　志波屋三の坪（乙）地区　前期後半代の竪穴建物跡（1/120）

なお、志波屋三の坪（乙）地区で集落が営まれたのは前期末までとみられ、その後は甕棺墓地が展開するようになる（図 27）。甕棺墓の時期は、前期末～中期初頭が 13 基、中期前半が 18 基で、中期後半には継続していない。墓地としては比較的小規模かつ短期間である。

志波屋四の坪地区Ⅰ区では、前期後半の竪穴建物跡（SH0542・SH0775・SH1428）と貯蔵穴とみられる土坑が確認されている（図 23,24）。出土遺物が乏しいため詳しい時期は不明だが、SH0501・SH0502・SH0503 の 3 棟も前期に属するとみられる。貯蔵穴とみられる土坑は、Ⅰ区 SH0542 建物の周辺にまとまって展開している。また、Ⅰ区南部では大型の円形貯蔵穴 2 基（SK0866・SK0935）が展開しているが、周囲からは同時期の竪穴建物は確認されていない。志波屋四の坪地区Ⅱ区では、370 調

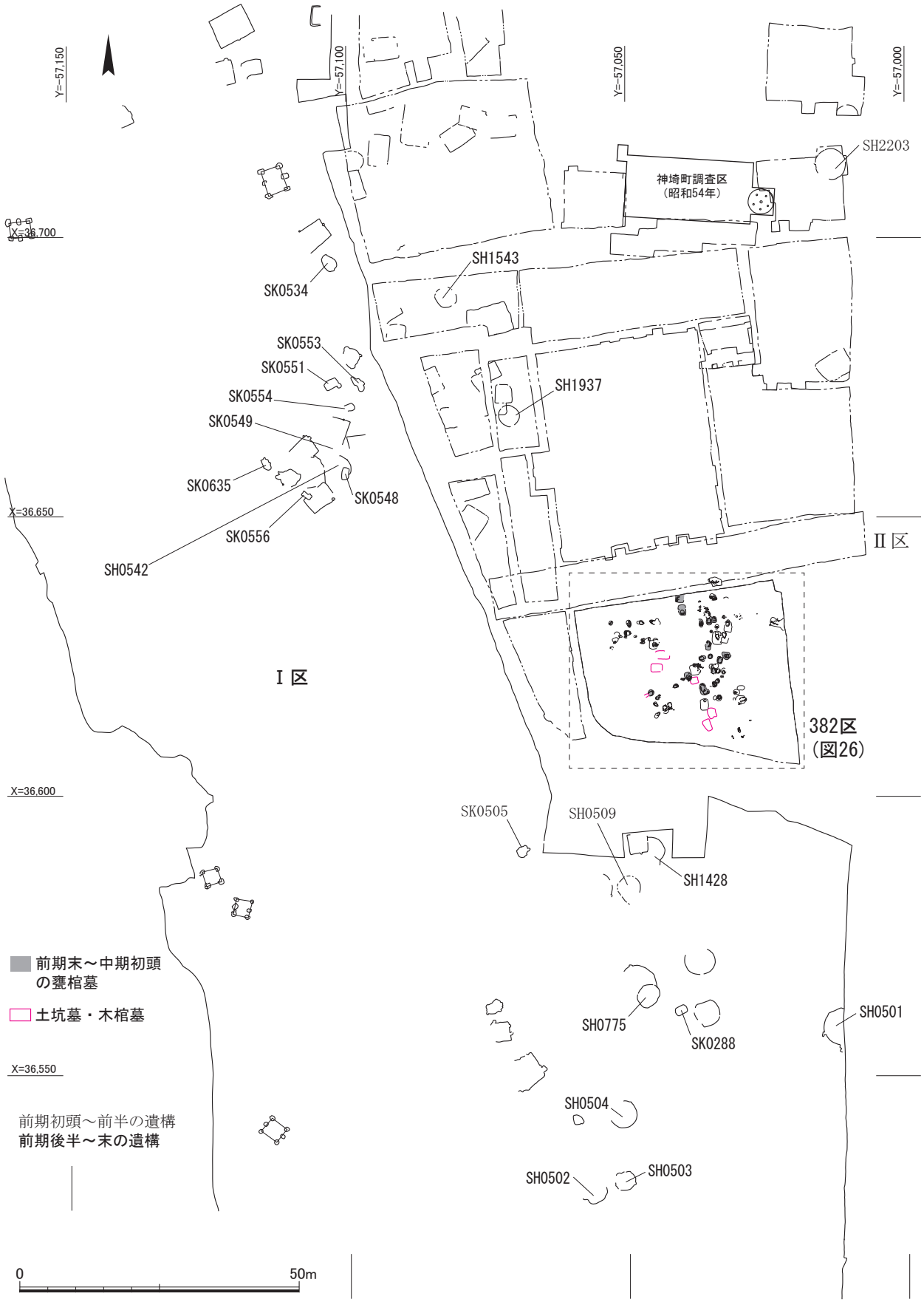


図 23　志波屋四の坪地区Ⅰ区北部・Ⅱ区　前期後半代の集落遺構の分布略図（1/1,000）

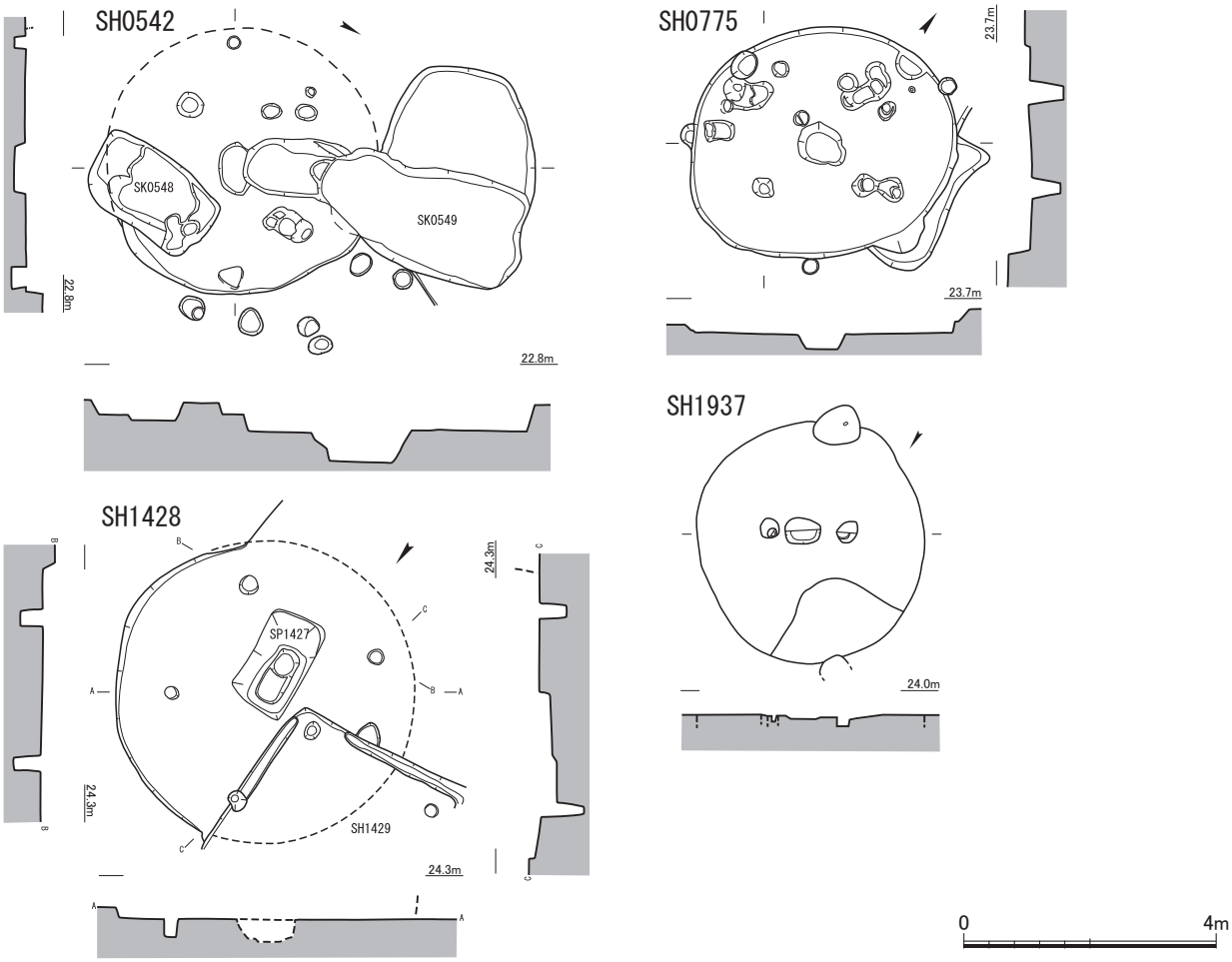


図 24　志波屋四の坪地区　前期の竪穴建物跡（1/120）

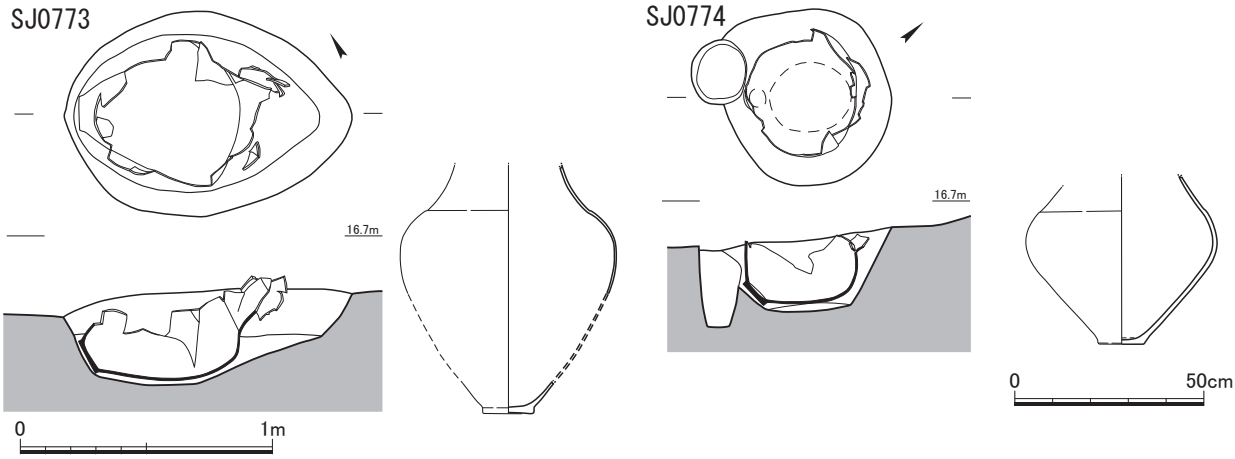


図 25　志波屋四の坪地区Ⅰ区　前期後半の壺棺墓（遺構 1/30、棺体 1/20）

査区 SH1543、381 調査区 SH1937 の円形竪穴建物跡 2 棟が前期に属するとみられ、周辺に展開する竪穴建物や貯蔵穴とともに集落が形成されていたと考えられる。

なお、志波屋四の坪地区Ⅱ区では、神埼町教育委員会が昭和 54（1979）年に発掘調査を行った調査区（四の坪遺跡）にて、中央土坑とその周囲に 5 本の柱穴を有する円形竪穴建物跡が 1 棟検出されており（神埼町 1979）（図 23）、前期に属する可能性がある。このほか、Ⅰ区では未報告の土坑もあり、貯蔵穴の数はさらに増えると見込まれる。

図 26　志波屋四の坪地区 II 区 382 調査区　遺構の分布（1/250）・前期末～中期初頭の甕棺（1/20）

墓地の出現

遺跡北部における前期後半代の墳墓としては、志波屋四の坪地区 I 区南部で伯玄式期の壺棺墓 2 基（SJ0773・SJ0774）が確認されている（図 25）。壺棺墓 2 基は中期以降に形成される段丘上面の墳墓群からやや西側に離れた丘陵緩斜面上に位置しており、近辺には同時期の竪穴建物は展開していない（図 19）。現時点では、吉野ヶ里遺跡全体で前期後半に属する明確な墳墓はこの 2 基のみである。このほか、

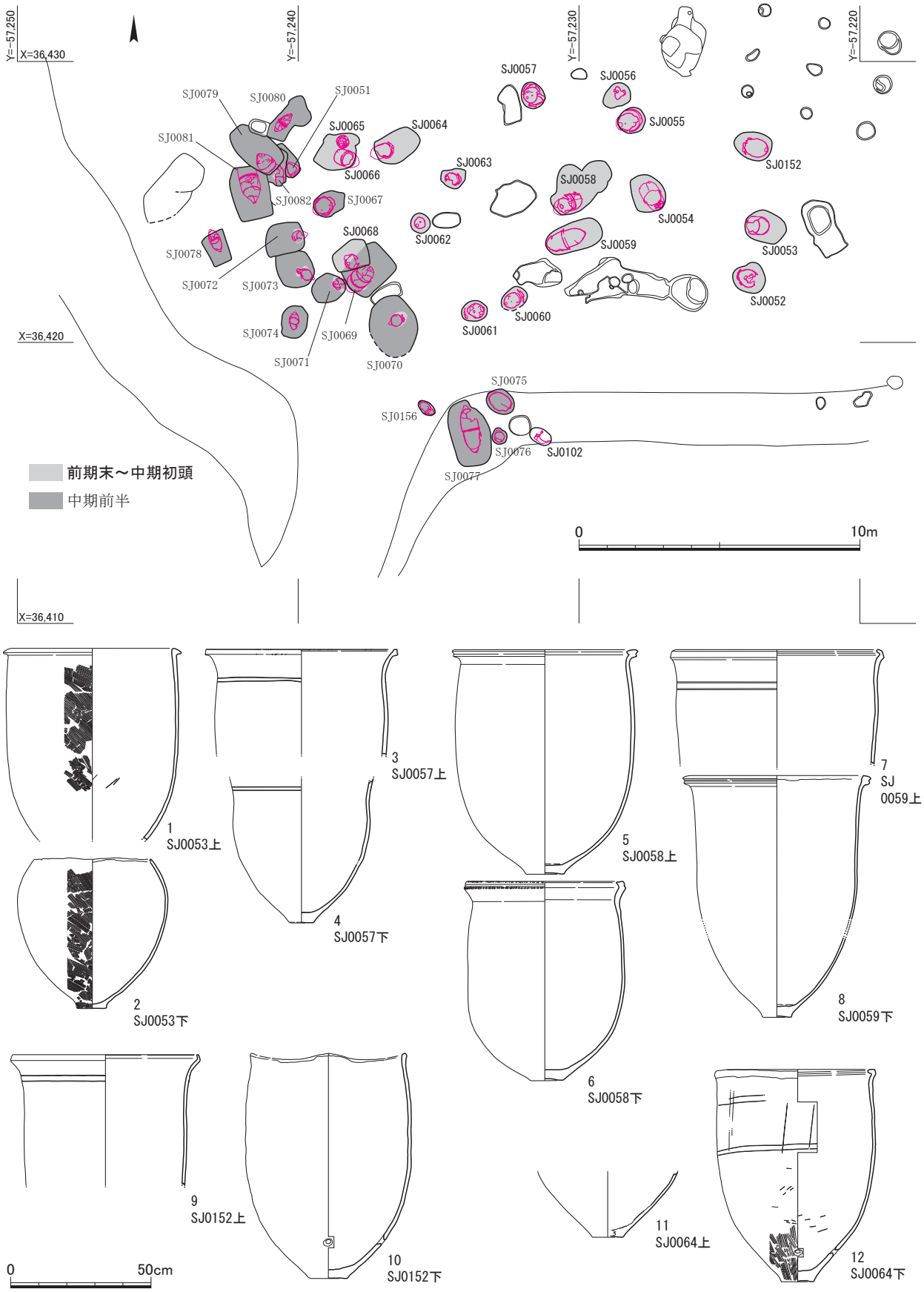


図 27　志波屋三の坪（乙）地区の甕棺墓地（1/200）・前期末～中期初頭の甕棺（1/20）

時期不明の土坑墓・木棺墓のなかには当該期に属するものが存在する可能性があるが、出土遺物が乏しいことから、前期後半の墓地の詳しい状況は明らかでない。

前期末～中期初頭になると、本区域では丘陵尾根上の志波屋四の坪地区Ⅱ区 382 調査区で甕棺墓 30 基程度からなる墓地が出現する（図 26）。甕棺墓群は一定の範囲に密集しており、いわゆる集塊状を呈している。なお、志波屋四の坪地区Ⅰ・Ⅱ区全体では、中期前半以降に 1,000 基以上の墳墓が営まれるようになり、本区域だけでなく遺跡全体の中心的な墓域となるが、前期末～中期初頭の段階では、本区域一帯における甕棺墓の分布はⅡ区 382 調査区にほぼ限られる点は注意される。前述したとおり、382 調査区の周辺では円形竪穴建物と貯蔵穴とみられる土坑からなる小規模な集落が展開していることから、志波屋三の坪（乙）地区の集落と墓地との対応状況と同様に、志波屋四の坪地区においても集落と墳墓が近接して営まれている状況がうかがえる（図 23）。

前期末～中期初頭に出現する墓地は、吉野ヶ里遺跡が所在する志波屋・吉野ヶ里段丘の各所に分散して展開している。墓地は甕棺墓 20 ～ 30 基程度と少数の土坑墓・木棺墓から構成される場合が多い。なお、「前期末～中期初頭」とした甕棺墓は、型式的に中期初頭に含まれるものが多いと思われることから、墓地の詳細については次の中期の項で詳しく述べる。

（3）弥生時代前期の調査成果と課題

吉野ヶ里遺跡の集落は、遺跡南端部の段丘上に弥生時代前期初頭から出現しているが、検出された竪穴建物跡などの遺構数は少なく、集落の詳しい構造は明らかになっていない。また、前期初頭～前期前半に展開する遺跡南端部の複数の溝跡（SD0245・SD1583・SD0672・SD0465）は、接続して一連の環壕となる可能性がある。このことは前期環壕集落の成立時期に関わる問題であり、今後さらに詳しい調査を行う必要がある。前期初頭～前期前半の出土遺物としては、夜臼式～板付Ⅰ式併行期の土器に加え、大陸系磨製石器や打製石器が少量みられる。一方、前期初頭～前期前半に属する墳墓遺構は確認されておらず、集落に対応する墓地の実態は明らかでない。

前期後半になると、集落の分布範囲や規模が拡大する。遺跡北部では、志波屋三の坪（乙）地区で低丘陵上に前期後半～前期末の円形竪穴建物跡と貯蔵穴で構成されるまとまった集落が形成されている。遺跡中央部の集落は小規模かつ分散して展開している。遺跡全体でみると、集落遺構の分布中心は遺跡南部の吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区と田手二本黒木地区Ⅱ・Ⅲ区にある。前期後半は、大規模な環壕（SD0001・SD0336）の掘削を契機として、遺跡南部の段丘上に中心的な集落が形成されていった様子がうかがえる。また、遺跡南部において大規模な環壕とともに複数の小規模な環壕が同時共存している状況は、他の遺跡には見られない大きな特徴であり、集落内で居住区域と物資保管区域を区分けするといった機能差が生じていた可能性がある。墳墓は、志波屋四の坪地区Ⅰ区で前期後半代の壺棺墓 2 基が確認されているのみで、集落に比べて時期が明確な遺構が少なく、前期後半代の墓地の詳しい状況は明らかでない。

前期末になると、集落は分布範囲や規模がさらに拡大している。前段階に引き続き、集落中心部は遺跡南部の段丘上にある。墓地は、前期末から甕棺墓が出現し、中期初頭にかけて丘陵上の各所に小規模な墓地が分散して展開するようになる（図 28）。

弥生時代前期の吉野ヶ里遺跡は、前期初頭～前期前半の集落の詳しい様相が明らかになっていないが、前期後半～前期末の集落については分布範囲やおおよその構造、内容が明らかになってきており、

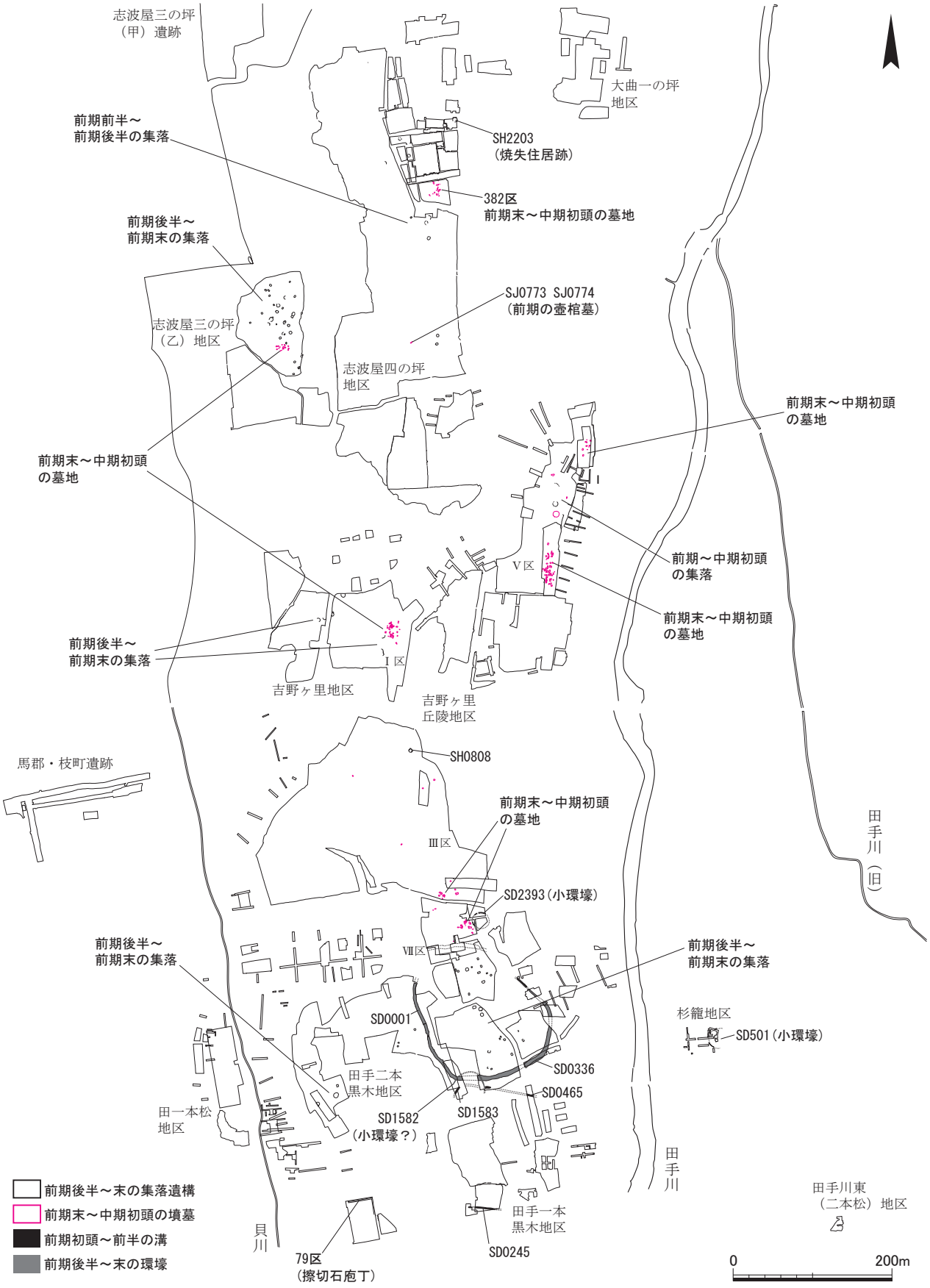


図 28　弥生時代前期　主な遺構と遺物の出土位置（1/7,000）

集落は 5 ヶ所程度に分散している。一方、前期末に甕棺墓が出現する以前の前期の墳墓については不明な点が多く、集落に対応する墓地の実態は把握できていない。また、手工業生産に係る工房跡の有無の確認や、集落に付随する水田、畑などの食糧生産域の解明なども今後の大きな課題である。特に、前期後半代の SD0001・SD0336 環壕埋土から青銅器鋳造に関連するとされる遺物（鞴の羽口、取瓶、鉱滓？）が出土しており、青銅器生産が前期に遡る可能性を示す資料としてこれまで取り扱われてきたが、前期の遺構から鋳型が出土していないという事実は重要である。先述した鋳造関連遺物とされる土製品等の再検討も含め、今後さらに慎重な検討が必要である。

２．弥生時代中期の遺構と遺物

（１）中期初頭～中期前半

弥生時代前期末～中期初頭には、志波屋・吉野ヶ里段丘上の各所に集落と墓地が展開するようになる。以下では、前期末 / 中期初頭～中期前半の墓地の様相と、周辺の集落との関係についてみていく。

遺跡南部の集落と墓地

遺跡南部では、主に田手一本黒木地区Ⅰ区、田手二本黒木地区Ⅱ・Ⅲ区、杉籠地区Ⅲ区、吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区・Ⅲ区で前期末 / 中期初頭～中期前半の墓地と集落が展開している。

遺跡南端部の田手一本黒木地区Ⅰ区 326 調査区では、中期初頭～中期前半古相（城ノ越式～汲田式古段階）の甕棺墓 27 基からなる墓地が展開している（図 32）。保存目的調査のため墓地は未完掘であるが、大型棺だけでなく中・小型棺を含み、狭い範囲に密集して埋葬されている（『211 集』・『222 集』）。326 調査区の周辺は未調査のため明らかでないが、墓地は周辺にもさらに広がっている可能性がある。なお、326 調査区の周辺には中期初頭～中期前半の集落遺構がほとんど展開しておらず、わずかに 304 調査区北東で中期前半の貯蔵穴とみられる土坑が 1 基（SK0248）確認されている程度である（『211 集』）。そのため、326 調査区の甕棺墓地に対応するような集落の実態は明らかでない。なお、墓地に隣接して中期前半に築造されたとみられる SX0222 盛土遺構（南祭壇・墳丘墓？）については後述する。

副葬品を伴う中期初頭の墳墓としては、遺跡南東部の田手一本黒木地区Ⅰ区 324 調査区 SJ0100 甕棺墓が特筆される（図 33）。SJ0100 は大型甕の複式棺で、人骨は遺存していなかったが、棺内から出土した完形の細形銅剣には部分的に絹布の付着が認められる。なお、SJ0100 の周囲には小型棺 1 基が営まれているのみで、他の甕棺墓群や集落とはやや離れた場所に単独で営まれた可能性が高い（『172 集』、『211 集』）。現在のところ、SJ0100 は吉野ヶ里集落全体で最初に造営された首長墓と位置づけられる。

遺跡南部に展開する中心的な集落域（田手二本黒木地区Ⅱ・Ⅲ区、吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区）では、前期後半代に機能した環壕が中期初頭に埋没したとみられる。遺跡南部に展開する SD0001・SD0336 環壕跡は、埋土上層から城ノ越式の土器が出土しているほか、吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区 191 調査区と田手二本黒木地区Ⅱ区東部の 2 箇所で、環壕跡の上面を切り込んで城ノ越式～汲田式期の甕棺墓地が造営されている（『222 集』）。

田手二本黒木地区Ⅱ区東部では、SD0001 環壕跡の上面とその近辺に中期初頭～中期前半の小規模な甕棺墓地が形成されている（図 34）。墳墓は、SD0001 環壕の 2 ～ 3 アゼ間付近に 9 基と、その約 30m 北側に 8 基が、それぞれ分かれて展開している。北側の 8 基は、後世の削平により墓坑が消滅しているものも多い。なお、中央付近の SJ0158 甕棺墓は内面に布片（絹？）が付着しており特筆される。

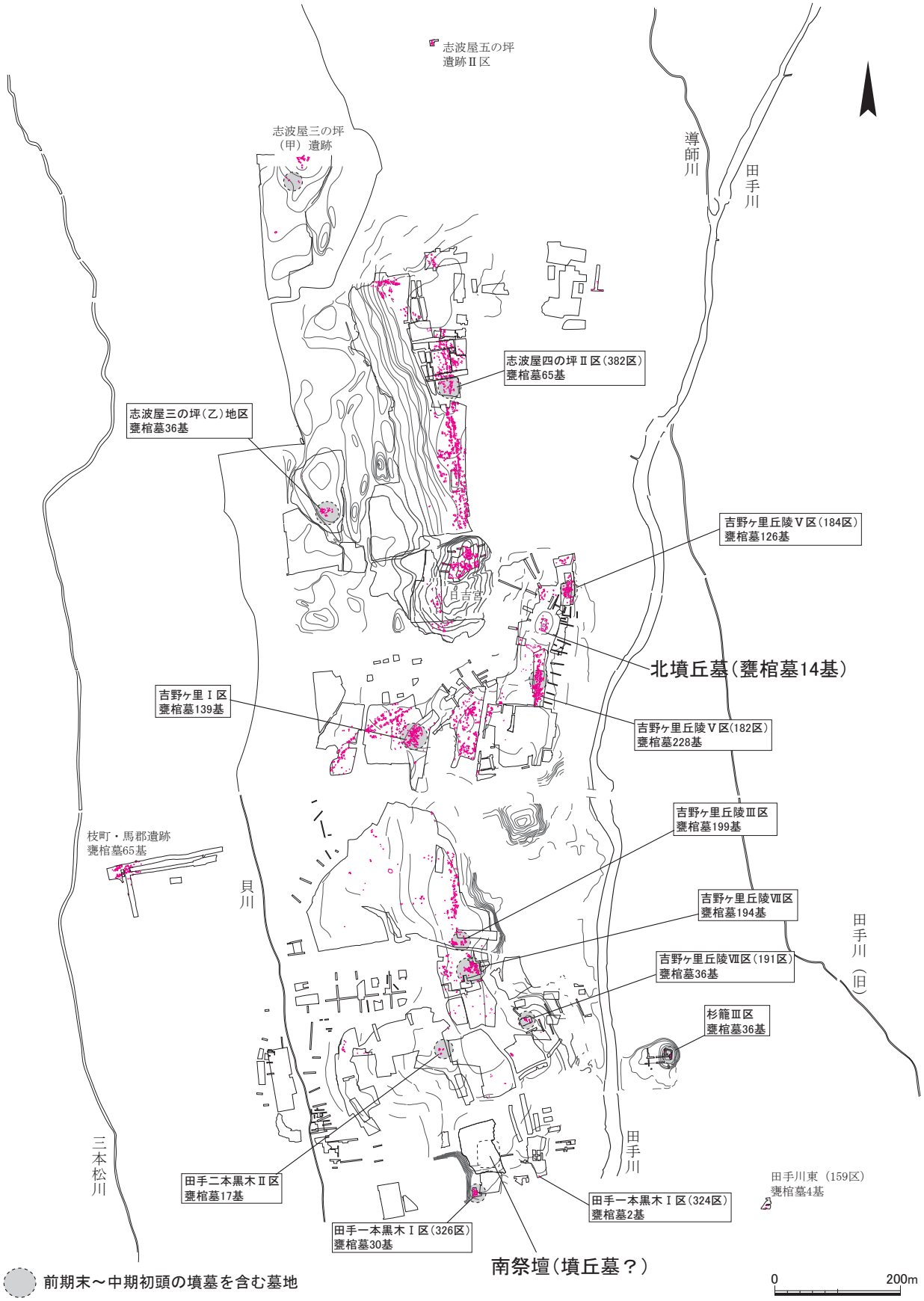


図 29　弥生時代墳墓遺構の分布と前期末～中期初頭の墓地の位置（1/9,000）

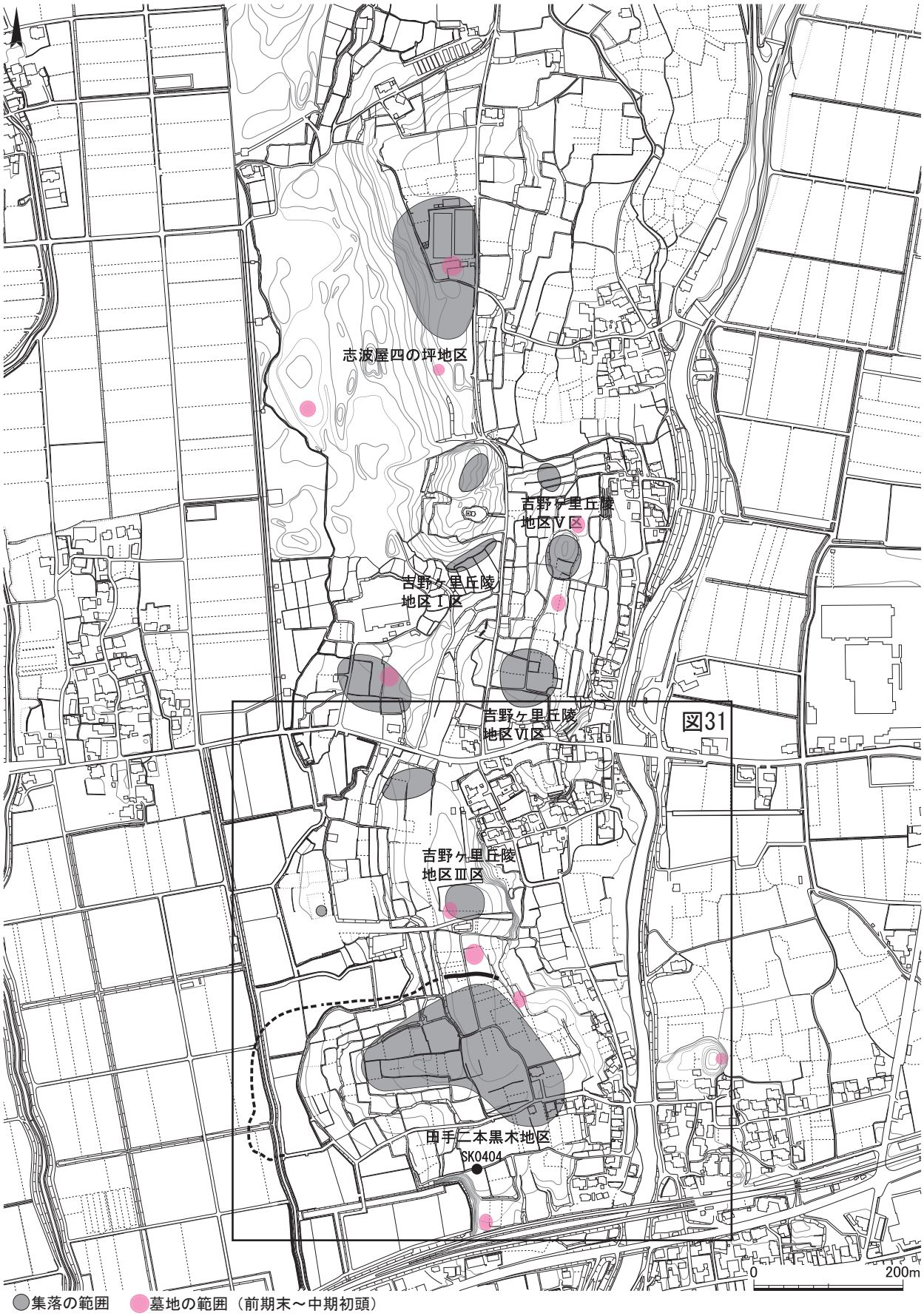


図 30　弥生時代中期初頭～中期前半の集落と墓地の分布（1/7,500）

吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区 191 調査区では、前期後半代の SD0336 環壕跡の上面に中期初頭～中期前半の甕棺墓 36 基からなる墓地が、径約 10m の狭い範囲に密集して営まれている（図 35）。このうち、SJ1934 甕棺墓の棺外埋土から打製石鏃 1 点、SJ1938 甕棺墓の棺内から打製石鏃 1 点、SJ1945 甕棺墓の棺外から打製石鏃 2 点、がそれぞれ出土している（『222 集』）。

SD0001・SD0336 環壕は中期初頭までに埋没し機能を失ったと考えられるが、その周りに展開する 3 箇所の小規模環壕（SD2393、SD501、SD1582/SD0573）についても、同様に中期初頭には埋没したと考えられる。SD0001 環壕跡西側の段丘上にあたる田手二本黒木地区Ⅱ区では、前期末～中期初頭・中

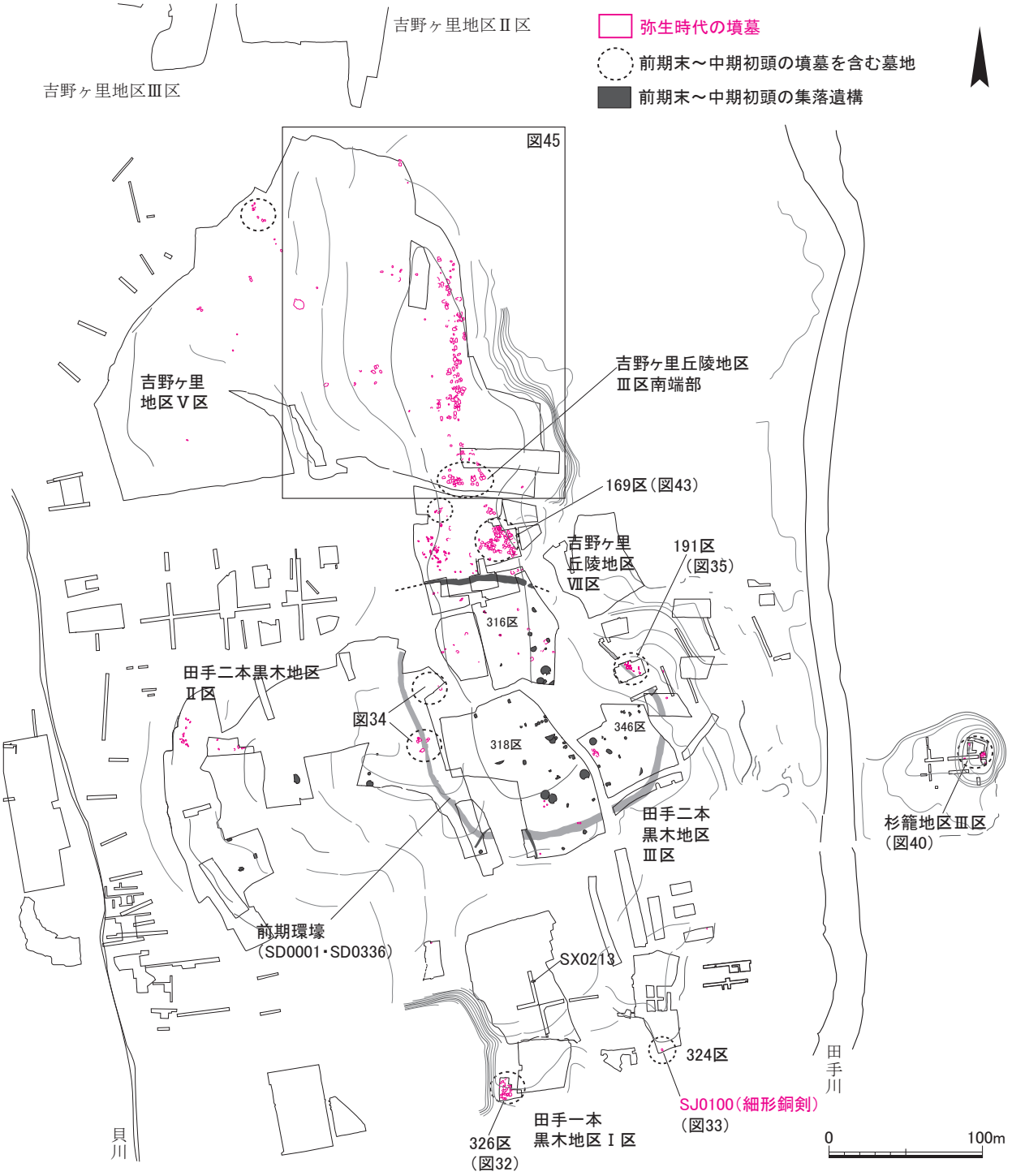


図 31　遺跡南部　弥生時代の集落と墓地の分布略図（1/4,000）

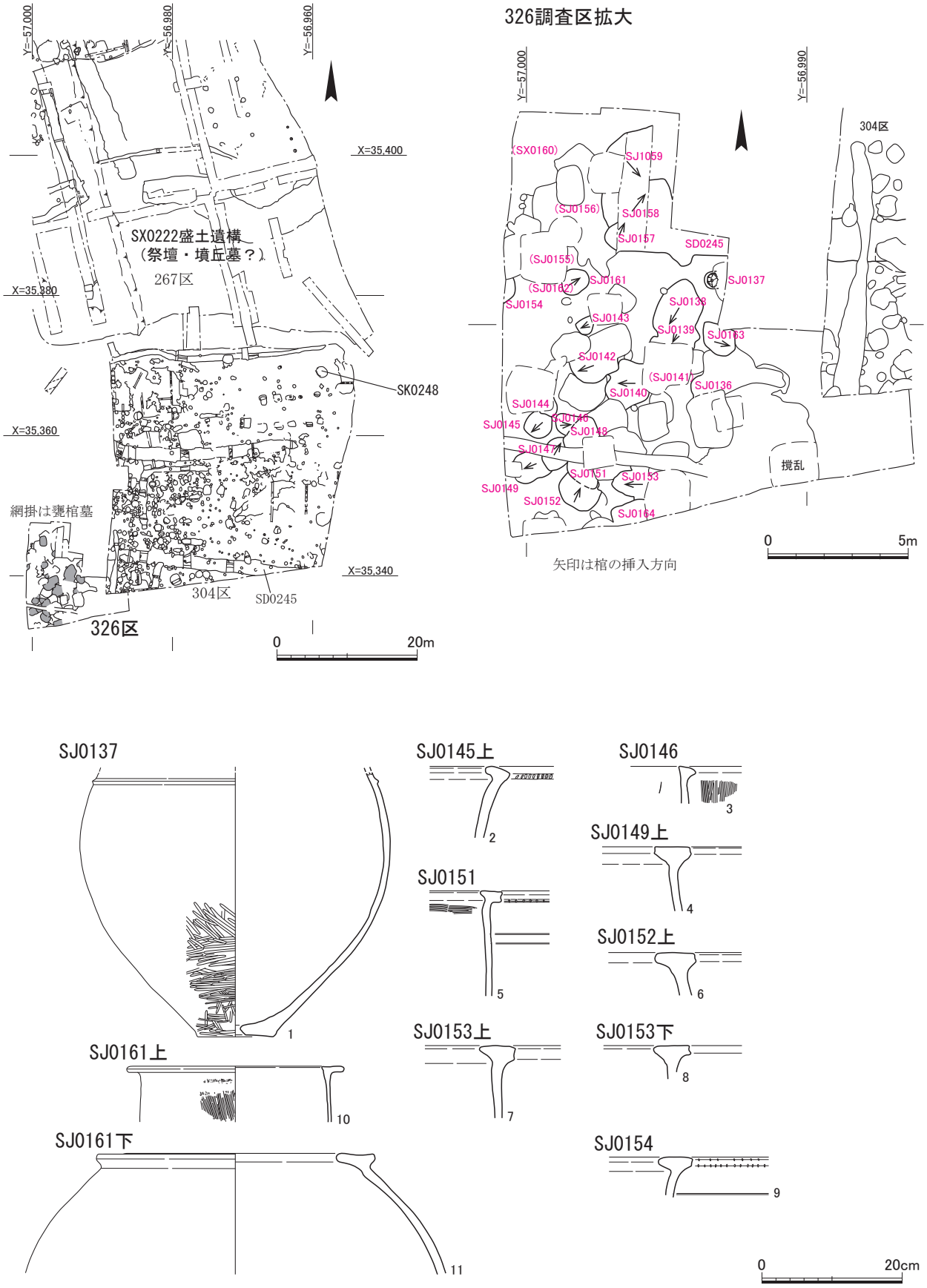


図 32　遺跡南端部　田手一本黒木地区Ⅰ区 326 調査区の遺構の分布（1/800,1/200）・326 調査区出土甕棺（1/8）

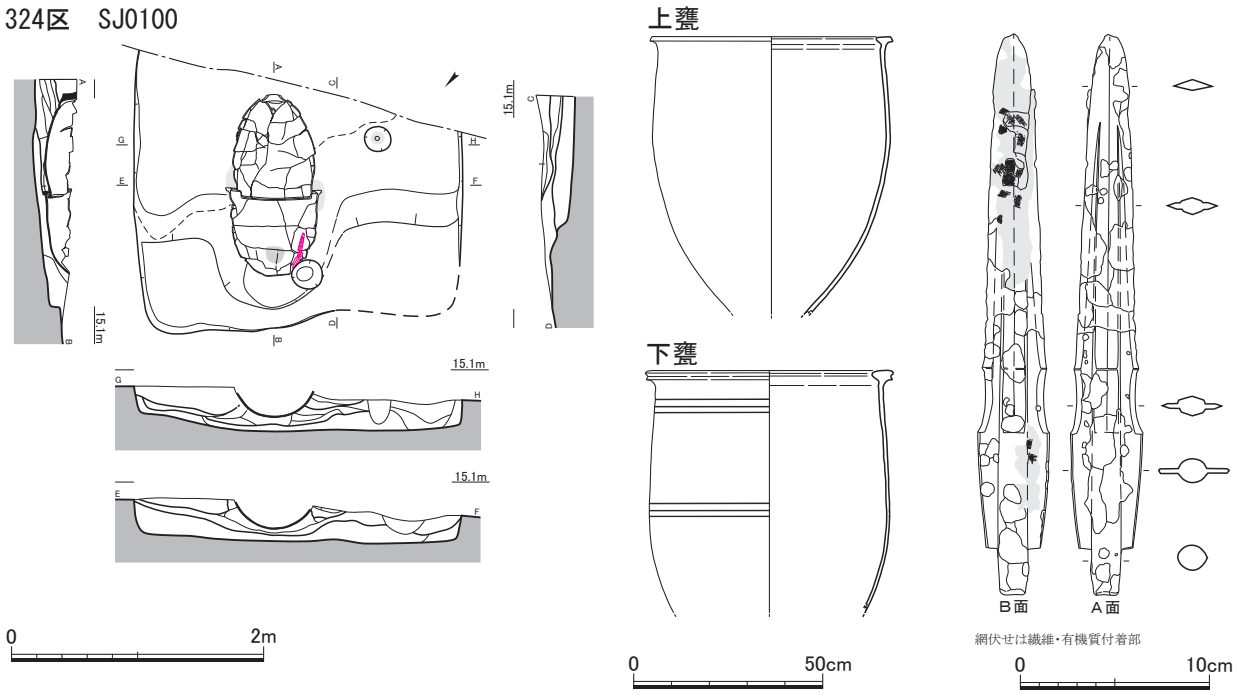


図 33　田手一本黒木地区Ⅰ区 324 調査区　SJ0100 甕棺墓（1/60）・棺体（1/20）・銅剣（1/4）

期前半においても円形竪穴建物と貯蔵穴からなる小規模な集落が展開している（図 36）。前期末～中期初頭の竪穴建物 3 棟（SH0081、SH0123、SH0255）は分散して分布しており、建物周辺には複数の貯蔵穴が展開している。また、中期前半の竪穴建物は 2 棟（SH0020、SH0022）が展開しているが、遺構の重複や削平により、建物内の詳しい構造などは明らかでない。

貯蔵穴・土坑は、前期末～中期初頭の段階では竪穴建物の周囲に数基が分布している状況であるが、中期前半になると数が増加し、竪穴建物から離れて土坑のみがまとまって分布する箇所が認められるようになる。特に、Ⅱ区では貯蔵穴とみられる土坑群が径 20 ～ 30m 程度の範囲に集中する箇所が 4 箇所程度認められ（図 36）、集落内の物資が集中的に管理されていたと考えられる（『132 集』）。なお、この径 20 ～ 30m という規模は、前期後半代に機能した前述の小規模環壕の規模と同程度であり、当時の物資管理における一定の尺度となっていた可能性がある。このほか、特徴的な遺物として、Ⅱ区 SK0128 土坑から中期前半の土器群とともに鐸形土製品の裾部片が出土している（『207 集』）。

遺跡南部では、埋没した SD0001・SD0336 環壕跡の内外に竪穴建物や貯蔵穴、土坑からなるまとまった集落が展開しており、前期後半に比べて建物の数や分布範囲が明らかに拡大していることから、集落内の居住人口が大幅に増加したと考えられる。集落遺構の分布状況をみると、前期末～中期初頭の円形竪穴建物は主に SD0001・SD0336 環壕跡内側の中心部分に展開しており、竪穴建物の周囲に平面長方形基調の貯蔵穴とみられる土坑が複数展開している状況が認められる（図 37）。

中期前半になると、遺跡南部では前段階に比べて竪穴建物と貯蔵穴・土坑の数がさらに増加しており、集落の最盛期を迎えたと考えられる。遺跡南部の中期前半の竪穴建物は、主に段丘上面の中央部分にあたる 318 調査区から 316 調査区にかけて数多く展開している（図 38）。このほか、本区域北東部の丘陵緩斜面部にあたる吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区 315・320 調査区においても数棟の円形竪穴建物が展開している。なお、中期前半の竪穴建物の平面形態は主に円形基調であるが、316 調査区 SH2405・SH2406 のように隅丸長方形を呈するものもある。

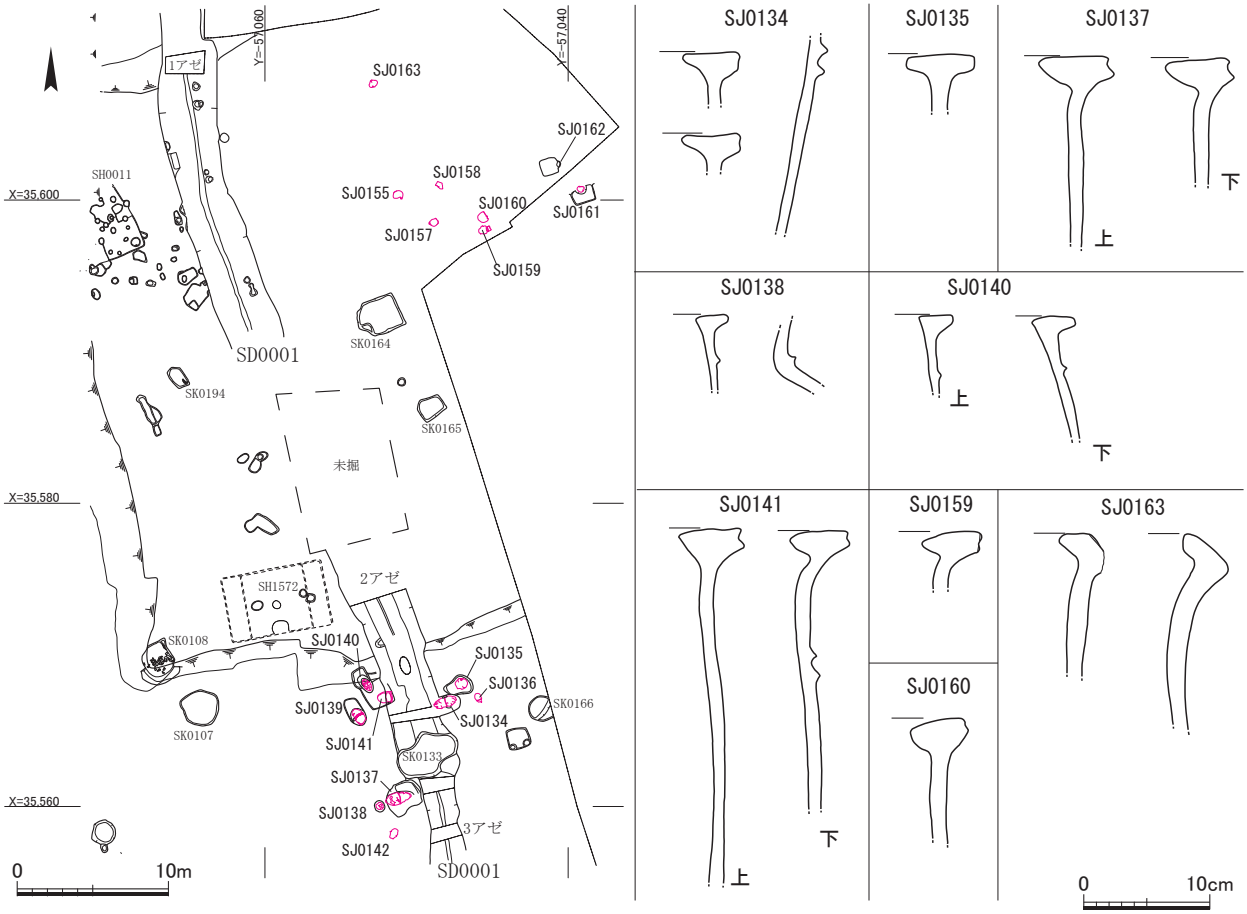


図 34　田手二本黒木地区東部　遺構の分布詳細（1/500）・出土甕棺部分実測（1/6）

遺跡南部における中期の集落構造で注目されるのは、南北に延びる志波屋・吉野ヶ里段丘のくびれ部を東西に断ち切るように新たに掘削される SD1801 壕の存在である（図 39）。吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区 SD1801 壕跡は、検出された長さ約 72m、残存する幅約 5m、深さ 2.1m で、東側に掘り残しによる幅約 1m の狭い陸橋部を有し、断面形は段掘り状の逆台形を呈する。土層の堆積状況から、SD1801 壕跡が埋没したあとの後期後半に SD2208 溝（古段階の構えの壕）が掘削され、終末期に SD2230 溝（新段階の構えの壕）が掘削されている。SD1801 壕跡の時期は、下層から中期初頭の土器が、上層から中期後半～中期末の土器が出土していることから、中期を通じて機能し、中期末に埋没したと考えられる。埋土からは日常用の土器だけでなく、丹塗土器や墓域で出土する透かし入り器台なども出土している（『207 集）。なお、SD1801 壕跡の周辺への広がりを含む中期の環壕に関する問題については後述する。

田手二本黒木地区Ⅲ区では、SD0001・SD0336 環壕跡の内側を中心に展開する集落に付属して、318 調査区南部や 346 調査区西部で甕棺墓数基からなる小規模な墓地が展開している。これらは基本的に未完掘のため、所属時期が明らかでないものもあるが、主に中期前半を中心とする（『222 集』）。

杉籠地区Ⅲ区 399 調査区は、遺跡南西部の田手川東岸に位置する（図 40）。現在の地形は、南北約 60m、東西約 35m、高さ約 5m（標高約 18m）の平面長方形状の独立丘陵状を呈しているが、本来は田手川を挟んだ西側に展開する志波屋・吉野ヶ里段丘の一部であったと考えられる。前項でも触れたが、SD501 は径約 25m の小規模環壕で、内部構造は不明であるが貯蔵穴を取り囲む専用の環壕であったと考えられる。SD501 は前期後半代に機能して中期初頭までに埋没したとみられ、その後に甕棺墓地が

図 35　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区 191 調査区　遺構の分布（1/150）・出土甕棺部分実測（1/6）

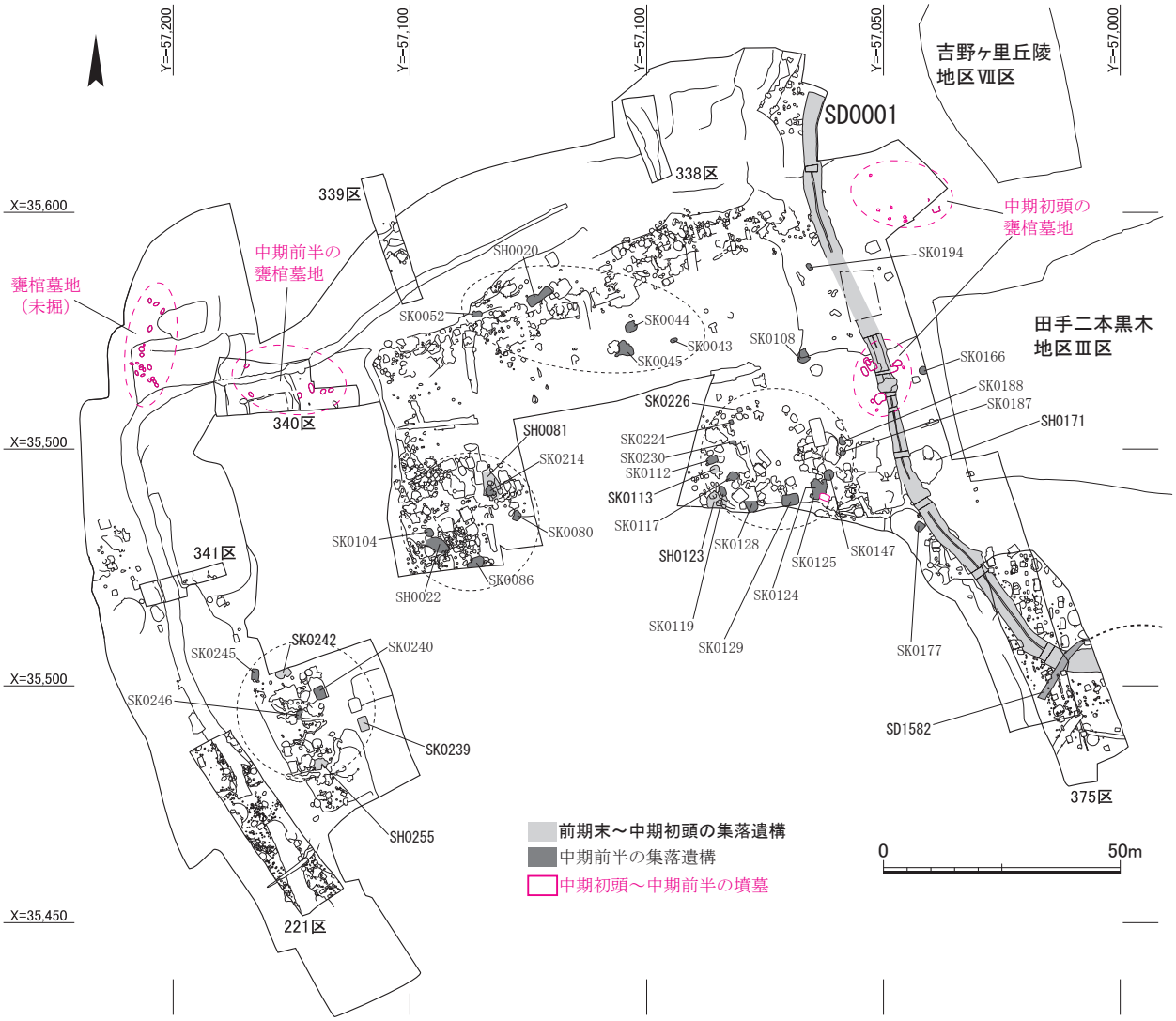


図 36　田手二本黒木地区Ⅱ区　前期末 / 中期初頭～中期前半の遺構の分布（1/1,500）

造営されている。墓地は未完掘であるが、大型棺と小型棺を含む甕棺墓 36 基が狭い範囲に密集して展開しており、削平や未調査分を考慮すると本来の墳墓数はさらに多いと推測される（図 40）。甕棺墓群の時期は中期前半を中心とし、中期後半にも継続している。なお、M トレンチ包含層から出土した甕棺片（図 41-24）から、墓地の形成開始期は中期初頭とみられる。本区域においても、田手二本黒木地区Ⅱ・Ⅲ区の前期後半代の SD0001・SD0336 環壕と周辺の甕棺墓群との関係と同様、SD501 環壕が埋没したあと間もなく同じ場所に甕棺墓地が造営されている（『211 集』）。

吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区 169 調査区では、前期末～中期初頭の甕棺墓約 50 基が、径約 20m の範囲に平面楕円形状に展開している（図 42,43）。墓地の東側に隣接する SD2393 溝は、前項で述べたように前期後半代に機能していたとみられる小規模環壕で、集落に伴う貯蔵穴を取り囲む専用の環壕であったと考えられる。SD2393 環壕は、他の前期後半代の環壕と同様、中期初頭までに埋没したとみられる。その後、間もなくして 169 調査区の甕棺墓地が形成され、中期前半以降にも継続している。

169 調査区や周辺では、甕棺墓を中心とする墳墓遺構のみが分布しており、墓地の時期に対応する集落遺構はほとんど確認されていない。前述したように、SD1801 壕跡の南側に隣接するⅦ区 316 調査区や田手二本黒木地区Ⅲ区 318・346 調査区は、前期後半～中期前半の集落遺構が多く分布する区域で

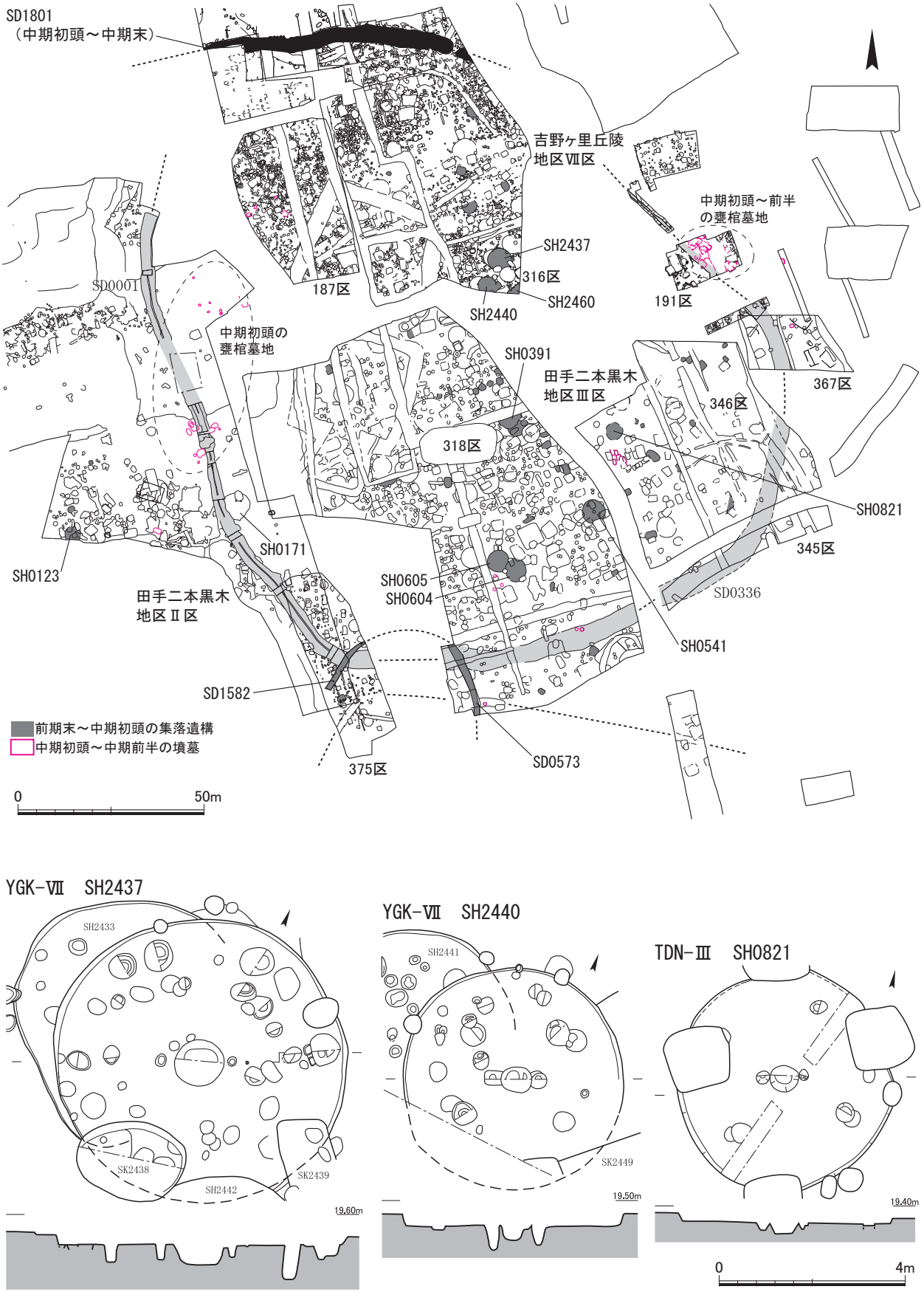
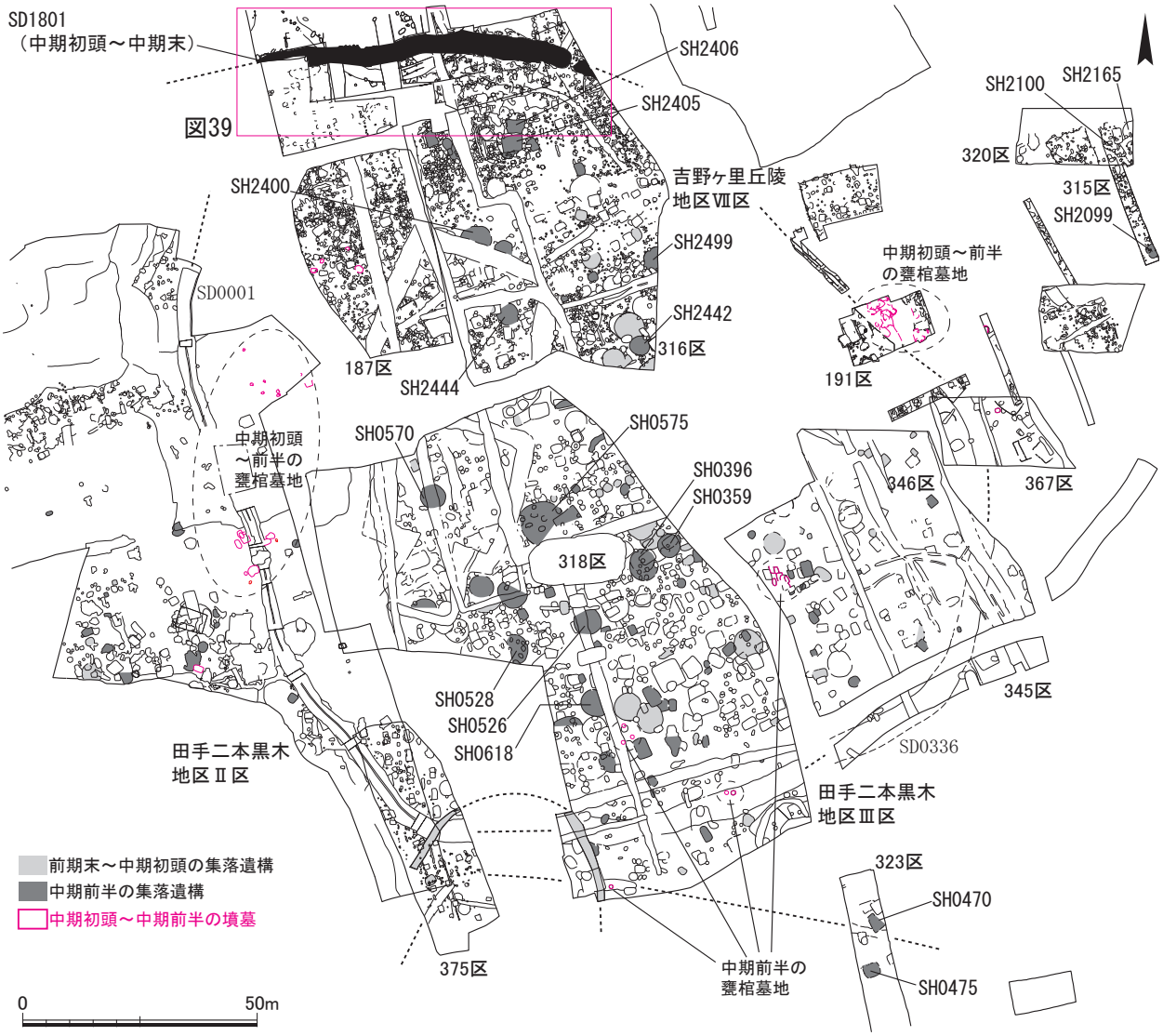


図 37　田手二本黒木地区Ⅲ区一帯の遺構の分布状況（1/1,500）・前期末～中期初頭の竪穴建物跡（1/120）



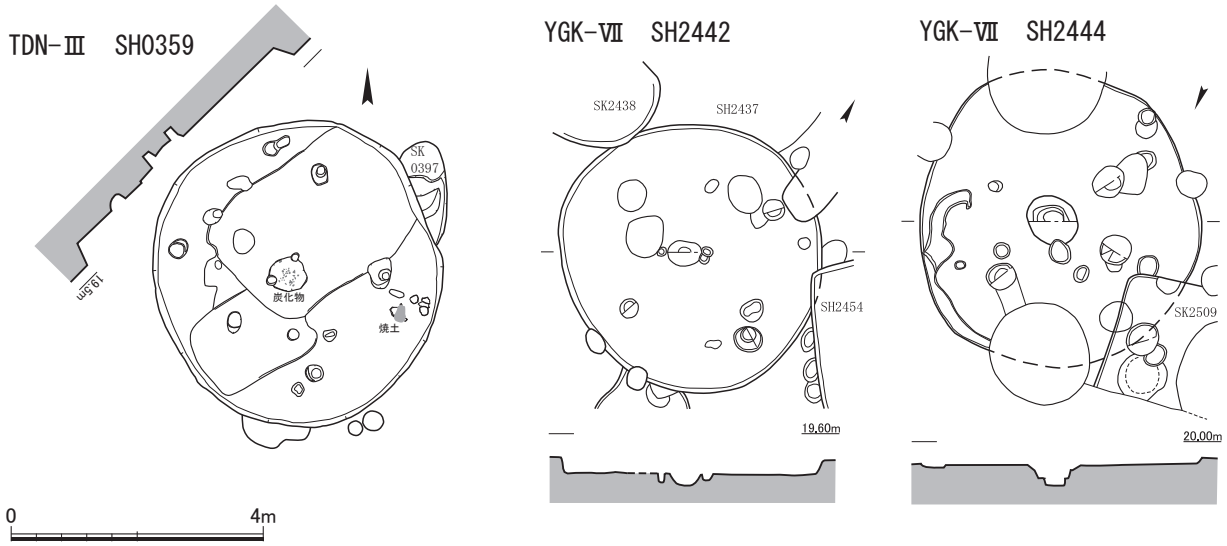


図 38　田手二本黒木地区Ⅲ区一帯の遺構の分布状況（1/1,500）・中期前半の竪穴建物跡（1/120）

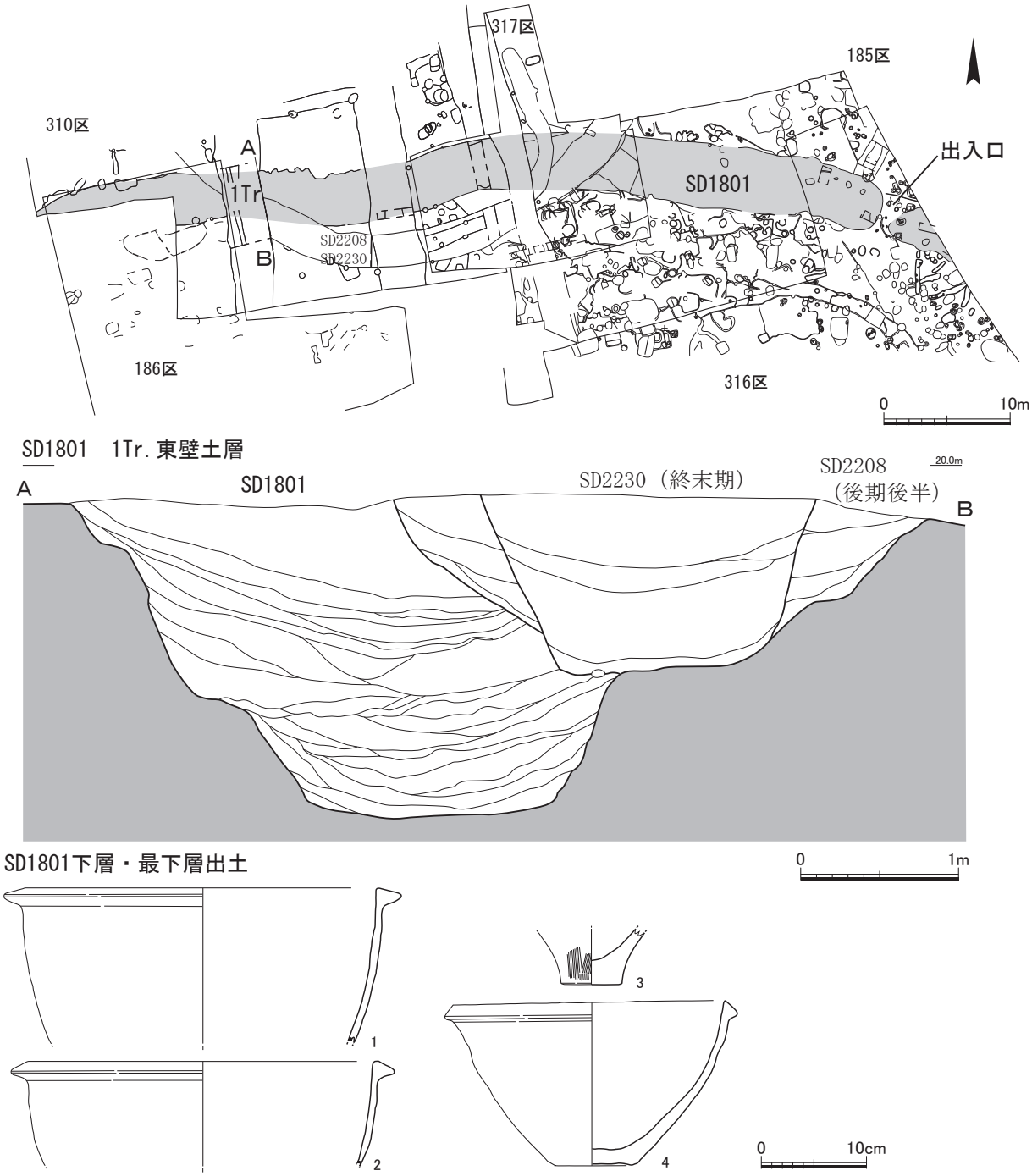


図 39　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区 SD1801 壕跡　平面図（1/500）・土層断面図（1/40）・SD1801 下層出土土器（1/6）

あることから、中期初頭～中期前半の本区域一帯では、SD1801 壕を境として集落と墓地とが区切られていた可能性が高い。このほか、副葬品を伴う墳墓として、Ⅲ区南部の SJ0790 甕棺墓（中期前半）の棺内から磨製石鏃が 1 点出土している（図 80）（『214 集』）。

志波屋・吉野ヶ里段丘上面の広い平坦部分にあたる吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区・吉野ヶ里地区Ⅴ区東部では、前期前半に円形竪穴建物 1 棟（Ⅴ区 SH0808）が展開しているが、前期後半代の集落遺構は確認されていない。本区域は弥生時代後期に「南内郭」と呼ばれる環壕区画が成立し、遺跡全体の中心的な集落域となる場所であるが、前期の段階ではほとんど利用されていない。

前述した吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区 169 調査区の墓地から北西に約 40m 離れた吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区

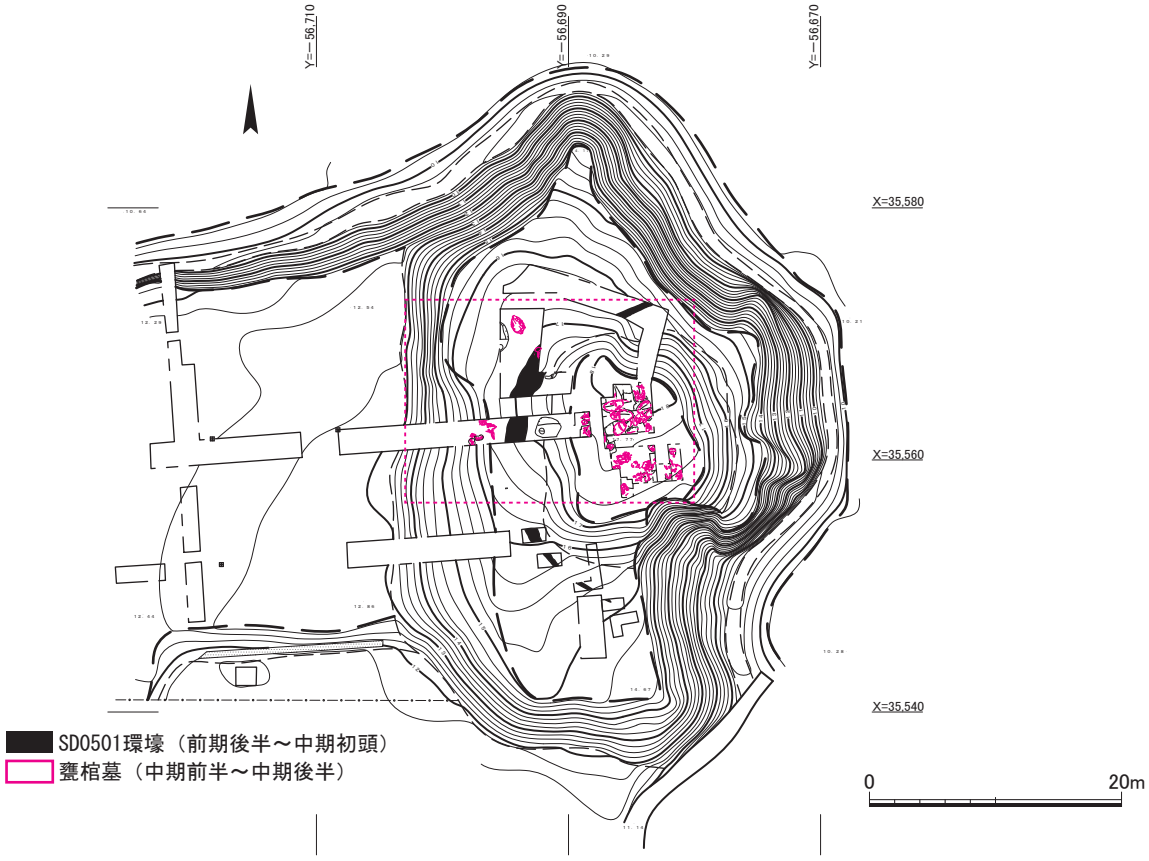


図 40　杉籠地区Ⅲ区 399 調査区全体図（1/600）・遺構の分布詳細（1/150）

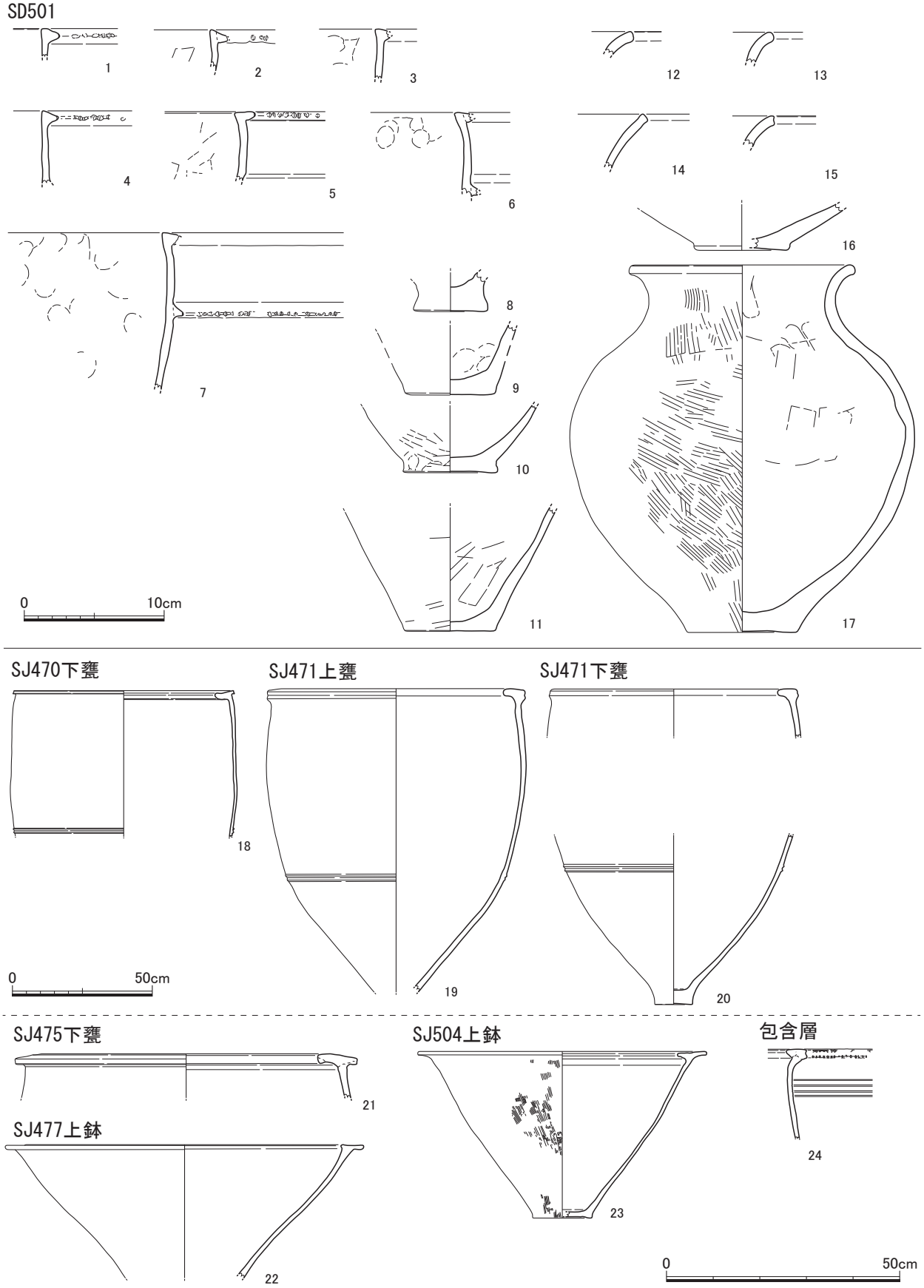


図 41　杉籠地区Ⅲ区 399 調査区　SD501 環壕出土土器（1/4）・出土甕棺（1/20,1/12）

南端部では、前期末～中期初頭の甕棺墓 10 基程度からなる小規模な墓地が展開している（図 44）。また、Ⅲ区北部やⅤ区にも中期初頭の甕棺墓が点在しており（Ⅲ区 SJ0668・SJ0901、Ⅴ区 SJ0901・SJ0959）、近くに展開する中期初頭の集落に伴う墓地であったとみられる。

中期前半になると、Ⅲ区南端部に形成されていた前期末～中期初頭の甕棺墓群を起点とするかのように、75 基の甕棺墓が丘陵上を南北約 150m の長さに渡って延びる甕棺墓列が形成される（図 45）。墓列は中央に空白地を持つような明確な 2 列ではなく、全体としてひとつの列をなしている。Ⅲ区の甕棺墓列の北側は未調査区域のため不明であるが、北に約 140m 離れた場所に位置する吉野ヶ里丘陵地区Ⅵ区南西部、Ⅱ区南東部に展開する同時期の甕棺墓列と連続する可能性がある。一方、集落は前期末～中期初頭から本格的に形成されており、中期前半にかけて円形竪穴建物 4 棟程度と貯蔵穴からなる小規模な集落が、Ⅲ区南部とⅤ区北部にそれぞれ展開している（図 45,46）。Ⅴ区西部に位置する SH0981 竪穴建物跡は、部分的にしか検出されていないものの平面長方形とみられ、Ⅴ区北部に展開する円形竪穴建物群から離れた場所に立地している点が異なる。このほか、Ⅴ区 SK0968 は平面円形の大型土坑で、埋土から中期前半～中期後半の土器が出土しており、墓地に伴う祭祀土坑と考えられる（『214 集』）。

遺跡中央部の墓地と集落

遺跡中央部では、吉野ヶ里地区Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区、吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ・Ⅵ区、吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区、吉野ヶ里丘陵地区Ⅰ・Ⅳ・Ⅸ区で中期初頭～中期前半の集落と墓地が形成されている。

吉野ヶ里地区Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区では、前期の項でも触れたように、Ⅰ・Ⅱ区で前期後半代の竪穴建物跡数棟からなる小規模な集落が展開している（図 49）。前期末～中期初頭には 3 棟（SH0003・SH0469・SH0692）の竪穴建物が展開している。墓地は、Ⅰ区で前期末～中期初頭の甕棺墓約 40 基や土坑墓群からなるまとまった墓地が形成されている。墓地の規模は、前述した遺跡南部の各地区に比べてやや大きいものの、同時期の集落と墓地が近い位置に併存するという点では共通している。前期末～中期初頭の副葬品を伴う墳墓としては、SJ0069 甕棺墓（前期末）の棺内から磨製石剣の切先が、SJ0109 甕棺墓（中期初頭？）から石製管玉が出土している。

吉野ヶ里地区Ⅰ区では、中期前半にも引き続き竪穴建物 3 棟程度からなる小規模な集落が展開している。竪穴建物跡の平面形は円形基調であるが、SH0005 建物跡のような小判形も出現している。一方、中期前半の墳墓は、Ⅰ区の前期末～中期初頭に形成された集塊状の墓地が拡張するとともに、Ⅱ・Ⅲ区において北東 - 南西方向に甕棺墓 40 基程度からなる列埋葬が展開するようになる。このように、中期前半の本区域では小規模な集落と大規模な墓地とが同時に展開している。また、集塊状墓地と列埋葬墓地とが近い場所に併存しているのも特徴である。このほか、列埋葬の近くには土器が廃棄された祭祀土坑とみられる遺構も複数確認されている。

中期前半の副葬品を伴う墳墓としては、Ⅱ区 SJ0298（中期前半新相）の棺内埋土中から舶載品とみられる環状鉄製品（蝶番）が出土しており（図 68-17）、副葬鉄器であるならば本遺跡全体で最も古い資料である。また、Ⅱ区 330 調査区 SP1411 土坑墓（中期初頭～中期前半）の底面付近から、磨製石剣の切先 2 点、磨製石鏃の破片 2 点、打製石鏃 4 点が出土している（図 50-1 ～ 8）。いずれも欠損していることから、使用されて破損した可能性がある。さらに、SP1411 土坑墓と重複する SK1412 土坑（貯蔵穴か）からは柱状片刃石斧と扁平片刃石斧が 1 点ずつ並んだ状態で出土しており、埋納の可能性

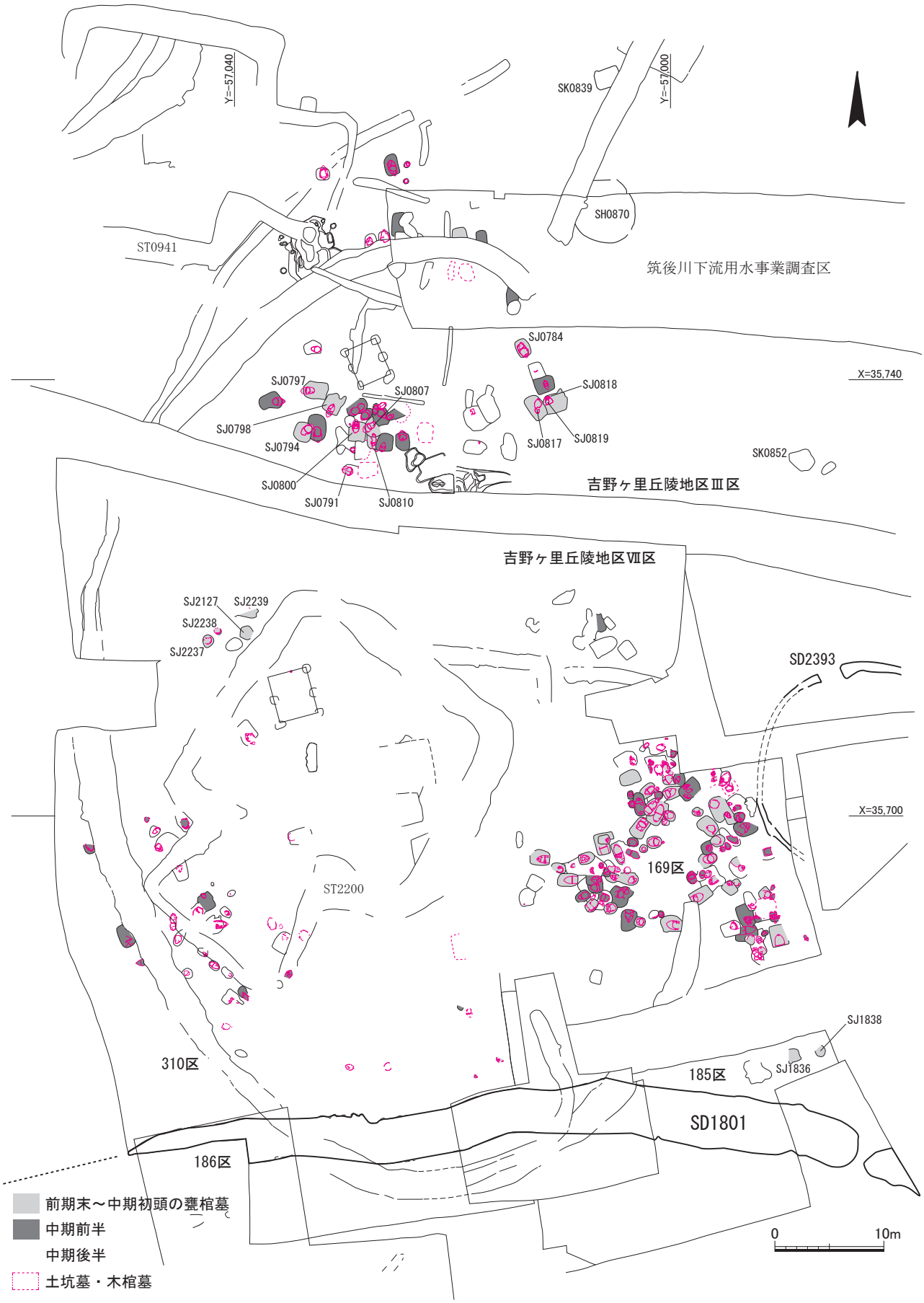


図 42　吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区南部・Ⅶ区北部　前期末 / 中期初頭～中期前半の遺構の分布（1/500）

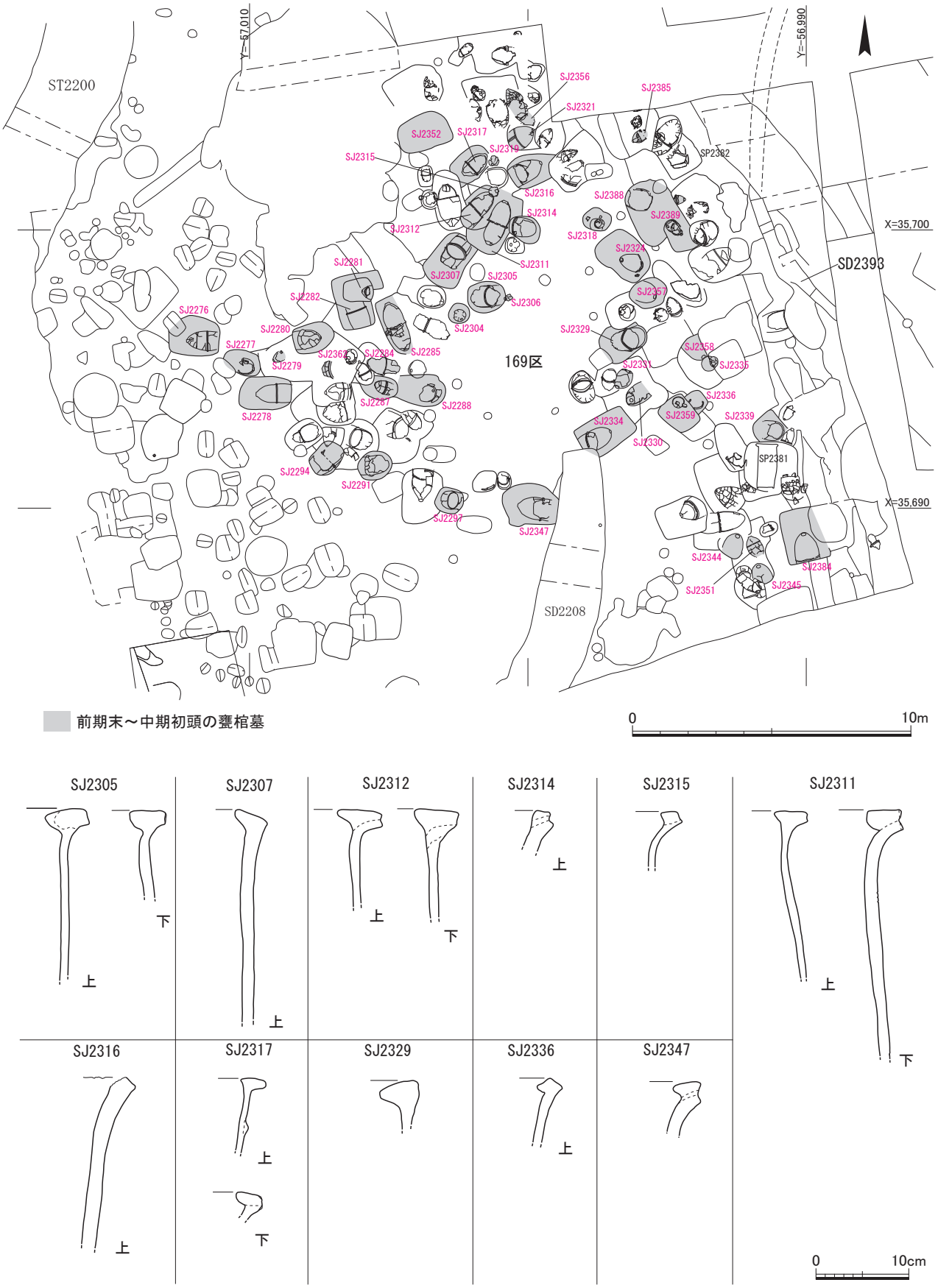


図 43　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区 169 調査区　遺構の分布詳細（1/200）・出土甕棺部分実測（1/6）

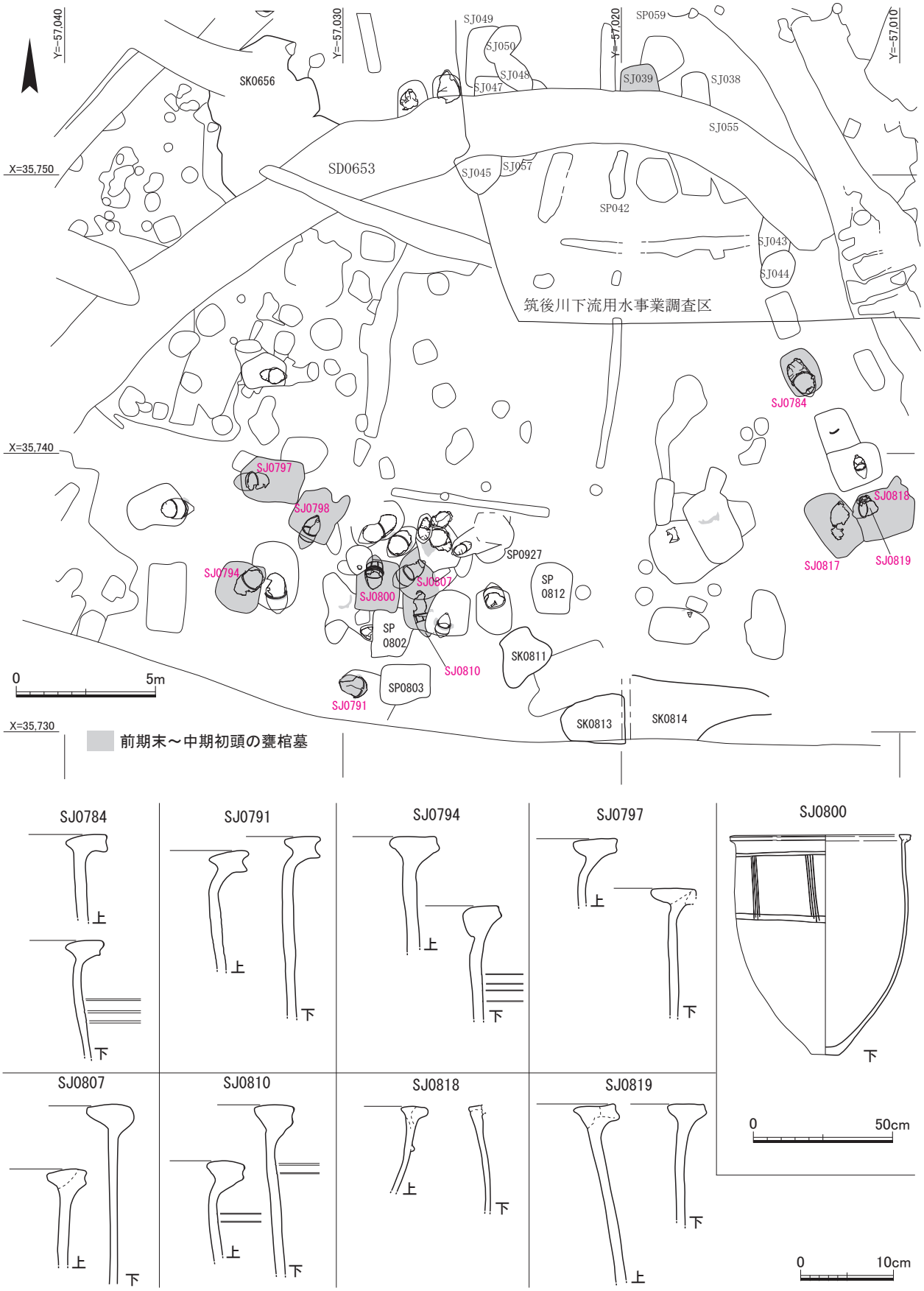


図 44　吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区南部　遺構の分布詳細（1/200）・出土甕棺（部分実測 1/6、棺体 1/20）

図 45　吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区・吉野ヶ里地区Ⅴ区東部　前期末 / 中期初頭～中期前半の集落と墳墓の分布（1/1,200）

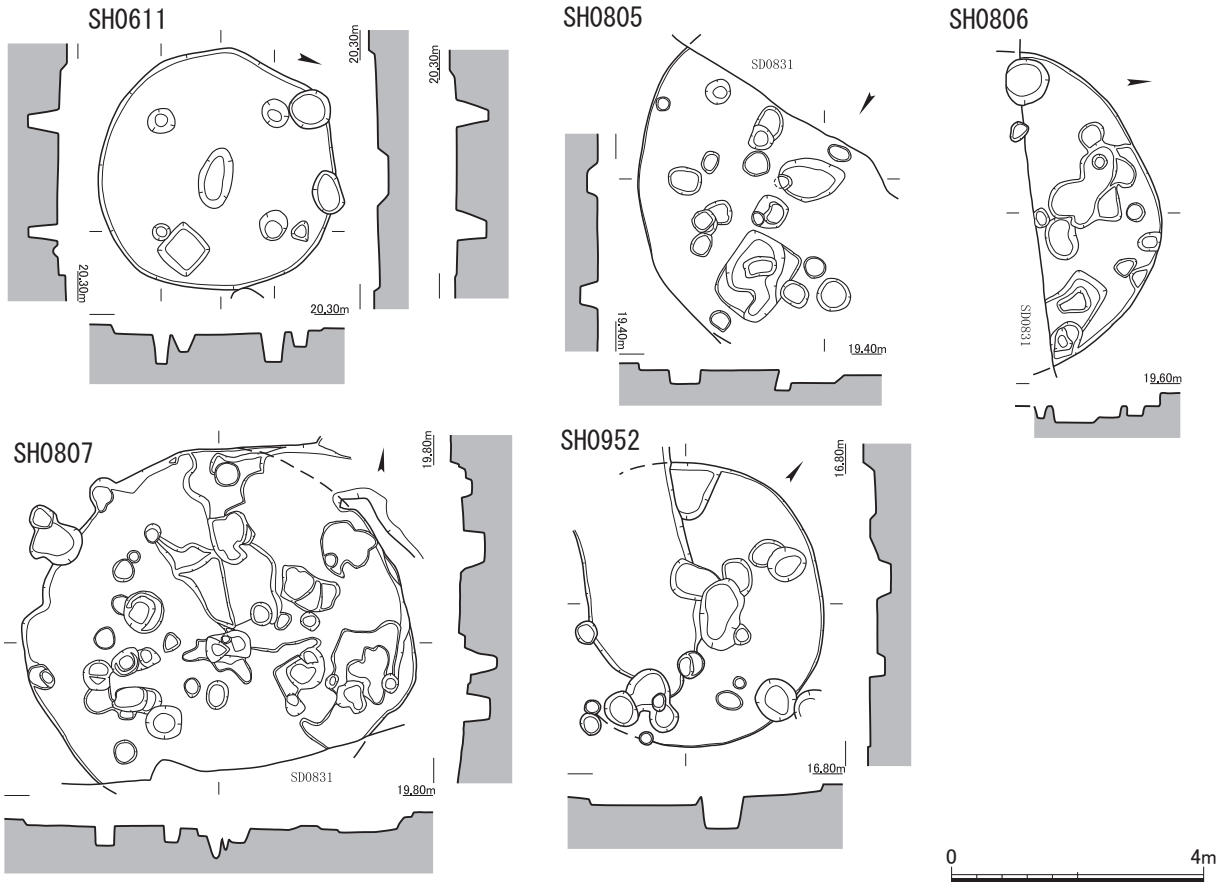


図 46　吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区・吉野ヶ里地区Ⅴ区東部　前期末 / 中期初頭～中期前半の竪穴建物跡（1/120）

がある（図 50-9,10）（『173 集』,『207 集』）。特に、10 は基部裏面に素材剥片剥離時の打瘤が残存しており、側面観は裏面がやや内湾することから、大型の縦長剥片を素材としていることがわかる。なお、Ⅱ・Ⅲ区の列埋葬は中期後半以降にも継続しているが、詳しくは後述する。

吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ・Ⅵ区では、前期の集落遺構として前期後半の土坑が 1 基（Ⅵ区 SK1296）、前期末の竪穴建物跡が 1 棟（Ⅱ区 SH0056）確認されているが、本格的に集落が形成されるようになるのは中期初頭からである（図 51）。中期初頭～中期前半の集落は、平面円形基調の竪穴建物と貯蔵穴から構成されている。中期前半には平面小判形の竪穴建物（Ⅱ区 SH0200、Ⅵ区 SH1157・SH1309）が展開するようになる。なお、SH1157 からは鋳造鉄斧の二条突帯部分の破片が出土している（図 68-13）。

墓地は、Ⅵ区北に隣接するⅤ区 182 調査区で前期末～中期初頭の甕棺墓約 70 基からなるまとまった墓地が形成されているほか、Ⅵ区北西端部で甕棺墓 7 基が展開している。中期前半には、Ⅱ区東部からⅥ区北西～南西部にかけて甕棺墓 23 基が展開しており、一部は列状を呈する（図 51）。そのため、未調査区域にも中期前半代の甕棺墓が存在する可能性が高い。本区域においても、中期初頭～中期前半には集落と墳墓が比較的近接して営まれている状況がうかがえる。

吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区では、ST1001 北墳丘墓一帯と、南の 182 調査区、北の 184 調査区を中心に、（前期末～）中期初頭から集落と墓地が展開している（図 52 ～ 54）。

ST1001 南部に位置する SH1012 円形竪穴建物跡は径 7.7m と大型で、構造は中央土坑とその両脇に一対の主柱穴を有する、いわゆる松菊里型住居である（図 55）。SH1012 建物跡内部からは、中期初頭の土器のほか、石器や炭化米などが出土している（『207 集』）。また、未掘のため詳細は不明であるが、

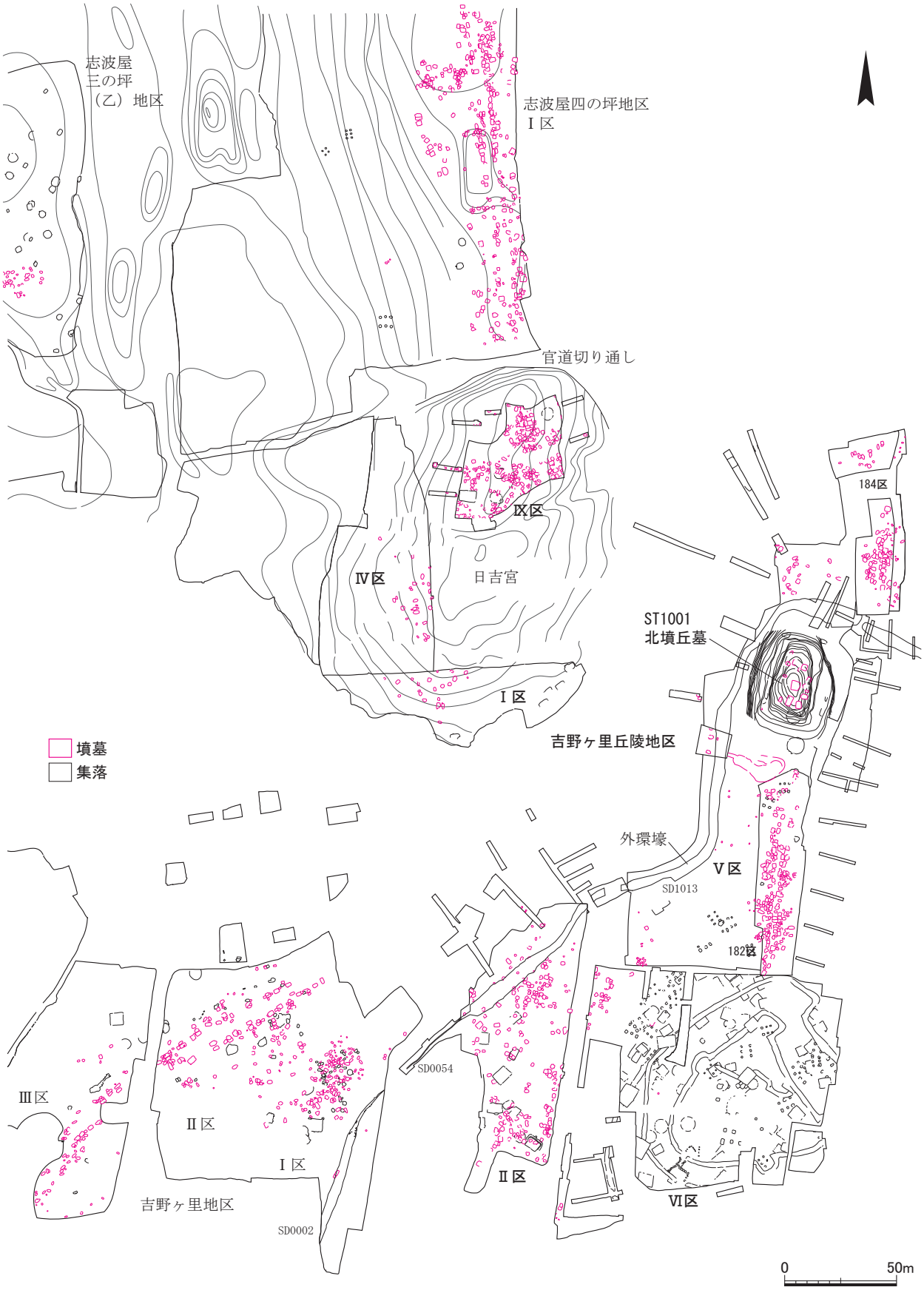


図 47　遺跡中央部の集落と墓地の分布略図（1/2,500）

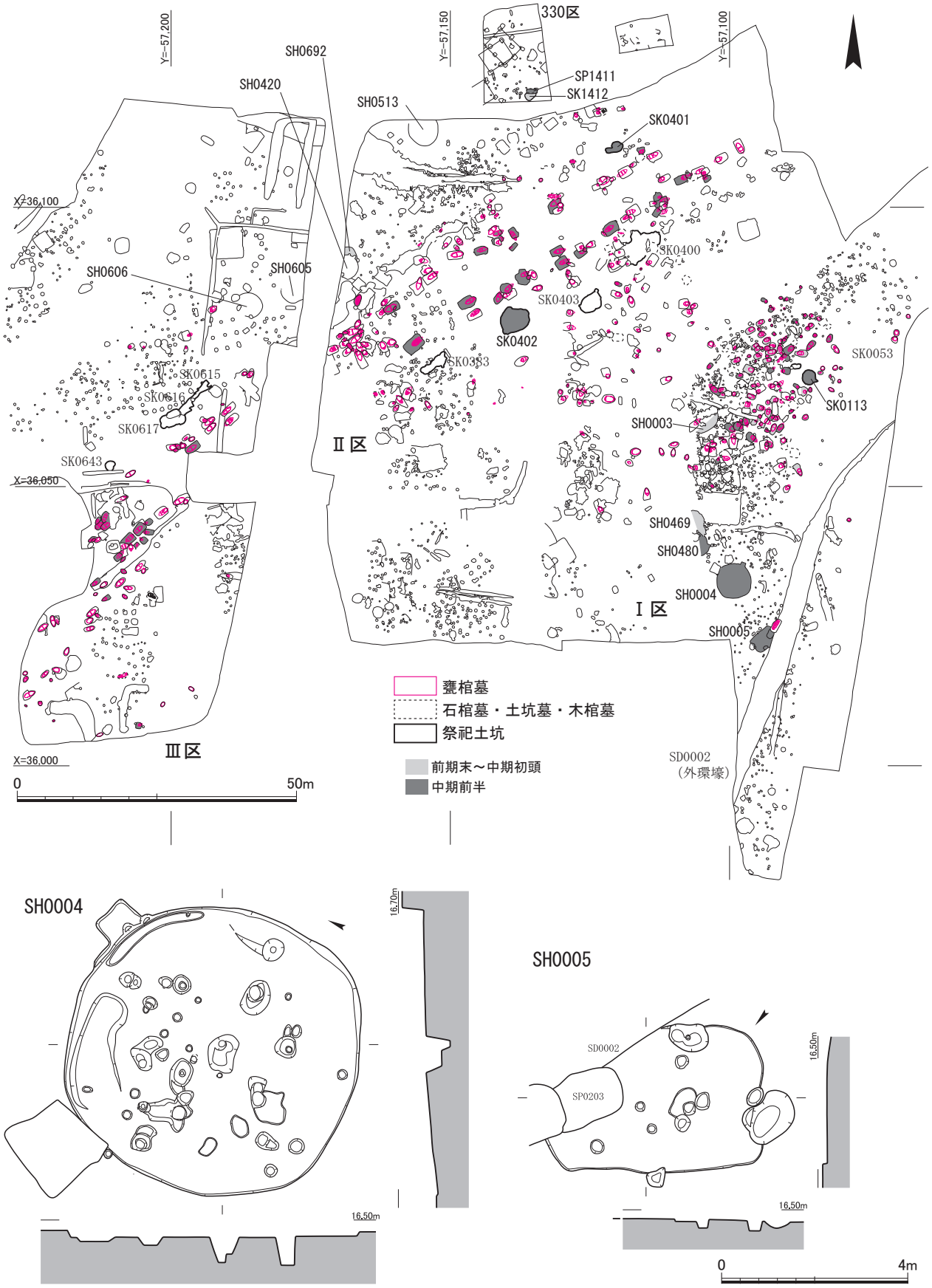


図 48　吉野ヶ里地区Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区　前期末 / 中期初頭～中期前半の遺構の分布（1/1,000）

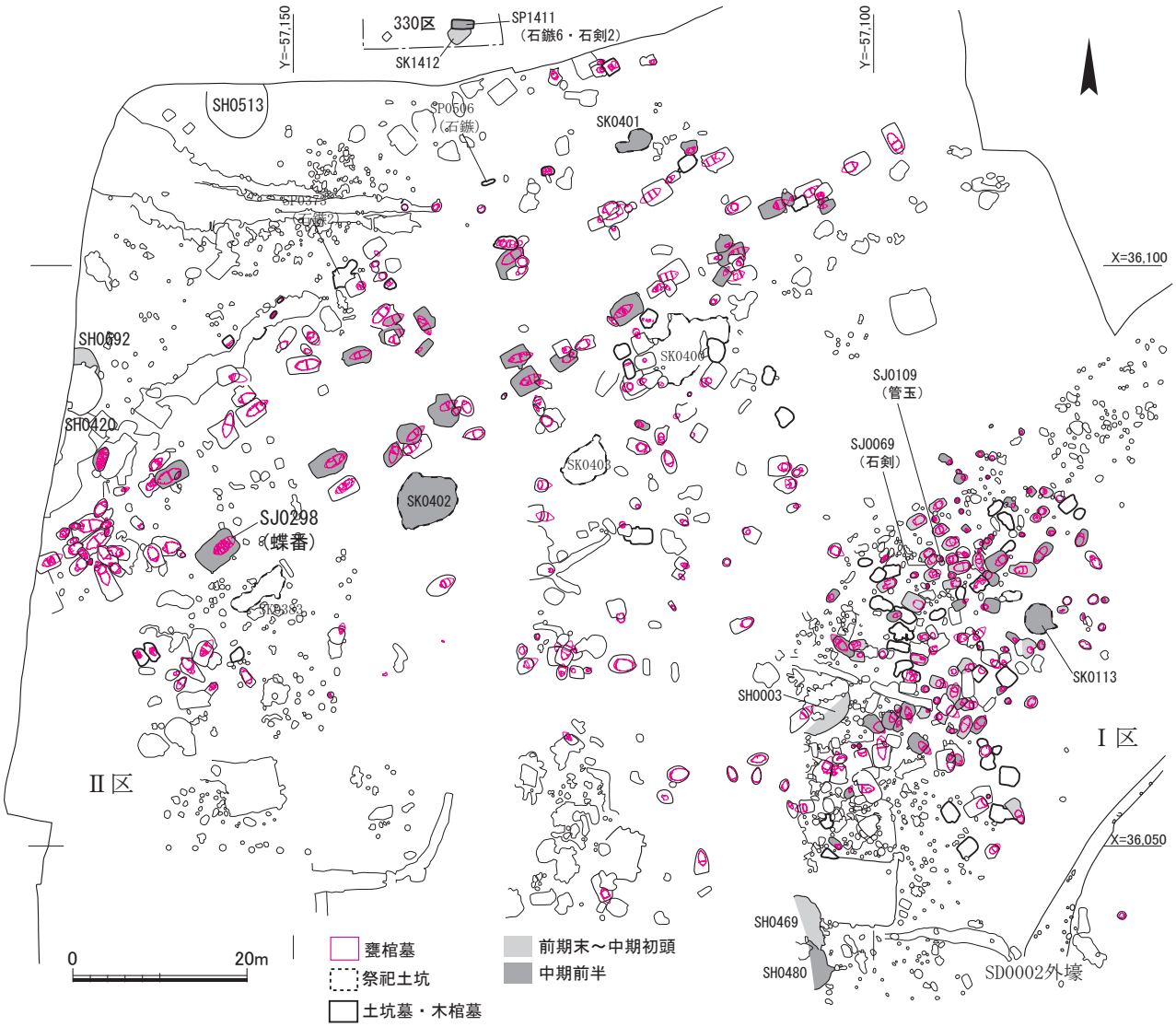


図 49　吉野ヶ里地区Ⅰ・Ⅱ区　遺構の分布詳細（1/600）

ST1001 北墳丘墓の下部で検出された SH1044・SH1045 円形竪穴建物跡なども前期末～中期初頭頃に形成されたと考えられる。このことから、本区域では ST1001 北墳丘墓が築造される以前、丘陵上に小規模な集落が展開していたとみられる。

吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区の墓地は、（前期末～）中期初頭から 182 調査区と 184 調査区南部で甕棺墓地が営まれている。南北に延びる丘陵尾根上に位置する 182 調査区では、前期末～中期初頭の甕棺墓約 70 基が南北に展開しているが、この段階の墳墓群はまだ明確な列状を呈していない。丘陵緩斜面上に位置する 184 調査区では、南部で前期末～中期初頭の甕棺墓 10 基程度が集塊状に展開している。このほか、ST1001 北墳丘墓の南西隅で中期前半（須玖Ⅰ式古段階）の小型甕棺墓 1 基（SJ1008）が確認されているが、墓坑の掘り込みレベルが墳丘盛土よりも下であることから、ST1001 北墳丘墓の築造前に埋葬されたと考えられる（『219 集』）。

中期前半新相には、それまで展開していた集落が廃絶し、ST1001 北墳丘墓が築造されたとみられる。ST1001 北墳丘墓の最下部で確認されている厚い黒色土の堆積は、集落の廃絶と墳丘墓の築造に伴って整地された層である可能性がある。また、墳丘盛土の採土場として、ST1001 の東側に隣接する

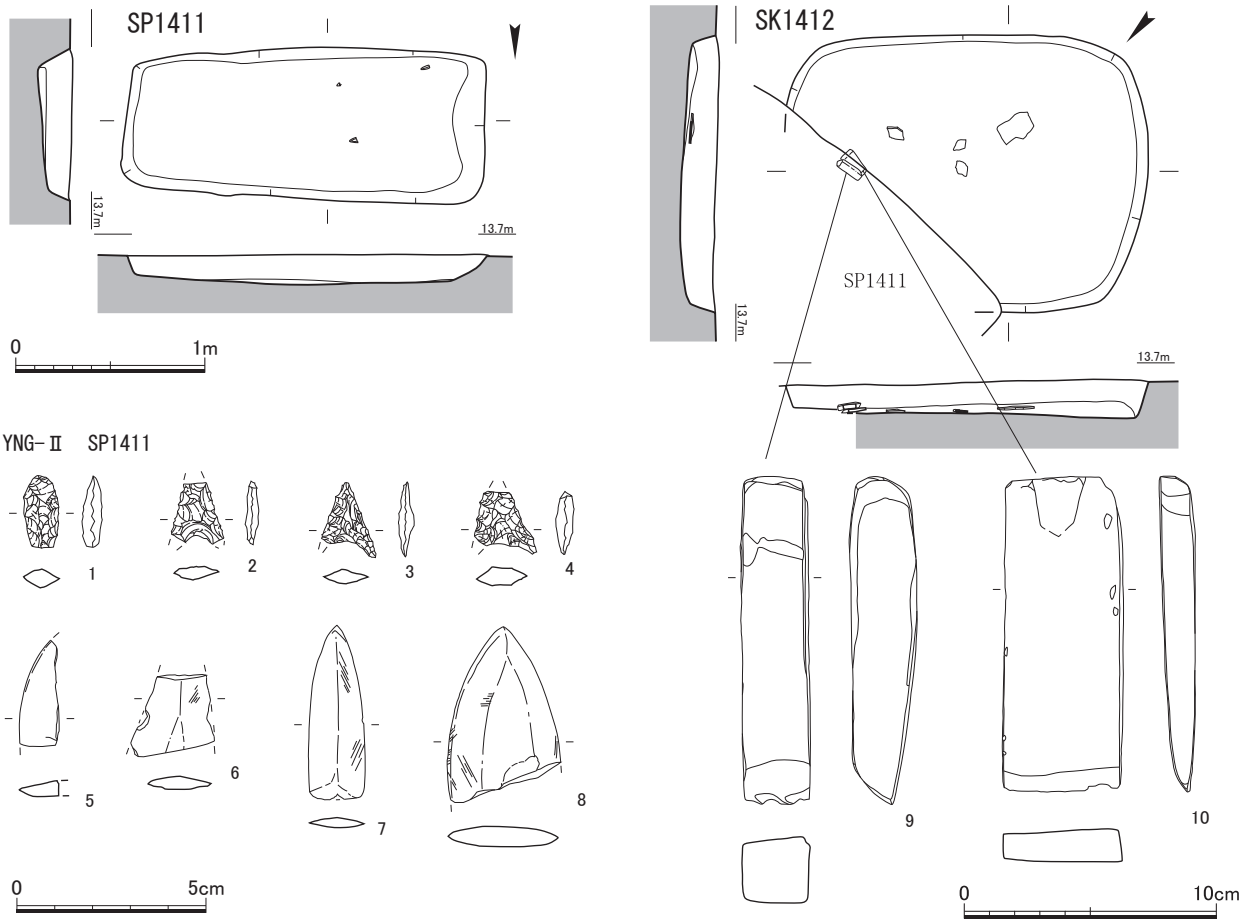


図 50　吉野ヶ里地区Ⅱ区　SP1411 土坑墓・SK1412 土坑（1/40）・出土石器（1/2,1/3）

SK1699 大型土坑が掘削されたと考えられる。ST1001 に最初に埋葬されているのは、中央に位置する SJ1006 甕棺墓（中期前半新相）で、棺内から細形銅剣が出土している。なお、ST1001 北墳丘墓の甕棺墓については次項で後述する。

中期前半の集落遺構としては、Ⅴ区北端に位置する 203・204 調査区で平面長方形基調の竪穴建物 7 棟が近接して分布していることから、墳丘墓周辺の丘陵緩斜面上に集落が形成されていたとみられる。トレンチ調査のため竪穴建物跡の規模や構造が明らかでないが、比較的小型のものが多い。

Ⅴ区の中期前半の墓地は、182 調査区で前段階の墓地が南北に拡張して 93 基の甕棺墓が造営されており、一部は南北方向の列状を呈する。184 調査区では、南部の前段階の墓地が拡張して約 50 基の甕棺墓が造営されるとともに、北部で新たに 10 基程度の甕棺墓地が形成されている。中期初頭～中期前半の副葬品を伴う墳墓としては、184 調査区 SJ1777（汲田式古段階）の棺内から壮年～熟年の性別不明人骨と絹布片が、182 調査区 SJ1598（汲田式新段階）の棺内埋土から鋳造鉄斧片再加工品が、同 SJ1478 甕棺墓（汲田式）からガラス製管玉 1 点が、同 SJ1405・SJ1438・SJ1620（汲田式古段階）の棺内埋土から打製石鏃が各 1 点ずつ出土している。

吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区西側の丘陵上に位置する吉野ヶ里丘陵地区Ⅰ・Ⅳ・Ⅸ区では、中期初頭から中期前半にかけて小規模な集落が形成されている（図 56）。Ⅰ・Ⅳ・Ⅸ区が所在する丘陵は、古代官道（切り通し）によって分断されているが、北側に隣接する志波屋四の坪地区Ⅰ区が位置する志波屋・吉野ヶ里段丘と一連の地形である。なお、Ⅰ・Ⅳ・Ⅸ区に囲まれた丘陵上面には日吉宮が鎮座しており、神社

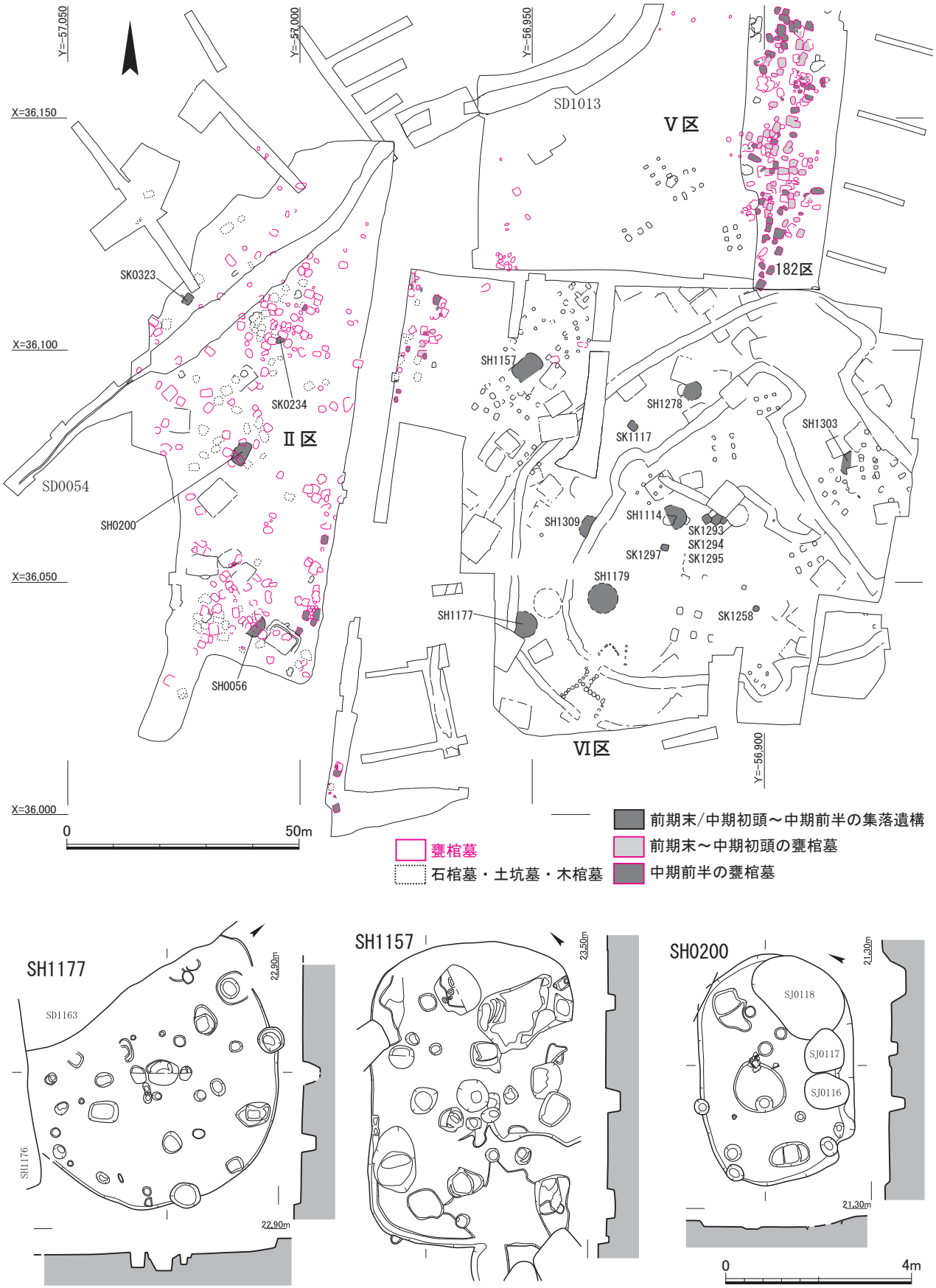


図 51　吉野ヶ里丘陵地区 II・VI区　前期末 / 中期初頭～中期前半の遺構分布略図（1/1,200）・中期前半の竪穴建物跡（1/120）

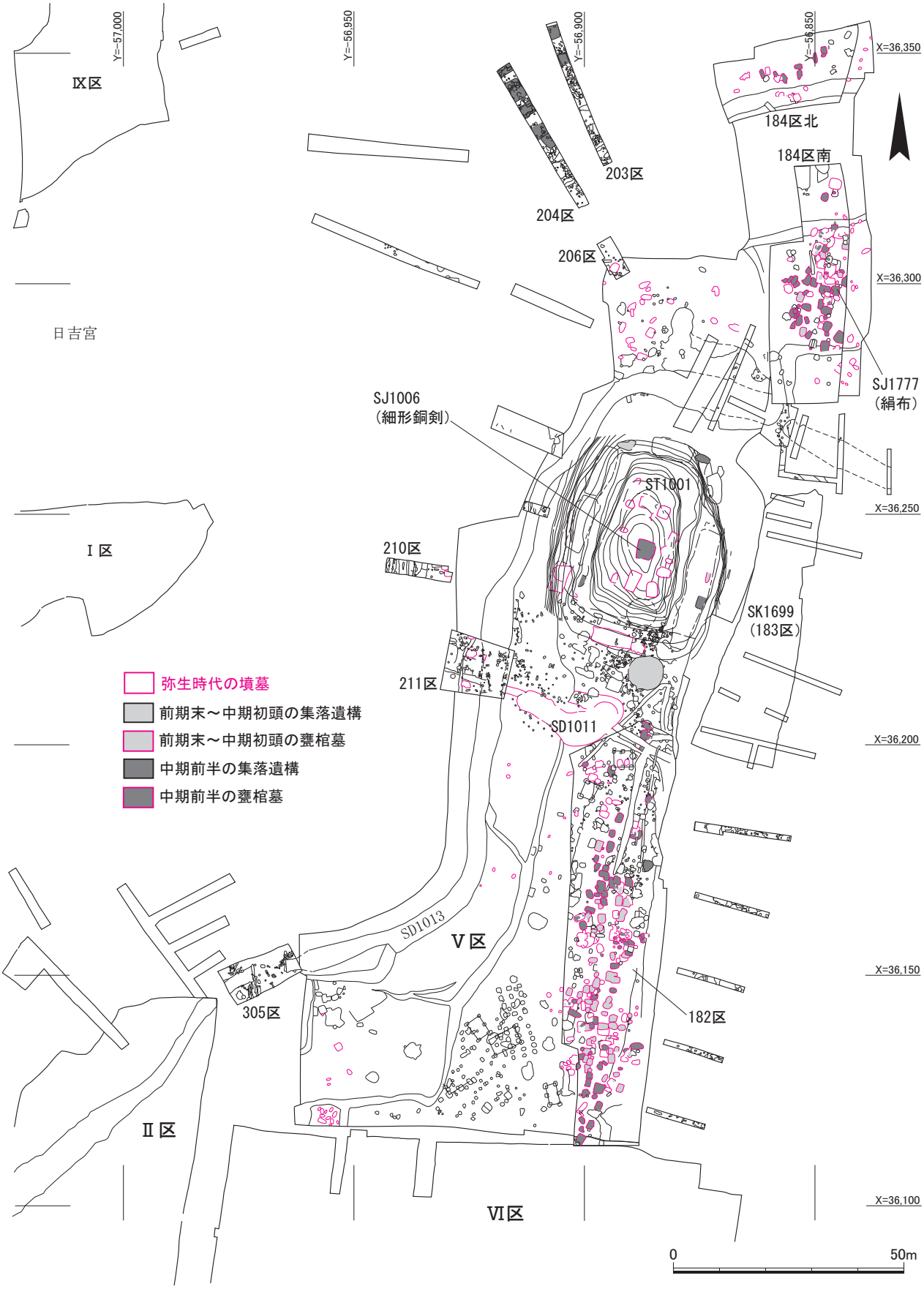


図 52　吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区　前期末 / 中期初頭～中期前半の遺構の分布（1/1,200）

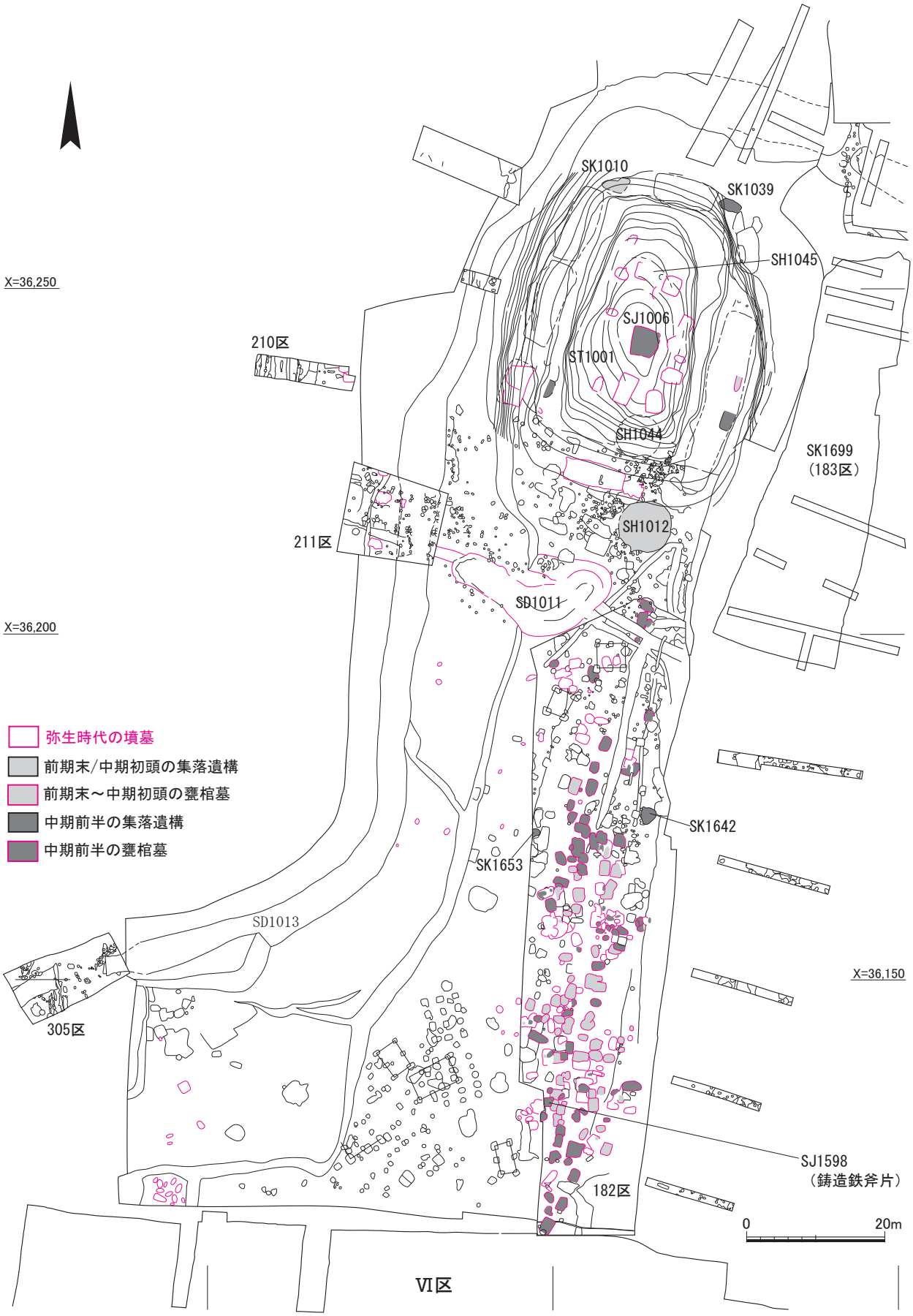


図 53　吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区中央～南部　前期末 / 中期初頭～中期前半の遺構の分布（1/800）

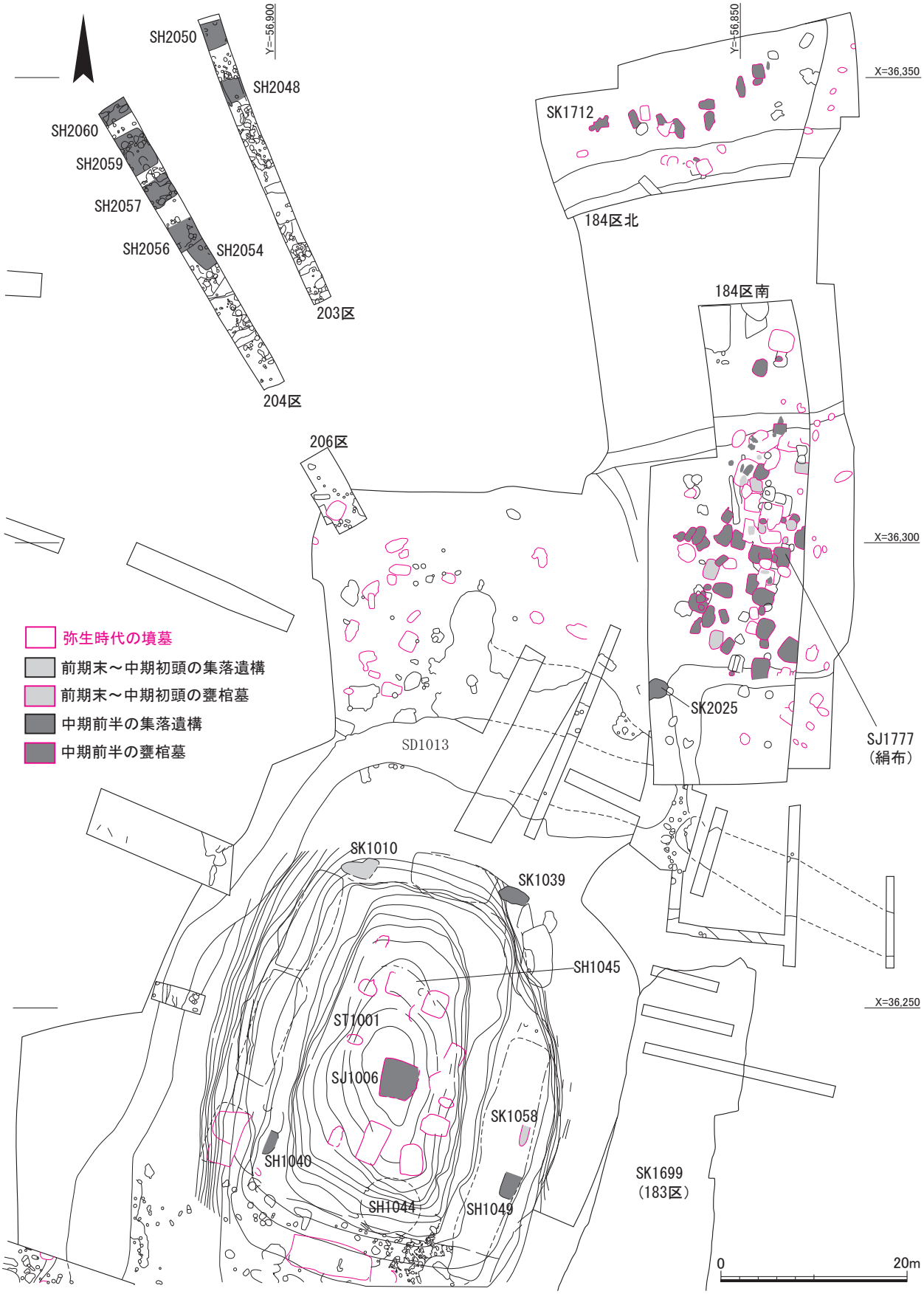


図 54　吉野ヶ里丘陵地区Ｖ区中央～北部　前期末 / 中期初頭～中期前半の遺構の分布（1/600）

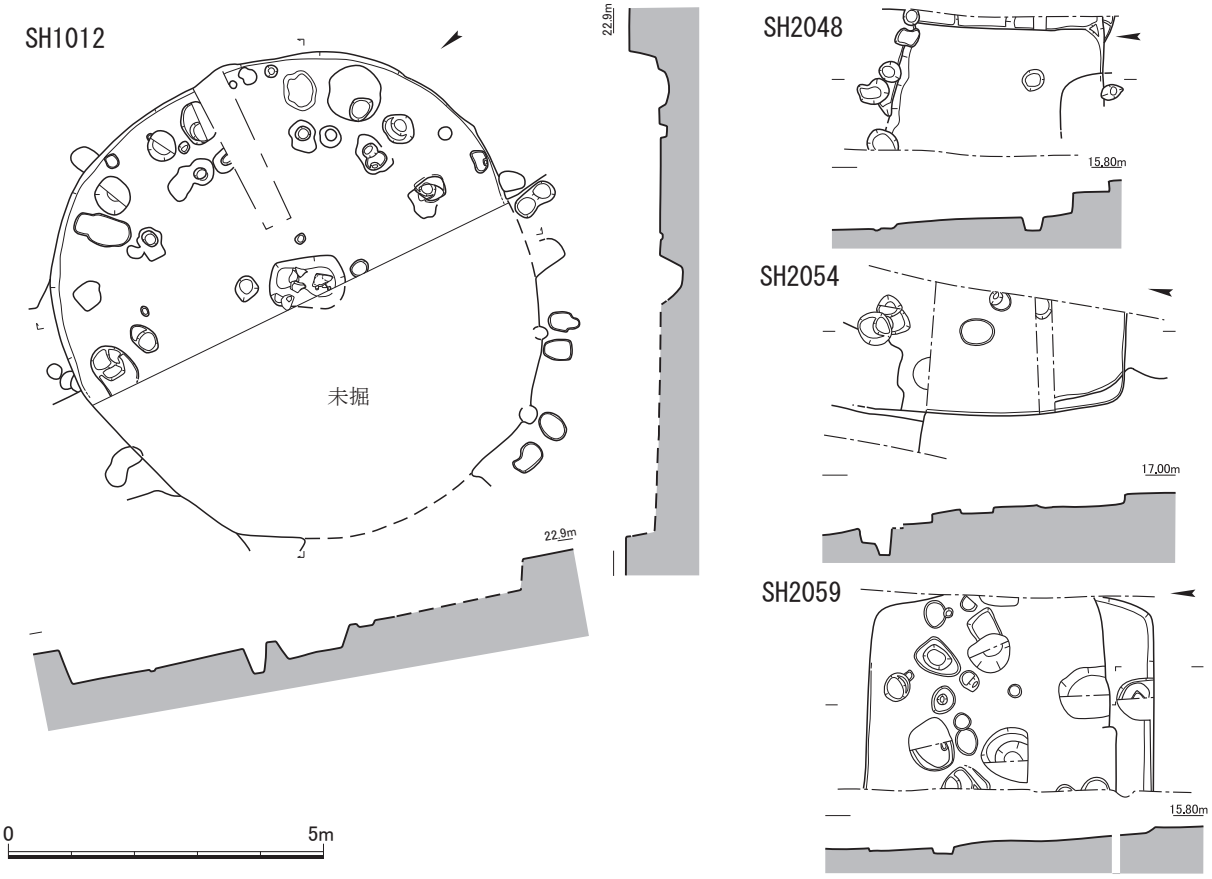


図 55　吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区　前期末 / 中期初頭〜中期前半の竪穴建物跡（1/120）

境内地を含む一帯は中世の日吉城に比定される山城跡である（佐賀県 2013）。

Ⅰ・Ⅸ区で検出された中期初頭〜中期前半の竪穴建物跡は、平面円形と長方形基調のものがある。建物の時期は、Ⅸ区 SH2790･SH2863 の 2 棟が中期初頭、SH2770･SH2837 が中期前半とみられる。また、Ⅸ区南西端部では中期初頭〜中期前半の土坑群が確認されているが、集落に伴う貯蔵穴または墳墓に伴う祭祀遺構と考えられる。中期前半には、丘陵緩斜面上に位置するⅠ区で平面隅丸長方形（小判形）の竪穴建物 5 棟が展開する。

墳墓は、中期前半にⅨ区で甕棺墓 70 基程度からなる墓地が形成されているが、Ⅸ区の墓地は志波屋四の坪地区Ⅰ区南部の墓地と元々連続していたと考えられる。なお、Ⅰ・Ⅳ区では中期前半の甕棺墓はほとんどみられず、墓地は中期後半から形成されている。吉野ヶ里丘陵地区Ⅰ・Ⅳ・Ⅸ区では、特にⅨ区において中期初頭〜中期前半の小規模な集落が展開した後、その近くに甕棺墓地が形成されているという状況がうかがえる。

このほか、特徴的な遺物としてⅣ区 SK0541 土坑から銅剣を掘り込んだ石製鋳型片が出土しており特筆される（図 57）（『113 集』、『207 集』）。銅剣の脊部分とみられる型が彫り込まれた面には黒く変色した部分がある。片側面には中央に 2 個連結された球状の突起をもつ棒状の形が彫り込まれているが、同様の型を有する鋳型が鳥栖市本行遺跡（鳥栖市 1997）や小城市土生遺跡（三日月町 2005）で出土している。SK0541 土坑の出土土器が古墳時代後期〜古代であることから、鋳型は周囲の遺構からの混入と考えられるが、周辺には該当するような遺構は確認されておらず、鋳型が本来どのような遺構に伴うのかは明らかでない。前述したように、中期の青銅器生産に関連する遺構、遺物は遺跡南部に集中し

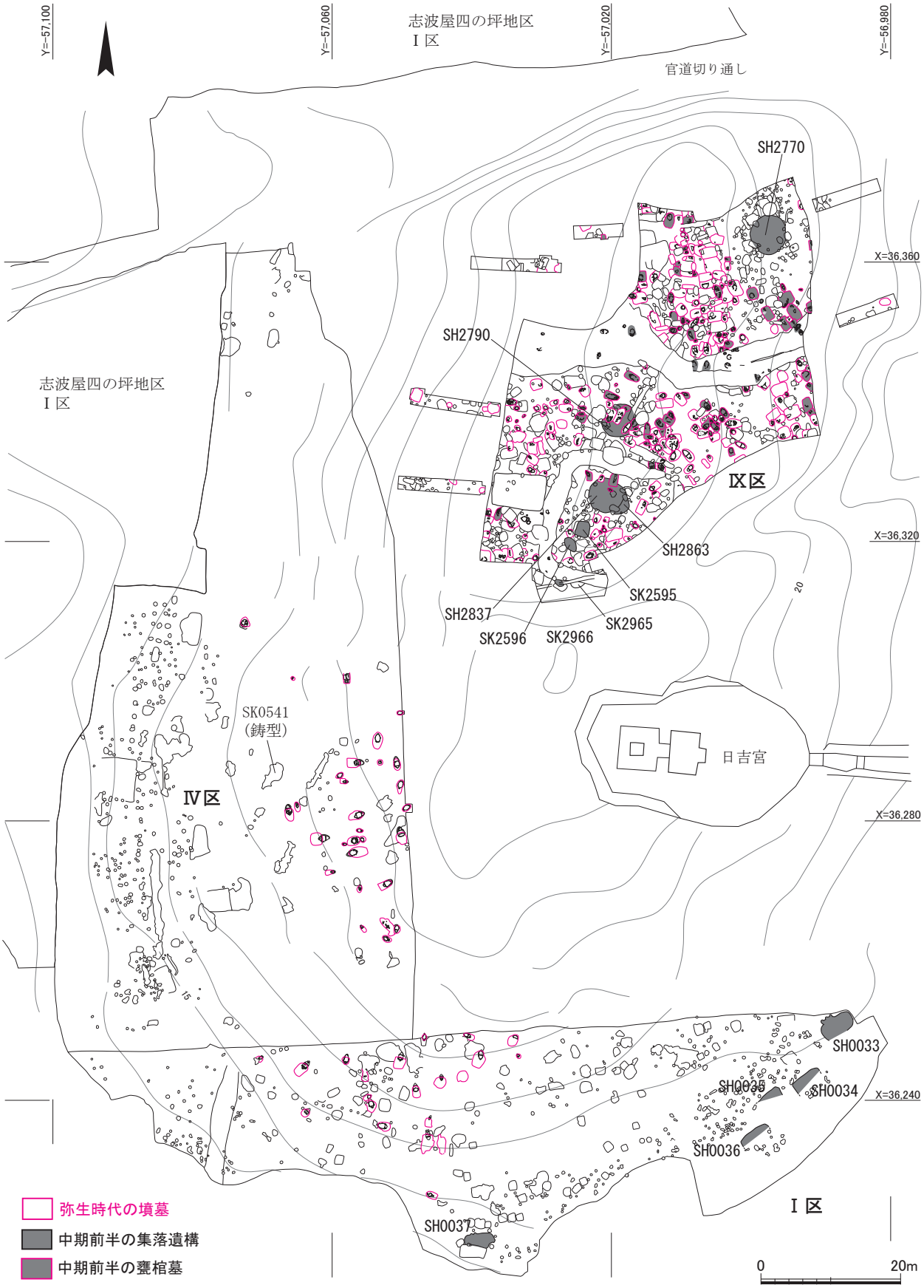


図 56　遺跡中央部　吉野ヶ里丘陵地区Ⅰ・Ⅳ・Ⅸ区　中期前半の遺構の分布（1/800）

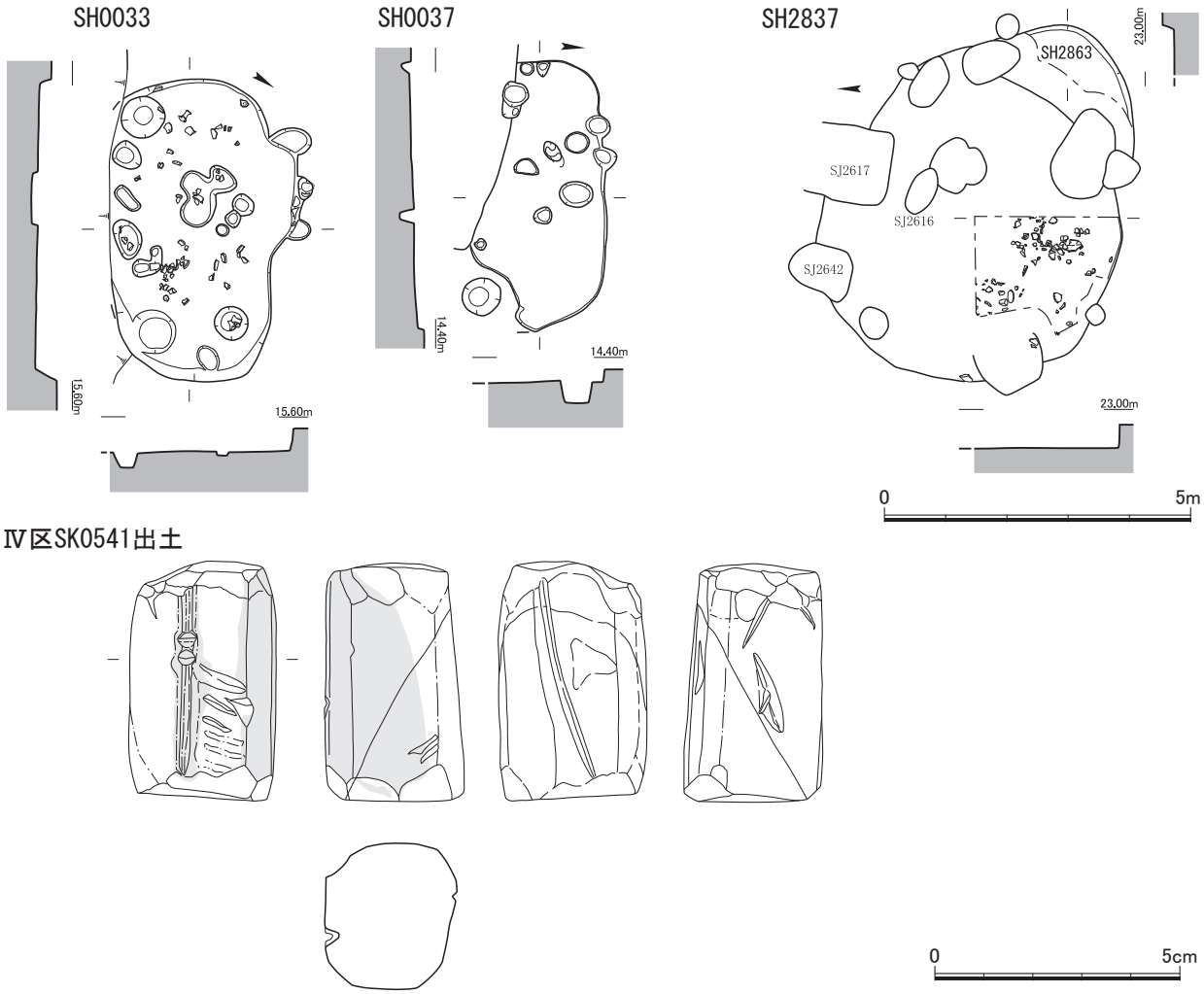


図 57　吉野ヶ里丘陵地区Ⅰ・Ⅸ区中期前半の竪穴建物跡（1/120）・Ⅳ区 SK0541 土坑出土鋳型（2/3）

ているが、本区域やその周辺においても関連する遺構、遺物が存在する可能性がある。

遺跡北部の墓地と集落

遺跡北部では、最北端の志波屋六の坪（乙）遺跡Ⅰ区、志波屋六の坪（甲）遺跡で前期末～中期初頭の小規模な集落が展開している。志波屋三の坪（甲）遺跡、志波屋三の坪（乙）地区、志波屋四の坪地区Ⅰ・Ⅱ区では、前期後半～中期前半の集落と墓地が展開している。『佐賀県遺跡地図』及び『207 集』では吉野ヶ里遺跡の範囲から除外されている箇所も含まれるが、吉野ヶ里遺跡最北部の北側に隣接する遺跡（調査区）の状況についてみておきたい。

最北端の志波屋六の坪（乙）遺跡Ⅰ区では、前期末～中期初頭の円形竪穴建物 5 棟や貯蔵穴・土坑からなる集落が形成されている（図 59）（『113 集』,『207 集』）。なお、弥生時代の墳墓は確認されていない。特筆されるのは、SH0089 竪穴建物跡から出土した有柄式磨製石剣である（『177 集』,『207 集』）。切先を欠損するが、柄部分は完存する。石材は層灰岩で、全体的に黄白色に風化しているが、石材の葉理方向と刃縁とが平行する。いわゆる朝鮮系の有柄式石剣であり、福岡県小郡市横隈鍋倉遺跡出土の石剣と類似している。石剣は建物床面からやや浮いた位置から出土し、建物内からは他に中期初頭の土器片が少量出土しているのみである。本区域及び近辺では弥生時代の墳墓が分布していないことから、石

剣が墳墓に伴う可能性は低い。石剣の本来の所属時期は前期に遡る可能性がある。

志波屋六の坪（甲）遺跡では、前期前半とみられる竪穴建物跡１棟（SH0045）と、前期末～中期初頭の貯蔵穴とみられる土坑群が確認されている。前期末～中期初頭の土坑は、本遺跡南に隣接する志波屋三の坪（甲）遺跡の竪穴建物と貯蔵穴からなる集落と同様、小規模な集落が展開していたことを示すと考えられる（『113 集』,『207 集』）。

志波屋三の坪（甲）遺跡では、前期末～中期初頭に竪穴建物５棟と貯蔵穴からなる集落が形成されている（図 60）（『207 集』）。墓地は、中期初頭の甕棺墓が３基、中期前半の甕棺墓が３基と数は少ないが、中期後半以降に甕棺墓が 30 基に増加しており、中期末に終焉する。

志波屋三の坪（乙）地区では、前期の項で述べたように、前期後半～前期末の集落が形成された後、前期末～中期初頭の甕棺墓 13 基からなる小規模な墓地が形成されている（図 27）。墓地は中期前半まで継続し、それまでの墓地の西隣に甕棺墓 17 基が展開しているが、中期後半以降には継続していない。

志波屋四の坪地区では、前期後半代に続いて前期末 / 中期初頭～中期前半の円形竪穴建物と貯蔵穴からなる集落が展開している（図 61）。集落遺構の分布は、主にⅠ区南部（SH0508・SH0510 など）とⅠ区北西部（SH0542・SH0547 など）の２箇所に分かれて展開しており、前期後半代の集落が継続している。中期前半には、Ⅰ区南部西側の丘陵緩斜面上に平面小判形の竪穴建物（SH1002）が展開している。SH1002 建物跡は長軸 4.3m と比較的小型であるが、短軸の片側にピット列を有する特異な構造で、内部からは中期前半の土器とともに磨製石剣や鐸形土製品が出土しており注目される（図 64）。

墓地は、Ⅱ区 382 調査区で前期末～中期初頭に甕棺墓 30 基程度からなる小規模な墓地が展開している（図 26）。副葬品を伴う墳墓は無く、一般的な墓地であったとみられる。注目されるのは 382 調査区 SJ1815 甕棺墓で、上甕は口縁が広く外反し、胴部外面には帯状の黒塗りが施されている。SJ1815 下甕は口縁部外面に指頭圧痕が巡っており、一部は指紋が残存している。器形は胴部下半が僅かに膨らんでおり、壺の形態の名残りとみられる。全体的に器壁が厚く重量があり、表面には凹凸がみられ、粗いナデ調整が施されている。詳しい検討が必要だが、朝鮮系無文土器の影響を受けて作られた可能性がある（図 26-2）。なお、前期末～中期初頭の段階では、本区域の墳墓の分布範囲は 382 調査区にほぼ限定されており、同時期の集落と墓地とが近接して営まれている状況がうかがえる。

中期前半になると甕棺墓が急激に増加し、Ⅰ・Ⅱ区の墓地全域に墳墓が造営されるようになる（図 62,63）。特に、Ⅰ区南部からⅡ区にかけて、前期末～中期初頭に形成された 382 調査区の墓地を起点とするかのように、その南北に長大な甕棺墓列が展開する（図 61）。なお、Ⅱ区とⅠ区北東部の間は未発掘であるが、地下レーダー探査の結果、甕棺墓列が連続していることが判明している（西村 2000、桑原 2001）。このことから、列埋葬は本区域全体で約 450m の長さに渡って延びていたことが明らかになっている。甕棺墓列は中期後半以降にも継続しており、墳墓造営の最盛期を迎える。

志波屋四の坪地区の中期前半の墓地で特筆されるのは、南北方向の墓列とは異なり、北西 - 南東方向に斜めに展開する墓列が存在することである。斜めの墓列は、Ⅱ区南東部の 368・380 調査区から 369・389・391 調査区を通ってⅠ区北西部へと連続しており、墓列全体の長さは約 180m に及ぶ（図 62）。南北の墓列と斜めの墓列はⅡ区中央の 369 調査区で交差しているが、ふたつの墓列を構成する墳墓は互いに重複していない。また、二つの墓列は中期後半にも継続しているが、斜めの墓列は中期末以降には継続していない（『211 集』、『214 集』、『222 集』）。このように二つの墓列が交差する例は他に

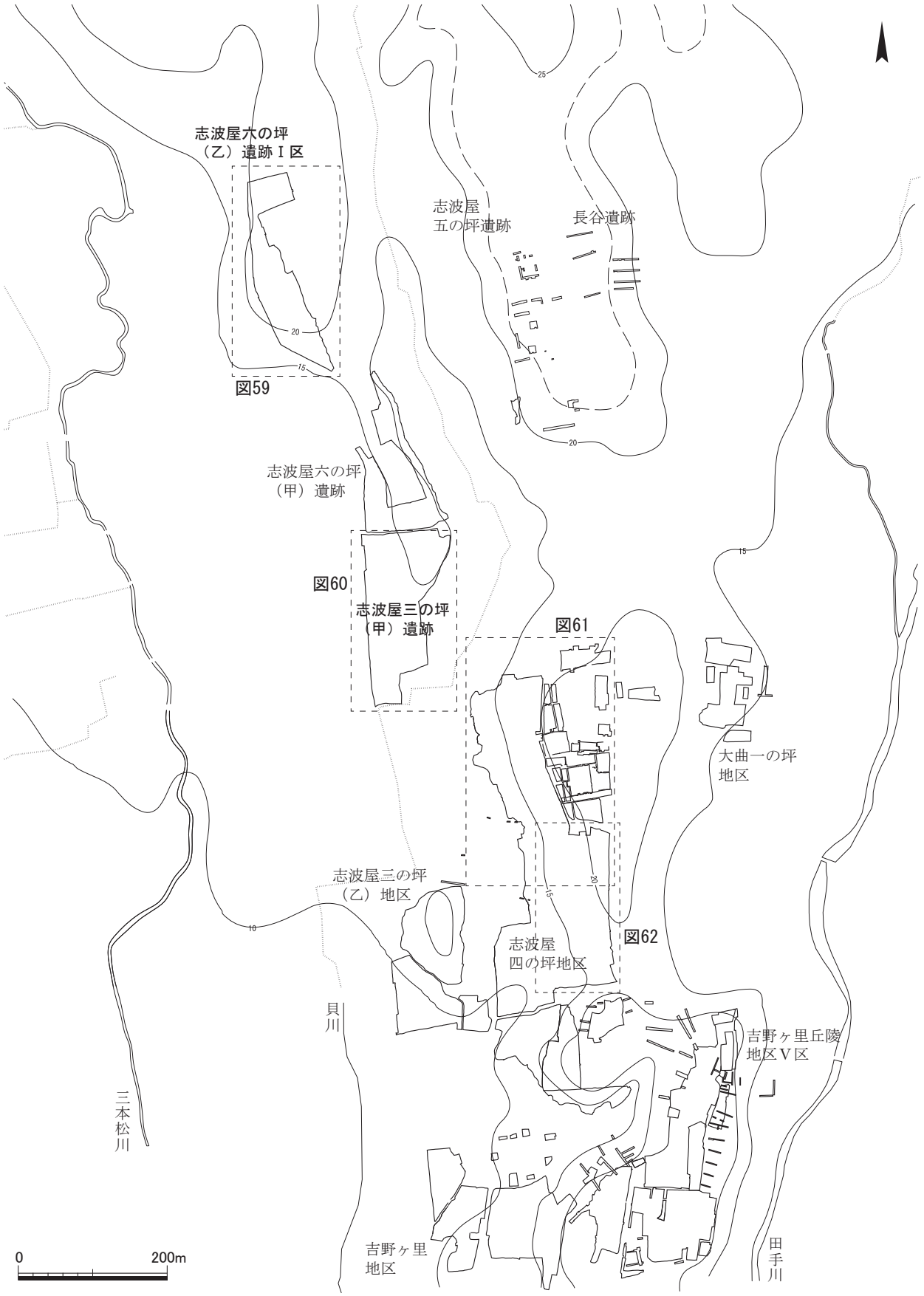


図 58　吉野ヶ里遺跡北端部の遺跡（調査区）の位置（1/7,500）

図 59　志波屋六の坪（乙）遺跡Ⅰ区　遺構の分布（1/1,250）・SH0089 竪穴建物跡（1/100）・出土石剣（1/3）

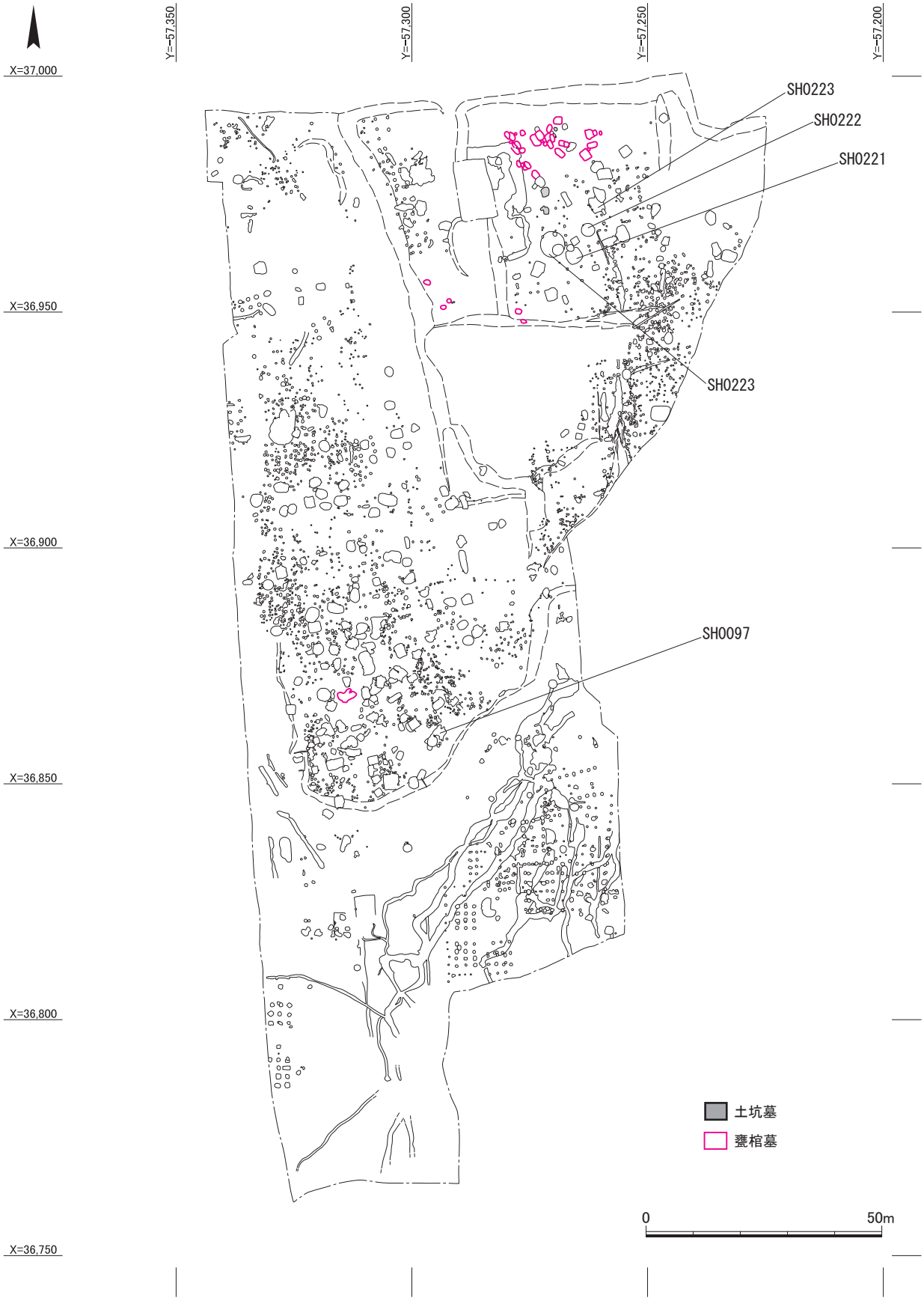


図 60　志波屋三の坪（甲）遺跡　遺構の分布（1/1,200）

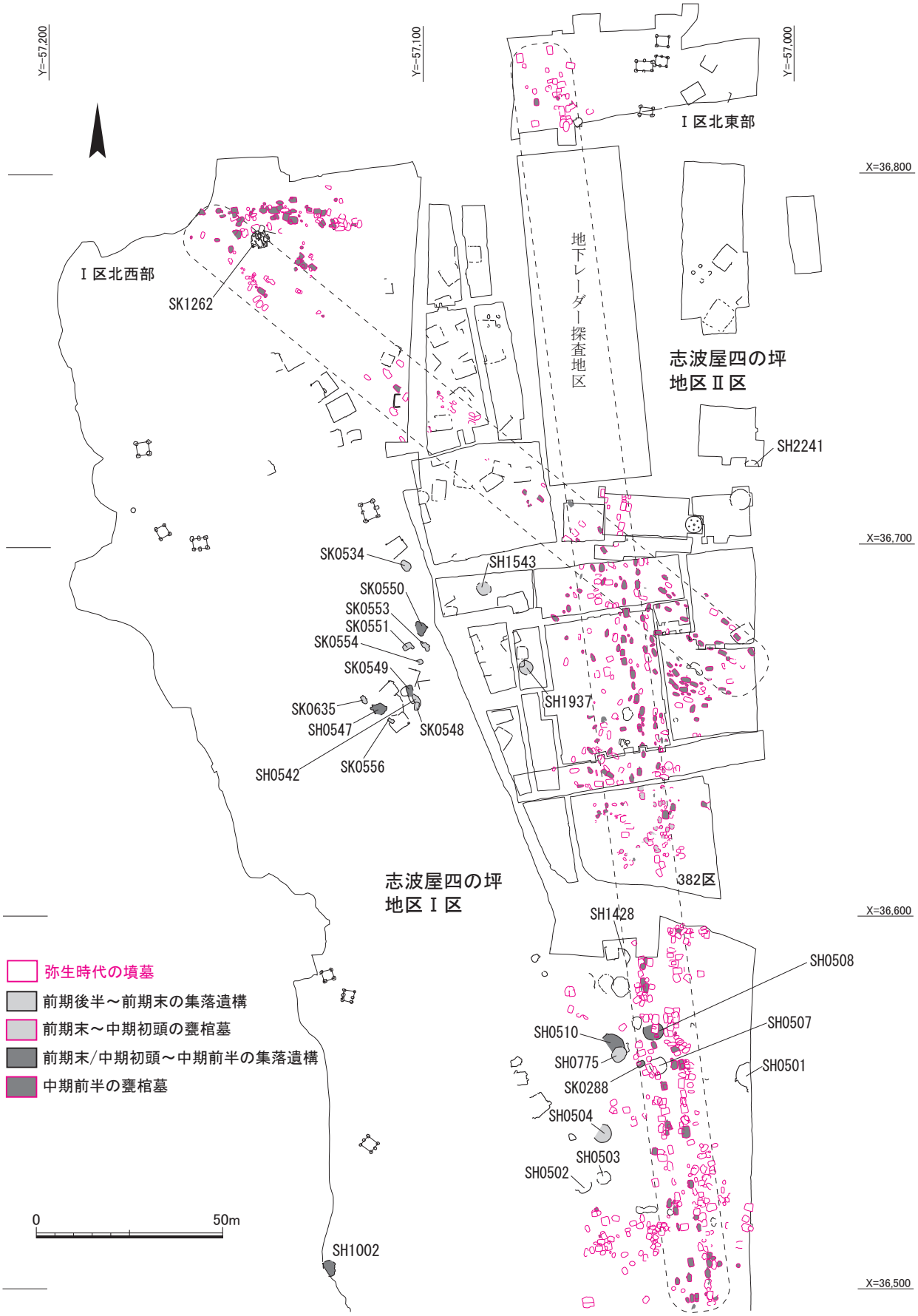


図 61　志波屋四の坪地区Ⅰ区北部・Ⅱ区　前期末 / 中期初頭～中期前半の遺構の分布（1/1,500）

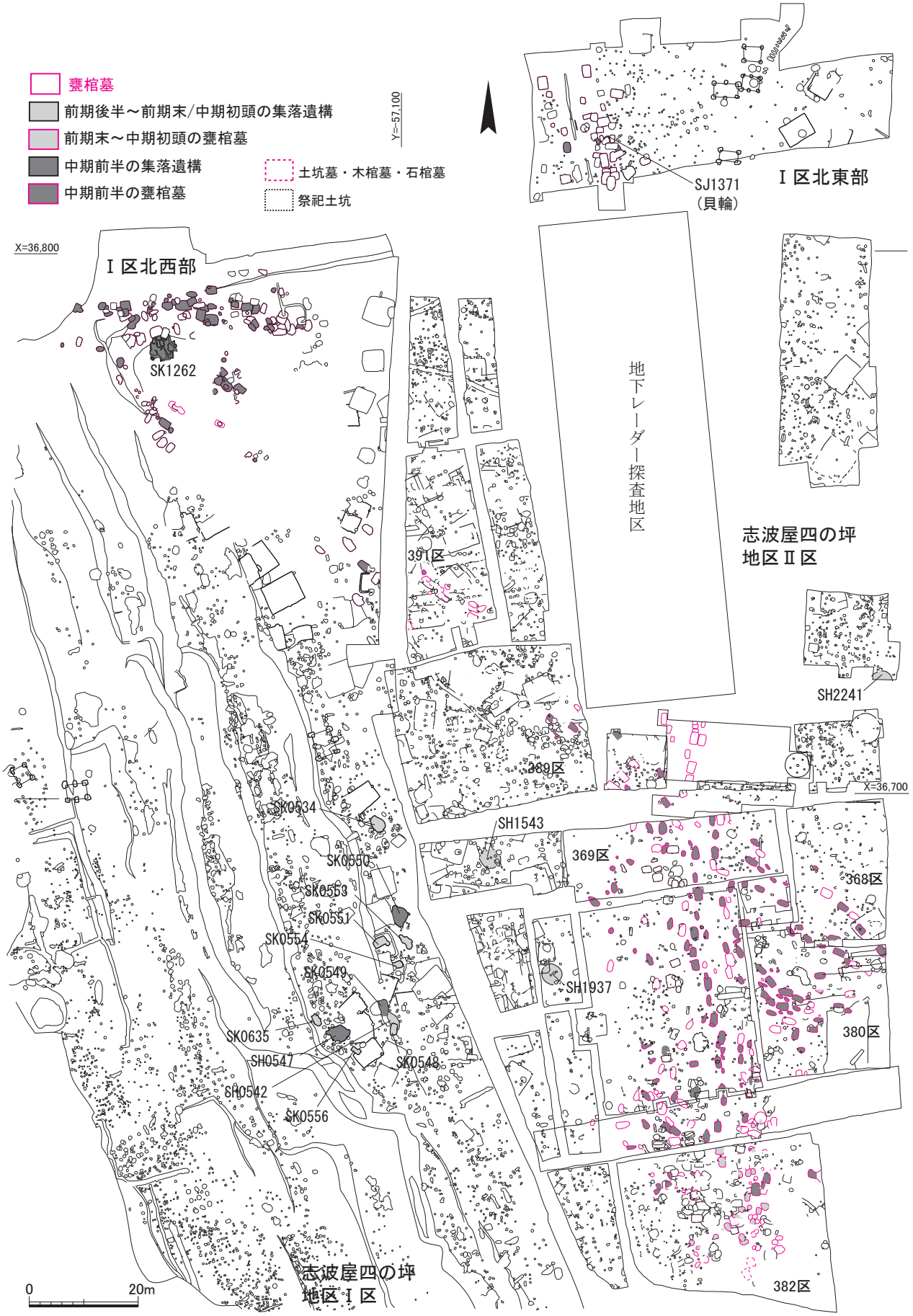


図 62　志波屋四の坪地区Ⅰ区北部・Ⅱ区　中期前半の遺構の分布（1/1,000）

図 63　志波屋四の坪地区Ⅰ区南部　中期前半の遺構の分布（1/1,000）

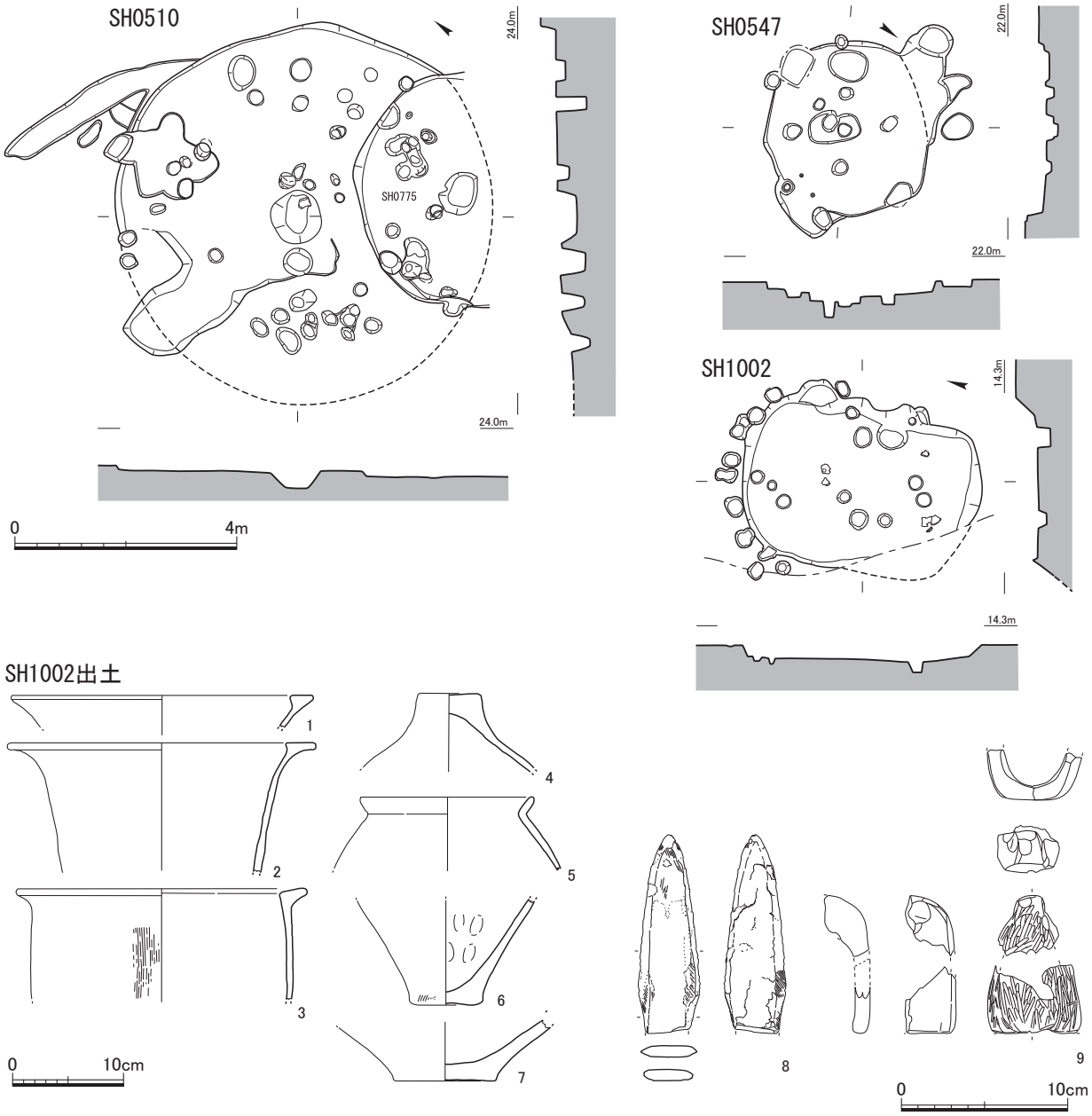


図 64　志波屋四の坪地区Ⅰ区　前期末 / 中期初頭～中期前半の竪穴建物跡（1/120）・SH1002 出土遺物（1/6,1/4）

みられず、現時点では斜めの墓列が形成された背景などは明らかでないが、墳墓数や存続時期幅、丘陵尾根上に展開することなどからみて、南北方向の墓列が中心的な墓群であることは明らかである。中期前半には遺跡全体の各所で甕棺墓列の形成が進むことから、複数の墓列が累積した結果、本区域では中期後半に南北方向の墓列へと収斂したと考えられる。

Ⅰ区南部では、丘陵尾根上に前期後半～前期末の円形竪穴建物 1 棟（SH0775）、前期末～中期初頭の円形竪穴建物 3 棟（SH0504・SH0508・SH0510）のほか、詳細な時期が不明の円形竪穴建物 4 棟（SH0501・SH0502・SH0503・SH0507）が展開しており、甕棺墓列と重複しないものの近接している。そのため、Ⅰ区南部の円形竪穴建物群が埋没したあとに甕棺墓列が形成されたとみられる。甕棺墓は中期前半古相（汲田式古段階）から出現しており、2 列基調の列埋葬が営まれている。

副葬品を伴う中期前半の墳墓は 4 基あり、いずれも甕棺墓列の一部として埋葬されている。墓列の

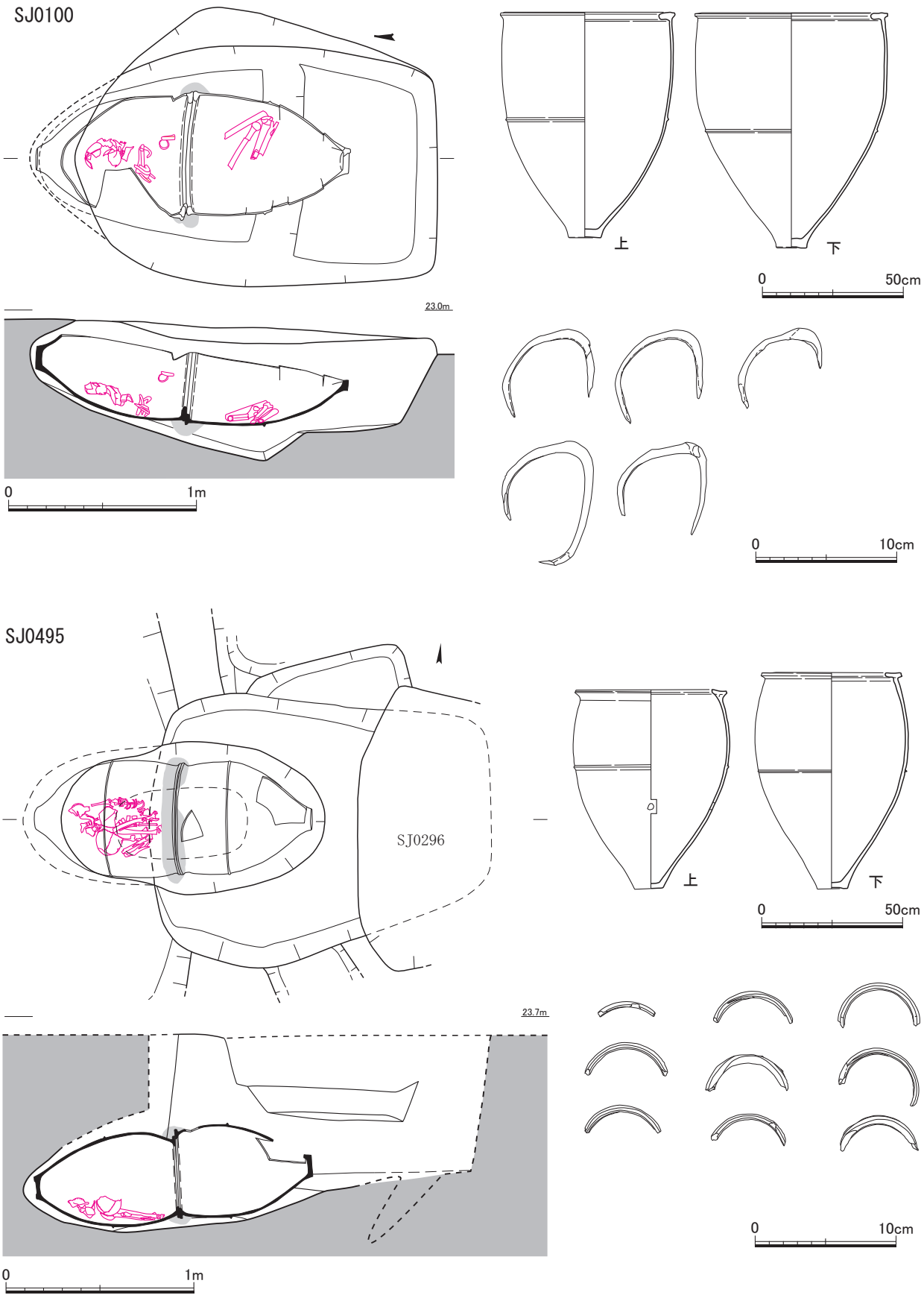


図 65　志波屋四の坪地区Ⅰ区　中期前半の墳墓と副葬品（遺構 1/30, 甕棺 1/20, 貝輪 1/4）

中央南に位置するSJ0100甕棺墓（汲田式古段階）からは、壮年女性人骨の右前腕部に装着された状態でゴホウラ製の縦切型貝輪6点が出土している（図65上）。墓列北部のSJ0495甕棺墓（汲田式古段階）からは、性別不明の小児（8～10歳）人骨の左前腕部に装着された状態でイモガイ製の横切型貝輪9点が出土している（図65下）。特に、SJ0495の小児人骨と貝輪は、幼少期の段階からすでに明確な身分差が生じていたことを示す資料として注目される。このほか、SJ0297甕棺墓（汲田式新段階）からはイモガイ製の貝輪小片が、Ⅰ区北東部のSJ1371（汲田式新段階）からはゴホウラ製の貝輪小片がそれぞれ出土している（『214集』）。

Ⅰ区北西部では、中期前半の甕棺墓約70基からなるまとまった墓地が出現している（図62）。甕棺墓地一帯は近現代の墓地等によって大きく削平されていたことから、本来の墳墓数はさらに多かったと推測される。位置的に、これらの墓地は前述した北西-南東方向の斜めの墓列の先端部分にあたる。また、墓地のほぼ中央に位置するSK1262は径5.1mの大型の円形土坑で、埋土からは建物とみられる線刻が施された広口壺（図126-5）を含め、ほぼ完形の土器がまとまって出土していることから、墓地に伴う祭祀土坑と考えられる（『214集』）。なお、墓地の近辺からは同時期の集落遺構は確認されていない。

中期前半の志波屋四の坪地区では、集落遺構数の少なさに対して圧倒的な数の甕棺墓が造営されており、主に墓地として利用されている。後述するように、この傾向は中期後半以降にも継続している。前述したとおり、前期後半から中期前半にかけて、遺跡南部の田手二本黒木地区一帯に中心的な集落域が形成されているが、中期前半の段階から、集落域と墓域とが明確に区別され始めたとみられる。

青銅器の出現と生産

本遺跡で最古の青銅器は、遺跡南端部の田手一本黒木地区Ⅰ区326調査区SJ0100甕棺墓（城ノ越式）の棺内から出土した細形銅剣である（図33）。青銅器の生産は遺跡南部で中期初頭～前半に始まったとみられるが、その根拠となるのが田手二本黒木地区Ⅲ区154調査区SK0404土坑である（図66）。SK0404は平面不整形の大型土坑で、規模は東西約6m、深さ約1.2～1.4m、法面は擂鉢状に傾斜する。土坑の床面には、貼床とみられる粘質土が20～40cm程度堆積していた。埋土からは、中期初頭～前半の土器とともに、4面を使用した石製鋳型、青銅片、錫塊、鉱滓、炉壁とみられる焼土片、炭化物といった青銅器鋳造関連遺物のほか、高熱で変形した弥生土器片なども出土している。このほか、青銅製素環頭付鉄刀子、鋳造鉄斧片再加工の鉄ノミ、翡翠製勾玉、碧玉製管玉2点、ガラス小玉2点、鐸形土製品、土弾などが出土している（『132集』,『207集』）。

SK0404土坑から出土した鋳型（図67-5）は4面に型が彫り込まれており、1面が銅矛、3面が銅剣である。彫り込まれた順序は、図のB・C面（銅剣）→A面（銅矛）→D面（銅剣）と考えられ、B・C面の銅剣が型式的に細形であるのに対し、最後に掘り込まれたD面は中細形の可能性がある（『113集』、『207集』）。また、SK0404土坑に近い7調査区からは、表裏両面に銅矛が彫り込まれた石製鋳型片（図67-6）が出土している。A面は双耳で3条節帯の袋部が、B面は切先部の型が彫り込まれており、A面→B面の順に彫り込まれたとみられる（『207集』）。このほか、147調査区からは銅矛の中子とみられる土製品（図67-4）が出土している。

SK0404土坑は、中期前半代の集落中心部である316・318・346調査区とは約100m離れた位置にあり、土坑の周辺には同時期の集落遺構はほとんど展開していない。SK0404土坑の性格については、青銅器

鋳造に係る工房、あるいは工房に伴う廃棄土坑と考えられ、隣接する SX0222 盛土遺構（南祭壇・墳丘墓？）の採土場であった可能性もある（『207 集』、『219 集』）。このほか、吉野ヶ里遺跡の発掘調査前に実施された圃場整備に伴う調査で、SK0404 の南西約 140m の地点（三田川町調査　田手二本黒木遺跡Ⅲ区）（図 66）から石製鋳型片が出土している。鋳型は部分的に黒変が見られ、両面に銅剣の脊部分が彫り込まれており、のちに砥石に転用されている（三田川町教委 1990、『113 集』）。

なお、前項でも述べたように、前期後半代の SD0001 環壕からは青銅器鋳造に関連するとみられる土製品（図 67-1,2：鞴の羽口、3：取瓶）が、367 調査区 SD0336 環壕からは銅滓の可能性がある遺物（『222 集』）が出土しており、青銅器の鋳造が前期末頃に遡るのではないかとみる根拠にもなっている。これらの遺物の出土状況を詳しくみてみると、1 は SD0001 環壕 2 ～ 3 アゼ間上部の別遺構との重複部分から出土しており、2 点の土器と共伴している（『207 集』第 1 分冊図 121-419・420）。2 は SD0001 環壕下部から出土している。前期後半代の環壕から鋳型は出土していないことから、現時点では青銅器生産の開始が前期後半代に遡るかは明らかでなく、SK0404 土坑の時期である中期初頭～中期前半から開始したとみるべきであろう。このほか、遺跡南部の吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区 316 調査区 SH2400 竪穴建物跡から、平面 C 字形の環状青銅製品が 2 点出土している（図 68-21,22）。径 2.5cm 程度の小型の青銅製品で、建物内部から 2 点並んだ状態で出土した。ほぼ同形同大で、2 点 1 対で使用されたと考えられる。共伴土器は中期初頭～中期前半である。類例がなく明確でないが、耳環と考えられる（『207 集』）。

鉄器の出現

本遺跡で鉄器が出現するのは中期初頭と考えられる。出現期の鉄器として鋳造鉄斧の破片が 14 点確認されている（図 68）。これらは鉄ノミ（4,5,14）や板状鉄斧（1,3,8,9）などに再加工されたものと、破片のまま未加工のもの（2,6,7,10 ～ 13）とがある。出土状況をみると、吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区 182 調査区 SJ1598 甕棺墓（汲田式）の棺内埋土から未加工の鋳造鉄斧片が出土した 1 例（10）を除き、全て集落域から出土している。出土地点は中期初頭～中期前半の中心的な集落域である遺跡南部が最も多い。出土遺構の時期は中期～後期と幅があるが、最も古いのは遺跡南部の SD0336 環壕埋土上層から出土した 2 点（1,2）で、中期初頭とみられる。なお、図示した 2,8,11 の 3 点は、金属学的分析調査の結果、焼きなまし脱炭処理が施された可鍛鋳鉄と判明しており、EPMA 分析の結果、微量の Ag（銀）が含まれていることなどから、出土鉄器の原料鉱石の産地として山東省金嶺鎮鉱山の可能性が指摘されている（大澤 2016：『211 集』）。

このほか、吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区 316 調査区 SK2490 土坑の下層から、中期初頭の土器とともに器種不明の棒状鉄製品（鉄釘？）が出土している（15）。また、早い時期に舶載された鉄器として、集落域では田手二本黒木地区Ⅲ区 154 調査区 SK0404 大型土坑（中期初頭～中期前半）出土の青銅製素環頭付鉄刀子（16）、墓地では吉野ヶ里地区Ⅱ区 SJ0298 甕棺墓（中期前半新相：汲田式新段階）棺内出土の環状鉄製品（蝶番）（17）、志波屋四の坪地区Ⅱ区 SJ1562 甕棺墓（中期後半古相：須玖式古段階）棺内出土の不明鉄製品（鉄鎌？）（19）、などがある。特に、青銅製素環頭付鉄刀子は中国戦国時代前期に類例が求められる優品で、日本列島内ではこれまで他に出土例がない資料であり特筆される。中国大陸では本来、鉄刀子は文字を書く木簡や竹簡を削るための書刀（削刀）として用いられていたものであり（村上 1992）、どのような背景のもとに舶載されたのか興味深い資料である。

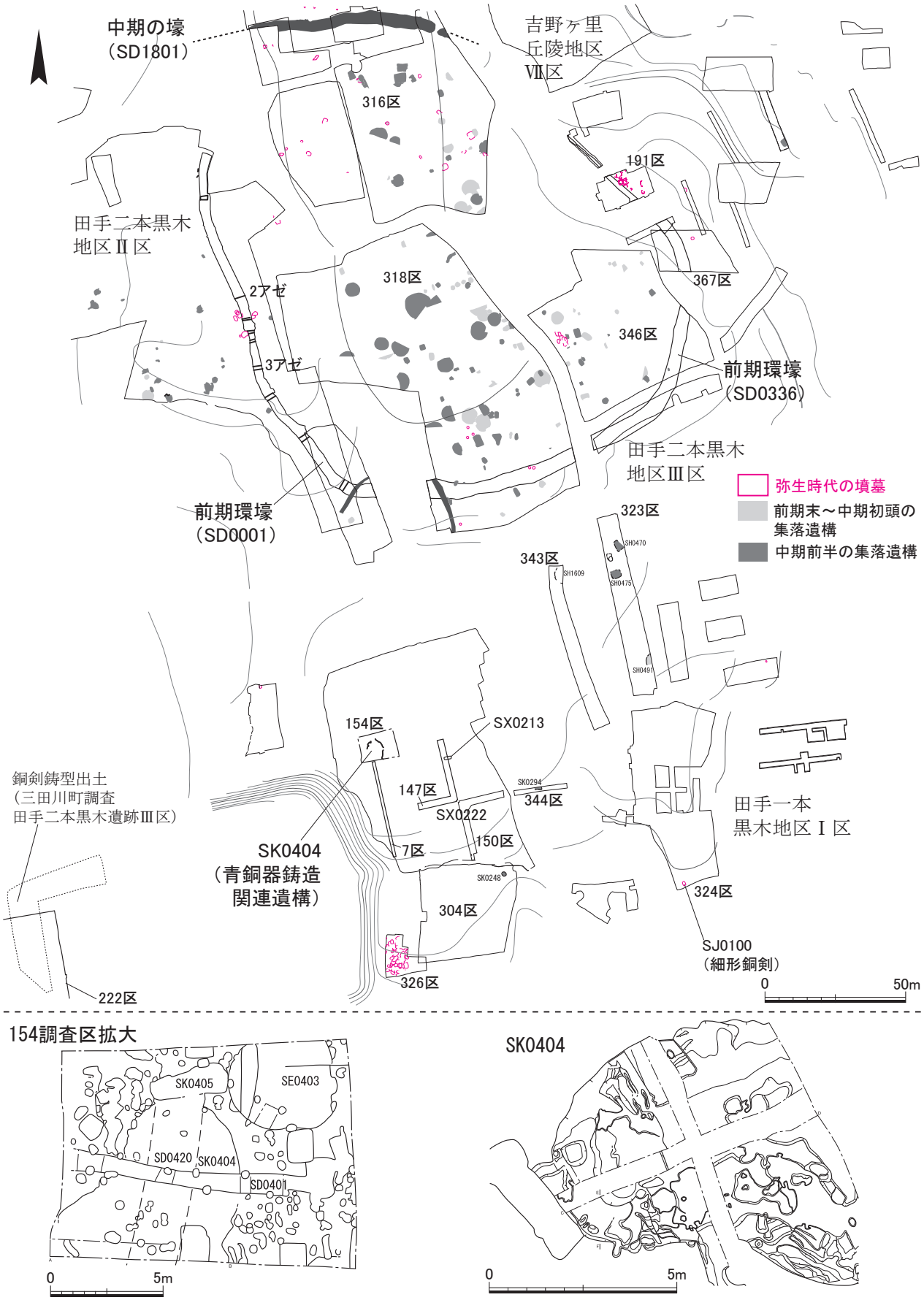


図 66　遺跡南部　遺構の分布略図（1/2,000）・154 調査区拡大（1/250）・SK0404 土坑（1/150）

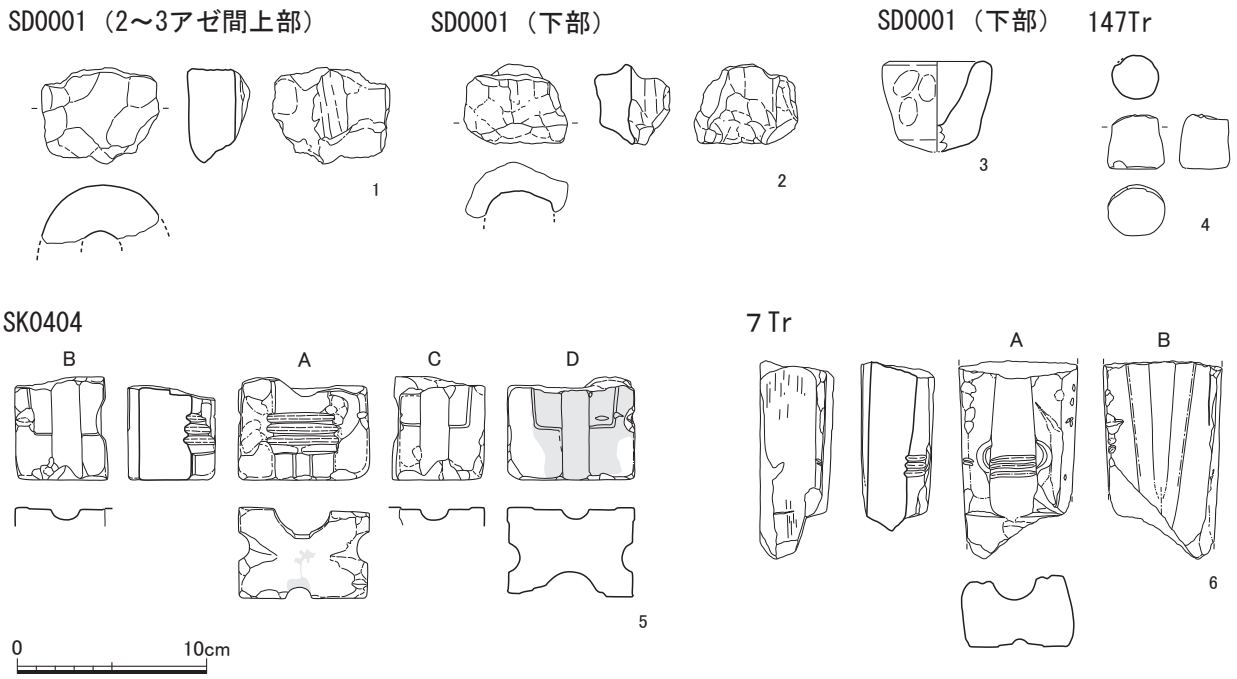


図 67　青銅器鋳造関連遺物（1/4）

朝鮮系無文土器

中期初頭～中期前半の遺跡南部において青銅器生産とともに特筆されるのは、朝鮮系無文土器の集中的な出土である（図 69,70,71）。25 点を図示しているが、比較的判別しやすい円形粘土帯の甕口縁部片や牛角把手付壺の破片が中心であり、全形が判明するものは少ない。甕は、口縁断面に円形粘土帯が貼付けられたものが主体であるが、図 70-6 のように三角形に近い形態のものもあり、時期差がある。壺は、牛角把手部分を上からみた時に穴が三角形になるタイプと円形になるタイプがあり、円形が後出すると考えられ、時期差がある（『207 集』）。無文土器の出土地点は、遺跡南部の集落中心部である 316・318・346 調査区にほぼ限定され、ほかに遺跡南端部の 150 調査区で 2 点出土しているが、それ以外の区域ではほとんど出土しておらず、明らかな分布の偏りが認められる。共伴する土器は、弥生時代前期末～中期初頭が多い。出土遺構は、SD0336 環壕上層や竪穴建物跡、貯蔵穴・土坑などであり、特定の遺構から偏って出土する状況は認められない。このほか、中央土坑とその両脇に一対の主柱穴を有する、いわゆる松菊里型住居跡は、遺跡南部を中心に数多く展開しており、一部は無文土器の出土地点と重なっている（図 69）。

石器の盛行

前期末 / 中期初頭～中期前半は、集落の規模・範囲の拡大に伴い、実用具である石器の利用が最盛期を迎える時期である。大陸系磨製石器は、前期後半に比べて出土数量や分布範囲が拡大している。また、広域流通品（今山産玄武岩製太形蛤刃石斧、立岩産赤紫色泥岩製石庖丁、菫青石ホルンフェルス製石器、層灰岩製片刃石斧）が急増し、各器種の主体を占めるものもみられるようになる。打製石器は、前期後半に比べて出土数量が飛躍的に増大している。石材は前期と同様に黒曜石と安山岩のみである。定型的な器種は打製石鏃、打製石錐に限られるが、不定形のスクレイパーや、部分的に調整剥離を施して刃部とした石器（二次加工剥片）、剥片の鋭い縁辺部を刃部として利用した石器（使用痕のある剥片）など

が圧倒的に多い。なお、原石や石核のほかに大量の剥片、砕片が出土しており、石器製作が活発に行われていたことがうかがえる。なお、石器総体については第２節４で後述する。

（２）中期後半

中期後半になると遺跡全体で集落規模が縮小している。一方、墓地では甕棺墓の造営が最盛期を迎えており、集落と墓地とで盛行期に大きな差がみられる。また、中期前半のうちに築造されたとみられ

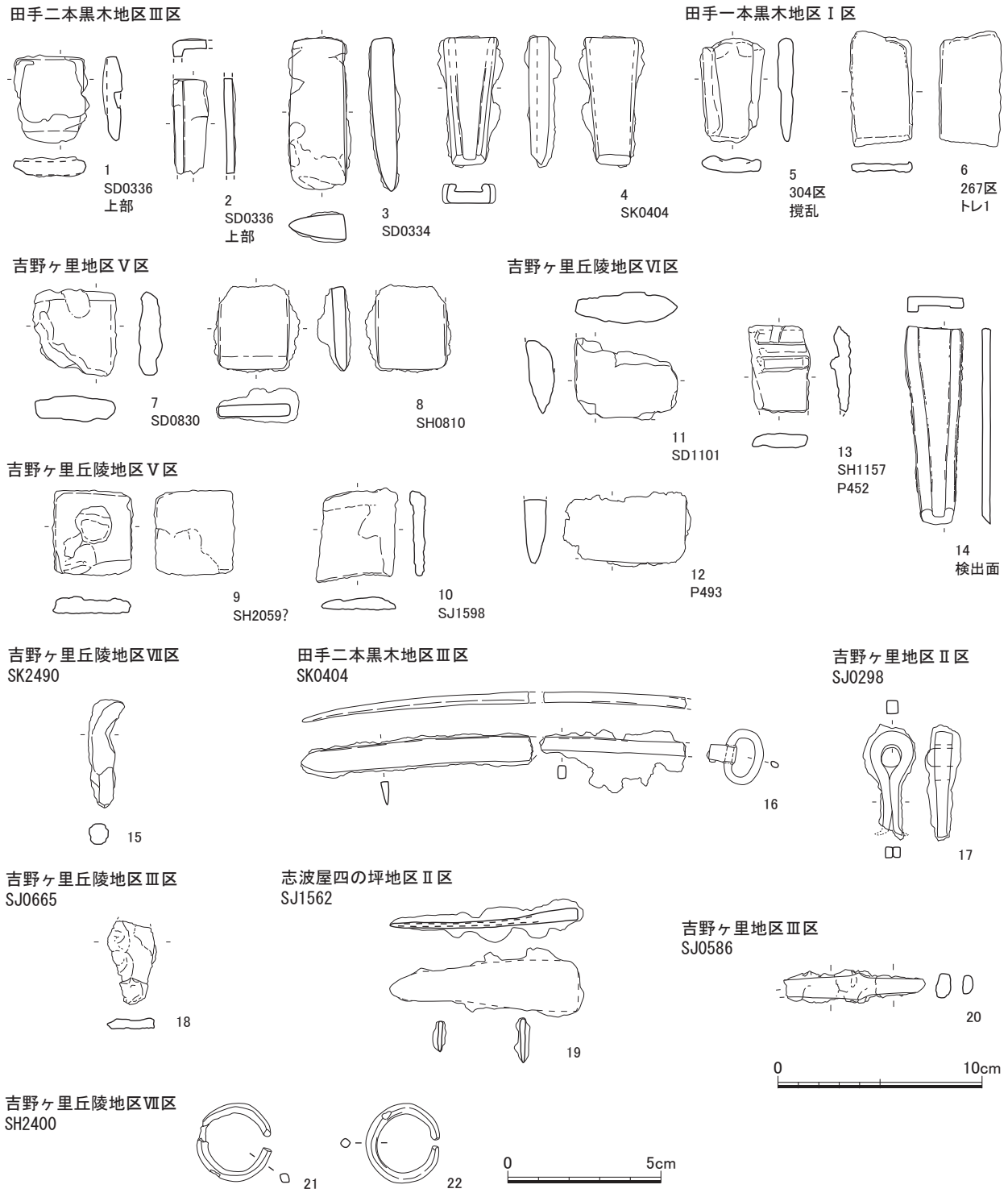


図 68　鋳造鉄斧片（再加工品含む）と初期の鉄器・青銅器（1/3,1/2）

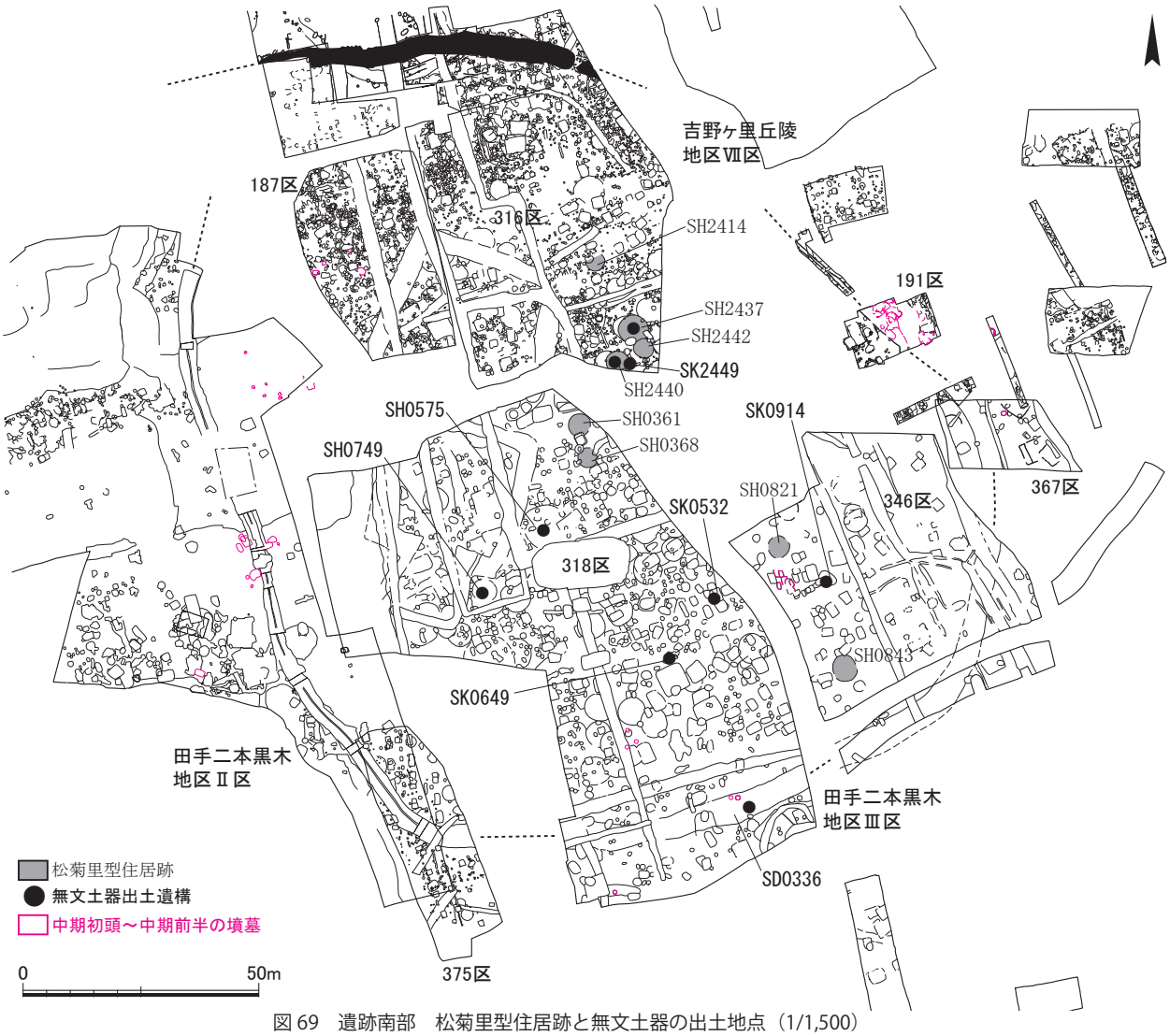


図 69　遺跡南部　松菊里型住居跡と無文土器の出土地点（1/1,500）

る ST1001 北墳丘墓は、検出された甕棺墓計 14 基のうち 13 基が中期後半代に属する。なお、中期末になると、集落の中心部はそれまでの遺跡南部から遺跡中央部へと移動する。中期末には墳墓数が減少するものの、引き続き遺跡中央部～遺跡北部を中心に、甕棺墓を主とする墓地が展開している。

中期後半代の集落遺構の構造的な変化として、竪穴建物跡が平面円形から長方形へ、貯蔵穴から掘立柱建物へと変わることが挙げられる。竪穴建物跡の形態は、前期～中期前半までは平面円形基調のものが主体である。中期前半には小判形（隅丸長方形）も出現し、中期後半には平面長方形基調へと変化していく。また、貯蔵穴は明確なものがみられなくなることから、この時期に貯蔵形態が掘立柱建物へ変化したと考えられる。ただし、柱穴跡から出土する遺物が乏しいことや、他の遺構との切り合い関係が明確でないことなどから、明らかに中期後半～中期末に属すると判断できる掘立柱建物跡は多くない。

遺跡南部の集落と墓地

遺跡南部では、志波屋・吉野ヶ里段丘上面に位置する田手二本黒木地区Ⅱ・Ⅲ区、吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区が引き続き中心的な集落域として機能していたとみられるが、竪穴建物の数は減少しており、集落遺構の分布範囲も狭まっている。遺跡南西部の段丘下の低地部では、中期後半の溝跡や掘立柱建物跡

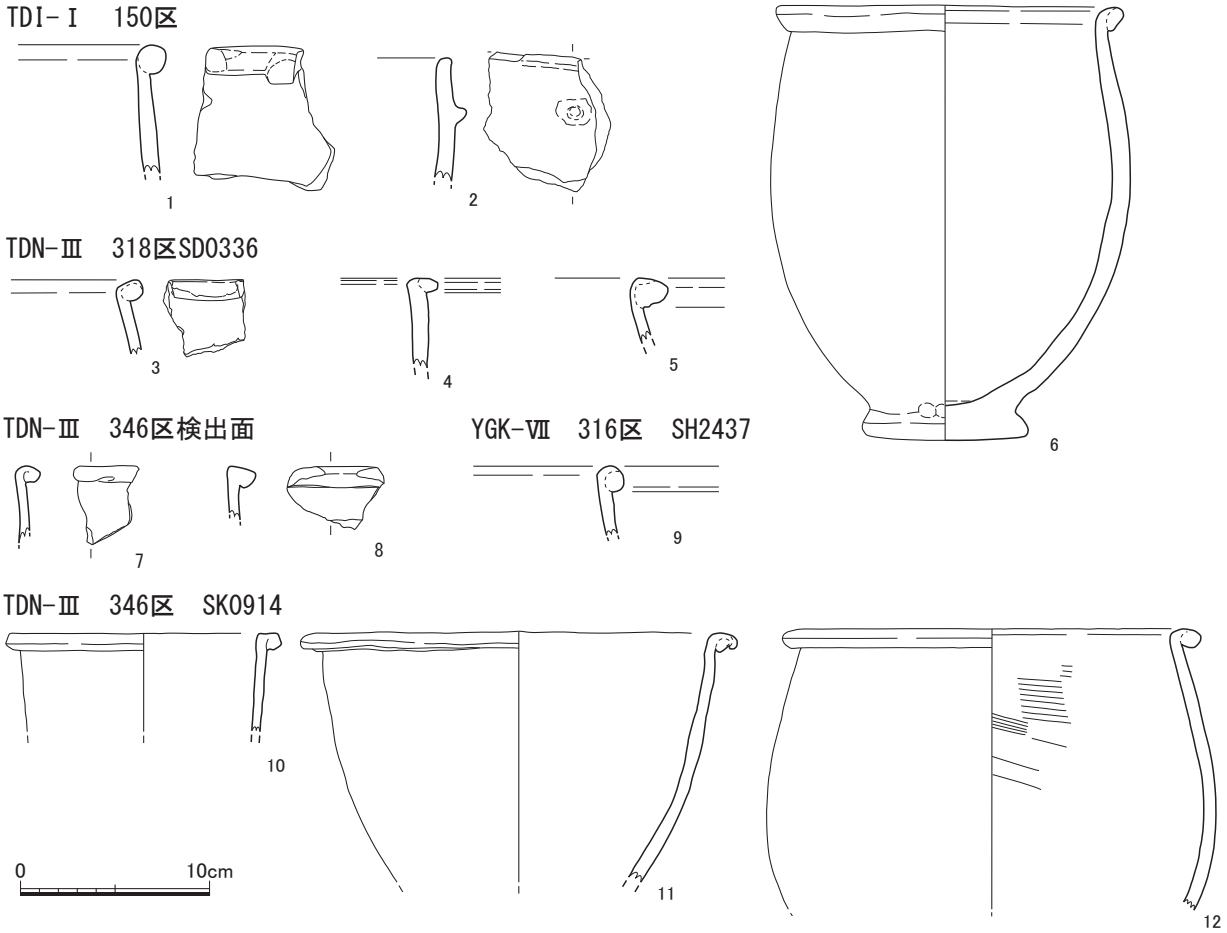


図 70　朝鮮系無文土器　甕（1/4）

が確認されており、低地部が集落の一部として利用されていたとみられる。

吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区・吉野ヶ里地区Ⅴ区では、中期前半に形成されたⅢ区の南北方向に延びる甕棺墓列への埋葬が中期後半にも継続している。一方、中期後半に展開する集落遺構は少ないが、中期末以降に竪穴建物が増加しており、後期にかけて遺跡全体の集落中心部として利用されるようになる。

田手二本黒木地区Ⅱ区では、中央北側から東部にかけて方形基調の竪穴建物 5 棟が展開しており、その周辺には平面円形または長方形基調の土坑が分布している。建物の規模は小型（SH0019）と大型（SH0143）がある（図 73）。なお、Ⅱ区の甕棺墓地は中期前半で終焉しており、中期後半代の集落に対応する墳墓の様相は明らかでない。

田手二本黒木地区Ⅲ区、吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区では、316・318・346 調査区を中心に集落が展開している。集落遺構は平面円形または長方形の竪穴建物と土坑に加え、掘立柱建物もみられる（図 74）。

SX0222 盛土遺構（祭壇・墳丘墓？）の位置づけ

遺跡南端部の田手一本黒木地区Ⅰ区に位置する SX0222 は、中期前半代に築造されたとみられる人工盛土遺構で、これまで南墳丘墓・南墳丘墓などと呼称されてきた性格不明遺構のことを指す（『219 集』）。SX0222 は志波屋・吉野ヶ里段丘南端部の最も標高の高い場所に位置しており、調査前には南北 40 ～ 50m、東西約 30m の範囲が周辺よりも一段高い畑地となっていた（図 75）。調査の結果、吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区 ST1001 北墳丘墓と同じ中期前半に、同様の構築方法によって築造された人工的な盛土遺構

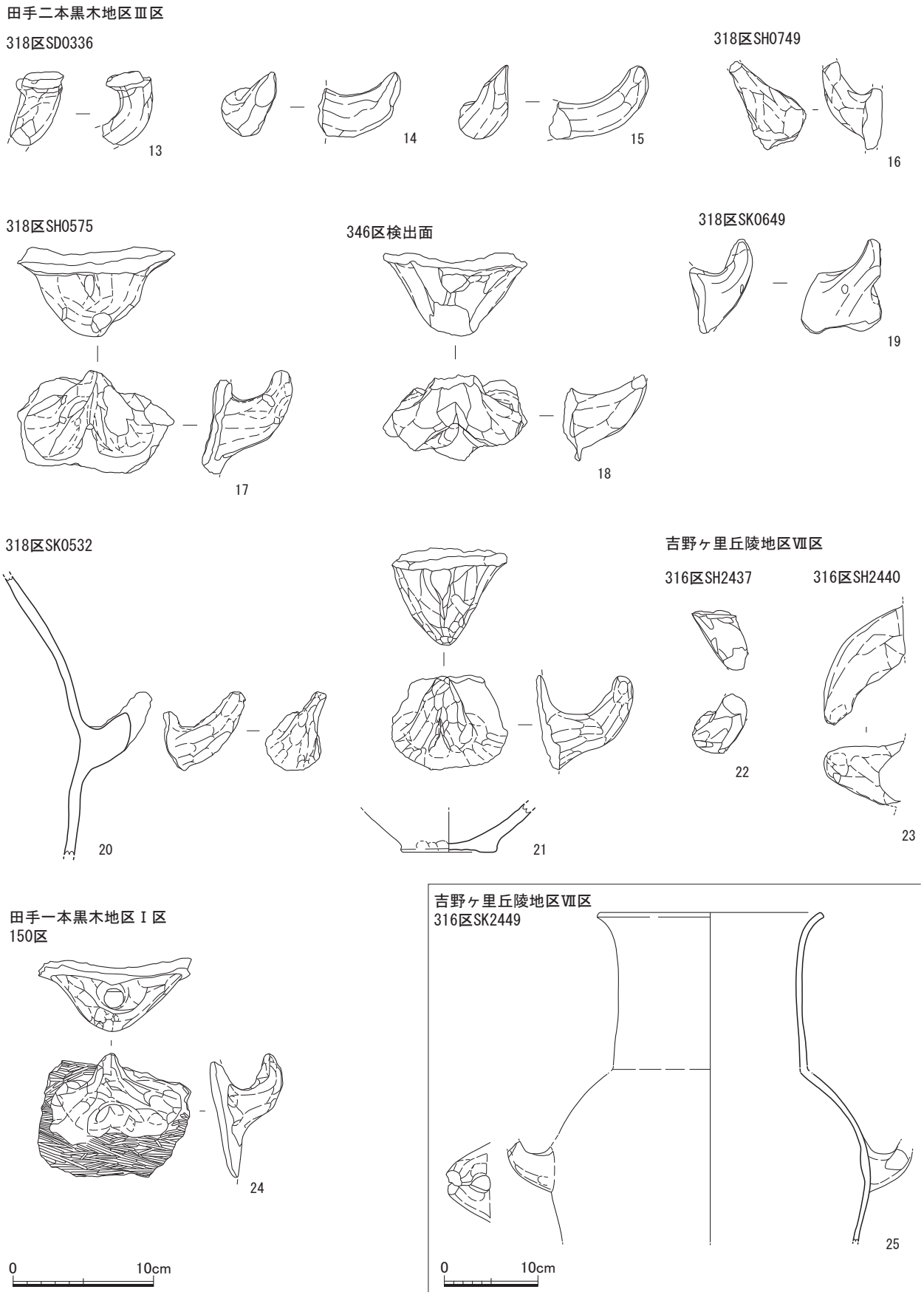


図 71　朝鮮系無文土器　壺（1/4,1/6）

であることが明らかになっている（『132 集』、『219 集』）。SX0222 一帯からは中期前半～中期後半の土器がまとまって出土しているが、北墳丘墓とは異なり、内部から明確な墳墓が確認されていない。現時点では遺構の詳しい性格が明らかでないことから、「南祭壇（墳丘墓？）」と仮称している。

SX0222 盛土遺構内部の 149 調査区で検出された SX0213 は、長さ 2.57m、幅 0.98m、深さ 0.9m の平面隅丸長方形で、横断面 U 字状を呈し、内部からは莚状に編んだ植物が敷かれた状態で出土している。SX0213 遺構の性格について、概要報告（『132 集』）では「土坑墓状遺構」とされ、SX0222 盛土遺構

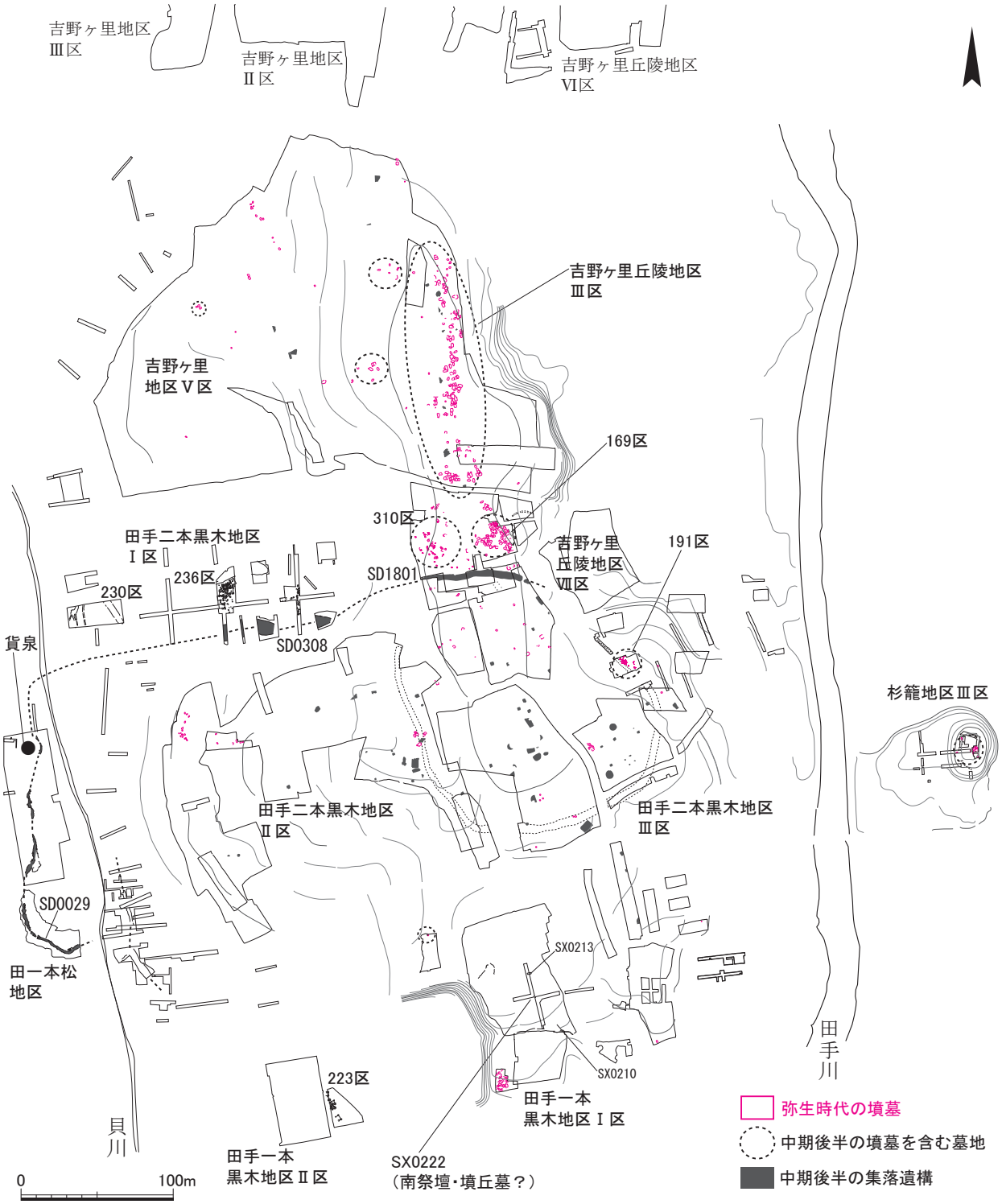


図 72　遺跡南部　中期後半の遺構分布略図（1/4,000）

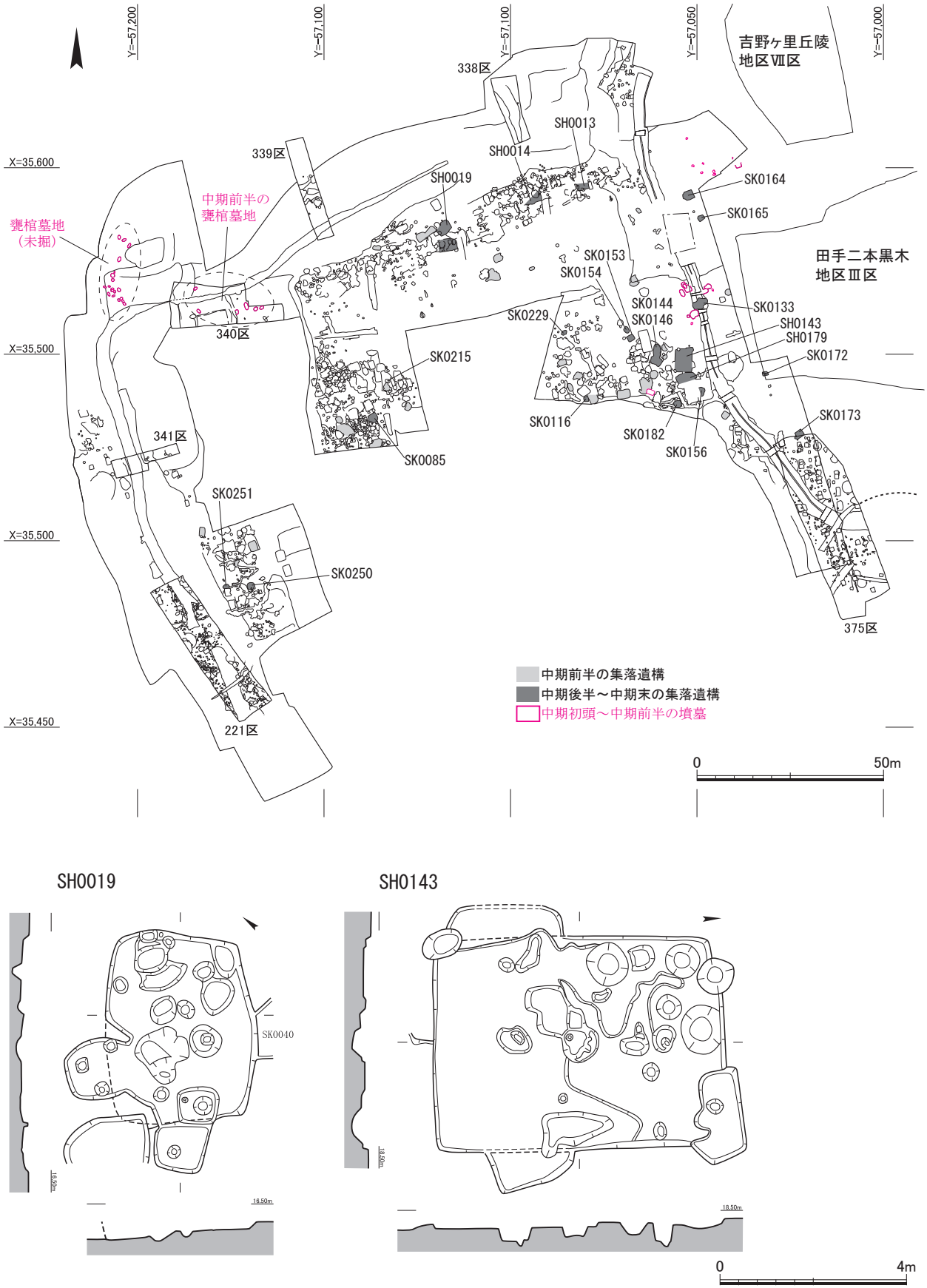


図 73　田手二本黒木地区Ⅱ区　中期前半～中期後半の遺構の分布（1/1,500）・中期後半の竪穴建物跡（1/120）

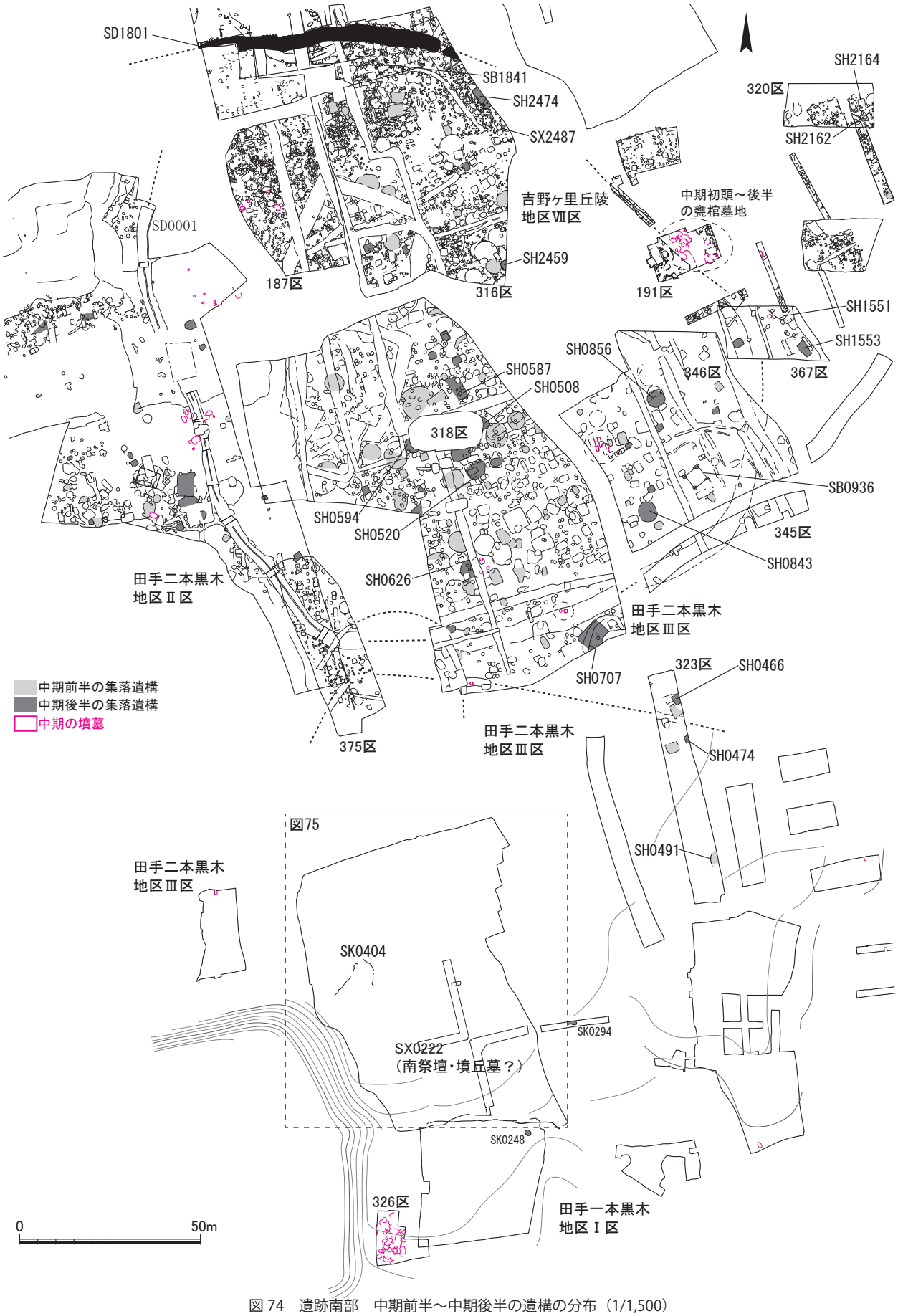


図 74　遺跡南部　中期前半～中期後半の遺構の分布（1/1,500）

に掘り込まれたと判断されているが、層位の検討や出土土器（図 77-4）の時期からみて、SX0222 の盛土構築時期よりも古い中期初頭の遺構と考えられる（『219 集』）。

SX0222 盛土遺構の南東部に位置する 267 調査区では、トレンチ埋土から西部瀬戸内系とみられる櫛描文が施された甕口縁部（図 77-1）や、外来系とみられる多重突帯の壺胴部（2）、黒髪式の甕口縁部片（3）などが出土している。また、SX0210 とした遺構では、平面的な掘り込みは確認されていないものの、幅 5 × 10m 程度の範囲から中期後半を中心とする大量の弥生土器が出土しており、筒形器台や丹塗りが施された高坏など、いわゆる祭祀土器を多く含む（『219 集』）。なかでも、貝殻や鳥骨などが入ったままの状態の広口壺が出土しているが、頸部外面に縦方向の突帯 2 条を貼り付ける特異な形態である（5）。現時点で SX0222 盛土遺構の詳しい性格は明らかになっていないが、墳丘墓ではなく祭壇とする見方からは、古代中国の「宗廟」との関連性を指摘する意見もある（金関 1999,2001）。

遺跡南部北側の集落と墓地

中期後半の吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区北部・Ⅲ区南部では、甕棺墓約 80 基からなる墓地が展開しているが、中期前半に比べて墳墓数は減少している。分布をみると、Ⅶ区北部では、中期前半まで墓地の中心は 169 調査区一帯であったが、中期後半には西側の 310 調査区一帯に集中している（図 79）。なお、中期前半には円形竪穴建物（Ⅲ区 SH0870）や貯蔵穴とみられる土坑が分布しているが、中期後半代の集落遺構は確認されておらず、墓地に伴う祭祀土坑が数基点在している程度である。

Ⅲ区では、中期前半に形成された南北方向に延びる甕棺墓列への埋葬が中期後半にも継続しているが、中期後半の墳墓は墓列の北側と南側とにそれぞれ偏って分布している。また、墓地に伴う祭祀土坑も中期後半～中期末にかけて継続して展開している（図 78）。

副葬品を伴う中期後半の墳墓として、Ⅲ区の墓列北部に位置する SJ0665 甕棺墓（中期前半古相）棺内から、壮年男性人骨とともに打製石鏃 1 点と鉄製品（鉄鏃？）が出土している（図 80-1,2）。このほか、墓列の南西部付近に位置する SJ0937 甕棺墓（中期後半）の棺内埋土から細形銅剣の鋳型片が出土しているが、終末期の SD0601 環壕跡によって墓坑上面が大きく削平されていることから、本来、鋳型は SJ0937 甕棺墓に伴うものではなく、周囲の遺構からの混入品と考えられる（図 81）（『207 集』）。

遺跡南部における中期の「環壕」

前項でも触れたが、中期に環壕集落が成立していたか否かは、集落の形成過程を解明するうえで重要な問題である。ここでは、中期初頭に掘削され、中期末に埋没したとみられる吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区 SD1801 壕跡について、遺構の性格や周囲への広がりなどをみていく（図 82）。

以前の概要報告（『156 集』）では、SD1801 壕は西側の谷部に位置する田手二本黒木地区Ⅰ区 SD0308 溝や、遺跡南西部の低地部に位置する田一本松地区 SD0001・0029・0033 溝などと接続し、一連の環壕となる可能性が指摘されてきた。その根拠としては、田手二本黒木地区Ⅰ区 SD0308 や田一本松地区 SD0001・0029・0033 の断面形が逆台形またはＵ字形でおおむね共通すること、溝は断続的でありながらも田一本松地区で南へと屈曲し、遺跡南部の集落中心部にあたる段丘の周りを取り囲むように展開していること、などである。

ところが、西側の田手二本黒木地区Ⅰ区や田一本松地区の溝は谷部及び低地部にあり、丘陵上に展

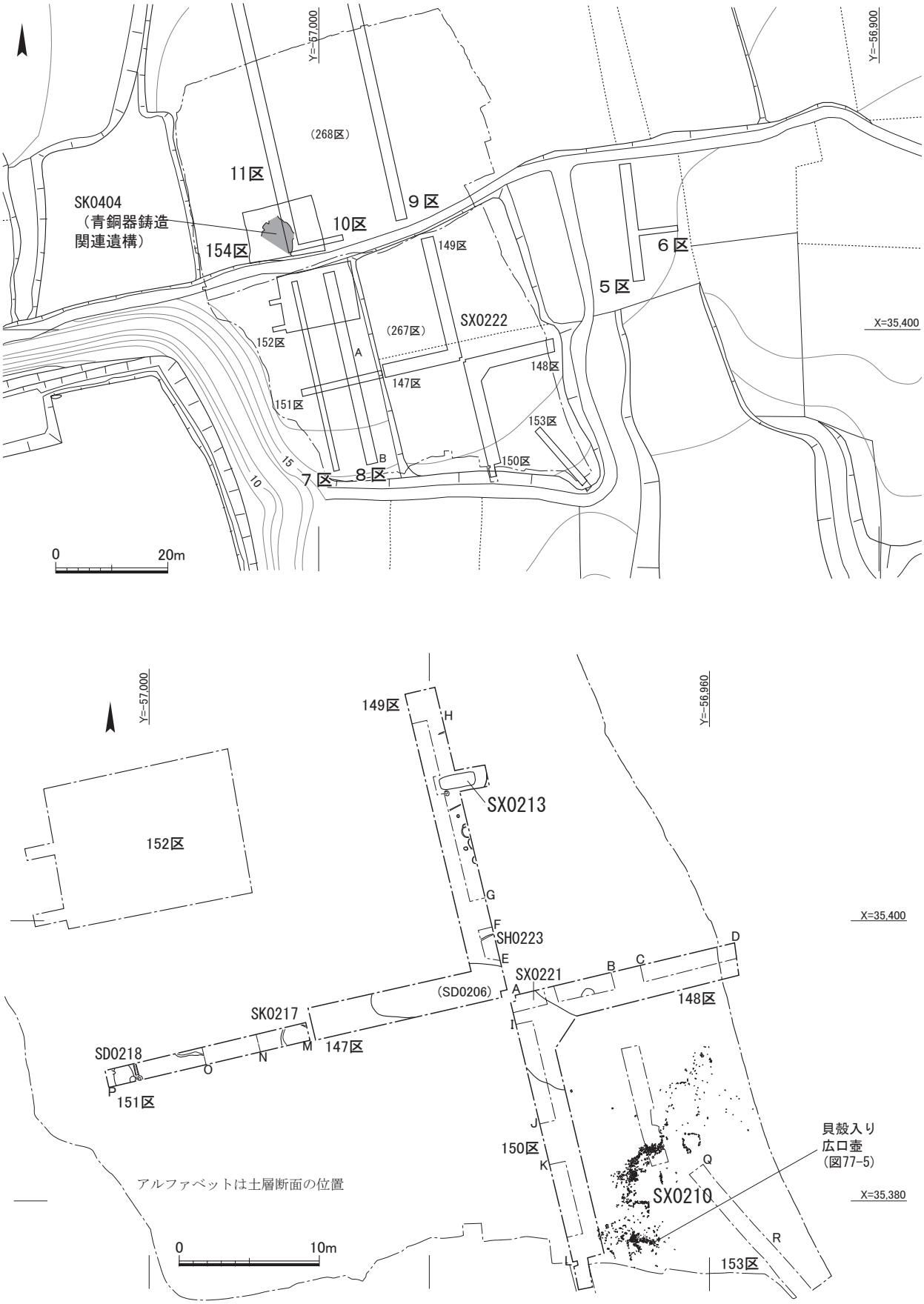
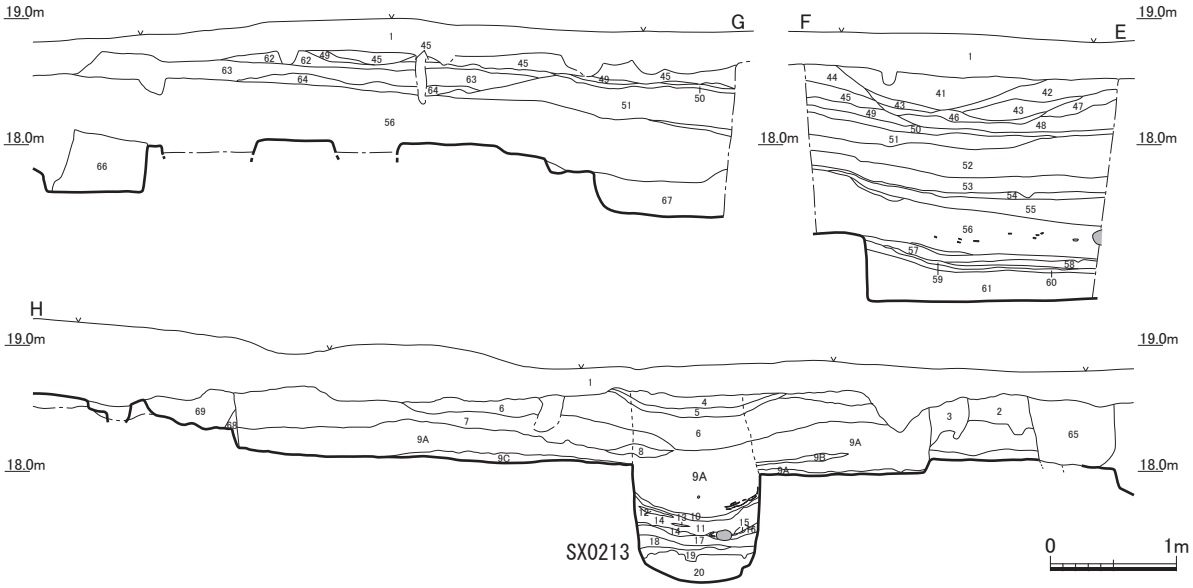
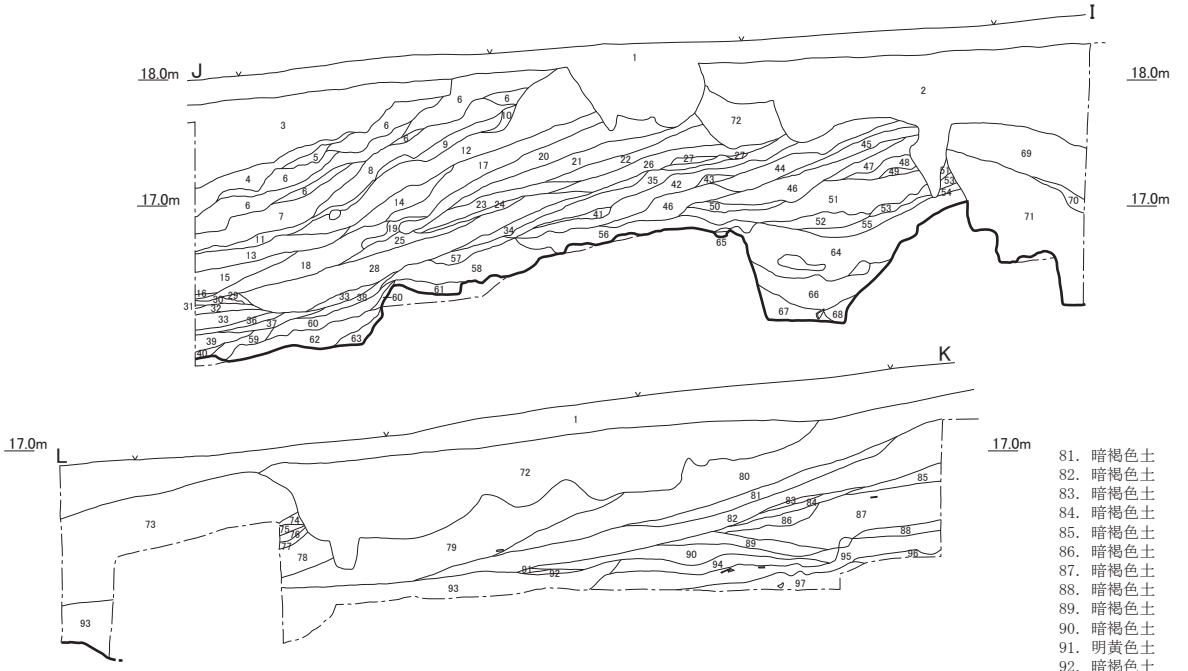


図 75　遺跡南端部　（上）SX0222 盛土遺構一帯のトレンチ位置（1/1,000）・（下）SX0222　267 調査区とトレンチ位置（1/400）



１．表土
２．暗褐色土　56層と同じ層か？
３．暗褐色土
４．黄褐色土
５．暗褐色土
６．暗褐色土
７．暗褐色土
８．暗褐色土
9A．暗褐色土
9B．暗褐色土（炭化物が層状に混じる）
9C．9Aとほとんど同じ（炭化物が多い。層状に含む）
10．明黄褐色土
11．暗褐色土
12．暗灰褐色粘土（ムシロ 粘土化している）
13．黒褐色土
14．暗褐色土
15．暗青灰色粘土（ムシロ 粘土化している）
16．明黄褐色土
17．暗褐色土
18．暗褐色土
19．暗褐色土
20．明黄褐色＋黄褐色土
41．黄褐色土
42．黄褐色土
43．明黄褐色土
44．明褐色土
45．暗褐色土
46．明黄褐色土
47．明褐色土
48．暗褐色土
49．暗褐色土
50．明黄褐色土
51．暗褐色土
52．暗褐色土
53．暗褐色土
54．明褐色土
55．明褐色土
56．暗褐色土
57．暗褐色土
58．暗褐色土
59．明黄褐色土
60．暗褐色土
61．暗褐色土
62．暗褐色土
63．黄褐色土（41層に近い）
64．明黄褐色土（43層に近い）
65．暗褐色土
66．暗褐色土
67．暗褐色土（56層に近い）
68．２層・３層・56層と同じ層の可能性が強い
69．暗褐色土



１．表土
２．灰褐色土
３．暗褐色土
４．黄褐色土
５．暗褐色土
６．黄褐色土
７．暗褐色土
８．暗褐色土
９．黄褐色土
10．暗褐色土
11．黄褐色土
12．暗褐色土
13．暗褐色土
14．暗褐色土
15．暗褐色土
16．暗褐色土
17．暗褐色土
18．暗褐色土
19．明黄色土
20．暗褐色土
21．暗褐色土
22．暗褐色土
23．暗褐色土
24．暗褐色土
25．暗褐色土
26．暗褐色土
27．明黄褐色土
28．暗褐色土
29．暗褐色土
30．暗褐色土
31．暗褐色土
32．暗褐色土
33．暗褐色土
34．明黄色土
35．褐色土
36．褐色土
37．明黄色土
38．明黄色土
39．明黄色土
40．褐色土
41．明黄色土
42．明黄色土
43．褐色土
44．明黄色土
45．褐色土
46．暗褐色土
47．明黄色土
48．暗褐色土
49．明黄色土
50．明黄色土
51．暗褐色土
52．暗褐色土
53．明黄褐色土
54．黄褐色土
55．暗褐色土
56．明黄褐色土
57．褐色土
58．暗褐色土
59．明黄色土
60．暗褐色土
61．明黄褐色土
62．明黄色土
63．暗褐色土
64．暗褐色土
65．黒色土
66．褐色土
67．暗褐色土
68．暗褐色土
69．灰褐色土
70．灰褐色土
71．明黄色土
72．灰褐色土
73．灰褐色土
74．暗褐色土
75．明黄褐色土
76．暗褐色土
77．明黄褐色土
78．暗褐色土
79．暗褐色土
80．暗褐色土
81．暗褐色土
82．暗褐色土
83．暗褐色土
84．暗褐色土
85．暗褐色土
86．暗褐色土
87．暗褐色土
88．暗褐色土
89．暗褐色土
90．暗褐色土
91．明黄色土
92．暗褐色土
93．暗褐色土
94．暗褐色土
95．暗褐色土
96．暗褐色土
97．暗褐色土

図 76 （上）149 調査区土層断面・（下）150 調査区土層断面（1/60）

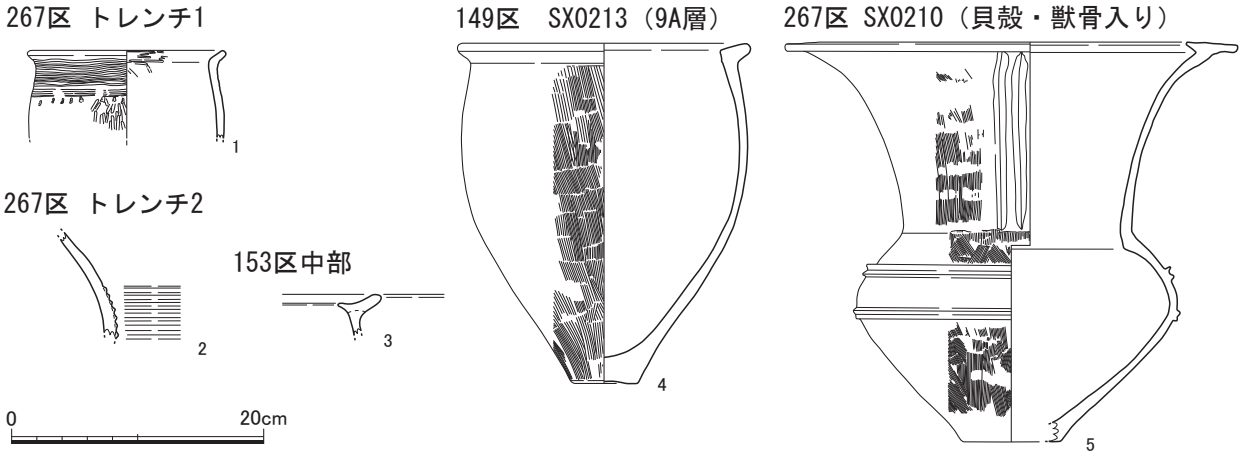


図 77　SX0222 盛土遺構　出土土器（1/6）

開する SD1801 壕の検出面の標高が約 19 ～ 20m であるのに対し、低地部の溝の検出面の標高は約 6m と、大きな比高差がある。また、SD1801 壕跡は残存する幅 5m、深さ 2.1m で断面逆台形を呈するのに対し、低地の溝跡は平面形が不整形で非常に浅いなど、溝の形状が大きく異なっている。さらに、田手二本黒木地区Ⅰ区 SD0308 と田一本松地区 SD0006 との間は未調査区域であり、両者の溝が接続するかどうかは明らかになっていない。田一本松地区が所在する低地部には、溝と並行するように河川（貝川）が流れていることから、低地部で検出された「溝」は貝川の旧流路跡あるいは人工的な水路跡など、環壕とは別の性格・機能を持つ遺構であった可能性を考慮する必要がある。遺構の所属時期についても、SD1801 壕跡は出土土器の時期が中期初頭～中期末であるのに対し、田手二本黒木地区Ⅰ区 SD0308 や田一本松地区 SD0001 の出土土器は中期後半～後期前半で、両者には時期的なズレがみられる。このほか、SD1801 壕の東側に連続するような溝跡は、これまでのところ検出されていない。従って、現時点では SD1801 壕が遺跡南部の集落域を取り囲む環壕として機能していたかどうかは断定できない。弥生時代中期において、遺跡南部の集落中心部を取り囲む環壕が成立していたか否かは、集落構造の変遷や遺跡の性格づけに関わる重要な問題であり、今後再調査を行って解明すべき課題といえる。

遺跡南西部の低地の集落

志波屋・吉野ヶ里段丘の下部にあたる遺跡南西部の低地では、田手二本黒木地区Ⅰ区、田一本松地区、田手一本黒木地区Ⅱ区で中期～後期の集落遺構が確認されている。

西向きに開く谷部にあたる田手二本黒木地区Ⅰ区北部では、前述した SD0308 溝のほか、その北側で SD0307 溝（自然流路跡か）が確認されている（図 82,83）。また、SD0308・SD0307 の間に位置する 236 調査区では、1 間× 1 間または 1 間× 2 間の掘立柱建物 6 棟がまとまって展開しているが、出土土器から建物群の所属時期は中期後半以降とみられる（図 83-1 ～ 8）。遺物としては、SD0308 溝跡から中期後半～後期の土器が出土しているほか、237 調査区では鐸形土製品や漆塗木蓋（9,10）が出土しており特筆される。なお、漆塗木蓋はほぼ同型同大のものが遺跡南端部の 222 調査区 SD0105 溝からも出土している（『207 集』）。

遺跡南部南西の低湿地帯にあたる田一本松地区では、232 調査区から 294 調査区にかけて平面不整形の溝が南北方向に湾曲しながら延びている（図 84）。なお、本区域一帯では竪穴建物跡、掘立柱建物跡、貯蔵穴などは確認されていない。溝は、232 調査区 SD0006・SD0001 と 294 調査区 SD0033・SD0029

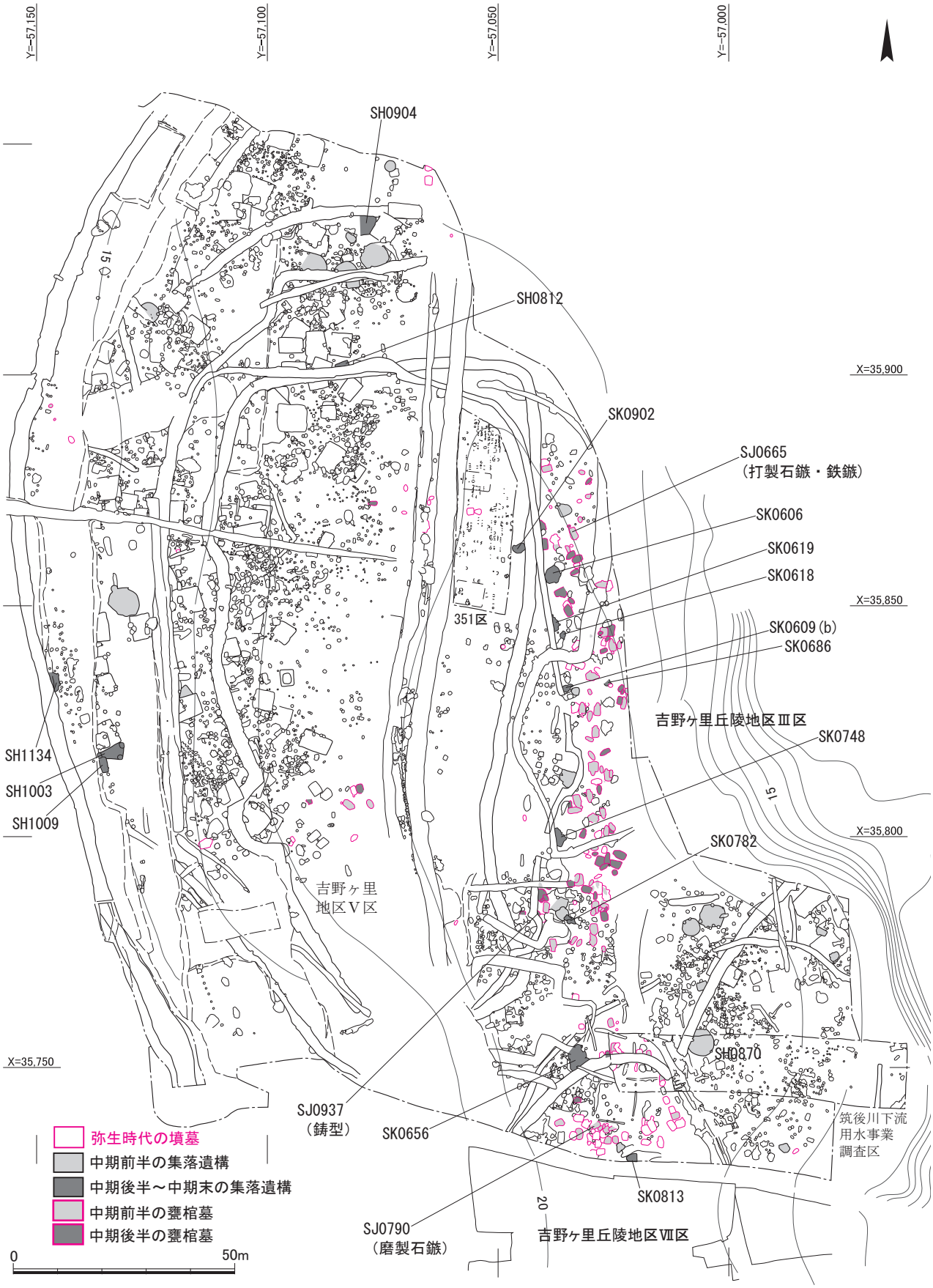


図 78　吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区・吉野ヶ里地区Ⅴ区東部　中期前半～中期後半の遺構の分布（1/1,200）

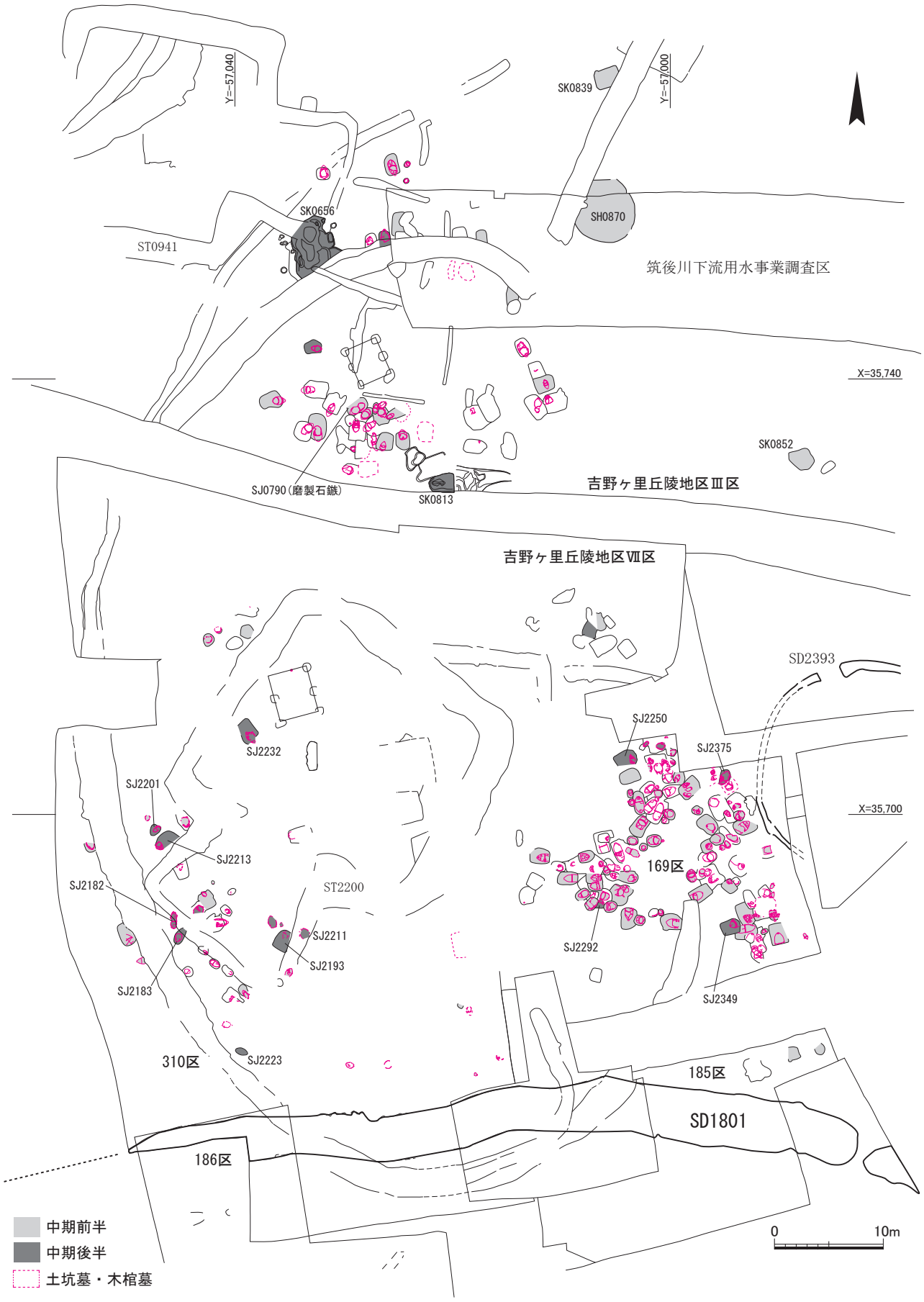


図 79　吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区南部・Ⅶ区北部　中期前半〜中期後半の遺構の分布（1/500）

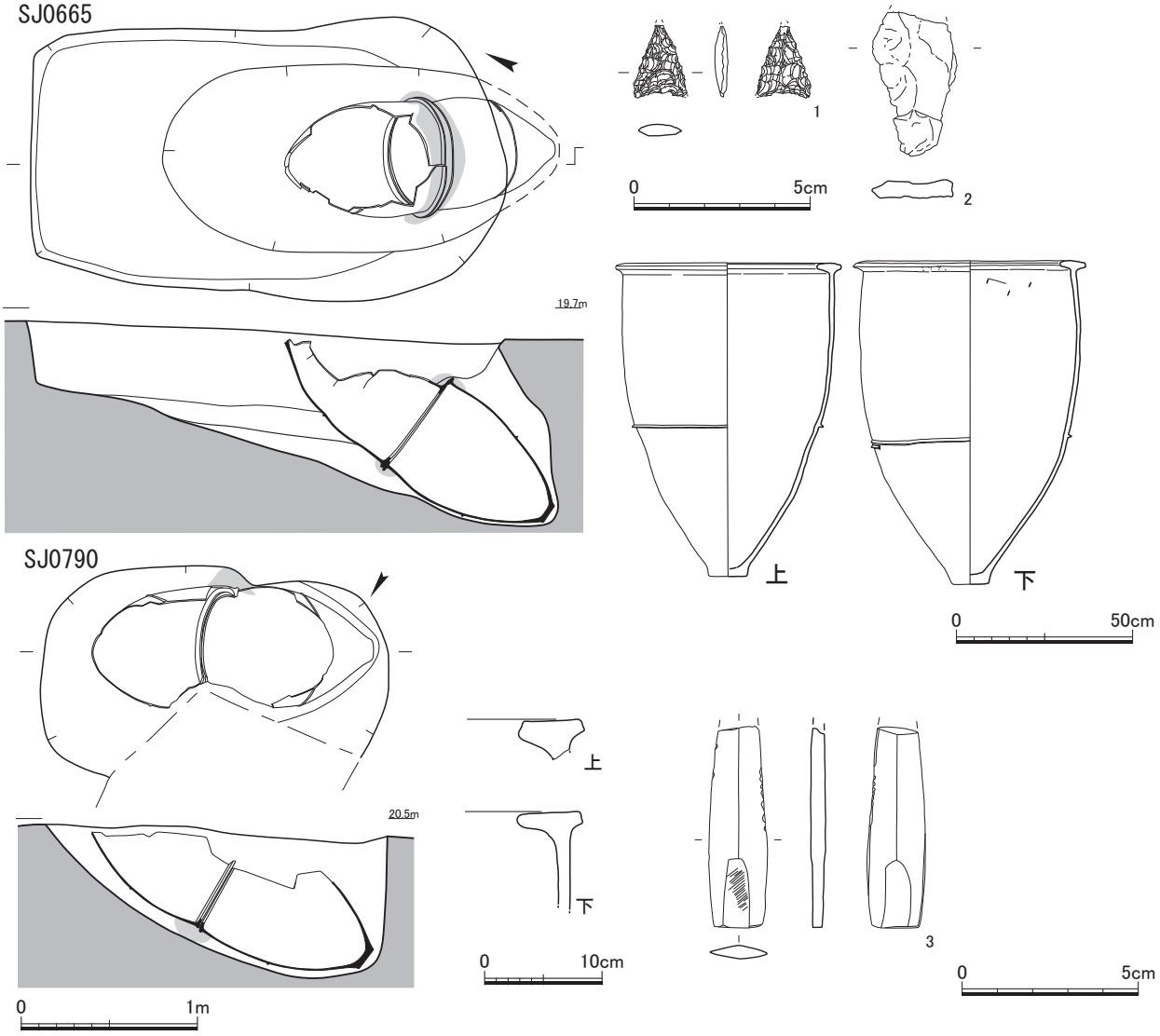


図 80　吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区　中期前半～中期後半の墳墓と副葬品（遺構 1/40, 甕棺 1/20,1/6, 石器・鉄器 1/2）

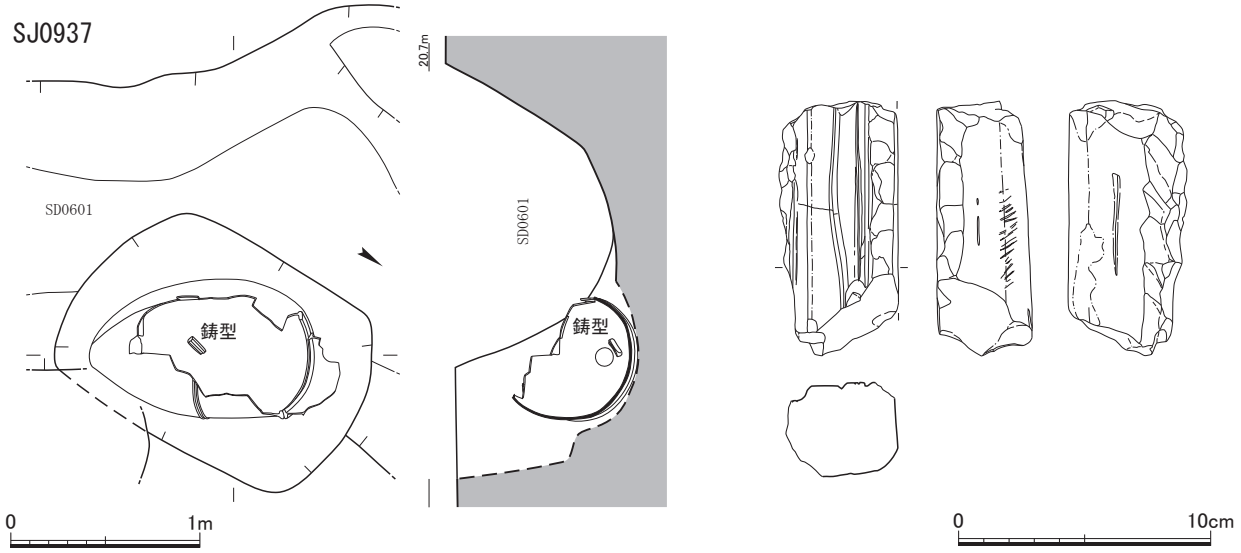


図 81　吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区　SJ0937 甕棺墓と鋳型（遺構 1/40, 鋳型 1/3）

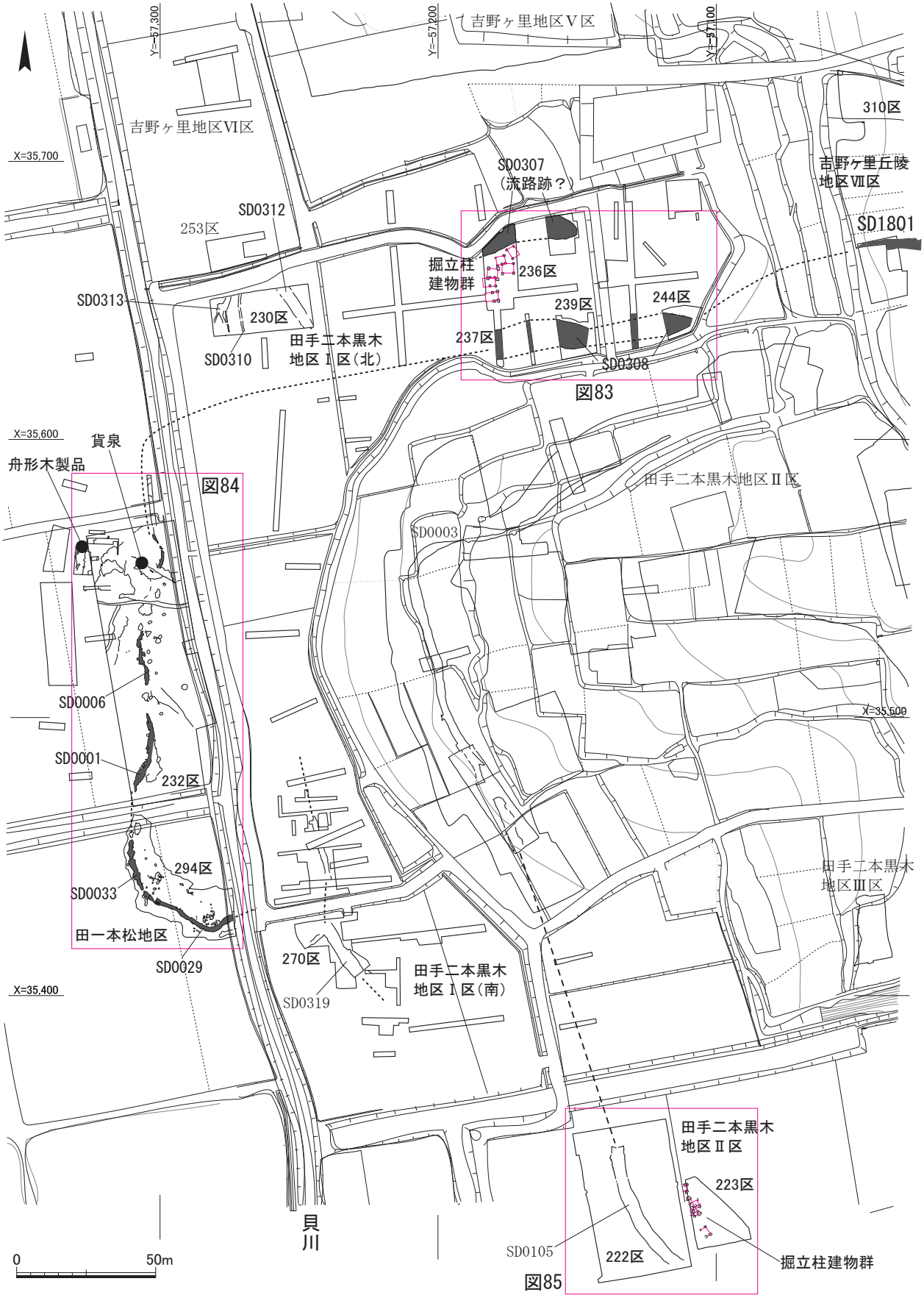


図 82　遺跡南西部　調査区の位置と中期の溝跡の範囲（1/2,000）

が連続するとみられる。溝の埋土からは、中期後半～後期前半の土器とともに多量の木製品が出土している（『156 集』、『207 集』）。このほか、232 調査区北部の自然流路とみられる砂層中から貨泉が、295 調査区 SD0040 溝跡（中期）から舟形木製品が出土している（図 84-1,2）。

遺跡南西端部の低地に位置する田手一本黒木地区Ⅱ区では、222・223 調査区で溝跡と掘立柱建物跡が確認されている（図 85）。222 調査区 SD0105 溝跡は、北側の田手二本黒木地区Ⅱ区の SD0003 溝跡などと接続し、後期の吉野ヶ里集落全体を取り囲む外環壕の一部をなすと考えられる。溝跡からは中期

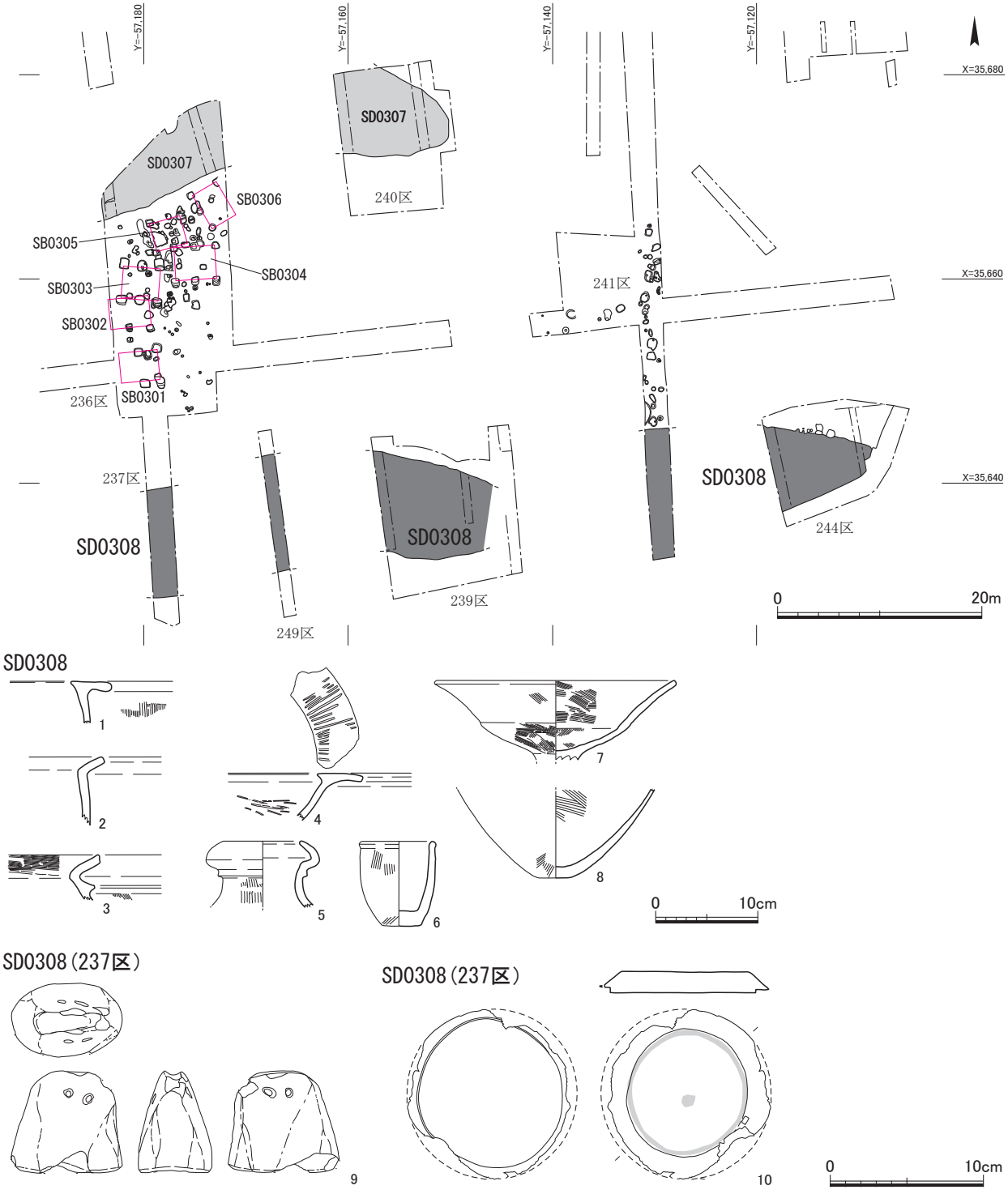


図 83　遺跡南西部　田手二本黒木地区Ⅰ区　遺構の分布（1/600）・出土遺物（1/6,1/4）

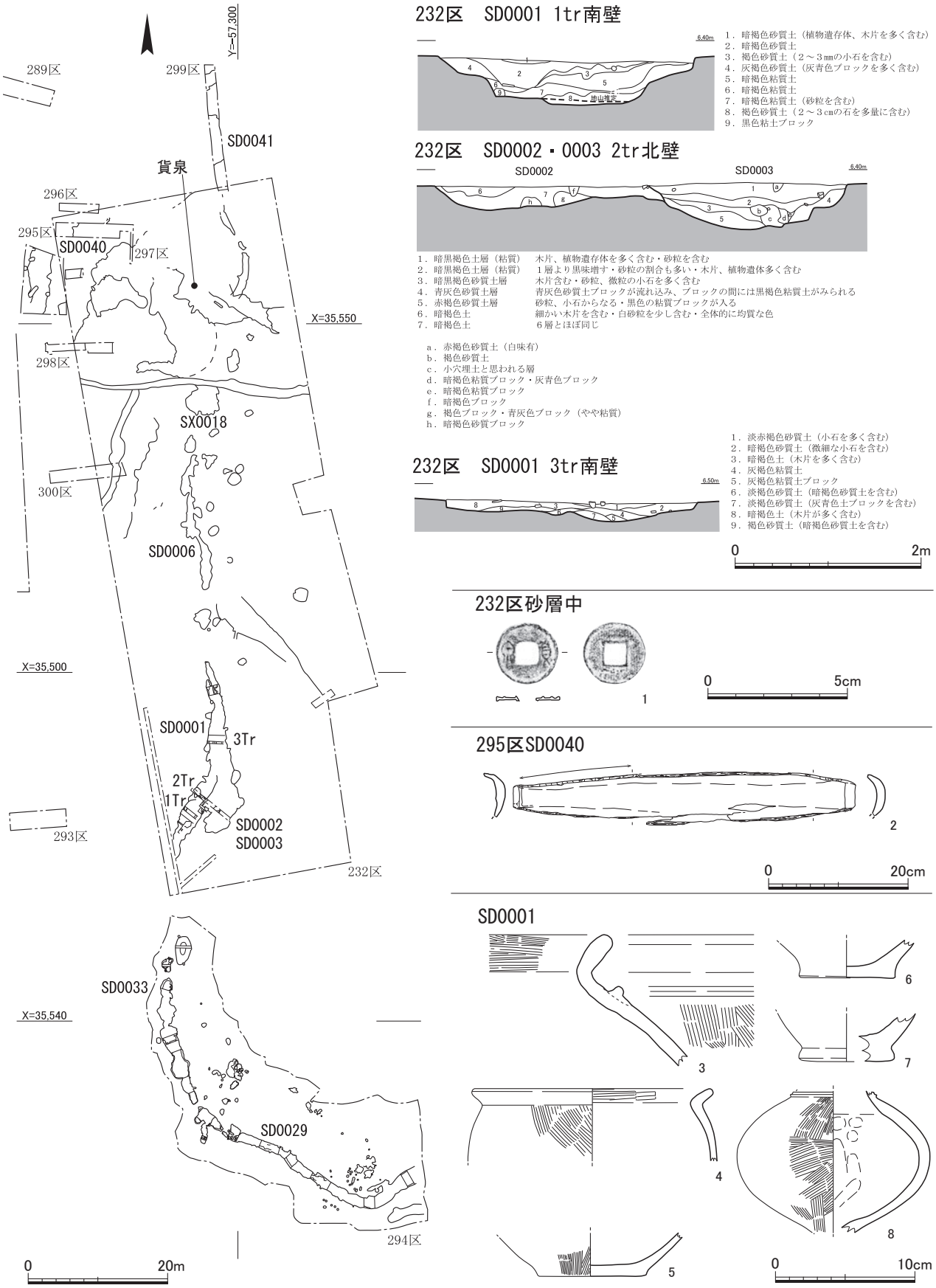


図 84　遺跡南西部　田一本松地区の遺構の分布（1/800）・溝土層断面（1/60）・出土遺物（1/2,1/4,1/8）

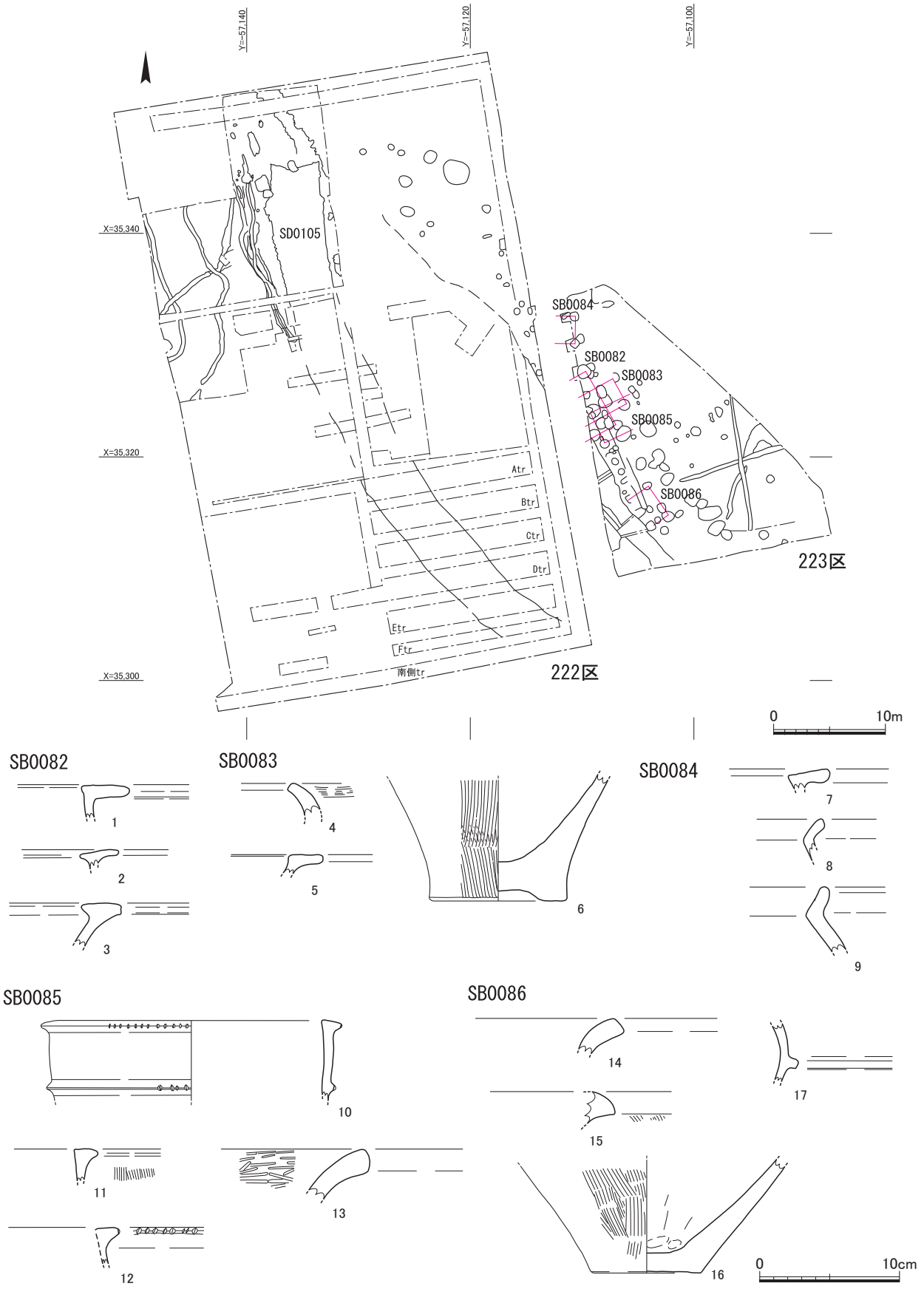


図 85　田手二本黒木地区Ⅱ区 222・223 区の遺構の分布（1/500）・柱穴出土土器（1/4）

末～後期の土器とともに大量の木製品が出土しているが、詳細は後期の項で述べる。222 調査区東側の 223 調査区では、1 間× 1 間または 1 間× 2 間の掘立柱建物跡 5 棟が展開しており、柱穴底面には柱の沈下防止のための横木が残存するものもある（SB0083・SB0085）。柱穴出土土器は乏しいが、建物群の時期は中期後半～後期前半と考えられる（図 85-1 ～ 16）。これらの掘立柱建物群の展開は、中期後半頃から低地部一帯で何らかの活動が行われていたことを示すものとして注目される。

遺跡中央部の集落と墓地

遺跡中央部では、中期前半に比べて中期後半の集落規模や内容が低調になるのと対照的に、墓地では甕棺墓の造営が引き続き活発に行われている。特筆されるのは中期前半代に築造された ST1001 北墳丘墓で、埋葬された計 14 基の甕棺墓のうち 13 基が中期後半代に属する。

吉野ヶ里地区Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区では、中期前半までは円形竪穴建物群が展開しているが、中期後半代の集落遺構は確認されていない（図 86）。一方、中期後半の甕棺墓は 190 基が埋葬されていることから、主に墓地として利用されるようになったとみられる。Ⅰ区では、集塊状の墓地の範囲が南にやや拡大する。中期前半に形成されたⅡ・Ⅲ区の北東 - 南西方向に延びる甕棺墓列は、中期後半になるとさらに多くの甕棺墓が埋葬されており、全体として二列基調をなしている。また、墓列の両脇には祭祀土坑とみられる遺構が複数展開している。副葬品を伴う中期後半の墳墓として、Ⅲ区 SJ0586 甕棺墓（須玖式古相）の棺内から小型の鉄刀子が出土している（図 86）。

吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ・Ⅵ区では、中期後半の集落遺構はほとんど確認されていないが、墓地の造営は活発化している。特にⅡ区では中期後半から甕棺墓数が増加しており、56 基がⅡ区南部にまとまって営まれている（図 87,88）。墓坑の主軸方向に明確な規則性が見られない、いわゆる集塊状の墓地である。甕棺墓の周囲には土坑墓・木棺墓も数多く展開しており、甕棺墓と同時期のものも一定数存在するとみられる。また、祭祀土坑とみられる遺構も 3 基確認されている。Ⅵ区西部では中期後半の甕棺墓数基が分布しているが、Ⅱ区と一連の墓域とみられる。副葬品を伴う墳墓としては、Ⅱ区 SJ0384 甕棺墓から、性別・年齢不明の人骨片とともにゴホウラ縦切型の貝輪 8 点、絹片、赤色顔料（朱）が出土している（図 87）。中期後半には、Ⅱ・Ⅵ区全体は主に墓地として利用されていたとみられる。

吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区では、中期後半の集落遺構はほとんど確認されていない（図 89,90）。一方、墓地は、ST1001 北墳丘墓の南の 182 調査区と北の 184 調査区で引き続き甕棺墓が営まれているが、中期前半よりも数は減少している。また、ST1001 北側の SD1013 外環壕跡を挟んだ北側では、中期後半の甕棺墓 4 基と時期不明の土坑墓・木棺墓 5 基が径約 15m の範囲に環状に分布する墓地が展開しており、意図的に区画されて埋葬されたとみられる（『219 集』）。中期後半の副葬品を伴う墳墓としては、184 調査区南部の SJ1740 棺内から磨製石剣切先と打製石鏃 2 点が、SJ1768 棺内から熟年女性人骨とともに縫い目のある絹布片が、182 調査区 SJ1578 甕棺墓から磨製石剣の切先が出土している（図 91）。

ST1001 北墳丘墓とその周辺

ST1001 北墳丘墓が築かれる場所やその近辺では、中期初頭～中期前半の小規模な集落が展開しているが、竪穴建物跡や土坑などが一挙に埋め立てられ、中期前半に ST1001 北墳丘墓が造営されたと考えられる（『207 集』、『219 集』）。ST1001 北墳丘墓は南北 37.5m、東西 25m の平面長方形で、残存する

高さ 2.5m の盛土遺構である。盛土内には計 14 基の甕棺墓が埋葬されており、棺体の大きさからみて全て成人棺である。14 基のうち最初に埋葬されるのは中央に位置する SJ1006 甕棺墓で、時期は中期前半新相（汲田式新段階）である。続いて、中期後半古相（須玖式古段階）に 5 基、中期後半（須玖式）に 5 基、中期後半新相（須玖式新段階）に 3 基が埋葬され、その後には継続していない（図 92）。

また、ST1001 北墳丘墓の東側に隣接する SK1699 は、長さ 53m、幅 13m、深さは 2m 以上残存している超大型の土坑である。墳丘盛土の採土場であるとともに、墳丘墓に関係するとみられる祭祀土器が大量に出土していることから、祭祀遺構としての役割も果たしていたと考えられる。遺構保存のため完掘されていないが、SK1699 出土土器の時期幅は中期後半から後期後半に及ぶことから、北墳丘墓への埋葬が終了した後も祭祀が継続して行われていたと考えられる（図 93）（『219 集』）。

吉野ヶ里丘陵地区Ⅰ・Ⅳ・Ⅸ区では、南のⅠ区と北のⅨ区で中期前半の竪穴建物と貯蔵穴からなる集落と甕棺墓地が展開しているが、中期後半には本区域一帯に集落遺構が展開しなくなり、墓地としてのみ利用されている（図 94）。Ⅸ区北側に展開する中期後半代の土坑 4 基（SK2949・SK2950・SK2954・SK2777）は、墓地に伴う祭祀土坑とみられる（『214 集』）。Ⅰ・Ⅳ区では、中期後半にⅠ区西部とⅣ区東部の段丘緩斜面上に甕棺墓 35 基が造営されて墓地として利用されはじめ、中期末まで継続している。甕棺墓の主軸は南北方向と東西方向の両方があり、一定していない。比較的短期間に営まれた小規模な墓地であったとみられる（214 集』）。

遺跡北部の集落と墓地

中期後半の遺跡北部では、志波屋四の坪地区Ⅰ・Ⅱ区で甕棺墓地の造営が引き続き活発に行われているのに対し、集落遺構は極めて少ないことから、本区域一帯は基本的に墓地としてのみ利用されている。中期後半の墓地は、志波屋四の坪地区Ⅰ・Ⅱ区のように中期前半から続く中心的な墓地と、その周辺に中期後半から増加する小規模な墓地とがある。後者の墓地としては、志波屋三の坪（甲）遺跡、志波屋五の坪遺跡Ⅱ区があるが、遺跡中央部の吉野ヶ里丘陵地区Ⅰ・Ⅳ区と同様に小規模、短期間に営まれた墓地と位置づけられる。志波屋四の坪地区では中期後半の集落遺構は確認されておらず、主に墓地として利用されている。中期前半に形成された南北方向に延びる墓列には、中期後半にはさらに多くの甕棺墓が埋葬されており、墓地の範囲も広がっている（『214 集』、『222 集』）。副葬品を伴う中期後半の墳墓は、いずれも南北に延びる列埋葬の一部をなす甕棺墓である。Ⅱ区 377 調査区 SJ1723 甕棺墓（須玖式古段階）からは、性別不明の幼児人骨とともにイモガイ横切型貝輪が 8 点出土している。Ⅱ区 372 調査区 SJ1562 甕棺墓（須玖式古段階）の棺内からは、熟年男性人骨とともに不明鉄製品が出土している（図 100）。人骨は両腕骨が胸部の前に折り曲げられた姿勢で、鉄製品は右腕の脇に刃先を足元側に向けた状態で出土したことから、副葬時に柄が装着されていた可能性がある（『211 集』）。小形の鎌もしくは戈とみられるが、再加工された可能性があり、器種は明確でない。Ⅰ区南部では、墓列中央付近の SJ0516 甕棺墓（須玖式新段階）から熟年男性人骨とともに絹布片が、SJ0220 甕棺墓（須玖式新段階）から男性人骨（年齢不明）とともに赤色顔料（朱）が、SJ0228 甕棺墓（須玖式）から男性人骨（年齢不明）とともに磨製石剣の切先が出土している（図 100-9）。

いわゆる受傷人骨がみられるのも中期後半の特徴である。前述した SJ0228 出土人骨の左大腿骨には、銅剣とみられる青銅小片が嵌入している（『214 集』）。また、SJ0329 甕棺墓（須玖式）（図 101 上）からは、

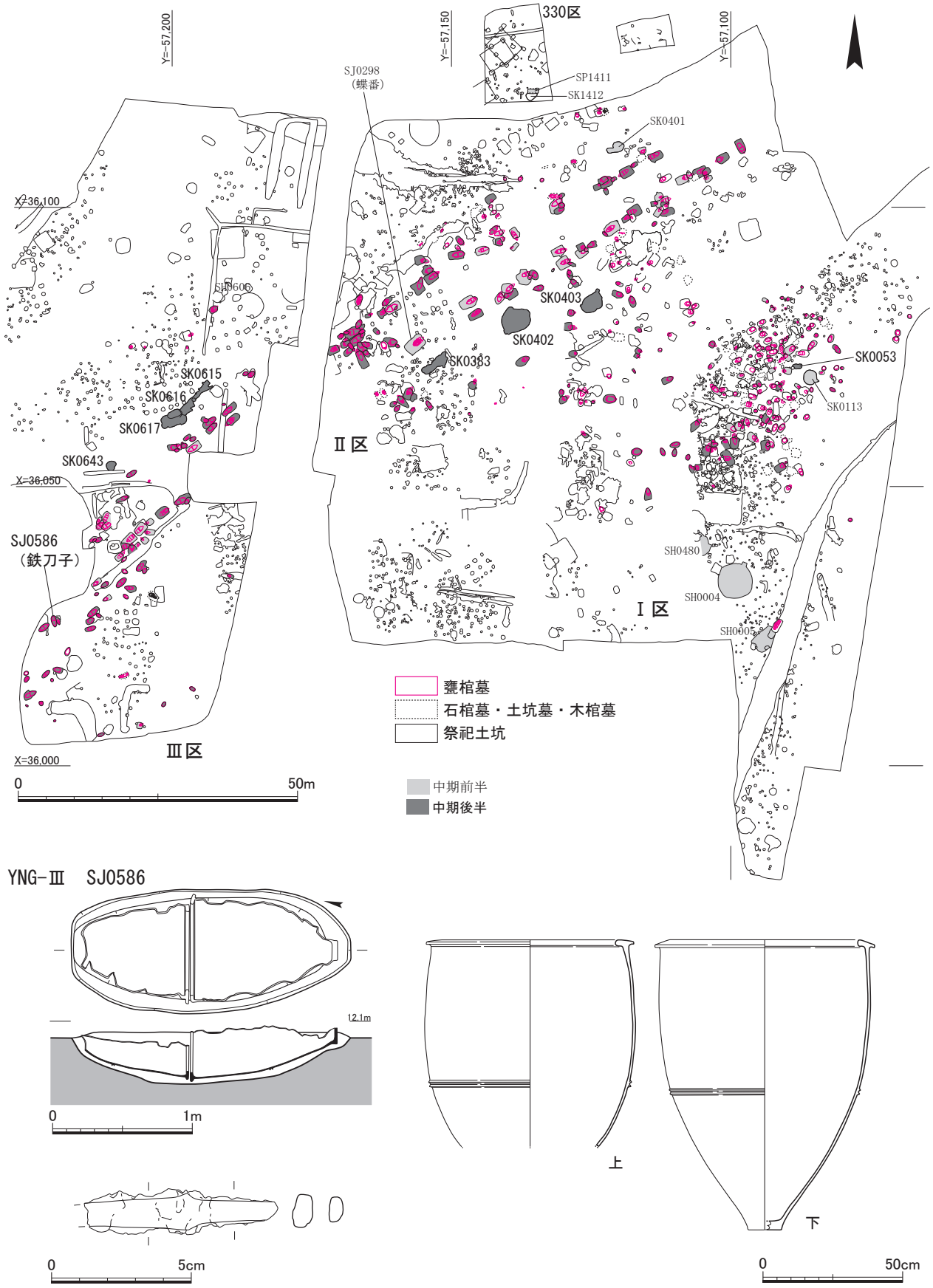


図 86　吉野ヶ里地区Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区　中期前半～中期後半の遺構の分布（1/1,000）・中期後半の墳墓と副葬品（1/40,1/20,1/2）

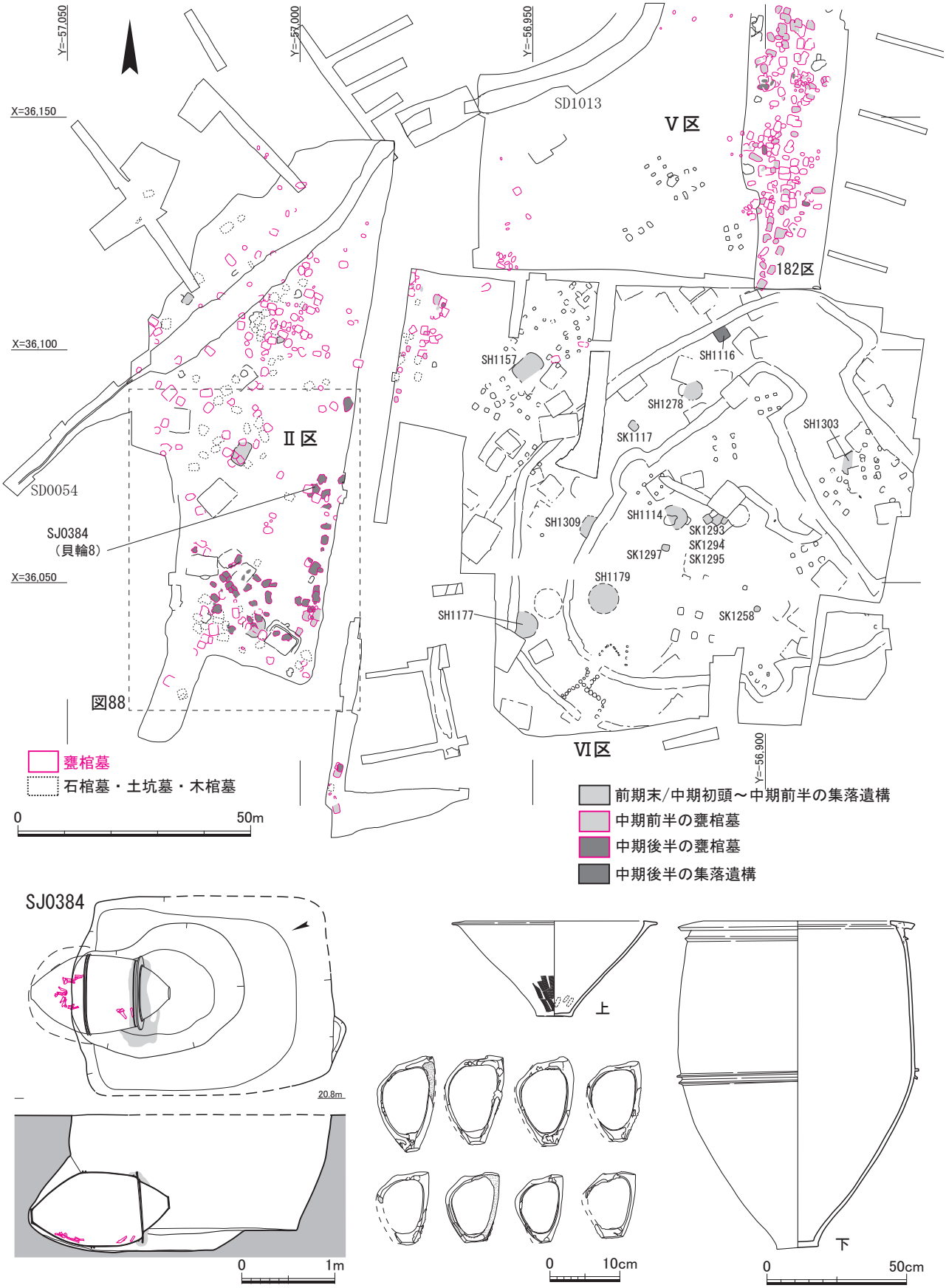


図 87　吉野ヶ里丘陵地区 II・VI区　中期前半～中期後半の遺構の分布（1/1,200）・中期後半の墳墓と副葬品（1/60,1/20,1/8）

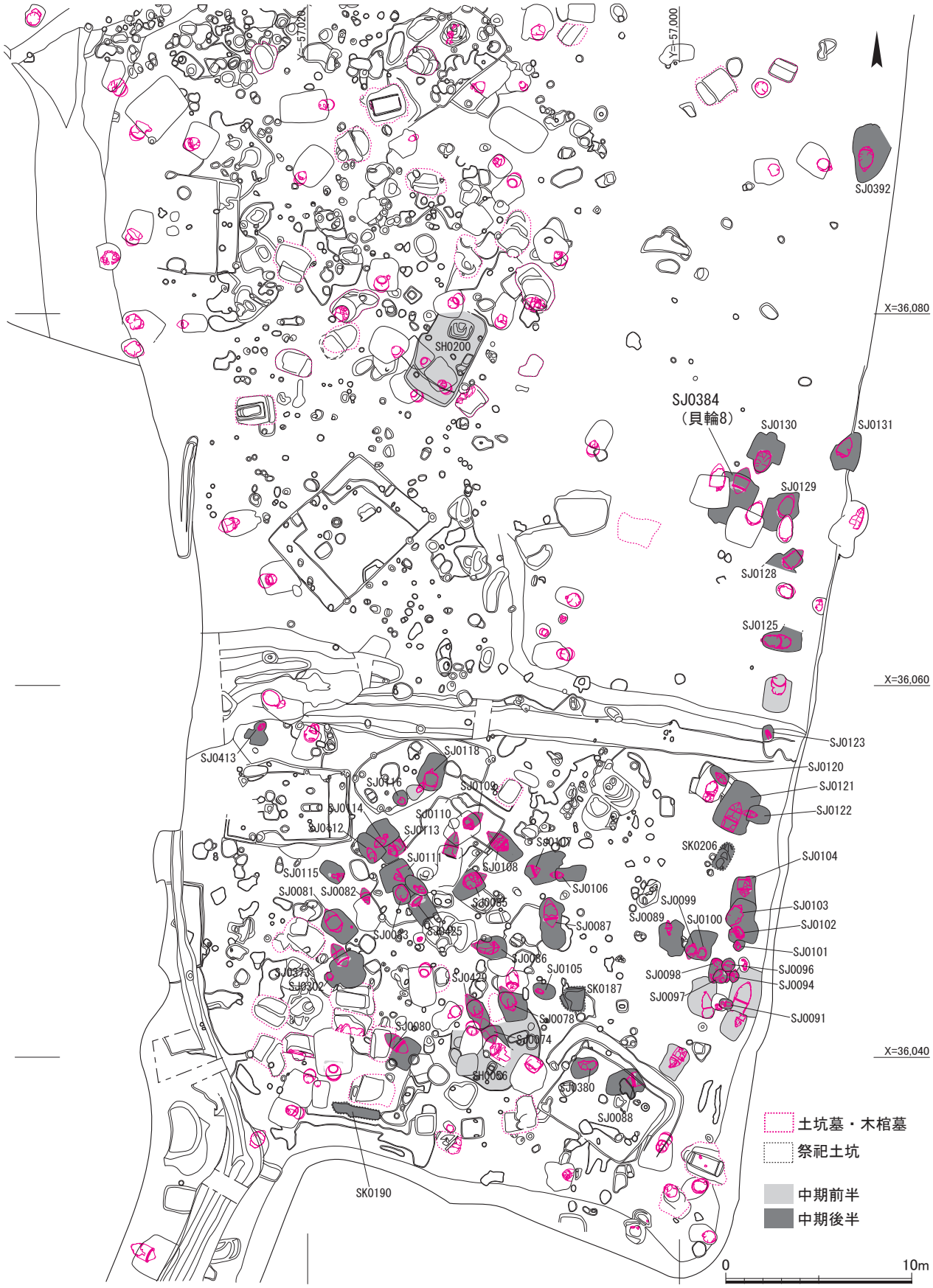


図 88　吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区南部　中期前半～中期後半の墳墓の分布（1/300）

壮年男性の頭骨を除くほぼ全身の骨が出土しており、頭蓋及び第 1、第 2 頸椎が残存していないことから、頭部が意図的に切り取られたとみられるほか、右鎖骨と右橈骨に金属器等の鋭利な刃物による受傷痕が残存する。このほか、SJ1359 甕棺墓（須玖式）（図 101 下）から出土した壮年男性人骨の左大腿骨には、骨折したあと癒着して治癒したとみられる痕跡が明瞭に残存している（『214 集』）。

遺跡北端部の志波屋三の坪（甲）遺跡では、甕棺墓が中期初頭に 3 基出現し、続く中期前半に 1 基展開している。中期後半には 30 基に増加するが、その後には継続していない（図 102）（『222 集』）。遺跡中央部の吉野ヶ里丘陵地区Ⅰ・Ⅳ区と同様に、小規模で短期間の墓地であったとみられる。このほか、志波屋・吉野ヶ里段丘上に位置する志波屋五の坪遺跡Ⅱ区 397 調査区では、中期後半～中期末の甕棺墓 15 基が確認されている（『222 集』）。位置的には、南側に展開する志波屋四の坪地区とは小さな谷を挟んで部分的に途切れているものの、甕棺墓地がさらに北の段丘へと連続して延びている可能性が高いと考えられ、範囲や内容について今後さらに検討を進める必要がある。

（３）中期末

中期末になると、それまで遺跡南部の段丘上に展開していた中心的は集落域が、北側の吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区・吉野ヶ里地区Ⅴ区東部へと移動する。この区域は、後期になると「南内郭」と呼ばれる環壕区画が成立する場所であるが、中期末の段階から集落の中心化に向けた動きがみられる。

集落に対して、中期末の墓地では全体的に墳墓数が減少している。甕棺墓は、中期末が立岩式期、後期初頭が桜馬場式期に相当するが、この時期には口縁部に打ち欠きが施される棺体が増加することから、型式が明確でないものが多いという資料的問題がある。従って、以下では時期が明確な墳墓を除き、墓地は中期末～後期初頭の時期幅のなかでみていくこととする。

遺跡南部の集落と墓地

遺跡南部の田手二本黒木地区Ⅱ・Ⅲ区、吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区では、中期後半から集落遺構の減少傾向が始まっているが、中期末になると竪穴建物跡や土坑はさらに少なくなっており、Ⅱ区東部やⅢ区 318・346 調査区で散見される程度である（図 108）。また、中期を通じて機能した吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区 SD1801 壕は、出土土器から中期末には埋没したとみられる。

中期末の遺跡南部では、SD1801 壕以南で集落規模が縮小しているのに対し、SD1801 壕以北の吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区・吉野ヶ里地区Ⅴ区一帯では、中期末から後期前半にかけて竪穴建物がまとまって展開するようになり、後期後半に形成される環壕区画（南内郭）へとつながっていくと考えられる。中期末の段階で、中心的な集落域は SD1801 壕の南側から北側へと移動したとみられる。

中期末の遺跡南部で注目されるのは、外環壕の掘削が部分的に始まったと考えられることである。田手二本黒木地区Ⅱ区の北側から西側にかけて逆 L 字状に延びる SD0003・SD0265 溝は、弥生時代後期の中心的な集落を取り囲む外環壕の南西部分に相当する。なお、SD0003・SD0265 溝の近辺には、同時期の遺構はほとんど確認されていない。これまで、外環壕の掘削開始時期は後期前半と考えられてきたが（『132 集』、『207 集』）、Ⅱ区 SD0003 環壕跡の下層出土土器は中期後半～中期末のものが含まれることから、吉野ヶ里地区Ⅴ区 SD0925 環壕よりも掘削開始期が先行する可能性がある（蒲原 2002、『222 集』）。つまり、外環壕は一気に形成されたのではなく時期差があり、かつ、南から北へと掘削が進めら

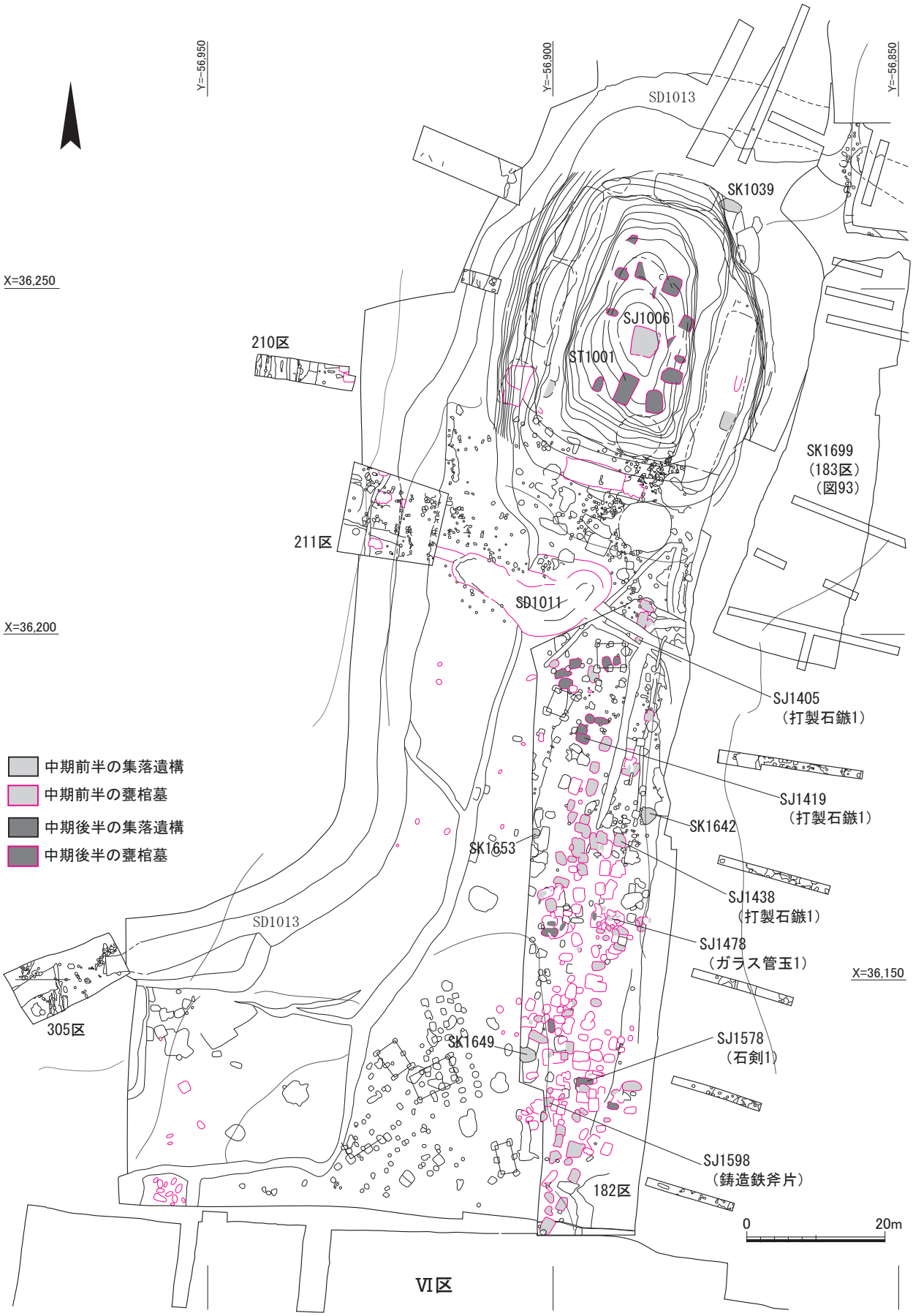


図 89　吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区中央～南部　中期前半～中期後半の遺構の分布（1/800）

図 90　吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区中央～北部　中期前半～中期後半の遺構の分布（1/600）

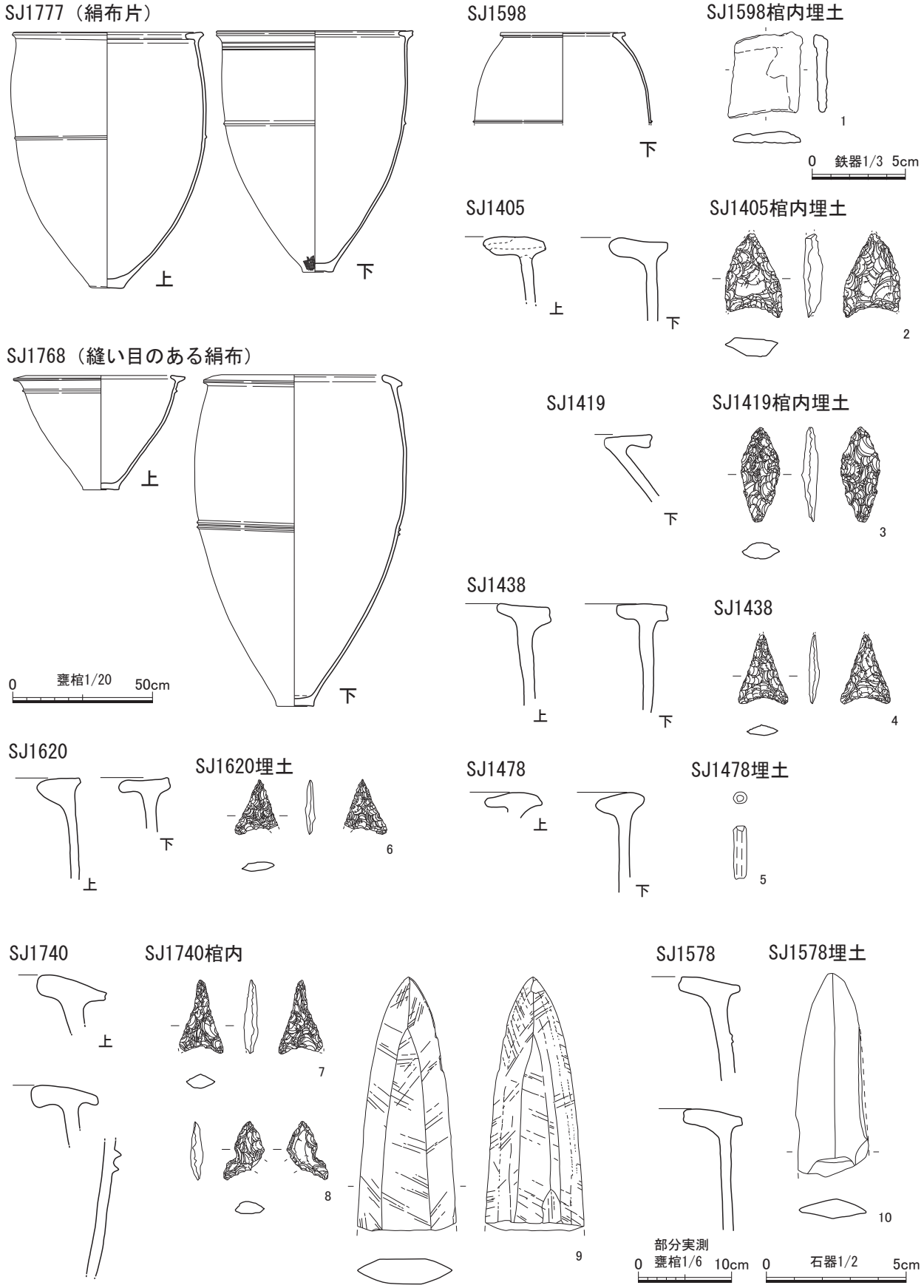


図 91　吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区 182・184 調査区　中期前半～中期後半の墳墓と副葬品（1/20,1/6,1/3,1/2）

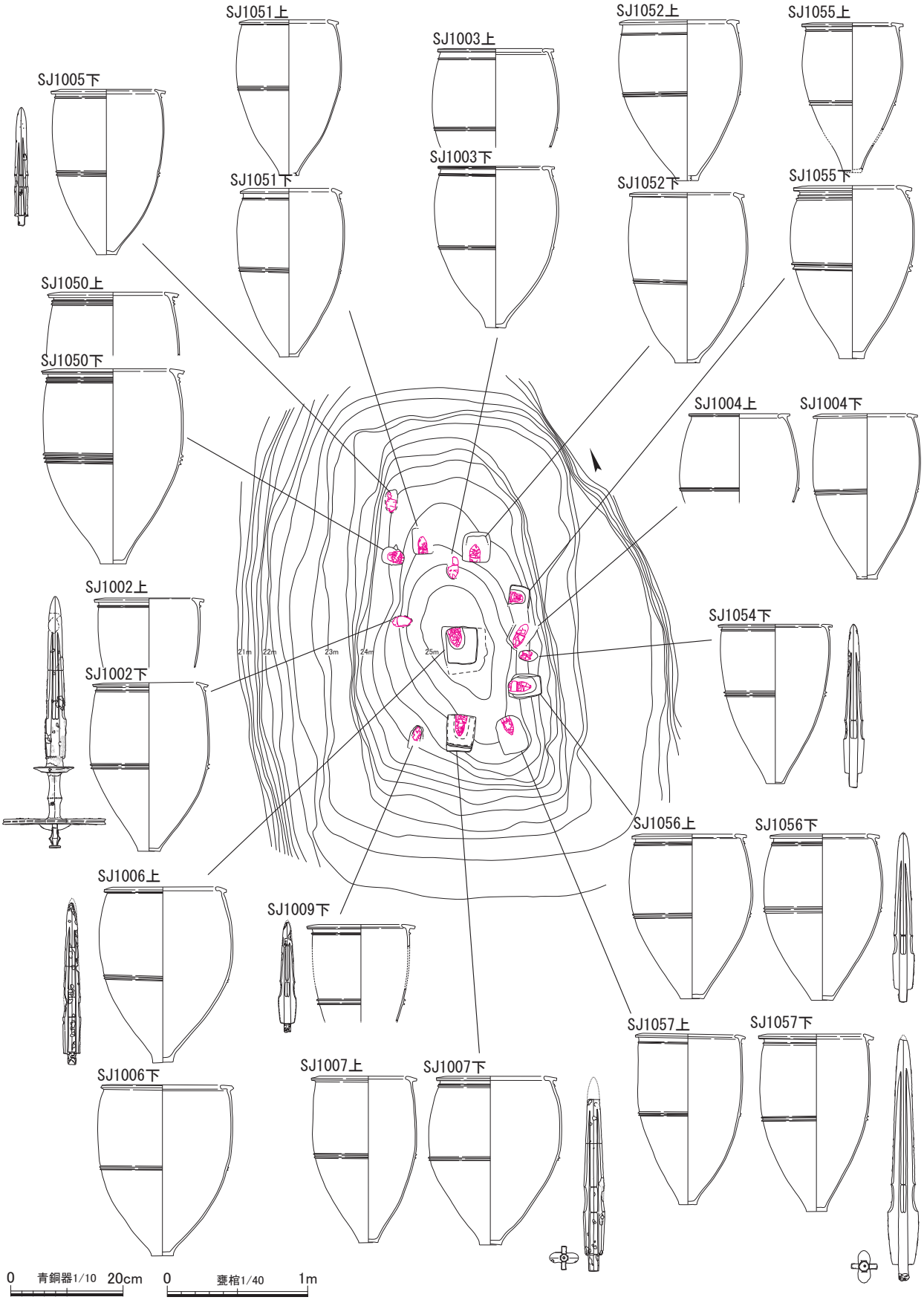
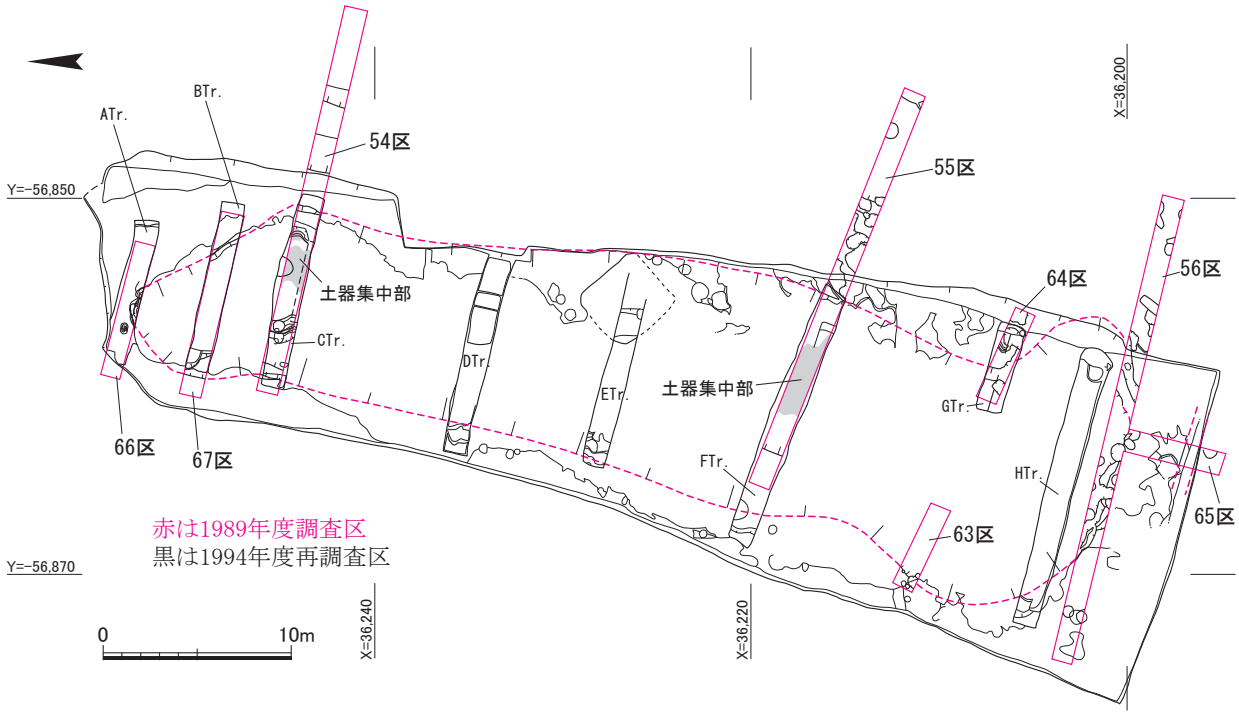
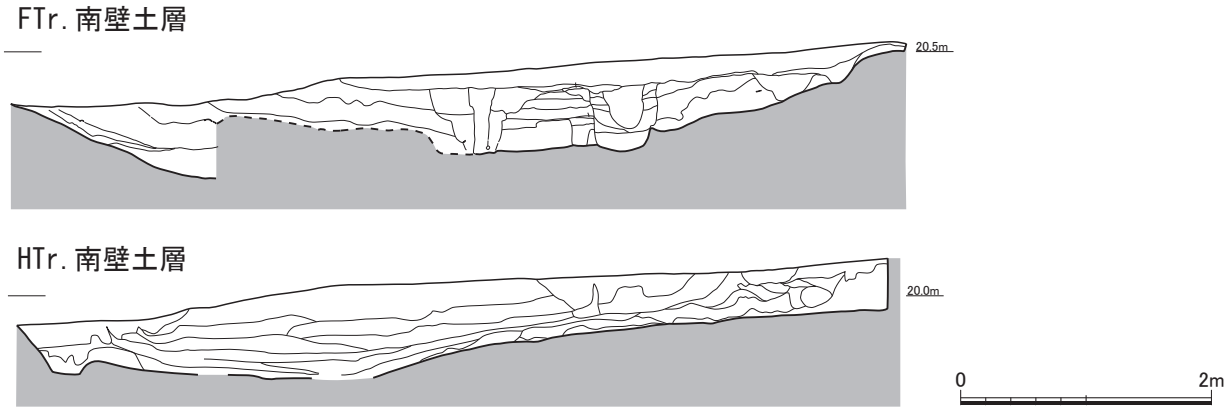


図 92　ST1001 北墳丘墓と出土甕棺・青銅器（1/500,1/40,1/10）





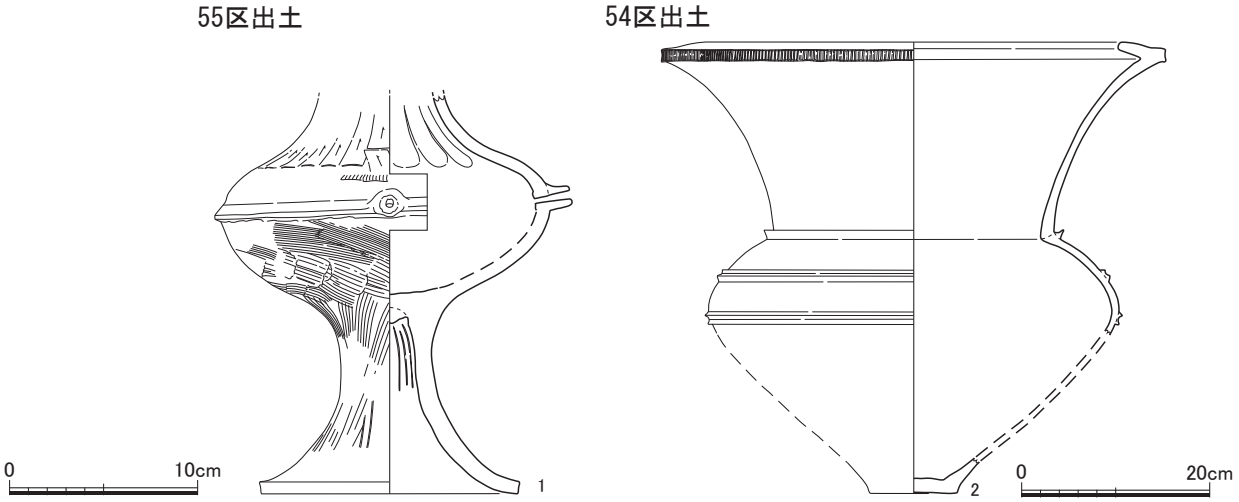


図 93　吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区 SK1699 大型祭祀土坑（1/400）・土層断面（1/60）・出土土器（1/4,1/8）

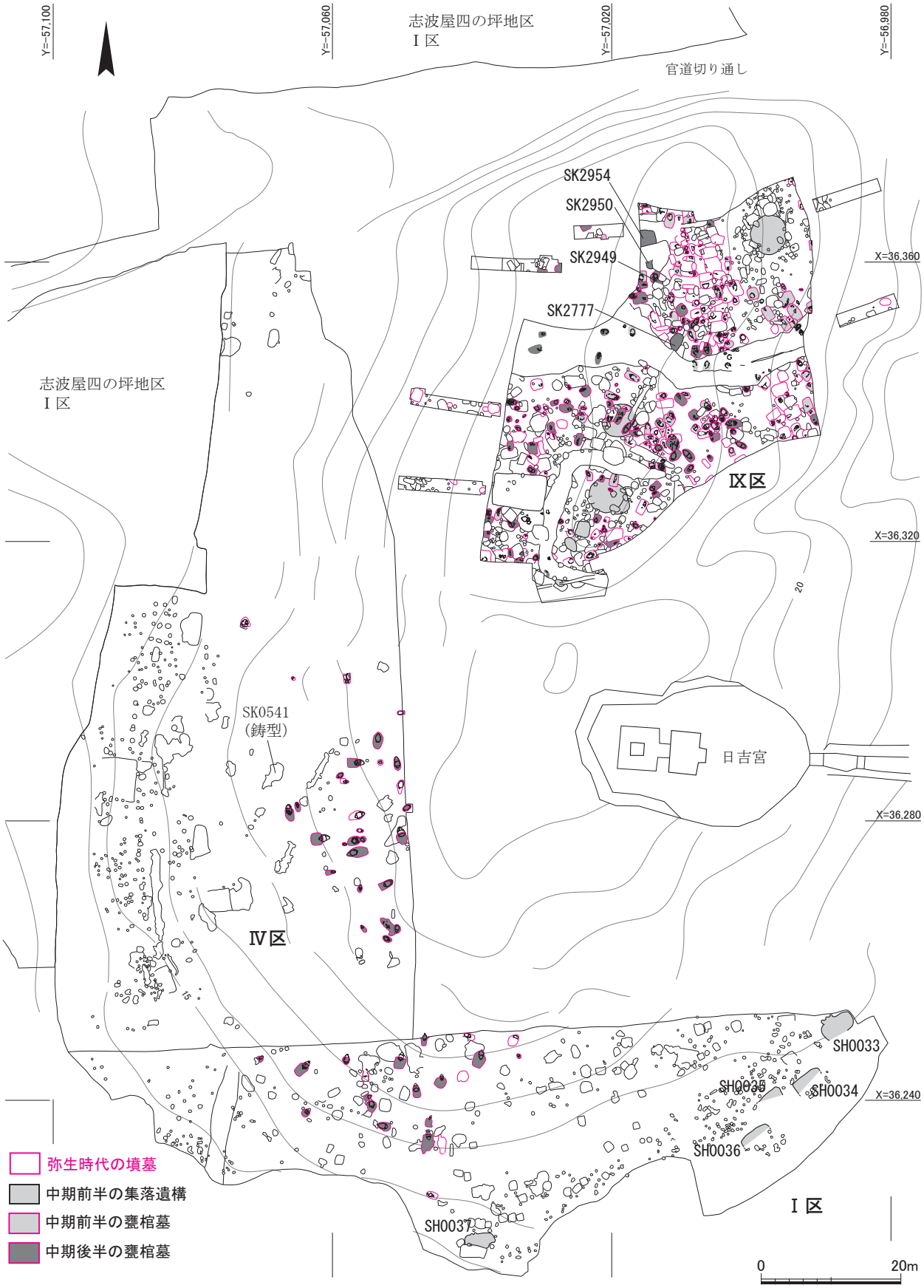


図 94　遺跡中央部　吉野ヶ里丘陵地区Ⅰ・Ⅳ・Ⅸ区　中期前半～中期後半の遺構の分布（1/800）

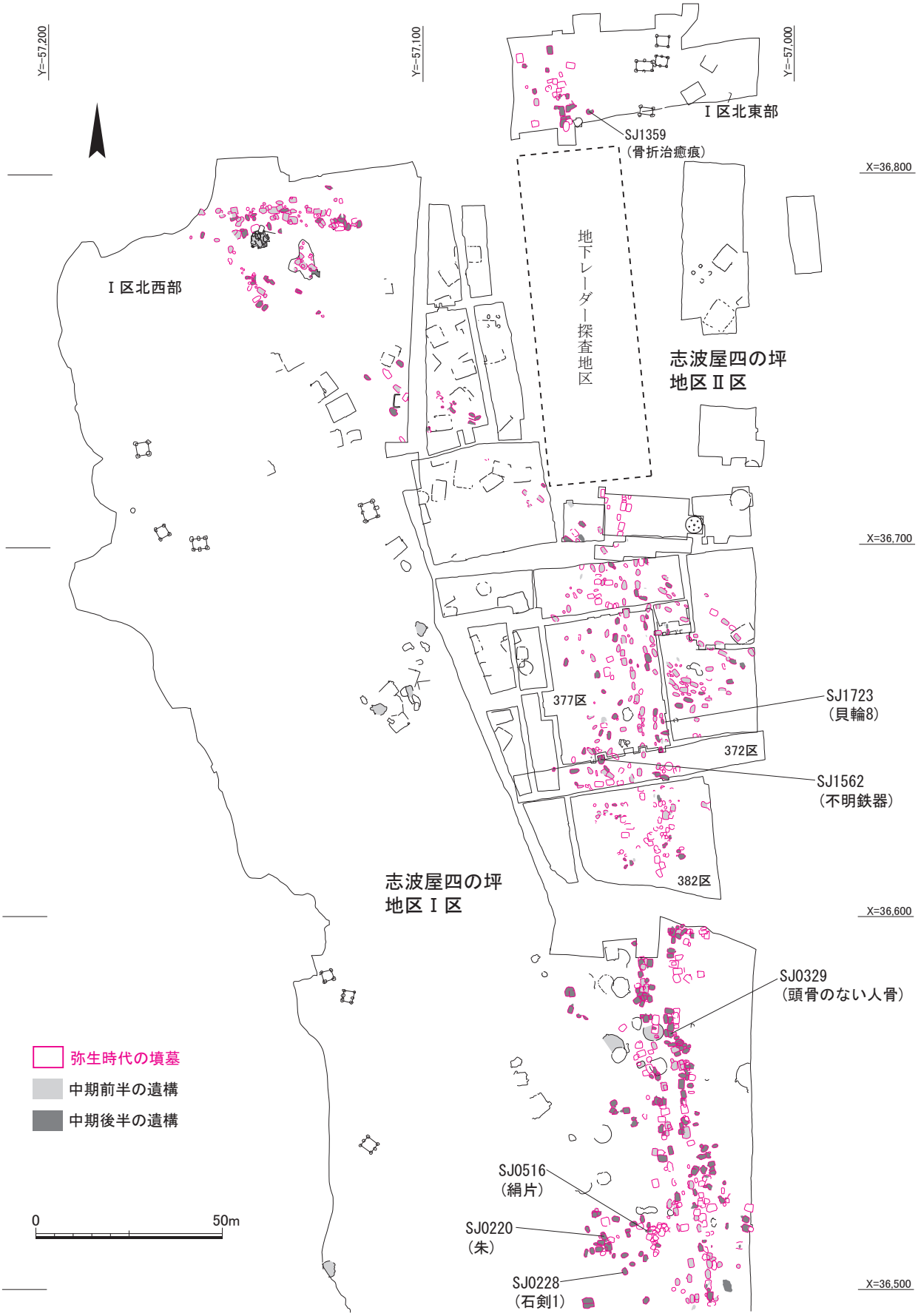


図 95　遺跡北部　志波屋四の坪地区Ⅰ・Ⅱ区　中期前半～中期後半の遺構の分布（1/1,500）

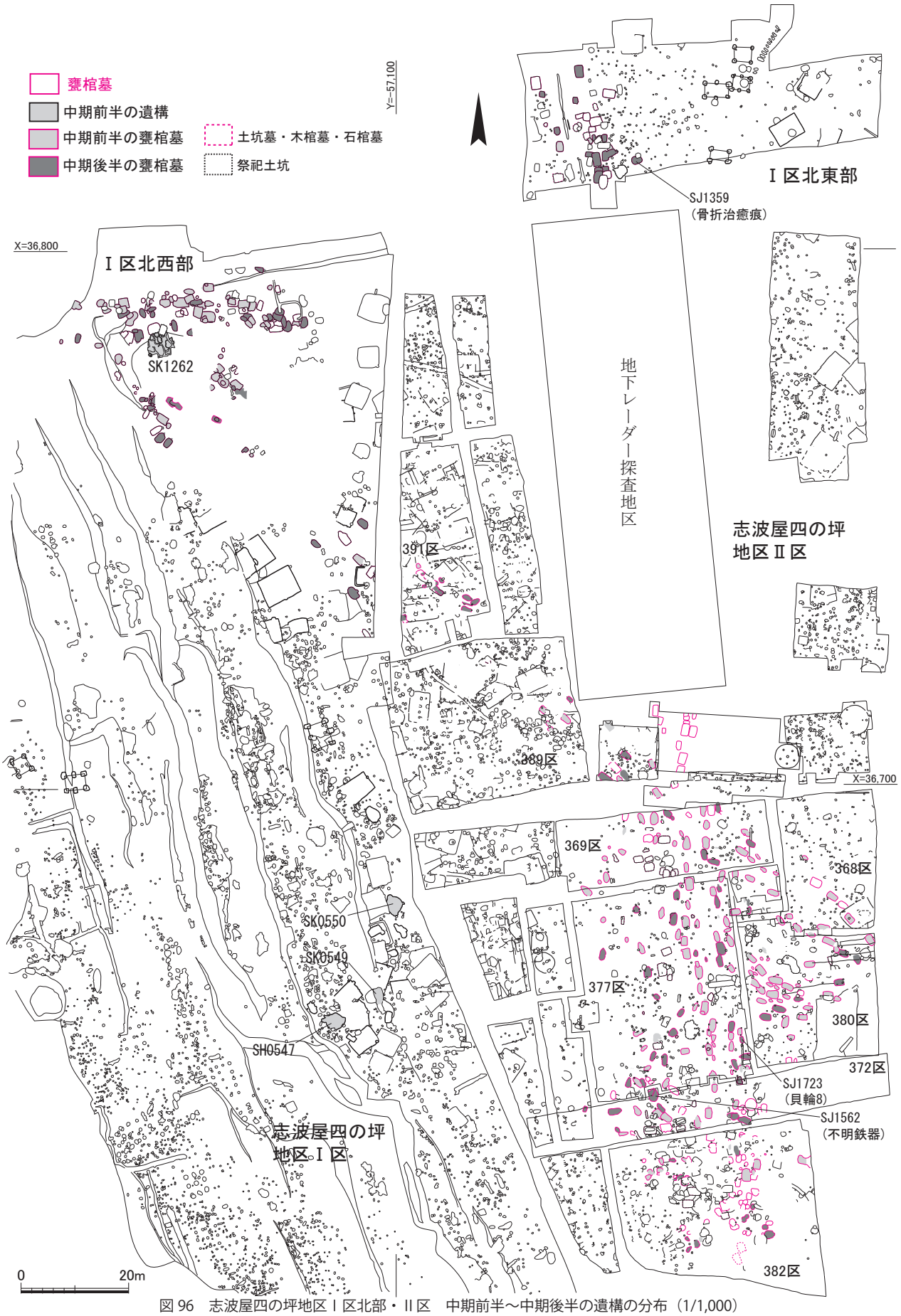


図 96　志波屋四の坪地区Ⅰ区北部・Ⅱ区　中期前半～中期後半の遺構の分布（1/1,000）

図 97　志波屋四の坪地区Ⅰ区南部　中期前半～中期後半の遺構の分布（1/1,000）

図 98　志波屋四の坪地区Ⅰ区南部墓地中央　遺構の分布詳細（1/300）

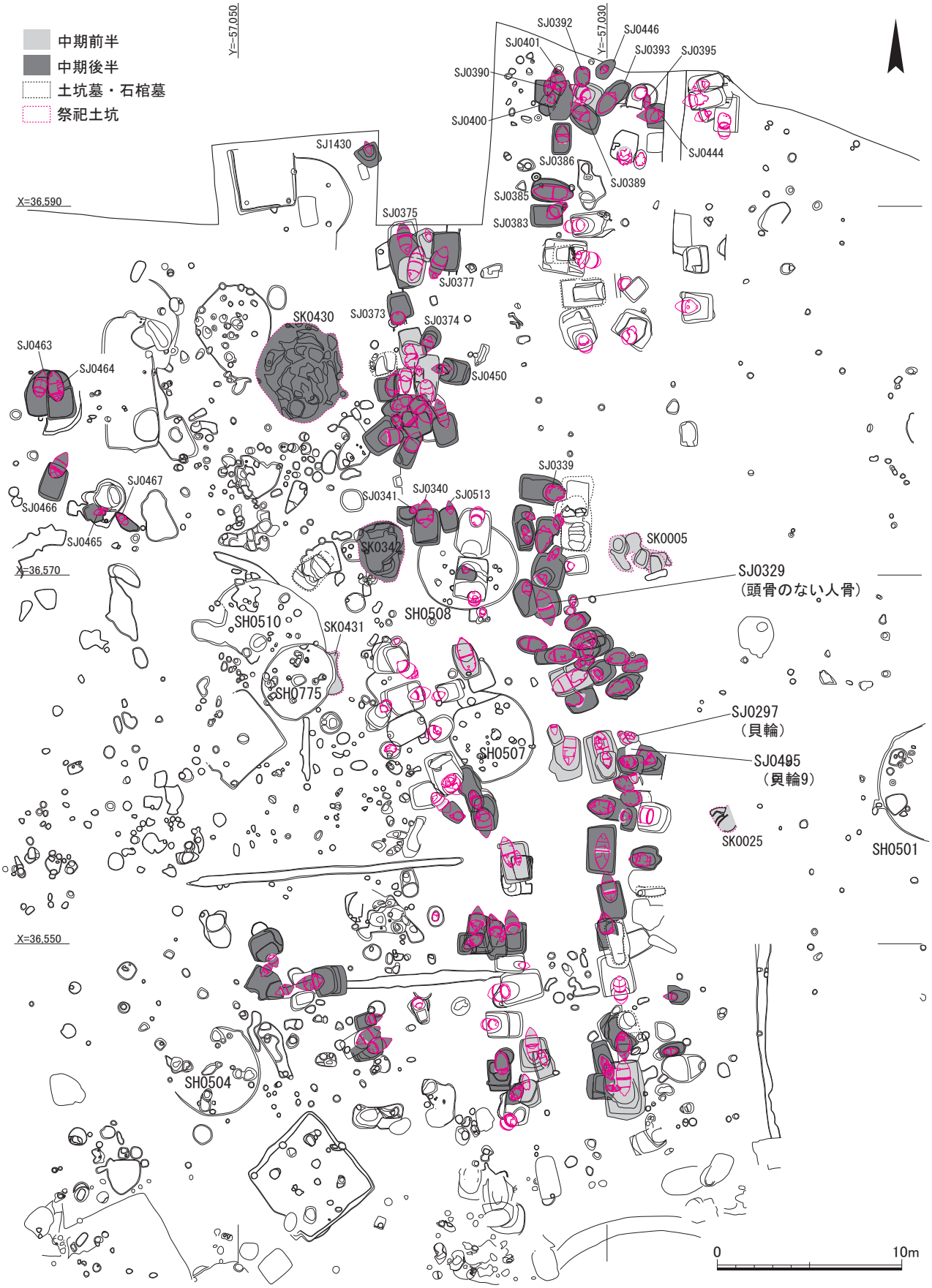


図 99　志波屋四の坪地区Ⅰ区南部墓地北側　遺構の分布詳細（1/300）

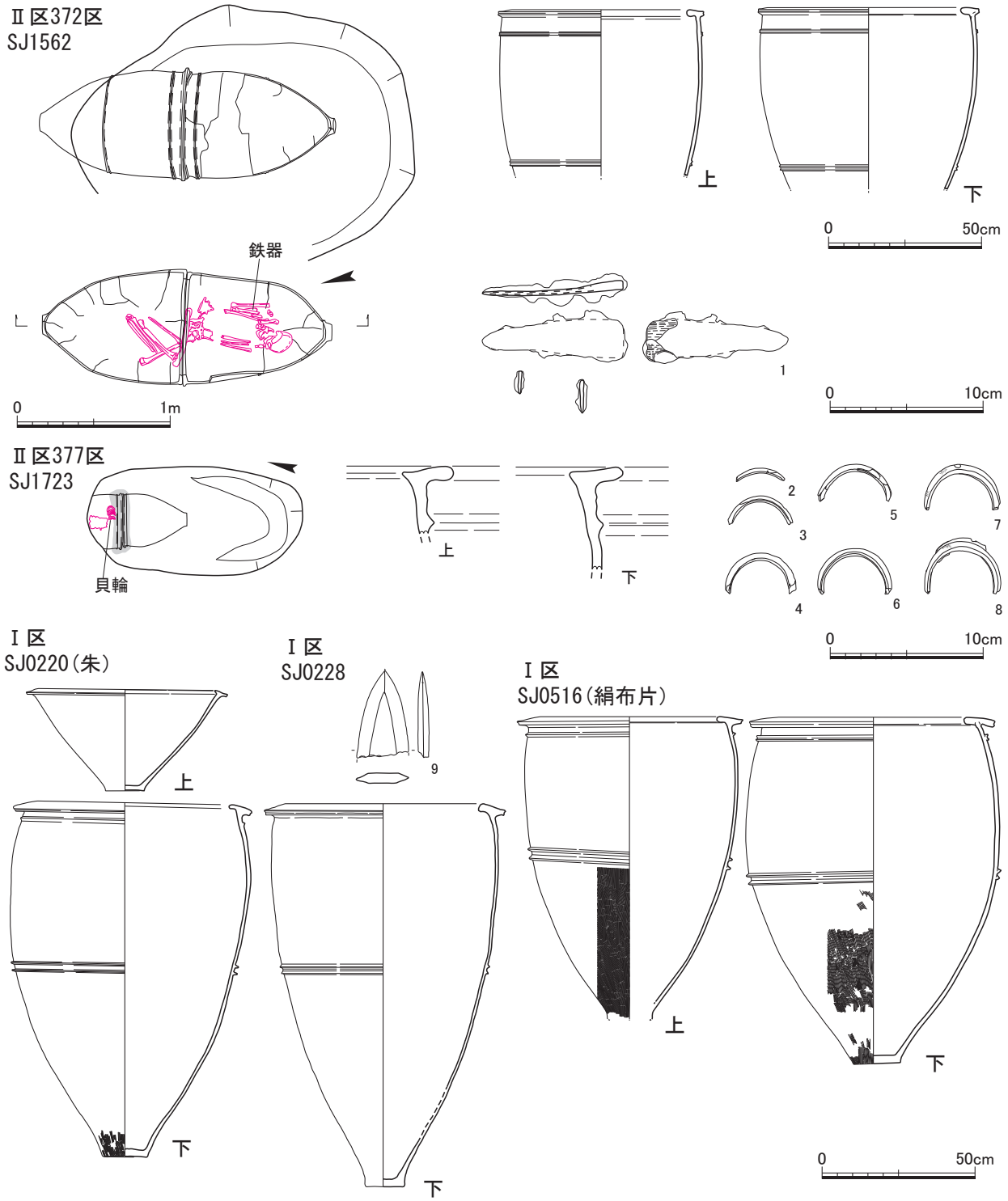


図 100　志波屋四の坪地区　中期後半の墳墓と副葬品（1/40,1/20,1/4）

れていった可能性がある。なお､外環壕の掘削時期に関する問題は次の後期の項で詳しく述べる。また、遺跡南部西側の谷部から低地部にかけて展開する溝跡（SD0308・SD0029 など）については、出土土器から中期後半～後期前半にかけて機能していたとみられる。

吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区・吉野ヶ里地区Ⅴ区では、中期末～後期初頭の墳墓遺構は中期後半に比べて大幅に減少しており、甕棺墓約 20 基が展開している程度である。特徴的な遺物としては、Ⅲ区南東部に位置する SK0939 土坑から、中期末の土器とともに外面に丹塗りが施された鐸形土製品が出土してい

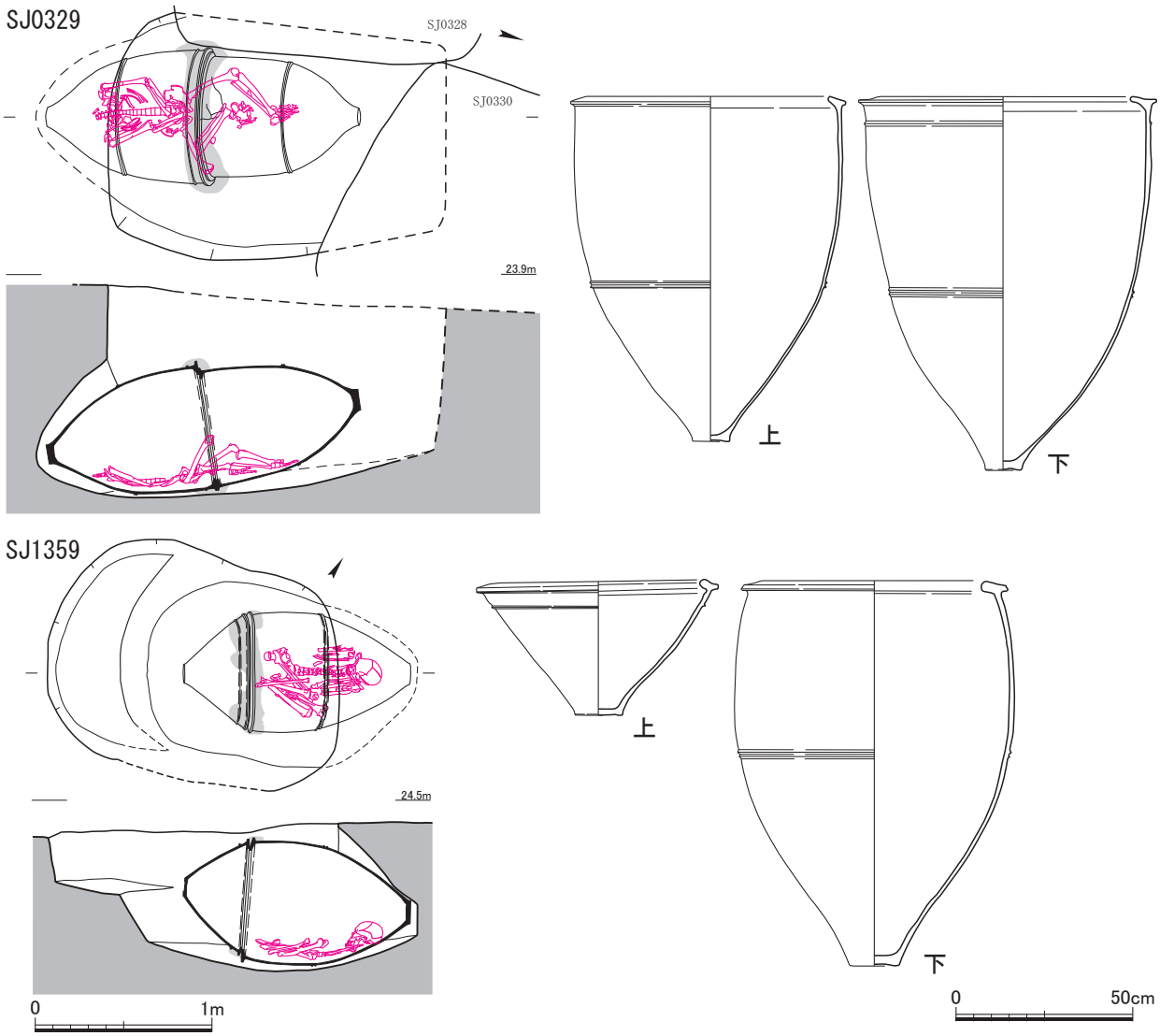


図 101　中期後半の墳墓と受傷人骨（1/40,1/20）

る（図 106-1）。墓地に対し、集落はⅤ区を中心に中期末の長方形基調の竪穴建物がまとまって展開しており、中心的な集落が形成されはじめたとみられる。

遺跡中央部の集落と墓地

中期末の吉野ヶ里地区Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区では、集落遺構は確認されておらず、墳墓数も大幅に減少している。中期末～後期初頭の甕棺墓は 30 基程度で、分布状況をみるとⅠ区、Ⅱ区東部、Ⅱ区北部、Ⅲ区北部に分散して展開しており、中期前半から中期後半にかけて形成された北東 - 南西方向に延びる墓列からは離れた場所にある（図 107）。Ⅱ区東側に位置する SK0400 は径約 30m の平面不整形の大型土坑で、内部は複数の掘り込みを有する。内部からは丹塗土器を含む完形に近い土器が大量に出土していることから、墳墓群に伴う祭祀土坑と考えられる（『214 集』）。なお、副葬品を伴う中期末～後期初頭の墳墓は確認されていない。

吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区では、他の調査区とは異なり、中期後半から墓地が拡大し、中期末～後期初頭にかけて甕棺墓約 130 基からなる中心的な墓域が形成されるようになる（図 109,110）。また、甕棺

図 102　遺跡北端部　志波屋三の坪（甲）遺跡　遺構の分布（1/2,000,1/250）

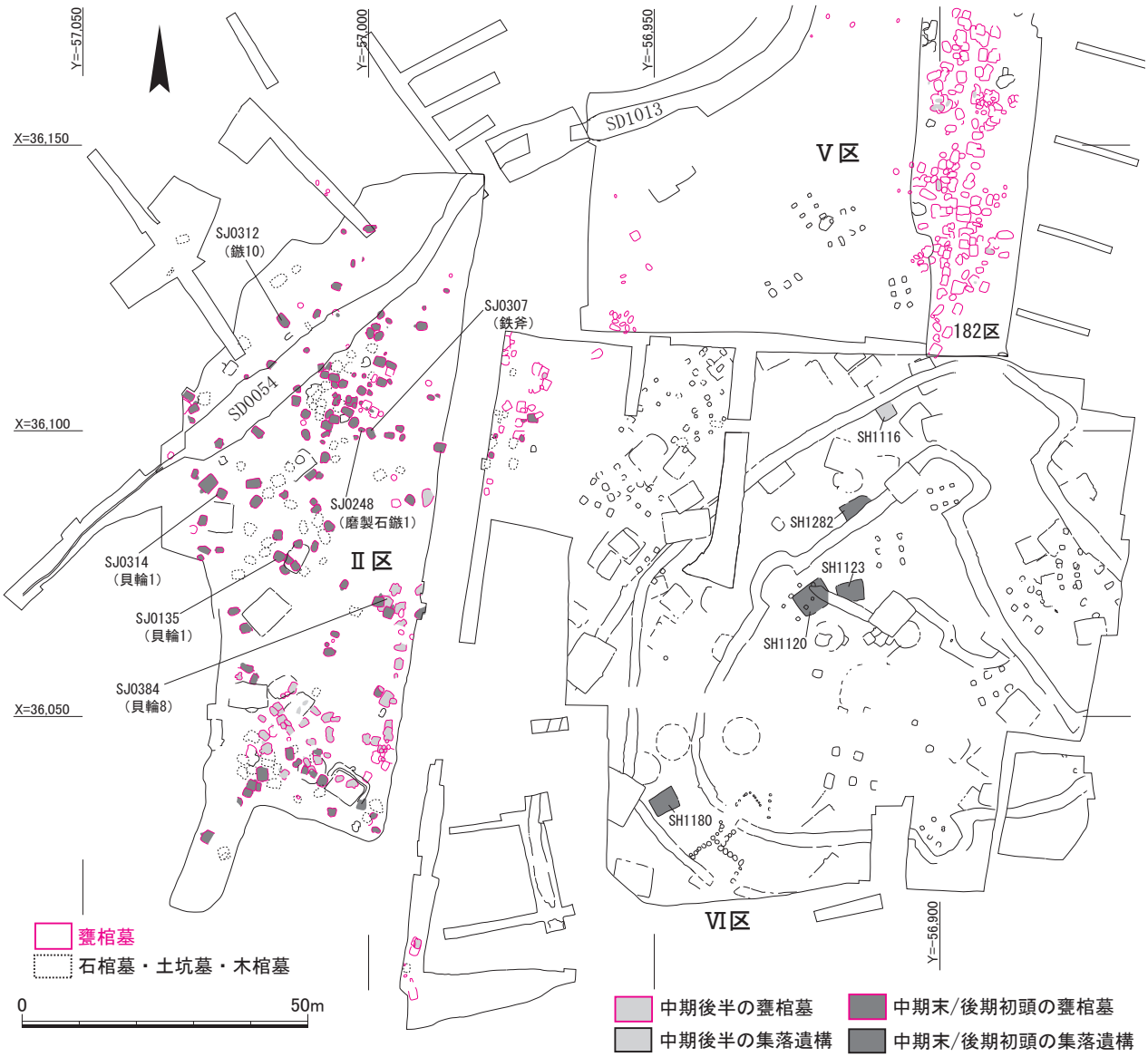
墓とともに土坑墓・木棺墓も数多く展開しており、時期不明のものが多いが、甕棺墓との切り合い関係などから中期後半以降～後期に属するものが多いと考えられる。なお、Ⅵ区北側に隣接するⅤ区 182 調査区では、中期前半～中期後半の南北方向の列埋葬甕棺墓地が展開していたが、墓地は中期末以降には継続していない。墓地に対する集落遺構は、吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区ではほとんど確認されていないものの、Ⅵ区では平面長方形の竪穴建物 4 棟が展開しており、小規模ながら集落が営まれている（図 109）。また、Ⅱ区北側を南西 - 北東方向に延びる SD0054 壕跡は、弥生時代後期の吉野ヶ里の中心集落を取り囲む外環壕の一部であるが、中期末～後期初頭の段階では甕棺墓地が形成されていることから、環壕の掘削は後期前半頃と考えられる。なお、墓地と外環壕掘削時期の問題については次項で詳述する。

Ⅱ区の中期末の副葬品を伴う墳墓は、SD0054 の周辺にまとまって分布している（図 111）。SJ0307 甕棺墓からは、熟年女性人骨とともに板状鉄斧が出土している（図 112-11）。SJ0312 甕棺墓からは、残存不良の壮年男性人骨とともに、10 本の鏃（磨製石鏃 6・打製石鏃 3・サメ歯鏃 1）（図 112-2 ～ 10）が出土しており、出土状況から鏃は被葬者の身体に嵌入していた可能性が高い。小型棺 SJ0248 からは、ほぼ完形の磨製石鏃が 1 点出土している（12）。SJ0314 甕棺墓からは、残存状況不良の人骨とともにイモガイ横切型の貝輪 1 点、SJ0135 甕棺墓（後期初頭）からはイモガイ横切型の貝輪 1 点（13）と絹布・麻布片、赤色顔料（朱）が出土している。このほか、SJ0247・SJ0356 甕棺墓の棺内から人骨とともに赤色顔料（朱）が出土している。甕棺墓以外では、SP0267 土坑墓（後期以前）から打製石鏃 2 点、SP0282 土坑墓から打製石鏃 1 点、SP0306 土坑墓（中期？）から磨製石剣切先 1 点、202 調査区 SP0455 土坑墓からガラス小玉 2 点が出土している（『214 集』）。

中期末の吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区は、中期後半に引き続き墓地としてのみ利用されている（図 113,114）。中期前半代に築造され、中期後半にかけて計 14 基の甕棺墓が埋葬されている ST1001 北墳丘墓は中期後半新相（須玖式新段階）までで埋葬が終わっており、中期末以降の墳墓は確認されていない。ST1001 北墳丘墓の周辺では、西側の 210・211 調査区、北側の 206 調査区や 184 調査区北側で、中期末～後期初頭の甕棺墓が 10 基程度展開しているのみであり、墳墓数は大きく減少している。また、ST1001 の南に位置する SD1011 墓道状遺構からは、中期前半～後期前半を中心とする大量の土器が出土しており、なかには中期末～後期前半の甕棺片も含まれる（『219 集』）。このことから、中期末～後期初頭には ST1001 北墳丘墓の北部から西部にかけて、それまで墓地が展開していなかった場所に、新たに小規模な墓地が形成されたと考えられる。なお、中期前半から中期後半にかけて吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区における中心的な墓域を形成していた 184 調査区南部や 182 調査区では、中期末以降の甕棺墓は確認されておらず、墓地として利用されなくなっている。

墳墓に関連して、ST1001 北墳丘墓の東側に隣接する SK1699 大型祭祀土坑では、中期末以降の土器も大量に出土している。特徴的な遺物として、SK1699 中央の 55 区から注口土器が、SK1699 北側の 54 区から大型の広口壺が出土している（図 93）（『219 集』）。出土土器の時期から、SD1011 墓道状遺構と SK1699 大型祭祀土坑では、ST1001 北墳丘墓への埋葬が終了したあと、後期になっても継続して祭祀行為が行われていたと考えられる。

吉野ヶ里丘陵地区Ⅰ・Ⅳ・Ⅸ区では、中期末になると墳墓数が大幅に減少している（図 115）。Ⅰ・Ⅳ区では中期末～後期初頭の甕棺墓 6 基が展開するのみで、それ以降には継続していない。なお、中期末の集落遺構は確認されておらず、墓地としてのみ利用されていたようである。



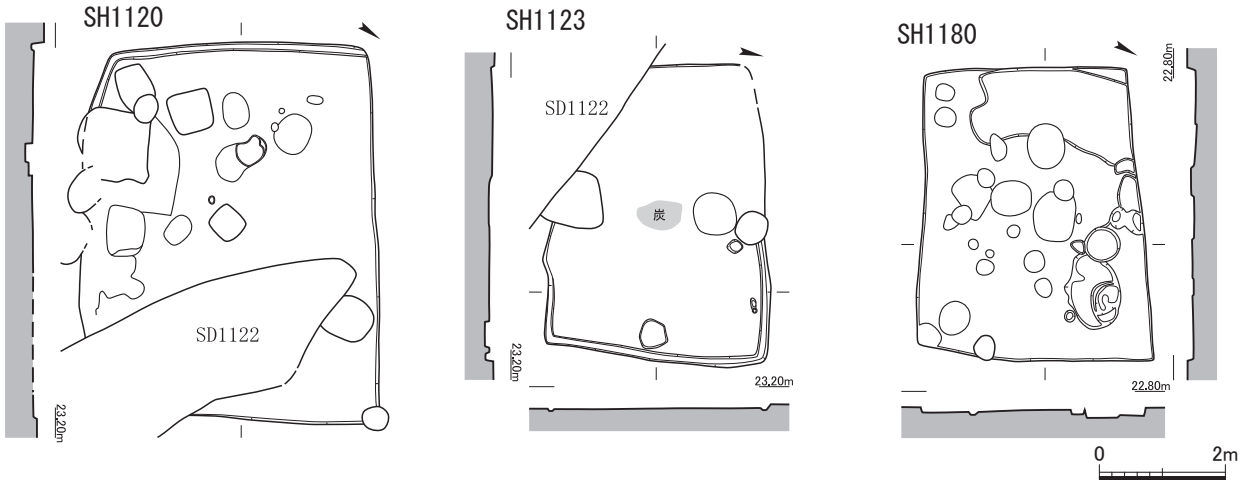


図 109　吉野ヶ里丘陵地区 II・VI区　中期後半～中期末 / 後期初頭の遺構分布略図（1/1,200）・中期末の竪穴建物跡（1/120）

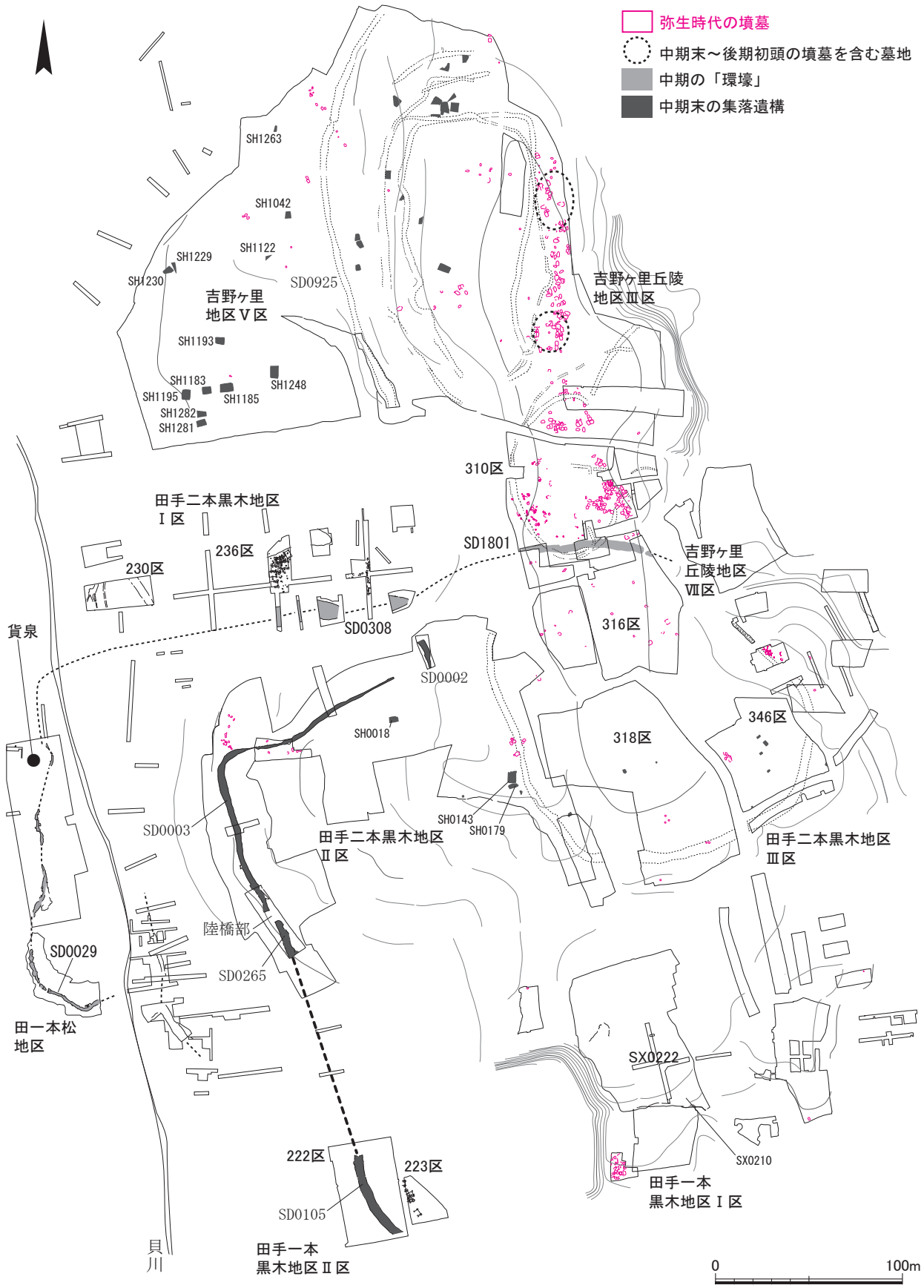


図 103　遺跡南部　中期末～後期初頭の遺構の分布（1/3,000）

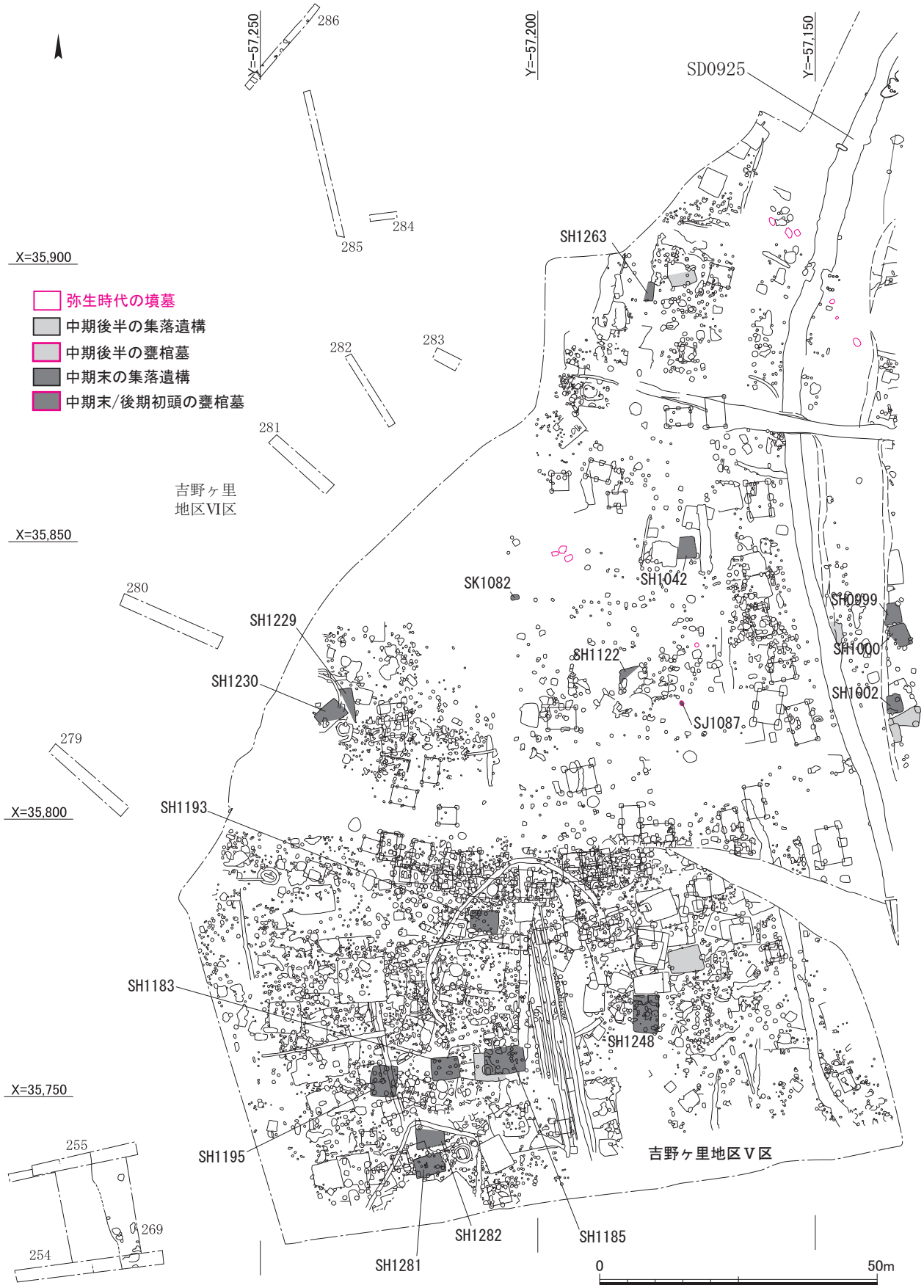


図 104　吉野ヶ里地区Ｖ区西部・VI区　中期後半～中期末 / 後期初頭の遺構の分布（1/1,000）

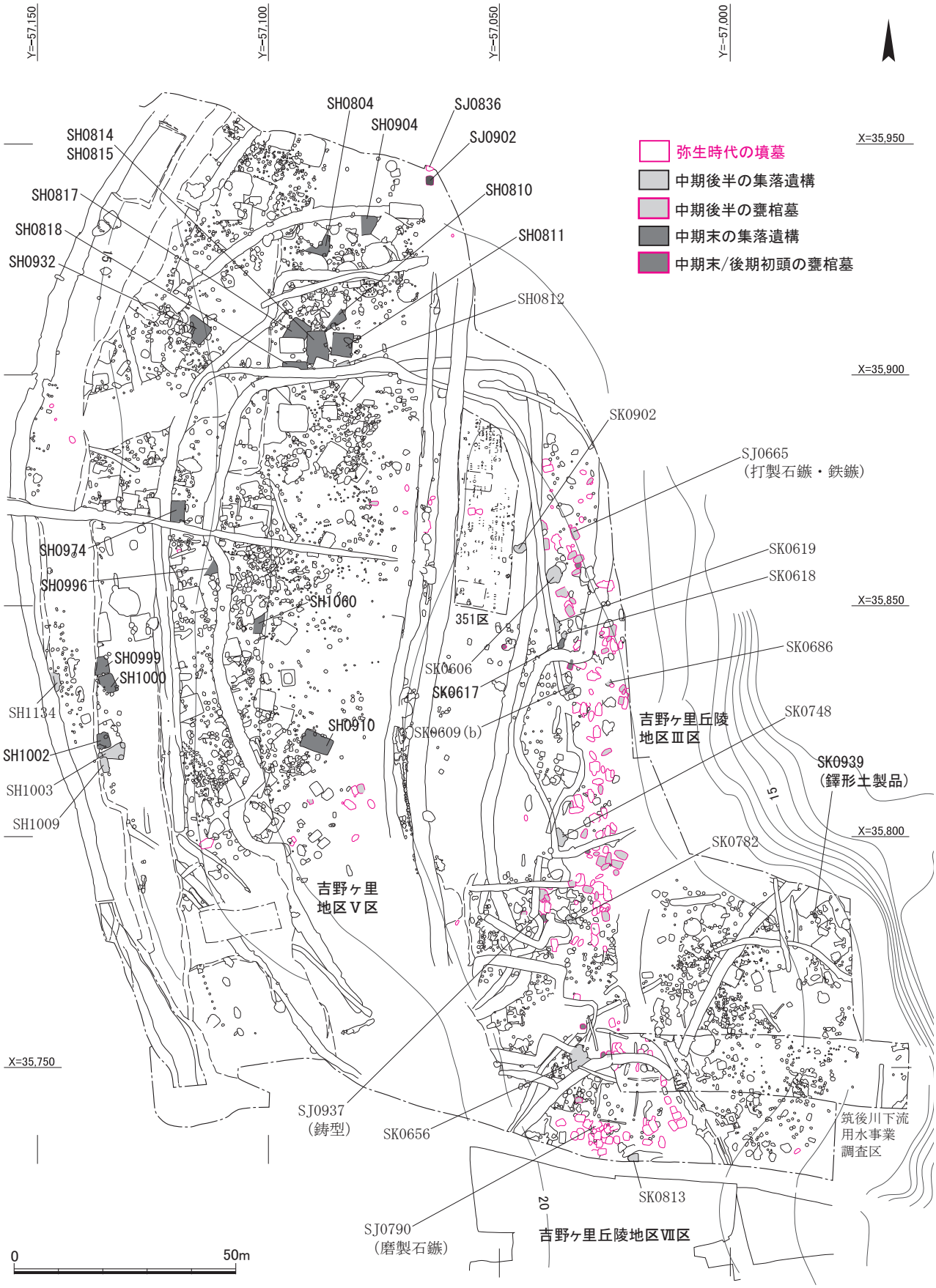


図 105　吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区・吉野ヶ里地区Ⅴ区東部　中期後半～中期末 / 後期初頭の遺構の分布（1/1,200）

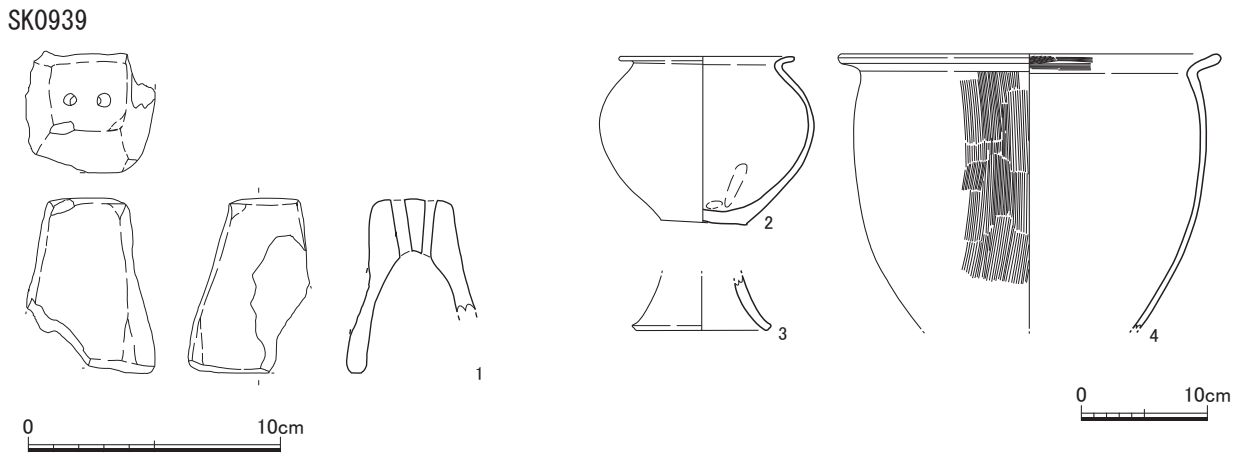


図 106　吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区　SK0609 土坑出土遺物（1/3,1/4）

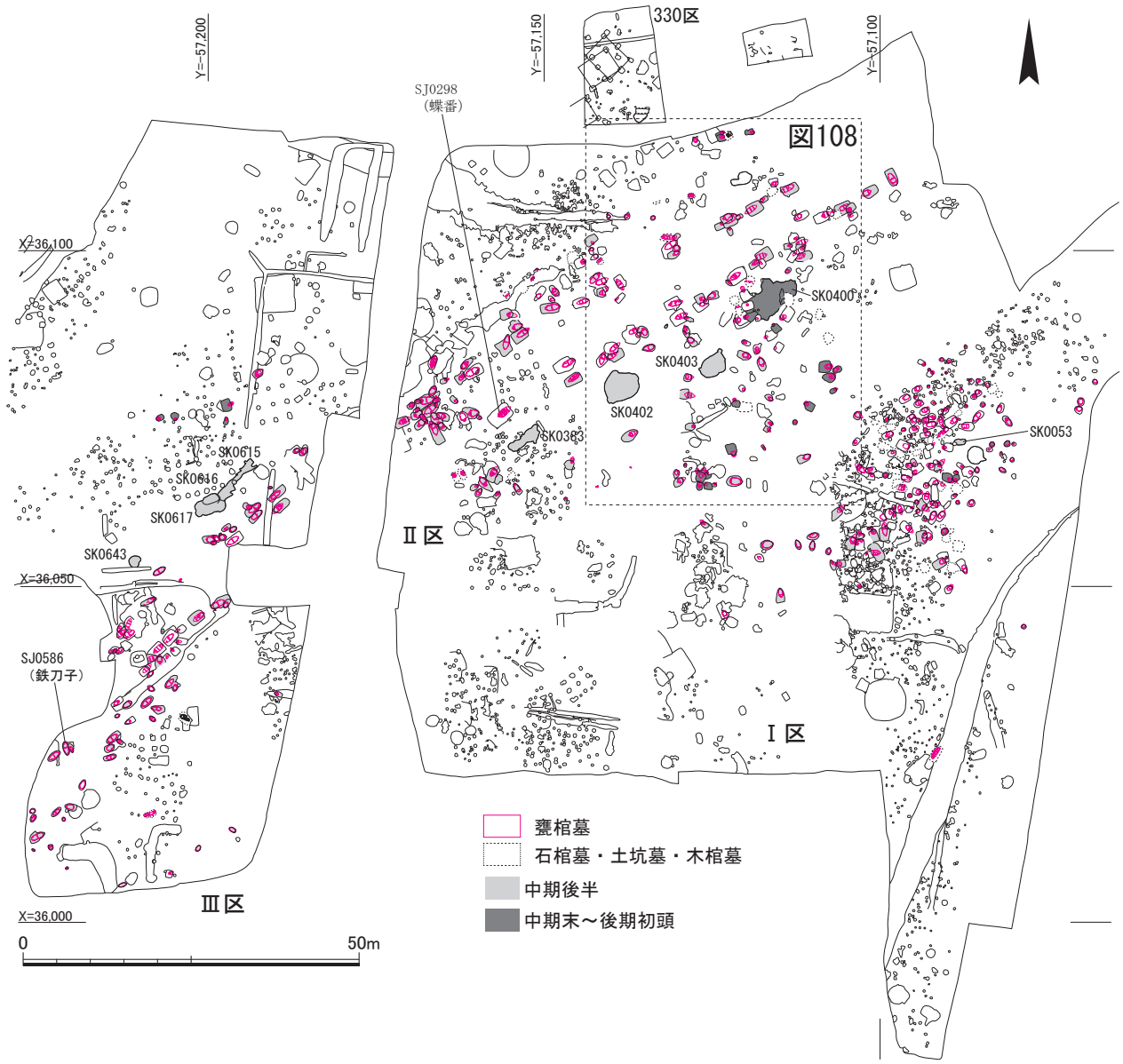


図 107　吉野ヶ里地区Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区　中期後半～中期末 / 後期初頭の遺構の分布（1/1,000）

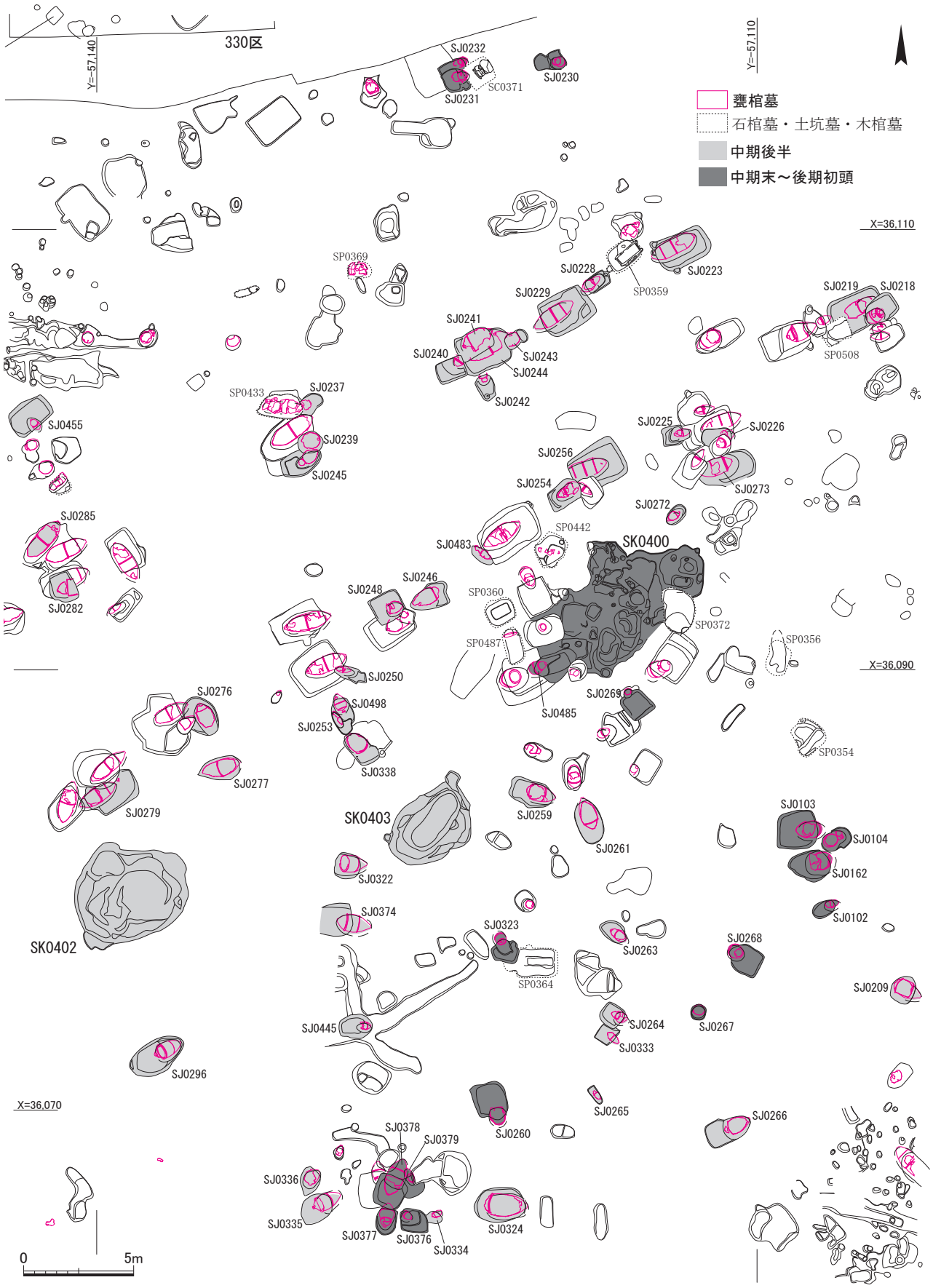


図 108　吉野ヶ里地区Ⅱ区　中期後半～中期末 / 後期初頭の遺構の分布（1/250）

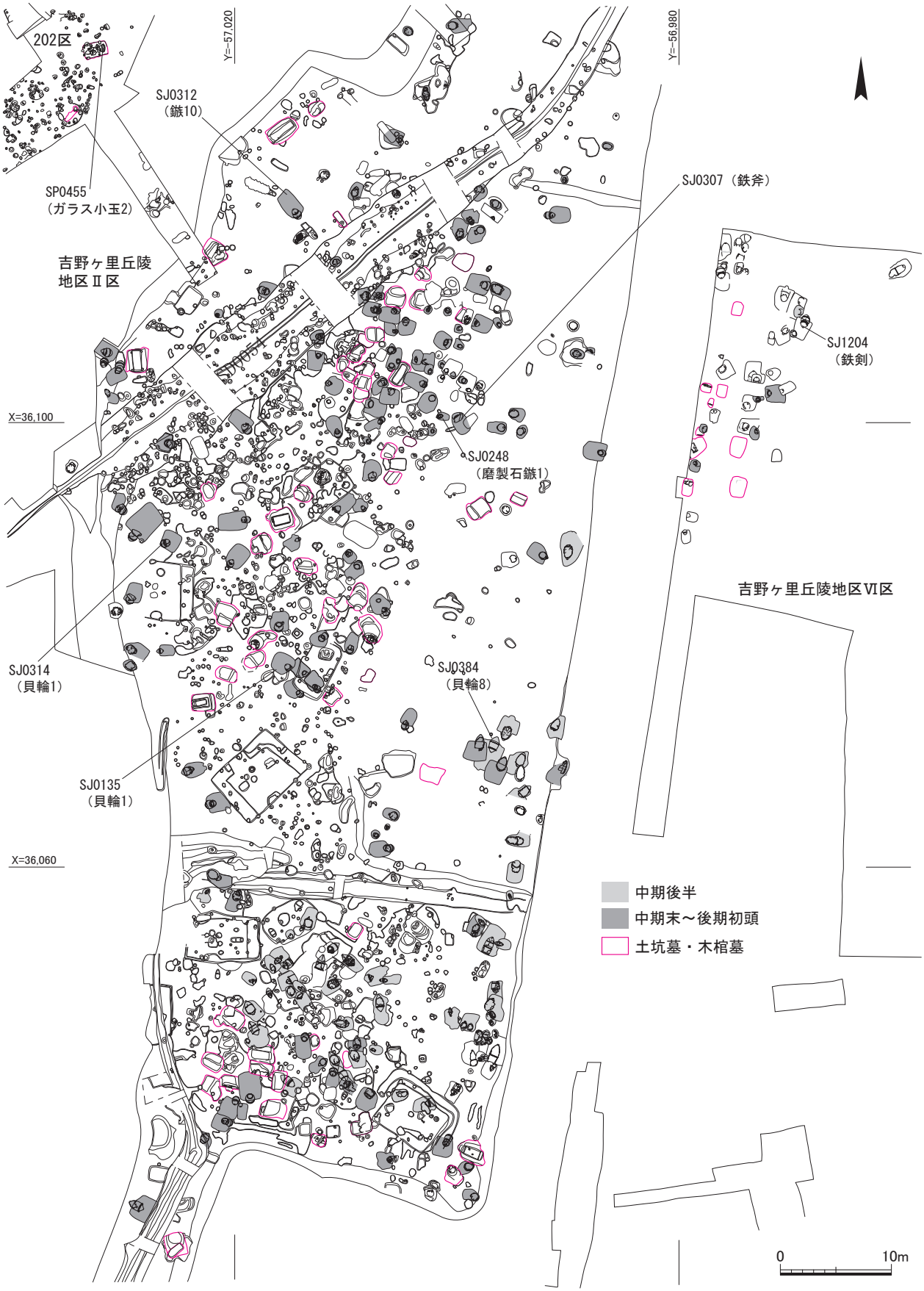


図 110　吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ・Ⅵ区　中期後半～中期末 / 後期初頭の遺構の分布（1/500）

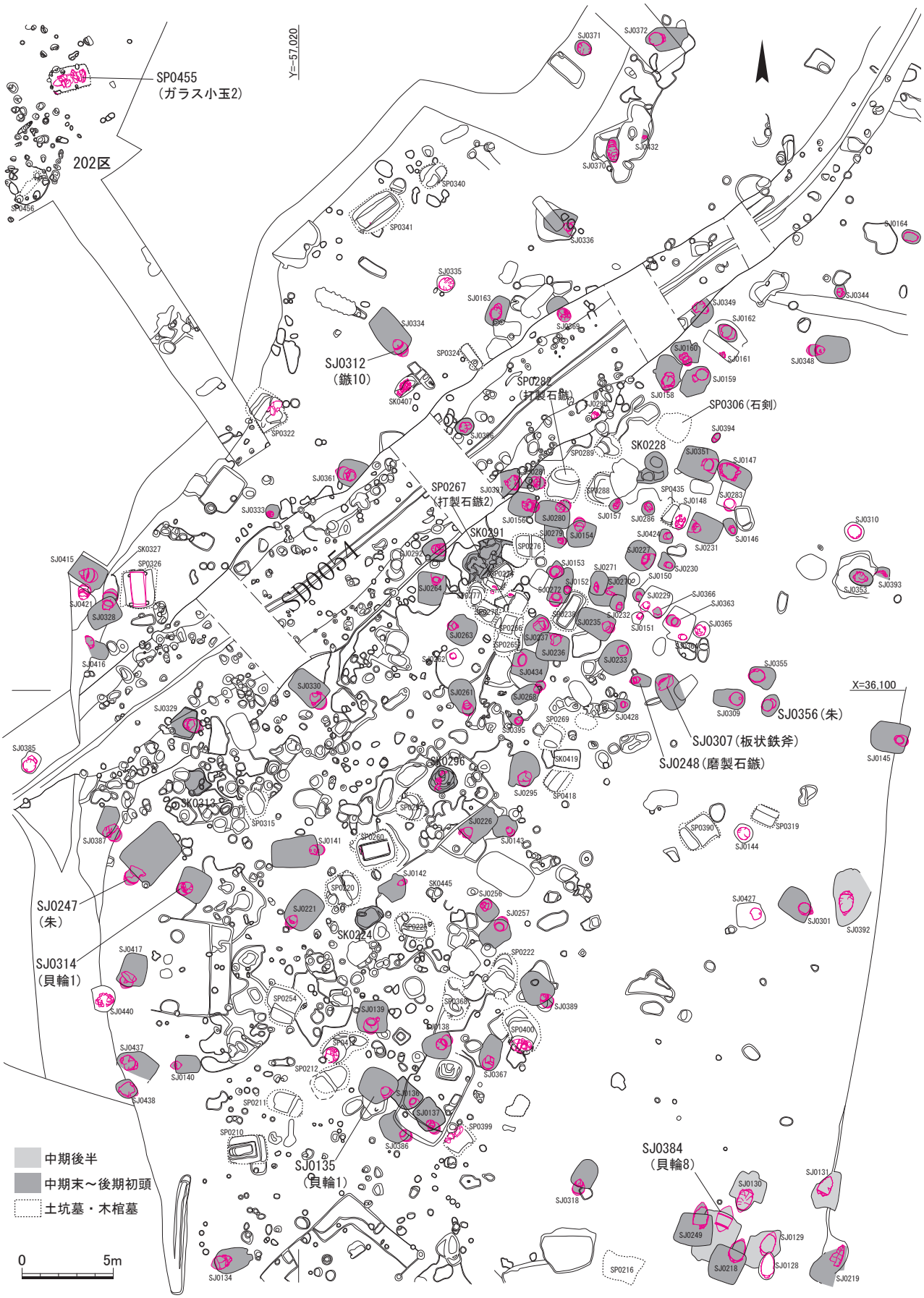


図 111　吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区　遺構の分布詳細（1/300）

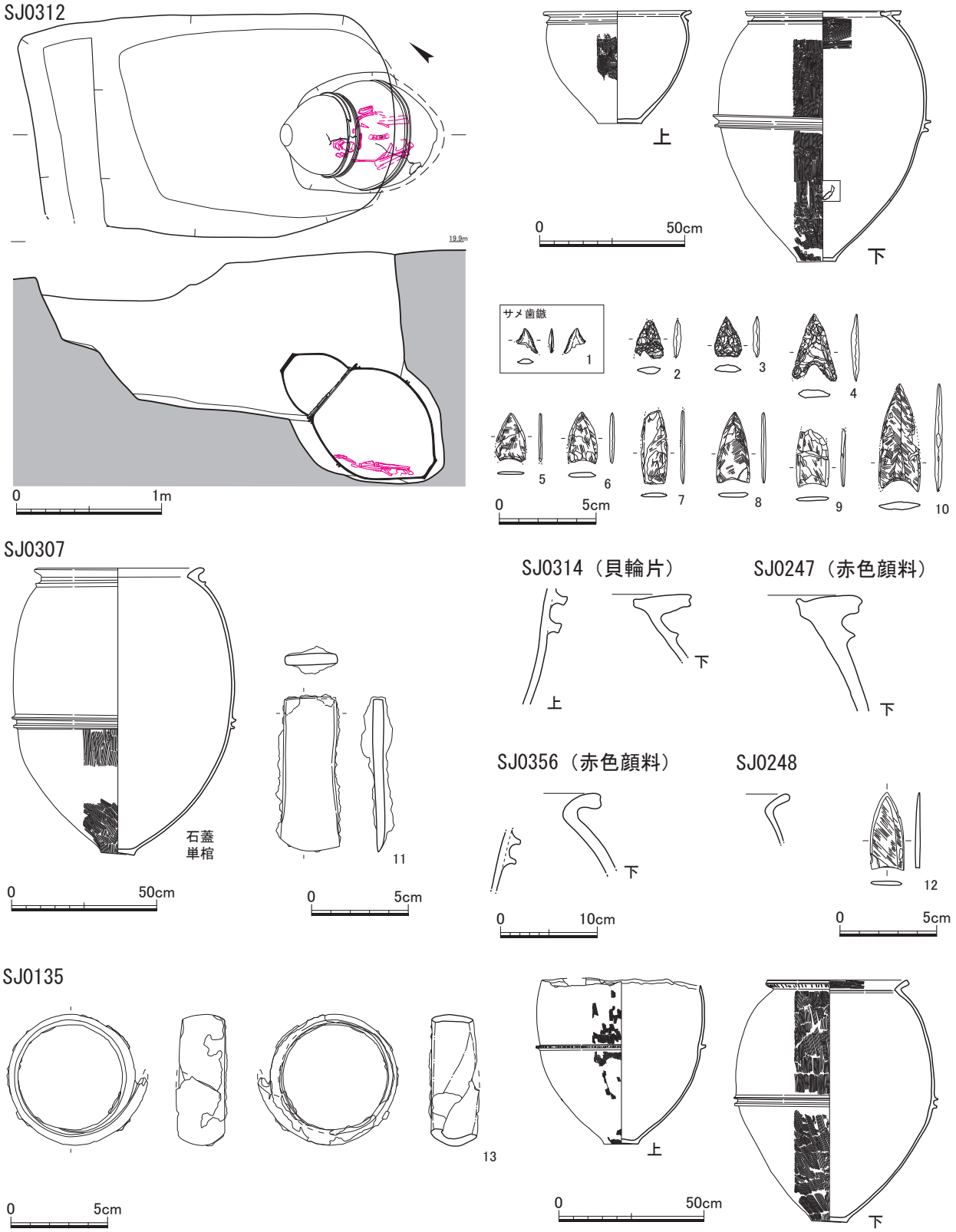


図 112　吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区　中期末～後期初頭の墳墓と副葬品（1/40,1/20,1/6,1/3）

中期前半以降、本区域一帯の中心的な墓地であるⅨ区では、中期末～後期初頭の墳墓は 11 基と、中期後半に比べて明らかに減少しており、分布範囲も狭まっているが、副葬品を伴う墳墓はⅨ区北側に偏る点が注目される。SJ2760 石蓋甕棺墓（中期末）からは、熟年女性人骨とともに碧玉製管玉が 2 点出土している（図 117-1,2）。SJ2545 石蓋甕棺墓（後期初頭）からは、熟年女性人骨とともに布片（絹？）が、

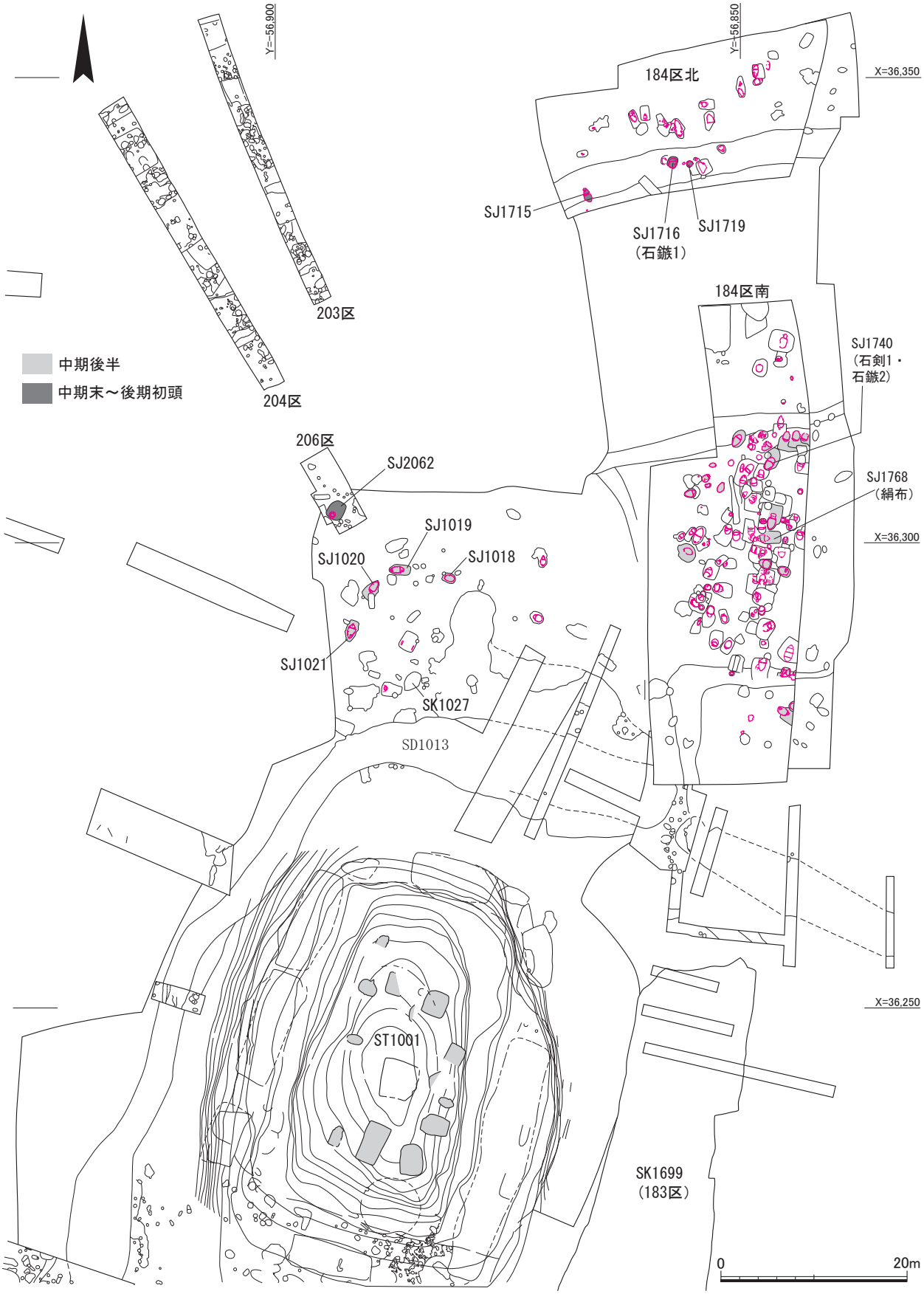


図 113　吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区中央～北部　中期後半～中期末 / 後期初頭の遺構の分布（1/600）

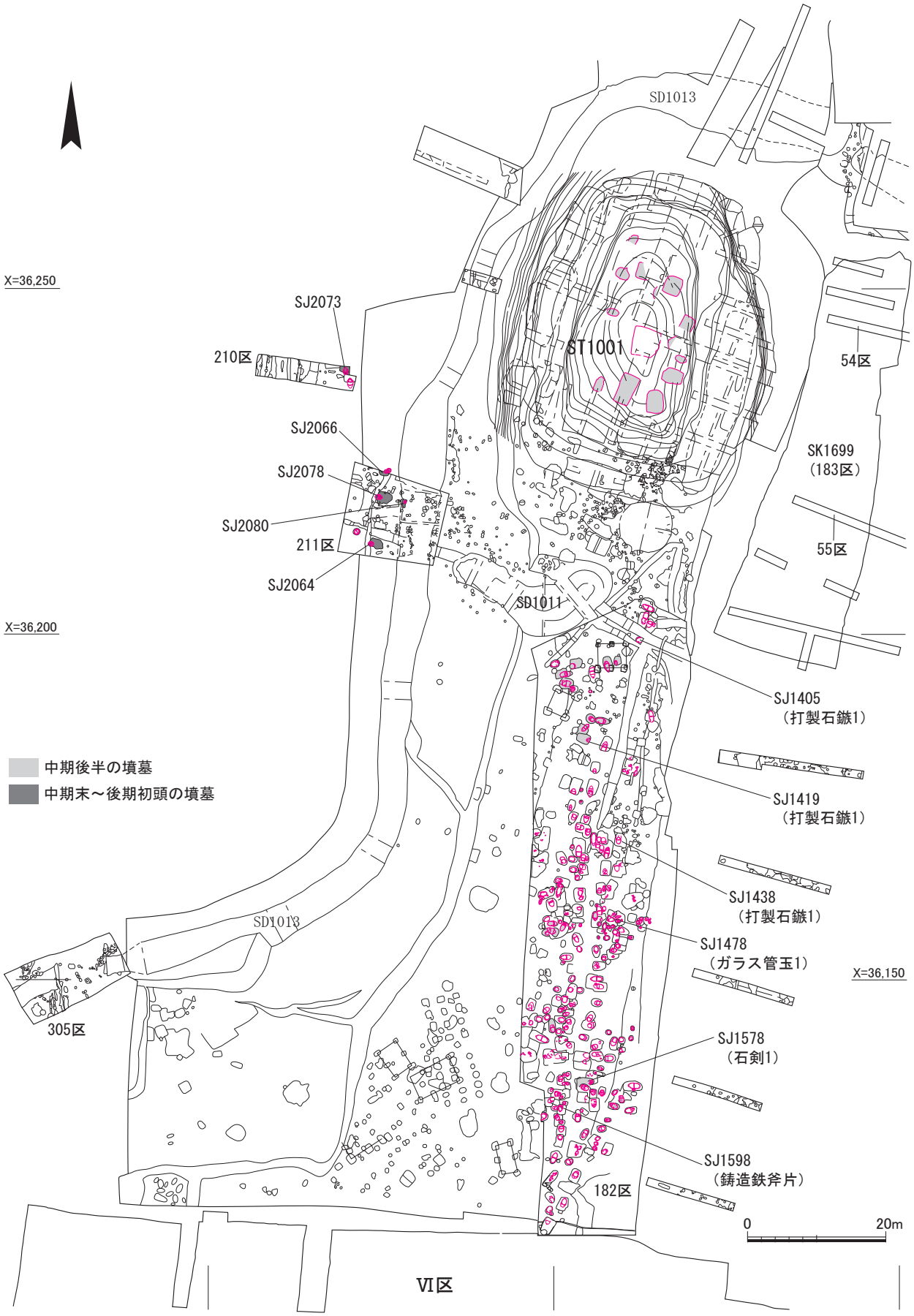


図 114　吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区中央～南部　中期後半～中期末 / 後期初頭の遺構の分布（1/800）

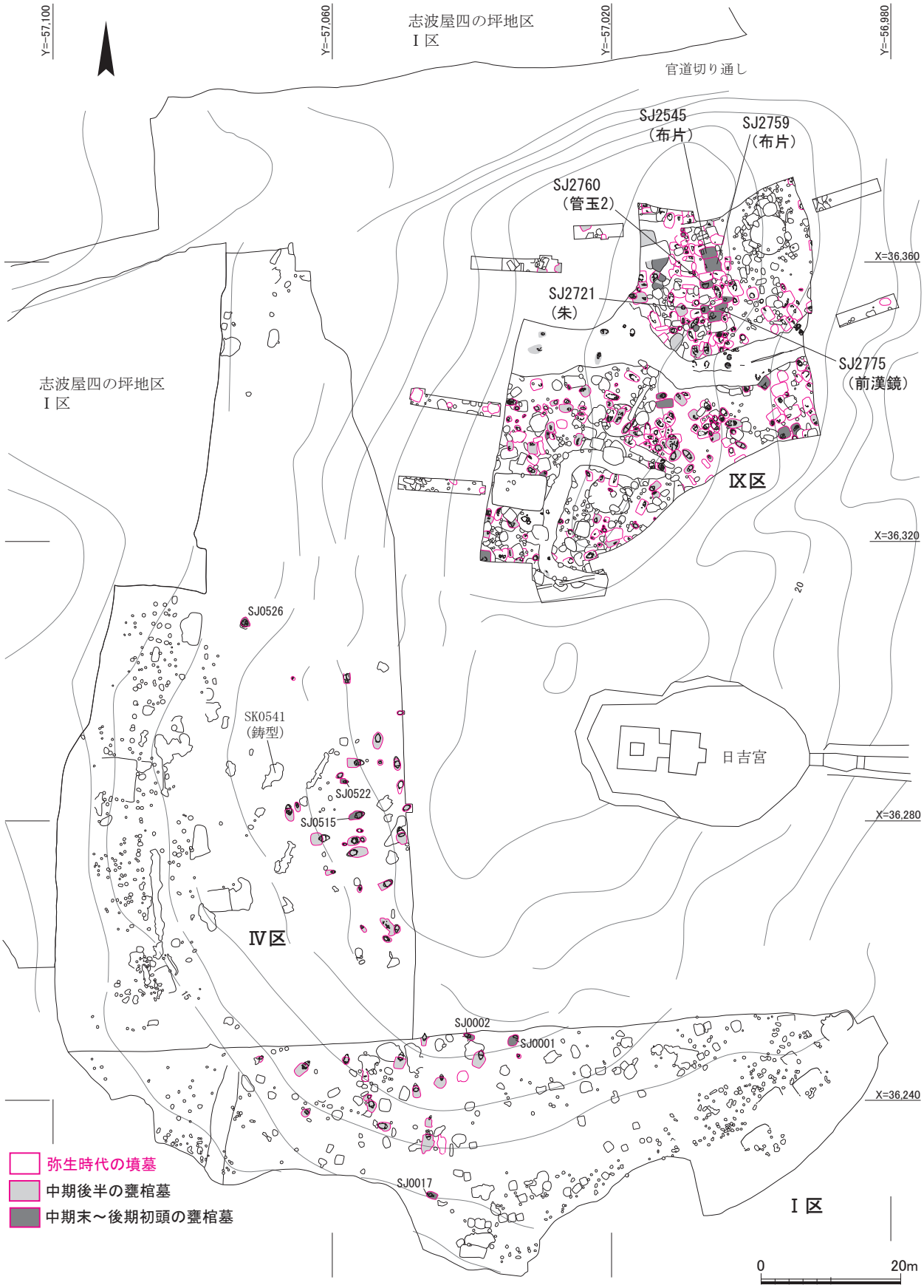


図 115　吉野ヶ里丘陵地区Ⅰ・Ⅳ・Ⅸ区　遺構の分布略図（1/800）

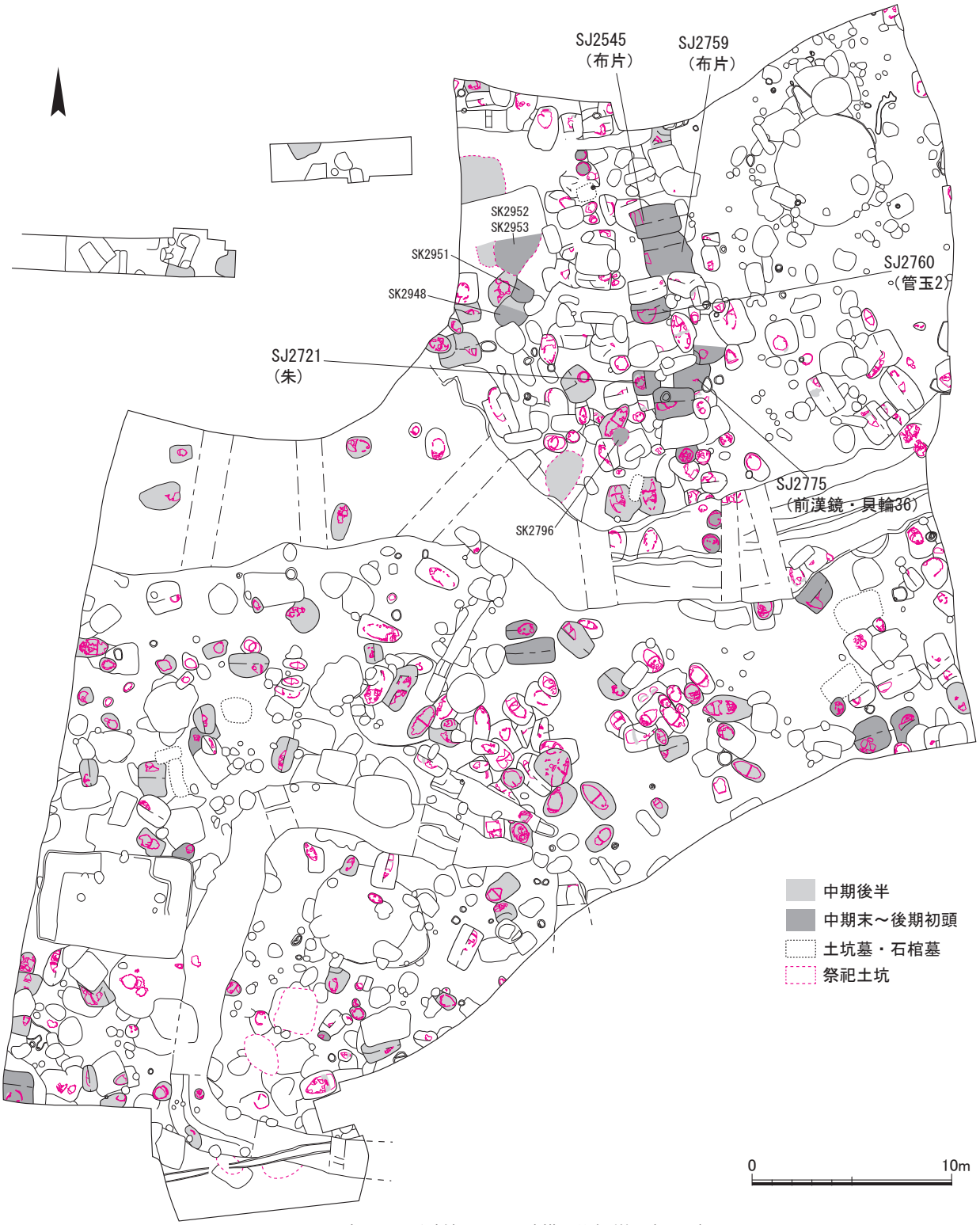


図 116　吉野ヶ里丘陵地区Ⅸ区　遺構の分布詳細（1/300）

SJ2759 石蓋甕棺墓（後期初頭）からは、壮年女性人骨とともに布片（絹？）が出土している。SJ2721 甕棺墓（後期初頭）からは、人骨片とともに赤色顔料（朱）が出土している。最も注目されるのは SJ2775 石蓋甕棺墓（立岩式）で、石蓋と棺体の間の目張り粘土部分から前漢代の小型の連弧文鏡 1 面が出土したほか、棺内からは両腕に 36 個のイモガイ貝輪を装着した熟年女性人骨が出土している（図 117）（『214 集』）。この SJ2775 甕棺墓は、ST1001 北墳丘墓への埋葬が終了した中期後半新相（須玖式

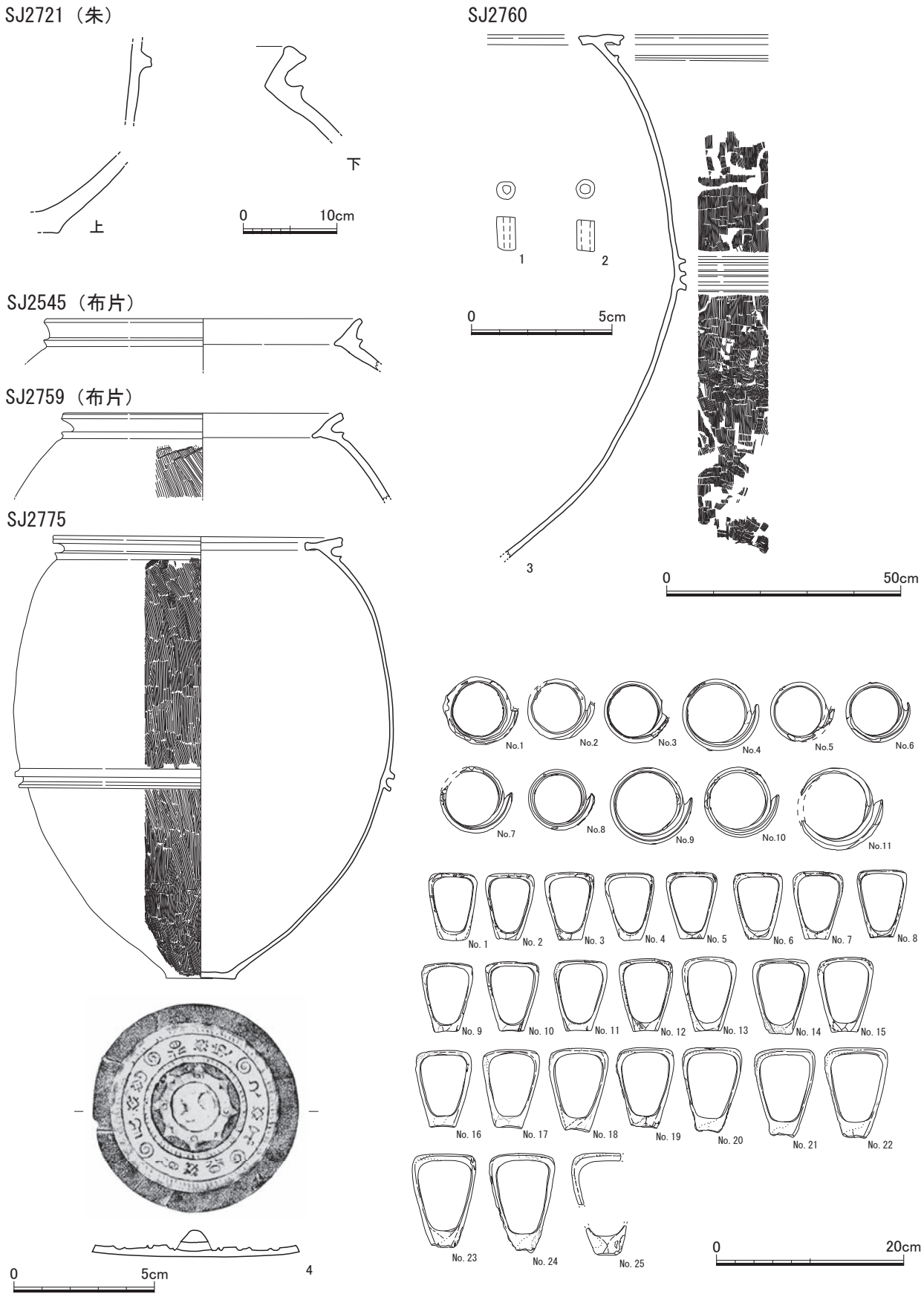


図 117　吉野ヶ里丘陵地区Ⅸ区　中期末～後期初頭の墳墓と副葬品（1/20,1/6,1/2）

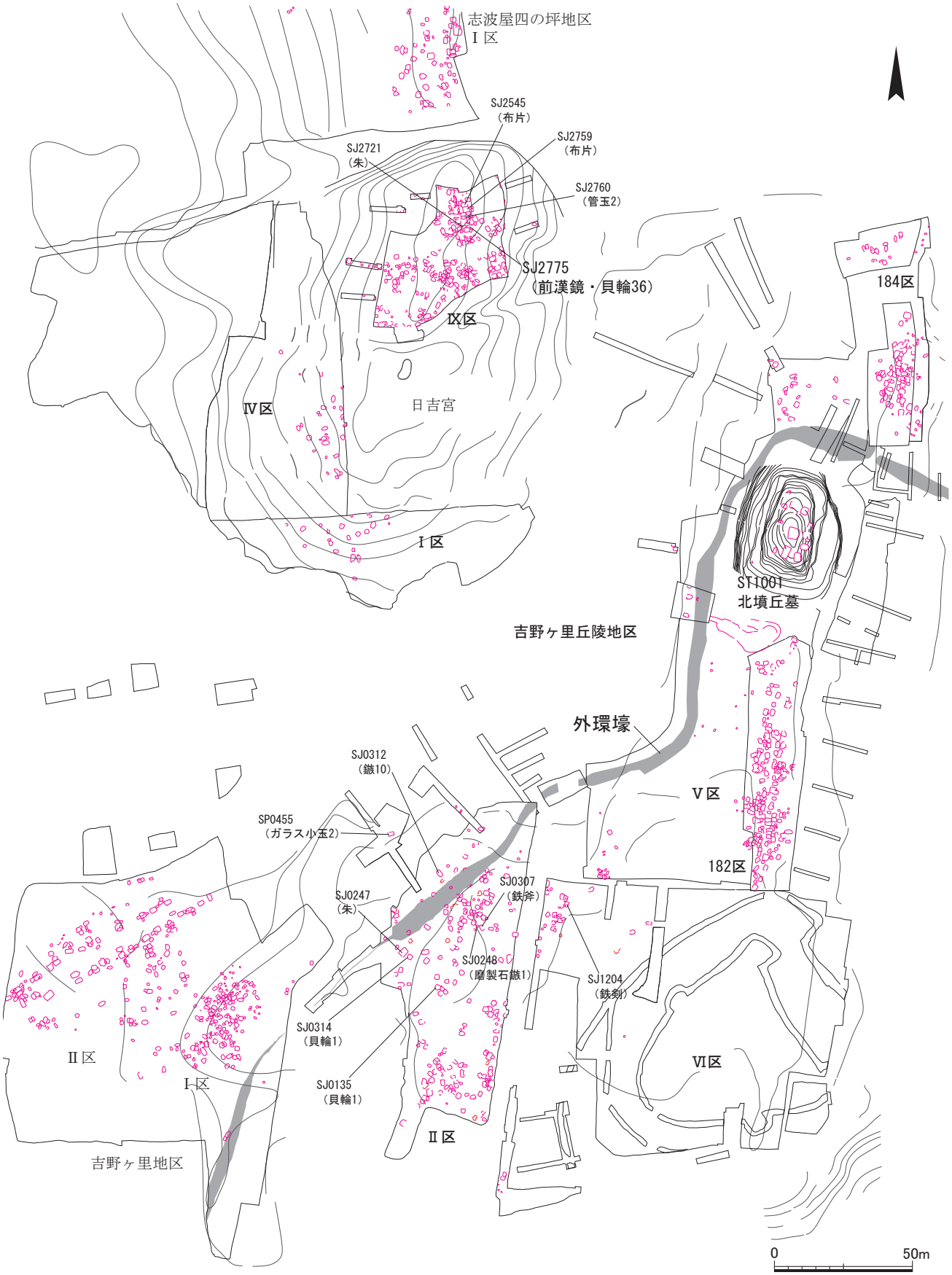


図 118　遺跡中央部　中期末～後期初頭の副葬品を持つ墳墓の分布（1/2,000）

新段階）に後続する、中期末の厚葬墓として特筆される。なお、副葬品を伴う中期末～後期初頭の墳墓は、ST1001 北墳丘墓の北西と南西に偏って展開している（図 118）。

遺跡北部の集落と墓地

中期末の遺跡北部では、北端部の志波屋三の坪（甲）遺跡、志波屋五の坪遺跡Ⅱ区や、大曲一の坪地区などで中期末～後期初頭の甕棺墓が数基程度展開しているのみで、中期後半に比べて墳墓数は大幅に減少している。また、墓地に対応するような集落遺構は確認されておらず、中期後半から引き続き墓地としてのみ利用されていたとみられる。中期前半から中期後半にかけて中心的な墓域が形成されている志波屋四の坪地区においても、中期末になると墳墓数は減少している。Ⅰ区北西部や北東部、Ⅱ区では中期末～後期初頭の甕棺墓が散発的に展開している状況である（図 119）。Ⅰ区南部の墓地では、中期前半から中期後半にかけて形成された南北方向の列埋葬とその近くに、中期末～後期初頭の甕棺墓の埋葬が継続している。墓列の北部と南部では、墓列の空間を補完するかのように埋葬されているが、墓列中央部では部分的に密集して甕棺墓群が展開している（図 120 ～ 123）。遺跡北部の中期末～後期初頭の副葬品を伴う墳墓としては、志波屋四の坪地区Ⅰ区南部の墓列中央付近の SJ0154 甕棺墓（中期末～後期初頭）から、性別不明の小児人骨（12 ～ 13 歳）とともに素環頭鉄刀子が出土している（図 124-1）（『214 集』）。また、Ⅰ区南部墓列北側の SJ0289 甕棺墓（中期末）からは、性別不明の幼児人骨（2 ～ 4 歳）とともにアツソデガイ製貝輪 1 点が出土している（図 124-2）（『214 集』）。

（4）弥生時代中期の調査成果と課題

中期の集落と墓地の展開過程

弥生時代中期の中心的な集落は、主に遺跡南部の段丘上に展開している。遺跡南部で前期後半代に機能した南北約 180m、東西約 150m の大規模な環壕（SD0001・SD0336）や、径 20 ～ 25m 程度の小規模な環壕（SD2393・SD501）などは中期初頭に埋没したとみられる。SD0001・SD0336 環壕跡の内外には竪穴建物と貯蔵穴からなる集落の規模が拡大しており、中期前半には集落の最盛期を迎えている。

中期初頭の遺跡南部では、段丘を断ち切るように東西方向に延びる溝（SD1801）が新たに掘削される。SD1801 は中期を通じて機能し、中期末には埋没したと考えられる断面台形の壕跡である。中期の遺構の分布状況をみると、SD1801 を境とし、主に南側に集落遺構が、北側に墳墓遺構が展開していることから、SD1801 壕は中心的な集落域と墓域とを区画するために設けられたと考えられる。ただし、段丘上に形成された SD1801 壕が、西側低地部の「溝」と連続して遺跡南部の集落域を取り囲む「環壕」となるかどうかは明らかでない。このことは、中期において環壕集落が成立していたか否かに関わる問題であり、今後さらに詳しく検討する必要がある。

中期前半には、遺跡南部で中心的な集落が形成されることとは対照的に、遺跡中央部や北部で大規模な甕棺墓地が形成されるようになることから、この段階から集落域と墓域とが分化したと考えられる。また、遺跡南端部の田手一本黒木地区において、大型の盛土遺構である SX0222（南祭壇・墳丘墓？）が中期前半代に築造されていることが特筆される。現時点では、SX0222 盛土遺構の内部から明確な墳墓が検出されていないことから、遺構の詳しい性格は明らかになっておらず、祭壇状遺構または墳丘墓と推定されている。SX0222 は遺跡中央部の ST1001 北墳丘墓と同時期に同様の手法で構築されている

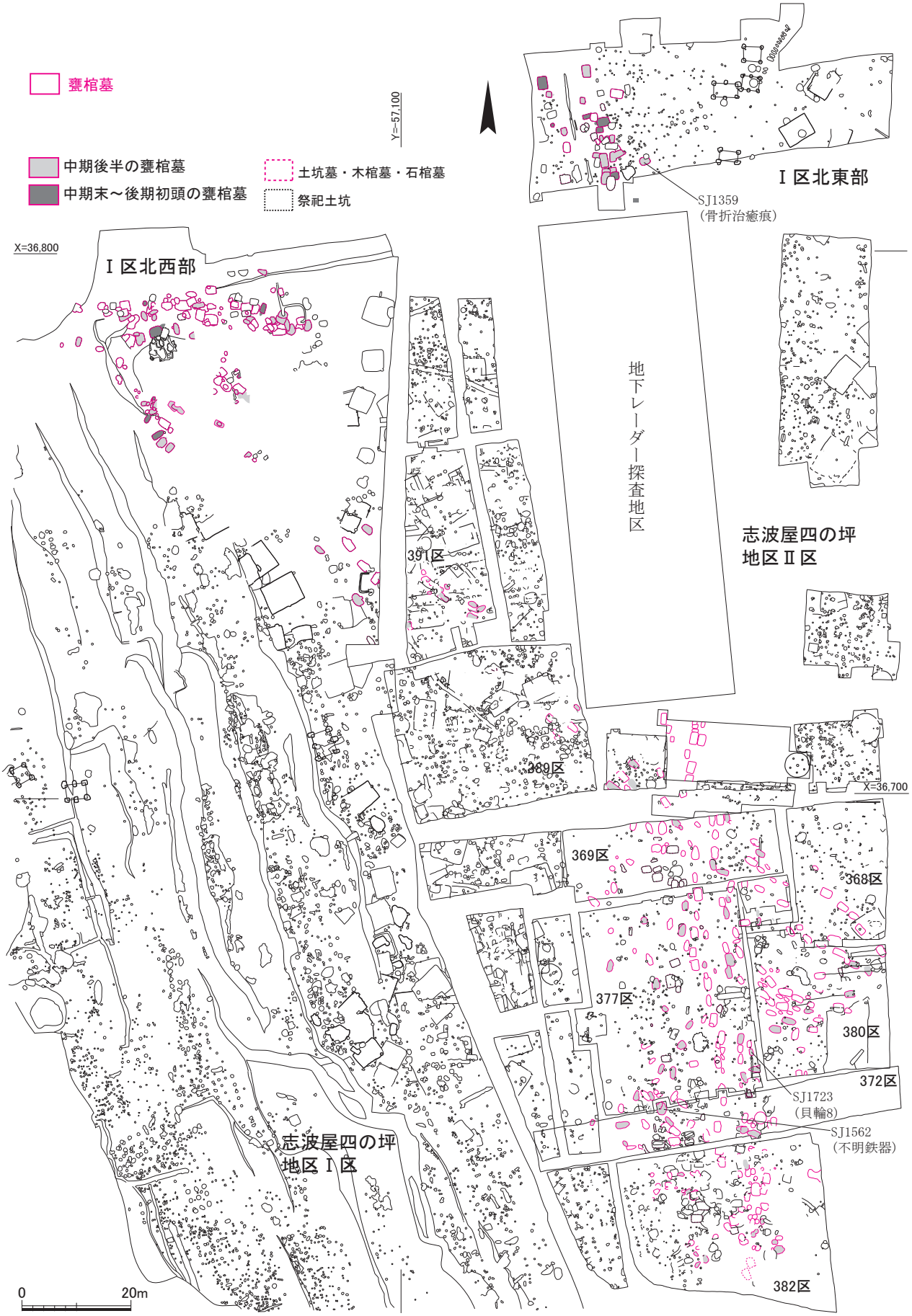


図 119　志波屋四の坪地区Ⅰ区北部・Ⅱ区　中期後半～中期末 / 後期初頭の遺構の分布（1/1,000）

図 120　志波屋四の坪地区Ⅰ区南部墓地　中期後半～中期末 / 後期初頭の遺構の分布（1/1,000）

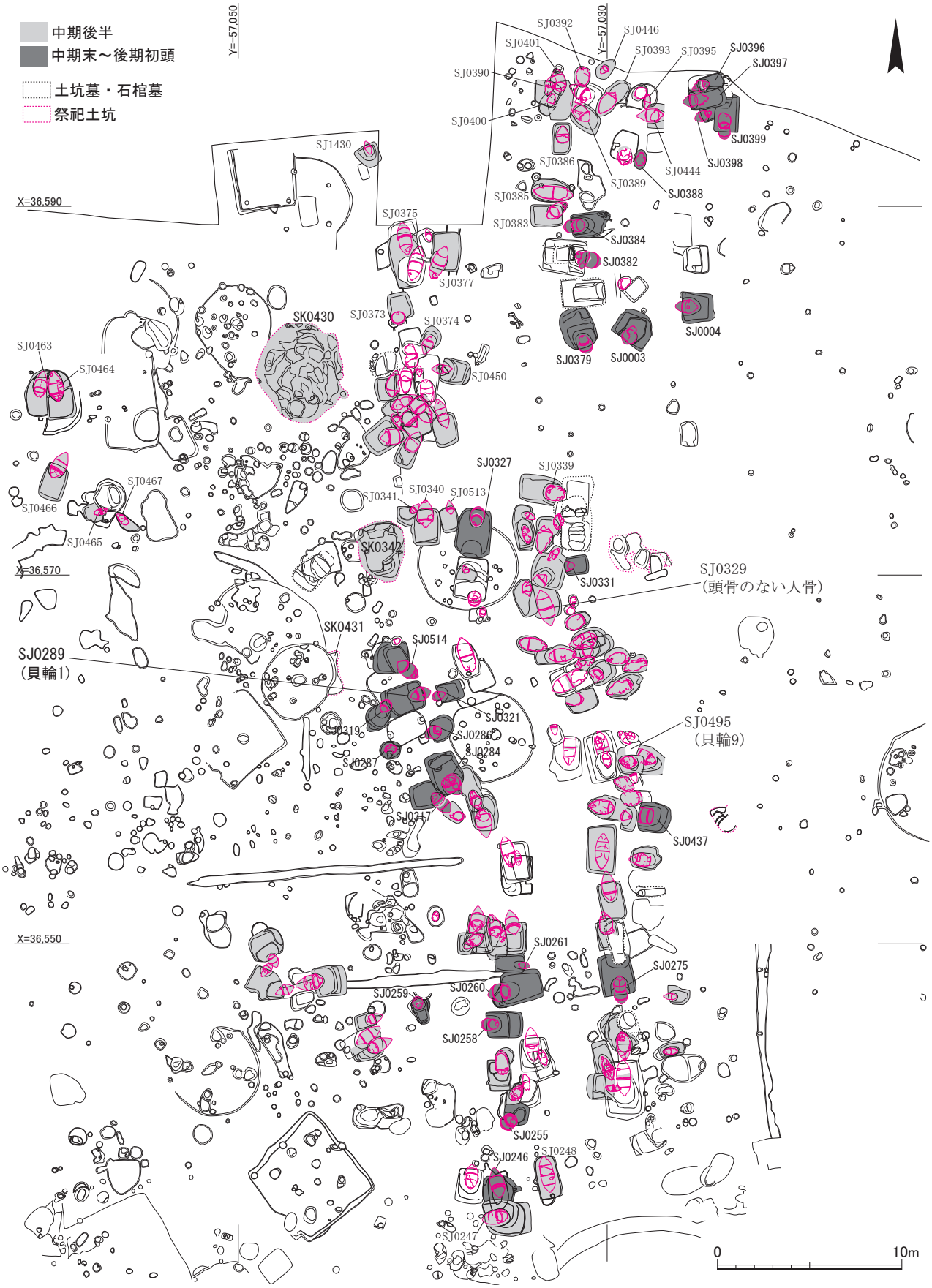


図 121　志波屋四の坪地区Ⅰ区南部墓地北側　遺構の分布詳細（1/300）

図 122　志波屋四の坪地区Ⅰ区南部墓地中央部　遺構の分布詳細（1/300）

図 123　志波屋四の坪地区Ⅰ区南部墓地南側　遺構の分布詳細（1/400）

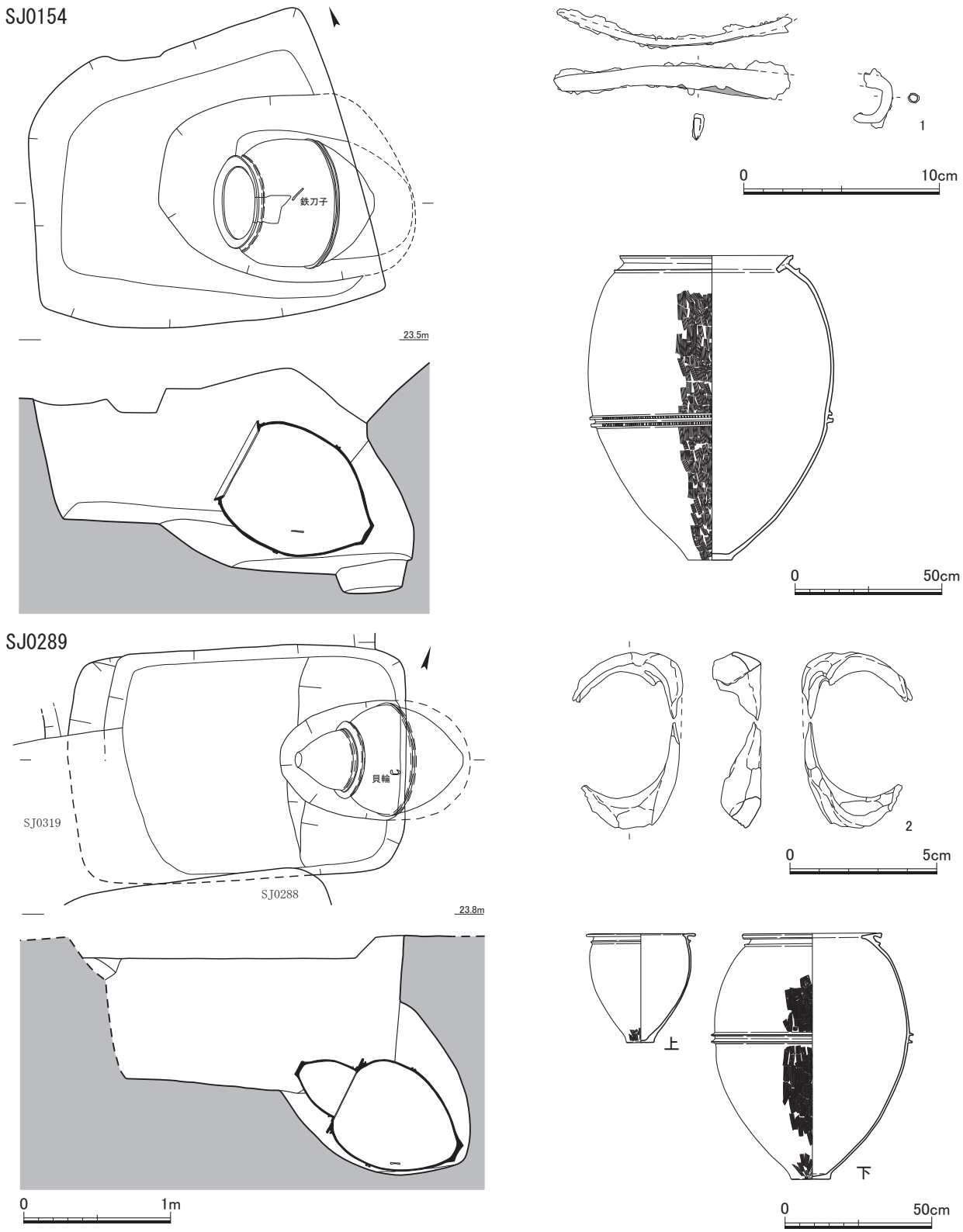


図 124　志波屋四の坪地区Ⅰ区　中期末～後期初頭の墳墓と副葬品（1/40,1/20,1/3,1/2）

ほか、SX0222 と ST1001 の主軸線が南北方向にほぼ一致する点は、中期前半の段階で南北を意識した企画的な集落設計が出現した可能性を示しており注目される。

SX0222 盛土遺構の北西部に隣接する 154 調査区には、青銅器鋳造関連遺構とみられる SK0404 大型土坑が位置している。SK0404 からは中期初頭～中期前半の土器が出土しており、SX0222 盛土遺構よ

りも先行して形成されたとみられるが、両遺構の関係性は明確になっていない。SK0404 は中心的な集落域から南に 100m 程度離れた位置にあり、近辺には同時期の集落遺構が展開していないことから、集落域から意図的に離れた場所に設けられた可能性が高い。SK0404 の性格については、「青銅器鋳造に伴う廃棄土坑」、「青銅器鋳造に伴う小規模な廃棄土坑を盛土構築に伴う土坑が切っている」、「すべて盛土構築に伴う土坑である」という３つの可能性がある（『207 集』）。なお、SX0222 盛土遺構の南の 326 調査区では、中期初頭～中期前半古相（城ノ越式～汲田式古段階）の甕棺墓約 20 基からなる小規模な墓地が展開しているが、近辺では対応するような同時期の集落遺構は確認されていない。

前期後半から中期にかけて中心的な集落が展開している遺跡南部に比べ、遺跡中央部や遺跡北部では、小規模な集落が複数展開している状況である。これらは、前期から続く集落と、中期初頭から新たに出現する集落とがある。遺跡中央部西側の吉野ヶ里地区Ⅰ・Ⅱ区では、前期後半から引き続き小規模な集落が営まれているが、遺構としては前期末から形成された甕棺墓地が中心である。吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ・Ⅵ区では、前期末から竪穴建物と貯蔵穴からなる集落が形成されており、中期前半にも継続している。甕棺墓地は、Ⅱ区東部からⅥ区西部にかけて中期前半から出現しているが、墳墓の数は多くない。

吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区では、前期～中期初頭頃まで展開していた小規模な集落を埋め立てて、中期前半のうちに ST1001 北墳丘墓が構築されたとみられる。ST1001 北墳丘墓の上面は中世の山城遺構によって大きく削平されていたが、盛土内部から中期前半新相（汲田式新段階）～中期後半新相（須玖式新段階）にかけての計 14 基の甕棺墓が検出され、銅剣８本、青銅製把頭飾２点、ガラス製管玉 79 点が出土している。14 基の甕棺墓は型式からみて４段階に分けて埋葬されており、首長クラスの有力者層の集団墓地と考えられる（『132 集』,『219 集』）。

中期後半になると、遺跡全体として集落遺構はやや減少するものの、引き続き遺跡南部の田手二本黒木地区Ⅱ・Ⅲ区や吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区南部一帯に中心的な集落域が形成されている。竪穴建物の平面形は、中期前半から中期後半にかけて円形基調から長方形基調へと変化していったと考えられる。また、中期後半の明確な貯蔵穴が少ないことから、貯蔵形態が掘立柱建物へと変化していったとみられるが、柱穴からの出土遺物が乏しいことなどもあり、中期後半代の集落に伴う確実な掘立柱建物はほとんど抽出されていない。また、遺跡南部西側の谷部や低地部に展開する「溝」からは、中期後半～後期前半の土器とともに木製品が多数出土している。谷部の田手二本黒木地区Ⅰ区 236 調査区や、遺跡南端部の低地に位置する田手一本黒木地区Ⅱ区 223 調査区では掘立柱建物群が展開しており、柱穴底面には地盤沈下防止のための礎板を持つものも確認されている。

中期後半に規模が縮小する集落に対し、墓地では主に遺跡中央部や遺跡北部で甕棺墓の造営が引き続き活発に行われている。中期前半代に築造された ST1001 北墳丘墓への甕棺墓の埋葬や、SX0222 盛土遺構（南祭壇・墳丘墓？）において祭祀が行われているのも中期後半である。このように、中期後半には集落と墓地それぞれの展開状況に明確な差異が認められるが、その背景は明らかになっておらず、今後さらに検討する必要がある。

中期末には、遺跡南部北側の SD1801 壕の北側にあたる吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区・吉野ヶ里地区Ⅴ区東部で竪穴建物の数が急増していることから、集落中心部が南部から中央部へと移動している。なお、SD1801 壕は中期末までに埋没したとみられるが、遺跡南部西側低地部の「溝」は、出土土器からみて後期前半頃まで継続していた可能性がある。また、中期末の遺跡南部では集落規模が縮小しているが、

田手二本黒木地区Ⅱ区の外環壕（SD0003・SD0265）は中期末頃から掘削されはじめた可能性があり（『222 集』）、後期前半の環壕集落成立に向けた基盤整備が中期末の時点で進んでいたと考えられる。

墓地の出現と展開

本遺跡で墓地が本格的に出現するのは弥生時代前期末であるが、実際には前期末の墳墓単独で構成される墓地は無いとみられ、前期末～中期初頭（金海式～城ノ越式期）の墳墓が混在して墓地が形成されている。出現期の墓地の規模は、甕棺墓 10 ～ 30 基程度で構成される小規模なものと、甕棺墓 40 ～ 60 基程度で構成されるやや規模が大きいものとがある。これらの墳墓には、棺体方向に明確な規則性がみられず、かつ、中～大型棺や小型棺が一定の範囲に群集する、いわゆる集塊状を呈する点で共通する。墓地は、集落の近くに営まれる場合と、集落からやや離れた場所に単独で営まれる場合、がある。

分布状況をみると、出現期の墓地は志波屋・吉野ヶ里段丘上面の各所に分散しており、同時期の集落の近くに展開する場合が多いことから、集落と墓地とが対応するとみられる場合もある。また、墓地の位置と規模の関係をみてみると、志波屋・吉野ヶ里段丘上面の広い部分にやや規模が大きい墓地が展開する場合が多い。つまり、墓地の出現期から、墓地の規模による格差が生じていたと考えられ、その違いは墓地を造営する集団の規模や性格等に起因する可能性が推測される。

前期末～中期初頭に出現した墓地は、その後の展開過程に違いがみられる。続く中期前半の墓地の様相を整理すると、大きく以下の 4 つに分けられる。

①前期末～中期初頭から継続し中期前半までで消滅する墓地（遺跡南部の田手一本黒木地区Ⅰ区 326 調査区、田手二本黒木地区Ⅱ区、吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区 191 調査区、遺跡北部の志波屋三の坪（乙）地区）。

②前期末～中期初頭の墓地を核として中期前半には周辺に規模が拡大する墓地（遺跡中央部の吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区 169 調査区、吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区 182・184 調査区）。

③前期末～中期初頭の墓地を基点として中期前半には大規模な列埋葬へと発展する墓地（遺跡中央部の吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区、吉野ヶ里地区Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区、遺跡北部の志波屋四の坪地区Ⅰ・Ⅱ区）。

④前段階に墓地が展開していなかった場所に中期前半になって新たに形成される墓地（遺跡南部西側の枝町遺跡、遺跡中央部の吉野ヶ里地区Ⅴ区、吉野ヶ里丘陵地区Ⅵ区、Ⅸ区、遺跡北部の志波屋四の坪地区Ⅰ区北東部・北西部）。

中期前半の墓地は、遺跡南部や遺跡中央部のように、主に同時期の集落に近接し甕棺墓数十基程度からなる比較的小規模な墓地と、遺跡北部の志波屋四の坪地区Ⅰ・Ⅱ区のように集落域から離れた場所にまとまって形成される大規模な墓地とがある。特に、後者が出現するのは中期前半の墓地の大きな特徴であり、この時期に集落と墓地とが分離したとみられる。志波屋・吉野ヶ里段丘上に位置する吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区や志波屋四の坪地区Ⅰ・Ⅱ区では、南北に延びる尾根上に甕棺墓の列埋葬が形成される。

厚葬墓の出現と展開

集落を統率する首長クラスの有力者が埋葬されたとみられる厚葬墓は、甕棺墓地が本格的に形成されて間もない中期初頭に出現している。先述したように、最初に出現する厚葬墓は遺跡南東部に位置する田手一本黒木地区Ⅰ区 324 調査区の SJ0100 甕棺墓で、棺内から絹片が付着した細形銅剣が出土している。なお、SJ0100 の周辺には同時期の墳墓が確認されていないことから、ほぼ単独で営まれた可能

性が高い（『173 集』、『211 集』）。埋葬される場所や副葬品などから、中期初頭には墳墓の格差が生じていたと考えられる。

続く中期前半の厚葬墓としては、遺跡中央部に位置する吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区の ST1001 北墳丘墓が特筆される。ST1001 北墳丘墓に埋葬された 14 基は全て成人用の大型棺で、棺体は同時期の他の地区のものと比べて一回り大きく、内外面に黒塗りが施されるなど明確な違いが認められる。ST1001 の下部には中期初頭～中期前半の小規模な集落が展開していたが、それらを埋め立てて中期前半のうちに ST1001 北墳丘墓が築造されたと考えられる。ST1001 に埋葬された計 14 基の甕棺墓のうち、最初に埋葬されているのは中央に位置する SJ1006 甕棺墓（中期前半新相：汲田式新段階）で、棺内から細形銅剣が出土している。ST1001 北墳丘墓の周辺では、182 調査区や 184 調査区で同時期の墓地が展開しているが、これらは中型・小型棺を含み、密集して埋葬されているなど、埋葬のありかたが ST1001 北墳丘墓とは明確に異なっている。中期前半に ST1001 北墳丘墓が築造されたことにより、墳墓の格差がより明確化したと考えられる。

中期後半には、引き続き ST1001 北墳丘墓で 13 基の甕棺墓が埋葬されている。甕棺の型式から、中期後半古相（須玖式古段階）に 5 基、中期後半に 5 基、中期後半新相（須玖式新段階）に 3 基が埋葬されている（『219 集』）。ST1001 北墳丘墓に埋葬された 14 基のうち、副葬品を持つものが 8 基で、細形銅剣 7 本、中細形銅剣 1 本、青銅製把頭飾 2 点が出土している。なかでも SJ1002 甕棺墓（中期後半新段階）からは、有柄式細形銅剣とガラス管玉 79 点が出土しており特筆される。

中期末には、ST1001 北墳丘墓の西側に位置する吉野ヶ里丘陵地区Ⅸ区において、SJ2775 石蓋甕棺墓（立岩式）の目張り粘土中から前漢代の連弧文鏡 1 面と、棺内からイモガイ製貝輪 36 点が出土している。貝輪は、熟年女性人骨の左腕に横切型 11 点、右腕に縦切型 25 点が装着された状態で出土した。被葬者は司祭者的な性格を有する特別な身分の女性であったと考えられ、ST1001 北墳丘墓への埋葬が終了した後に続く厚葬墓として特筆される。なお、SJ2775 甕棺墓が所在する志波屋・吉野ヶ里段丘の東斜面部は、甕棺墓群が密集する集塊状の墓地であるが、近辺には、絹布片や碧玉製管玉など、副葬品を伴う中期末～後期初頭の甕棺墓が複数展開しており、女性人骨が多い点なども注目される。

後期の墓地については後述するが、後期初頭～後期前半には甕棺墓の造営数が大幅に減少している。特徴的な墳墓として、吉野ヶ里丘陵地区Ⅵ区 SJ1204 甕棺墓の棺外から鉄製短剣が出土しているが、この他には厚葬墓と呼べるような後期の墳墓は確認されていない。特に、後期後半～終末期における墳墓の実態は明らかでない。後期の墳墓に関する問題は、本遺跡だけでなく、周辺遺跡の動向などもふまえて総合的に検討する必要がある。

中期の祭祀遺構

弥生時代中期に甕棺墓の造営の活発化に伴い、墓域において祭祀に用いられたとみられる遺構が展開するようになる。祭祀遺構（祭祀土坑）の明確な認定は難しいが、埋葬に伴う儀礼に使用されたとみられる土器がまとまって廃棄された遺構としている。本遺跡全体で祭祀遺構と報告した遺構は 113 基で、出土土器の時期は中期前半～中期後半を中心とする（『214 集』,『222 集』）。ただし、集落域と墓域とが重複する場合などは、当初は貯蔵穴として利用された後に祭祀遺構として再利用される場合もあることから、実態を把握するのは難しい。

中期の祭祀遺構として特筆されるのは、遺跡中央部のST1001北墳丘墓に伴うSK1699大型祭祀土坑と、SD1011墓道状遺構、及び遺跡南端部のSX0222盛土遺構（祭壇・墳丘墓？）である。SK1699はST1001の東側に隣接しており、墳丘盛土の採土場として掘削された後、墳丘墓祭祀に伴う土器が集中的に廃棄された場所と考えられる。トレンチ調査のため完掘されていないが、部分的に土器片が濃密に堆積しており、膨大な量の土器が廃棄されている。出土土器の時期は中期前半から後期後半まで継続することから、墳丘墓への埋葬が終了した中期後半新相（須玖式新段階）以降、後期になっても墳丘墓への祭祀行為は継続していたと考えられる（『219集』）。SD1011墓道状遺構は、墳丘墓の南側から西側にかけて延びており、底面が幅広いことから溝ではなく道路（墓道）と考えられる（『113集』）。また、SD1011の西側は、後期前半に形成される外環壕SD1013の出入口部分と接続すると考えられており、墳丘墓への埋葬が終了した後も、墳丘墓祭祀を行うために利用されていたとみられる。

一方、遺跡南端部に位置するSX0222盛土遺構は、前述したようにST1001北墳丘墓と同じく中期前半代に築造されたと考えられるが、いまだ遺構の詳しい性格が明らかになっていない。これまで盛土内部から明確な墳墓が検出されていないことや、SX0222南東のSX0210から出土した貝殻・鳥の骨等が入ったままの状態で出土した広口壺の存在などからみて、墳墓というよりは祭祀を執り行う場としての意味合いが強い。また、SX0222の北西部には青銅器鋳造に関連する遺構と考えられるSK0404大型土坑が隣接している点は注意される。SK0404大型土坑からは前述した青銅器鋳造に関連する遺物等のほか、中期前半を中心とする多量の土器が出土していることから、SK0404がSX0222を構築する盛土の採土場であった可能性も考えられる（『207集』）。また、一般的な甕棺墓地や北墳丘墓一帯では在地の土器しか出土していないのに対し、SX0222盛土遺構一帯では、在地の土器を主体としながらも朝鮮系無文土器や中期の外来系土器（西部瀬戸内系の甕口縁部片、黒髪式の甕口縁部片、多条突帯の壺胴部片など〔図77〕）が少量ではあるが出土している点は注目される。SX0222については今後さらなる調査・検討が必要であるが、中期における祭祀・儀礼のありかたがST1001北墳丘墓とSX0222南祭壇（・墳丘墓？）とで異なっていた可能性がある。

このほか、中期前半代にST1001北墳丘墓とSX0222盛土遺構（南祭壇・墳丘墓？）が南北方向を主軸として直線的に並ぶことに加え、ST1001南部の182調査区では丘陵尾根上に甕棺墓列が形成されている。また、182調査区の墓列北側とST1001北墳丘墓との間には1間×2間の掘立柱建物1棟（SB1631）と立柱跡とみられる土坑（P42）が確認されている。所属時期は明確でないが切り合い関係などから中期後半～後期とみられ、北墳丘墓への祭祀を意識して築造されたと考えられる。上記の諸施設は集落全体の構造を意識して築造されたと考えられるが、南北方向の軸線を強く意識した規格的な集落設計の考え方は中期前半に現れ、後期後半～終末期に形成される北内郭の位置決定やその内部の大型掘立柱建物（SB1194）の築造にまで引き継がれたと考えられる点は、集落構造の変遷を考える上で注目される。

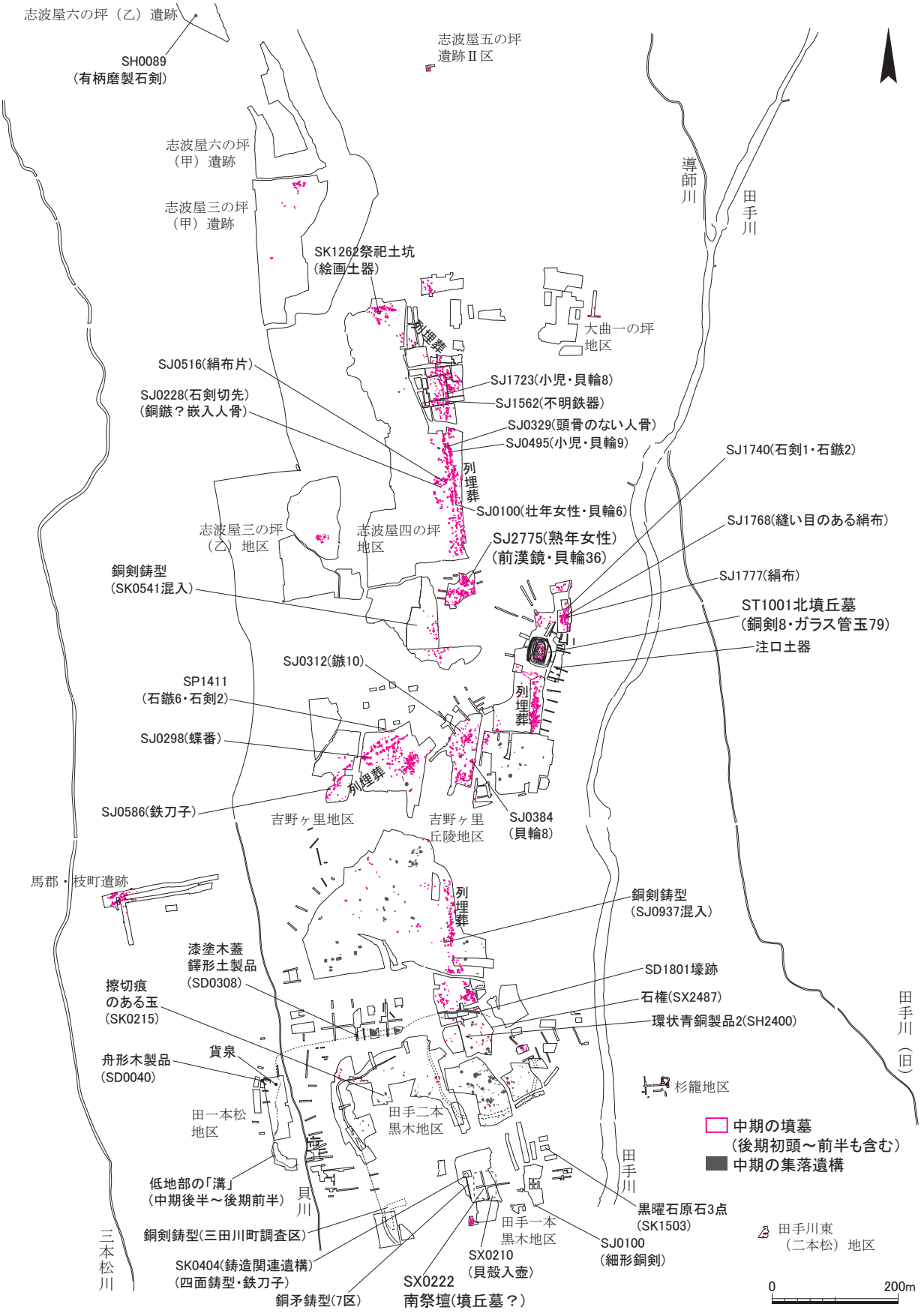


図 125　弥生時代中期　主な遺構と遺物の出土位置（1/9,000）

３．弥生時代後期から終末期の遺構と遺物

（１）後期前半

後期前半は、吉野ヶ里集落の中心部を取り囲む外環壕の形成が進むとともに、環壕の内側に中心的な集落域が形成される。前期から中期にかけて中心的な集落が展開していた遺跡南部南側の吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区や田手二本黒木地区Ⅱ・Ⅲ区一帯では、中期末～後期初頭になると集落遺構数が大幅に減少しており、後期前半以降には集落域としてほとんど利用されなくなっている。一方、中期末から集落が展開しはじめた吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区・吉野ヶ里地区Ⅴ区一帯では、後期前半にはまだ内環壕（後の「南内郭」）は成立していないものの、中心的な集落域が形成されている。また、吉野ヶ里地区Ⅴ区西部に多数展開する掘立柱建物群（高床倉庫群）の一部も、後期前半には形成されていたと考えられる。

一方、後期前半の墓地では、中期末～後期初頭に比べて全体的に墳墓数が減少している。甕棺墓は、後期前半（三津式）までで基本的に終焉を迎える。このほか、時期不明の土坑墓・木棺墓や石棺墓等の一部は後期前半以降にも一定数が継続するとみられるが、出土土器が乏しく詳細な時期が不明なものが多いため、実態を把握するのが難しい。

後期前半の遺跡南部

遺跡南部の田手二本黒木地区Ⅱ・Ⅲ区一帯では、後期前半の集落遺構は少なく、集落規模は前段階よりも縮小している（図 126）。環壕・溝は、掘削時期が中期末に遡る可能性があるⅡ区 SD0003・SD0265 壕に加え、後期前半には南北方向に延びる SD0002 溝が掘削されたとみられる。SD0002 溝は上部を大きく削平されており、残存する幅約 3.0m、深さ約 1.0m である。SD0002 溝は約 120m 北に位置する吉野ヶ里地区Ⅴ区 SD0925 溝と方向的に接続する可能性があるが、両者の間には西側に開く谷部が開いていることから、ふたつの溝の連続性は明らかになっていない。

Ⅱ区西部を逆Ｌ字状に延びる SD0003 壕は、Ⅱ区南西部の 221 調査区で掘り残しによる陸橋部を有し、その南側の SD0265 壕と連続すると考えられる。ただし、SD0265 壕の断面形態は、224 調査区南壁土層のように底面が幅広い逆台形を呈しており（図 128）、さらに南の SD0105 壕の断面形と類似している。

遺跡最南端の低地部に位置する田手一本黒木地区Ⅱ区 222 調査区では、SD0105 溝が後期前半には掘削されたとみられる。SD0105 溝は残存する幅 4.0 ～ 5.0m、深さ 0.56m で、北側は溝が直線的に途切れていることから、掘り残しによる陸橋部を有するとみられる。この SD0105 溝は、北側のⅡ区 SD0265・SD0003 と連続して外環壕の南西端部を構成すると考えられるが、前述したように壕の断面形は底面が幅広い逆台形であり、吉野ヶ里地区Ⅴ区 SD0925 壕などのような断面Ｖ字形とは大きく異なっている。ただし、SD0265 壕の南側や SD0105 壕が位置するのは丘陵裾の低地部にあたることから、連続する壕であっても場所によって形状が異なっていた可能性がある（『207 集』）。

222 調査区の SD0105 溝からは 400 点を超える大量の木製品や自然木等が取り上げられており（図 129）、主要な木製品は報告されているものの（『156 集』,『207 集』）、未報告資料も多い。なお、222 調査区東側の 223 調査区では掘立柱建物 5 棟程度が展開しているが、これらは中期の項でも述べたように、柱穴出土土器から中期後半～後期前半に属するとみられ、柱穴底面には地盤沈下防止の枕木が残存するものが多い。後期前半にも低地部一帯が水田など何らかの形で利用されていたと考えられる。

遺跡南部西側の低地部では、後期前半に田手二本黒木遺跡Ⅰ区南部の 270 調査区 SD0319 溝が形成

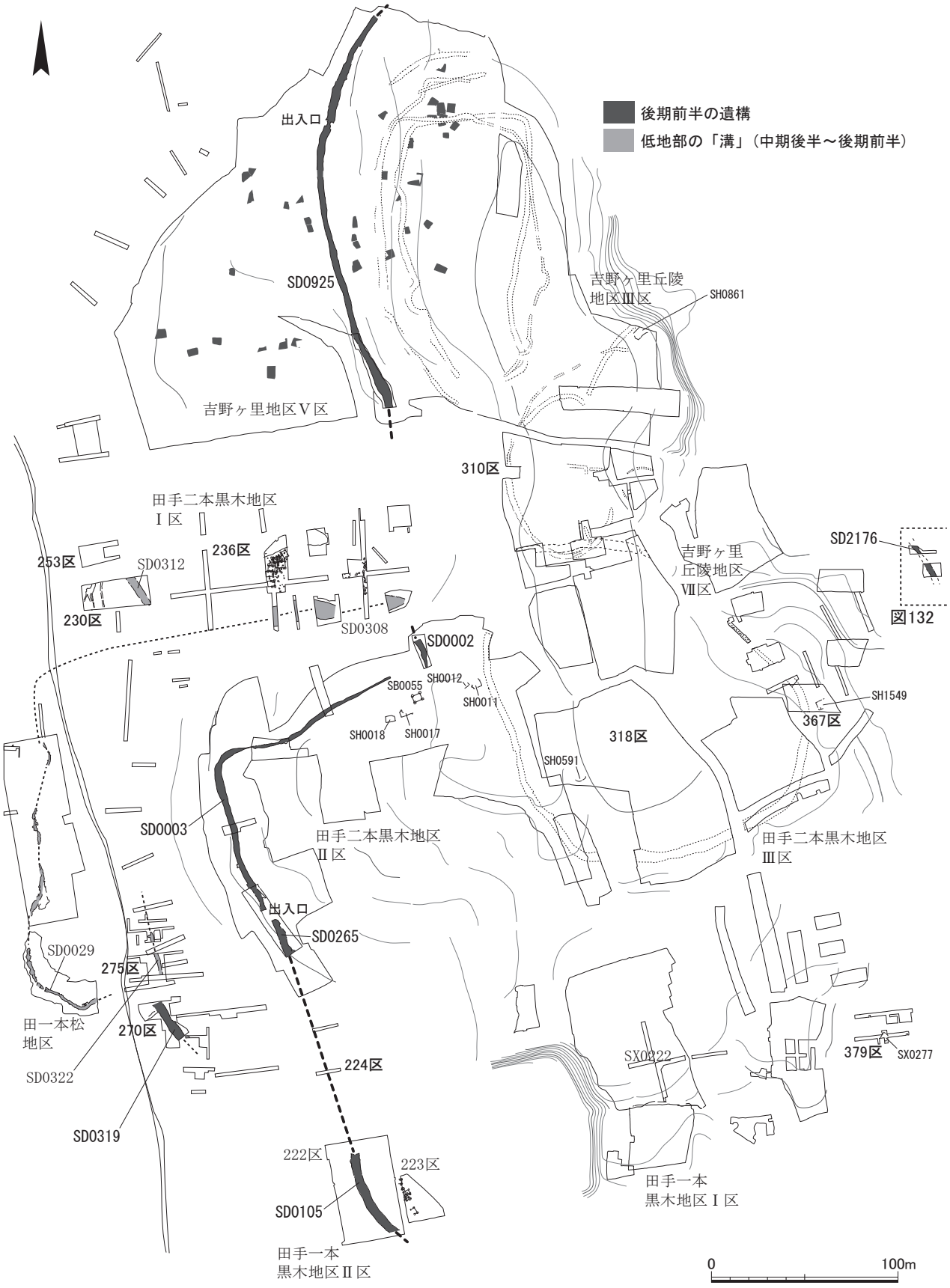


図 126　遺跡南部　後期前半の遺構の分布（1/3,000）

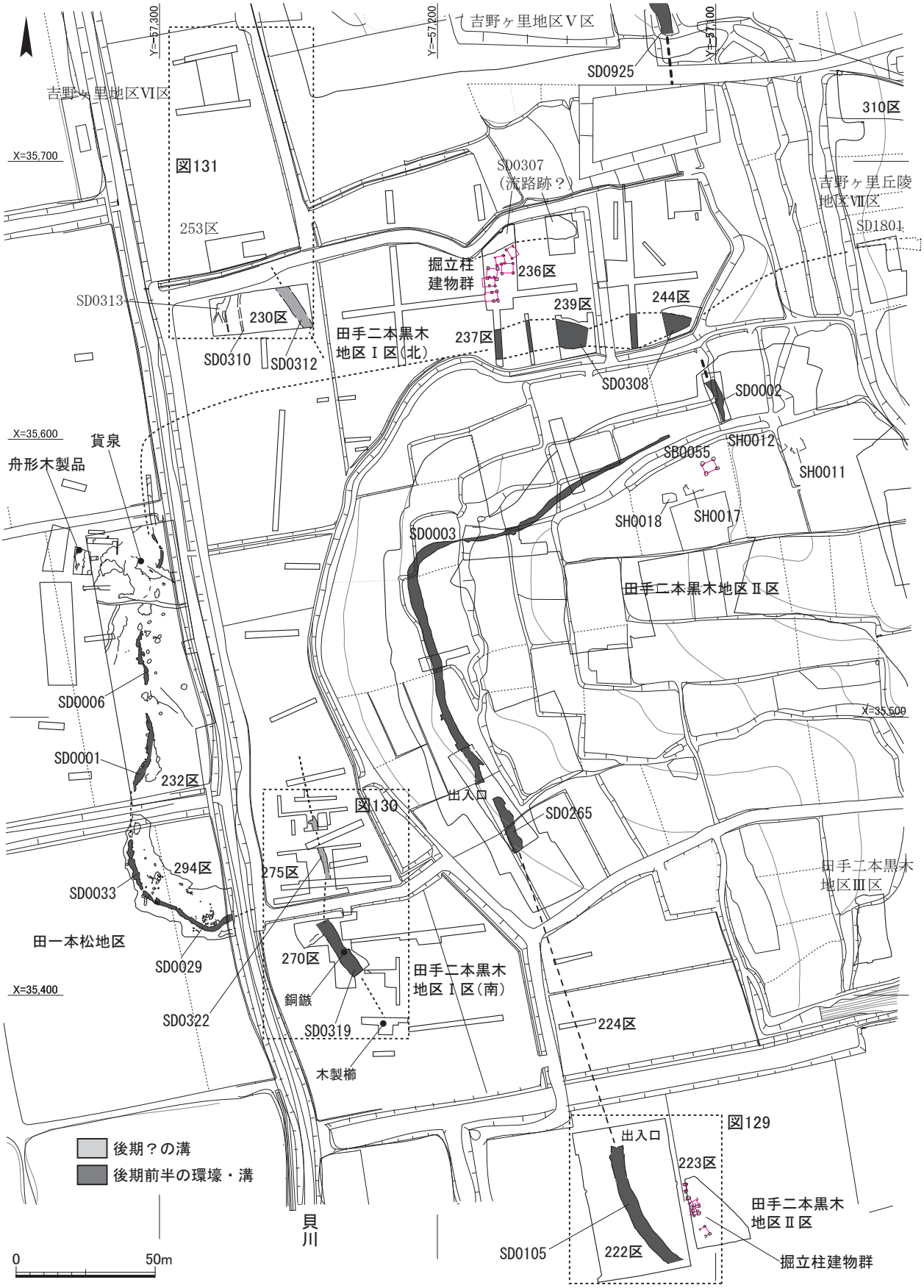


図 127　遺跡南西部　調査区と後期の環壕・溝の位置（1/2,000）

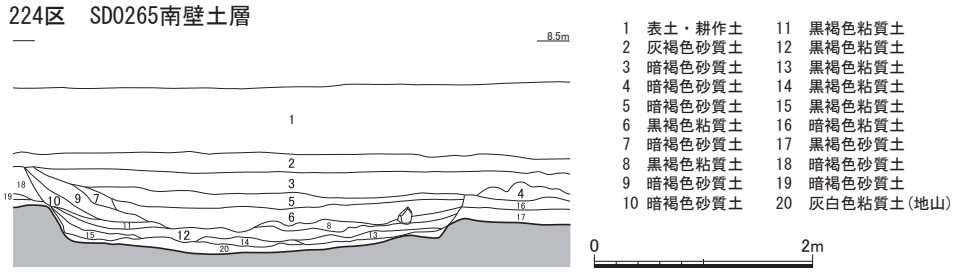


図 128　遺跡南西部　224 調査区 SD0265 溝土層断面（1/60）

されたとみられる（図 130）。SD0319 溝は現在の貝川の東側を北西 - 南東方向に延びており、検出された長さ約 22m、残存する幅 3.45 ～ 5.25m、深さ 0.52m で、断面 U 字状を呈する。なお、SD0319 溝の北側には 275 調査区 SD0322 溝が位置しており、両者の連続性は明らかでないが同時期に存在した可能性がある。また、これらの溝跡からも多様な木製品がまとまって出土しており（『156 集』,『207 集』）、特徴的な遺物として SD0319 溝から銅鏃、木鏃などが、SD0322 溝から組合式鋳造鉄斧柄や網枠などが出土している。

また、中期の項で述べたが、遺跡南部西側の谷部に位置する田手二本黒木地区Ⅰ区北部の 236 調査区では、複数の掘立柱建物が展開している（図 83）。柱穴出土土器から中期後半～後期前半に属すると考えられ、柱穴底面には地盤沈下防止のための枕木や柱根が残存するものもある。

田手二本黒木地区Ⅰ区 230 調査区では、北西 - 南東方向に延びる SD0312 溝が確認されている。断面形は底面が幅広い逆台形状で、最下層からはヨシとみられる植物遺存体を多量に含む粘質土の堆積が確認されている。SD0312 溝の周囲への連続については、230 調査区南部に位置する 250・251・252 調査区で溝の延長とみられる遺構が部分的に検出されている。また、SD0312 溝の北側については、230 調査区北側の吉野ヶ里地区Ⅵ区 253 調査区で検出された「溝」と連続する可能性がある（図 131）。

このほか、遺跡南部東側の吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区 321・322 調査区に位置する SD2176 溝が後期前半に掘削されたとみられる（図 132）。SD2176 溝が所在する 321・322 調査区は志波屋・吉野ヶ里段丘の東側裾部に位置し、調査区の東側には田手川が南流している。SD2176 溝は、僅かに北東方向に膨らみながら北西 - 南東方向に延びる溝で、削平されているものの、検出された長さ約 20m、残存幅 3.1m、残存する深さ 0.4m、断面形は緩やかな U 字状を呈する。なお、SD2176 溝は平成元（1989）年度の確認調査で検出された 15 トレンチ（調査区）の SD01 溝状遺構（『100 集』）と重複する同一遺構である（15 トレンチは 321 調査区 Atr と重複）。出土土器から、SD2176 溝は後期前半に掘削され、後期後半まで継続したとみられることから、外環壕の一部として機能していた可能性もあるが、規模や形状は SD0925 壕など遺跡西側の外環壕と大きく異なっている。なお、321・322 調査区東側では、過去に三田川町（現：吉野ヶ里町）教育委員会による発掘調査が行われているが（三田川町 2000）、SD2176 溝に連続するような溝は確認されておらず、SD2176 溝の詳しい性格は明らかでない（『211 集』）。

遺跡全体で、後期前半に最も集落規模が大きくなる区域は吉野ヶ里地区Ⅴ区である（図 133）。吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区・吉野ヶ里地区Ⅴ区東部では、SD0925 外環壕が後期前半に掘削されたとみられる。中期末から展開しはじめたⅤ区の集落は、後期前半になると規模がさらに拡大しており、平面長方形の竪穴建物が多数展開するようになる。また、SD0925 外環壕の外側にあたるⅤ区西部においても、長方形竪穴建物がまとまって展開している（図 134）。なお、竪穴建物群の近くに展開する掘立柱建物群の一

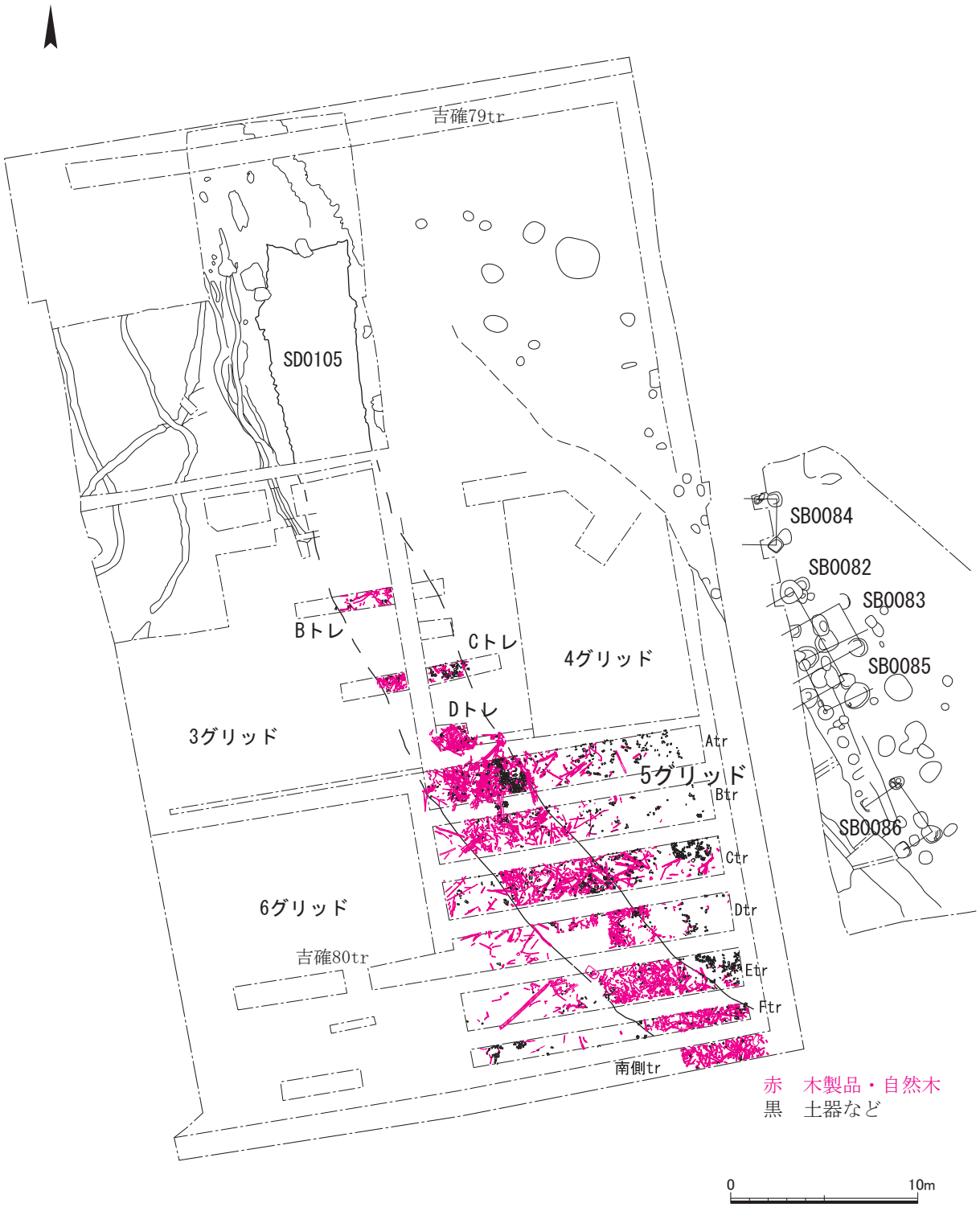


図 129　田手一本黒木地区 II 区 222・223 調査区　遺構の分布（1/300）

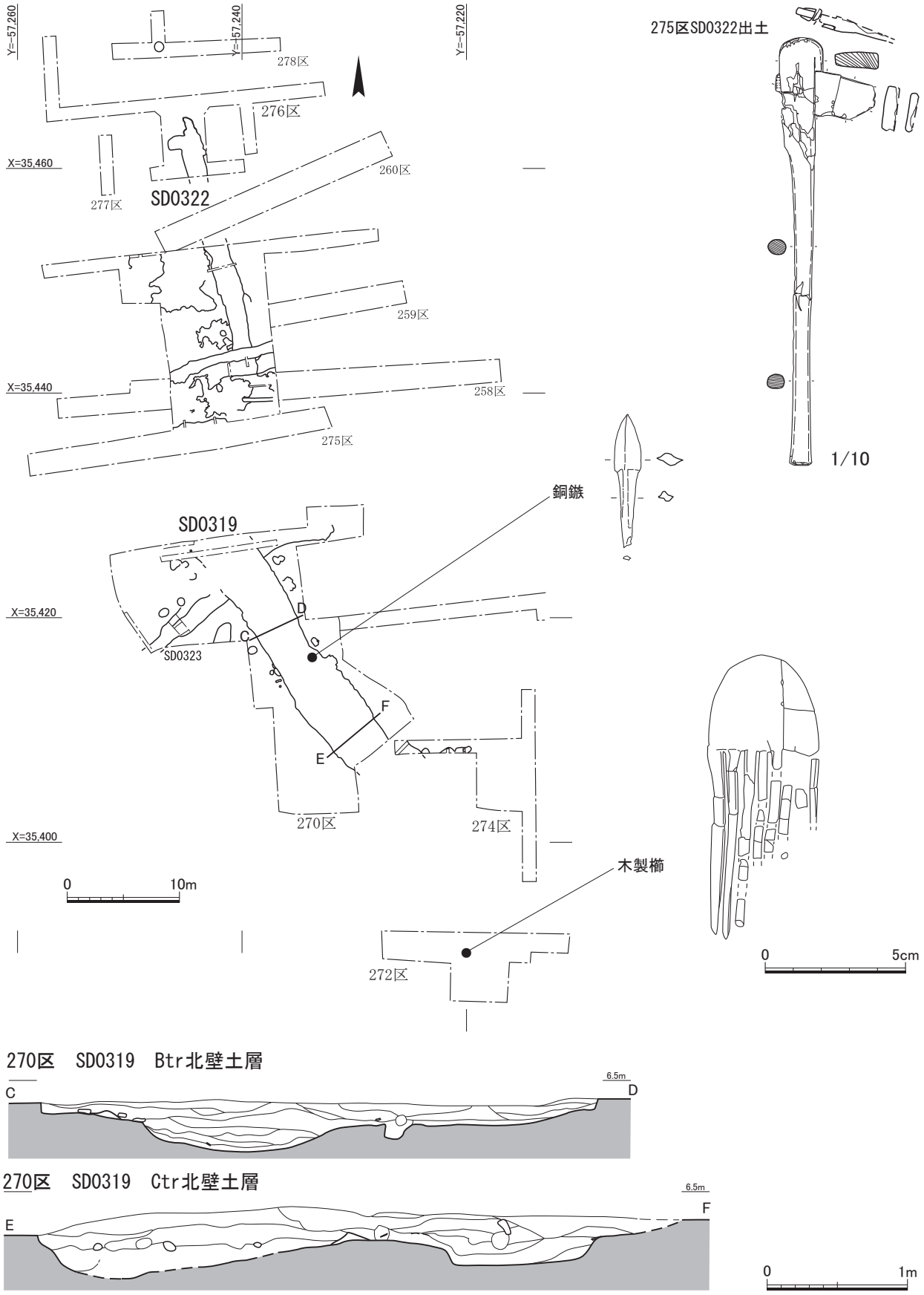


図 130　田手二本黒木地区Ⅰ区南部の遺構の分布（1/500）・SD0319 溝土層（1/40）・出土遺物（1/2,1/10）

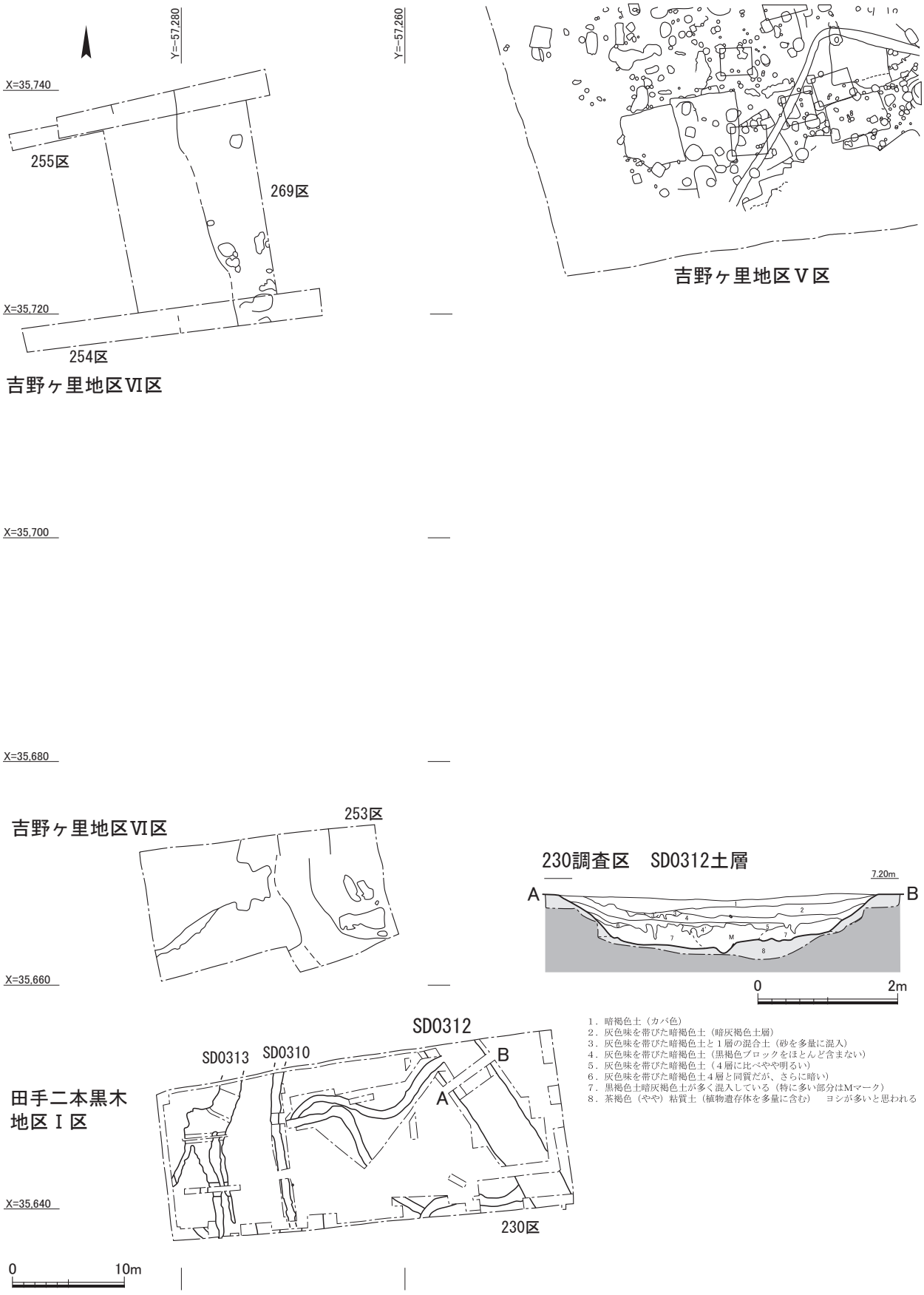


図 131　田手二本黒木地区Ⅰ区　SD0312 溝跡とその周辺（1/500）・SD0312 溝土層（1/80）

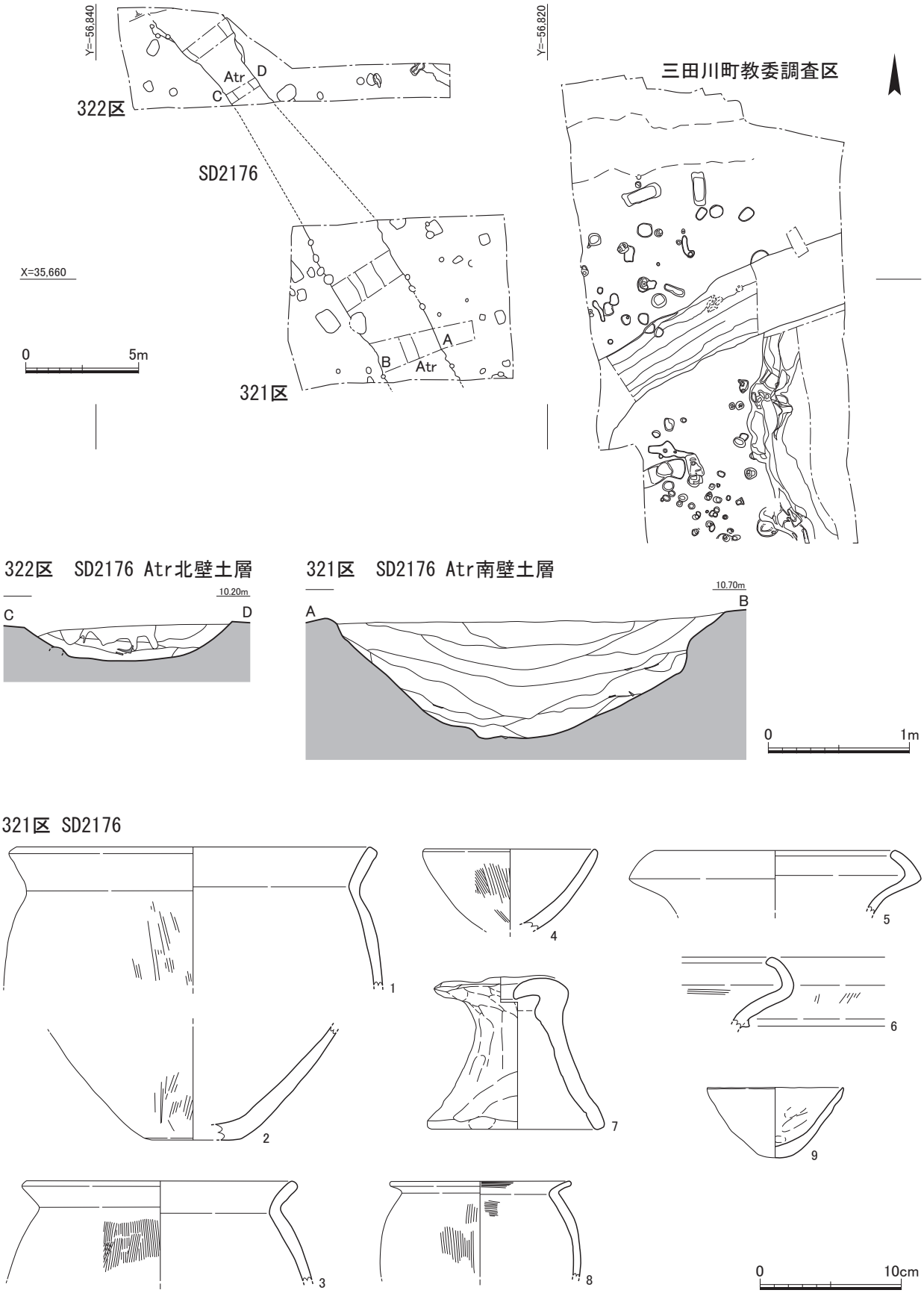


図 132　吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区 321・322 区　遺構の分布（1/250）・SD2176 溝土層（1/40）・出土土器（1/4）

図 133　吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区・吉野ヶ里地区Ⅴ区東部　中期末～後期前半の遺構の分布（1/1,200）

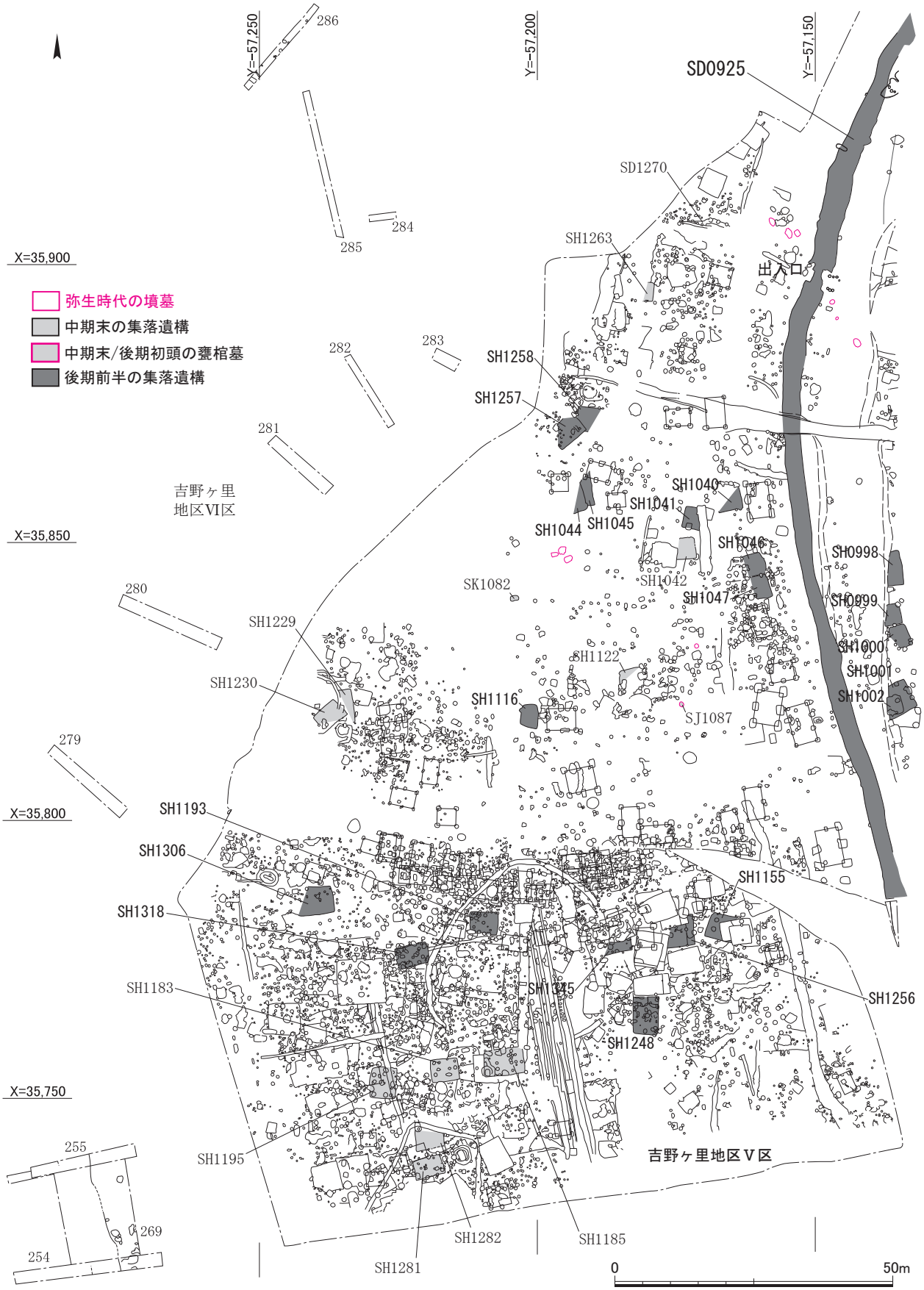


図 134　吉野ヶ里地区Ｖ区西部・VI区　中期末～後期前半の遺構の分布（1/1,000）

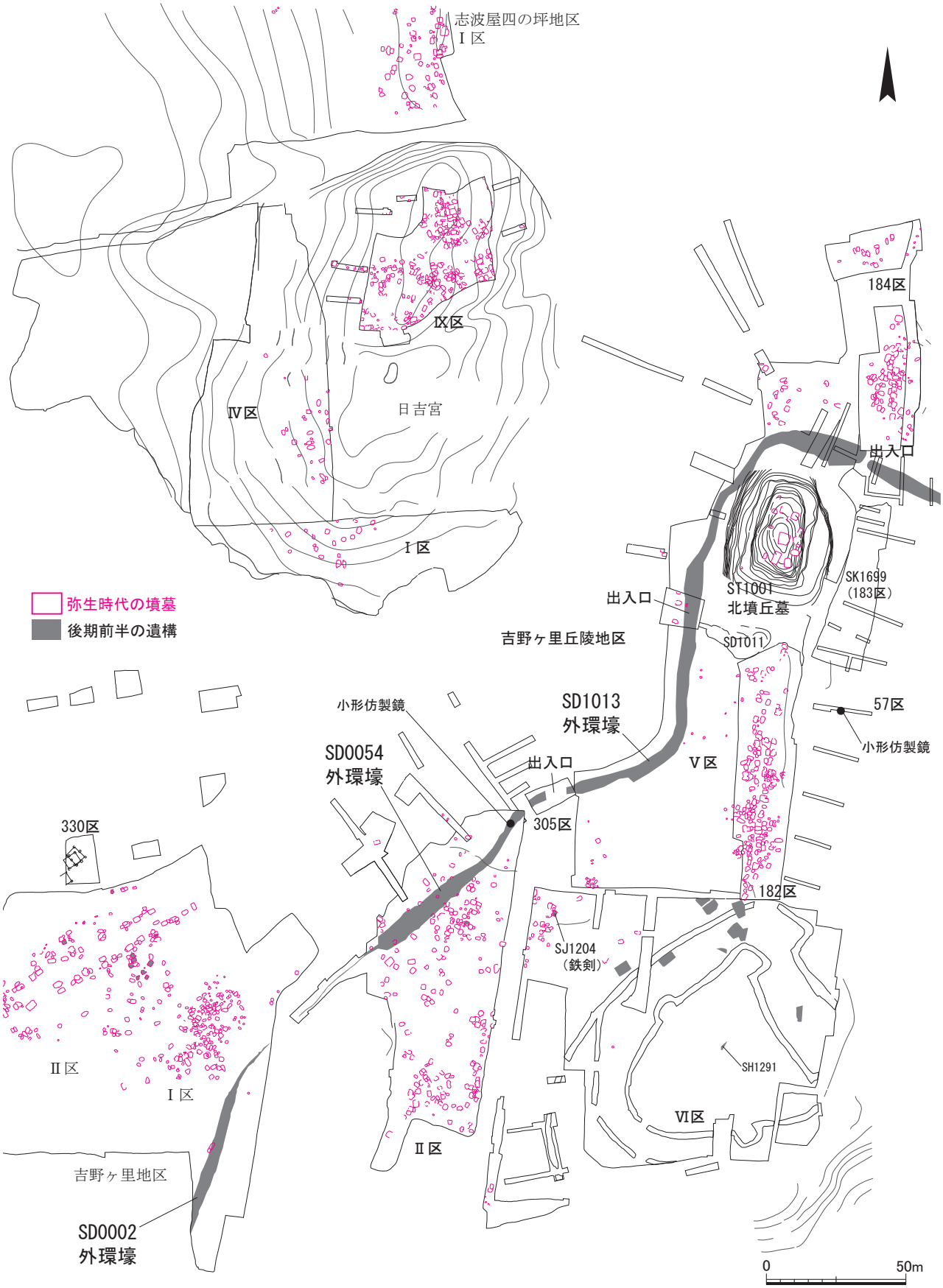


図 135　遺跡中央部　後期前半の遺構分布略図（1/2,000）

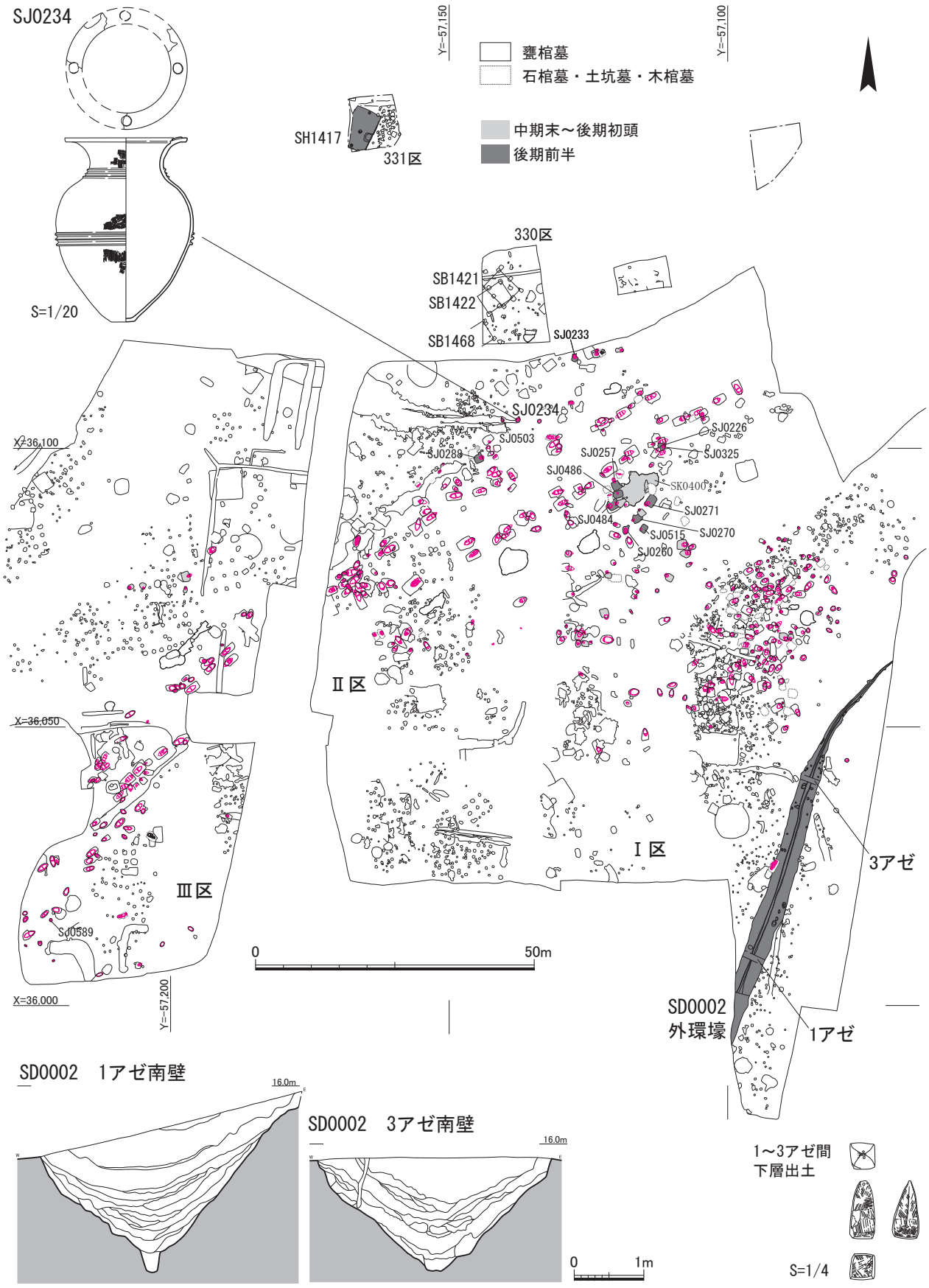


図 136　吉野ヶ里地区Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区　後期前半の遺構の分布（1/1,000）・SD0002 外環壕土層（1/80）

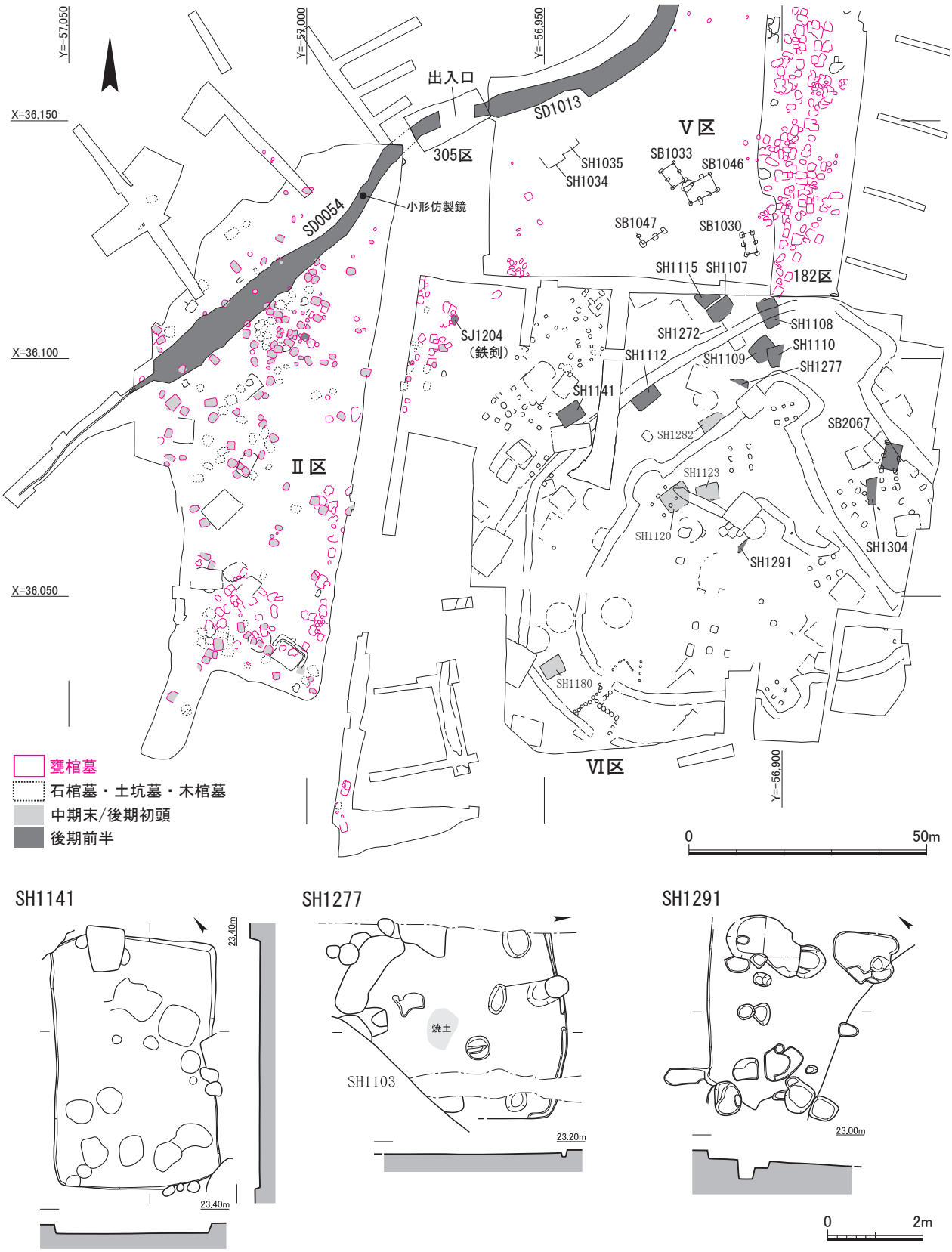


図 137　吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ・Ⅵ区　中期末 / 後期初頭～後期前半の遺構の分布（1/1,200）・後期前半の竪穴建物跡（1/120）

部もこの時期に形成されたとみられるが、柱穴からの出土遺物が乏しいことから、所属時期が明確でない建物が多い。なお、本区域の掘立柱建物群については、終末期の項で後述する。墓地は、中期末から墳墓数が減少する傾向にあるが、後期前半になると墳墓がほとんどみられなくなる。

後期前半の遺跡中央部では、外環壕が形成されることと、吉野ヶ里丘陵地区Ⅵ区を中心に集落が展開することなどが大きな特徴である。吉野ヶ里地区Ⅰ・Ⅱ区では、外環壕の一部を形成する SD0002 壕が後期前半新相に掘削されたとみられる（図 136）。特徴的な遺物として、SD0002 下層から小型の石製棹秤権が出土している（本書第 2 節 4 図 271-310）。外環壕の外側にあたる本区域では、Ⅱ区北側の 331 調査区で後期前半の竪穴建物が 1 棟（SH1417）展開している。近接する 330 調査区の掘立柱建物 3 棟も竪穴建物と近い時期に存在していた可能性があり、周辺の未調査区域を含めて小規模な集落が展開していたとみられる。墓地では、後期前半の墳墓数は大幅に減少しており、Ⅱ区北部を中心に甕棺墓 14 基が展開している程度であるが、時期不明の土坑墓や石棺墓のなかには当該期に含まれるものも存在する可能性がある。なお、副葬品を伴う後期前半の墳墓は確認されていない。Ⅱ区北側の SJ0234 は石蓋単棺の壺棺墓で、棺体は頸部と胴部に三条突帯を有し、口縁上面には円形浮文が貼り付けられた大型の壺で、外来系とみられる。遺跡全体で後期の壺棺墓は他に確認されていない。

吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区・Ⅵ区西部では、中期末 / 後期初頭～後期前半の甕棺墓地が展開している（図 137）。後期初頭～後期前半の甕棺墓は少ないが、Ⅵ区西部に位置する SJ1204 甕棺墓の棺外から鉄製短剣が出土している。SJ1204 の棺体は、上棺が単純口縁で口縁と胴部に三条突帯を有する丹塗りの大型鉢、下棺が口縁端部打ち欠きの大型甕である（図 138）。

吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区では、中期後半～後期前半の集落遺構は確認されておらず、基本的に墓地として利用されている。Ⅵ区では、中期末頃から長方形基調の竪穴建物が展開しているが、後期前半になると竪穴建物の数はさらに増加しており、まとまった集落が形成されるようになる。特徴的な遺物として、中央付近に位置する SH1291 竪穴建物跡から板石硯とみられる石製品が出土している（図 139）（『222 集』）。SH1291 竪穴建物跡は残存状況が悪いものの平面長方形とみられ、出土土器は細片のため時期を

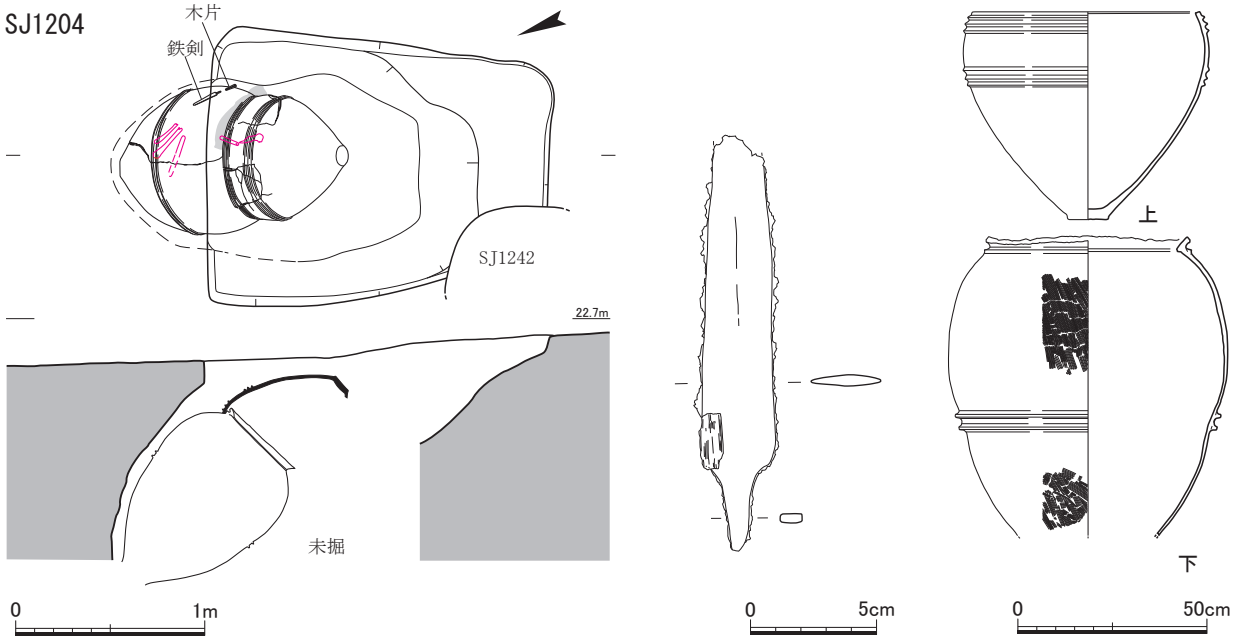


図 138　吉野ヶ里丘陵地区Ⅵ区　SJ1204 甕棺墓（1/40）・鉄剣（1/3）・棺体（1/20）

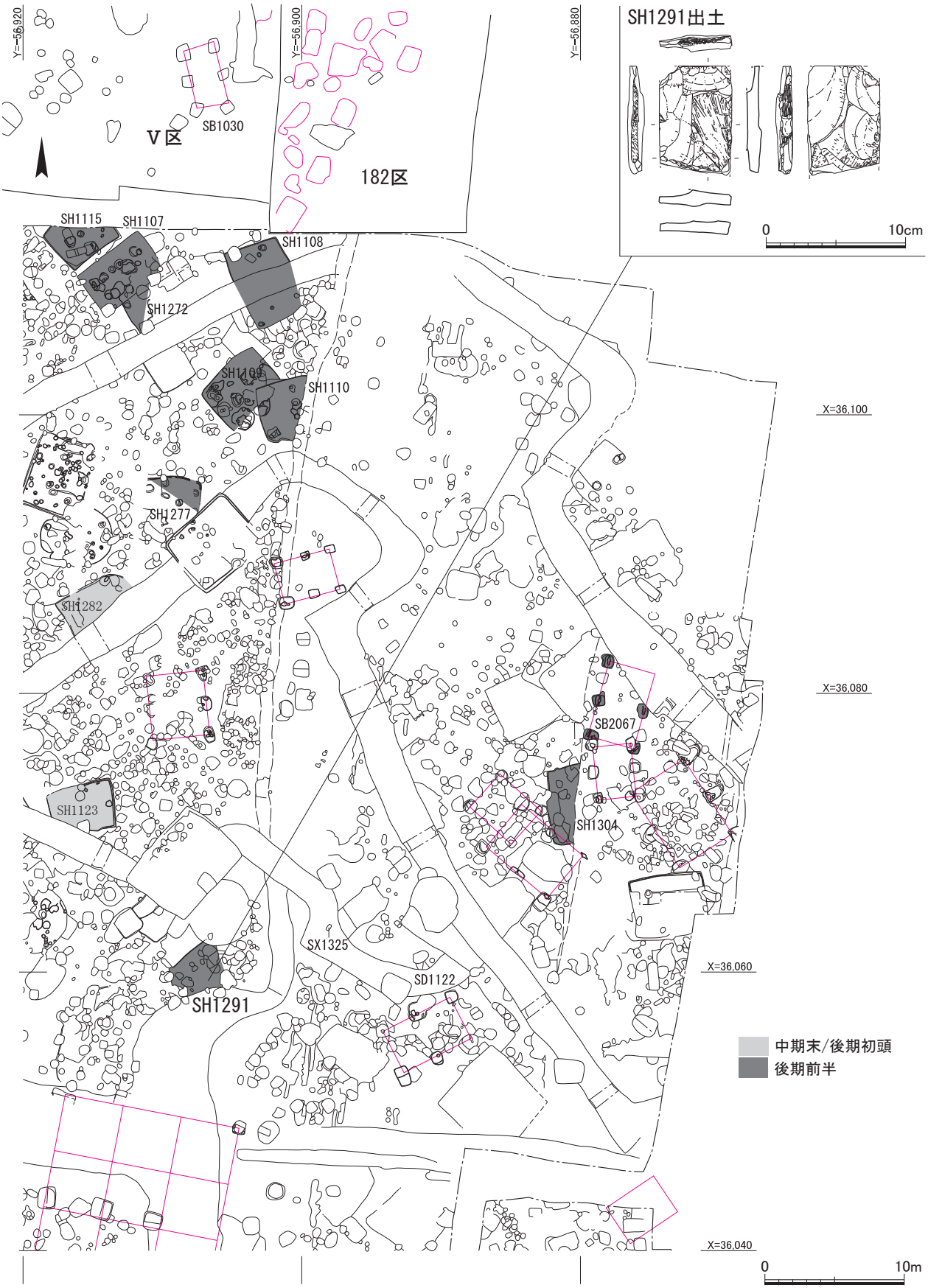


図 139　吉野ヶ里丘陵地区Ⅵ区東部　中期末～後期前半の遺構の分布詳細（1/400）・SH1291 竪穴建物跡出土石製品（1/4）

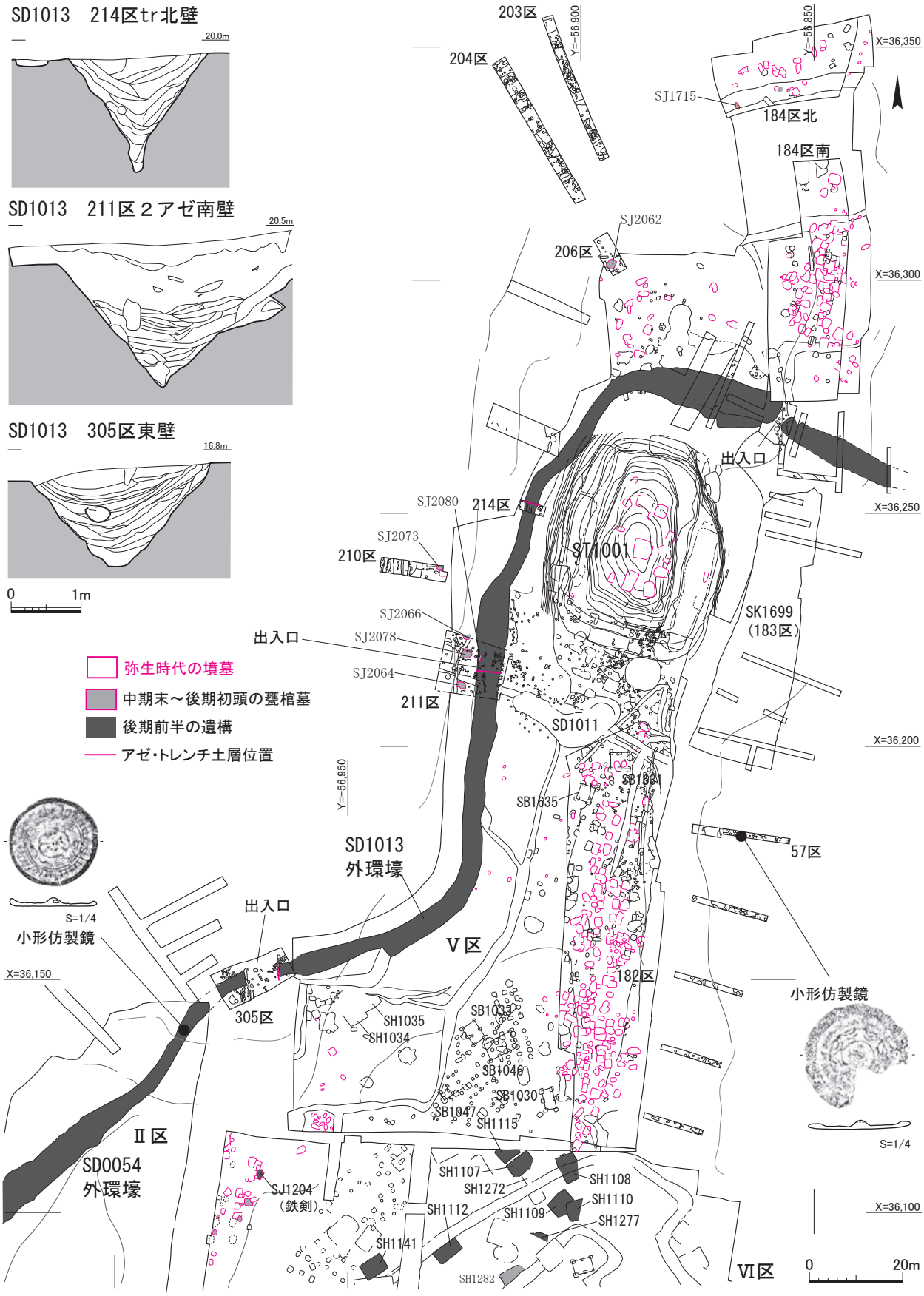


図 140　吉野ヶ里丘陵地区Ｖ区　中期末～後期の遺構の分布（1/1,200）・SD1013 外環壕土層（1/80）

特定できないが、周囲の遺構との関係から後期前半頃に属すると考えられる（『207 集』）。

吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区では、ST1001 北墳丘墓への埋葬が終了した中期後半新段階以降、中期末～後期初頭までは甕棺墓が少数展開しているが、後期前半になると甕棺墓がほぼみられなくなる（図 140）。また、詳しくは後述するが、後期前半新段階頃には SD1013 外環壕が掘削されたとみられ、211 調査区に展開する中期末～後期初頭の甕棺墓の一部は破壊されている。西側に隣接するⅡ区 SD0054 壕から連続する SD1013 壕は、ST1001 北墳丘墓の西側から北側を取り囲んで東へと延びており、本区域は外環壕の北端部にあたる。なお、SD1013 壕は、Ⅴ区南西の 305 調査区、西部の 211 調査区、北部の 184 調査区南の南部、の 3 箇所に出入口が設けられている。このうち、211 調査区の出入口は壕を埋め立てて陸橋部が形成されたとみられ、さらにその東側に延びる SD1011 墓道状遺構と接続すると考えられている（『132 集』）。SD1011 墓道状遺構や、ST1001 の東側に位置する SK1699 大型祭祀土坑から、中期後半から後期後半までの土器が大量に出土していることと合わせ、ST1001 北墳丘墓に関わる祭祀行為が後期以降にも継続して行われていたと考えられる。また、ST1001 北墳丘墓の南に位置する 1 間× 2 間の SB1631 掘立柱建物跡は、SJ1406,1407,1408 甕棺墓（中期前半～中期後半）を切って形成されていることから（『219 集』）、中期後半以降～後期に属するとみられ、ST1001 北墳丘墓への祭祀に関わる施設であったと考えられる。

一方、Ⅴ区の中期末以降の集落については、SD1013 外環壕以外には時期が明確な遺構が確認されて織らず、実態が明らかでない。Ⅴ区南部では、長方形竪穴建物 2 棟（SH1034・SH1035）や掘立柱建物 4 棟が展開しているが、これらはⅤ区南に隣接するⅥ区の集落遺構群と関係すると考えられる。このほか、57 調査区中央の包含層から小形仿製鏡が出土している（『207 集』）。なお、Ⅴ区西側に位置する吉野ヶ里丘陵地区Ⅰ・Ⅳ・Ⅸ区では、後期初頭～後期前半の甕棺墓が少数分布しているのみで、集落遺構は確認されておらず、後期前半代にはほとんど利用されていない。

後期前半の遺跡北部

後期前半の遺跡北部では、志波屋四の坪地区や、さらにその北の志波屋六の坪（乙）遺跡で集落が展開している。中期を通じて遺跡全体の中心的な墓域が展開する志波屋四の坪地区Ⅰ・Ⅱ区では、中期後半～後期初頭の竪穴建物は分布しておらず、後期前半までは主に墓地としての利用が続いている（図 141,142）。ただし、中期末～後期初頭に比べて後期前半の甕棺墓の数は減少しており、Ⅰ区南部を中心に散発的に分布している状況である。また、副葬品を伴う後期前半の墳墓は確認されていない。

集落遺構としては、Ⅰ区北西部で後期前半の長方形竪穴建物 1 棟（SH0526）が展開しているのみである。このほか、Ⅱ区では後期とみられる長方形竪穴建物が複数確認されているが、詳しい所属時期が明確でない。なお、棟数は少ないが、掘立柱建物の一部も後期前半に属する可能性があり、小規模な集落が展開していたと考えられる。　なお、これまで概要報告しか行われていないが、最北端の志波屋六の坪（乙）遺跡では、後期前半から集落が再び形成されており、後期後半～終末期にかけてまとまった規模の集落が営まれている（『113 集』,『207 集』）。

外環壕の形成

弥生時代後期の集落中心部約 40ha の範囲を取り囲むと推定される外環壕は、吉野ヶ里遺跡を特徴

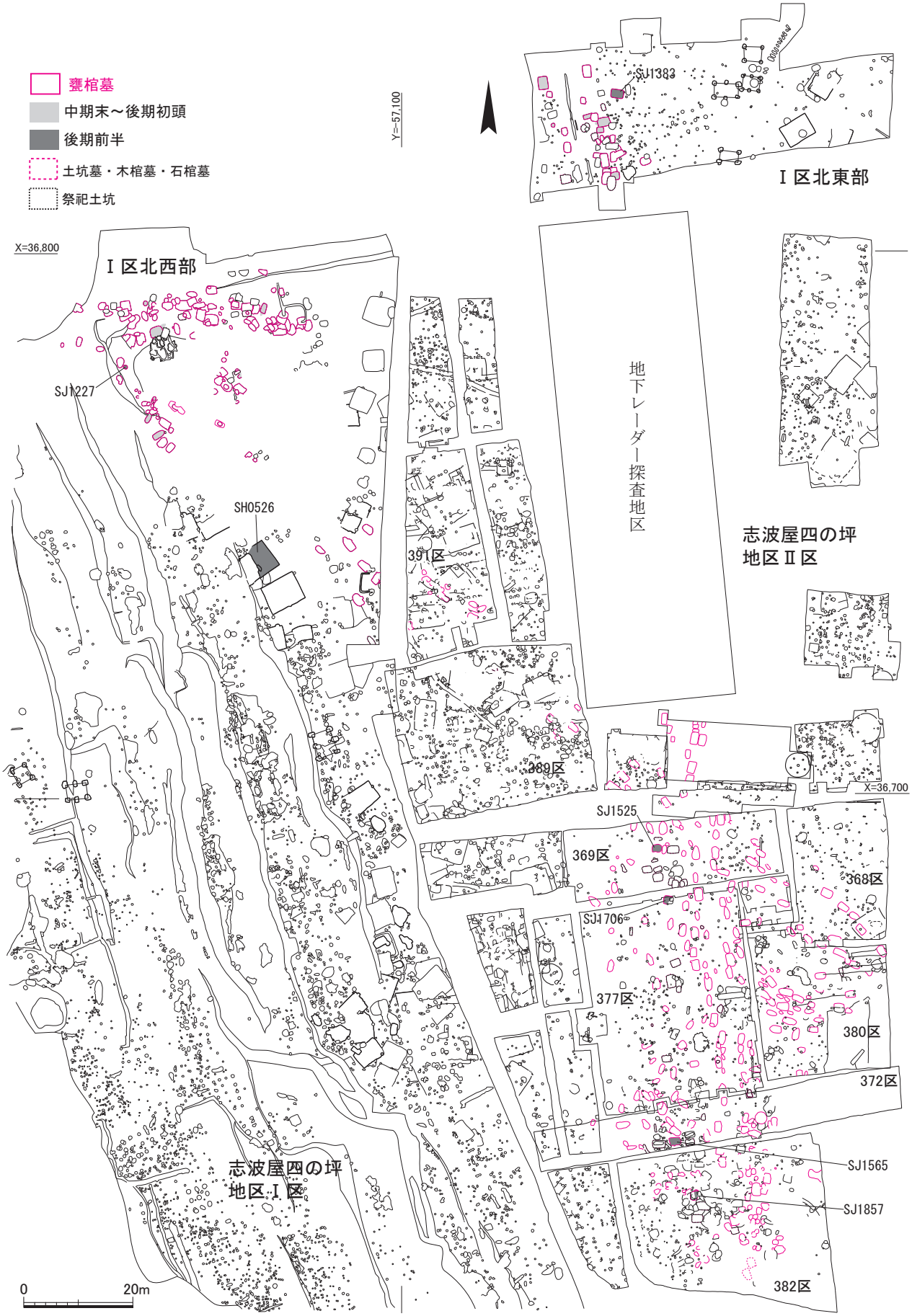


図 141　志波屋四の坪地区Ⅰ区北部・Ⅱ区　中期末～後期前半の遺構の分布（1/1,000）

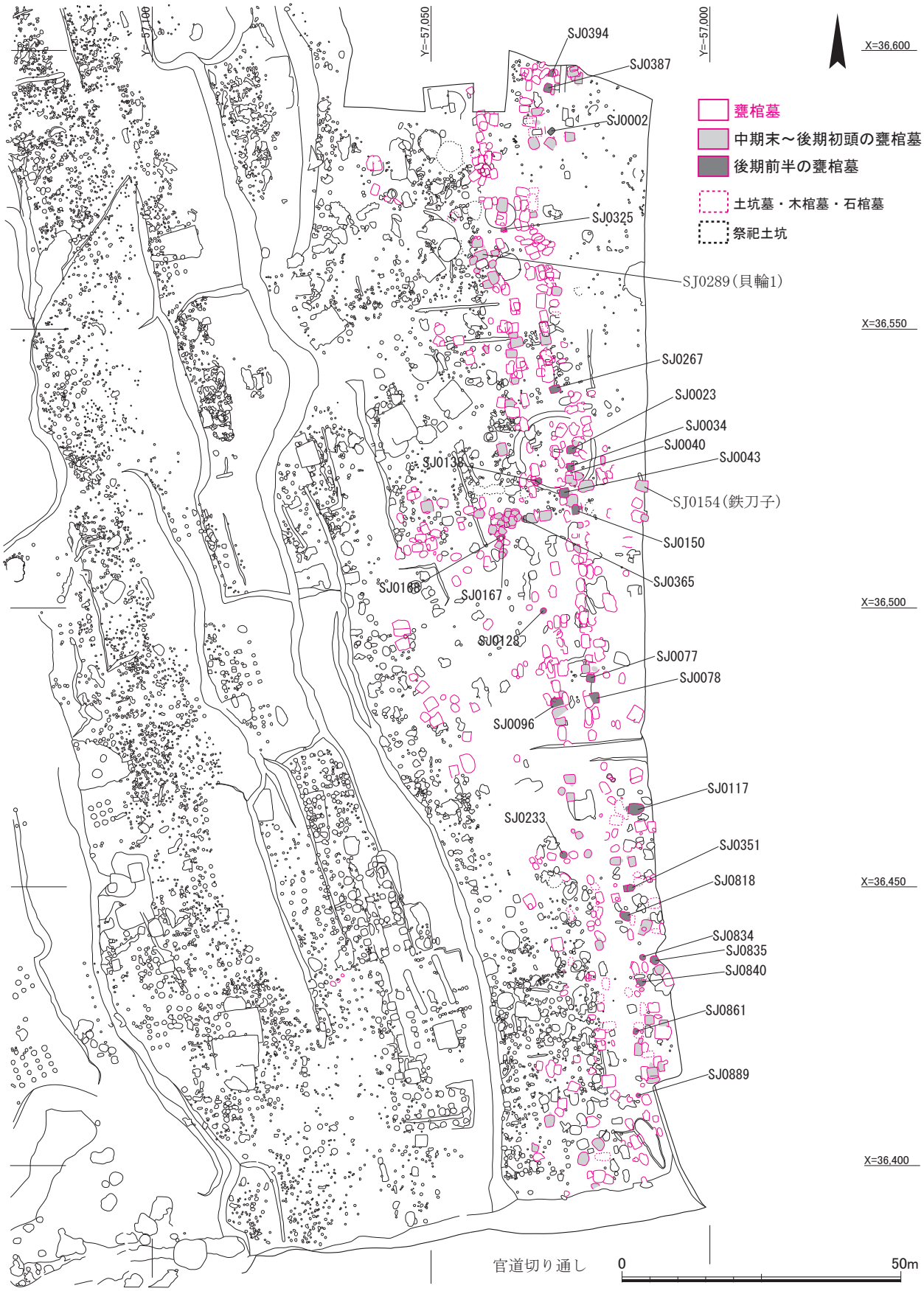


図 142　志波屋四の坪地区Ⅰ区南部　中期末～後期前半の遺構の分布（1/1,000）

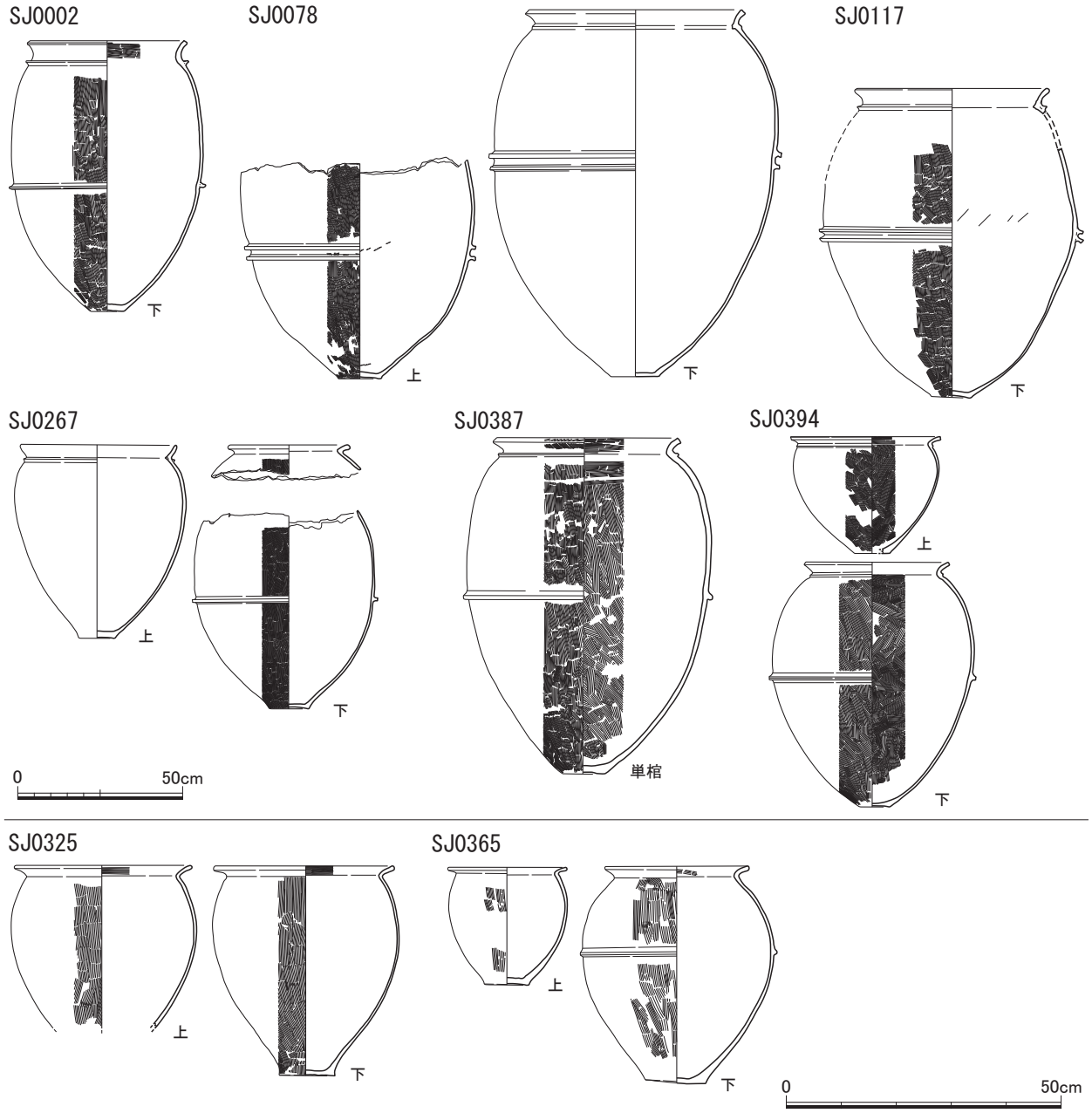


図 143　志波屋四の坪地区Ⅰ区　後期前半の甕棺（1/20,1/12）

づける遺構のひとつである。外環壕を構成する遺構としては、南から順に、田手一本黒木地区Ⅰ区 SD0105、田手二本黒木地区Ⅱ区 SD0003・SD0265、吉野ヶ里地区Ⅴ区 SD0925、吉野ヶ里地区Ⅰ区 SD0002、吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区 SD0054、吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区 SD1013 がある（図 144）。外環壕の大きさは、最も残存状況が良好な部分で幅 4.5m、深さ 2.36m である。場所によってやや異なるが、断面形は基本的に深いⅤ字形を呈しており、最深部がさらに一段深く掘り込まれている場合もある。また、部分的に壕が掘り直された痕跡も認められる。

外環壕がいつ成立したかは、後期集落の展開過程を明らかにする上で重要な問題である。外環壕の形成時期に関するこれまでの見解を整理すると、「中期後半ごろ」（『113 集』）、「中期後半の終わりごろ」（高島 1994）、「中期末ごろに形成され後期の初めには全域が完成する」（『132 集』）、「後期前半のある時期」（『173 集』）、「後期前半のうちには完成」（七田 2017）、などと微妙に変化してきている。なかで

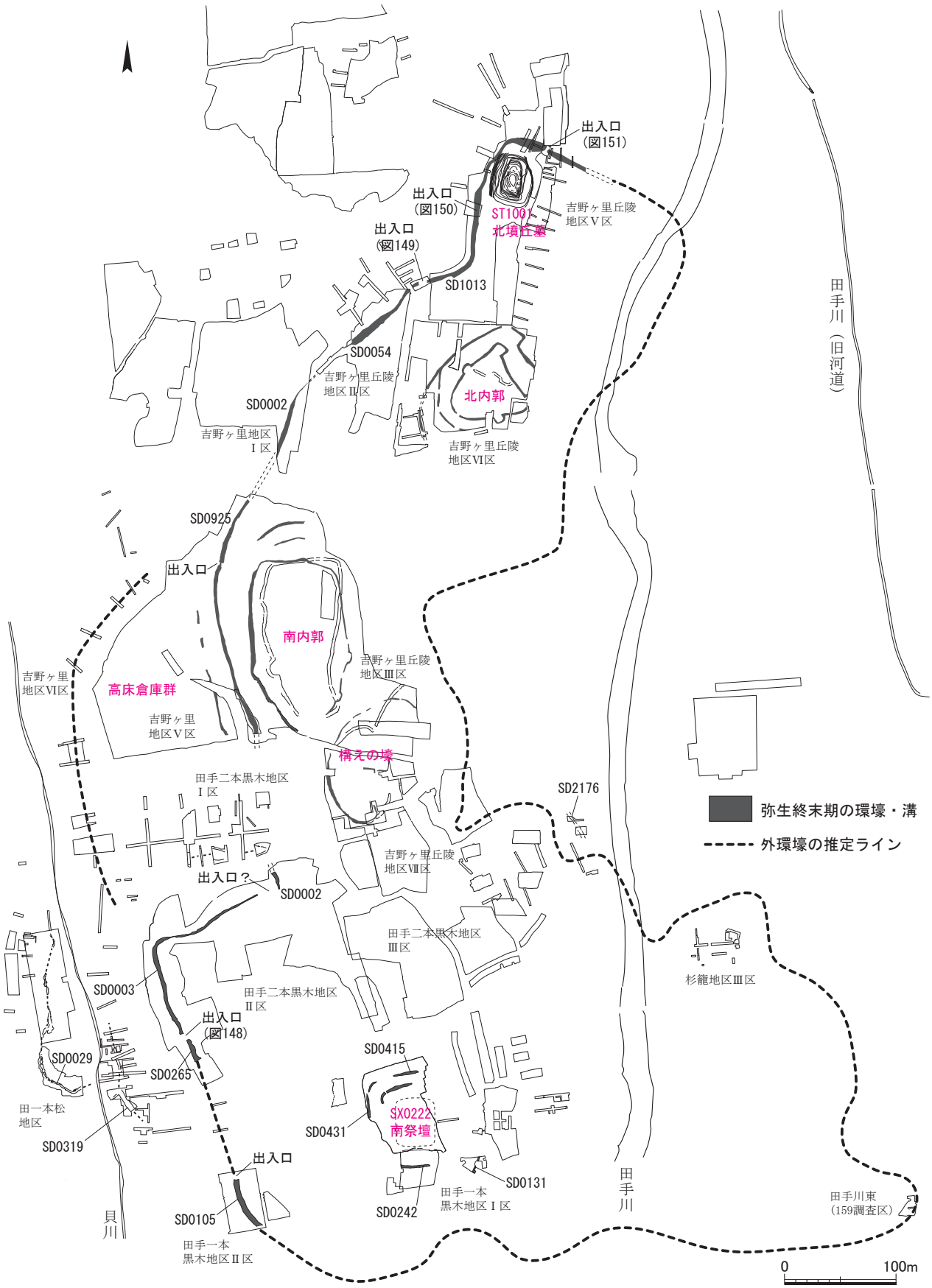


図 144　弥生時代後期の環壕・溝（1/5,000）

も蒲原宏行氏は、吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区 SD0054 外環壕と重複する甕棺墓群の型式との関係から、外環壕の形成時期を後期前半新段階頃とみているほか、遺跡南部（田手二本黒木地区Ⅱ区）の外環壕の掘削時期が中期に遡る可能性を指摘している（蒲原 2002）。

弥生時代集落を総括的にまとめた『207 集』（佐賀県 2015）では、外環壕の形成過程について、後期前半までに南部から中央部（田手二本黒木地区Ⅱ区 SD0265・SD0003、吉野ヶ里地区Ⅴ区 SD0925）まで掘削され、後期後半になって中央部から北部（吉野ヶ里地区Ⅰ区 SD0002、吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区 SD0054、吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区 SD1013）にかけて掘削されたとした。つまり、外環壕は一挙に形成されたのではなく、二段階に分けて掘削され、後期後半に壕全体が完成したとみる。その根拠としては、①外環壕北側の吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区において、環壕のライン上に後期前半までの甕棺墓地が一定数展開していること、②Ⅱ区 SD0054 壕跡下層から後期後半～終末期の土器が出土していること、③外環壕北端の吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区 SD1013 埋土から出土した土器の時期が後期後半～終末期を中心とすること、などが挙げられている。

①について、弥生時代墓地を総括的にまとめた『222 集』（佐賀県 2019）では、吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区の外環壕に重複して展開する甕棺墓の時期は中期末（立岩式）～後期初頭（桜馬場式）が主体で、後期前半（橋口編年ＫⅣｃ式＝三津式）はほとんど認められないことから、後期前半新段階頃には当該区域の外環壕が掘削されていた可能性があるとした。このほか、遺跡南部の田手二本黒木地区Ⅱ区の外環壕（SD0003）の時期について、下層出土土器のなかに中期後半～中期末のものが含まれることから、遺跡南部の外環壕の掘削開始時期が中期に遡る可能性を示した。このことは、先行研究の指摘（蒲原 2002）と符合する。

外環壕の掘削時期と吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区の甕棺墓地の時期との関係を巡るこの問題は、甕棺の編年観の微妙な違い（蒲原 2009、渋谷 2016、佐賀県 2019『222 集』）なども影響していると考えられるため、ここで改めてみていくこととする。Ⅱ区の墓地と SD0054 壕との関係をみると、壕の上面と重複、あるいは壕に近い位置に 20 基程度の甕棺墓や土坑墓・木棺墓が分布している（図 145,146）。壕の上面が削平されていることや、壕に付帯して土塁が設けられていた可能性などを考慮すると、実際にはさらに多くの墳墓が SD0054 壕の近くに分布していたと考えられる。Ⅱ区の中期後半に形成された墓地に、大型で直線的な SD0054 壕が掘削されたことにより、墳墓群の一部が破壊されたとみられる。SD0054 壕跡の周辺に分布する甕棺墓は、上棺、下棺とも口縁部に打ち欠きが施された棺体が多いが、型式的には立岩式から桜馬場式（中期末～後期初頭）の幅に収まり、明確に三津式（橋口編年ＫⅣｃ式）と判断できるものは認められない（図 147）。こうしたことから、Ⅱ区の甕棺墓地は後期前半古段階頃までで終焉し、後期前半新段階頃には SD0054 壕が掘削された可能性がある。従って、後期前半新段階には外環壕全体が完成していたと考えられる。

外環壕の範囲について、これまで明らかになっているのは北と西であり、南と東については正確な壕のラインが把握されていない（図 144）。外環壕の南端については、志波屋・吉野ヶ里段丘が遺跡南端部の南側で終わっていることから、段丘南端の裾部付近を沿って壕の南端が延びているのではないかと推定されている（『132 集』など）。外環壕の東側については、志波屋・吉野ヶ里段丘に沿って南流する田手川が壕の役割を果たしていた可能性も指摘されているが（『207 集』ほか）、段丘の東側を沿うように南流する田手川の流路は、古代（条里制施行以降）～鎌倉時代末期頃のあいだに直線的に付け替えら

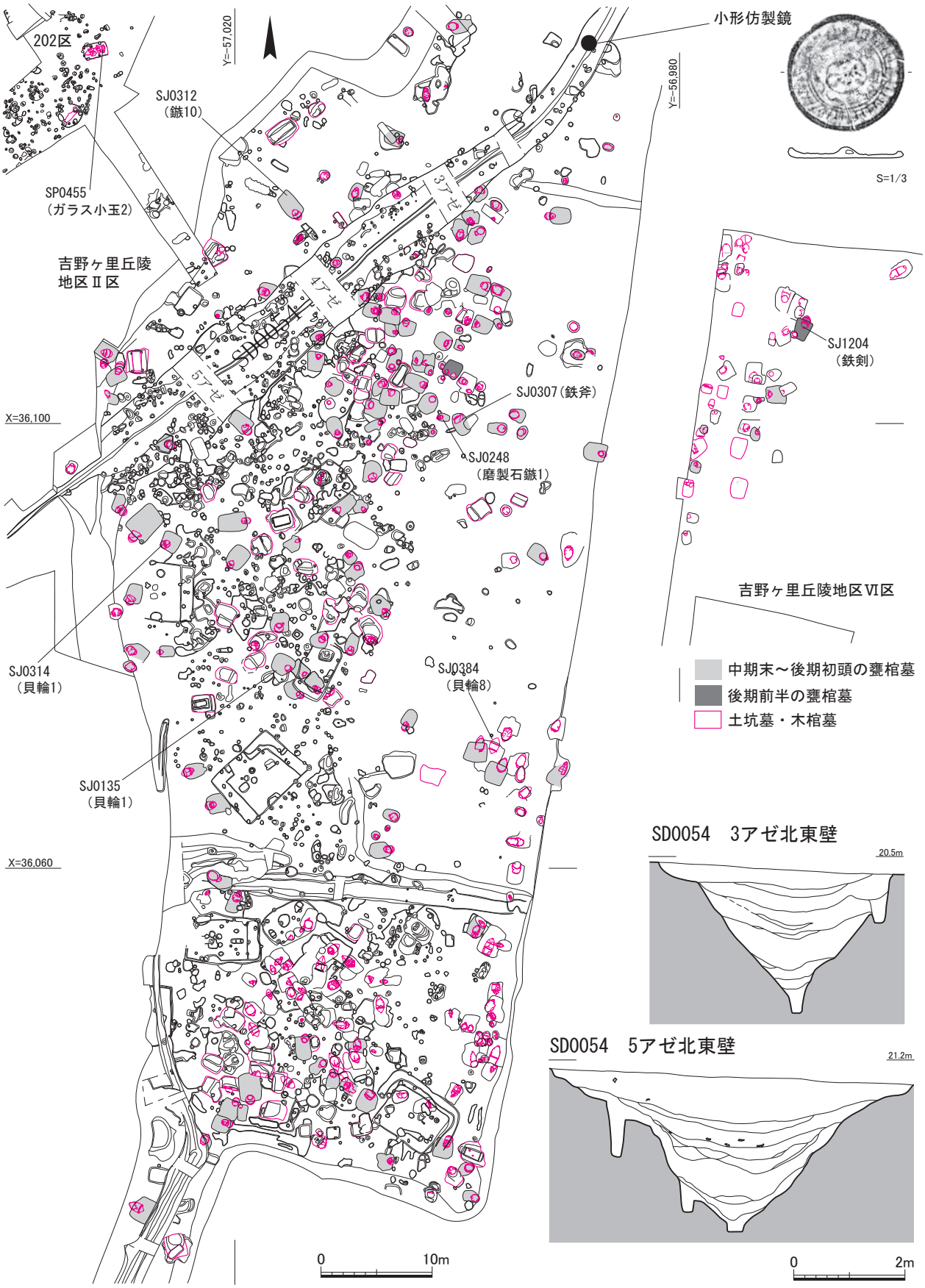


図 145　吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区・Ⅵ区西部　中期末～後期前半の遺構の分布（1/500）・SD0054 外環壕土層（1/100）

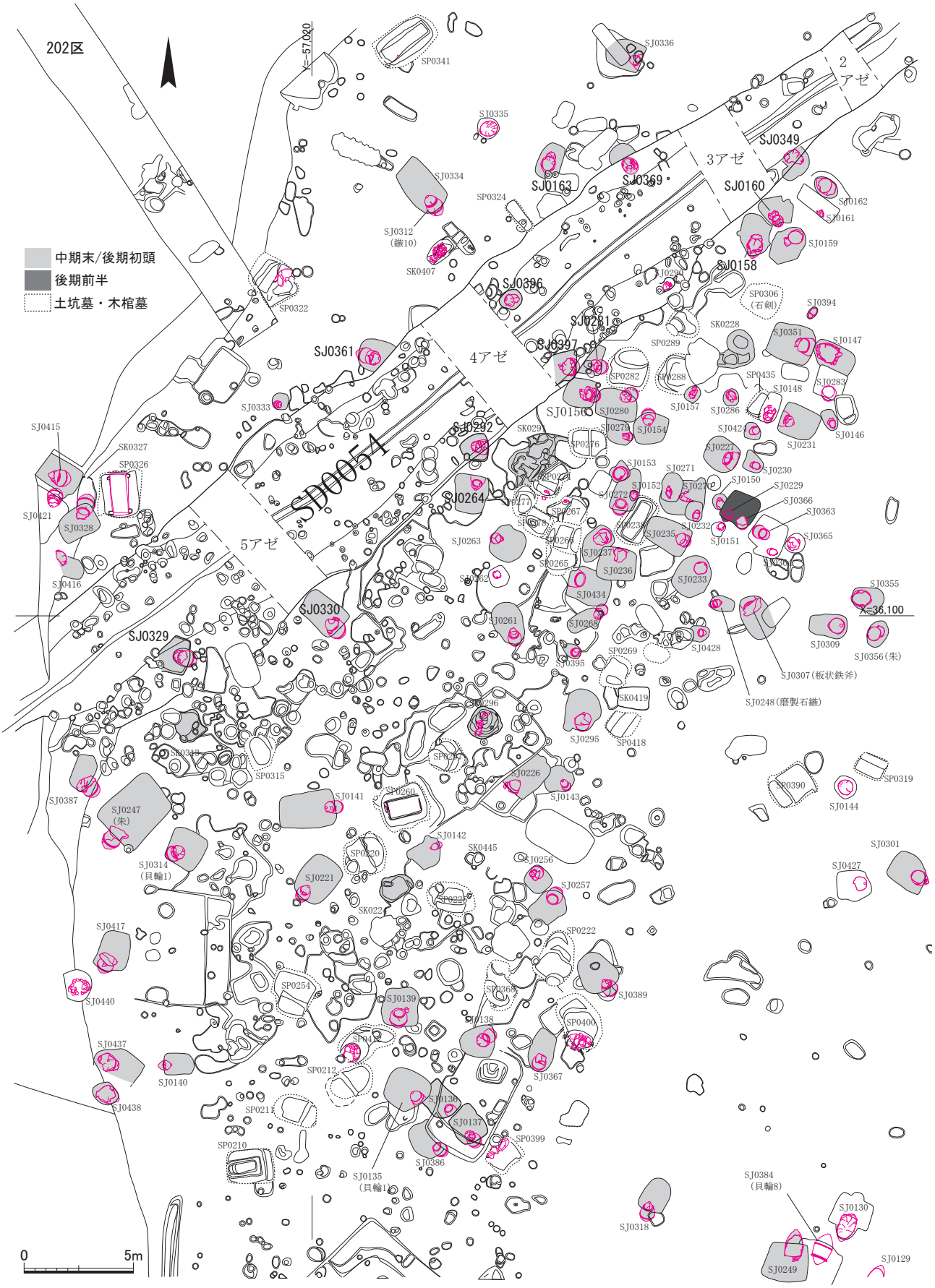


図 146　吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区　SD0054 外環壕と墓地（1/250）

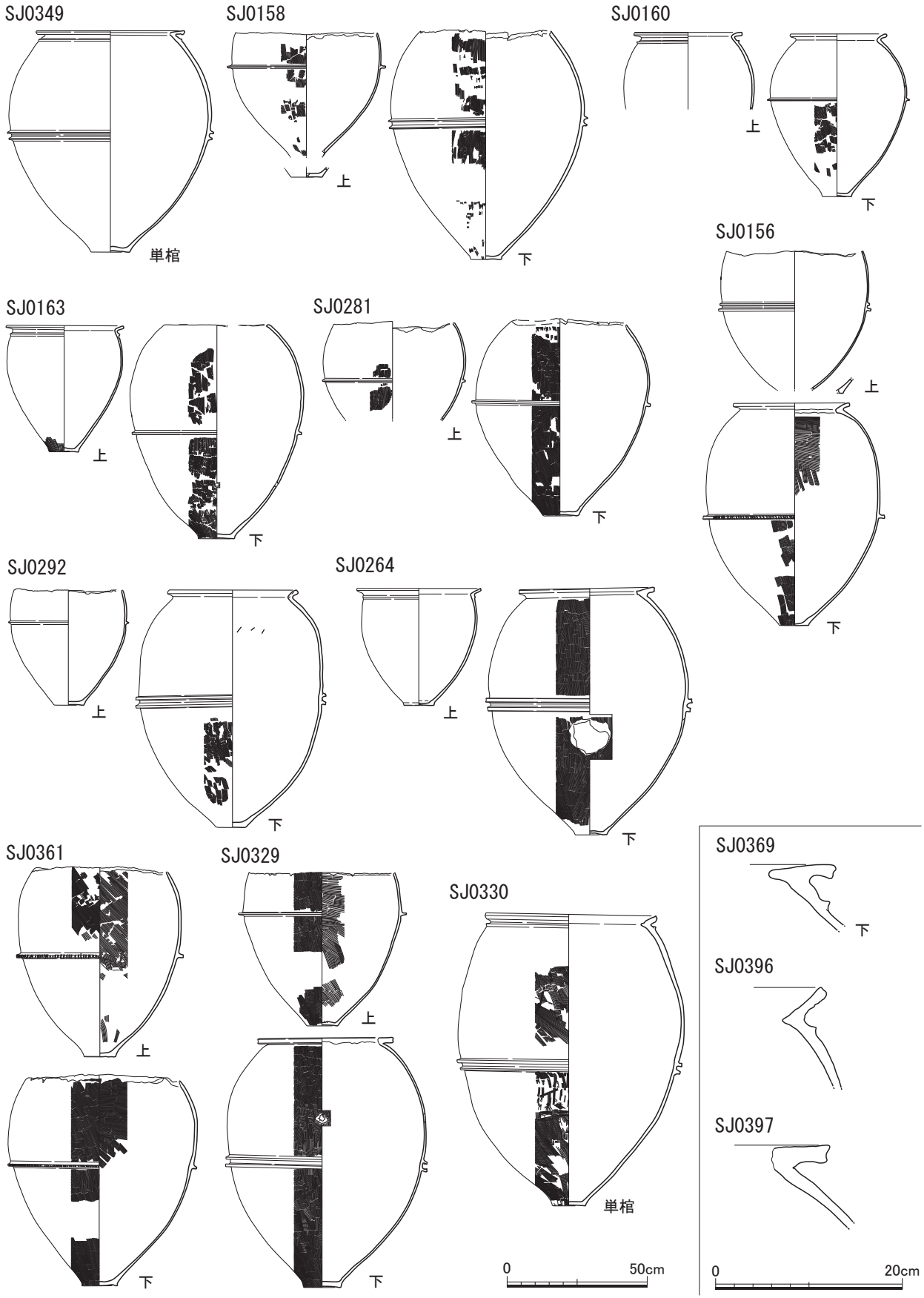


図 147　吉野ヶ里丘陵地区 II 区　SD0054 外環壕と重複・近接する甕棺（1/20,1/6）

図 148　外環壕の出入口（田手二本黒木地区Ⅱ区 221 調査区）（1/400）・SD0265 出土銅鏃（1/2）

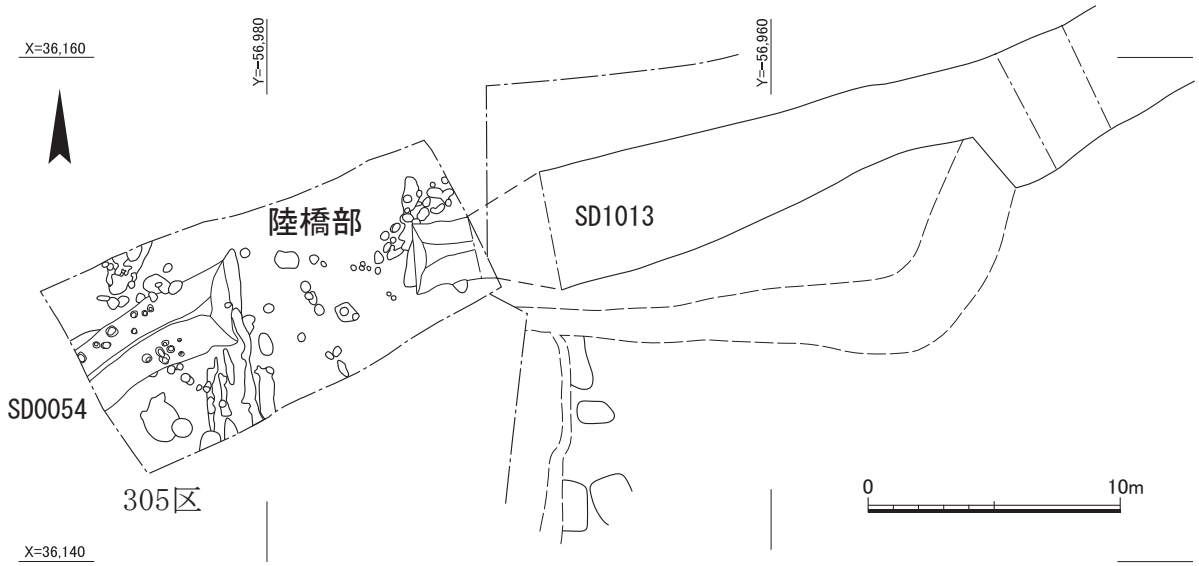


図 149　外環壕出入口（吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区 305 調査区）（1/300）

れた人工河道の可能性があり、弥生時代後期の田手川の流路は現在よりも東側にあったと考えられている（南出 1989,1990）。このことに関連して、遺跡南部の田手川東岸に位置する杉籠地区Ⅲ区は、外観が独立丘陵状を呈していることから墳丘墓ではないかと考えられてきたが、平成 23（2011）～ 24（2012）年度の確認調査の結果、人工的な盛土の痕跡は認められず、志波屋・吉野ヶ里段丘の南東裾部であった可能性が高まったことから（『211 集』）、南出氏の河道付け替え説を補強する。ただし、弥生時代後期

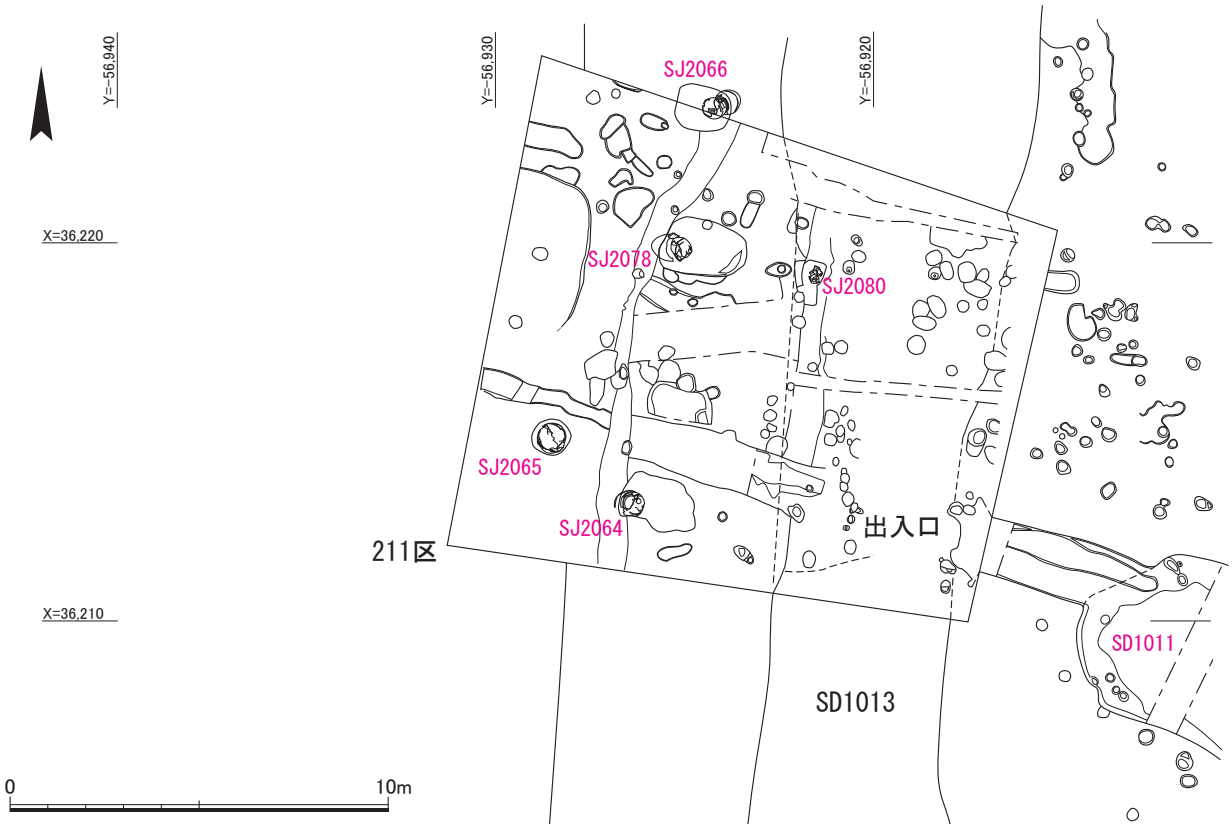


図 150　外環壕出入口（吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区 211 調査区）（1/200）

の段階で、現在の直線的な田手川の河道部分が谷状に窪んでいたのかなど、旧地形の詳しい状況は明らかになっておらず、現在の河道部分が外環壕の東側部分にあたる可能性も考えられる（『207 集』）。

また、図 144 の南東端部に位置する田手川東地区（159 調査区）では、平成 2（1990）年度の確認調査で中期前半～中期後半の甕棺墓 4 基や溝跡などが確認されており、吉野ヶ里遺跡の南東端部にあたる可能性が指摘されているが（『132 集』）、周辺の未調査区域の調査を含め、再検討が必要と思われる。外環壕の東端と南端の正確な範囲の解明は、今後も検討すべき大きな課題である。

外環壕は南北の長さが約 1km に及び、出入口とみられる部分が計 7 ヶ所確認されている。このうち 5 ヶ所は掘り残しによる陸橋部分であるが、残りの 2 ヶ所は壕を掘った後に埋め戻されて出入口が形成されている。このうち、田手二本黒木地区Ⅱ区 SD0003・SD0265 出入口（図 148）は幅約 7m の陸橋部を持ち、南北の溝の先端はややずれている。出入口付近の溝からは銅鏃や完形に近い土器がまとまって出土していることから、出入口に伴って土器が供献された可能性も指摘されている（『132 集』）。また、遺跡中央部北側の吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区 305 調査区 SD1013 出入口（図 149）は幅約 7m の陸橋部を持つ。壕の埋土から出土した土器は完形に近いものが多いことから、前述した田手二本黒木地区Ⅱ区の出入口と同様、土器が供献された可能性が指摘されている（『173 集』）。

（2）後期後半

後期後半になると、環壕内部に展開する集落の規模がさらに拡大するとともに、環壕の外側にもまとまった集落が展開するようになる。また、外環壕の内部に「南内郭」や「構えの壕」などの環壕区画が新たに形成され、環壕が多重化するとともに、内部構造の複雑化が進行する。外環壕は、後期前半の

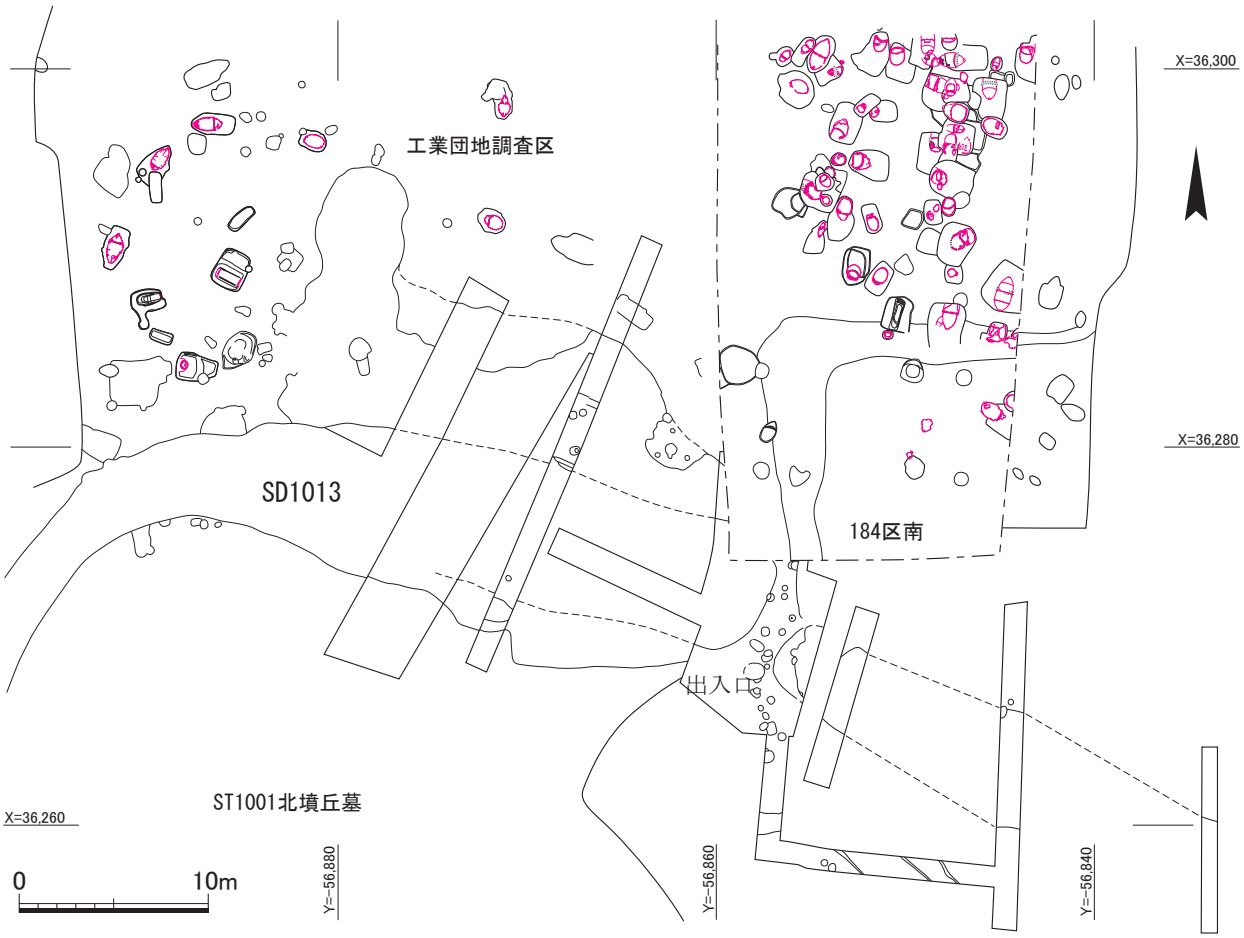


図 151　外環壕出入口（吉野ヶ里丘陵地区Ⅴ区 SD1013 北側陸橋部）（1/400）

段階で全体が完成したと考えられるが、後期後半には壕が掘り直されている箇所がある。遺跡南部の田手二本黒木地区Ⅱ・Ⅲ区、田手一本黒木地区Ⅰ区などでは、後期後半の集落遺構がほとんど分布しておらず、集落として利用された様子はほとんど認められない（図 152）。

南内郭・構えの壕の形成

中期末から後期前半にかけて中心的な集落域が形成される吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区・吉野ヶ里地区Ⅴ区では、後期後半に平面長方形状の環壕区画（南内郭）と、その南東部に平面 C 字形の弧状の壕（構えの壕）が新たに形成されており、周辺には竪穴建物や掘立柱建物が展開する。後期後半には、本区域一帯が遺跡全体の中心的な集落域になったと考えられる。

後期後半の南内郭一帯では、平面長方形状の SD0833・SD0602 環壕のほか、その北側と西側に沿って SD0831 壕が形成されており、部分的に 2 重の壕となっているが、さらにその西側には SD0925 外環壕が平行して延びており、3 重の壕となっている（図 153）。なお、SD0833 壕の南側では壕の延長部分は削平された可能性があり、本来、南内郭は閉じた環壕区画であったと考えられる。

後期後半における本区域の竪穴建物は、主に南内郭内部の北側とその外側にそれぞれ展開しており、平面長方形で短辺側にベッド状遺構を伴うものが多い。なお、環壕区画の内と外とで竪穴建物の規模や構造等に明確な差異はみられない。また、近接して掘立柱建物も認められるが、時期が明確なものは少ない。なお、SD0833 環壕南西部の半円形の環壕突出部内側には、物見櫓と推測される 1 間× 2 間の掘

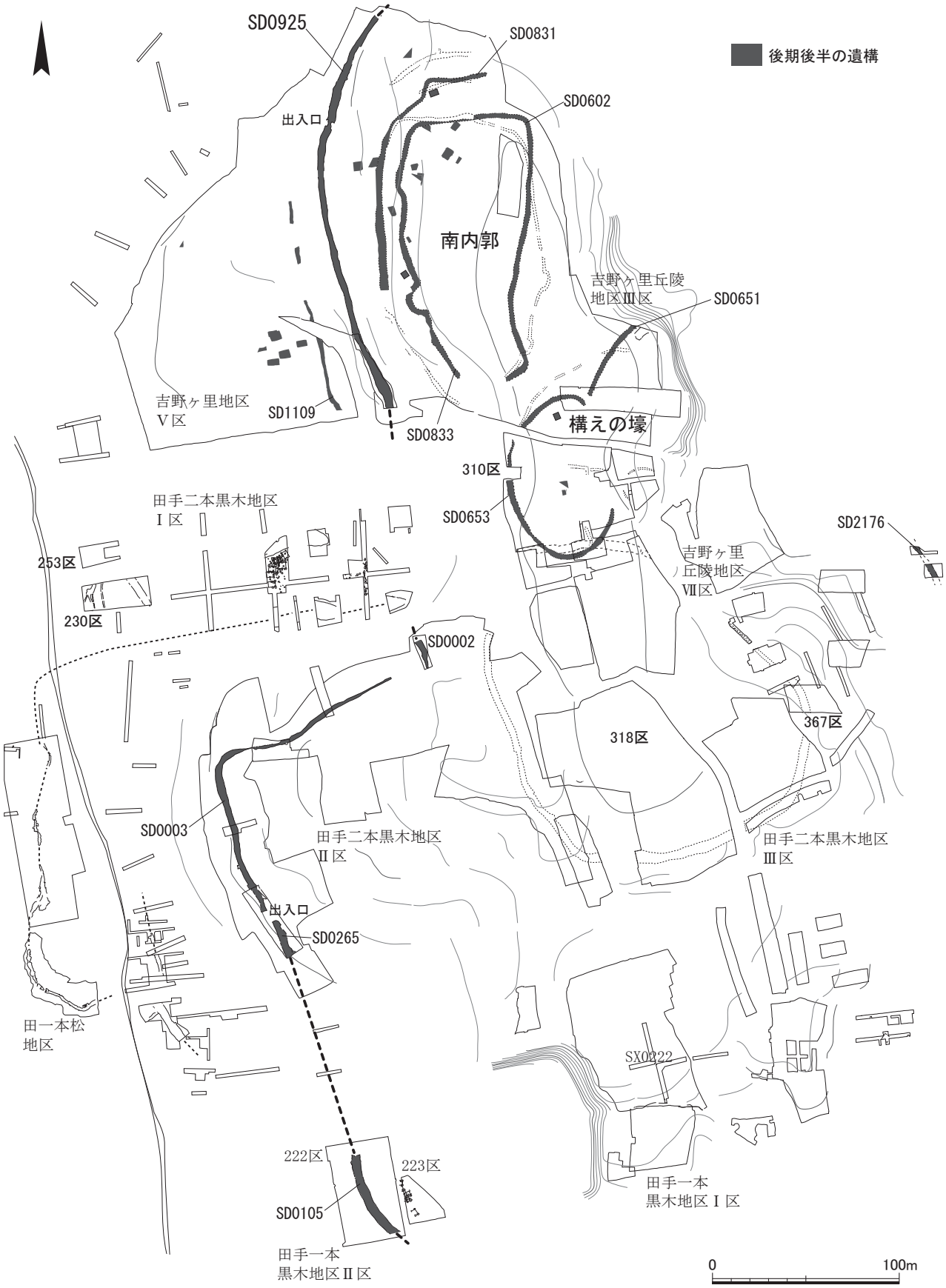


図 152　遺跡南部　後期後半の遺構の分布略図（1/3,000）

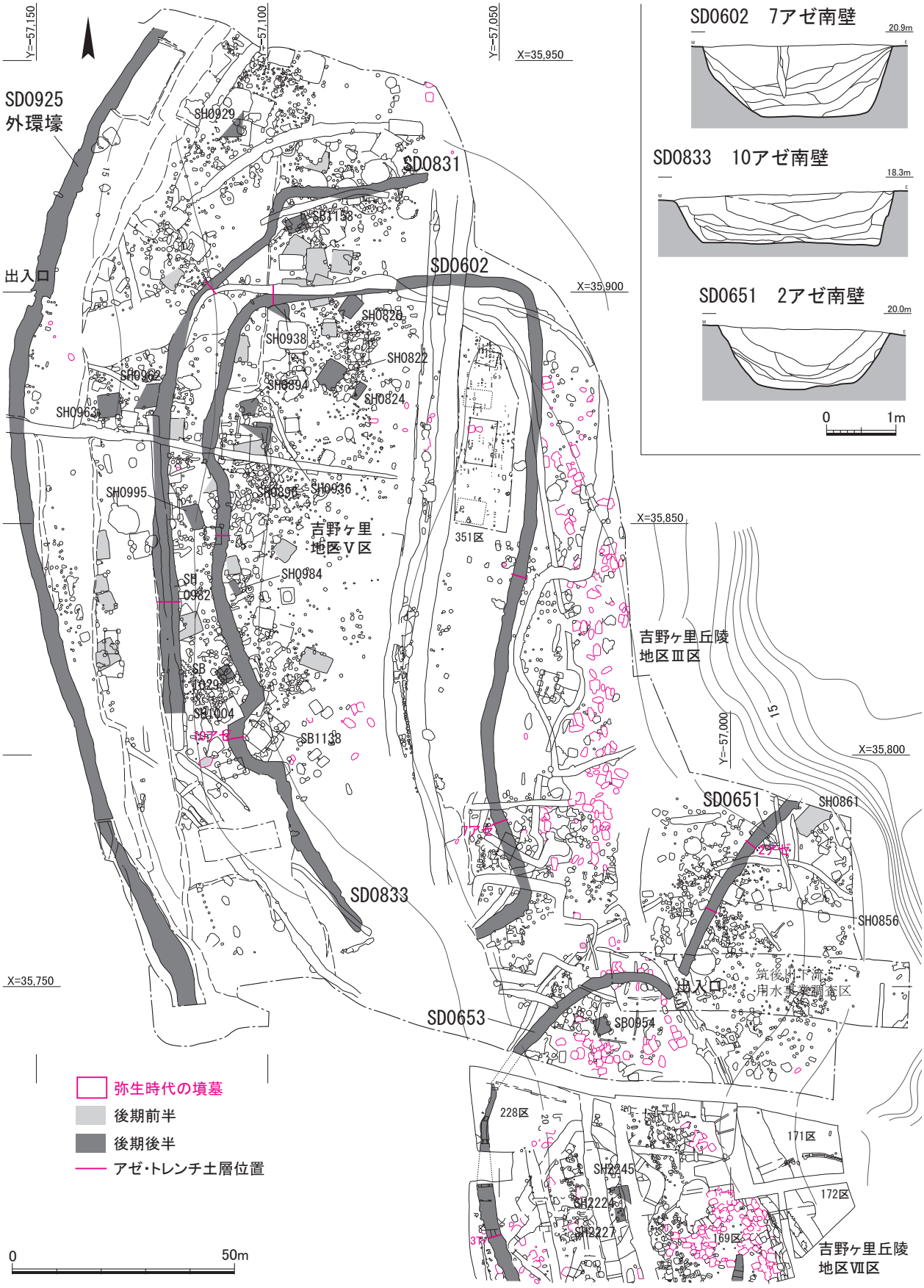


図 153　吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区・吉野ヶ里地区Ⅴ区東部　後期後半の南内郭（1/200）・後期後半の環壕、溝土層（1/80）

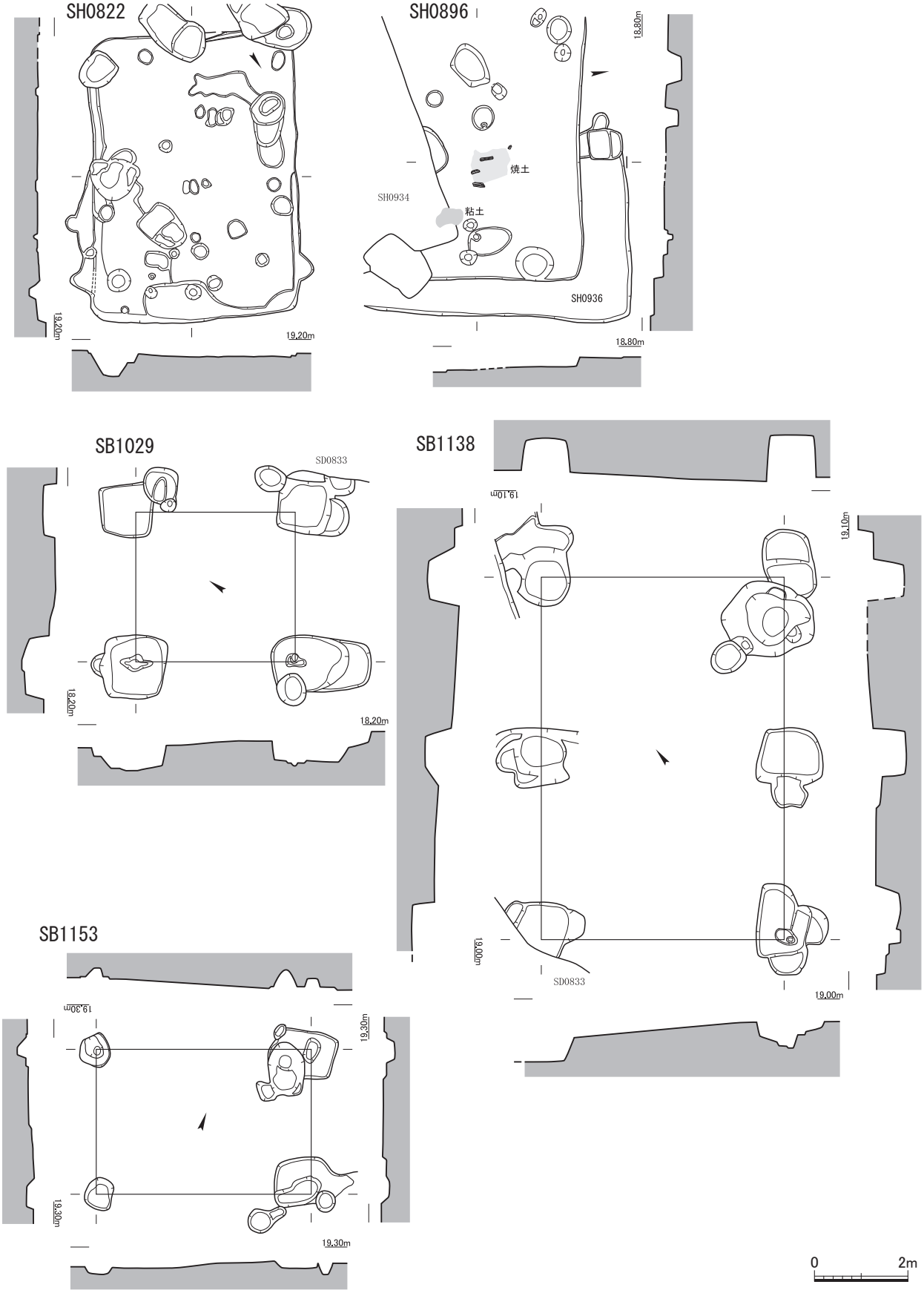


図 154　吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区・吉野ヶ里地区Ⅴ区東部　後期後半の竪穴建物跡・掘立柱建物跡（1/120）

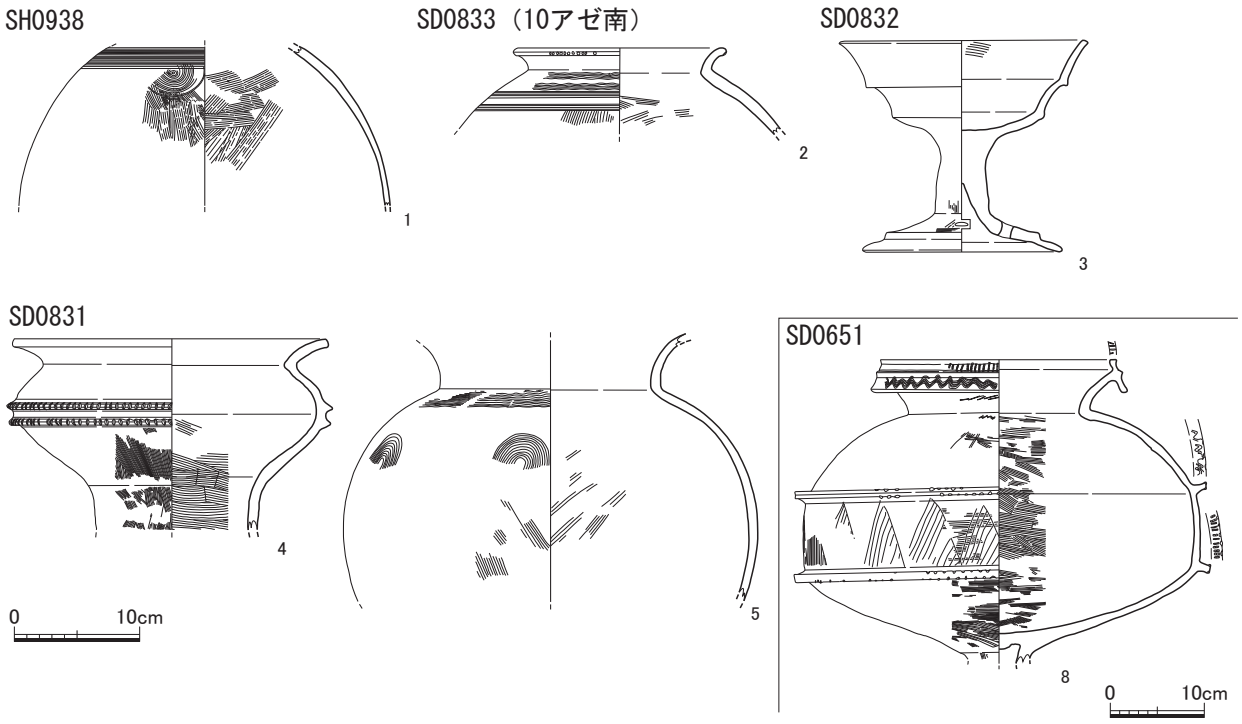


図 155　後期後半の南内郭とその周辺出土の外来系土器（1/6,1/8）

立柱建物（SB1138）が位置しており、南西隅の柱穴が SD0833 壕と重複するが、新旧関係は明確でない。

南内郭の南東に位置する「構えの壕」は、後期後半に同時に掘削されたとみられる弧状の壕２条（SD0651・SD0653）から構成されており、中央部に掘り残しによる陸橋部を有する。構えの壕付近に展開する施設として、SD0653 壕の内側に位置する１間×２間の掘立柱建物（SB0954）や、吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区の竪穴建物（SH2224・SH2227）などがあり、後期後半に属するとみられる。また、SH0856 長方形竪穴建物跡から後期後半の土器が出土しているが、SD0651 壕と重複しており、新旧関係は明確でない。特徴的な遺物として、SH0938 竪穴建物跡から肥後系壺（図 155-1）や台付甕が、SD0831 壕跡から産地不明の外来系土器（4）や肥後系壺（5）が、SD0651 壕跡から吉備系の模倣品とみられる大型の脚付壺（8）などが出土している。このほか、吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区南東部の筑後川下流用水事業調査区 SD0040 溝（SD0653 と同一遺構）から、口縁外面に凹線文が施された壺が出土している（佐賀県 1994）。

高床倉庫群の展開

南内郭の西方、SD0925 外環壕の西側に位置する吉野ヶ里地区Ⅴ区西部では、中期末から後期前半にかけて長方形竪穴建物から構成されるまとまった規模の集落が形成されており、後期後半にも継続している（図 157 ～ 159）。後期後半には、少数の竪穴建物とともに掘立柱建物群が集中的に分布しており、集落全体の倉庫群として機能していたと考えられるが、柱穴出土遺物が乏しいことから、所属時期が明確でない建物が多い。このほか、本区域では SD0925 外環壕の約 20m 西隣に平行して SD1109 溝が後期後半に形成されており、終末期まで機能したとみられる。SD1109 溝は残存する幅 1.5 ～ 3m 程度で、削平により途切れているが、約 115m の長さを直線的に延びている。本区域内の建物群を区画するための溝と考えられる。なお、Ⅴ区西部のさらに西側のⅥ区に展開する SD1401 溝については、高床倉庫群

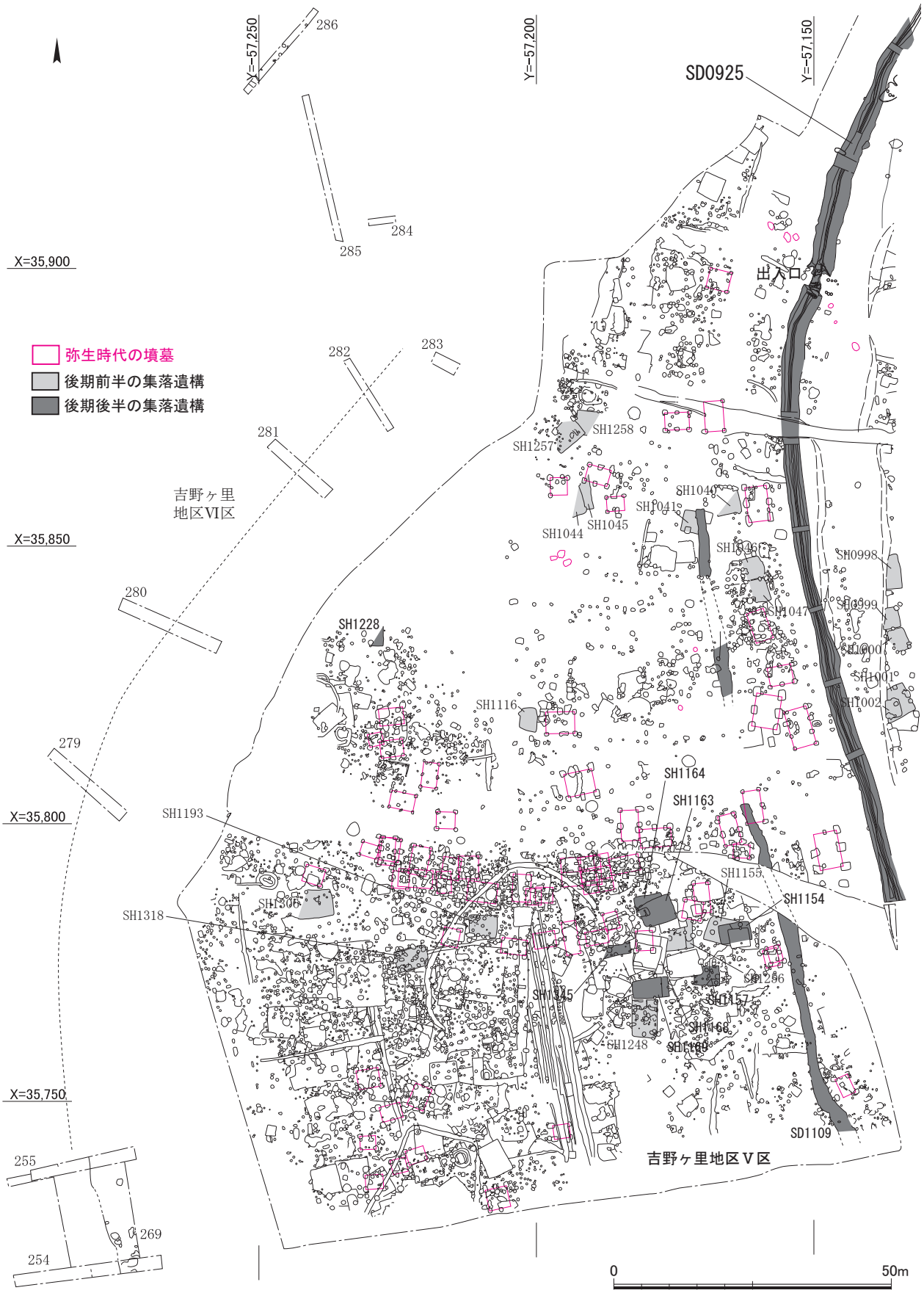


図 156　吉野ヶ里地区Ⅴ区西部・VI区　後期前半〜後期後半の遺構の分布（1/1,000）

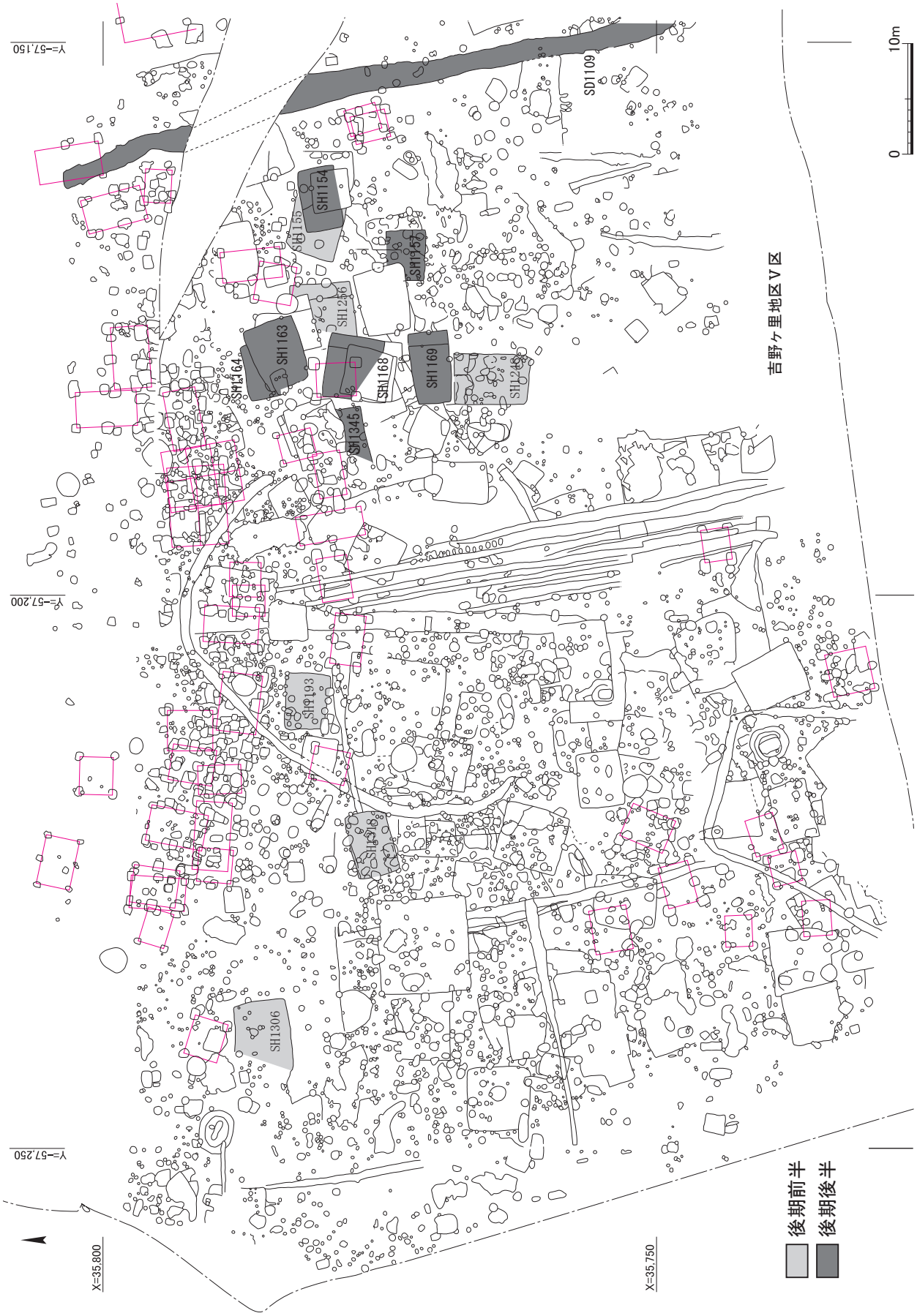


図 157　吉野ヶ里地区Ⅴ区西部南側　遺構の分布詳細（1/500）

図 158　吉野ヶ里地区Ⅴ区西部北側　遺構の分布詳細（1/600）

の西側を巡る最も外側の環壕と考えられてきたが（『160 集』）、断面の形状（図 159）などから人工的な壕ではない可能性があり、将来的に再検討が必要な遺構である（『207 集』）。

後期後半の遺跡中央部

後期後半の遺跡中央部では、中心的な集落が吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ・Ⅵ区に形成されている（図 160,161）。所属時期が明確な建物跡の数は多くないが、時期不明の竪穴建物跡や掘立柱建物跡のなかには当該期に属するものが一定数含まれると考えられる。

吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区では、後期後半とみられる平面長方形の竪穴建物 5 棟が展開している（図 161）。なかでも、SH0055 は竪穴部の周囲約半分をコの字状の溝が巡っており、内部構造は 4 本柱と

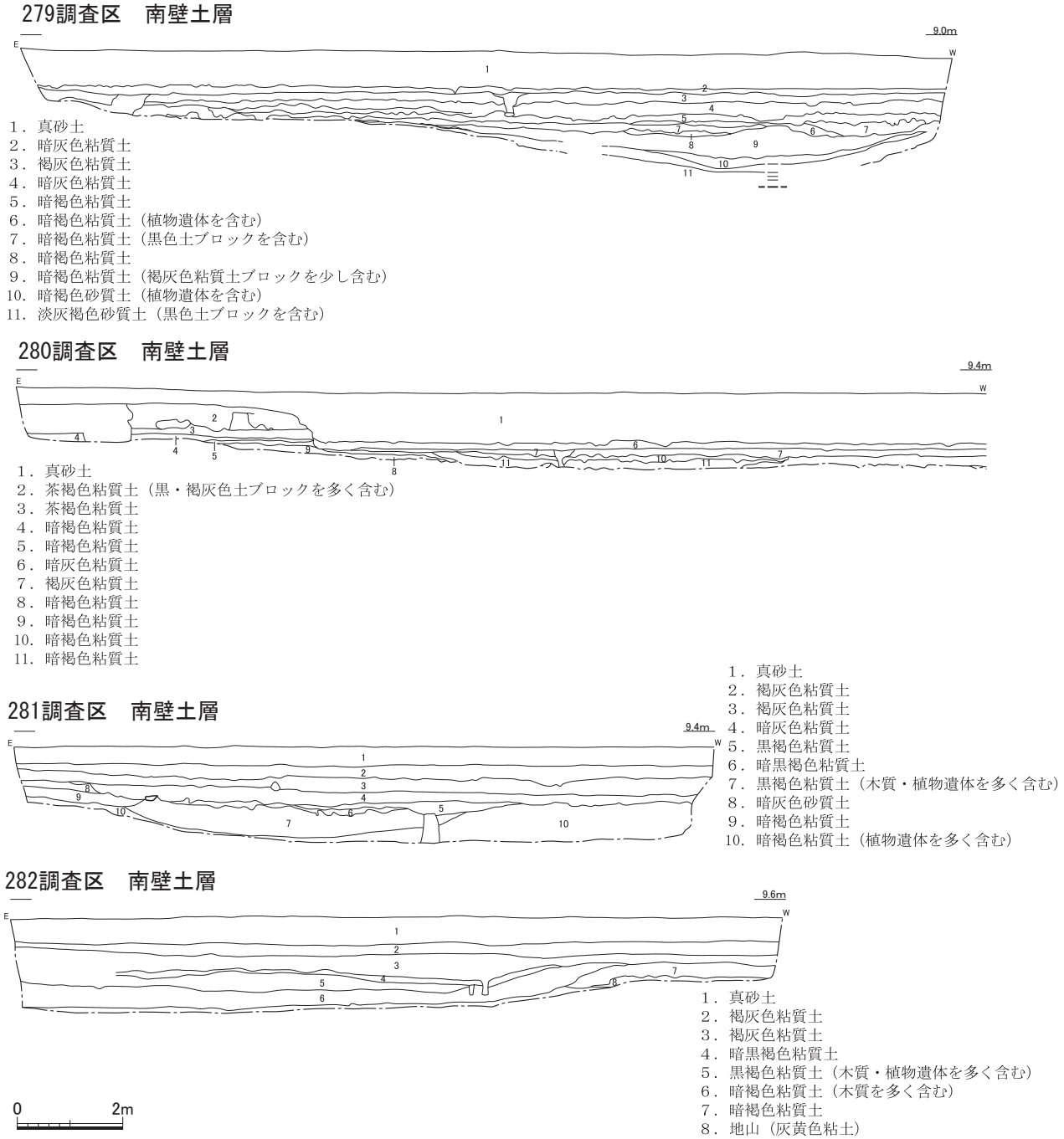


図 159　吉野ヶ里地区Ⅵ区　調査区土層断面（1/120）

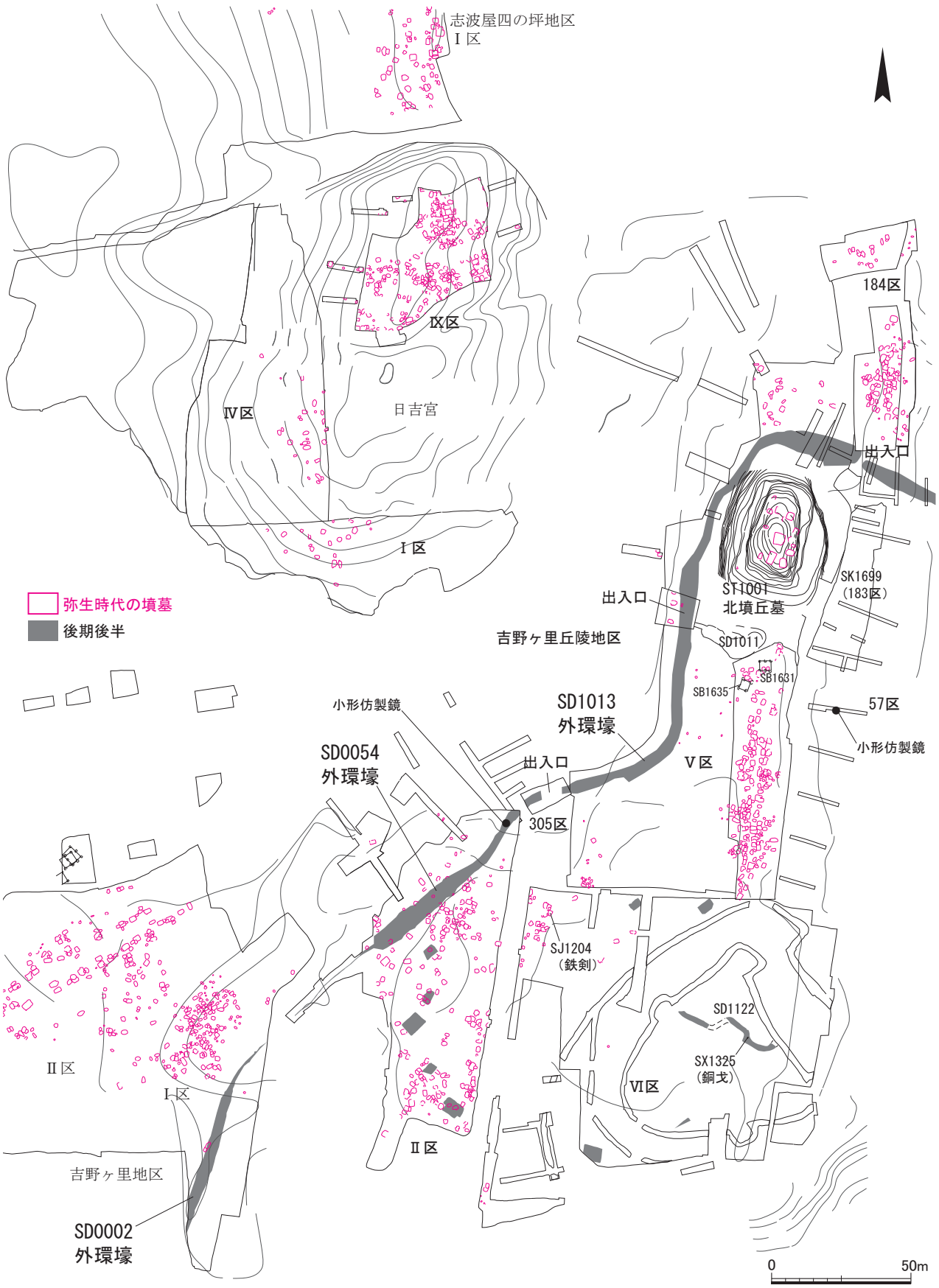
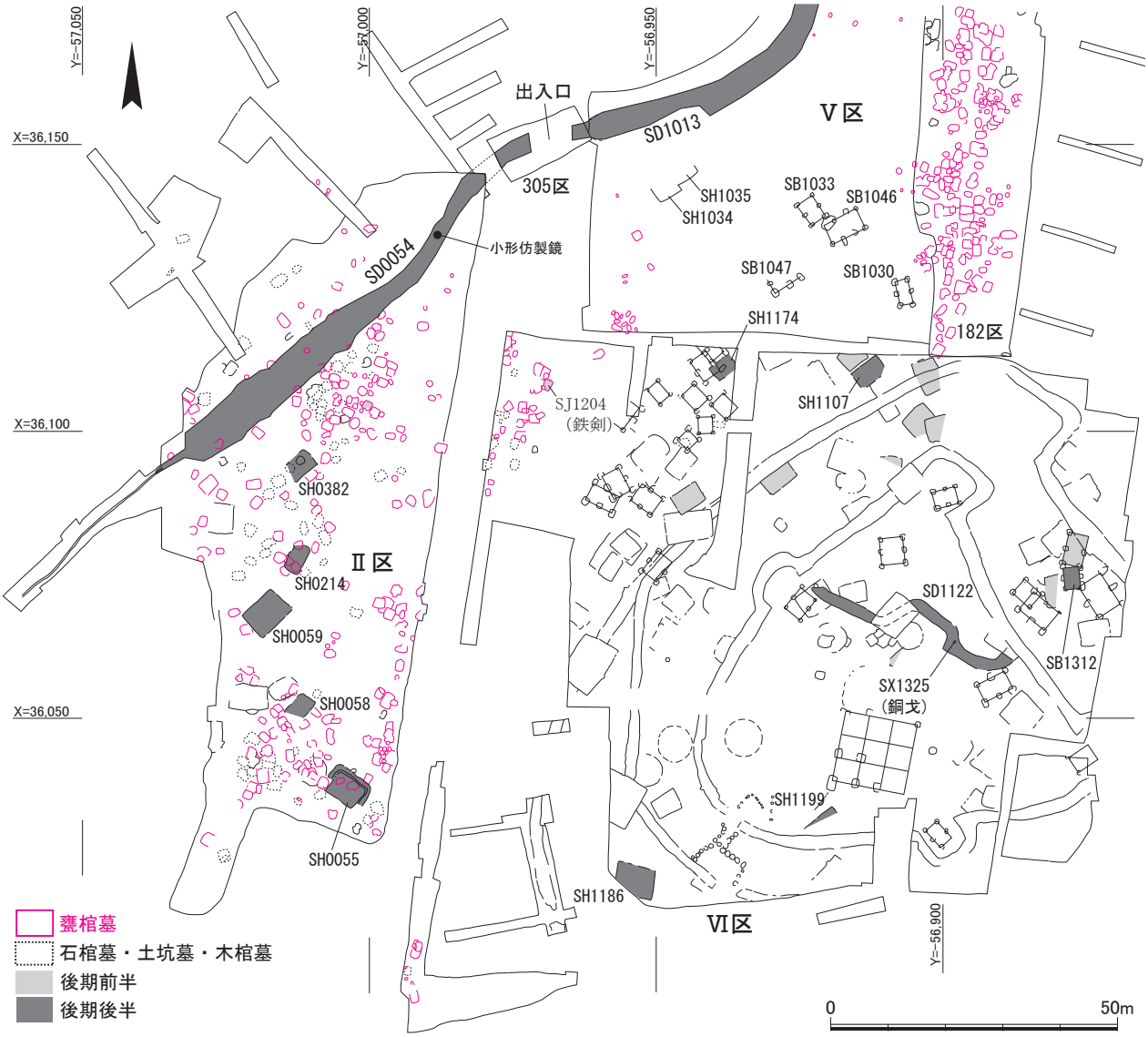
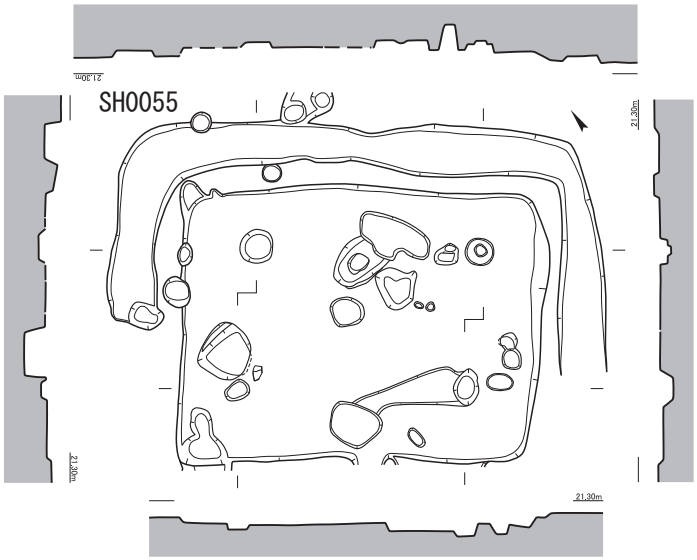


図 160　遺跡中央部　後期後半の遺構の分布（1/2,000）





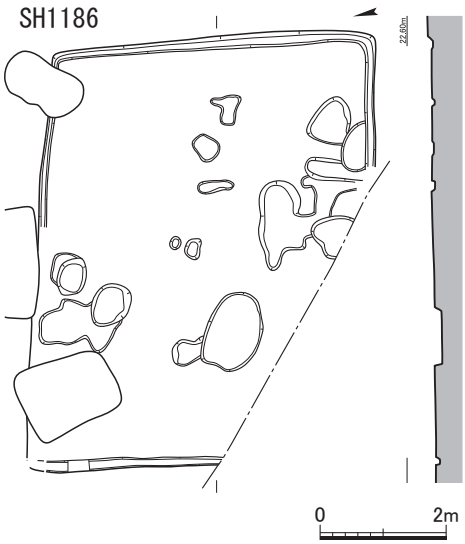


図 161　吉野ヶ里丘陵地区 II・VI区　後期前半～後期後半の遺構の分布（1/1,200）・後期後半の竪穴建物跡（1/120）

みられる特異な建物である。このほか、SD0054 壕の北側から小形仿製鏡が出土している。

Ⅱ区東側に隣接するⅥ区では、中期末から後期前半にかけて長方形竪穴建物と掘立柱建物からなる集落が展開しているが、後期後半には竪穴建物の数が減少している（図 162）。また、後期後半にはⅥ区中央部に突出部を有する短い溝（SD1122）が形成されているが、断面逆台形で浅く、溝に伴う施設等は確認されていない。そのため、区画溝であったのか環壕であったかなど、遺構の詳しい性格は明らかでない。さらに、SD1122 溝内部の SX1325 から完形の銅戈が出土しており、SD1122 溝が埋没する過程で埋納されたとみられる。銅戈は広形に近い中広形に相当し、切先が ST1001 北墳丘墓の方向を向いて水平に埋置されていた。銅戈の出土地点が環壕集落内部の居住域であることや、後期後半に形成され埋没した SD1122 溝に埋納され、その後に 2 重環壕区画が成立することなどから、銅戈は地鎮具として用いられた可能性が指摘されている（佐賀県 1994,『132 集』）

後期後半の遺跡北部の集落

外環壕の外側にあたる遺跡北部では、志波屋四の坪地区Ⅰ・Ⅱ区で後期前半から小規模な集落が展開するようになるが、後期後半になると竪穴建物数が増加しており、終末期にかけて集落規模が拡大している（図 163）。集落は、Ⅰ区北部からⅡ区にかけて長方形竪穴建物が展開しているが、詳細な時期が不明な遺構も多く、本来の建物の数はさらに多かったと考えられる。なお、甕棺墓地は後期前半までで終焉するが、土坑墓・木棺墓や石棺墓の一部は後期後半以降に属するものが含まれると考えられる。

遺跡北部のさらに北側に位置する志波屋六の坪（乙）遺跡では、前期末～中期初頭に円形竪穴建物からなる小規模な集落が展開しているが、その後、後期前半から終末期にかけて新たに集落が形成されるようになる（『207 集』）。

（3）終末期

弥生時代終末期の集落では、外環壕が部分的に掘り直されていること、南内郭や構えの壕が掘り直されて拡張していること、2 重環壕区画（北内郭）が新たに形成されること、北内郭の内部に超大型の掘立柱建物が築造されること、銅鐸が埋納されていること、などが特筆される。さらに、詳細は後述するが、（終末期～）古墳時代前期初頭までには外環壕を含む全ての環壕・溝が埋没し、環壕集落としての機能を失ったとみられる。従って、弥生時代終末期は吉野ヶ里環壕集落の諸施設が全て出揃う完成期ともいえる時期であるが、実質的な存続時期幅はそれほど長くなかったと推測される。

終末期の SX0222（南祭壇・墳丘墓）とその周辺

終末期の遺跡南端部では、中期前半代に築造された盛土遺構 SX0222（南祭壇・墳丘墓？）の北側と西側に沿って 2 条の溝（SD0415・0425・0431 と SD0420）が、南側には 1 条の溝（SD0242）が新たに形成されており、SX0222 盛土遺構の周りを取り囲む環壕と考えられる。これらの溝の上面は削平されているが、残存幅約 1.5 ～ 2m、深さ約 0.2 ～ 0.7m で、断面逆台形状を呈する。このうち、SD0431 溝の埋土からは終末期の土器とともに鉄矛が出土しており特筆される（図 165）（『219 集』）。また、SX0222 の南東部には北東 - 南西方向に延びる別の溝（SD0131）が形成されており、埋土からは終末期～古墳時代前期初頭の土器が出土している。終末期の SX0222 の近辺では、壕以外の集落遺構としては、

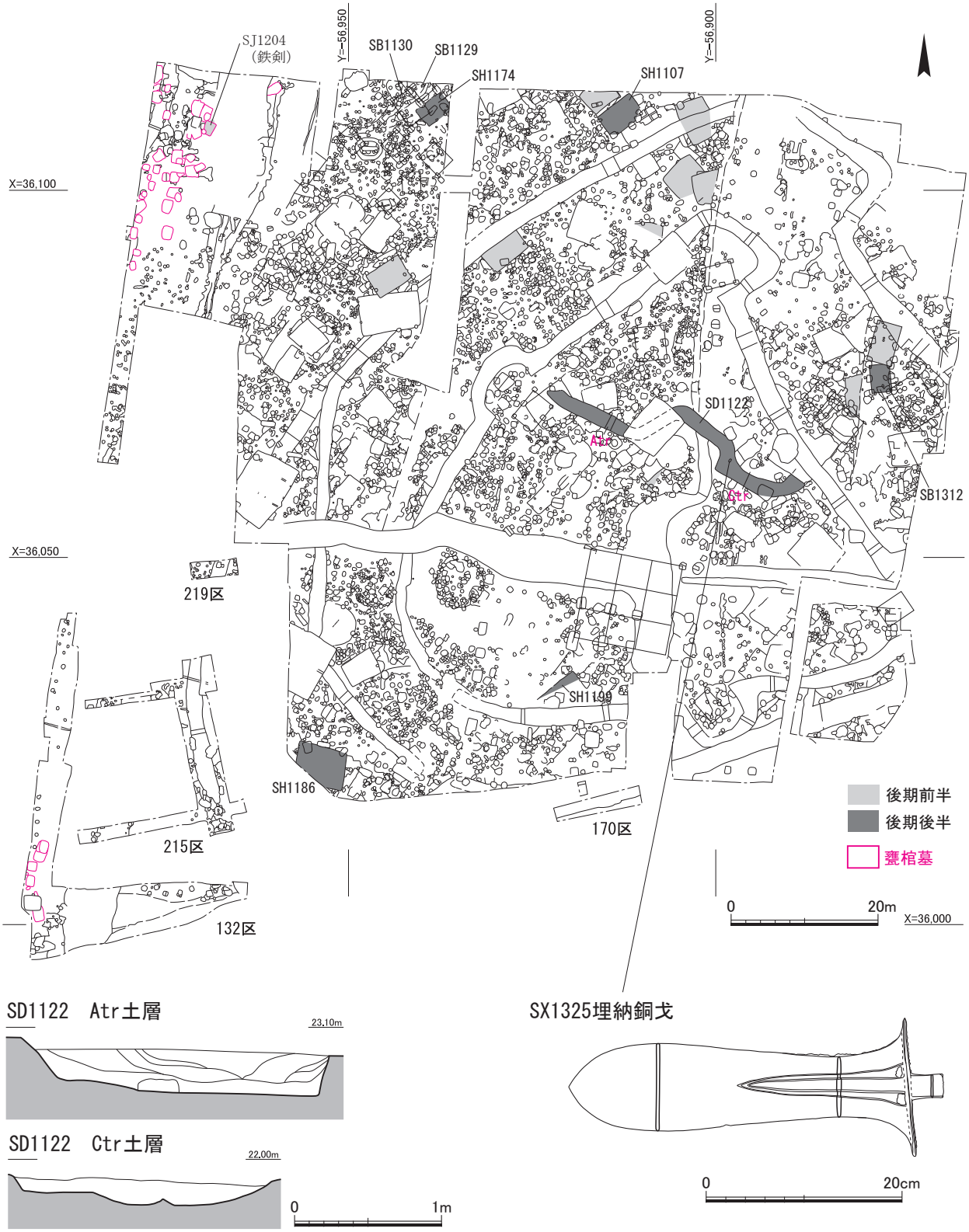


図 162　吉野ヶ里丘陵地区Ⅵ区　後期前半～後期後半の遺構の分布（1/800）・SD1122 溝土層（1/40）・SX1325 埋納銅戈（1/6）

壕の外側に位置するⅢ区 SH0005 長方形竪穴建物が 1 棟展開してている程度で、集落の実態は明らかでない。終末期になって、SX0222 盛土遺構に対する祭祀行為が行われたと考えられる（『219 集』）。

SX0222 南祭壇（墳丘墓？）の北側では、田手二本黒木地区Ⅲ区 318 調査区南端の SH0351 竪穴建物が終末期に属する可能性があるほか、346 調査区では前～中期の円形竪穴建物跡（SH0926）への混入

図 163　志波屋四の坪地区Ⅰ区北部・Ⅱ区　後期前半～後期後半の遺構の分布（1/1,000）

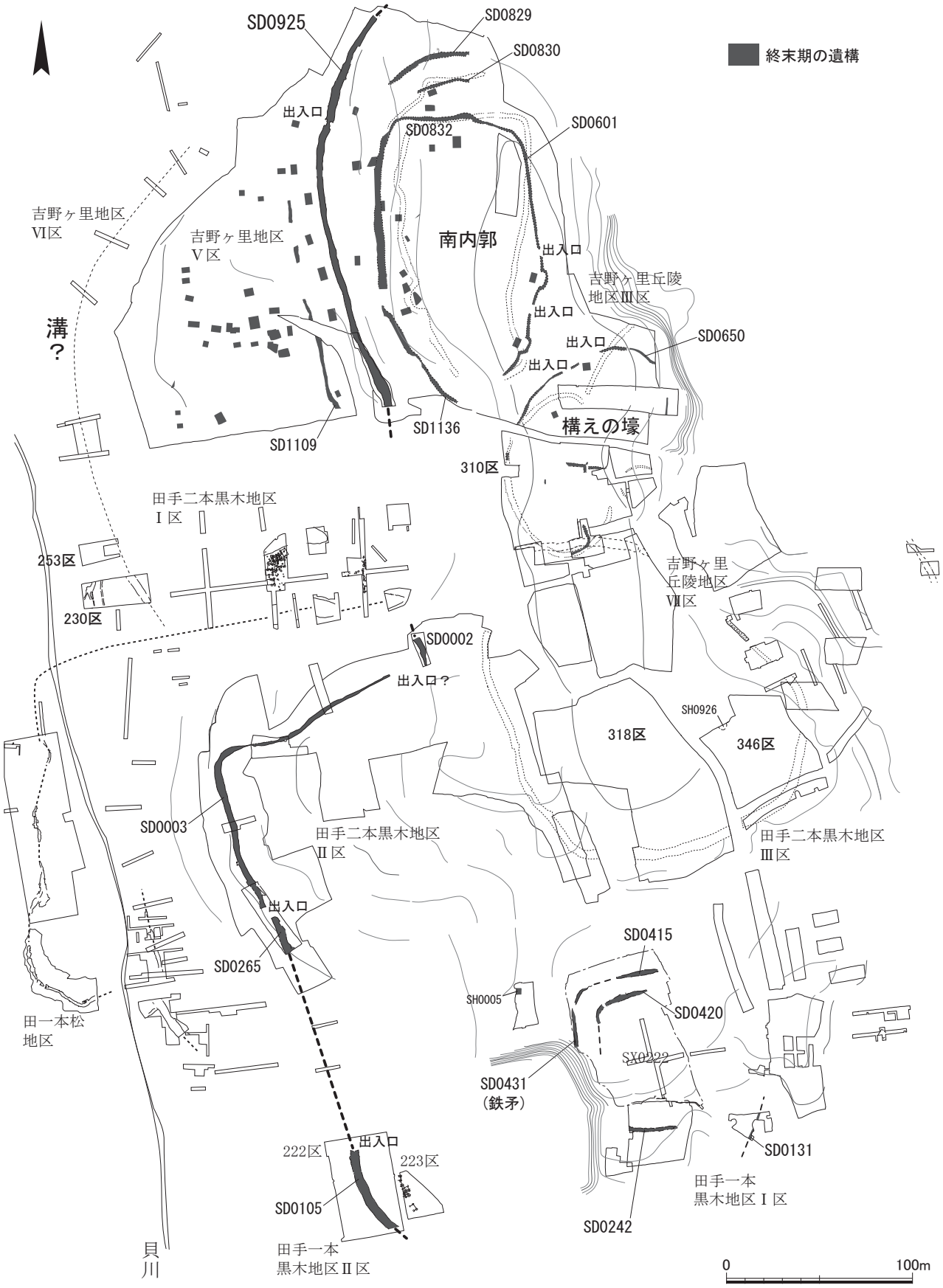


図 164　遺跡南部　弥生時代終末期の遺構分布略図（1/3,000）

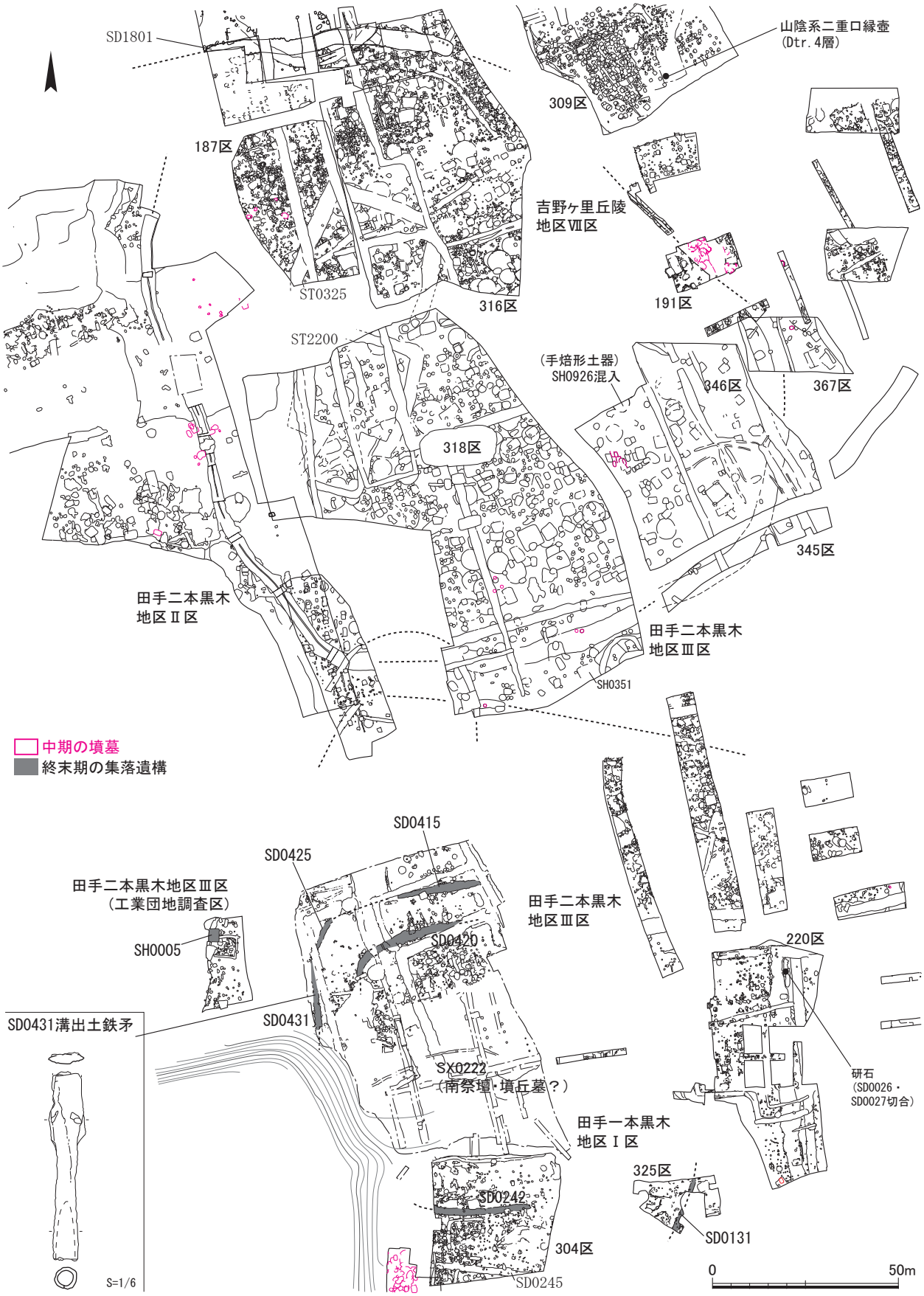


図 165　遺跡南部　弥生時代終末期の遺構の分布（1/1,500）

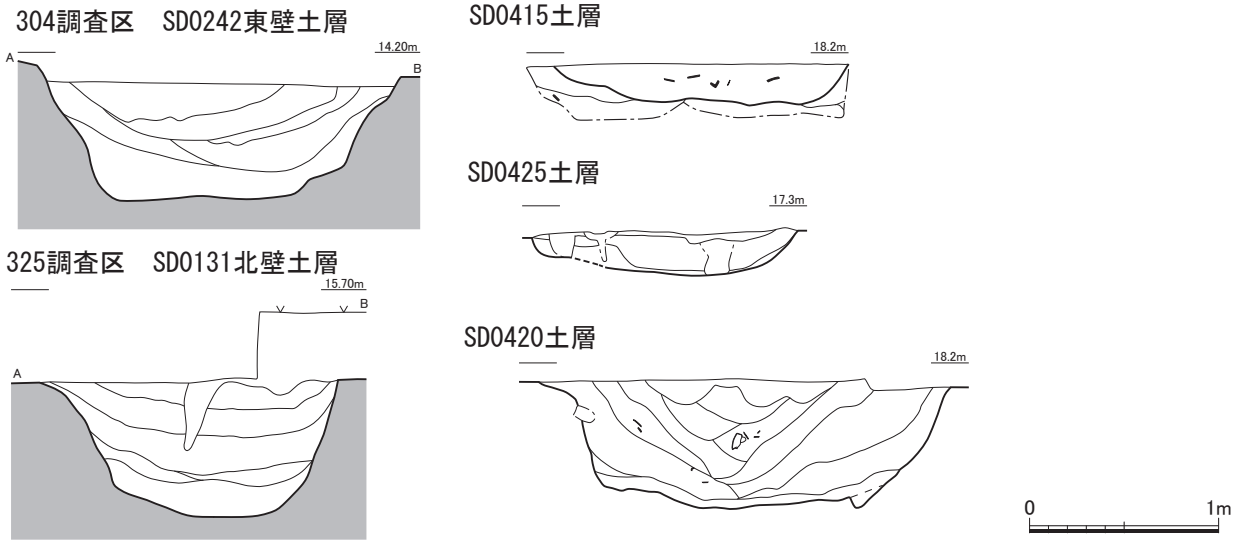


図 166　遺跡南部　SX0222 盛土遺構周囲の弥生時代終末期の溝土層（1/40）

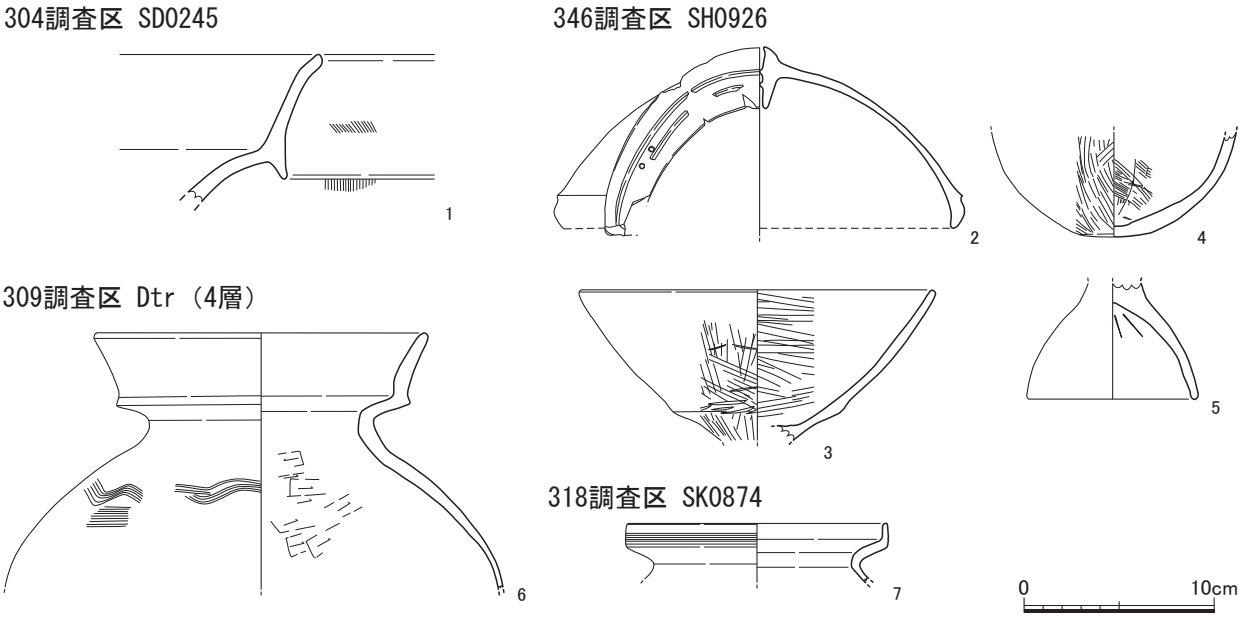


図 167　遺跡南部出土の外来系土器（1/4）

品として、近江系の手焙形土器などが出土している（図 167-2 ～ 5）。このことから、Ⅲ区で終末期に小規模な集落が展開していた可能性がある。また、吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区 309 調査区の D トレンチ包含層（4 層）から山陰系の二重口縁壺（6）（『211 集』）、田手二本黒木地区Ⅲ区 318 調査区 SK0874 土坑から吉備系の甕口縁部（7）（『207 集』）、遺跡南端部の田手一本黒木地区 I 区 304 調査区 SD0245 溝の検出面（混入品）から東部瀬戸内系とみられる壺口縁部（1）（『211 集』）が出土している。このほか、所属時期が明確でないが、遺跡南東端部に位置する田手一本黒木地区 I 区 220 調査区 SD0026・SD0027 切合部分から、弥生時代の研石とみられる石製品が出土している（『222 集』）（本書第 2 節 4 の図 271-311）。220 調査区は鎌倉時代末期頃に創建された妙法寺跡にあたる区域であるが（『132 集』、『211 集』）、研石は周囲の弥生時代の遺構からの混入品と考えられる。

終末期の南内郭と「構えの壕」

終末期の南内郭では、後期後半に形成された内壕（SD0602・SD0833）と外壕（SD0831）が埋没し、新たな内壕（SD0601・SD0831/0832・SD1100・SD1136）が掘り直されて東西方向に拡張している（図168）。ただし、拡張した内壕の西側は後期後半のSD0831壕に重複し、終末期にSD0832壕が掘り直されている。また、内壕の北側に沿って2条の短い溝（SD0829・SD0830）が新たに形成されている。環壕突出部は、内壕の東部に2ヶ所、北部と南西部に各1ヶ所の計4ヶ所確認されており、突出部内側及び付近に造営されている掘立柱建物4棟（SB0630、SB0956、SB1032、SB1144）は、位置的にみて物見櫓としての機能が想定される。竪穴建物は、内郭内側の西部及び内郭外側の西部から北部にかけて分布しているが、所属時期が明確なものは多くない。なお、内郭の中央部から南部にかけては後期後半～終末期の遺構が分布していないことについては、標高が高い位置にあるため後世の削平による影響が大きかった可能性もあるが、意図的に設けられた空白地（広場）であった可能性もある。特徴的な遺物として、南内郭の北側を巡るSD0829溝から漢鏡片（鈕部分の破片）が出土している（『207集』）。

南内郭の西側に展開するSD0925外環壕は、南端の10アゼ土層のように、当初の断面V字形の中央部分が断面U字形に掘り直されている箇所がある（図169）。土層の堆積状況は位置によって異なっているが、出土土器から終末期の終わりごろに埋没した可能性が高い。

吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区北部・Ⅲ区南部に後期後半に形成される平面C字形の「構えの壕」は、終末期になると新たにSD0650が掘削されて規模が拡張しているが、南西部のSD2208とSD2230壕は部分的に重複している（図170）。出入口となる陸橋部の位置は前段階からやや北へと移動しており、2ヶ所認められる。かつ、陸橋部付近に新たに1間×1間の掘立柱建物（SB0926）が営まれており、壕の出入口に関係する施設であった可能性がある。このほか、筑後川下流用水事業調査区の東端を南北方向に延びる短い溝（SD052）が、出土土器から終末期に形成されたとみられるが（佐賀県1994）、構えの壕と連続するかどうかは明らかになっていない。構えの壕の内側では、終末期に短い溝2条（SD2101・SD2102）が新たに形成されている。ともに東西方向に直線的に延びる短い溝であるが、SD2101溝は南方向へ直角に短く折れ曲がっており、2条の溝は接続していない。これらの溝からは終末期の土器が出土しているが、遺構の性格や機能は明らかでない。また、構えの壕の内側のSK2244土坑から終末期の大型甕が2点出土しており（図172-5,6）、古墳時代前期初頭のST2200前方後方墳が築造される前段階に営まれた土器棺墓の可能性がある（『160集』、『222集』）。このほか、特徴的な遺物として、SD2101・SD2102溝の中間に位置するSK2531土坑から吉備系（模倣品か）とみられる有段高坏（図172-4）が出土しているほか、後期後半のSD2208壕、及び古墳時代前期初頭のST2200前方後方墳の周溝北西部から小形仿製鏡がそれぞれ出土している（1,2）。

終末期の高床倉庫群

SD0925外環壕西側の吉野ヶ里地区V区西部では、中期末から後期前半にかけて竪穴建物と掘立柱建物からなる集落が展開しており、後期後半～終末期にも継続している（図173）。本区域では特に掘立柱建物が密集しており、高床倉庫群として機能していたと考えられるものの、全ての柱穴を完掘していないことや、柱穴出土の遺物が乏しいことなどから、建物の所属時期の比定が難しいという問題がある。弥生時代集落編（『207集』）では、本区域の掘立柱建物跡として63棟を報告しているが、このほかに

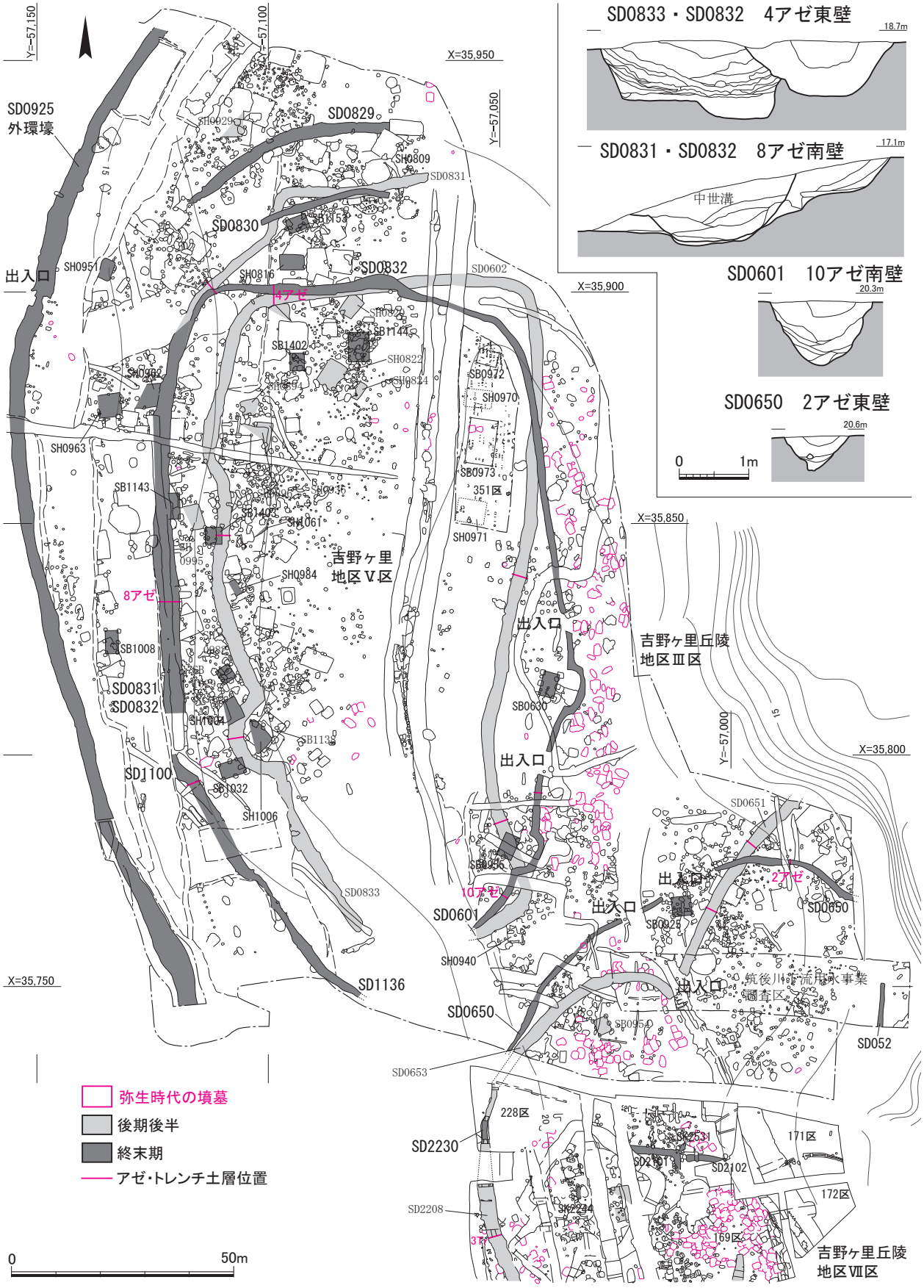


図 168　南内郭・構えの壕　後期後半～終末期の遺構の分布（1/1,200）・環壕、溝土層（1/80）

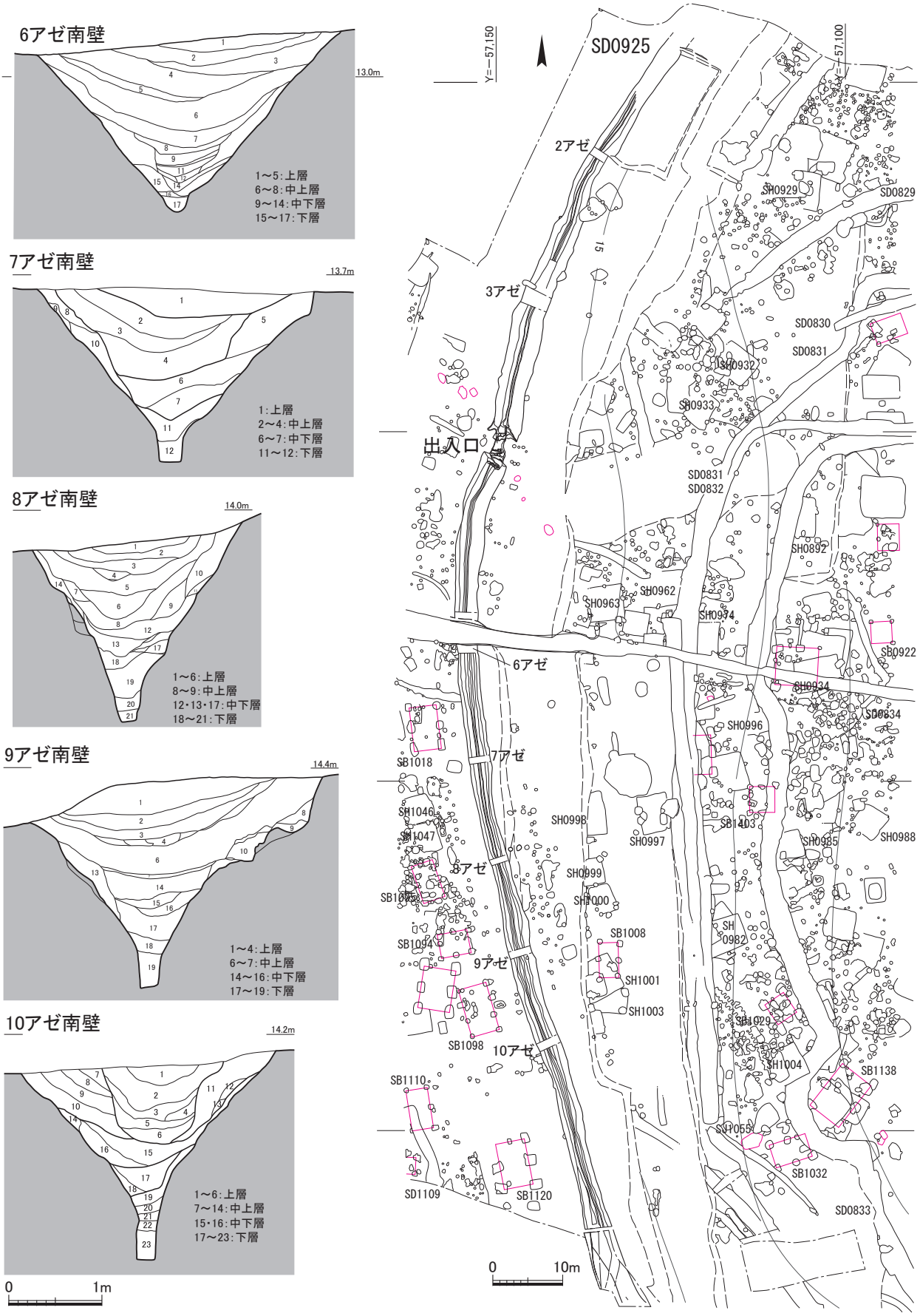


図 169　吉野ヶ里地区Ⅴ区　SD0925 外環壕とその周辺（1/800）・土層断面（1/60）

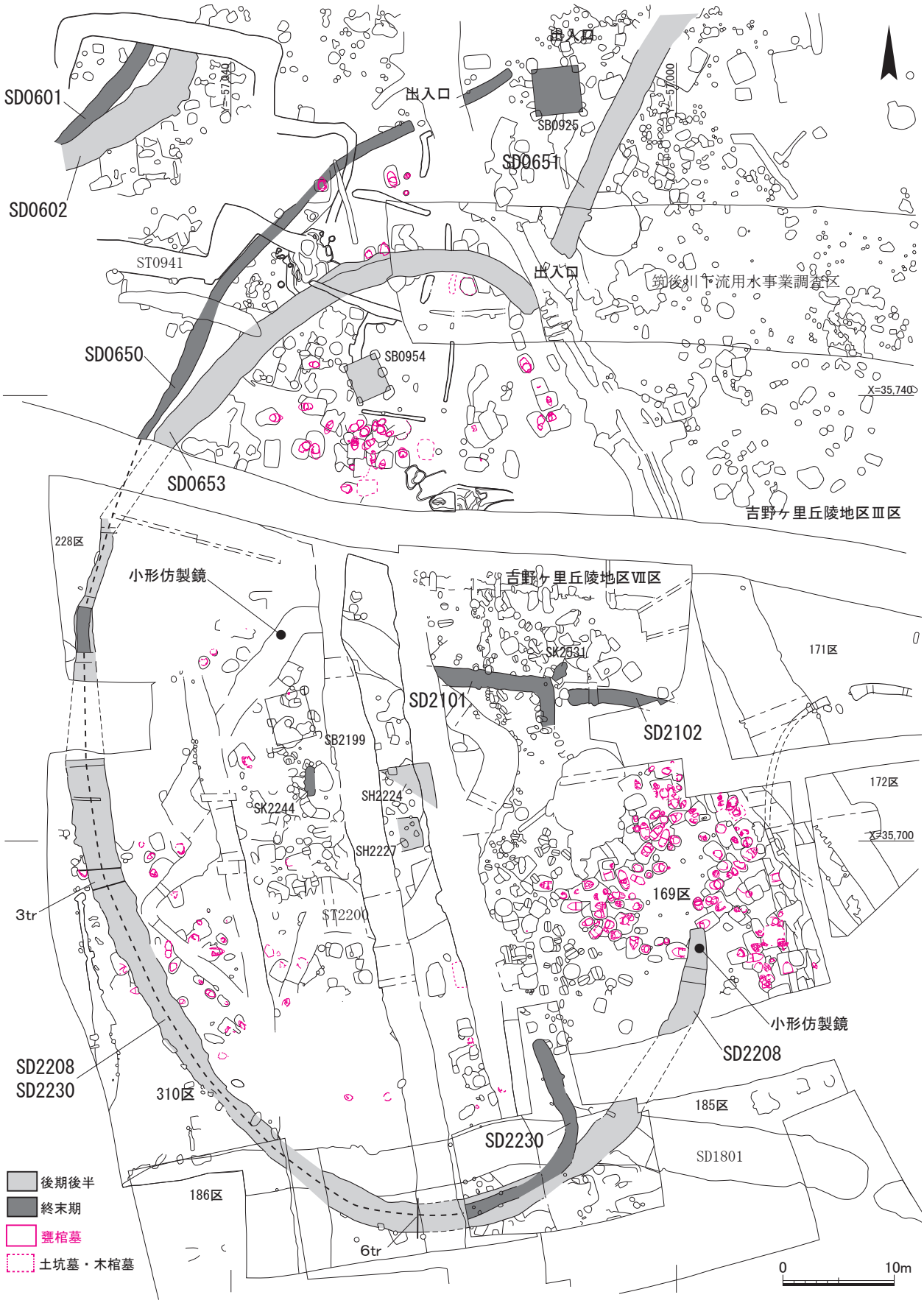


図 170　吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区南部・Ⅶ区北部（構えの壕）　後期後半～終末期の遺構の分布詳細（1/500）

も柱穴跡が多数確認されていることから、実際の建物数はさらに多かった可能性が高い。掘立柱建物跡63棟の構造は、1間×1間が27棟、1間×2間が33棟、1間×3間が1棟で、このほかに2間×2間の総柱建物が1棟、2間×3間の総柱建物が1棟ある。

掘立柱建物群の分布状況をみてみると、SD1109溝とSD0925外環壕の間に南北方向にほぼ直線的に展開する4棟（SB1018、SB1095、SB1098、SB1120）は、同地区の他の建物に比べて規模がやや大きい。このため、SD1109溝は掘立柱建物群を何らかの理由で区画する溝として機能していたと考えられる。また、SD1109溝の西側に展開する掘立柱建物群の分布状況をみると、建物が集中する部分と、ほとんど分布しない部分が認められ、後者は意図的に設けられた空白地（広場）であった可能性がある。

このように、本区域に展開する掘立柱建物群は、単なる倉庫群の集合体ではなく、各建物の意味や機能等に応じて規格的に配置されていたと考えられる。また、高床倉庫群とともに展開する竪穴建物は、

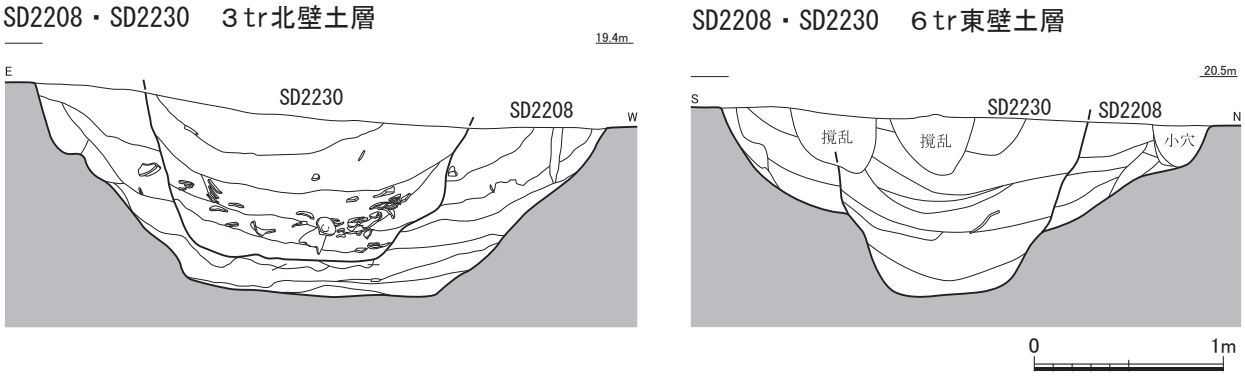


図171　弥生時代終末期の「構えの壕」土層（1/40）

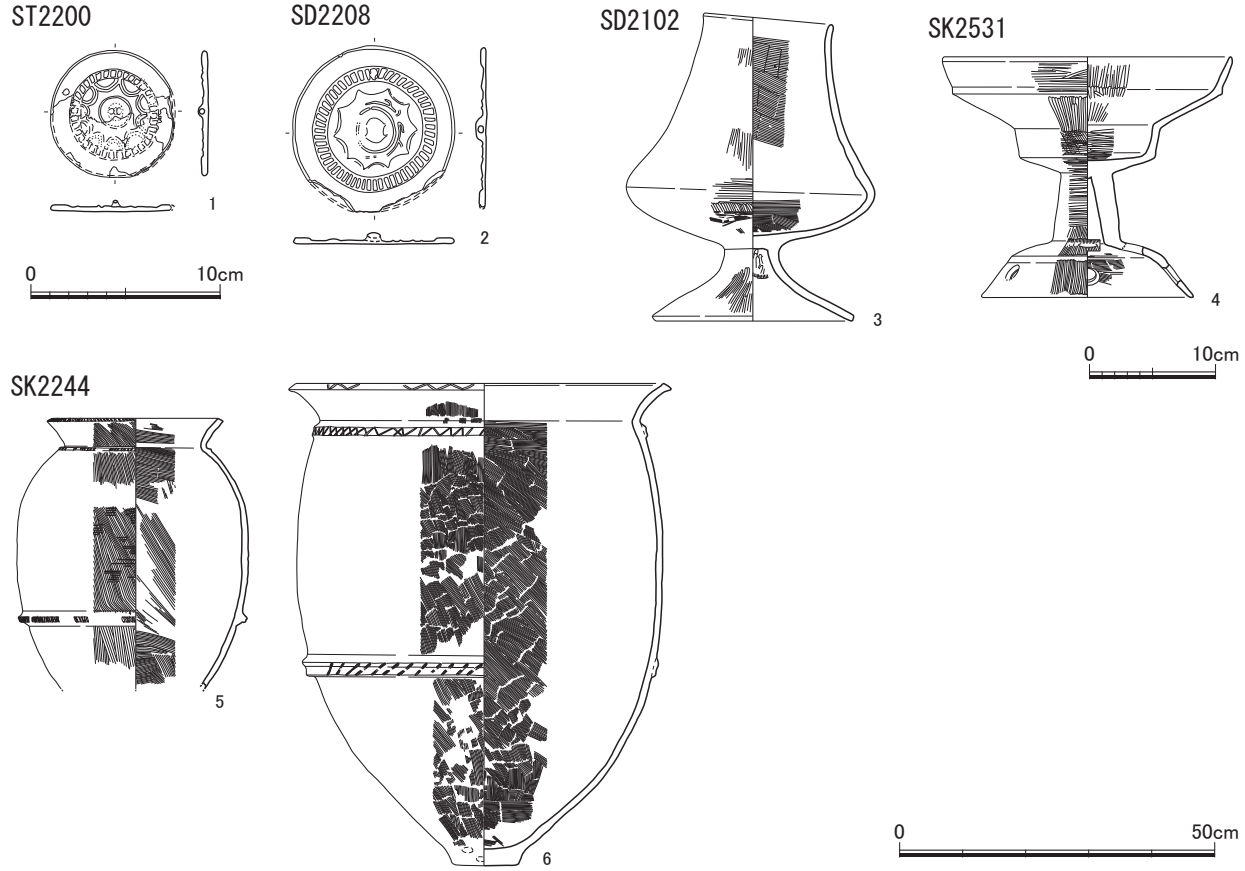


図172　終末期の「構えの壕」出土遺物（銅鏡1/4, 土器1/6,1/12）

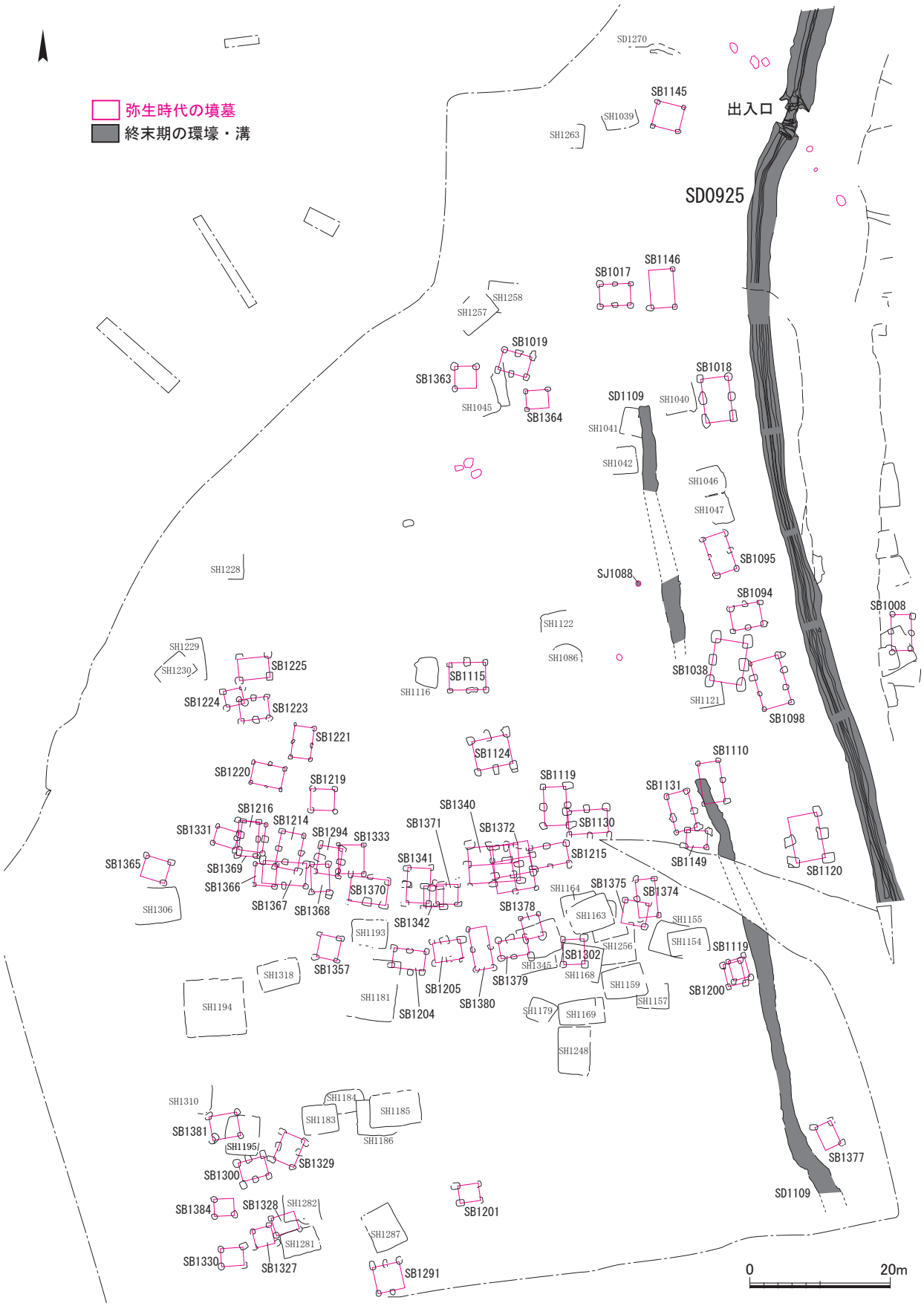


図 173　吉野ヶ里地区Ｖ区西部　遺構の分布略図（1/800）

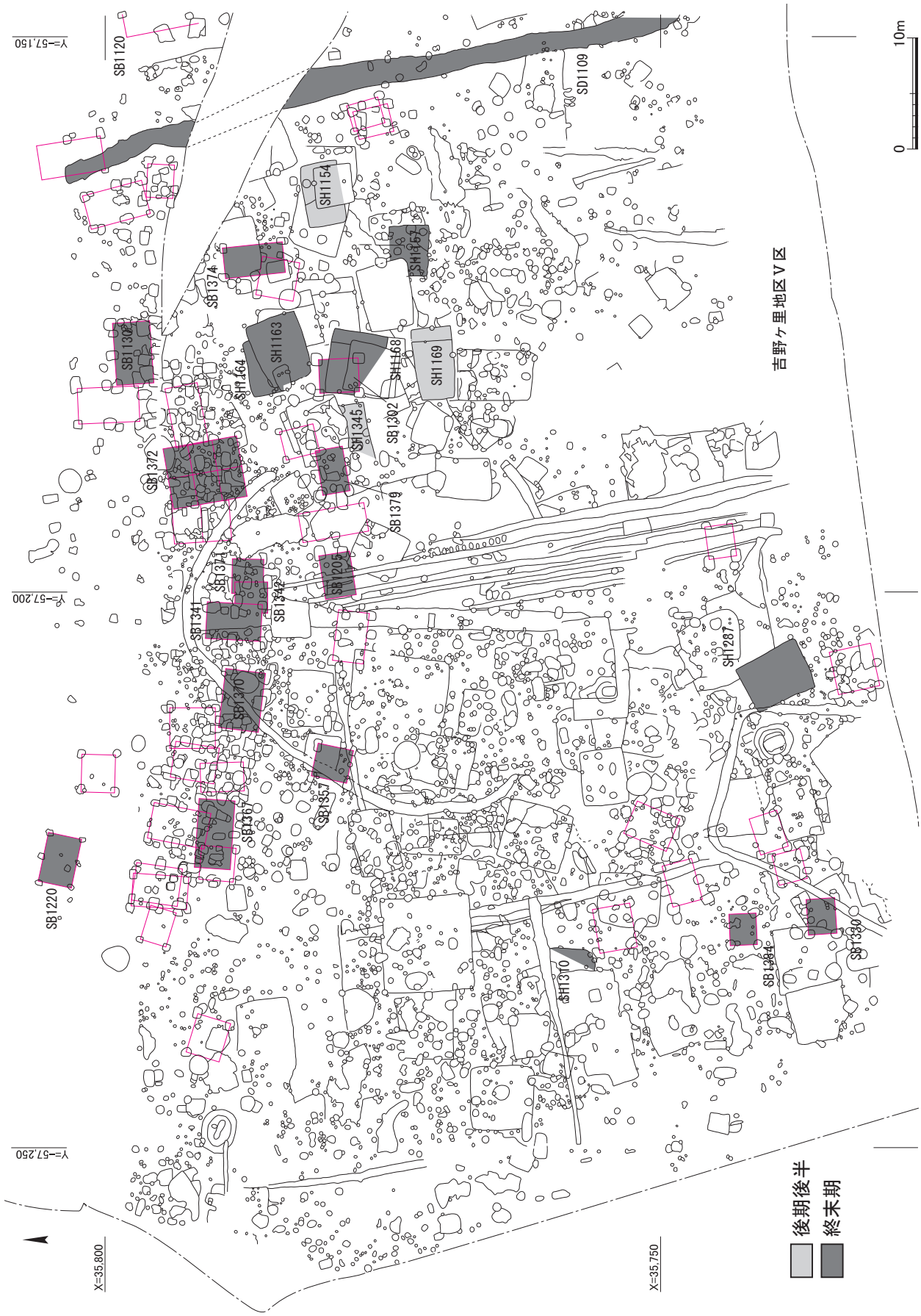


図 174　吉野ヶ里地区Ⅴ区西部南側　遺構の分布詳細（1/500）

図 175　吉野ヶ里地区Ⅴ区西部北側　遺構の分布詳細（1/600）

本区域中央付近に密集する掘立柱建物群の南側に展開しているが、一部で遺構の重複が見られることから、終末期の竪穴建物の数は少なかったと考えられる。さらに、本区域南端に位置するSH1287竪穴建物跡は、出土土器に古墳時代前期初頭のものが含まれる。詳細は次項で触れるが、本区域の集落遺構の一部は弥生時代終末期で終焉せず、古墳時代前期初頭まで継続していたことがうかがえる。このほか、調査区中央北で終末期の小型甕棺墓が1基（SJ1088）確認されている（『214集』）。

北内郭の形成

終末期の遺跡中央部では、吉野ヶ里丘陵地区Ⅵ区で新たに2重環壕区画（北内郭）が形成されることが特筆される。後期後半の項でも触れたように、Ⅵ区では中期末から後期後半にかけて竪穴建物と掘立柱建物からなる集落域が展開しているが、終末期に北内郭が形成されることにより、南内郭とともに外環壕内部に展開するもうひとつの拠点的な環壕区画として成立する（図177,178）。

北内郭を形成する2重環壕の外側のSD1101壕は、部分的に掘り直しが確認されていることから、重複部分をSD1101、古い環壕をSD1162、新しい環壕をSD1163としている（『207集』）。外壕の平面形は内壕と同様にA字状を呈すると推定されるが、突出部が明確なのは北東部のみで、南東部は削平等のため明らかでない。なお、地形的に本区域の東側は段丘崖状を呈しており、本区域全体が南東部に向かって緩やかに傾斜している。

北内郭の内壕は、南内郭の環壕と同様に突出部を有し、平面A字形状を呈する。溝の断面形はいずれも底面が幅広い逆台形を呈する（図178）。2重環壕の内壕にみられる4ヶ所の突出部の内側には、いずれも1間×2間の掘立柱建物が営まれており、南内郭と同様に物見櫓としての機能が想定される。

北内郭で特筆されるのは出入口部分の構造である。2重環壕の南西部には壕の掘り残しによる陸橋部が左右にずらして設けられており、鍵型に折れ曲がる柵列跡が検出されている。陸橋部の幅は約3～4mであるが、柵列に囲まれた最も狭い部分は幅約1mと非常に狭いことから、一度に多くの人間が通り抜けることが困難なつくりになっている。終末期の北内郭一帯では竪穴建物が複数展開しているが、環壕区画の内部に営まれている竪穴建物は1棟のみ（SH1113）である。このほか、環壕区画の内部に位置する施設として特筆されるのが、SB1194大型掘立柱建物跡である（図179）。SB1194の構造は3間×3間の総柱、規模は梁行12.3mの柱間4.1m、桁行12.7mの柱間4.33mで、柱穴土層に残る柱の大きさ0.38～0.5mである。柱穴の規模や構造から、重量のある上部構造が存在したと推定される。SB1194大型掘立柱建物跡の主軸は南北方向で、北側に約200m離れたST1001北墳丘墓の南北の軸線と一致することから、中期前半代に築造されたST1001北墳丘墓を意識して建物が築造されたと考えられる。また、突出部を有する2重環壕に囲まれていること、出入口が1か所しかなく、鍵型を呈すること、終末期の環壕区画内部には竪穴建物が1棟しか営まれていないこと、といった構造的な特徴は、北内郭が閉鎖的な性格を持つ施設であったことをうかがわせる。SB1194大型掘立柱建物跡は、北墳丘墓に対する祭祀行為（祖先祭祀）が執り行われた施設であった可能性が高い。柱穴出土土器から、SB1194の築造時期は弥生時代終末期新相とみられ、2重環壕区画が成立した後に築造されたと考えられる。

終末期の遺跡北部

終末期の遺跡北部では、大曲一の坪地区、志波屋四の坪地区、志波屋六の坪（乙）遺跡でそれぞれ

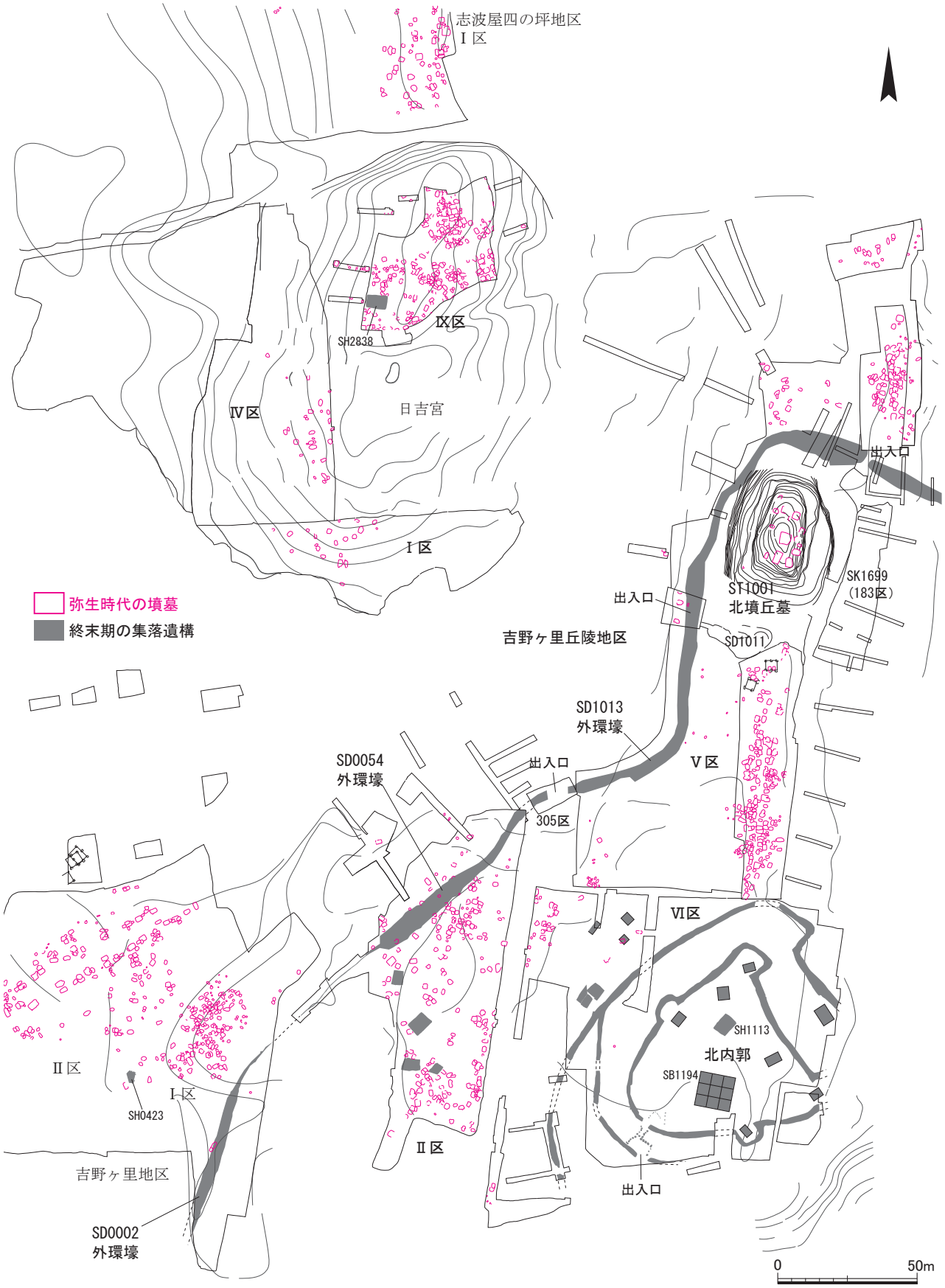


図 176　遺跡中央部　弥生時代終末期の遺構分布略図（1/2,000）

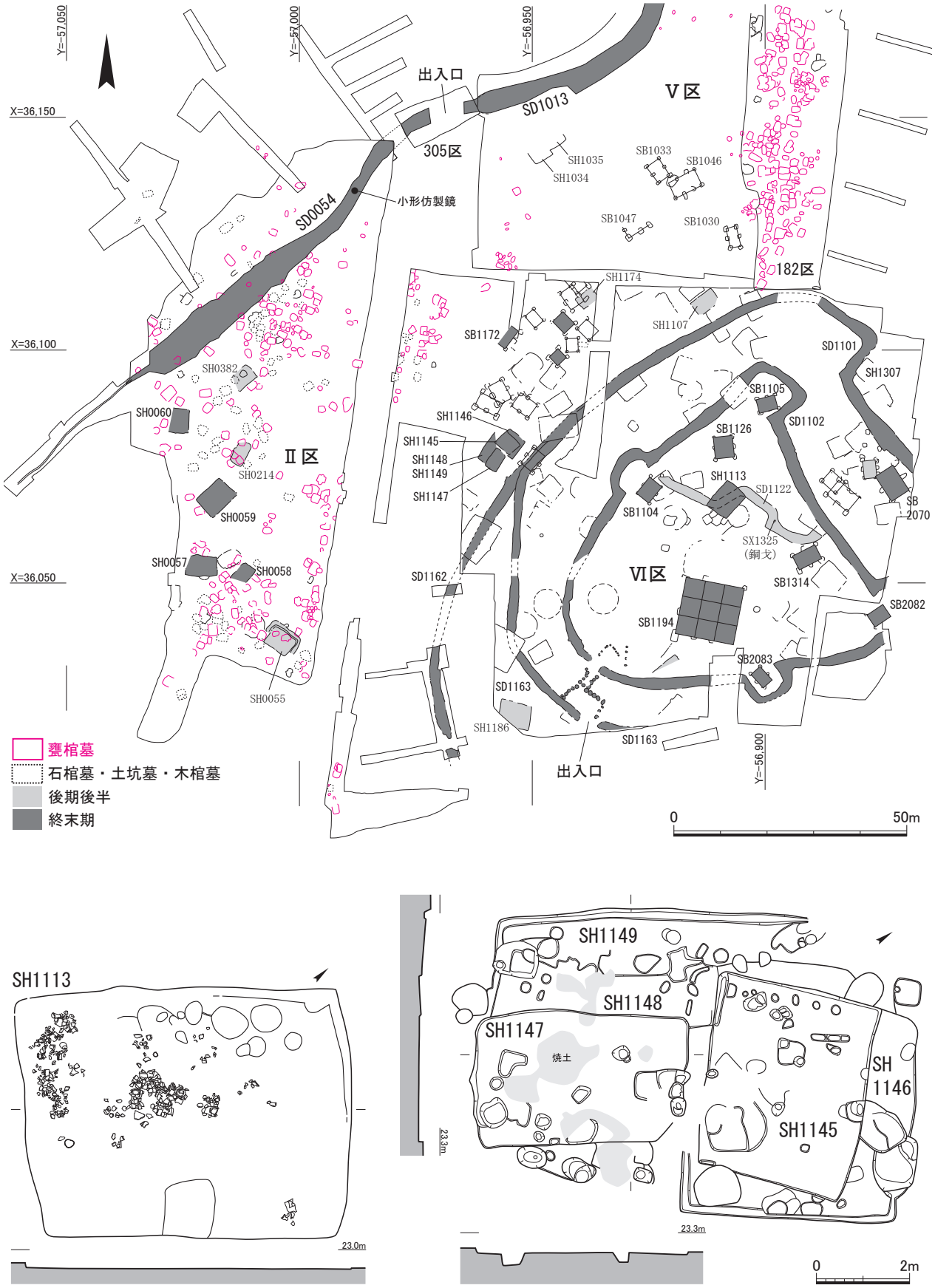


図 177　吉野ヶ里丘陵地区 II・VI区　後期後半～終末期の遺構の分布（1/1,200）・終末期の竪穴建物跡（1/120）

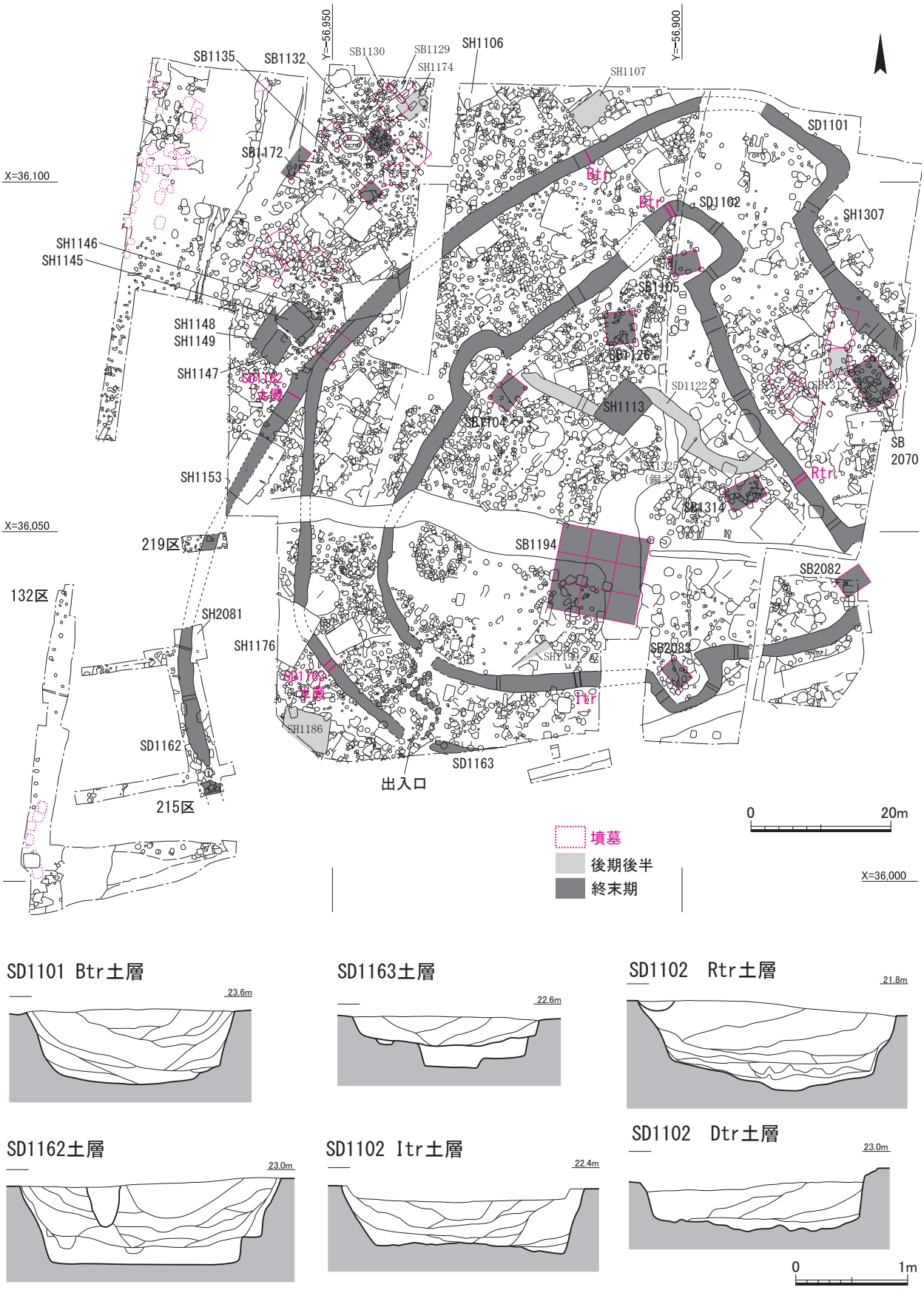


図 178　弥生時代終末期の吉野ヶ里丘陵地区Ⅵ区（北内郭）遺構の分布（1/800）・溝土層（1/50）

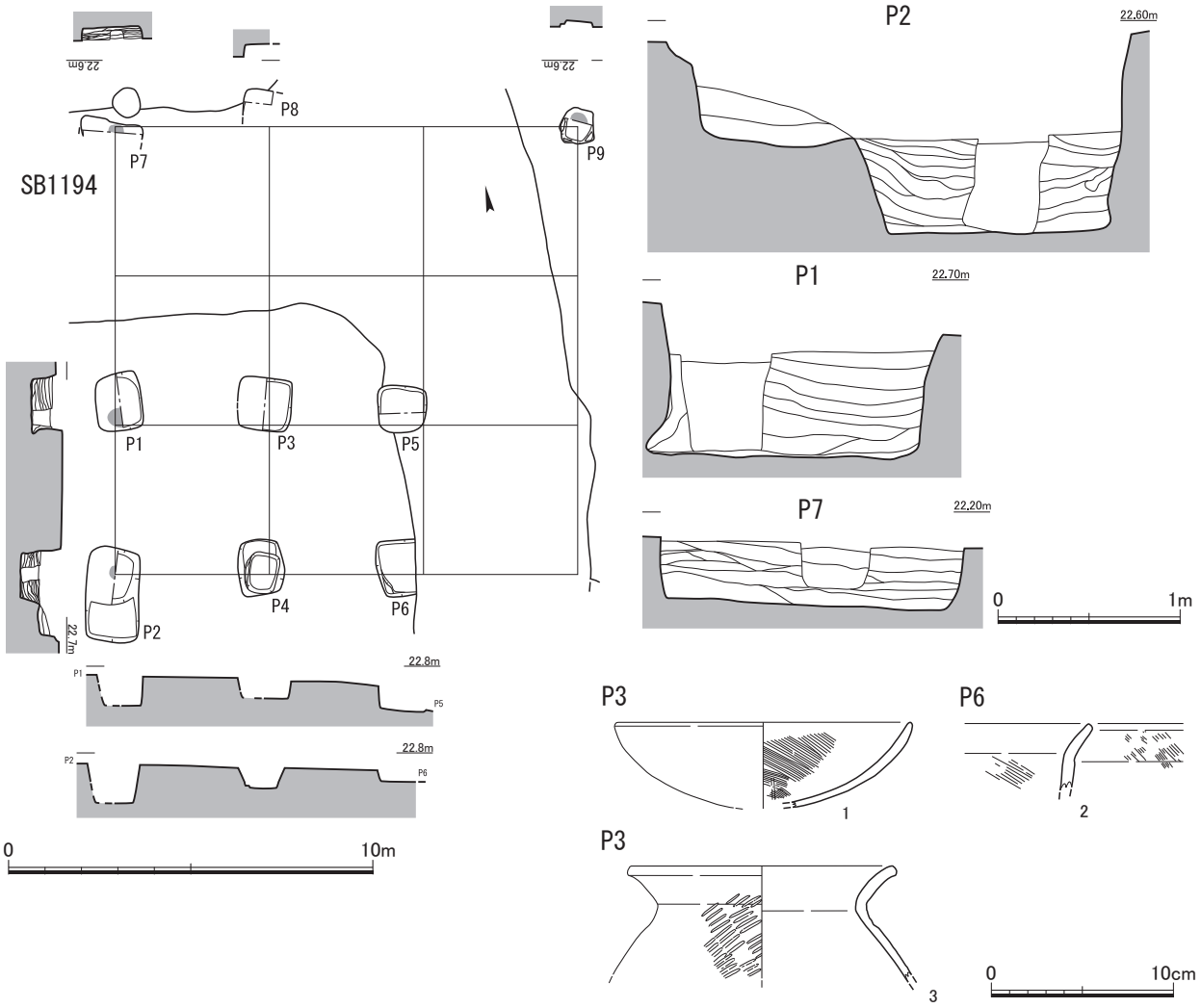


図 179　吉野ヶ里丘陵地区Ⅵ区　SB1194 大型掘立柱建物跡（1/200）・柱穴土層（1/40）・柱穴出土土器（1/4）

集落が展開している（図 180）。志波屋四の坪地区では、後期後半から竪穴建物の数が増加しており、終末期にはⅠ区北部からⅡ区にかけての東西約 140m、南北約 170m の範囲に長方形竪穴建物約 30 棟からなるまとまった集落が形成されている（図 181）。特に、Ⅱ区 370 調査区 SH1541 や、398 調査区 SH2253 のような長軸 7 ～ 8m の大型の建物も存在し（図 182）、内部構造は両側もしくは内面周囲にベッド状遺構を伴うものが多い。なお、竪穴建物の近くに展開する掘立柱建物の一部も、終末期の集落に属すると考えられる。特徴的な遺物として、Ⅰ区 SH0544 建物跡から漢鏡片が、Ⅰ区 SH0528 建物跡から完形の鋳造鉄斧と鉄鋤先が、Ⅱ区 SH2253 建物跡の角部付近のベッド状遺構上面からほぼ同形同大の鉄鏃 2 点が出土している（図 182,183）（『207 集』、『211 集』）。遺構の状況や出土遺物などからみて、環壕から離れた集落であるものの、一般的な集落とは異なる性格を持っていた可能性がある。

終末期の大曲一の坪地区では、埋納された状態で出土した福田型銅鐸が特筆される。銅鐸の埋納地点は、外環壕の北端から北に約 460m 離れた、志波屋・吉野ヶ里段丘の東側裾部と田手川に挟まれた標高約 14m の低位段丘上である。銅鐸は、大曲一の坪地区の埋没谷とみられる黒色土を切り込む小穴から、鈕部分を下に向けた倒置状態で出土した（『152 集』）。なお、周辺では終末期の遺構として竪穴建物 2 棟（SH0074・SH0114）が確認されているほか、埋没谷や周辺のトレンチから終末期を中心とする

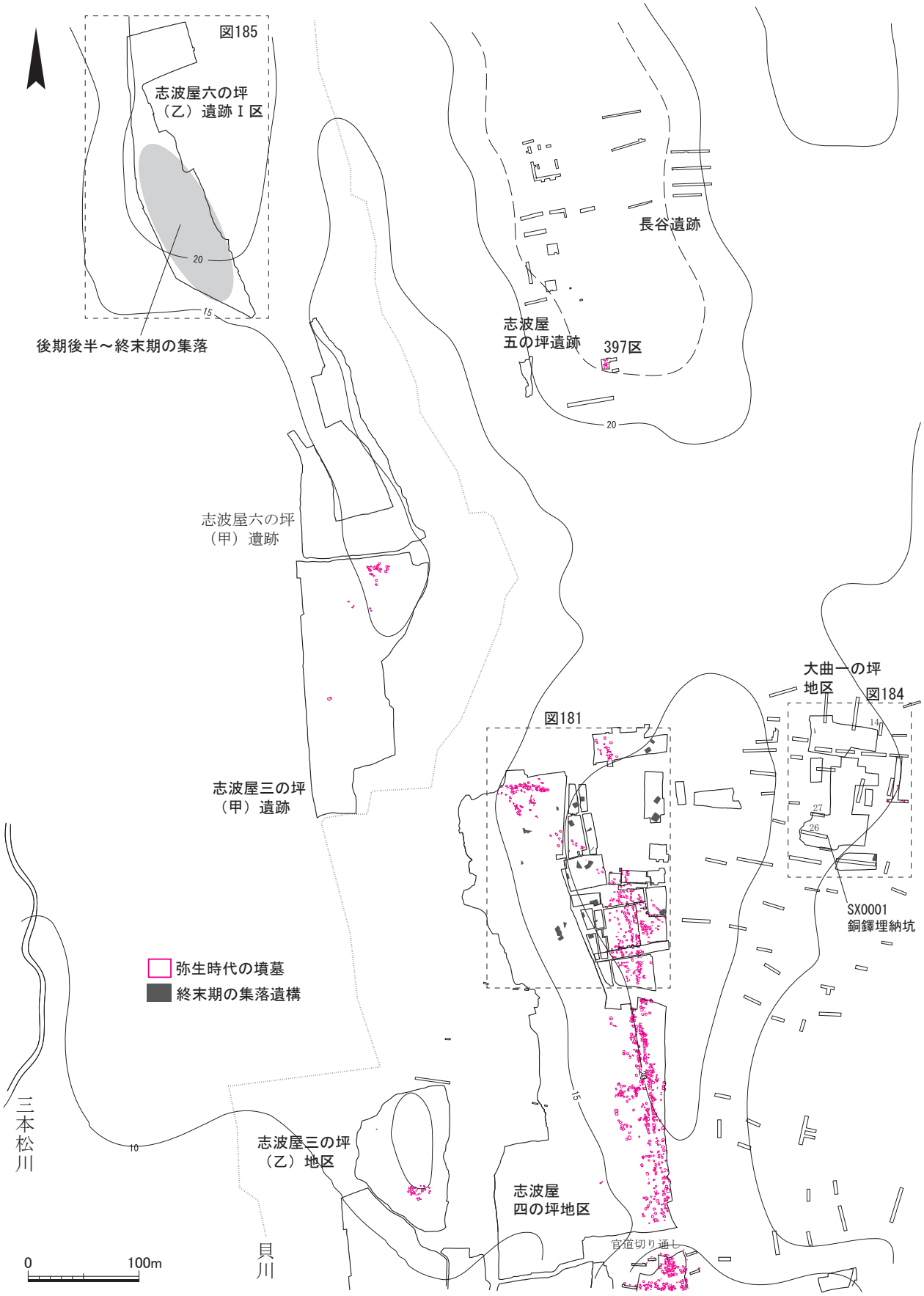


図 180　遺跡北部～北端部　調査区・遺構の分布略図（1/5,000）

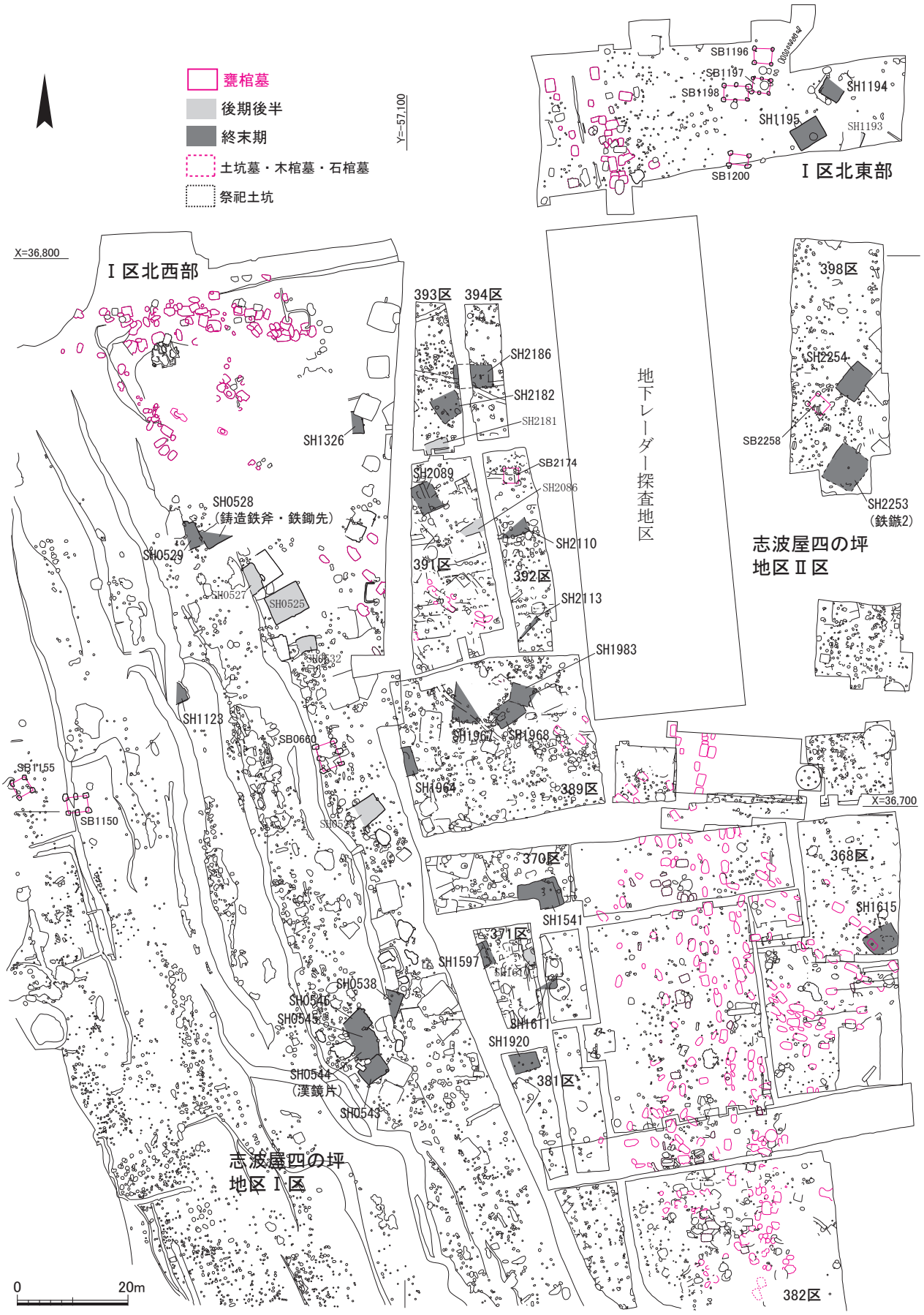


図 181　志波屋四の坪地区Ⅰ区北部・Ⅱ区　後期後半～終末期の遺構の分布（1/1,000）

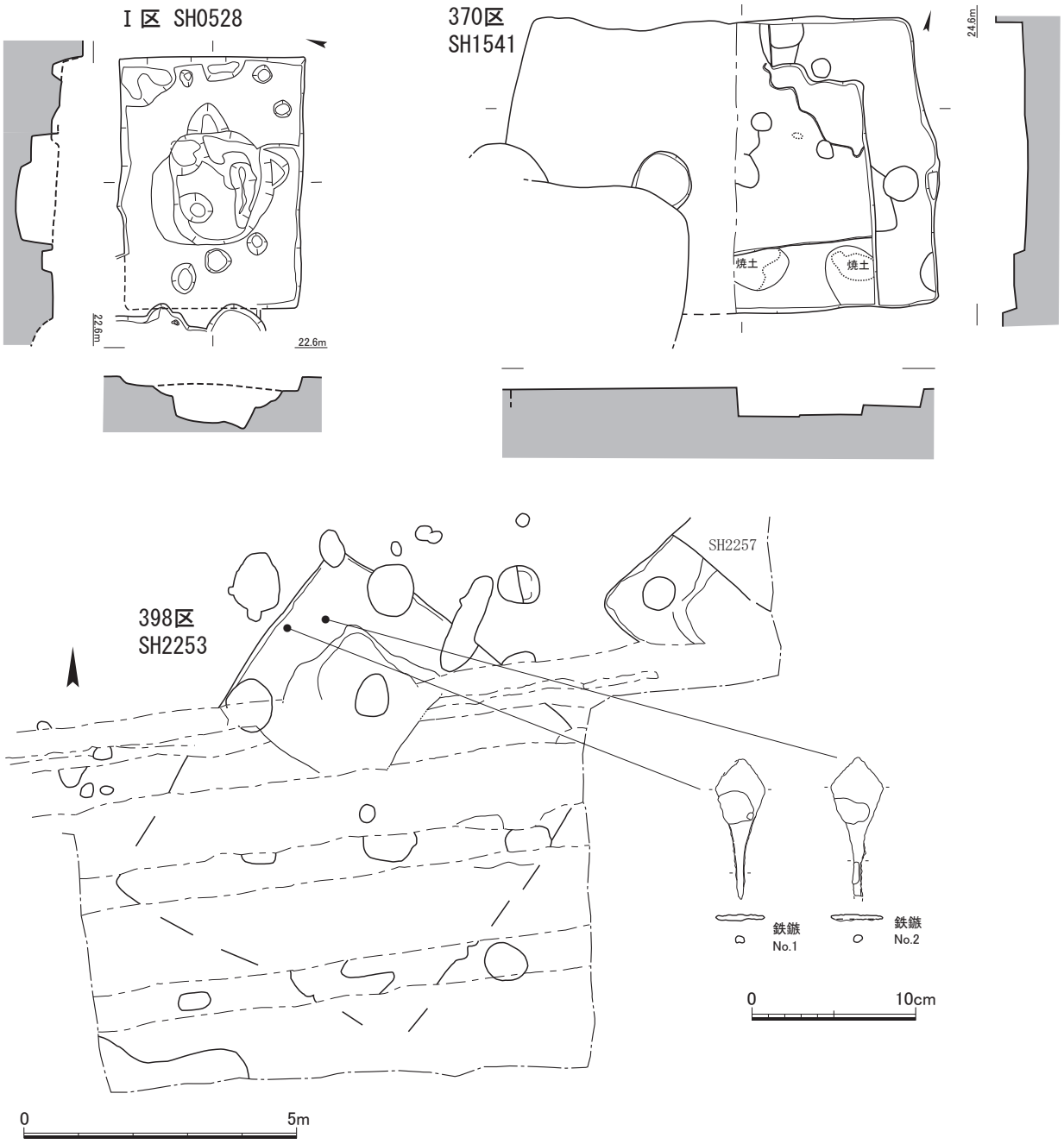


図 182　志波屋四の坪地区Ⅰ・Ⅱ区　弥生時代終末期の竪穴建物跡（1/120）・出土遺物（1/4）

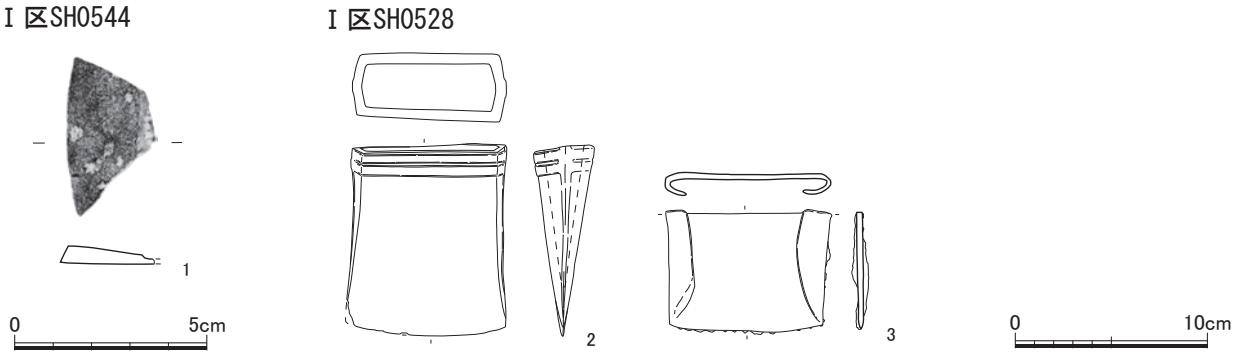


図 183　志波屋四の坪地区　終末期の主な遺物（1/2,1/4）

土器がまとまって出土している（『152 集』、『172 集』）。これらのことから、本区域一帯に終末期の集落が展開していた可能性がある。このほか、SK0004 土坑と 27 トレンチ包含層から免田式壺の胴部片が、14 トレンチ包含層から山陰系の鼓形器台が出土している（図 184）。

遺跡北端部に位置する志波屋六の坪（乙）遺跡は、これまで概要報告しかなされていないが、後期前半～終末期の集落遺構として竪穴建物跡 74 棟、掘立柱建物跡 31 棟、井戸跡 1 基が確認されており、まとまった規模の集落が展開している（図 185）（『113 集』、『207 集』）。特に、調査区南部に位置する SE0139 は本遺跡全体で唯一の弥生時代の井戸で、出土土器から後期後半に属するとみられる。特徴的な遺物として、SH0038 建物跡から手焙形土器（図 186-5）が出土しているほか、竪穴建物跡を中心に鉄鏃、鉄刀子、袋状鉄斧などの鉄器が 10 点程度出土している（『207 集』）。集落遺構の数に対する鉄器の数量は、遺跡中央部の環壕内側の集落域に比ると少ないが、完形の素環頭付鉄刀子や端部折り返しの袋状鉄斧などは注目される。また、破片や未成品を含む石庖丁が 18 点、竪穴建物跡を中心に出土しており、なかでも SH0040 建物跡からは完形品が 3 点まとまって出土している。なお、志波屋六の坪（乙）遺跡の詳細については、未報告資料の整理作業を進め、いずれ正式報告を行う予定である。

（4）弥生時代後期の調査成果と課題

後期の集落と墓地の展開過程

主に遺跡南部の段丘上に展開していた中期後半までの中心的な集落域は、中期末には北側の吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区から吉野ヶ里地区Ⅴ区東部にかけての区域へと移動しており、後期前半にかけて新たに中心的な集落域が展開するようになる。外環壕全体は後期前半のうちに形成されたとみられ、中心的な集落域全体を取り囲む環壕集落が成立する。ただし、外環壕の範囲、特に東側と南側についてはいまだ明らかになっておらず、今後さらに詳しい検討が必要である。

後期の墓地では、甕棺墓が後期前半（三津式期）で基本的に終焉する。後期前半まで甕棺墓が残る地区としては、遺跡中央部の吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区、遺跡北部の志波屋四の坪地区などがある。なお、甕棺墓以外にも土坑墓や石棺墓が営まれているが、所属時期が明確なものは少ない。特に、甕棺墓が終焉した後の後期後半～終末期については、明確な墳墓がほとんど確認されておらず、そもそも当該期の墓地が存在したかどうかも明らかでない。吉野ヶ里遺跡の周辺では、二塚山遺跡、三津永田遺跡、横田（松原）遺跡、松葉遺跡などのように中期後半から後期後半にかけての厚葬墓が相次いで形成されており、漢式鏡や舶載の鉄製武器などが数多く出土している。弥生時代中期から後期にかけて、神埼地域の首長墓が吉野ヶ里遺跡から二塚山遺跡、三津永田遺跡へと移動したという見方（岡村 1999）に対し、後期には地域社会全体のなかの有力集落からクニの首長が共立されたという考えもある（七田 2010）。このように、吉野ヶ里遺跡における後期の集落に対応する墓地の有無確認や実態解明については、周辺遺跡の様相や地域の動向なども含めて今後検討すべき課題といえる。

後期後半になると、外環壕内部のほぼ中央部分にあたる吉野ヶ里丘陵地区Ⅲ区・吉野ヶ里地区Ⅴ区東部の中心的な集落域に新たに環壕区画（南内郭）が形成されるとともに、その南東部には弧状の壕（構えの壕）が形成され、環壕集落の内部構造が複雑化する。一方、外環壕の外側では、遺跡北部の志波屋四の坪地区や志波屋六の坪（乙）遺跡のように後期後半から集落の規模が拡大している区域もある。

終末期になると、吉野ヶ里丘陵地区Ⅵ区に新たに 2 重環壕区画（北内郭）が形成されるとともに、

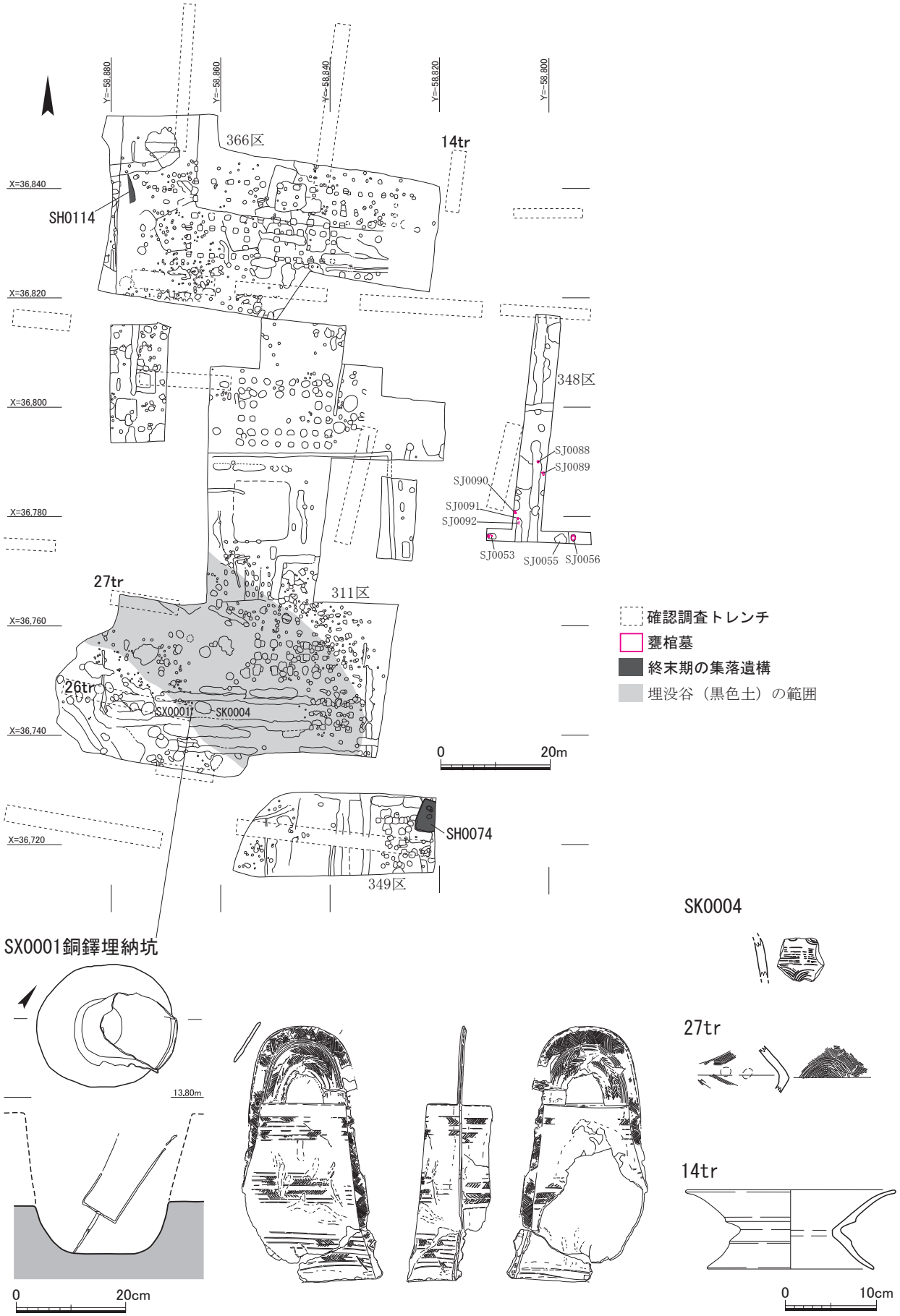


図 184　大曲一の坪地区　遺構の分布（1/1,000）・銅鐸埋納坑（1/10）・出土遺物（1/6）

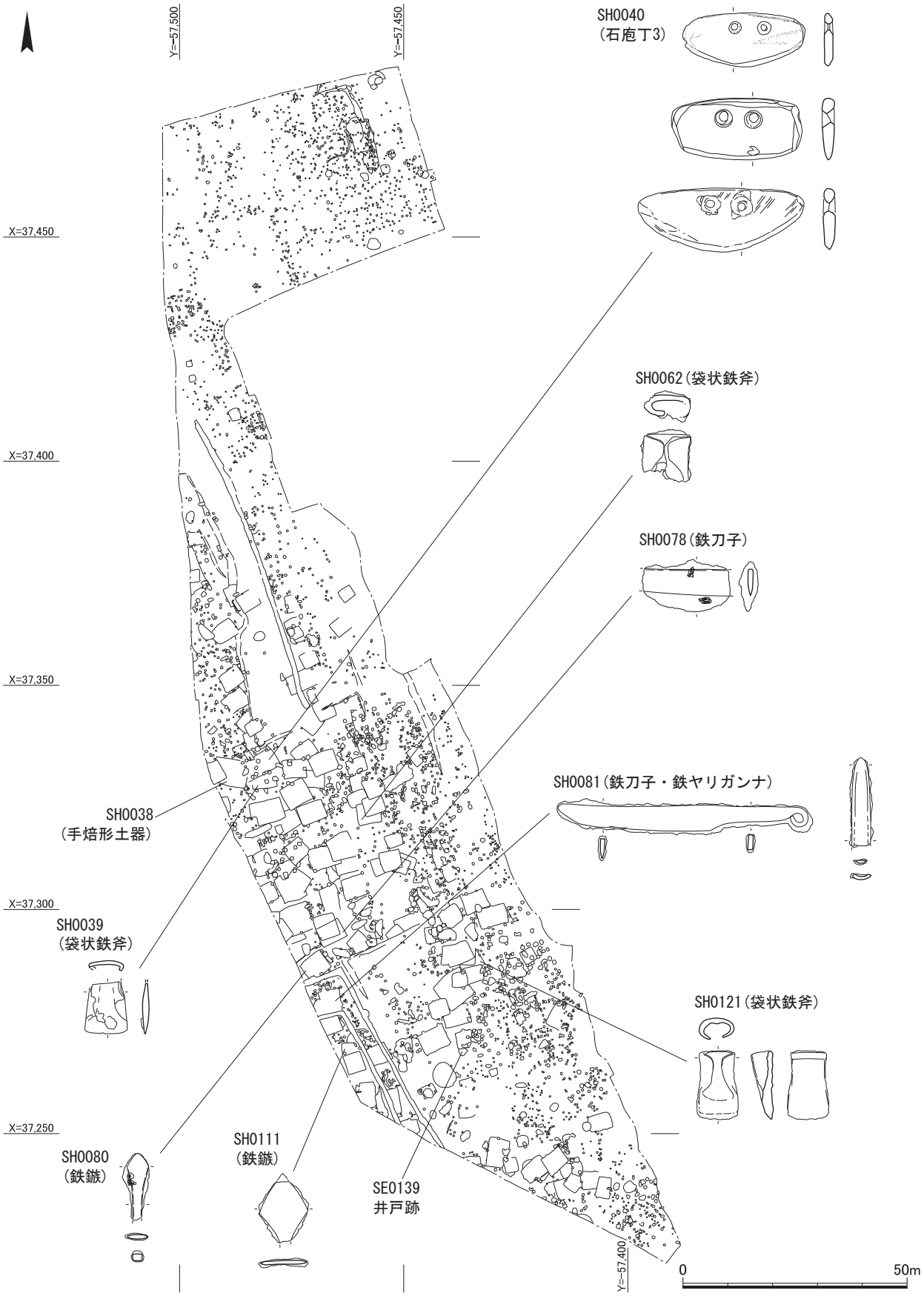


図 185　遺跡北端部　志波屋六の坪（乙）遺跡Ⅰ区　後期～終末期の遺構の分布（1/1,250、遺物 1/4）

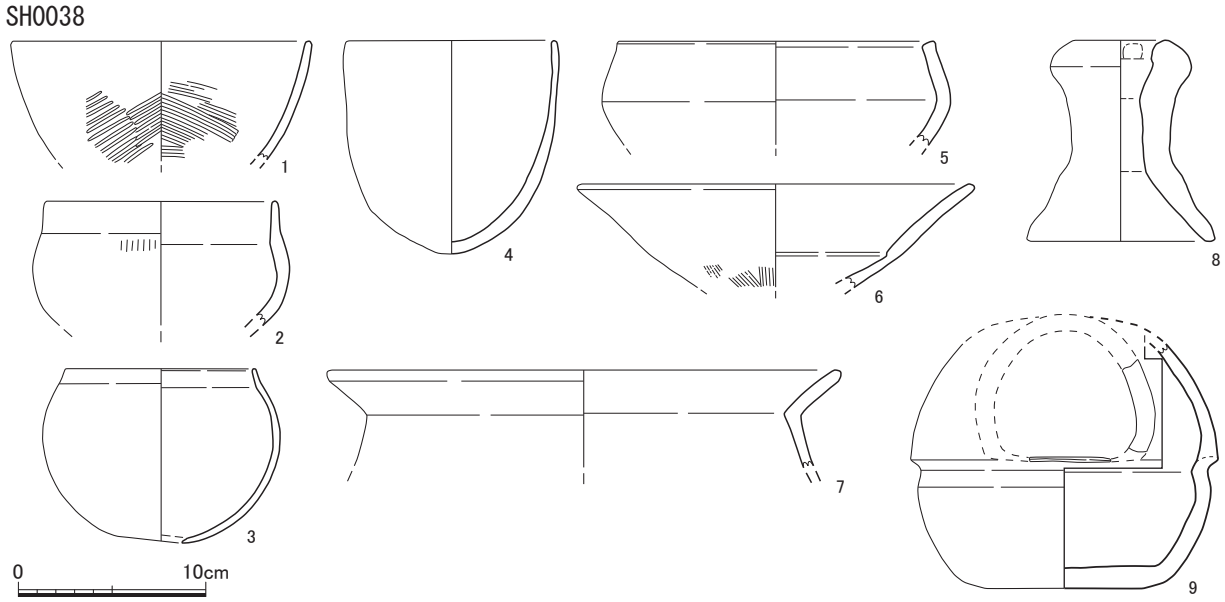


図 186　志波屋六の坪（乙）遺跡　SH0038 竪穴建物跡出土土器（1/4）

南内郭や構えの壕は掘り直されて拡張している。南内郭の内部は、引き続き居住域として利用されている。また、北内郭の築造にあたっては、北側に位置する ST1001 北墳丘墓との南北方向の主軸が意識されており、北内郭の成立後に築造されたと考えられる SB1194 大型掘立柱建物は、主軸方向が ST1001 北墳丘墓と一致していることから、北墳丘墓への祖先祭祀が行われていたと推測される。また、遺跡南端部では、中期前半代に築造された SX0222 盛土遺構の周囲に、終末期になって新たに 2 重の溝が形成されており、溝の埋土から鉄矛が出土していることから、SX0222 盛土遺構に対して何らかの祭祀行為が行われていたと推測される。外環壕内部の北端と南端で、それぞれ中期前半代に築造された盛土遺構に対し、数百年が経過した終末期になって祭祀行為が行われていたことは注目される。

なお、外環壕を含む環壕・溝は、上層から弥生時代終末期（一部は古墳時代前期初頭の土器）が出土していることから、古墳時代前期初頭までには埋没したと考えられる。吉野ヶ里遺跡の集落構造は、弥生時代終末期にようやくすべての施設が出揃い、最も複雑化するが、これらが機能していた期間は長くはなかったと推測される。

南内郭と北内郭の位置づけ

後期集落の構造的な特徴として、外環壕の内側に南内郭と北内郭という 2 つの環壕区画が設けられていることが挙げられる。後期後半に形成される南内郭は、内部に竪穴建物や掘立柱建物が営まれているほか、環壕突出部の内側には物見櫓と推定される建物が展開している。区画内部の竪穴建物は北から西にかけて偏って分布しており、中央から南にかけての遺構の空白地帯は、削平により遺構が消滅した可能性もあるが、意図的に設けられた広場の可能性も考えられる。

一方、南内郭にやや遅れて弥生時代終末期に成立した北内郭は、中期前半に築造された ST1001 北墳丘墓を意識して計画的に設計された祭祀的で神聖な空間であったと位置づけられている（『132 集』）。ただし、時期的にいつごろから北内郭一帯が特別な空間として意識されたのかについては、検討が必要である（『207 集』。出土遺物からみると、南内郭とその周辺では外来系土器が遺跡内で最も多く確認されているのに対し、北内郭一帯ではほとんど確認されていないという違いがある。なお、北内郭一帯

では鉄器が数多く出土しているが、農具・工具が中心であり、武器は鉄剣 1 点と鉄鏃数点のみである。ほぼ全域が完掘された南内郭に対し、北内郭は保存目的調査のため遺構が完掘されていないことも考慮すべきではあるが、このような状況は 2 つの内郭の性格を表している可能性がある。

2 つの内郭の性格と関係性については、南内郭が上級階層の人々の居住区で、北内郭が首長あるいは祭事権者の居住区であると推定されているが（『132 集』）、背景に中国後漢代における都城構造の影響があったという考えが示されている（七田 1996,1997）。一方、蒲原宏行氏は南内郭と北内郭の形成時期が異なることから、それぞれを治める集団が異なっていた可能性を指摘している（蒲原 2002）。これに対し、武末純一氏は北内郭と南内郭を「聖」と「俗」の機能差（「聖」が北内郭で、「俗」が南内郭）として捉えられると指摘している（武末 2002）。

SD0925 外環壕出土の特徴的な遺物

南内郭西側を巡る吉野ヶ里地区Ⅴ区 SD0925 壕跡は、後期の中心的な集落域に近接していることもあり、外環壕全体の中で最も多くの遺物が出土している。ここでは特徴的な遺物の出土状況について簡単にまとめる（図 187 ～ 189）。SD0925 壕跡の 6 アゼ～ 7 アゼ間では、昭和 63（1988）年度の調査で巴形銅器の鋳型片が出土していたが、平成 11（1999）年度に実施した整備に伴う事前の再調査（308 調査区）で、7 アゼの掘り下げ中に上層から新たに巴形銅器の鋳型片が出土し、両者が接合することが判明した（『173 集』）。鋳型から推定される製品は、3 段の載頭円錐形の座に左曲がりの 7 つの脚が付く巴形銅器と判断される（『173 集』、『207 集』）。SD0925 壕跡からは後期前半～終末期にかけての土器が出土しているが、鋳型は後期前半を主体とする土器（図 188）の近くから出土している。また、6 アゼ～ 7 アゼ間と 7 アゼ～ 8 アゼ間から、二つの円が連結したような形が彫り込まれた器種不明の鋳型片がそれぞれ出土しており、接合して完形となる（『113 集』）。彫り込まれた型は類例がなく、作られた製品は明らかになっていない。

巴形銅器鋳型と不明青銅器鋳型は比較的近い位置で出土しており、砥石への転用もほとんどみられないことから、青銅器鋳造に関連する遺構は検出されていないものの、弥生時代後期（前半？）の SD0925 壕の周辺で青銅器生産が行われていた可能性がある（『207 集』）。

このほか、SD0925 壕跡の出入口部分の南側から漢鏡片や小形仿製鏡が、8 アゼ～ 9 アゼ間から深樋式銅剣の切先や朱が付着した石杵が、9 アゼ掘り下げ中に完形の鋳造鉄斧が出土している。これらの特徴的な遺物は環壕出入口部分から 9 アゼにかけての部分に集中している。また、鉄器は外環壕全体で約 60 点出土しているが、このうち約 40 点が SD0925 壕埋土から出土しており特筆される。このほか、9 アゼ中下層からは小型の鉄滓（鍛冶滓）が 1 点出土している（『207 集』）。

SD0925 壕跡から出土した外来系土器（図 189）としては、円形透かし孔を有する瀬戸内系器台（1）、柄部を欠損したジョッキ形土器（2）、山陰系の甕（3）などがある。また、9 アゼ～ 10 アゼ間の上層からは、変容した庄内系甕（筑前型庄内甕〔久住 1999〕）が 3 点出土している（4 ～ 6）。時期的には布留 0 式期に併行するとみられ、環壕の埋没時期を探る上で重要な資料である。

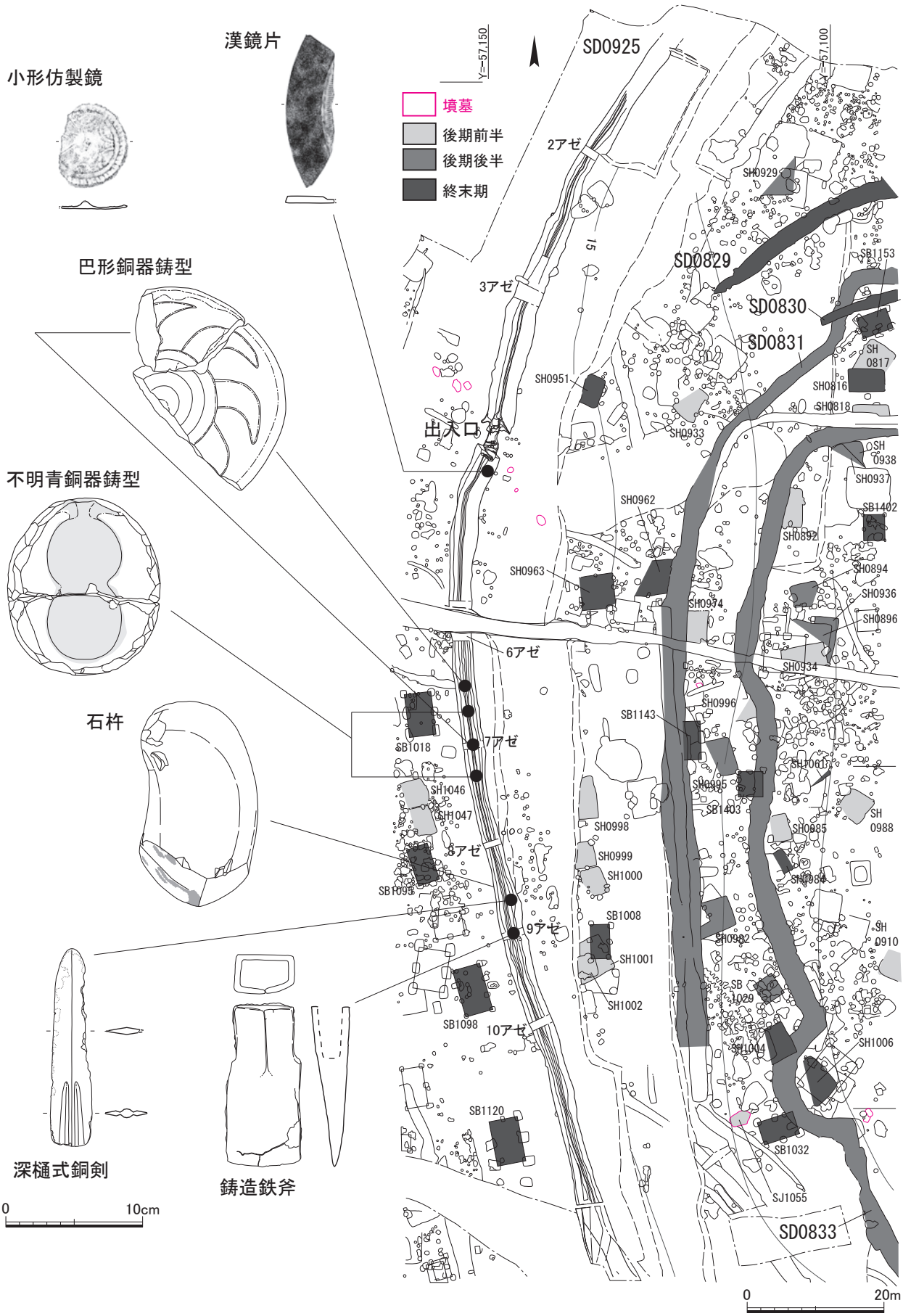


図 187　吉野ヶ里地区Ⅴ区　SD0925 外環壕とその周辺（1/800）・環壕出土遺物（1/4）

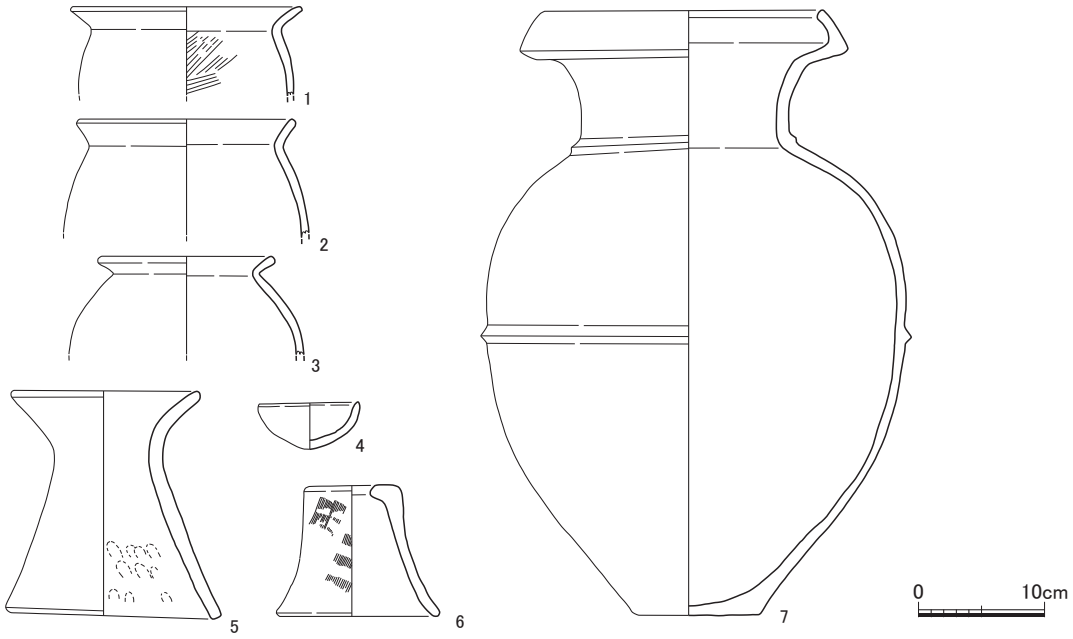


図 188　SD0925　7 アゼ中上層出土土器抜粋（1/6）

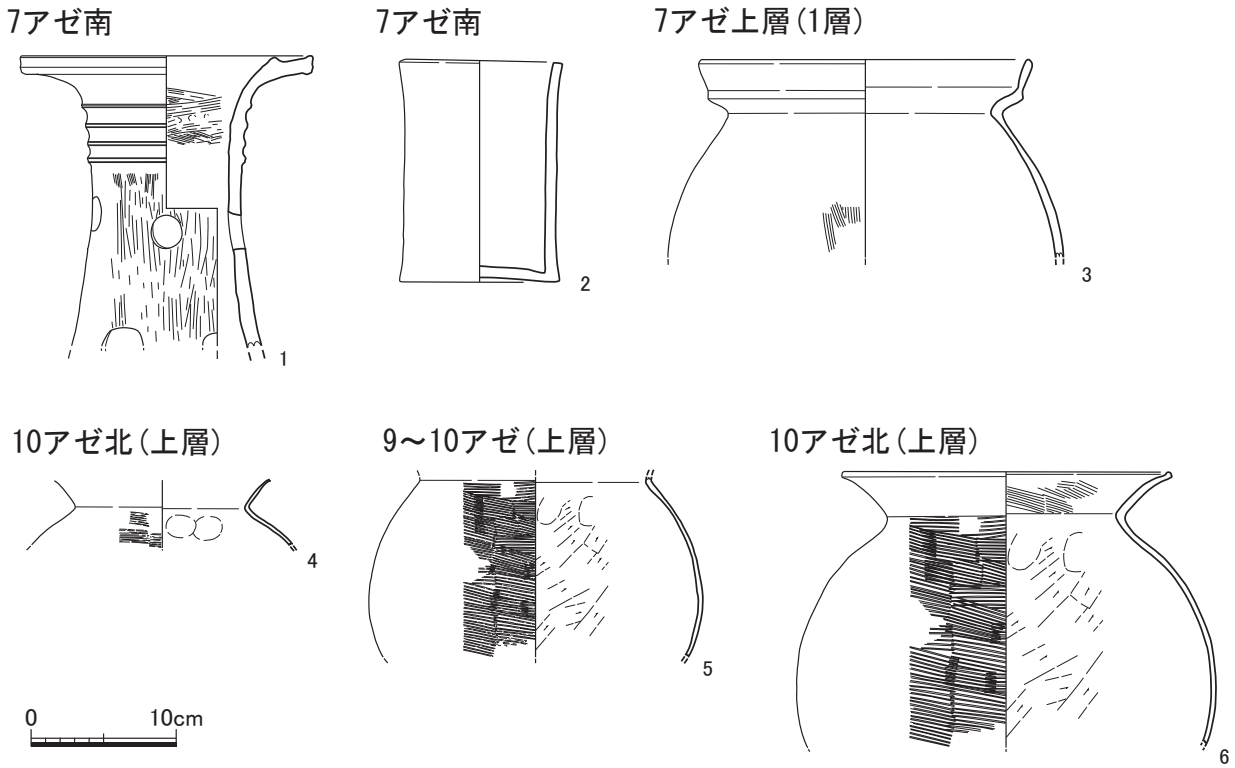


図 189　SD0925 外環壕出土の外来系土器（1/6）

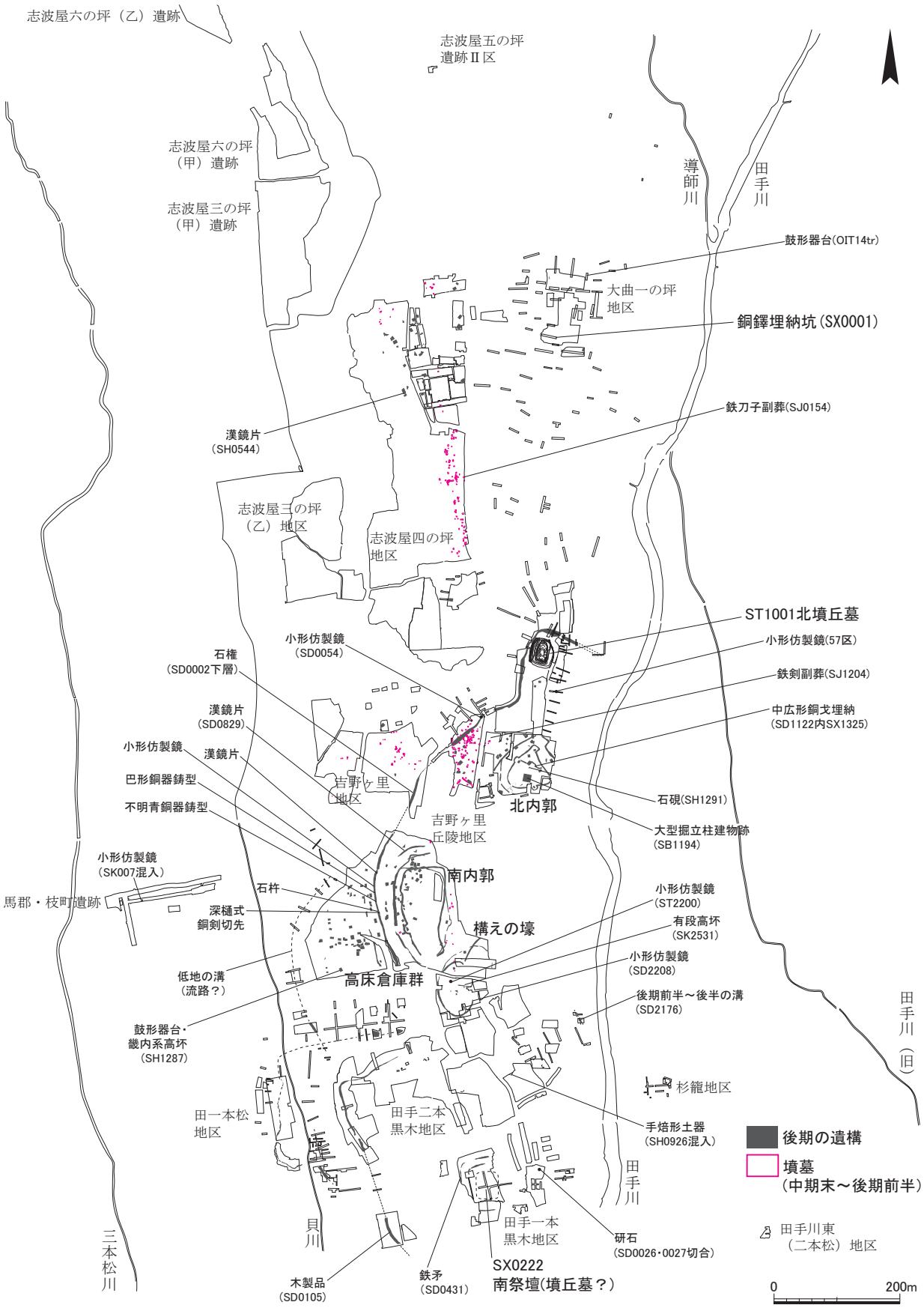


図 190　弥生時代後期　主な遺構と遺物の出土位置（1/9,000）

４．古墳時代前期の集落と墳墓

本項では、古墳時代前期の集落と墳墓の様相について簡単にまとめる。時期区分は、蒲原宏行氏の編年（蒲原 1991,2017）の夕ヶ里式期（布留０式併行期）を前期初頭、土師本村１式期（布留１式併行期）を前期前半、土師本村２式（布留２式併行期）を前期後半とする。

前方後方墳・方形周溝墓と集落の展開

古墳時代前期初頭には、弥生時代後期に形成された外環壕を含む全ての環壕・溝が埋没し、環壕集落としての機能を失ったと考えられる。古墳時代前期の集落は、弥生時代終末期に比べて規模が大幅に縮小しているものの、竪穴建物数棟からなる小規模な集落が志波屋・吉野ヶ里段丘の各所に分散して展開しており、集落としては弥生時代終末期から継続している。ただし、弥生時代後期に中心的な集落が展開していた段丘上面の中央部には、後述するように前方後方墳や方形周溝墓が築造されて墓域となっており、墓域から離れた周辺部分に小規模な集落が点在しているという状況である。

遺跡南部では、弥生時代後期における外環壕内部の中心的な集落域であった南内郭・構えの壕の跡地に方形周溝墓や前方後方墳が築造されており、主軸方向は異なるものの全体的に南北方向に並んで展開している。なお、これらの墳墓群の主体部は削平されており、周溝の一部しか残存していない。

弥生時代後期後半から終末期にかけて中心的な集落域として機能していた南内郭の跡地一帯では、南東部で前方後方墳２基（ST0941・ST0942）と方形周溝墓３基（ST0825・ST0826・ST0924）が築造されている。前方後方墳２基は南内郭の壕の上面を切り込んで形成されており、いずれも周溝の一部しか残存していない。規模は ST0942 が長さ 21m、幅 19m、ST0941 が長さ 28m、幅 23.5m である。

南内郭の南東に位置する構えの壕では、埋没した壕の内側に ST2200 前方後方墳が形成されている。規模は長さ 34m、幅 28m で、後方部の周溝が弥生時代終末期の SD2101 溝を切って掘削されている。ST2200 の周溝内からは、弥生時代後期の土器が一部混入しているが、古墳時代前期初頭の土器とともに西部瀬戸内系とみられる大型壺なども出土している（図 194-5）。出土土器からみて、ST2200 は本区域一帯の前方後方墳・方形周溝墓群のなかで最初に形成されたと考えられる。土器以外には、後方部の周溝北西部から小形仿製鏡（図 173-1）や袋状鉄斧、鉄鏃などが出土している（『160 集』、『207 集』）。

南内郭の西方に位置する吉野ヶ里地区Ｖ区西部は、弥生時代後期後半～終末期にかけての掘立柱建物群が密集することから、集落全体の高床倉庫群として機能したと考えられる区域である。所属時期が明確でない建物が多いが、一部の建物は古墳時代前期に属する可能性がある。古墳時代前期初頭には、Ｖ区西部の南西部に竪穴建物が４棟展開しているが、特に SH1194 方形建物跡は長軸 8.58m、短軸 8.18m と大型で、内部構造は両側にコの字形のベッド状遺構を伴う。SH1194、SH1181 の２棟は主柱穴が４本あり、弥生時代終末期の竪穴建物の構造から変化している。また、SH1287 建物跡からは、古墳時代前期初頭の多量の土器とともに山陰系の鼓形器台や畿内系高坏などが出土している（図 195）。

遺跡南部の段丘上面には、ST0325 方形周溝墓と ST0568 前方後方墳が主軸方向を合わせて南北に並んで築造されている（図 196）。ST0568 は長さ 44m、幅 33m の大型の前方後方墳で、周溝埋土からは古墳時代前期前半の土器とともに鉄鎌やガラス小玉が出土している（『222 集』）。ST0568 前方後方墳の周辺では、南東部で竪穴建物が２棟（318 調査区 SH0602、SH0598）、土坑１基（SK0603）、さらに南に竪穴建物２棟（323 調査区 SH0480、354 調査区 SH1510）が展開している。また、これらの遺構

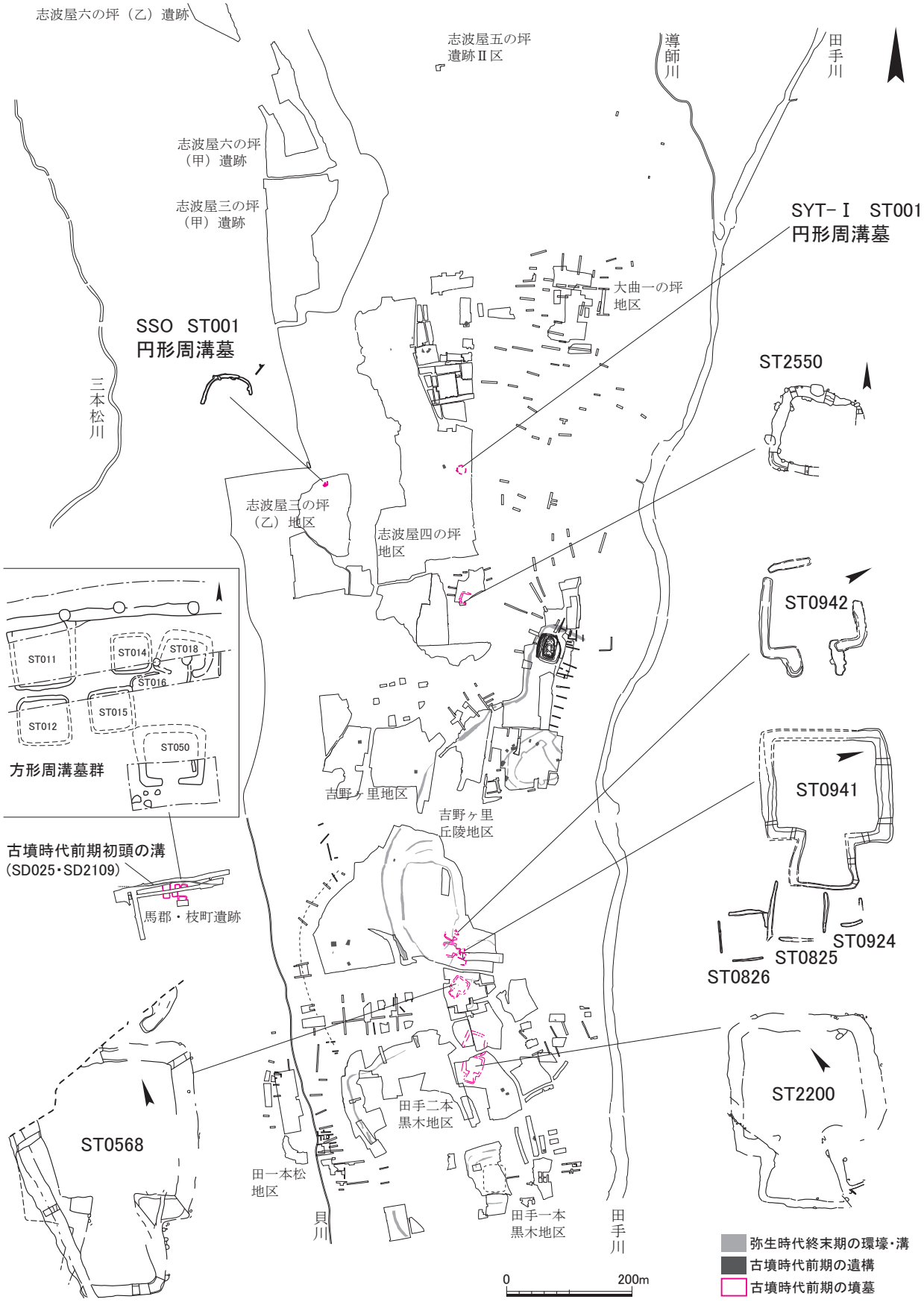


図 191　古墳時代前期の主な遺構の分布（1/9,000　前方後方墳・方形周溝墓は 1/1,000）

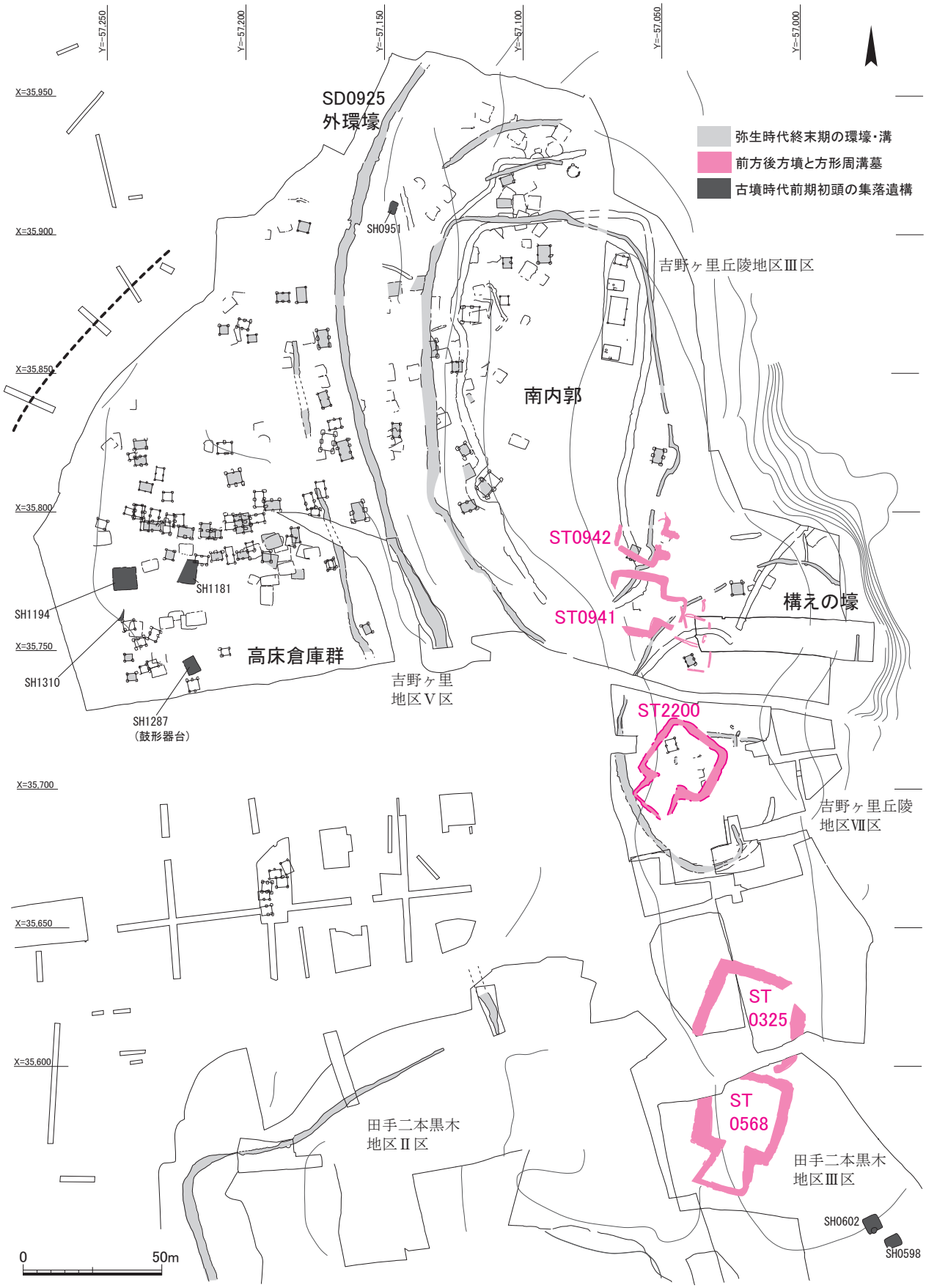


図 192　南内郭・構えの壕　弥生時代終末期～古墳時代前期の遺構分布略図（1/2,000）

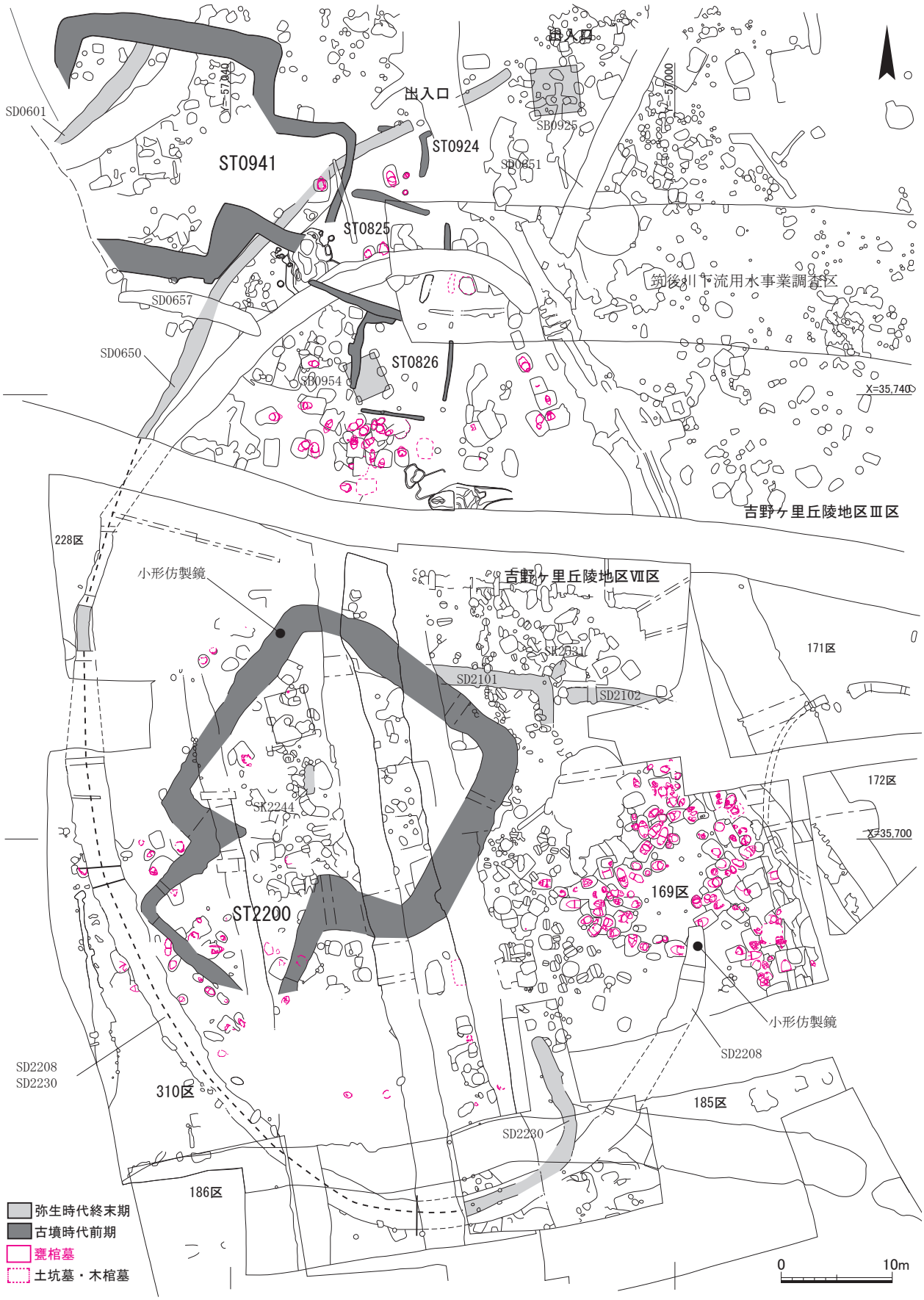


図 193 「構えの壕」弥生時代終末期～古墳時代前期初頭の遺構の分布（1/500）

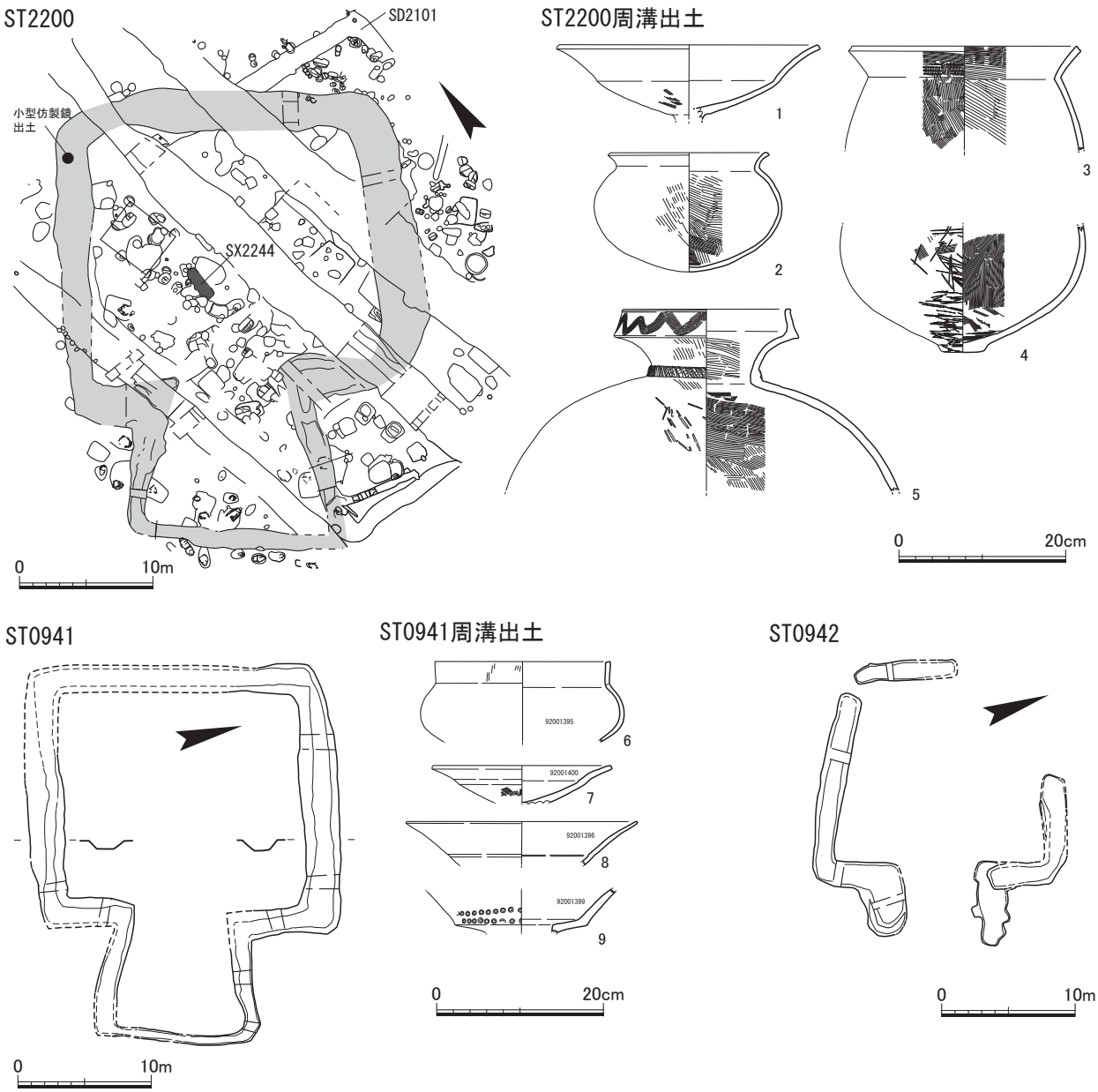


図 194　前方後方墳と出土土器 1（1/500,1/8）

群とはやや東に離れた丘陵緩斜面上では、吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区 320 調査区で竪穴建物 1 棟（SH2168）が展開しているほか、田手二本黒木地区Ⅲ区 376 調査区 SX1618 からはほぼ完形の布留系甕 4 点や小型丸底壺 2 点などが重なった状態で出土している（図 199）（『211 集』）。

本区域南西部では、田手二本黒木地区Ⅲ区（工業団地調査区）で SH0005 竪穴建物跡から弥生時代終末期～古墳時代前期初頭の土器が出土している（『207 集』）。このほか、弥生時代終末期に SX0222 盛土遺構（南祭壇・墳丘墓？）を取り囲むために形成されたとみられる 325 調査区 SD0131 溝は、出土土器から古墳時代前期初頭まで存続していたと考えられる（『211 集』）。これらのことから、遺跡南部では古墳時代前期初頭～前期前半の小規模な集落が墳墓群の周辺に点在している状況がうかがえる。

遺跡中央部の集落と墳墓

古墳時代前期初頭～前期前半の遺跡中央部では、吉野ヶ里地区Ⅰ・Ⅲ区で竪穴建物 2 棟（1 区

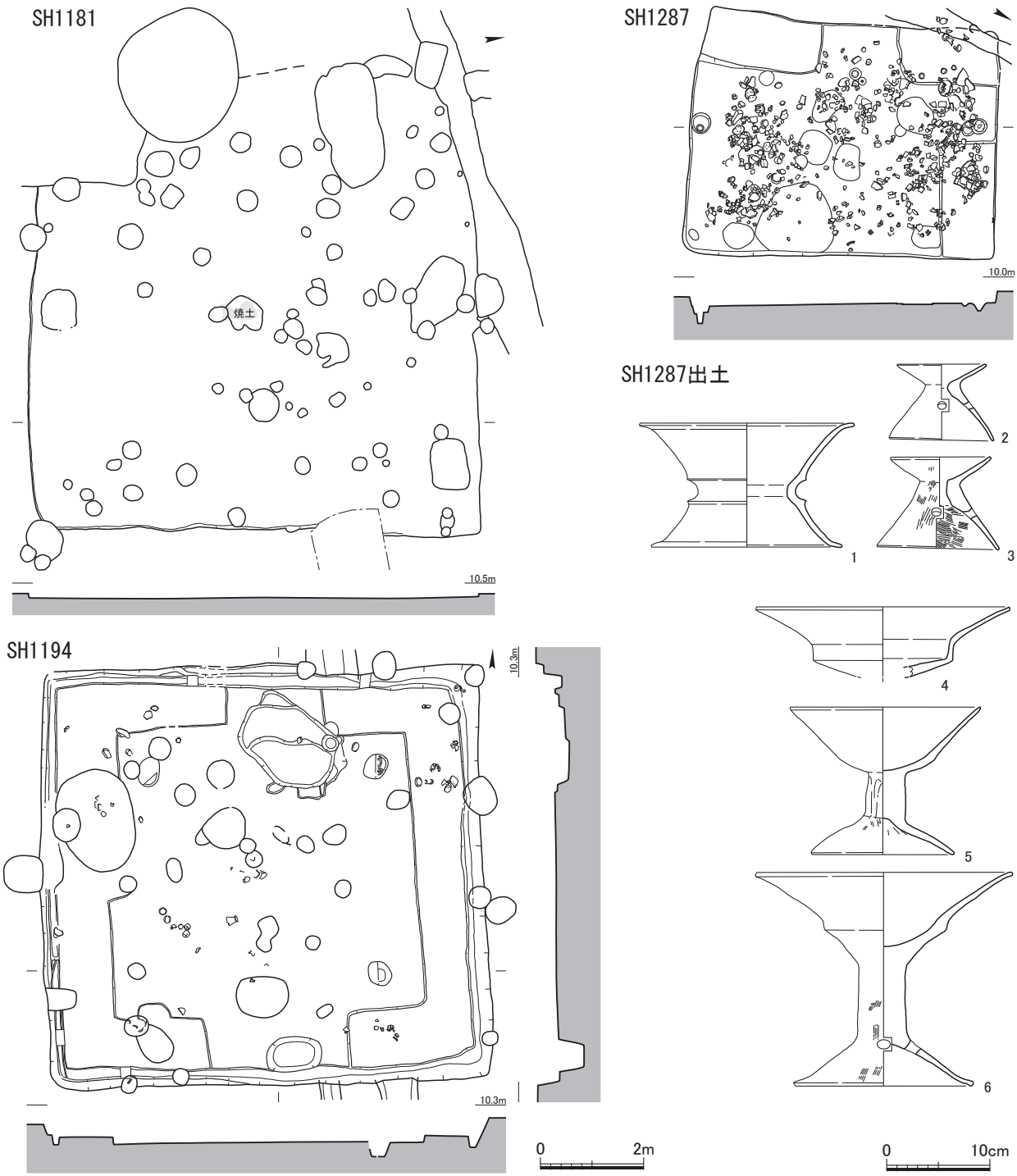


図 195　吉野ヶ里地区Ⅴ区西部　古墳時代前期の竪穴建物跡（1/120）・出土土器（1/4）

SH0006、Ⅲ区 SH0607）、吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区で竪穴建物 1 棟（SH0241）が展開しており、小規模な集落が展開していたとみられる（図 200）。

また、弥生時代終末期に形成された 2 重環壕区画である北内郭の跡地一帯では、埋没した壕の上面やその周辺に古墳時代前期初頭～前期前半の長方形竪穴建物 8 棟程度が弧状に展開している（図 201）。なかでも SH1144、SH1153、SH1176 の 3 棟は長軸 8 ～ 9m と大型である。建物の主柱穴は 2 本のものと 4 本のものがあり、内部構造はベッド状遺構が内側に巡るものや、壁溝が巡るものがある。

古墳時代前期の墳墓としては、吉野ヶ里丘陵地区Ⅸ区で方形周溝墓（ST2550）が 1 基形成されている。

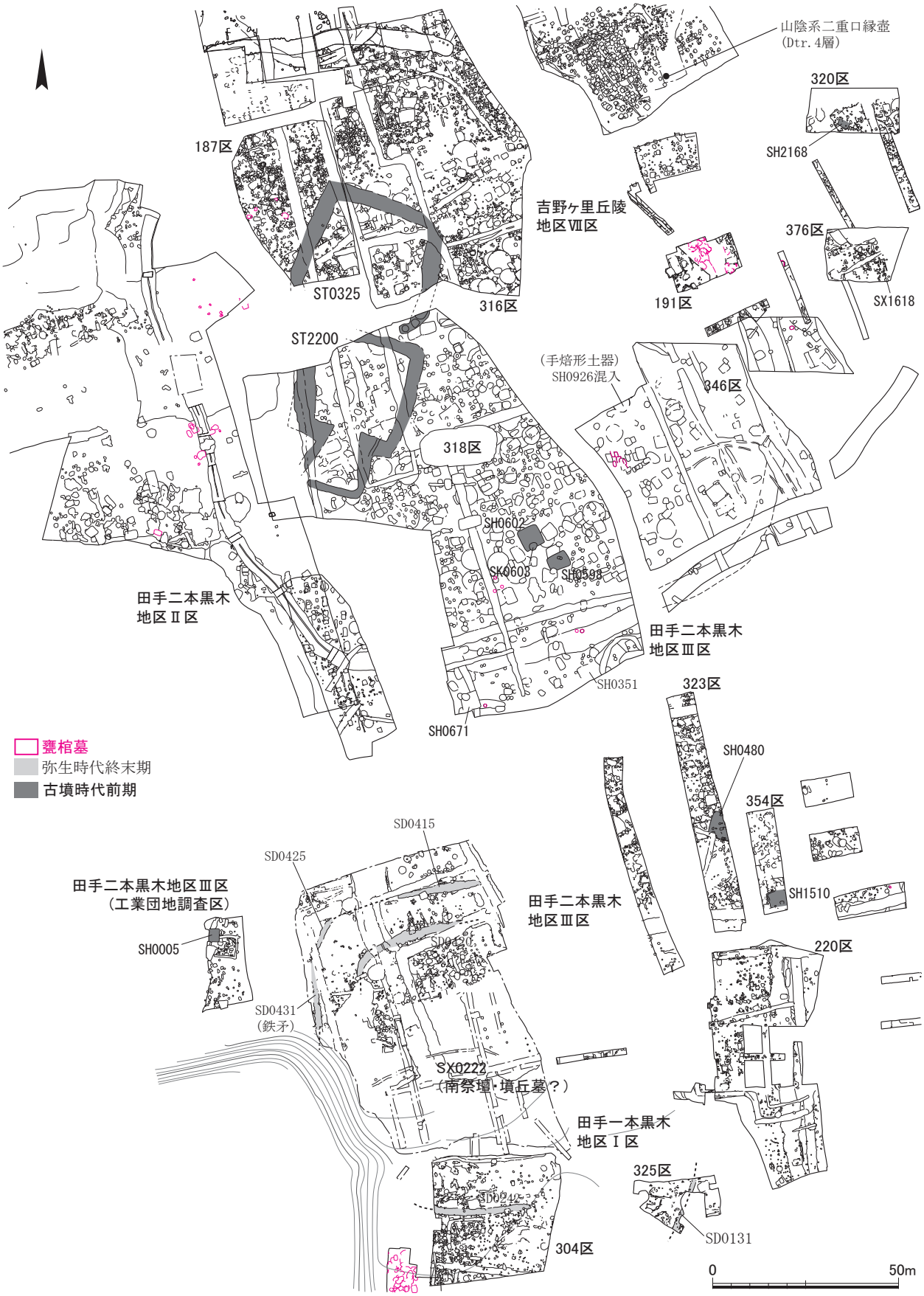


図 196　遺跡南部　弥生時代終末期～古墳時代前期の遺構の分布（1/1,500）

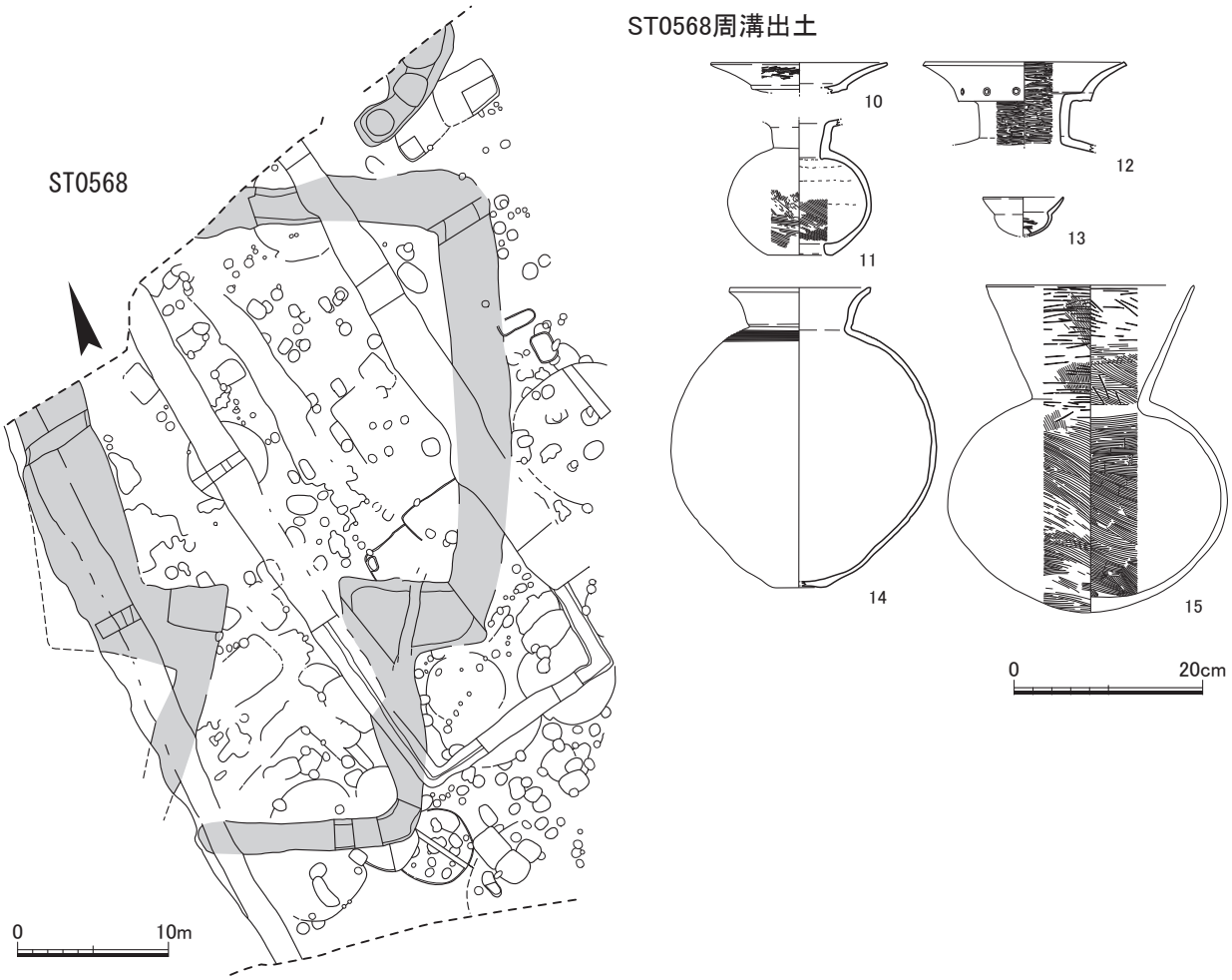


図 197　ST0568 前方後方墳と出土土器（1/500,1/8）

ST2550 はⅨ区の最も標高が高い場所（標高約 22.5m）に位置しており、規模は長さ 19m、幅 17m、残存する周溝の幅 3m、深さ 1.3m である（図 203）。削平のため埋葬主体部は残存していない。埋土からは古墳時代前期の土器や鉄鎌が出土している（『222 集』）。近辺には同時期の遺構は展開しておらず、墳墓に対応する集落の実態は明らかでない。

このほか、吉野ヶ里地区Ⅰ区南東部では、SD0002 外環壕の上面を切り込んで SC0121 石棺墓が営まれている（図 202）。SC0121 は二次墓坑の規模が長軸 2m、短軸 0.76m、大きさが異なる厚手の礫や板石が組み合わされ白色粘土で目張りされた箱式石棺墓で、棺内からは人骨の一部が出土している（『214 集』）。遺構の切り合い関係をみると、中期前半の SH0005 竪穴建物跡を切って SP0203 土坑墓が形成され、その後に SD0002 外環壕が掘削され、壕が埋没した後に SC0121 石棺墓が形成されたとみられる。従って、SC0121 石棺墓の時期は（弥生時代終末期～）古墳時代前期に属する可能性がある。

遺跡北部の集落と墳墓

遺跡北部では、志波屋四の坪地区Ⅰ・Ⅱ区で古墳時代前期初頭の竪穴建物が 7 棟程度展開しているが、いずれも弥生時代終末期から継続するものである。古墳時代前期前半以降には継続していないことから、短期間かつ小規模な集落であったと考えられる。

古墳時代前期の墳墓としては、段丘上面に 2 基の円形周溝墓（志波屋四の坪地区Ⅰ区 ST001、志波

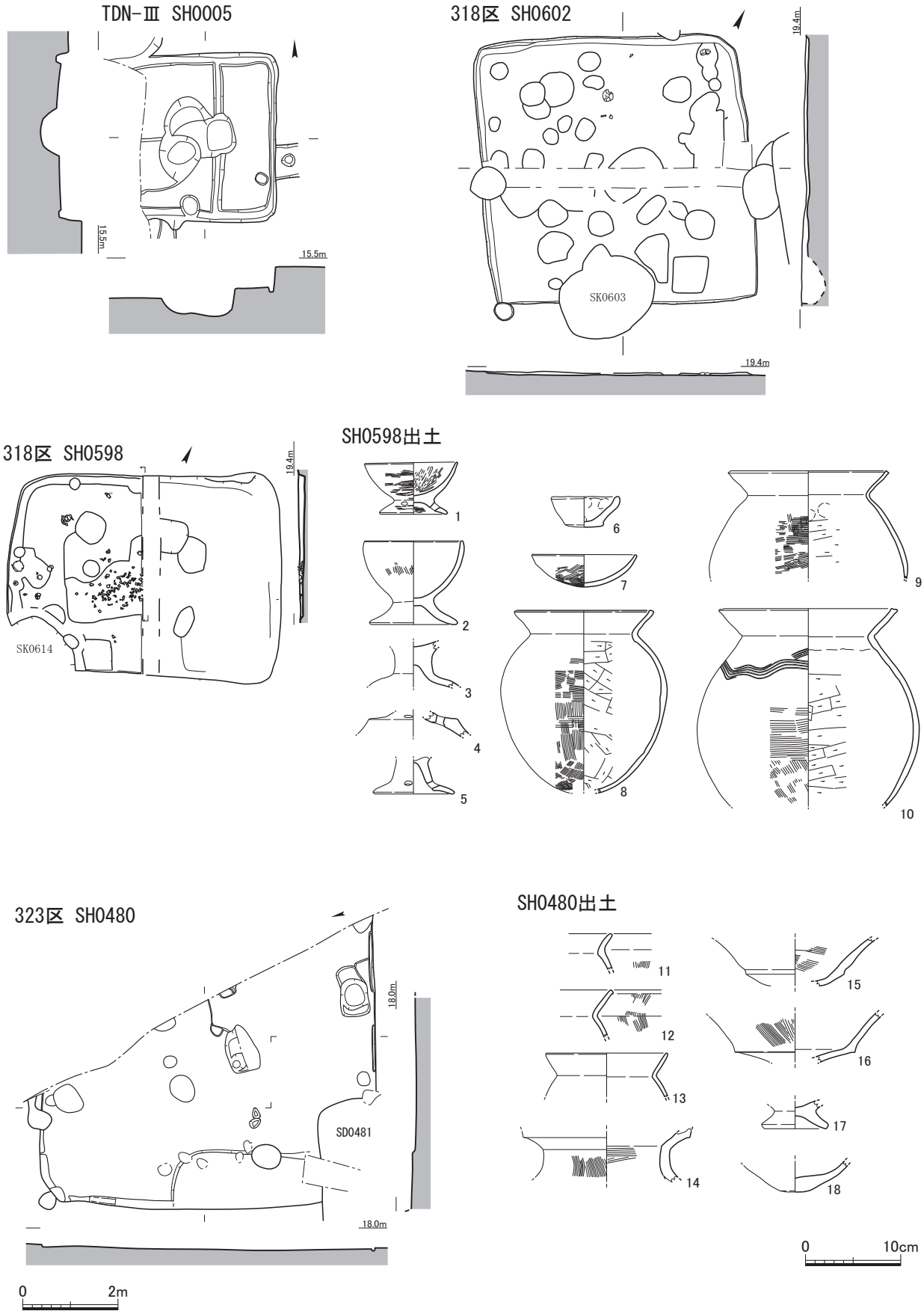


図 198　遺跡南部　古墳時代前期の竪穴建物跡（1/120）・出土土器（1/6）

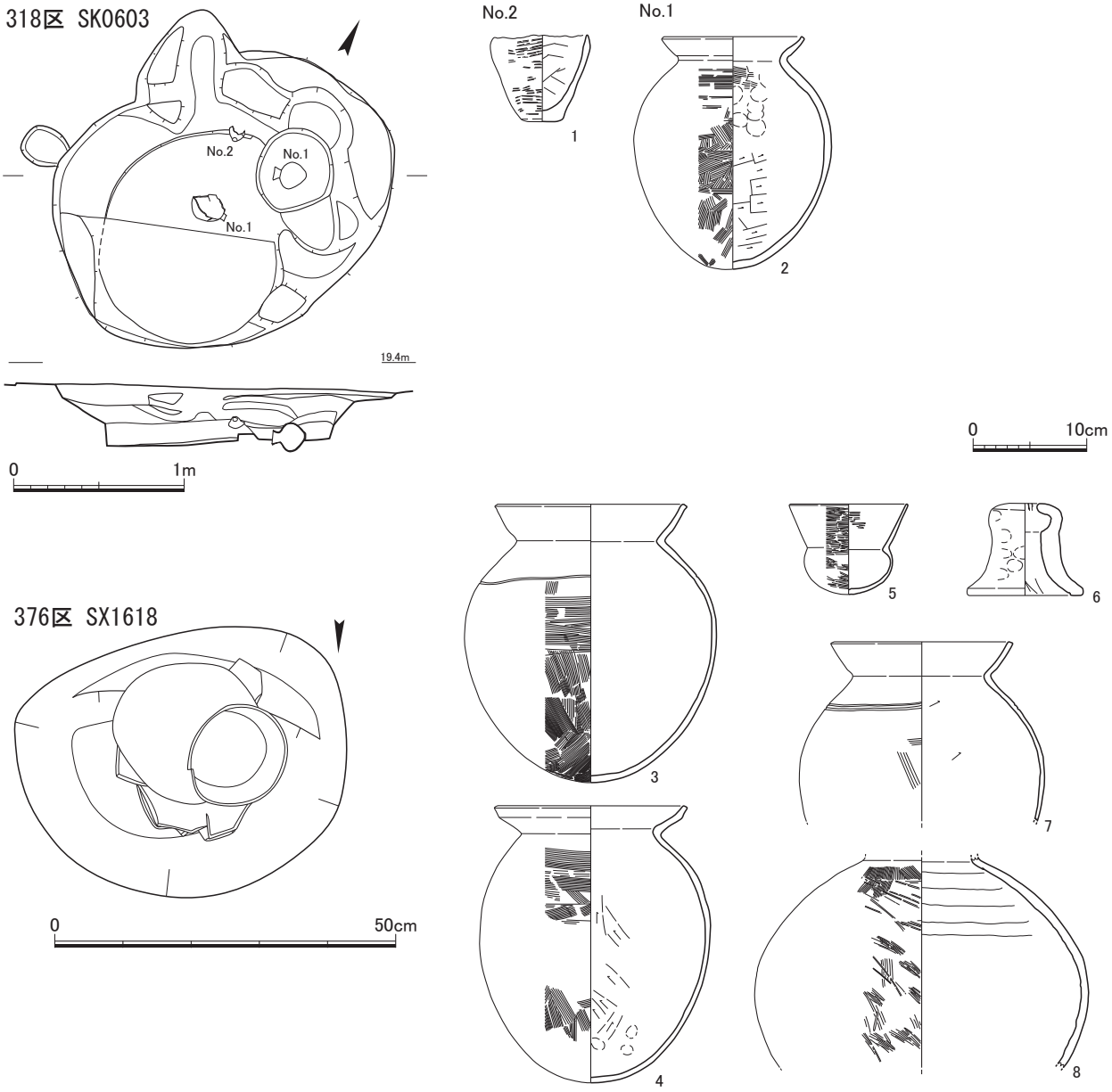


図 199　遺跡南部　古墳時代前期の土坑（1/30,1/10）・出土土器（1/6）

屋三の坪（乙）地区 ST001）が展開しているが、出土土器からみて形成時期は南内郭跡一帯に展開する墳墓群よりもやや下ると考えられる（『113 集』、『222 集』）。また、遺跡最北端の志波屋六の坪（乙）遺跡では古墳時代前期初頭の竪穴建物跡が 2 棟確認されており、小規模な集落が展開していたとみられる（『113 集』）。

周辺遺跡の様相

古墳時代前期の吉野ヶ里遺跡との関係で重要なのが、遺跡中央部西側に隣接する神埼市馬郡・枝町遺跡（馬郡遺跡群）である。吉野ヶ里遺跡が展開する志波屋・吉野ヶ里段丘と谷を挟んだ西側の沖積微高地上に位置する馬郡・枝町遺跡では、弥生時代前期後半～中期初頭の土坑、貯蔵穴や、中期前半～中期後半を中心とする甕棺墓 65 基と祭祀土坑、時期不明の土坑墓、石棺墓などが展開している（神埼町教委 2002、『172 集』、『222 集』）。弥生時代後期の遺構はほとんど展開していないが、古代の土坑（SK007）

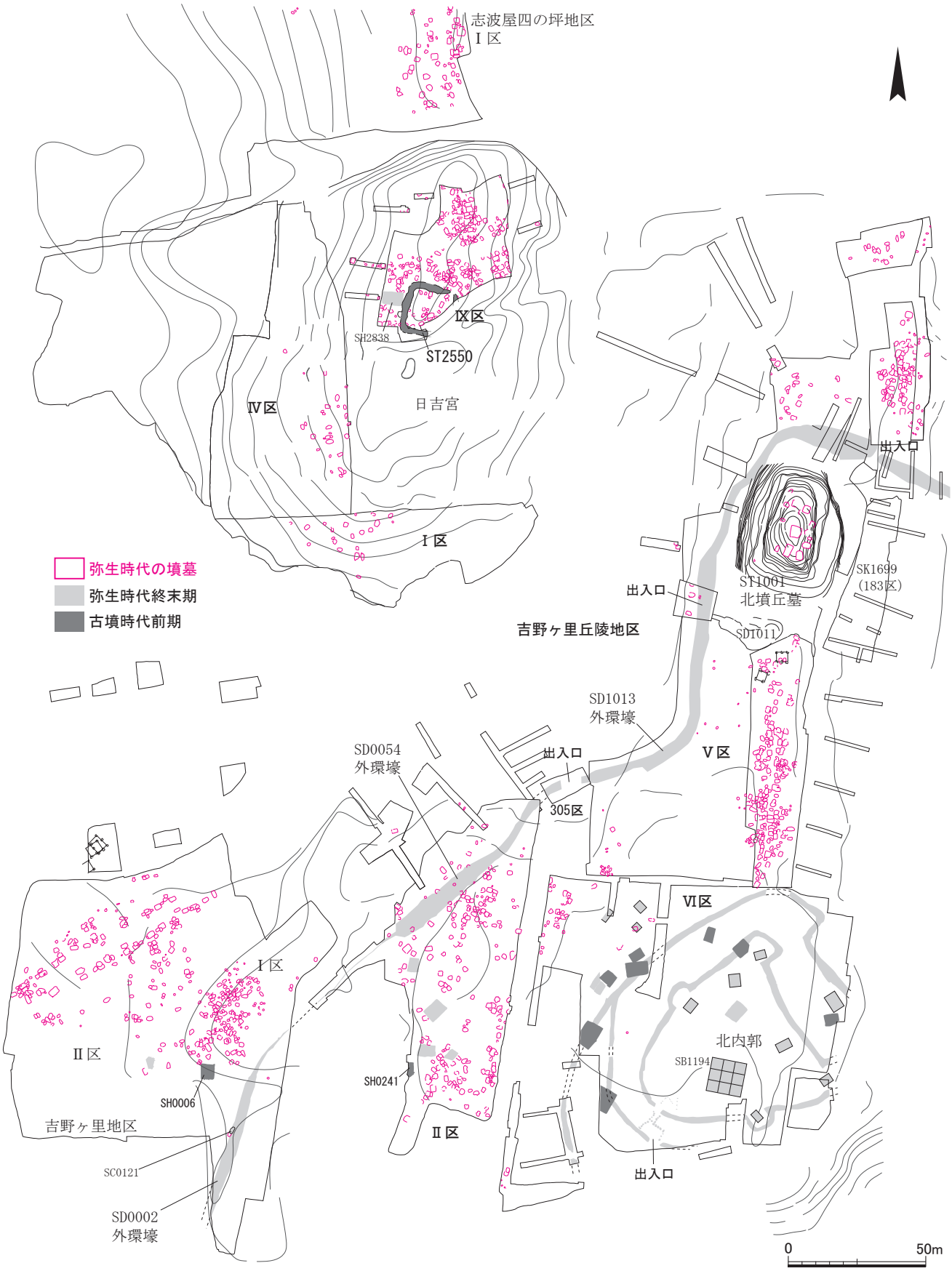


図 200　遺跡中央部　弥生時代終末期～古墳時代前期の遺構分布略図（1/2,000）

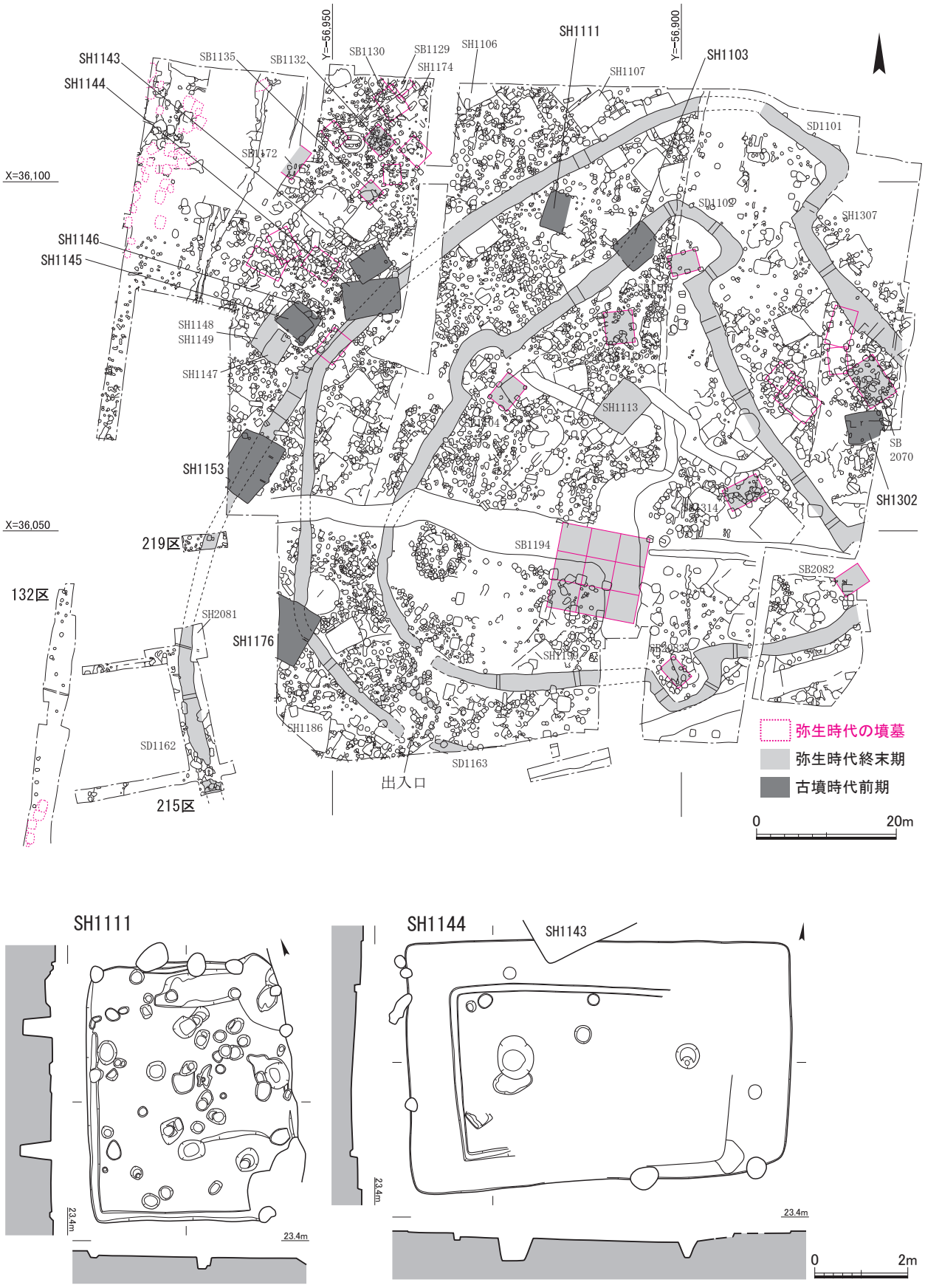


図 201　北内郭　弥生時代終末期～古墳時代前期の遺構の分布（1/800）・古墳時代前期の竪穴建物跡（1/120）

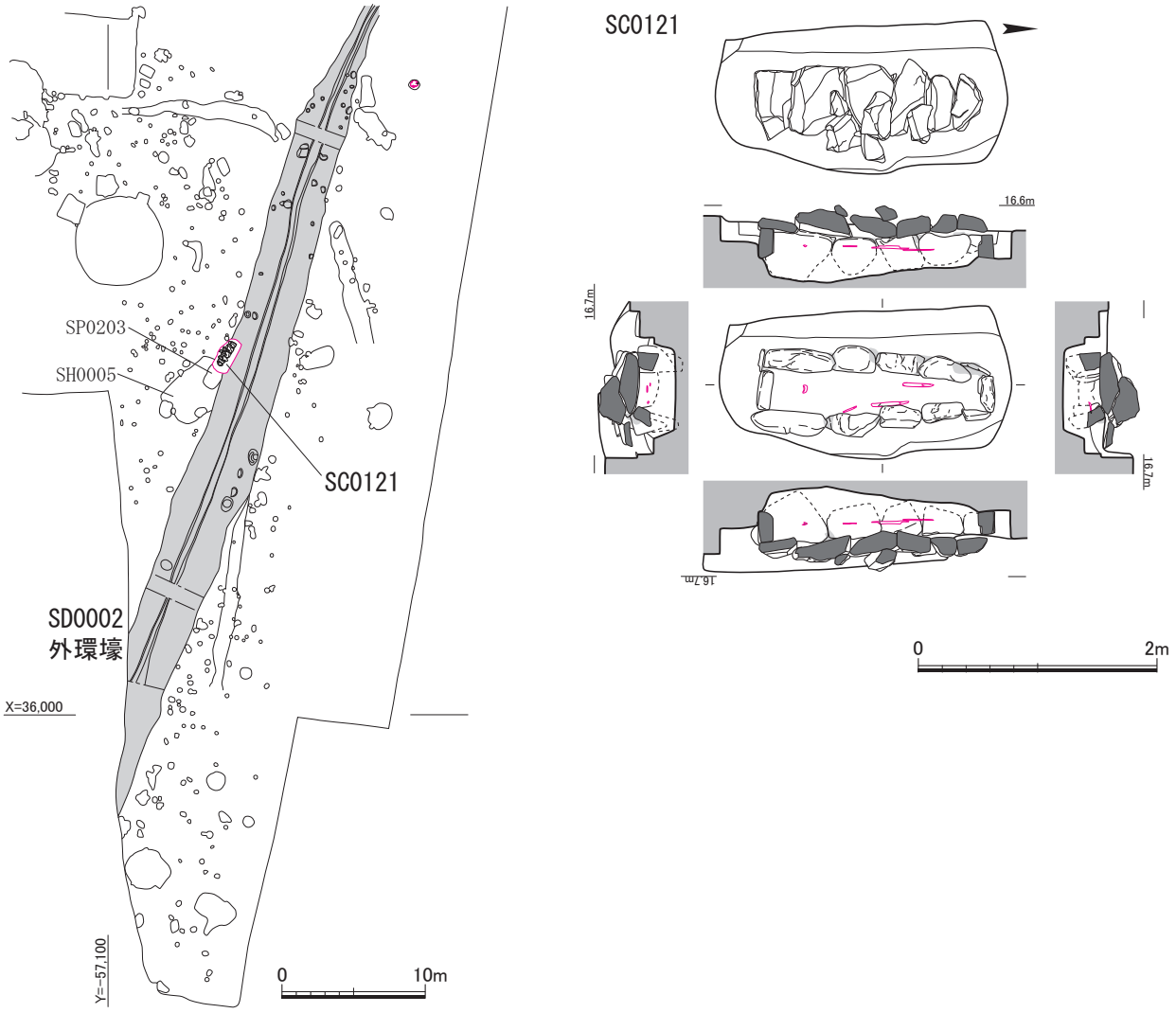


図 202　吉野ヶ里地区Ⅰ区　SD0002 外環壕と SC0121 石棺墓（1/500,1/60）

に混入して小形仿製鏡の鈕部分の破片が出土しているほか、土坑や溝から後期の土器が出土しており（『172 集』）、集落が展開していた可能性がある。

古墳時代前期初頭の馬郡・枝町遺跡では、東西方向約 150m に渡ってほぼ直線的に延びる大溝（馬郡遺跡 SD2109・枝町遺跡 SD025）が形成されている。大溝はさらに東西へと延びている可能性が高いが、東側の吉野ヶ里遺跡では連続するような遺構は確認されておらず、大溝全体の範囲などは明らかになっていない。大溝の上面は大きく削平されており、残存する幅 2.5 ～ 3m、深さ約 0.8m で、横断面 U 字状を呈する。埋土からは古墳時代前期初頭（夕ヶ里式古相）を中心とする外来系土器が大量に出土している（神埼町 2002）。大溝を挟んだ北側には古墳時代前期の竪穴建物からなる集落が、南側には小型の方形周溝墓 7 基が造営されていることから、大溝は集落域と墓域とを区画するために機能していたと考えられている（神埼町 1995,1996,2002,『172 集』）。

馬郡遺跡群の北側では、三本松川の西岸に位置する志波屋一の坪遺跡で弥生時代終末期の溝（環壕？）と竪穴建物からなる集落と、古墳時代前期初頭～前期前半の竪穴建物約 20 棟からなる集落が展開している（神埼町 1995,1996）。馬郡遺跡群とはやや離れた位置にあることから、別の集落であった可能性がある。さらに、志波屋一の坪遺跡の北西約 600m、城原川右岸の標高約 20m の自然堤防上に位置す

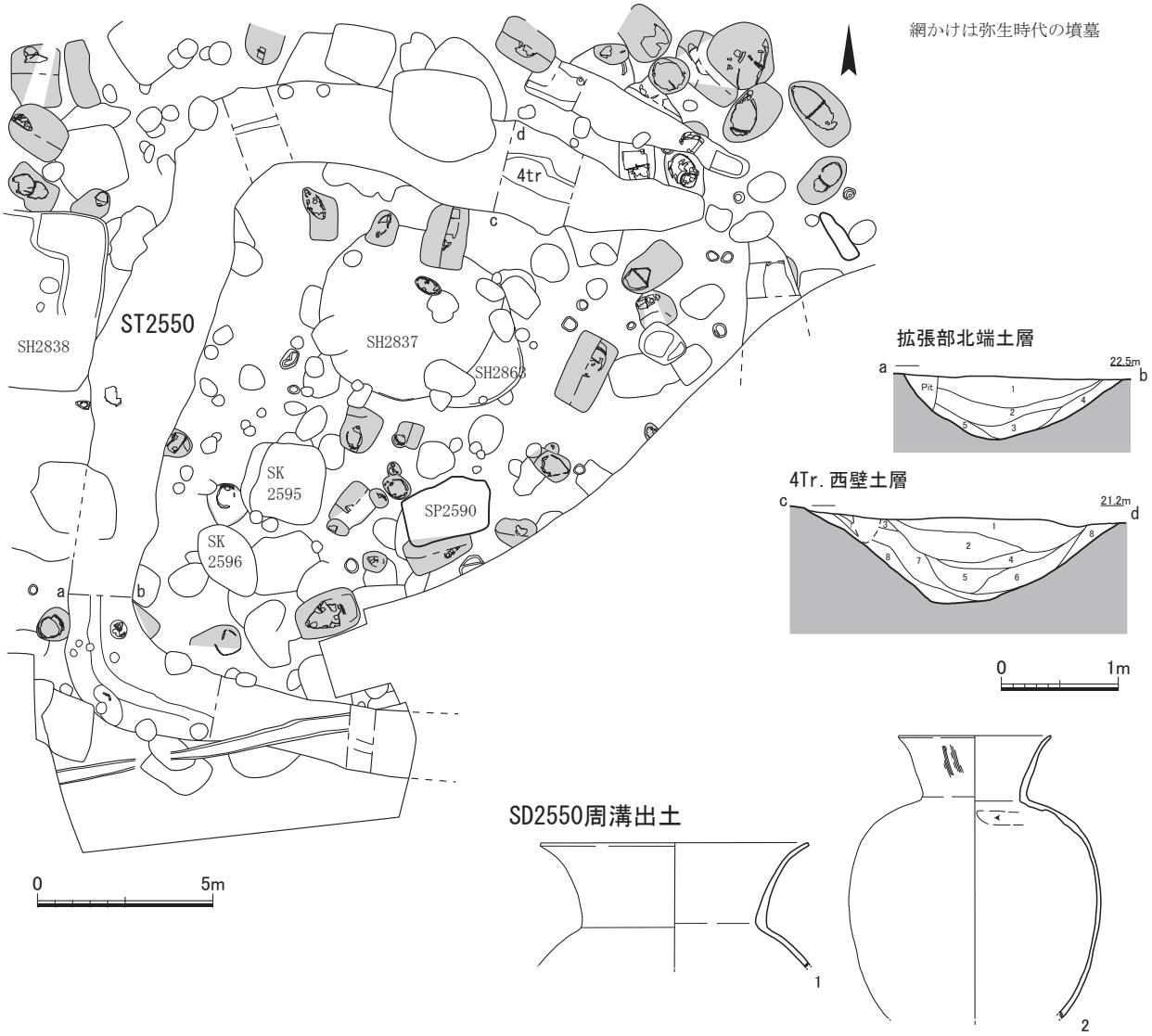


図 203　吉野ヶ里丘陵地区Ⅸ区　ST2550 方形周溝墓（1/200）・周溝土層（1/60）・周溝出土土器（1/8）

る右原祇園町遺跡では、南北約 30m、東西 16m 以上の平面方形の環壕区画が検出されており、古墳時代前期初頭～前期前半の方形居館状の遺構と考えられる（神埼町 1996, 蒲原 1995）。

古墳時代前期の墳墓では、馬郡・枝町遺跡に展開している方形周溝墓 7 基が注目される。トレンチ調査のため全体規模が判明していないものも多いが、周溝から復元される大きさは 8 ～ 14m 程度である。削平のためいずれも主体部は検出されていないが、周溝出土土器から古墳時代前期初頭に築造されたと考えられる（『172 集』）。

以上のことから、古墳時代前期初頭には、中心的な集落が志波屋・吉野ヶ里段丘上から西側の低地部あるいは微高地上へと移動したと考えられる。また、新たに方形周溝墓群が形成されており、集落域と墓域とが大溝によって区画されていたとみられる。大溝は集落域を取り囲む居館状の遺構となるのか、直線的な区画溝なのかは明らかでなく、周辺の調査等も含めて今後詳しい検討が必要である。

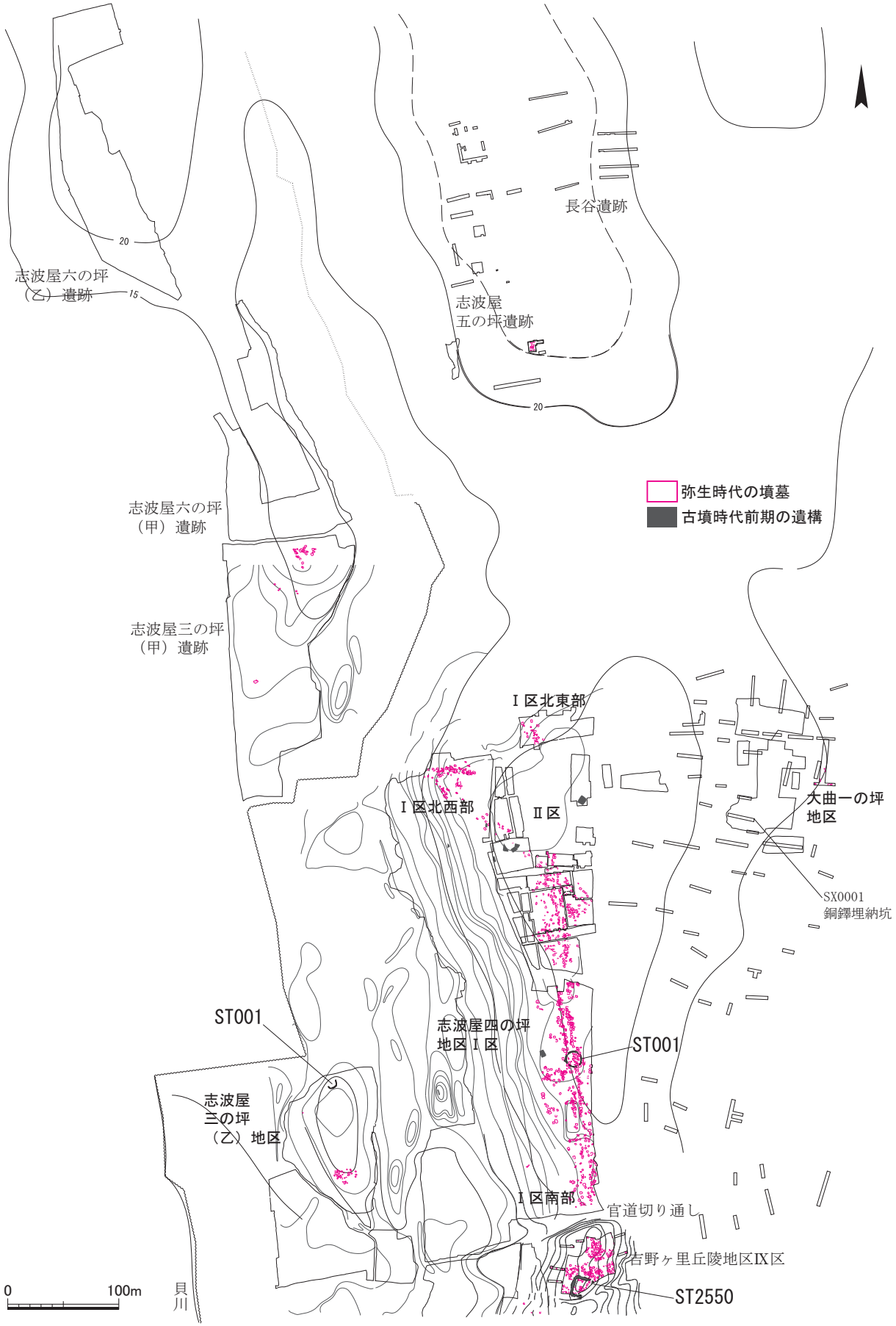


図 204　遺跡北部　古墳時代前期の遺構分布略図（1/5,000）

図 205　志波屋四の坪地区Ⅰ区北部・Ⅱ区　弥生時代終末期～古墳時代前期の遺構の分布（1/1,000）

図 206　古墳時代前期の吉野ヶ里遺跡と馬郡遺跡群（1/10,000）